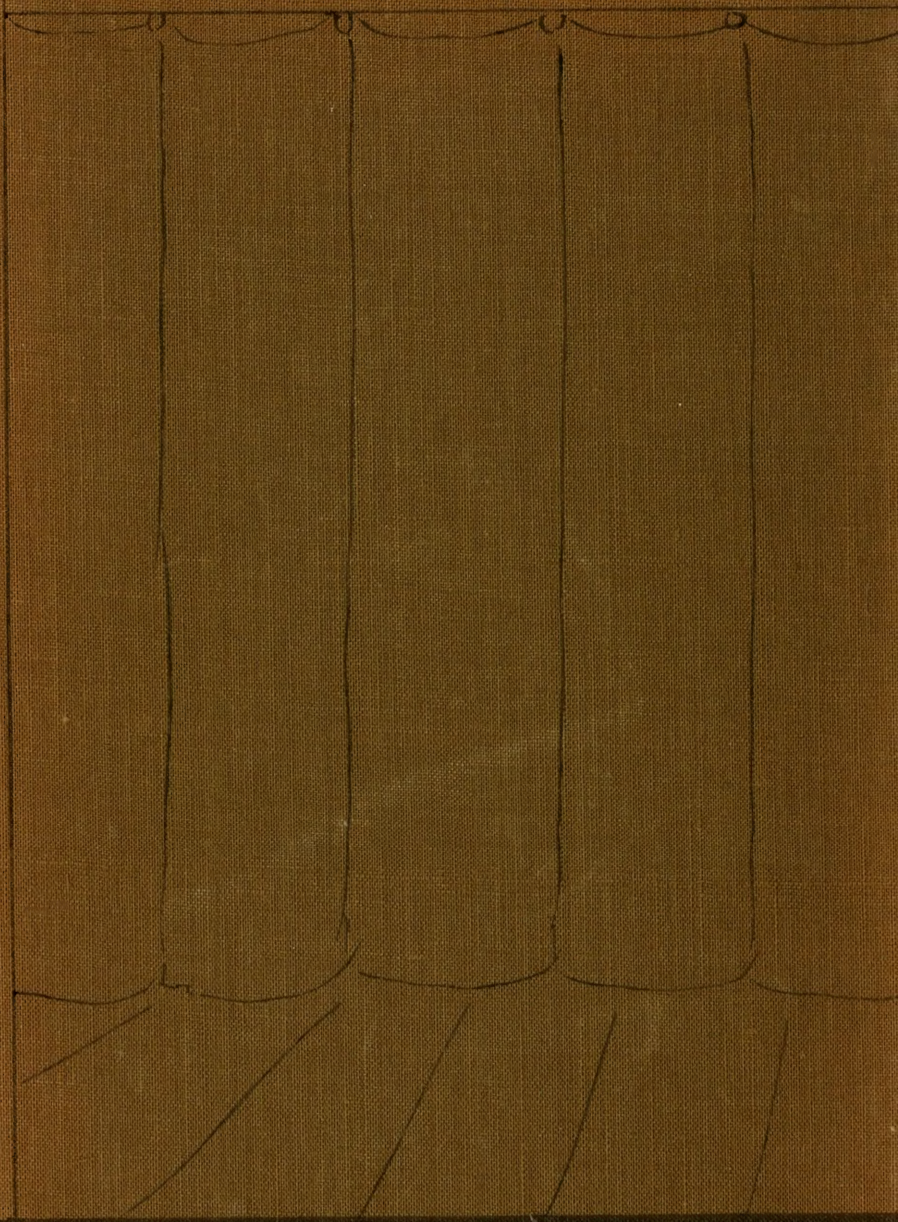


日本戲曲全集
第三十一卷

河竹默阿彌集下

東京
春陽堂版



島衞二幕目・明石浦難船（豊原國周筆）

日本戯曲全集　第卅一巻　目次

河竹默阿彌篇　下

繰返開花婦見月

春の趣向を綴り直して

東京日々新聞が御意に叶うてまたぞろや御好み故に附錄となし新開町の洗湯で淺くら六三が二かいばんのおそのに預けし金側の時計を盜む天ぷら銀次おなじ其夜の十二時すぎ貧に迫りて戸のすきを窺ふ秋津某はわが身のうんも春米屋よくに赤米仙右衛門が殺しかれぬを幼少の悴が親を諫めしは是學校の教へにして賊も心を改めて商法ひらく洋物店のきを並べし牛なべや五分もすかざる五郎七が思はぬ難も大恩の主人の息子にいひかゐる啞と目くらとつんぼうのざんぎり左吉が詮議の高聲元より知らぬ德右衛門失ふ品を尋れ出し蛇の目をあくで洗ひ粉や附木だはしを賣あるくおむつが逢はれぬ仙太郎に鐵道故にめぐり逢ふ日出の足りる世の中は實に有がたき文明の御代



繰返開花婦見月

（三人片輪――三幕）

新開町洗湯の場
仙右衛門内の場
深川萬年橋の場

序幕

役名――秋津豐、湯屋の亭主德右衛門、絹屋息子六三郎、巾着切三五郎、同茂七、合長屋の佐次兵衛、百姓、町人、湯屋の三助、巾着切天ぷら銀次、搗米屋仙右衛門、仙右衛門悴仙太郎、牛鍋屋亭主五郎七。福壽湯のお園、仙右衛門女房おむつ、小娘お竹、同お駒等。

（新開町湯屋の場）――本舞臺一面湯屋の表掛り、庇の上二階の手摺を見せ、上の方男湯の入口、下の方女湯の入口、此左右格子のうちへ目隱しの簾を掛け、總て新開町湯屋の體。爰に○△□の三人町人體のこしらへにて手拭を提げ、お竹お駒小娘のこしらへにて、手拭糠袋を持ち立掛り居る、此模樣おいとこ節にて幕明く。

○　こウ吉や、手前も湯は爰と極めたのか。

△　さうよ、直き表に湯もあるが、爰は新湯できれいだから、ちつと遠いが爰まで來るのよ。

○　お竹さんにお駒さん、おめえ方もわざ〳〵こつちまで來るのかえ。

お竹　きれいで心持がいゝ湯だから、今月からこつちへ來ますよ。

お駒　それにまたこつちの二階へ、友達が來て居るからさ。

△　はあ、それぢやあの二階番のお園ぼうは、おめえ方の友達かえ。

お竹　あの子は髮結床の佐吉さんの妹で、子供のうちから稽古朋輩さ。

○　成程比丘尼橋の髮結床の娘で、爰の家とは親類だといふはなしだ。

△　あれの兄貴は、ざん切佐吉といつて、西洋風の天窓を刈るのが上手だといふ評判だぜ。

○　道理であすこの髮結床は、大層立派な西洋造りだ。

お駒　わたしヤお關さんにちよつと逢ひたいが、二階は込合つて居るだらうね。

お竹　二階も下も女の湯は、いつもお客が一杯だよ。

口　實にこんなに流行る湯も、珍らしいなう。

二　何にしろ、一遍飛込まうかの。

○　さうだ〳〵、一皮剝いて色を白くしにやあならねえ。

お駒　お竹さん、こつちも這入らうかね。

お竹　どれ、這入つて來ませう。

三人　おめえ方一緒に歸らうぜ。

トわや〳〵言ひながら男湯と女湯へ別れてはひる、流行唄角兵衞獅子にて、花道より三五郎辻賣りの贋物師のこしらへ、百姓木綿やつし、象皮引、近所の百姓のこしらへにて、三五郎の胸倉を取り、後より義七相摺の惡漢のこしらへにて、これを留めながら出で來り、花道にて、

百姓　これ、貴樣は〳〵太え男だ、さあ連れて行くから、覺悟さつせえ。

三五　これさ、往來中だ見ッともねえ、まあ靜かにしなせえ。

百姓　いゝや、靜かにされるものか、何でも是れから連れて行つて、白い黑いを附けにやあならねえ。さあ、歩ばつせえ。（ト百姓無暗に三五郎を引立てる、義七これを留めて）

義七　おい〳〵田舍の兄イ、どういふ話しだか知らねえが、まあ了簡しねえ〳〵。

百姓　いや〳〵打捨つておかつせえ、こんたの知つた事ぢやない。さあ、屯まで一緒に歩べ。

ト三五郎を引摺り舞臺へ來る。

義七　これさ、待ちねえといふことよ。（ト義七留めながら舞臺へ來て、中へはひり）さつきから留めて居るのに、待ちねえと言つたら待ちねえな。（ト百姓を引分けて）そんなに手荒いことをしねえで、おめえが屯へ此男を連れて行かうといふ譯を、おれに話して聞かせなせえ。

百姓　そんならこなたに話すから、まあ其譯を聞かつしやれ、去年の暮に此男が辻で煙管を賣つて居て、性のいゝ銀だといふから一兩二朱でわしが買つて、直に田舍へ持つて歸り、學校所の寄合に村の者に自慢をしたら、贋物だといふ評判だから、疑ひ晴らしに灰をつけ磨いて見たら中は赤銅、こいつはとんだいかさまと、それからわしも東京へ出る度毎に此男の、行方を方々尋ねたが、今日

思はずも出つくはしたのは、もう此男の運の盡き、是れから屯へ連れて行き、わしやあ調べて貰ふ積りだ。

義七　成程話しを聞いて見りやあ腹の立つなあ尤もだ。これ、それぢやあ手めえ此人に、かぶせ物をしたのだな。

三五　おい／＼常談言つちやあいけねえ、何のつけに煙管なんぞを人におれが賣るものか、おらあ手めえも知つての通り、堅氣一方の職人だ、商ひなんぞをするものか。

百姓　いや／＼しないことがあるものか、油町の橋臺で、こなたの手から贋物を、確に買つたに違ひない。

義七　そりやあおめえ了簡違ひだ、此男はおれが友達、稼業は石屋職人で、石よりも堅い男だ。

三五　紙屑買や天道ぼしと、間違へられちやあそつちより、おれの方で了簡ならねえ。

義七　こりや全く人違ひ、おめえに煙管を賣つたのは、此男ぢやアあるめえぜ。

百姓　いや／＼此男に違ひない、證據といふのは其時から、見覺えのある額の黑子。

義七　とんだ彌陀六だ。

百姓　そつちは石屋の職人で、彌陀六といふか知らぬが、おらあ是れでも熊谷在で、治郎兵衛といふ顔役だ、屯まで一緒に歩べ。（ト又立掛るを義七留めて、）

義七　こウ、三五郎、黑子が證據で見出されちやあ、しらを切つても追附かねえ、何もかもぶちまけて誤つて濟ませろ／＼。

三五　違えねえ、誤るのが上分別だ。（ト百姓に向ひ、）おい兄イ、彌陀六に似た駄六の煙管、贋な知らずについ賣つたが、おれが大きに惡かつた、腹も立たうが誤るから、どうぞ了簡してくんなせえ。

百姓　いや／＼敦盛の首同樣な贋首のくはせもの、贋物といふことは承知で賣つたに違ひない、それとも屯へ行くのがいやなら、あの時拂つた一兩二朱、たつた今爰で返すか。

三五　これさ、金を返せといつても、どうして今まであるものか。

義七　あの金はおれが借りて、みんなお花で取られてしまつた。とんだ辨慶の別れだが、一朱の切もありやあしねえ。

百姓　なに、あの金をこなたが借りた、それぢやあやつぱり相揩りだな。

義七　知れたこツた、みんなこつちやあ一つ懐、

三五　二人揃つて辻賣りに、
義七　盛り場稼ぐ、
兩人　贋物師だ。
百姓　さう聞く上は二人とも、連れて行くから覺悟しろ。
ト百姓左右の手で義七三五郎の胸倉を取り、連れて行かうとする。兩人行くまいとする爭ひあつて、トヾ三五郎もぎ放し、下手へ逃げてはひる、百姓追駈けようとするを、義七後から足を持つて引放し、上手へ逃げてはひる、百姓起き上り、
えゝ、二人とも逃げてしまつた、泥坊々々。
ト言ひながら上手へうろ〳〵して、どちらへ追掛けようと思入あつて、トヾ下手へ追掛けてはひる。やはり流行唄にて花道より六三郎散髮鬘シヤツポを冠り、羽織着流し、襟へ金鎖の時計を襟へかけ、表附の駒下駄、蝙蝠傘を杖につき出來る、少し放れて後より銀次羽織着流し、日和下駄番傘をすぼめて持ち、六三郎の身裝に目を附ける思ひ入、六三郎これを知らず兩人舞臺へ來て、
銀次　もし〳〵、ちとあなたお願ひがござりまする。
六三　はい、何の御用でござりまする。(ト六三郎立留まる、銀次側へ寄り、)
銀次　どうかお見掛け申した所が、時計をお持ちなされてござりますが、もう何時でござりまするか、ちよつと御面倒ながら、御覽なすつて下さりますまいか。
六三　はい〳〵、それはお安い御用でござります。(ト六三郎懷より時計を出して見て、)二時十五分でござります。
銀次　それでは、三時前でござりますな。
六三　左樣さ、まだ小半時間がござりませう。(ト銀次横目で時計をじろ〳〵見ることあつて、)
銀次　今日三時の葬ひに參りますのでござりますが、少々空が曇つたので、生憎と日ざしは知れず、時がさつぱり分りませぬゆゑ、大きに困つてをりました、お蔭さまで分りまして、まことに有難うござりまする、三時前ならゆつくりしても、まだ大丈夫でござります。
六三　いやもう時が知れませぬと、不都合なことがござりまする。そのくせ時計は無駄なものだと、申す人もござりまするが、斯うして不斷持ちつけますと、片時側を放せば不自由なことがござりまする。
銀次　成程左樣でござりませう。(ト時計をのぞき、)私などは分りませぬが、どうかよい時計のやうでござります

るな。
六三　大した品でもござりませぬが、是れは引打ちでござりますから、どうも安く賣りませぬ。免角こんなものが好きでござりますから、つい買つてなりませぬ。
銀次　もう此位の品になりましては、めつたに狂ふこともござりますまい。
六三　左樣さ、餘り狂ひは出ないやうでござります。(ト時計を懷へ入れる。)
銀次　まことに有難うござりました、時が知れましたので、大きに都合がよろしうござります。
六三　左樣なら私は、ちよつと入湯いたしますから、これでお別れ申しまする。
銀次　左樣でござりますか、是れは大きに御面倒さまでござりました。(トこれにて六三郎男湯の暖簾へはひる、銀次跡を見送り、)ちよつと裝のこしらへは、官員といふ所もあるが、それにしちやあちつと意氣だ、商社へでもはひつて居る商人の息子だらうが、何しろ今の時計は金側に藤鎖、安く踏んでも二百兩の代物、あの樣子ぢやあ懷にも、定めて一分や二分ぢやアあるめえ。こいつあどうも見のがせねえわえ。(ト銀次は二階を見上げる。此時上下より以前の義七三五郎出て、)
義七　兄貴今の息子を知らねえか。
三五　ありや豪氣に、ねたがいゝぜ。
銀次　おゝ三五郎に義七か、今聞きやあ手めえ達ア、百につかまつて困つたさうだな。
三五　困つたの困らねえのと、馬鹿力のある奴で、何でも屯へ連れて行くと、おらあ二三町引摺られた。
義七　おれがやうやくごまかして無難に三五郎を逃してやつたが、すんでの事にあぶねえ所よ。
三五　これから當分懲役で、炭團でも丸めるかと、おらあうんざりした。
銀次　そりやあさうと、手めえ達ア、今の息子を知つて居るのか。
義七　ありやあ銀座の煉瓦石へ此間見世を明けた、高崎の絹屋の息子、よつぽどねたのいゝのだから旨くいきやあたんまりだぜ。
三五　おまけに相手が初心だから、仕事にするにやあ譯はねえ。
銀次　おれもさういふ玉と見たから、馴々しく話しを仕掛け、ちよつと貫目を引いて見たが、隨分仕事になりさう

だ、一寸耳を借してくれ。（ト銀次は兩人に囁き、）ないゝか、二人ながら旨くやつてくれ。

義七　承知だ〳〵、それぢやアあいつの後をつけ、

三五　湯に來た振りで様子を見て、

銀次　おれが手づまで遣るつもりだ。

義七　そんなら一緒に、

兩人　是れから二階へ。（ト大きく言ふを、）

銀次　えゝ靜かにしろ。

（ト銀次制してまた兩人へ囁く、此模様流行唄の角兵衛獅子にて道具廻る。）

（湯屋二階の場）——本舞臺湯屋の二階、向う一面の障子、柱際二三枚明けたる所あり、此外軒口に風鈴附きの提灯を掛け、手摺の上よき所に半簾をかけ、上手の見切り茶壁に聯をかけ、下手折廻し着物を入れる戸棚、よき所に二階の掟書、晝寢無用の札、その外鏡立て櫛の箱、柱に掛行燈を掛け、下手に階子の上り口、此傍に履物棚、舞臺眞中に一段小高くしたる茶床、銅壺へ茶釜をかけ、茶碗棚菓子の箱、小簞笥などよろしく、爰にお園世話裝、前垂れがけの娘にて濃茶をこして居る、よき所に以前の六三郎短き煙管にて煙草を呑み居る。此模様よろしく流行唄、湯風呂で羽目を叩く音にて道具納まると、右の合方になまめきのやうに殘して、

六三　時にお園さん、湯にはひる其前に、斯う落着いて一服呑むのは、こりやあ全體惡い癖さね。

お園　いえ〳〵惡いことはござりませぬ。今日は少しお話しがござりますから、まあゆつくりして下さりませ。

六三　いえ〳〵今日は爲替の事で、海運橋まで用があるから、さうしては居られぬわいの。

お園　まあ、そんな事をおつしやらずと、少しお待ちなされて下さりませ。（トお園茶をこしらへて六三郎の側へ持ち來り、）さあ、お茶が出來ましたわいなあ。

六三　いや、これは御馳走だ。（ト六三郎取つて一口呑み、）はてお前がこしらへたお茶だと思へば、何だか格別旨いやうだ。

お園　あれ、そんな事をおつしやつて、人をおなぶりなさいますと、わたしやきゝませぬわいな。

六三　なに、お前をなぶるのなんのと、そんな事があるものか、ふとしたわけでいつぞやから、斯ういふ仲になつ

たからは、折を見合せ家へ貰つて、世間晴れてと思つて居る、此六三郎の心のうちは知つて居るではないか。

お園　さあわたしもそれを樂しみに、早く兄さんにも打明けてと、時節を待つて居りますれど、もしや永い月日のうちに、ひよつとお心が替りはせぬかと、案じられてなりませぬわいな。

六三　はて今更心が替るの何のと、それは入らぬ思ひ過し、家の近所に湯のあるのに、毎日かうしてこつちまで出て來るのは、是れが何より慥な證據。

お園　左樣なら若旦那、どうぞ見捨て下さりますなえ。

六三　何の見捨てよいものかいなう。

お園　そのお詞がまことなら、わたしや嬉しうございますわいな。

トお園六三郎の側へ寄り添ふ。此時階子口にて、

銀次　さあ〳〵二階で、一服やらう〳〵。

ト流行唄になり、以前の銀次先きに、三五郎義七銘々履物を持ち上つて來る、是れを見てお園うろたへて茶銅壺へ坐り、何喰はぬ顏にて、

お園　いらつしやいまし、お早うございます。(ト三人は履物を棚へのせて上手へ住ひ、)

三人　どれ、一服やらかさう。(ト煙草盆を引寄せ煙草を吞みながら、)

銀次　こう、手めえ達あどうだか知らねえが、おらあ今朝の醉が出て、よつぽど妙な心持だぜ。

三五　おれも溜飲でおつなあんべいだ。

義七　姉さん、茶より湯の方がいゝぜ。

お園　畏りました、只今差上げます。(ト此時銀次は六三郎の顏を見て、)

銀次　これはお前さん、先程はとんだお世話さまでござりました。

六三　どういたしまして、お安い御用でございます。

銀次　お蔭さまで時が知れましたから、ゆつくりと湯にはひれます。(ト此うちお園櫻湯をこしらへて出て、)

お園　皆さん櫻湯にいたしました。

三五　そいつア有難え。

銀次　この腹の鹽梅に、櫻湯はもつて來いだ。(ト三人湯を吞み居る、六三郎思入れあつて、)

六三　どれ、一ぱいはひつて來ませうか。(ト立上り着物を脱ぎにかゝろ。)

お園　左樣なら、お預かりのお浴衣を差上げませう。

ト お園談を引いたる貸文庫に浴衣の入りしを出し、預かり手拭、ブリツキに入りしシャボンなど添ておく、六三郎時計と蟇口の紙入を投りだして、

六三　お園さん、これを預かつておくれ。

お園　畏りました。(ト手に取り見て、)若旦那、大層立派なお時計でございますねえ。

六三　時計屋さんにすゝめられ、昨日買つたばかりさ。

お園　どれ、しまつておきませう。

ト お園件の時計と紙入を小箪笥の引出しへ入れる。銀次これに目を附け、三人うなづき合ふことあつて、此うち六三郎浴衣に着替へ、着物を文庫へ入れ、手拭とシャボンを持ち立上り、

六三　御免下さいまし、ちよつと一風呂はひつて參ります。

銀次　私も只今お跡からはひります。(ト六三郎階子口へはひる。三五郎煙草を吞みながら、)

三五　こウ兄貴、ゆうべからのいきさつは、殘らずで幾らになるか、ちよつと勘定して見ようか。

銀次　お互えに一つ懐だ、ありやあどうでもいゝぢやあねえか。

三五　それでも錢金は他人だから、まあ勘定して見るがいい。

義七　さうだ〳〵、何の中でも勘定だ、爰で極りを附けてしまはう。

銀次　そんなら待て〳〵、爰へ目をおいて見よう。(ト銀次叺煙草入より錢を出して算盤の替りに疊へ並べ、)まづ昨夜の勘定は、勤めがこれで、臺に酒がこれよ。それいゝか。其外あとのもろ〳〵がみんなこれよ。

三五　それから、今朝の蛤鍋の勘定だ。

銀次　よし〳〵、慥か是だけだな。

義七　跡が爰までの俥賃よ。

銀次　よし〳〵、人力がこれだけ。(ト銀次一々錢を並べて〆高を見て、)殘らず〆て、二兩一分二朱と五百になる。

三五　それぢやあざつと一人前が、先づ三分一朱だな。

義七　そりやあ三割にすりやあさうだらうが、おらあ頭割ぢやあ不承知だ。

三五　なぜ〳〵。

義七　なぜといつてべらぼうめ、割に當らねえからさういふのだ。

銀次　これさ義七、野暮を言はずと友達づくだ、仕方がねえ、三割で負けてやれ。

義七　こウ手めえ、同じやうにそんな事を言つちやあいけねえ、土臺向うは酒を呑むし、こつちやあ下戸のことだから、同じ勘定ぢやあ割に當らねえ。

三五　そんな因業いふもんぢやあねえ、手めえ酒を呑まねえ替り、一人で肴を荒すから、丁度割は五分ぢやあねえか。

義七　いくら肴を荒しても、骨だけは殘して來るが、手めえ酒は殘しやあしめえ。

三五　分らねえ事をぬかしやあがる、うぬそんな事を言ひ出して、此割前を出さねえ氣だな。

義七　割りやうが氣にくはねえ、おらあ一文を出すものか。

（ト段々聲高になる。）

銀次　こう〳〵、手めえ達やあ何のこツた、姉さんに氣の毒だ、いゝかげんに靜かにしねえか。

義七　それでもあんまり分らねえから、譯を言つて聞かせるのだ。

三五　さういふうぬが吝嗇だ。

義七　此野郎好きな戯言をつきやあがるな。

三五　何をいやあがる。（ト三五郎だしぬけに義七を毆り倒す。

義七　うぬ、ぶちやあがつたな。（ト義七むしやぶりつく、銀次留めて、

銀次　こいつらあ何をしやあがる。これ、いゝ加減によさねえか。

三五　兄貴、打捨つておいてくんねえ。

義七　野郎、どうするか見やあがれ。

ト兩人掴り合ひ、すべて言合せにて喧嘩をする模様あつて掴み合ひながら茶銅壺の側へ行く、お閑恐れて逃げ廻る、銀次捨ぜりふにて兩人を留めながら、此紛れに簞笥の引出しより、六三郎の時計と紙入を出し、見物に見えるやうに三五郎の手へ渡す、三五郎掴み合ひながらこれを受取り、懐へ入れる。階子の口より徳右衛門縞入半纏、湯屋の亭主のこしらへ、三助二人附添ひ出て、

徳右　もし〳〵、二階が抜けさうだ、靜にしておくんなせえ。

三助　まあ〳〵待ちなせえ〳〵。（ト三助兩人捨ぜりふにて三五郎義七を留めてやう〳〵引分ける。）

徳右　もしお前さん方は、とんだ人達だ、何の間違ひかは知らねえが、客を扱ふ湯屋の二階で、喧嘩をされちやあ

迷惑だ。どうぞ歸つておくんなせえ。

銀次　やい、二人ながら歸れ〳〵、えゝ、早く外へ出やあがれ。

ト銀次は兩人に早く歸れと目で知らせる、兩人呑込み、

三五　やい義七、喧嘩なら外へ出ろ。

義七　出るからどうともして見やあがれ。

三助　さあ〳〵、早く出ておくんなせえ〳〵。

ト三助兩人三五郎と義七を押出す、是れにて兩人履物を持ち、捨ぜりふにて爭ひながら階子の入口へはひる、銀次徳右衛門に向ひ、

銀次　もし親方、あいつらアわつちの連れだが、詰らねえ間違ひから友達喧嘩を始めやあがつて、こんなに二階を騒がして、こつちのお家へまことに濟まねえ。あいつらに成替つて、此わつちが誤るから、まあ了簡しておくんなせえ。(ト頻りに詫びる。)

徳右　いやもうお連れのお前さんが其樣におつしやりますと手前の方で痛み入ります、先づは事なく納まりまして、やう〳〵安心いたしましたが、餘り騒ぎが強いので、實はびつくりいたしました。

ト此時六三郎湯から上つて來る。喧嘩を恐れし心にて、後の方へ退り手早く着物を着にかゝるを、

これは銀座の若旦那、もうお上りなさいましたか。

六三　相變らず長湯をしました。(トお園六三郎へ茶を出す、銀次は此うち茶代の錢をかぞへ。)

銀次　そりやあさうと今の騒ぎで、まだ湯にも這入らねえが、是れから行つてあいつらを、仲直りでもさせにやあならねえ。

徳右　左樣ならもうお歸りでござりますか。

銀次　おい姉さん、お茶代は爰へおくよ。(ト銀次履物を持ち階子口へはひる、此内六三郎着物を着てしまひ。)

六三　お園さん、さつきの物をちよつと出して貰はうかね。

お園　ほんに、お預り物をさつぱり忘れてをりました。(トお園引出しを明けて見て、右の二品なきゆゑ、合點の行かぬこなしにて、外の引出しを殘らず改め、いよ〳〵なきゆゑびつくりして)えゝ、こりや大變ぢやわいなあ。

徳右　大變とは、何事だ。

お園　若旦那からお預かりのお時計と紙入が、この引出しに見えぬわいなあ。

六三　なに、あの二品が見えぬとか。

徳右　お客樣の御持參ものを、なくして濟むものか、よく

そこらを捜して見ろ。
お園　いえ〳〵、どう尋ねても見えぬわいな。
德右　そんならもしや、盜まれたか。
三助　さあ〳〵、大變な事が出來たぞ〳〵。
ト德右衛門三助とも〴〵立上り、そこらをうろ〳〵尋ねる、お園心附き、
お園　もしやさつきの喧嘩の紛れに。もし、今のお客が怪しいわいなあ。
六三　そんなら、彼奴の仕業であつたか。
德右　遠くは行くまい、それ追ッかけろ。
三助　合點でござります。（ト三助兩人足早に階子を下りる、六三郞扨はといふ思入あつて）
六三　是れで樣子がさらりと分つた。さつき途中であの男が、見ず知らずのわしを呼びかけ、もう何時と尋ねたのは時計を出させて見ようばッかり、さうとは知らず浮々と飛んだ企みに罹りました。
お園　何にいたせ此二階で、盜まれたのはわたしの油斷。もし伯父さん、どうぞ取返して下さりませ。
德右　それはおぬしが言はずとも、取返して差上げねば、湯屋の主人の役が濟まぬ、何にしろ今の客を、首尾よく連れて戻ればよいが。（ト此時階子口にて）
三助　さあ〳〵二階まで來ておくんなせえ。（ト三助兩人にて銀次を連れて出て來る）親方やう〳〵連れて來ました。（ト銀次合點の行かぬ思入にて）
銀次　おい〳〵番頭、茶代ならあすこへおいたが、外に何ぞ用でもあるのか。
トよき所へ住ふ、德右衛門思入あつて、銀次の側へ寄り、
德右　もし、お呼び返し申しましたは、外の事でもござりませぬがこゝの二階でたつた今、紛失物がござりますゆゑ。
銀次　なに、紛失物だえ、そりやあ御心配だねえ。（ト四ツ竹節の合方になり）してどんな品がなくなりましたえ。
六三　さあ紛失いたした其品は、金子のはひつた蟇口の棧留の紙入に、金側の時計が一つ。
銀次　そんならさつきのあの時計を、爰の二階で取られなすつたか、そりやあとんだ御災難だ。
ト態とびつくりする。
德右　さつきから二階に居たのは、取られなすつた御當人と外には家の者ばかり、喧嘩をした二人の衆を一足先へ

歸してしまひ、跡へ殘つたお前さん、お氣の毒ではござりますが、掛り合は脱れませぬ、御不承ではござりませうが、疑ひ晴らしに懷を、改めさせておくんなさいな。

ト銀次わざと迷惑な思入にて、

銀次　成程この場に居たから、掛り合といはれても仕方がないとは云ふものゝ、懷を見せるのはわつちあちつと迷惑だね。

德右　御迷惑でもござりませうが、見せてお貰ひ申さにやあどうも疑ひが晴れませぬ、これが僅かの品ならば捨ておきもしませうが、何をいふにも金目な品物。

お園　是れきり出ぬとこのわしが、お客樣へ濟まぬわいなあ。

六三　何にいたせ持主のわしは扨おいて、爰の主人のきつい心配、品物さへ戻りますれば、何事も此場ぎり穩便に濟ませまする所存でござりまする。

德右　御當人はあの通り、事を好みませぬ御氣質ゆゑ、よしんばこなたの懷に、さあ品があつたにしろおとなしくお戻し申せば體に疵が附かず、世間へ知れずに濟むといふもの。

ト是れを聞き銀次思入あつて、

銀次　むゝ、それぢやあおめえ方、わつちだと思ひなさるのかえ。

德右　まあそんなものさ。(ト合方きつぱりとなり)わたしも爰の新開町へ新湯を始めて今日までは、襦袢一枚下駄一足、まだ盗まれた事もなく、堅い家だと御近所で評判のいゝ所から、低い鼻さへ此頃は一段高い番臺へ肩身を廣く坐つて居たが、今日は物日の忙しさに、つい二階へも氣を附けず思はぬ油斷が大敵に、大事のお客が御持參の預かり物がなくなつちやあ、湯屋の名前に拘るゆゑ溜り掛つた水船の底の底まで洗ひあげ、沈んだ品を出さにやあならねえ。(ト此内銀次思入あつて)

銀次　仕方がねえ、ようござります。そんなにわつちを疑ぐるなら、懷を見せやせう。

德右　なに、そんなら見せると言ひなさるか。

銀次　裸になつて見せやせう。しかしちよつと斷つておくが、もし改めて見た上で、其時計と紙入が體のうちにねえ日にやあ、わつちやあ濟まされねえが、そりやおめえ承知だらうね。

三助　いや盗人たけ〴〵しいと、白々しい事を吐かしやあがる。

同　ぐづ〳〵言はずと、盗んだ品をきり〳〵爰へ、
兩人　出しやあがれ。
銀次　喧しい三助め、よく口を出しやあがる。(ト睨める、是れにて三助扣へる。)さあ、裸になるからよく見てくれ。(ト銀次叺煙草入を投り出して立上り、手早く帶を解いて着物を脱ぎ。)それ、體中を改めろ、おれの物はそこにある、煙草入と手拭ばかり。それ、着物も此通り振つて見せるぞ。
ト銀次はいろ〳〵と着物を振ひ體中を見せろ、件の品なきゆゑ皆々びつくり、
六三　慥にそれと思ひの外、
徳右　こりやどう見ても二品は。
銀次　どうだ、何もありやあしめえな、是れでもおれが盗んだとおめえ達は言ひなさるか。
徳右　いえなに、なか〳〵もちまして、さういふ譯ではござりませぬ。
銀次　それぢやあ疑ひは晴れたのかえ。
徳右　先づ晴れたやうでござりますな。(ト是れにて銀次思入あつて手早く着物を着る。)
銀次　うぬらあ、よくおれを盗人にしやがつたな。(ト尻をまくつて眞中へどつかり胡坐をかく、是れにて合方きつぱりとなり。)これさ外の事たあ譯が違ふぞ、手めえの家の柘榴口に張つた硝子の窓よりも、曇り霞のねえおれに、よく惡名を附けなすつたな、斯ういふ事が耳になりやあ、明日が日どういふ災難を浴びる岡湯のしぶきから、惡い噂がぱつとして後へ廻る手拭の、いやな印がおれの身に掛るめえとも云はれねえ。さあ是れからは表向きシヤボンで體を洗ひ上げ、垢を落して貰ふから、扱ひ所までうしやあがれ。(ト銀次徳右衞門の胸倉を取る。)
徳右　あゝもし〳〵お腹の立つは御尤もでござりますが、先程からの始末柄は、みんな私が了簡違ひ、此上はどの樣にもお詫びことをいたしまする。お客樣への不調法は、どうぞ御勘辨下さりますやう、偏にお願ひ申し上げまする。
銀次　いやだ〳〵了簡ならねえ。こつちで言やあの娘が、盗んでおいて其科を、おれに着せるこしらへ事だ。
お園　どうしてわたしが、其やうな。
銀次　さうでなけりやあ主人のわれが、盗んでおれに言ひがけするのか。
徳右　あゝこれ、必ずめつたなことを。

銀次　たとへ何と言譯しても、人に惡名を附けたのはうぬらに曰くがあるからだ、さあ出る所へ出て仕埒をつけ、明りを立てゝ貰ふからどいつもこいつもうしやァがれ。

ト銀次立上り、徳右衛門とお園の手を引立て行かうとする六三郎留めて、

六三　あゝもし、ちよつとお待ち下さりませ。

銀次　何でおめえは留めなさるのだ。

六三　さあ是れなる二人を存分に、連れて行かうとおつしやりまするも、お腹立ちから起りしこと故、さら〳〵御無理とは存じませぬが、品物をなくされました其當人の私が、お詫言をばいたしますゆゑ、ちよつとお待ちなされて下さりませ。（ト是れにて銀次思入あつて、）

銀次　待てといふなら待ちもしようが、盗人の肩書が、綺麗さつぱり脱けるやうに、おめえ捌いてくんなさるか。

六三　さあ私が青い口前で、捌く譯もござりませぬが、只今考へて見ますれば、時計は元より紙入も着物を脱ぐ時縁側の手摺を越して往來へもし落したかも知れませぬ、それを一途に預けたと思ひ違へてお前さまに、疑念を掛けたはこつちのあやまり、まつたく心得違ひでござりますれば、どうぞ御勘辨をもちまして此儘お歸り下さりませうなら、有難う存じまする。

ト頻りに詫びる、銀次しめたといふ思入にて、

銀次　成程おめえは年は若いが筋道の分つた人だ、さう事を分けて言はれりやあ、こつちも了簡しにやあならねえ。ようござります、疑ひさへ晴れたなら、さつきからのいきさつは、みんな負けて歸りませう。

六三　左樣なら何事も、御勘辨下さりまして、お歸りなすつて下さりまするか。

銀次　大金な物をなくして往生のいゝおめえの挨拶、それに免じて何にも言はず、わつちやあ直に歸りまする。（ト銀次捨ぜりふにて、）大きにおやかましうござりました。（ト羽織を肩へかける。四ツ竹節になり、銀次階子口へ行き、舌を出してにつたり思入あつて、下駄を持ちづうづうしく下へおりる。

三助　たしかに彼奴が盗んだか盗まねえか知らねえが、何にしろ太々しい、憎體な奴だなあ。

同　そりやさうと、今の騒ぎで、いつの間にか日が暮れた、どれ燈火でもつけようか。

ト三助茶銅壺の附木を出し、掛行燈へ燈火をつける、徳右衛門三助に向ひ、

徳右　これ、暮れちやあ下が無用心だ、早く行つて氣を附けろ。
三助　そんなら、親方、
兩人　わつちらア下へ行きます。（ト三助兩人階子口へはひる。跡合方、徳右衛門思入あつて）
徳右　もし若旦那樣、正しく彼奴の懷に持つて居るかと思ひの外、喧嘩をしたのが相摺りで、早くも品をこかした樣子、是れといふ證據もなければまさか突出すこともならず、殘念なことをいたしました。承はればお時計は、大枚な品とのこと、お紙入にも定めて金子が、
六三　なに、金は僅か二三十兩、惜しいとも思はぬが、外に大事な證書があるゆゑ、それに當惑しましたわいなあ。
徳右　御尤もでござりまする、是れと申すもお園が麁相。これ、おぬしやあとんだ事をしでかしをつたなう。
ト是れまでお園泣いて居て、ぢつと思入あつて、
お園　お預りの其品が是れきり出ませぬ其時は、わたしや生きて居られぬ思ひ。伯父さん、どう仕樣はないかいな。
六三　これお園さん、言譯に死ならうなど、はそりや狹い了簡、器械がい、からあの時計惜しいとは思つたが、二百圓の金さへ出せばいつでも買へる品、お前の命は何百圓金を積んでも買はれはしまい。殊に斯うした二人が仲、いやさ、斯ういふわたしがあの品は、思ひ切つてしまふから、必ずともに心配せずと、まあ落着いて居たがい、。
お園　はい。（トやはり泣いて居る。）
徳右　これ、何を泣いて居るのだ、あの通り若旦那がおつしやつて下さるも、無分別をさせまい爲、殊におぬしは親類から此徳右衛門が預りもの、もしもの事があつた日にやあ、兄の佐吉へ濟まぬゆゑ、必ず短氣を出してくれるな。
お園　そのやうに言はしやんすりや、死ぬにも死なれぬわしが身の上。左樣なら若旦那、不調法は幾重にも。
六三　はて、世間にいくらもある事ゆゑ、必ずきな〳〵思はぬがよい。（ト徳右衛門思入あつて）
徳右　あきらめのい、若旦那の、其お詞で落着きました。とはいふもの、、大枚二百圓といふ品が、爰の二階でなくなりしは、時の不承と言ひながら、
お園　わたしが心を附けたなら、斯ういふ事もあるまいに、
六三　それも此身の油斷から、終にはか、る禍ひの、
徳右　今日は如何なる惡日と、

お園　何科もなき日を恨む、
六三　その舊弊も世につれて、
德右　開けし今の暦には
お園　よしあしさへも無きものを、
六三　降つて湧いたる災難は、
德右　思へば時節で。（ト德右衞門煙管で、灰吹を叩くを道具替りの知せ、）ございまするな。
ト六三郎何か考へる思入、お園は手拭を額へあてゝ泣く、此模樣流行唄にて道具廻る。

（舂米屋見世の場）―本舞臺三間の間常足の二重、眞中暖簾口、上の方まひら戸の戸棚、下手の壁に帳面を掛けし書割、此前に帳場格子、ずつと上手一間の板羽目、米俵を澤山に積み、下手一間舂場の模樣、米櫃、はかり桶、桝、はかりかきなどを置き、空俵繩などを取りちらし、いつもの所門口、此外路地口、總て舂米屋見世の體、二重よき所に見世火鉢へ鐵瓶をかけ、角行燈をとぼし、爰におむつ世話女房のこしらへにて針仕事をして居る。此側に十歳ばかりなる仙太郎、雜なる散切り筒ツぽの上へ木綿の着附、小倉の帶にて讀物の本を讀み居る、此模樣さんげさんげにて道具納まる。

むつ　これ仙太郎や、もう今に十時になるから、讀物はよいかげんにして、早く寐たがよいわいの。
仙太　いえ〳〵、まだおとつさんがお歸りがございませぬから、私は起きて居りまする。
むつ　いつお歸りなさるか知れないから、先きへ寐たがいいわいなう。
仙太　いえ〳〵いくら夜が更けても、おとつさんがお歸りまで私は起きて居りまする。
むつ　今日は朝早くから出なすつたに、今時分まで何處を歩いて居なさるか、大分遲いことだわいなう。
トやはり右の鳴物にて、下手の路地より佐次兵衞、着流し綿入れ半纏、相長屋のこしらへ板に綴ぢつけたる御布告を下げ、片手に米かし桶を持ち出來り、
佐次　はい、御免なさいまし。
むつ　どなたかと存じましたら、裏の佐次兵衞さんでござりますか。
佐次　また御布告が來ましたから、直に廻しに參りました。
（ト二重へ御布告書を置き腰を掛ける。）

むつ　これはお世話さまでござりました。

ト佐次兵衛仙太郎を見て

佐次　仙太郎さん、まだ起きて居なさるのか、おれの家の奴などは、もう疾に寝てしまつた。

トおむつ御布告を手に取り

むつ　もし佐次兵衛さん、これは何のおふれでござりますな。

佐次　いやも、何のおふれだかむづかしい字ばかりで、わたしなどには讀めないから、直ぐにこつちへ持つて來ました、どうぞ御布告は誰れにでも、讀めるやうにして貰ひたい。

むつ　隣り町の喜兵衛さんは、一々おふれへ假名を附けてお廻しなさるさうでござります。

佐次　成程さうしてくれたなら、誰れにでも分るであらうが、こんな四角な字ばかりでは、さつぱりよめないの閻魔さまだ。

むつ　左樣なら、地獄のおふれでござりまするか。

佐次　何を言はつしやる、はゝゝゝ。それはさうとおふれの序に買物をしに來ました。御面倒でも中白を、どうぞ二朱だけおくんなさいまし。

ト佐次兵衛桶を出す。

むつ　はい／＼畏りました。どれ、直にはかつて上げませう。

トおむつ桶を持ち下手へ來て米をはかる。佐次兵衛煙草を呑み居る。此うち仙太郎件の御布告書を手に取り、小口の所を少し讀む、佐次兵衛これを聞きびつくりして、

佐次　これ／＼仙太郎さん、お前それが讀めるかえ。

仙太　伯父さん、此位なものは讀めますよ。

佐次　なに、この位なものは讀める。そりやあお前感心だ、しかしまだ子供のくせに、そんなむづかしい字がどうして讀めるね。

ト此うちおむつ米を量り、佐次兵衛の側へ桶をおき

むつ　お前さんも御存じの通り、内の人は商賣の帳面ぐらゐは附けますが、學問をせぬゆゑにとんとむづかしい物は讀めませぬ、それゆゑこれには讀書の出來るやうにして遣りたいと、六ッの年から手習のお師匠さんへ遣りましたが、それにまた去年から學校所へ上げまして、毎日通つて居りますお蔭、有難いことに此頃は、大概なものは讀みますわいな。

佐次　はて、それでこんなものが讀めるのだね、成程學問は仕ようものだ、實はわしも學校所などは無駄なものだと思つて居たが、さういふ話しを聞くにつけ、お上にていろ〳〵とお世話下さる思召しが有難い。家の悴も今年は九ツ、早速學校所へお願ひ申して、學問をばさせませう。

むつ　昔とは樣子が替つて、此節の學問は商人でも職人でも、身分に應じてそれ〴〵に、みんな役に立つさうでございます。

佐次　何にしろ家へ歸つて、女房にも言ひ聞かせ、早速悴を出さにやあならぬ。どれお暇しませうか。

むつ　左樣なら、もうお歸りなされまするか。

佐次　米の代を、爰へおきますぞや。

ト二朱の札を出しておく。

むつ　これは有難うござりまする。

佐次　大きにおやかましうござりまする。

ト佐次兵衛桶を持ち門口へ出て

さて〳〵息子が息子なら、お袋までがいゝ心掛けだ、其上隨分女もよし、程のいゝ上さんだ。しかしちつと盛りが過きて、惜しいことにひねッくさいな。

トおむつこれを聞き

むつ　もし、ひねでおわるければ、新を上げませうか。

佐次　なに、ひねの方が殖えますわな。

ト佐次兵衛下手の路地口へはひる。

仙太　もし、おつかさん、御布告を直にお隣りへ廻しませうか。

むつ　いや〳〵、もうお隣りはお休みなされた樣子、明日の朝にしやいなう。

トおむつはまた仕事にかゝる、仙太郎はやはり本を讀み居る。さんげ〳〵の合方にて、花道より仙右衛門羽織着流し、紺の前垂れ、駒下駄手拭を米屋冠りにし、小田原提灯を提げ出來り花道にて、

仙右　今宵は闇と思つたが、大方先の庚申ちやあ二十日前に當ると見えて、いつか月が上つたゆゑ、提灯は無駄になつた。いや無駄といやあ此間から、引續いて損をしたのは、中々たやすい金ぢやあねえ、何でも相場に掛つちやあ、儲けるのも大きいが遣り損なやあ此通りだ。家へ歸つて女房子に話しも出來ねえ。

ト口小言をいひながら舞臺へ來り、内へはひつて

おむつ、今歸つた。

ト おむつ見て

むつ　おやお歸りなさいましたか、今晩は大分お遲うござんしたなあ。

仙右　用がありやあ遲くなることもある、稼業の事で歩くのだから、夜半に歸つても仕方がねえ。

ト言ひながら仙右衛門は提灯を消し、二重へ上り住ふ。

仙太郎仙右衛門の前へ手を突き

仙太　おとつさん、只今お歸りでござりましたか。

仙右　仙太、まだ起きて居たか。

むつ　さつきから寐ろと言つても、お前さんの留守のうちに先へ寐ては濟まぬと云つて、居睡りもせず待つて居たわいなあ。

仙右　此頃は一日ましに、子供らしい事がなくなつて、だいぶ堅藏になりをつたな。

むつ　それはさうと今日晝のうち、伊勢藤さんの所から人が來ましたわいなあ。

仙右　何といつて寄越した。

むつ　此間から川岸の會所で、お引合せ申した勘定を、明日は間違ひなく殘らずお戻し下さいと、さう言ひおいて歸りましたわいなあ。

ト是れを聞き仙右衛門思入あつて

仙右　その相場の勘定を、殘らず綺麗に拂ふ日にやあ、此家から代物まで、そつくり附けて渡しても。

むつ　え。

仙右　さあ渡してやるのは造作もねえが、まだ帳面を〆めねえから、さつぱり勘定が分らねえ。

ト仙右衛門考へる思入、おむつは八寸の膳に燗徳利と小皿を載せたるをそこへ出して

むつ　お酒の支度をしておきましたが、直に一口あがるかえ。

仙右　いや、ゆつくり寐酒にしよう。

むつ　そんなら、斯うしておきませう。

トおむつ、膳を片側へ寄せる、此うち仙太郎仙右衛門烟草を呑みながら仙太郎を見て

仙右　これ仙太、そんなに本ばかり讀んで何の事だ、商人が學問などをしても、何が役に立つものか、無駄なことだよせ／＼。

ト是れにて仙太郎仙右衛門へ氣を兼ねる思入れ。

むつ　あゝもし、お前さんは此子が本さへ見て居ると、いつでもよせ／＼と言ひなさるが、下々のものまで學問を

させようと、お上の厚い思召しでお建てなさつたものを、親の身で學問するは無駄な事だと貶しては、それぢやあ道が違ひますわいなあ。

仙右　手めえまでが同じやうに、兎角そんな事ばかり言つて居るが、これがいゝ家の息子ぢやあなし、二間間口の春米屋、商賣の道を覺えて儲けることさへ知つて居りやあ外に學問がいるものか。昔からちんぷんかんとむづかしい事をいふ商人で、仕出したものはありやあしねえ、それだからおれがよせといふのだ。

むつ　いえ〳〵そりやあ理不盡といふもの、昔はさうでもござんしたらうが、今では町人百姓でも物を知らねば何かにつけて、不自由な事がござんす。

ト以前の御布告書に目を附け

おゝそれ〳〵、其證據はこれでござんす、學問しないで今日の用が足りるものならば、此おふれは何のおふれだか、お前さんに讀めますか。

ト おむつは御布告書を出す。

仙右　どれ〳〵、讀めるか讀めぬか爰へよこせ。

ト仙右衞門、手に取上げ讀めぬ思ひ入れにて

はて、夜になると目がかすんで、細いものがさつばり讀めぬ。先づこれを讀むのは、願ひ下げにして貰はう。

むつ　それ御覽なさい、讀めねば不自由でござんせうが。

仙右　成程さういつて見りやあそんなものだが、全體おれに言はせると、こんなむづかしい字で書くが惡い。

むつ　いえ〳〵讀めない方が惡うござんす、それゆゑ誰にでも讀めるやうに、學問しろとおつしやるは有難いお上のお慈悲、仙太郎は學校所のお世話になる甲斐があつて、立派にこれが讀めますわいなあ。

仙右　なに、仙太郎にこれが讀める。噓をつけ、どうして讀めるものか。

仙太　いえ〳〵おとつさん、私にやあ讀めるよ。

仙右　何だ生利なことを云つて、さあ讀めるなら讀んで見ろ。

ト仙右衞門御布告を仙太郎に突附けろ、仙太郎取つて是れを殘らず讀む、仙右衞門呆れし思ひ入れ、

むつ　もし、どうでござんす、感心なものではござんせぬかいなあ。

仙右　成程こりやあびつくりだ。然しこんなにむづかしくなけりやあ、おれにでも讀めるのだ。全體よく讀めるやうに、假名で書いて出せばいゝに。

仙太　おとつさん、そんな事をおつしやると、人が舊弊だと言ひますよ。

仙右　なに、久平だ、馬鹿を云へ、おれが名は元から仙右衞門、誰れが久平だといふものか。

むつ　お前がそんな分らない小言ばかり言はしやんすゆゑ、口へは出さねど此子が心配、せめて好きな學問は、とやかう言はずに心持よく、させて遣つたがよいわいなあ。

仙右　またそんなくだらぬ事を言つて、どうもおれたあ氣が合はねえ、こつちやあ學問なんざあ大嫌ひ。

むつ　お前さんが嫌ひでも、此子がこんなに好きなものを、留めることはないわいなあ。

仙右　えゝぐづ／＼とやかましい、もう四つ過ぎだ、いゝかげんに奧へ行つて寐てしまへ。

むつ　それぢやあお前さんも、寐たがようござんす。

仙右　いや／＼、おれはちつとばかり帳合をしにやあならねえ、それだから先へ寐ろといふに。

むつ　そんならわたしは兎も角も、此子を奧へ寐かしませう。

仙右　行くなら燗をつけて行つてくれ。

むつ　あい／＼、爰へ入れておきますぞえ。

　ト　おむつ燗德利を鐵瓶へ入れて

さあ仙太郎、奧へいつて寐ませうわいなう。

　ト是れにて仙太郎仙右衞門の前へ手を突き

仙太　左樣ならおとつさん、お先へ臥せります。

仙右　いや、また四角四面にやお恐れるなあ。

むつ　さあ、來やいなう。

　ト右の鳴り物にて、おむつ仙太郎を連れ奧へはひる、跡仙右衞門思ひ入れあつて合ひ方になり、

仙右　女房や小僧はあの通り、おれと氣性が違ふから、何かの話しをした所が相談相手になりもせず、仲間うちの遣繰も此頃はきつちり詰り、融通の利かねえおれの懷、川岸へ行つても赤米の仙右衞門と云つちやあ一粒選りの舂米屋だが、此間から相場の狂ひにすつかり景氣を見損なひ、何にも知らねえ素人に山程金を儲けられ、こつちの損は大きなことだ。然し考へても後の祭り、どれ緣起直しに一杯呑まうか。

　ト仙右衞門鐵瓶より德利を出し、手酌にて酒を呑み居る、時の鐘誂らへの合ひ方にて、秋津豊無地紋附の着流し、山岡頭巾を冠り、侍と見えるこしらへにて出來

り、花道にて、

豐　思ひ廻せば廻すほど、世に零落せし我が身の上、親の代には貯への金子に事を缺かざりしが皆放蕩に遣ひなくし、今は貧苦の其上にかてゝ加へし長患ひ、斯く落ぶれて朝夕の煙の代も盡き果てし我が困窮は厭はねど、たつた一人の母親を養ひ兼ねる腑甲斐なさ、今日に迫りし難儀より盗みをなさんと思へども、締り嚴しき家のみ多く、忍び入るにも力なし。

ト舞臺を見て

向うの家に明りのさすは、門の締りのあらざるか。何にもせよ、むう。

トうなづきて忍び足に舞臺へ來り、門口へ寄りて咳の出る思ひ入れにてびつくりして花道へ行き、

あゝ、こりや咳が出てならぬ、困つたものぢや。

ト口を押へて咳に惱む思ひ入れ、仙右衞門は是れまでに酒を大分に呑み、

仙右　やれ／＼、いつ呑んでも酒はうまいな、然し相手なしのぐい呑みで、ぐつすりと極めたら、何だか草臥が出て來たわえ。

ト仙右衞門其儘横に寢て手枕をする。此時豐、再びそろそろと舞臺へ來り、門口を少し明け、やはり咳出るゆゑ足早に花道へ行く、仙右衞門これに心附き大窓を上げ門口の方を見て、扨は盗人かといふ思ひ入れあつて、わざと横になり空鼾をかく、豐花道にて胸をさすり氣を附けて舞臺へ戻り、樣子をうかゞひ鼾がするゆゑ寢て居ると心得、顫へながら門口をそつと明け內へはひる。仙右衞門わざと大きく鼾をかく。豐ふる／＼二重へ上らうとして空俵の繩のあるに躓きばつたり轉ぶ、仙右衞門飛び起き

仙右　盗人め。

ト仙右衞門やにはに豐を引附ける、豐逃げようとして振拂ふ、此はずみに行燈倒れて消える。是れにて暗黑の模樣にて捻ぢ合ひ、此うち豐の頭巾とれることあつて、トゞ仙右衞門豐を取つて押へ、

おむつ、盗人が這入つた、燈火を持つて來い燈火を持つて來い。

ト奥にて、

むつ　あい／＼、今持つて行くわいな。

ト合ひ方になり、奥よりおむつ、寢卷細帶の裝にて手燭を持ち、仙太郎寢卷姿にて附添ひ出て來り

もし、泥坊はどこに居ますかいな。
トうろ〳〵そこらを見る。
仙右　これ〳〵、おれが爰に押へて居る、早く燈火を見せろ〳〵。
むつ　なに、其處に居るのかいなあ。
トおむつ手燭を出す。豐ふろへ居る。仙右衞門見て、
仙右　見りやあまだ若い奴だが、寐たふりをして居るとも知らず、人の家へ忍び込み、わりやあ太え奴だな。
ト豐顏を上げ、
豐　あゝ面目次第もございませぬが、貧に迫りし所から締りのないを幸ひに、忍び入つたる出來心、何卒お慈悲をもちまして、此儘お見脱し下さりませ。もしお情でござります。
ト手を合せ拜む。
仙右　なに、貧に迫つた出來心だ。しら〳〵しい事をぬかしやあがる、假令何と言譯しても、斯う取押へた上からは、こつちも十分に仕にやあならねえ、もうじたばたしても叶はぬ、うぬ、どうするか覺悟しろ。
ト仙右衞門強く捻ちあげる。
豐　成程盜賊に這入りまして、取押へられましたる上は、假令どのやうな目に逢ひましてもいたし方もござりませぬが、もう〳〵是れに懲りまして以後は心を改めます、何卒御勘辨下さりますやう、偏にお慈悲を願ひまする。
ト頻りに詫びる。
むつ　もし、大層あやまつて居るではございませぬか、斯う見たところが人體といひ、盜みを仕さうな人でもなし、成程こりやあ、ほんの出來心でござんせう。
仙太　もし、よい加減におとつさん、助けてお遣りなされませ。
仙右　これ、馬鹿も大概に言へ、假にも盜人だ、うつかり助けてやられるものか
むつ　それぢやといつて爰の家から、盜人を出すのも、あんまり出來したことでもござんせぬ。
仙右　出來さうが出來すめえが、おれの勝手にしにやあならねえ、餘計な口をたゝかずと、早く繩でも持つて來い。
ト豐これを聞き、
豐　あゝもし、此通り神妙にしてをりまする。何卒繩目の儀は、お許しなされて下さりませ。必ず逃げ隱れはい

たしませぬ。

仙右　何だ逃げ隠れはしねえ。假令そつちで逃げようと思つても何で爰を逃すものか、定めてわれも宿無しぢやアあるめえ。何處の何といふものだか、きり〳〵それを吐かしやあがれ。

ト仙右衞門豊を突放し、門口をぴしやりと締め二重へ腰をかける。おむつ行燈へ燈火をうつす、豊顔を上げて、

豊　何れの者とお尋ねに、此身の素性を語るさへ、面目もなき事ながら、一通りお聞き下され。

ト合ひ方になり、

何をか包まん某は、元舊幕の直參にて、五百石を領せし身なれど、若氣の至り放埓に親共より讓り受けたる、貯への金銀を遊里に於て遣ひなくし、既に瓦解の其折も脫走なさず町家に身を寄せ、其後士族に召出され、一人の母を片手業に商法をも開きしが、仕馴れぬことゆゑ利德もなく、彼の頂戴なす御扶持方は借財の爲に皆奪はれ、遂に活計の道を失ひ、まだ其上某が昨年夏より長煩ひ、次第々々にたつきに迫り、大小始め衣類まで皆悉く賣代なし、母を養ふ飯米の手當も盡きし當惑より、胸に浮みし出來心、盜みをなして今日のかゝる貧苦を凌がんと、この家の内へ忍び入り、斯く捕はれし上からは、假令獄屋へ引かるゝとも是非もなき事ながら、斯くと聞かば母人のその驚きはいかばかり、もし老人の嘆きに迫り、不慮の事でもある時は、悔んで返らぬ我が不孝、爰の道理を聞きわけられ、何卒この儘某をお見脫し下さらば、生々世々の御高恩、此儀偏に賴み入る。

ト豊手を突いて賴む、仙右衞門思ひ入れあつて、

仙右　成程盜人猛々しいと、わりやあ太え奴だな。

ト合ひ方になり

神妙らしく長談義、哀れな話で言ひくるめ、此場を助かる心であらうが、此仙右衞門は其手は喰はぬ、桝目の細い米屋の見世で、まだ新米の盜人が、その身の素性を肥後米の上白らしくごまかしても、稼業の道で不斷からこれはふけ米水冠りと、俵の上から見拔くほど、修行の積んだ眼力に、喰せ物だと睨んだからは桝へ這入つたおのれの體、今夜の始末をはかり立て、相場を調べる屯所へ連れて行くから覺悟しろ。

トきつと言ふ。豊これを聞きちつと思ひ入れあつて、

豊仙　すりや、かほどまで事を分け、只管お賴み申しまし

ても、お聞き入れはござりませぬか。

仙右　此仙右衛門は盜人に、頼まれたことは一度もねえ。

むつ　あゝもしお前さん、其様に言はしやんすが、今お話しを承はれば、御身分のあるお方とやら、貧苦に迫つて親御さんを、養ふ爲の出來心と、事を分けておつしやるのは、よもや嘘ではござんすまい。

仙太　まだ其上に何一つ、取られぬうちのことなれば、どうぞ此儘見脱して。

仙右　やい、何をわれまでが口を出すのだ、早く樣子を氣取つたから、何一つ取られねえが、知らずにおれが寐て居りやあ、何かさらつて行く奴だ、こんな太え奴があるからお上に御苦勞が絶えねえのだ、うぬ是から突出すから、最うかなはねえとあきらめろ。

　トこれを聞き豊覺悟せし思ひ入れあつて、

豊　左様に仰せある上は、縛せらるゝも餘儀なき次第、如何にも只今言はるゝ通り、假令一品盜まずとも、夜中に忍べば卽ち盜賊、母を思うて一旦は穩便の沙汰を願ひしが、今更思へば未練の至り、此上は是非に及ばぬ、いざ繩掛けて下され。

　ト豊後へ手を廻す、仙右衛門見て、

仙右　流石は侍、いゝ覺悟だ。幸ひ爰に俵の繩。

　仙右衛門下手にある俵の繩を取り豊へ立ち掛る、此時仙太郎つか／＼と寄つて、仙右衛門を隔てしつかりと留めて、

仙太　もしおとつさん、まあ／＼お待ちなされませ。

仙右　またしても子供のくせに、留め立てせずと退いて居ろ。

仙太　いえ／＼私の留めるのは、是れもやつぱりお前の爲。

仙右　何だ。

仙太　最前からあのやうに、罪を悔んで其身の詫びごと、側で見るさへいたはしく、此間も學校で修身口授に先生が、お敎へなすつた西洋に、昔し普魯士といふ國のフレデリツキといふ王様が、お側に使ふ少年の椅子に掛りて睡り居る側に落散る手紙を拾ひ、何心なく讀んで見しに、その少年が故郷の一人の母へ給金の半を貢ぎし禮狀ゆゑ、斯くまで親に孝心を今まで知らぬは天への恐れと、多くのお金を睡り居る衣嚢へそつと入れたまひしと、今の世までも孝行の鑑に殘る故事は、親を思ふ子の道にて、また此のお方も親のため、どうぞ此儘罪を許し、無事に

お歸し申したら、よもや惡くは報いますまい。
仙右　えゝ、わりや學問を鼻へかけ、ませた理窟を並べるか、慈悲をするのも事による、こいつァみす／＼盜人だ。
仙太　さあ其盜人にはひられたも、十時過ぎまで門口の、締りをせぬが此方の油斷。
仙右　や。
仙太　さあ、人を思ふは身を思ふと、何にも言はずにあの方を助けてお歸しなされませいなあ。
ト仙太郎繩をもぎ取る。仙右衛門大寒をかき、
仙右　よく親をへこませやあがる。
ト仙右衛門しよげて下に居る。豐仙太郎に感心する思ひ入れ、おむつ豐に向ひ、
むつ　もしお聞きなされましたか、あの通り内の悴が親に異見をいたしまするも、無事にお歸し申さうばつかり、あれも學校所へ通ひまして學問をいたしますれば、子供ながらお前さまの親御に引かるゝお心根を、いたはしく存じましてお助け申さうあれが心底、ことに御身分のある方とあれば、世間へぱつといたさぬうち、少しも早く此所を。
豐　御親切なる其お詞、必ず忘却は仕りませぬ。それにつけても御子息の感じ入つたる今の一言、平民の子でさへも學校の教へを受け、親を諫めて說得なすに士族の身をもち面目なし、これに耻ぢて改心なし、元より柔弱非力ゆゑ、士名を捨てゝ商となり、若し活計の道を立て、人並々の者ともならば、其時こそは御子息に、今宵の恩を謝するでござらう。
むつ　是れと申すも幼いものに、物の道理を教へて下さる其學問のお蔭ゆゑ、有難いはお上のお慈悲。
豐　返す／＼も御子息は、我が身に取つての大敎師、せめてお禮に、
ト豐思ひ入れあつて、懷より板表紙の手本を出す、尤もこれに秋津氏と認めあること、
賣代なさんと所持なせし、董其章の此法帖、心ばかりの品なれど、何卒これをお受け下され。
ト右の手本を仙太郎の前へ置く。
仙太　すりや、此品を私に。
ト取らうとするを、
仙右　仙太待て、物を貰つて濟むものか。
ト仙右衛門引つたくり見て、
何だか怪しい古手本、盜み物なら引合だ、こんな物は入

るものかえ。
ト仙右衛門手本を投げ出す、これにてぱらりと開けて中の文字見える、仙太郎のぞいて、
仙太　でも、見事な此法帖。
ト目早く名前を見て、
豊　あなたは、秋津氏とおつしやりまするか。
豊　どうしてそれを。
仙太　是れに書いてござりまする。
トこれにて豊こなしあつて、
豊　はゝあ斯くお目立ちまする上からは、今は何をか包むべき、拙者ことは舊幕臣、秋津豐後が悴にて、同苗豊と申す者。
トお睦これを聞きびつくりして、
むつ　そんならあなたは駿河臺の、若旦那さまでござりましたか。
豊　はて、それを知られしそこ許は。
むつ　あなたに乳を上げました、小松川のお節が娘、むつと申すものでござりまする。
豊　さては乳母の娘であつたか。
むつ　若旦那さまでござりましたか。
豊　あゝ、面目ない。
ト豊うつ向く。
仙太　そんなら常々話しに聞いた、お屋敷の若旦那さま。
むつ　以前に替りし御様子と、承はつてはをりましたが、そんならあなたはそれ程までに。
豊　零落いたせし今の身の上、詳しい事は申さずとも、今宵の始末で察してくりやれ。
むつ　あゝおいたはしいことでござりまする。
トおむつは仙太郎と共に泣く、仙右衛門これを見て、
仙右　女房の爲にやあ由緣のある、主筋かは知らねえが、こつちやあ少しも緣はねえ。これ盜人のお侍、細目に掛つて突出す所を、無事に濟ましてやるからは、有難いと三拜して、もういゝかげんに歸らつせえ。
トそつけなくいふ。
豊　成程盜賊の罪科をお許し下さる上からは、長居いたすは恐れあり、最早お暇仕る。
ト立掛る、
むつ　あゝもし、ちよつとお待ち下さりませ。
ト豊を留めておむつ上手の手文庫を出し、此中の札入より札を出して、

もし、若旦那様、ほんの私が心ばかり、聊かでござりまするがお宅へお持ち下さりまして、御隠居さまへお好きなものを、買うて上げて下さりませ。

ト札を出す。

豊　はて以前の誼を忘れずして、貧苦を惠むお志し、此儘に貰ひ受け、母の土産にいたすであらう。

ト仙右衞門これを見て、

仙右　扨々無駄を知らぬ奴だが、いつたいそりやあ見世の物か、見世の物なら、一文半文手を附ける事はならねえぞ。

むつ　いえ／＼是れは去年の暮に、とゝさんから貰つた札、私の物でござんすわいな。

ト仙太郎も同じく文庫より小札を出し、

仙太　おぢいさまより小遣ひに、わたしも貰うた此小札、これも一緒に差上げまする。

ト豊の前へ出す。

むつ　僅か一朱でござりますが、仙太郎の志し、お受けなされて下さりませ。

豊　最前拙者を助けくれし、厚き情の其上に、親子諸共かほどまで、重ね／＼の志し、詞に任せ受納いたす。必ず忘れはおきませぬ。

ト豊件の札を押しいたゞき懐へ入れる、これにて明けの鐘、仙右衞門聞き耳立て、

仙右　とかういふうちありやもう九ッ、夜更けさふけにごてごてして、隣り近所へ見ッともねえ、さあ／＼きり／＼と歸りなせえ。

トそつけなくいふ。

豊　十二時とあらば思はぬ遅刻、直さま是れより宿先へ。

仙太　もうお歸りなされまするか。

豊　如何にも、お暇仕る。

ト立上がる。

むつ　して只今は何方に。

豊　その隠れ家は何れそのうち。

むつ　左様なればお近いうちに。

仙右　また來られては迷惑だ。

むつ　若旦那さま。

豊　お睦どの。

仙太　御機嫌よろしう。

豊　あ返す／＼も今宵の恩義。

ト思入。

仙右　ええ、まだらせぬか。

トむごく突出す、豐よろ〳〵と門口へ出る。

むつ　あもし。

ト寄らうとするを、

仙右　これ。

ト隔てゝ門口をぴつしやり締めるを道具替りのしらせ。

どれ締りをしようか。

ト仙右衛門掛金をしつかり掛ける。豐外にて情ないといふ思ひ入れ。おむつは外を氣遣ふこなし・仙太郎は以前の手本を出し戴く。此模樣さんげ〳〵火の用心の割竹にて道具廻る。

（深川萬年橋の場）――本舞臺正面大川より向うの川端を見たる遠見、上手の所横に枝川のある心にて、繪心にたすき欄干の橋を掛け、萬年橋といふ札打附けてある。下手に出茶屋を片附けし葭簀張り、日覆より柳の釣枝、灯入りの月をおろし、總て深川萬年橋夜の模樣、時の鐘波の音にて道具留る。と直にばたばたになり、花道より以前の三五郎逃げて出る、銀次これを追ひかけ出來り、茶屋へ來て銀次三五郎を捉へ、

銀次　やい三五郎、待たねえか。

ト上手へ廻り。

なぜ手めえはおれを見て、一目散に逃げ出した。

三五　なに、おめえなら逃げやあしねえが、もし湯屋から捜しに來たかと思つたから、それでおらあ逃げたのだ。

銀次　何にしろ、さつき渡した、時計と紙入をこつちへ寄越せ。

三五　今出すから待つてくれ。

ト三五郎懐へ手を入れもぢ〳〵して、

こいつあ大變なことをした、紙入は持つて居るが、時計の方は落してしまつた。

ト噓をつく思入。

銀次　時計の方は落してしまつた。

ト銀次さてはといふ思入あつて、

落したら仕方がねえ、紙入だけをこつちへ寄越せ。

トこれにて三五郎懐より以前の紙入を出し、

三五　それ、よく見ねえ、しつかりと渡したぜ。

ト銀次受取つて見て、
銀次　よし／＼、跡でふてう割をして遣るぞ。
ト懐へ入れる。
三五　まだ用があるから、おらあ爰で別れるぜ。
ト行き掛けるを、
銀次　ちよつと待て。
三五　何ぞまだ用があるか。
ト立戻る、銀次だしぬけに三五郎の胸倉を取り、
銀次　野郎め、時計をどこへこかしやあがつた。
トしめあげる。
三五　あゝこれ、どうする／＼、時計は、落したと云ふこ
とよ
銀次　どこで落した。
三五　湯屋から出て爰まで來るうち、道を急いで途中へ落
した。
銀次　馬鹿ぬかすな、そんな事を喰ふやうな、銀次だと思
やあがるか。
ト合ひ方になり、銀次右の手にて三五郎の胸倉をぐい
と取りながら。
名前目は道具屋だが、小二朱や五丸の口錢で、天窓ア下
げた事あねえ、ほんの稼業は附けたりで年が年中小めく
りや、また賽事に日を暮し、鐵火の盆で遣り取りも、負
けた擧句は盛り場で小遣ひ仕事の晝鳶ぎ、それもけふ日
は町役の島、刑状のぼく除けに、辻商人とごまかして、
天麩羅銀次も上部にやあ堅氣な衣を掛けちやあ居るが、
種は名うての巾着切だ、また駈け出しの手めえ達が、よ
もやに掛ける積りでも何で其手を喰ふものか、さあ時計
を出すか出さねえか、うぬ出さゞあたゞはおかねえぞ。
ト強く捻ぢあげる、三五郎切なき聲にて、
三五　兄き、出すから弛めてくんねえ／＼。
銀次　そんならきり／＼、出しやあがれ。
ト手を弛める。
三五　さう覺られちやあ仕方がねえ、今出すから待つてく
れ。それ、時計は爰に。
ト出して見せる、銀次取らうとするを、三五郎前の川
へ飛込む、
銀次　野郎め、生かしちやあおかねえぞ。
ト續いて飛込まうとして、さう行かぬ思ひ入れにて、
上下へうろ／＼する。此時橋の上より五郎七、腹掛股
引、牛蒡屋亭主のこしらへ、大束の葱五六把を繩にて

五郎　下げ出來り、銀次に突當り顔を見て、

五郎　ヤ、若旦那か。

銀次　五郎七か。

五郎　いゝ所で逢ひました。

ト捉へようとするを、

銀次　手めえに逢つちやあ。

ト銀次振りもぎつて以前の紙入を落し、上手の橋の上へ逃げてはひる、五郎七後を見送り、

五郎　あゝもし、たつた一言このわしが、言ひたいことがございます。もし若旦那々々、えゝもう逃げて行かつしやつたか。

ト呆れて見送る、此時件の紙入に目を附け拾ひあげ、

こりやこれ紙入。

ト思入、下手葭簀の蔭より以前の義七出て、

義七　それをこつちへ。

ト取らうとするを、五郎七突廻してちよつと立廻る、此時橋の上より銀次うろ／＼紙入を捜しながら出て來る、是と一緒に下手より以前の豊、何心なく出て來り義七うろたへて突當る、五郎七提灯を出すを、銀次打ち落す、これを物にさぐり合ひ世話ダンマリよろしくあつて、紙入は五郎七の手へはひる、義七縫包みにて打つてかゝる、豊身を躱して義七をぽんと轉す、銀次は五郎七の持つたる紙入をひつたくり、つか／＼と花道へ行き、

銀次　泥坊。

ト大きく言ふ。

豊　えゝ。

トびつくりして、上手にて思はず懐を押へる、五郎七は下手にて義七へ踏みかける。銀次は紙入を内懐へしつかり入れる、三方見合つて木の頭、

銀次　どろばう／＼。

ト言ひながら花道へ走りはひる。五郎七は義七を踏みかけしまゝ是れをきつと見込む、豊ホッと息をつき胸を撫でおろす、此模様浪の音、佃にて、

ひやうし幕

二幕目

久保町牛肉屋の場

比丘尼橋西洋床の場

役名――秋津盟、西洋床ざん切の左吉、絹屋息子

六三郎、下剃の吉、辻道具屋ねり玉の三五郎、屑屋權兵衞、巾着切義七、天麩羅銀次、盲人仙右衞門、牛鍋屋五分ねぎの五郎七、書生なまじゆく鷄卵。五郎七女房お咲、左吉妹お園、仙右衞門女房おむつ等。

(牛肉屋見世の場)——本舞臺三間の間常足の二重、向うに暖簾口、上手一間間平戸の押入、下手一間酒樽、酒樽の棚になり、火鉢燗德利などの書割、上の方一間障子屋體、いつもの所門口、下の方一間葭おろし、三尺牛肉といふ腰障子、三尺口の向ふ牛の股をつるし、下手に俎板、臺附しちりん、鍋などの書割、門口の外に赤く牛肉と記せる立行燈、總て牛肉屋見世の體。平舞臺の上手に前幕の銀次、三五郎月代生え單物病み擧句のこしらへにて、義七と三人鍋を載せし火鉢を五德に取卷き、側に燗德利牛を入れし皿などを置き、酒を呑み居る、下手にお咲結び髮世話女房のこしらへ、襷がけ燗銅壺で酒の燗をして居る、此見得米山甚句にて幕明く。

銀次　こうお咲や、鍋が出來たら、生肉を二枚いゝ所を切つてくれ。

お咲　はい、畏りました。

ト燗德利を持つて來る。

義七　贅澤なことをいふやうだが、葱は五分よりざくがいいね。

銀次　ついでにたれもくんねえよ。

お咲　只今揃へて上げませうわいなあ。

ト下手の下家へ來て牛を切るこなし、此うち三五郎面目なき思入、義七取りなすこなしにて銀次に向ひ、

義七　もし兄貴、おめえも腹が立つだらうが、久しく三五郎も煩つたから、何事も水に流して堪忍してやつておくんなせえ。

三五　實に斯うしておめえに逢ふのも、面目ねえ話しだが、あの時時計をごまかさうと、少しばかり水心があつたばかり、川へ飛込み潜つて向うへ抜けようと思つた所が目がくらみ、こいつあ爰で死ぬことかとあわてた紛れに時計を落し、やう／＼岸へ這ひ上り三次が所で始末をして、其晩夜更にこつそりと碇をおろして捜したが、沼の中へ潜つたか、但しやあ網にでも引つかゝつて、漁夫にでも拾はれたか、四五日ばかり捜したが、水の中ゆゑ知

れなんだ。
銀次　あの時直ぐなら捌けるが、今となつちやあ出た所が、紛失觸れが廻つたから、うつかり賣りやあ喰ひ込み、直に中へ行かにやあならねえ、まあ知れねえなら其儘に、川へ沈めておくがいゝ。
義七　沈んで居ればいつか一度、拾ひ上げることもあるが、ひよつと網にでも引ッ掛つて、揚げられた日にやあ無駄骨だ。
三五　いや網にでも引ッ掛つて揚りやあ直に屯所へ、拾ひ主が訴へるから、日々新聞へ直に出にやあならねえが、まだ新聞に出ねえから、川の中に違えねえ。
銀次　手めえは不斷から高慢だが、日々新聞を買つて見るか。
三五　なに、新聞賣屋へ二百出して、時々行つて讀んで來るのさ。
銀次　また生利なことを言やあがる、水心も知らねえで。
三五　さう言はれると面目ねえ、少しばかり泳げるとこから、呑まねえでもいゝ水を呑んで、痢病と瘧と二枚がけで、丁度八十日苦しんだ。
銀次　懲役場とはどつちがいゝ。

三五　いやも、懲役場は眞平だ、一度行くと懲り〳〵する。
義七　手めえがそんな煩ひをするも、あんまり慾張り過ぎるからだ、おらあ兄貴に紙入の割を貰つて成田から、芝山の仁王さまへ參つて來た。
三五　手めえも仁王さまへ參つたのか、よく何ともなかつたな。
義七　なぜ、參つちやあ惡いかえ。
三五　いゝの惡いのといつて、芝山の仁王さまは泥坊除けだ。
義七　そいつアさつぱり知らなんだ。
銀次　ぼんやりとした奴だな。
　ト此うち猪口の遣り取りをして、三人酒を呑むことよろしく、
お咲　はい、生肉を切つて參りましたが、直に御膳を上げませうか。
銀次　いや飯は喰つても喰はねえでも、もう一本つけてくんねえ。
お咲　今上げましたのが九本目ゆゑ、もうよろしいではござんせぬか。

銀次　またそんな氣障を言ふよ、數よく十本吞ましてくれ。

お咲　それぢやあもう一本つけますから、是れぎりになさいましよ。

義七　今日は親方は見えねえが、買出しにでも行きなすつたか。

お咲　いえ、奥の三疊に寐て居ります。

義七　はあ、風でも引きなすつたのか。

お咲　此間から持病の癪で、舌が釣つて一言も口を利くことがなりませぬゆゑ、何やかやでじれつたいので、間がな隙がな寐てばかり居ります。

三五　そりやあ、嘸困りなさるだらう。

お咲　まことに不自由で困りきります。

ト德利を持つて來て、

それぢやあもう是れきりになさいましよ。

銀次　おい〳〵承知々々、

ト德利を取り、

いや五郎七の口がきけねえので、異見をされる世話がなくつて、おれが爲にやあよつぽどいゝ。

ト酒を吞んで三五郎へさす。

三五　兄貴、わつちやあ、もういけやせぬ。

銀次　手めえ豪氣に弱くなつたなあ。

三五　病ひ擧句のせゐか、直に酔ひやす。

銀次　何にしろ病み擧句に、單物ぢやあ寒からう。布子の一枚も着せてやりてえが、おれも此頃間が惡く斯うして紙入は持つて居るが、中に小札が一分二朱だ。

ト件の蟇口の紙入を出し中を明けて見せる。

義七　おめえも都合の惡いところへ、こんな事を云ふも氣の毒だが、どうかしてやつてくんなせえな。

銀次　爰の牛鍋屋の五郎七は、おれが親仁が使つた者ゆゑ、借りがなけりやあ無心を言つても、布子くらゐは着せてやるが、山ほど是れまで借込んだから、言つた所が貸しやあしねえ、どうかおれが算段しようから、もう一杯吞むがいゝ。

三五　いえ今も云ふ病み擧句で、すつかりわつちやあ利きやした。

義七　それぢやあわつちがその替りに、もう一杯吞みやせう。

銀次　よく吞みたがる奴だなあ。

ト銀次義七酒を吞む、此うちお咲下手へ來て、棕梠箒

へ頬冠りをさせ、下手へ立てかけ拝む。やはり米山甚九にて、花道より權兵衞縞の半纏股引、尻端折り紙屑屋のこしらへにて、屑籠を擔ぎ出て來り、

權兵　屑はござい〱。

ト花道へ來り、

まだ屑は溜りませぬか。

銀次　おい、屑屋さん〱。

權兵　お呼びなすつたは、此方でござりますか。

ト門口を明け、

今日はよいお天氣でござります、もしお上さん、屑屋はどちらでござります。

お咲　いえ、屑は昨日賣つたから、まだ少しも溜りません。

權兵　左樣なら、何ぞお拂ひ物がござりますか。

お咲　いえ〱、何もござりませぬわいなあ。

ト權兵衞むつとして、

權兵　それぢやあたゞ冷かしかえ、悪い洒落をしなさるね。

銀次　おい〱屑屋さん、腹を立てなさんな、呼んだのはおれだ。

權兵　へい、お前さんでござりまするか。

銀次　まあ爰へ來て、一杯やんねえ。

權兵　はい、有難うござります。

トもぢ〱する。

三五　おめえ酒は嫌ひかえ。

權兵　いえ、嫌ひぢやござりませんが。

義七　嫌ひなら仕方がねえが、好きなら、早くやんなせえ。

權兵　實はぷんと匂ひをかいで、ぐびついて居る所でござります。

銀次　それぢやあ早くやんなせえ。

ト茶碗を出す。

權兵　これは有難うござります。

ト茶碗で一杯ぐつと呑み、

もう一杯頂戴いたしませう。

ト呑んで、

ときに、お拂ひなさいます物は。

ト銀次懷より件の紙入を出して、

銀次　此黒桟の紙入だが、幾らにおめえ買つてくれるか。

ト權兵衞は取つて見て、

權兵　これは、結構なお紙入でござります。

義七　地體のいゝ紙入だから、張込んで買ひなせえ。

權兵　御酒を御馳走になりましたから、目一杯張込んで、一兩三分にお貰ひ申しませう。

銀次　そいつアちつと安からう、蘇口の銀ばかりも、二兩がものはあるだらう。

權兵　いえ、私の方へ引取りますと、潰し直でござりますから、二兩には踏めませぬ。

銀次　外へ見せたら三兩か、安くも二兩二分位にやあ買手があらうが、急ぎの金だ、二兩に買つて行きなせえ。

權兵　さうおつしやいますなら、御愛敬にもう二朱も買ひませうか。

義七　汚ないことを言はねえで、器用に一分買ひなせえ。

權兵　實に目一杯でございますが、御酒を頂戴いたしましたから、二兩にお貰ひ申しませう。其替りもう一杯、どうぞ振舞つて下さりませ。

三五　それぢやあ、もう一分買つてもいゝのだ。

　ト三五郎ついでやる、權兵衛吞んで、

權兵　時に此節は以前と違ひ、往來買ひが御法度ゆゑ、お宅はどちらでござりますな。

銀次　おれが家は遠方だから、爰で賣つたらいゝぢやあねえか。

權兵　こちらのお家で御承知なら、直ぐにお貰ひ申しませう。

銀次　爰は親類同様だから、おめえも手帳へ留めるなら、牛肉屋の五郎七と、こつちの名前にしておきねえ。

權兵　左様なら、五郎七さんでござりますな。

　ト權兵衛矢立を出して手帳へ記す、これをお咲聞いて、

お咲　あゝもし、ちよつと待つて下さんせ、こつちの家の名前では。

銀次　何の構つたことがあるものか、これが盜み物といふぢやあなし、おれが物をおれが賣るのだ、名前を借りたつていゝぢやあねえか。

お咲　いえ／＼、こちの人に此事を、言はねばお貸し申されませぬ。

銀次　えゝ、野暮なことを云ふ奴だな。

お咲　もし、こちの人ちよつと來て下さんせ。

　ト合方になり、奥より五郎七、褞袍平ぐけ裝にて出て來り、眞中へ坐る、お咲紙入を取つて、

銀次さんが此紙入を、お前の名前で屑屋さんへ、今賣ると言はしやんすが、名前を貸してもようござんすか。
ト五郎七紙入をぢろりと見て頭を振る。
それ惡いと言はしやんすわいなあ。
ト銀次、五郎七の側へ寄り、
銀次　これ五郎七、手めえはおれが紙入を盗み物だとでも思つて居るのか、見る通り此野郎が、病氣擧句で顫へて居るから、布子を一枚着せるのだ、名前が貸せざあ借りねえから、金を五兩貸してくれろ。
ト五郎七これまで幾度貸したか知れぬゆゑ、貸されぬといふ仕形をする。
そりやあ是れまで度々借りたが、主人を家來が貢ぐのは、こりやあ家來の恩返しだ。さあ名前を貸すか金を貸すか、二つに一つ開いてくんな。
三五　金を貸すのがいやならば、名前を器用に貸しなせえ、何も此紙入が盗み物と云ふぢやあなし。
義七　こりやあ第六天の丸忠で、兄貴がこしれえた紙入だ、決して不正な品ぢやあねえから、名前を貸してやんなせえ。
三五　それとも名前が貸されざあ、金を貸してやんなせえ。
銀次　さあ五郎七、名前を貸すか。
ト紙入で五郎七の胸を叩く、五郎七口の利きたい思入。
但しは五兩金を貸すか、さあ〳〵〳〵。
ト叩き立てる。
早く返事をしねえのか、
トきつといふ、五郎七是非なくうなづく、
それぢやあ名前を、貸してくれるか。
ト五郎七うなづく、權兵衞見て、
權兵　きつとお請合ひなさいますな。
お咲　あゝもし、それを請合つては。
ト五郎七お咲を押へ、わが胸を叩き、おれが承知だといふ思入。
權兵　もし五郎七さん、默つて居ては分りませぬ、名前を貸していゝなら、早くいゝと言つて下さりませ。
銀次　いや、此男は癇が起つて、口がさつぱり利けねえから、うなづいたのが承知のしるしだ。
權兵　御承知とあるなら、直ぐにお貰ひ申しますが、爰は何番地でござります。

お咲　はい、十五番地でございます。
ト權兵衞手帳へ記し、財布より一圓札を二枚出し、
權兵　左樣なら二圓札と、引替へにしまする。
ト渡す、銀次三五郎に向ひ、
銀次　これぢやあちつと少なからうが、今見る通りの譯だから、是れで一枚着てくれろ。
ト二圓の札を三五郎に遣る。
三五　これを貰つちやあ濟みませぬが、折角の思召しだから、兄貴お貰ひ申します。
ト札を戴く。
義七　口をきいたわつちも悦び、まことに有難うございます。
銀次　おらあこれから築地の方へ、廻つて行かにやあならねえから、手めえ達ア暮れねえうち、日蔭町へ行つて買つて來イな。
三五　それぢやあ兄貴、貰ひ立ちに、
義七　一足さきへ行きますぜ。
權兵　わしも是れから、立場へ廻つて、屑を賣つて歸りませう。
三五　屑屋さん、しつかり儲かるぜ。
權兵　どういたしまして、しつかりどころか、二朱も儲かればようございますが。
義七　へん、旨く言つてるぜ。
ト三人門口へ出る。
銀次　まだぐづ〳〵して居るのか。
兩人　今行きますところさ。
權兵　へい、おやかましうございました。
ト米山甚九になり、三五郎義七連立つて話しながら、跡より權兵衞荷をかつぎ、屑はござい〳〵と呼びながら三人花道へはひる。五郎七腹の立つ思入にて銀次を提へ、口が利けぬゆゑ小突き廻すを、銀次振拂ひ、
銀次　これさ、何をそんなに腹を立つのだ。
ト五郎七お咲に言つてくれといふ思入。
お咲　さあ、あのやうに腹を立つのは、こちの人がお前さんに、是れまでお貸し申したのは、どの位だか知れませぬ、それを返しなさらぬはそりやあ仕方もございませぬが、今のやうな御無理をばおつしやいますゆゑ、あんまりぢやと言ひたい口が利けぬので、一倍腹が立ちますわいなあ。
銀次　そりやあおれも家を出て、小遣ひ錢に困るから、度

度金を借りたけれど、いつでも二兩か三兩だ、纏めて一度に十兩と借りたことはありやあしねえ、手めえの方からやあ其金を、恩にきせるか知らねえが、借りてもいゝから借りるのだ。

ト五郎七是れを聞き、何が借りてもいゝといふ思入。

これ、借りていゝといふ其譯は、手めえもおれの親仁にやあ、十二の年から世話になり、年が明けて世帶を持ち褒美金に百兩遣り、それから間もなく燒けた時、普請金に二百兩、貸した金もそれ切りだ、利息の勘定したならば、何百兩だか知れやあしねえ。おれに二十や三十の端た金を貸したつて、日歩だと思やあ何でもねえ。

ト五郎七またそんな事を言はしやるかといふ思入にて銀次の手を取り疊へ書くのを見ろといふ思入。

なに、疊へ書くのを讀んで見ろ。

ト五郎七腹の立つ思入にて、疊へ書いて見せる。銀次讀んで、

「親旦那は人に勝れ、堅いお人であつたのが、どういふ事で、お前はこんな身持にならつしやりました。去年あの世へお出でなされたお袋さまが、くれ〴〵もお前さまが堅氣になるやうに異見をしてくれと、今際のきはに別れのお頼み。」これ〳〵、もういゝ加減に無駄を言へ。

ト手を振拂ひ、

百萬だら言つたつて、今更堅氣になられるものか、おれがかういふ身の上になつたも元は親仁が惡いからだ。本材木町四丁目で五本の指に折られる家だ、何も二本か三本の端た金を使つたとて、勘當するの久離を切るのと、いけやかましく吐かすから、遂にやあ家を駈出して、爰に二日かしこに三日、泊り歩いて惡戯を覺え、双六より外手にとらねえ賽の上が明るくなり、暗い所も三度行きお上へ御苦勞かけるやうな、こんな身性になつたのも、元はといやあ親仁のせゐだ。

ト五郎七これを聞きそんな事を言つて濟むものかといふ思入。銀次の胸倉を取り引据ゑるを振拂ひ、

えゝ、何をしやあがるのだ。

ト五郎七しなくつてどうするものかといふ思入にて立掛る、側よりお咲留めて

お咲　おゝ尤もでござんす〳〵、お前の正直な心では、嘸腹が立つでござんせう。

ト五郎七それだと云つてといふ思入にて、また立掛るを、お咲ちつと留め、

もう、よいかげんになさんせいなあ。

ト銀次五郎七の側へ來て、

銀次　これ、痩せても枯れても主人だぞ、手めえがおれを手籠にして、疵でも附けりやあ主殺しだ。とさあ時代なせりふは言はねえから、もう一杯呑ましてくれ。

お咲　いえ／＼、もうお前さんには、あげられませぬわいなあ。

銀次　うむ、主人の詞を背きやあがるか。

お咲　それぢやと云つて。

銀次　えゝ、つけろと言つたらつけねえか。

ト立掛る、五郎七銀次の胸倉を取り、引据ゑるを道具替りの知らせ、五郎七お前さまはなあといふ心にてきつとなる、銀次は喉の痛き思入、此の見得米山甚九にて道具廻る。

（西洋床の場）――本舞臺三間の間、左右中窓の硝子障子、下板羽目、向う後へ下げて常足の二重、暖簾口、左右板羽目、同じく下手の棚は香水瓶、刈込みの鋏掛けある、此道具青ペンキ塗り西洋床のこしらへ、入口に紅白の段々塗りの目印を出し、上の方仕居の心にて障子屋體、下の方濠端を見たる片遠見、柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て西洋床の體、門口へ椅子を置き、是れへお客の書生生熟鶏卵散切着流し、書生羽織駒下駄にて、襟へ金巾の毛除を掛け、椅子にかゝり、下剃の吉散切り着流し、片襷にて鋏を持ちはさみ居る、此見得端唄の合方にて道具留まる。

吉　きのふは旦那、どちらへお出でなさいました。

鶏卵　昨日は例の休暇ゆゑ、朋友一兩輩誘引し、ステンシヨより八時の車で横濱へ遊びにまゐつた。

吉　何ぞ面白いことがござりましたか。

鶏卵　元東京の在住であつたが、當今横濱の新聞で一等の冠たる、假名垣氏魯文子をとぶらひながら、今度櫻木町へ出來た櫻風呂へ行きました。

吉　今朝お出でなすつたお客さまも、其お話しをなさいましたが、慥今月の一日が、見世開きでござりましたね。

鶏卵　東京からも諸先生が夥しく出席して、近年にない盛會だつたさうだ、實に家屋の建築浴室の淸潔、一寸樓上で喫する煎茶は元より菓子の美製、あすこの土地は別

世界だ。
吉　定めて別品もをりませうね。
鷄卵　實は、それを當込んで行つたのだ。
吉　それぢやあ昨晩は、お泊りでござりますね。
鷄卵　假名垣氏に誘はれ、神風樓へ一泊した。
吉　私も吉原に居る時分、先生の天窓をはさみましたが、やつぱり濱でも相替らず遊びにおいでなさいますかね。
鷄卵　いや人には癖のあるもので、先生家へ來るのが嫌ひだ。
吉　それといふのも、女郎衆に可愛いがられるせゐでござります、嘸御新造が氣が揉めませう。
鷄卵　あれを一々氣を揉んで、頭上へ角を生したら、針のやうであらう。
吉　いや針の山といへば、先生は地獄もお好きでござりますね。
鷄卵　閻魔界では鬼に鐵棒だ。はツくしよ。
吉　お風氣でござりますか。
鷄卵　なに、濱で噂をして居ると見える。
ト合方にて、奥より左吉散切り着流し、髪結のこしらへにて、盆に茶碗を載せ持ち出て、
左吉　旦那、お茶がはひりました。
ト出す、鷄卵取りて、
鷄卵　これは親方忝ない、湯上りで一杯喫したい所だ。
ト左吉聞えぬ思入にて、
左吉　それぢやあお茶は上りませぬか、梅毒には湯の方がようござります。
ト鷄卵さては聾だといふ思入あつて、
鷄卵　親方は段々遠くなるの。
吉　いろ／＼藥も附けましたが、耳の穴へ蓋でも出來たか、さつぱり此頃は聞えませぬ。
左吉　いろ／＼藥をあがるよりは、南傳馬町の菱屋の藥がようござります。
鷄卵　到頭僕をしつかきにしてしまつた。
吉　旦那も色の青いのは、少しは梅毒氣もございませう。
鷄卵　まだそんな事をいふか。
左吉　股へ横根が吹き出しましたら、そこで毒をお取りなさい、取り損ふと鼻へ來ますぜ。
鷄卵　うつとしい梅毒責だ。

吉　どこまで行つても振り切れねえ。
左吉　なに、降り出して來た、降り出したら傘をあげろ。
鶴卵　どうでもかさはのがれねえか。
吉　こりやあ旦那、骨がらみだ。
ト兩人顔見合せ、
兩人　はゝゝゝ。
ト笑ふ、左吉同じやうに、
左吉　こいつア可笑い、はゝゝゝ。
吉　えゝ、分りもしねえくせに。
ト右合方にて下手より、以前の權兵衛籠をかつぎ、
權兵　親方、今日はよいお天氣でござります。
左吉　そいつあさつぱり知らなんだが、さぞかし賑かだらう。
吉　また何か間違つたわえ。
權兵　親方、おめえが知らねえと言ひなさるのは。
左吉　駒形へ出來た琴平さまよ。
吉　誰がそんなものを知るものか。
權兵　親方の耳も困つたものだ。
吉　段々遠通寺になります。
權兵　いや遠通寺といへば赤坂で古火鉢を見たところ、豪氣に重い火鉢だから、こいつあてつきり淺草で先度あつた、火鉢の中に金があるに違ひないと、二朱に踏めねえ代物を三朱で買つてあけて見たら、瓦ばかりで何にもなし、業腹まぎれに投り出して、三朱の金をなくしたが、捨てる神あれば助ける神と、今日はめつぱふな掘出し物をした。
左吉　なに目黒から堀の内へ行つた、よくそんなに歩けるの。
權兵　天狗さまぢやアあるまいし、そんなに道が歩けるものか。
左吉　天徳寺から赤羽根へ、成程、あれが近道だ。
權兵　道は近いか知らねえが、お前の耳が遠いので、さつぱり話しが分らねえ。
吉　ときにお前、掘出しといつて、何を掘出して來なすつたのだ。
權兵　吉さん見なせえ、此の紙入だ。
ト以前の紙入を出して見せて、
當時流行の蟇口だが、いゝこしらへぢやあござりませぬか。
吉　成程こりやあいゝ紙入だ、幾らだか買ひたいもの

だ。

權兵　どうして／＼、お前達には買はれねえ。

ト左吉これを見て、

左吉　その紙入は、賣物かえ。

ト手に取つて見て、

銀金具の蟇口は、妹が話した似寄りの紙入。

ト思入あつて奥へ向ひ、

おその／＼。

ト奥にて、

お園　あい／＼。

ト奥よりお園序幕の娘にて出來り、

兄さん、何ぞ用でござんすか。

左吉　手めえにちつと見せるものがある。

ト件の紙入を見せる、これに構はず、

鴉卵　屑屋さん、其の紙入はいくらだ。

權兵　三兩二分で買つて來たから、四兩なら上げませう。

鴉卵　一分利附と仕ようから、三兩三分で賣りやれ。

權兵　四兩を缺いては上げられませぬが、もう二朱貰つて下さいまし。

鴉卵　そんなきざを言はねえで、器用に負けてしまひなせえ。

ト權兵衞思入あつて、

權兵　ようござります。上げませう。

ト手を叩く、此うちお園とくと見て、是れに違ひないといふ思入あつて、耳へ口を寄せ、

お園　兄さん、これに違ひござりません。

左吉　いよ／＼是れに違ひねえな。

權兵　只今こちらへ上げました、其の紙入をおくんなせえ。

左吉　權兵衞さん、此紙入はどこで買つた。

權兵　どこで買つても、いゝぢやあねえか。

左吉　おめえは知らずに買つたらうが、此紙入は泥坊ものだ。

權兵　えゝ。

トびつくりする。

左吉　どこで是れを買ひなすつた。

權兵　こりやあ久保町の曲り角、牛鍋屋で買ひました。

左吉　なに、九兩にこれが曲げてあつた。

吉　久保町の曲り角の、牛鍋屋で買つたとさ。

左吉　むゝ、久保町の曲り角の、牛鍋屋で買つたとか。し

て、亭主の名は何といふ。
權兵　五郎七と云ひます。
左吉　なに、亭主がごろつきだ。
吉　五郎七と云ひますとよ。
左吉　牛鍋屋の五郎七が此の紙入を賣つたとか。こりやあ詮議をしにやあならねえ。
權兵　それぢやあ、こりやあ泥坊ものかえ。
お園　あい、此紙入は先達て、新開町の湯屋の二階で、お客さまからわたしが預り、取られた品でござんすわいなあ。
吉　權兵衛が種まきアとんびがほじくる、こりやあおめえも掛り合だ。
權兵　今この旦那に早く賣れば、みす〳〵儲かる代物だ、とんだところから槍が出て、おれが息の根を留められた。
鶏卵　僕もうつかり是れを買ふと、掛り合になる所だ。
吉　もし、安物は買はれませんね。
鶏卵　いや、骨がらみは眞平だ。
ト此うち左吉お園に半纏を持つて來いといふ、お園奥より半纏を持つて來て着せる。
左吉　おい、權兵衛さん、氣の毒ながら此の紙入を、買つた先までおめえ一緒に行つてくんねえ。
權兵　それぢやあ一緒に行きますのかね。
吉　はて、掛り合ひだ、仕方がねえ。
權兵　とんだ目に逢ふものだ。
トお園左吉の耳の側へ來て、
お園　わたしも一緒に行きませうか。
左吉　手めえは奥の番をしろ。吉公、見世を頼んだぜ。
吉　あい、合點でござります。
トうなづく。
鶏卵　思はぬことでうか〳〵と、僕も大きに長居をした。
吉　まあ、よろしうござりまする。
ト權兵衛左吉の耳の側で大きな聲をして、
權兵　さあ佐吉さん、行きませうか。
左吉　えゝ、聾は居ねえわえ。
權兵　へえ、耳の聞える振をして。
左吉　どれ、洗ひ方をして來ようか。
トきつと思入、端唄になり、左右先きに權兵衛籠をかつぎ、兩人よろしく花道へはひる。鶏卵は下手へはひる。
吉　どうして今の紙入が、牛屋の手から出たことか、思

ひがけねえところから、悪い事は足の附くものだ。

お園　これといふのも豐川さまへ、お願ひ申した御利益で、それで知れたでござんせう。

吉　ほんに、豐川さまはあらたかだ。

お園　それはさうとお前は、まだお晝飯をおあがりでなかつたね。

吉　つい忙しいので忘れてしまつた。此間に一膳かッ込みませう。

お園　生憎今日は何にもないが、お茶はいゝのがありますよ。

吉　そいつあ何より有難い。どれ、かつ込んで來ませうか。

ト合方にて吉は奥へはひる。跡にお園思入あつて、

お園　六三さんはどうなさんしたか、半月餘り便りもなく、お家の首尾が悪いか知らぬ。聞けば取られた紙入になくてはならぬ書附が入れてあつたを失つて、親御さまへ言譯がないと云ふてゞござんしたが、其お苦しみを掛けるのも元はと云へばわたしが麁相、濟まぬことをしたゆゑに、湯屋から跡つて兄さんに譯を話して其品を、尋ねて貰へど今日までも、行方の知れぬ紙入が、思ひがけなく知れたれど、其書附がないゆゑに、今詮議に行かしやんしたが、どうぞあつてくれゝばよいが、それがなければ六三さんに、濟まぬ事でござんすなあ。

ト お園涙を拭ふ、やはり端唄にて花道より前幕の六三郎、着流し草履下駄にて出來り、花道にて、

六三　今更言つても仕方がないが、日外とられた紙入の中にあつた貸金證書、此間まである積りで隱して居たが貸先が、夜逃をして行方知れず、あれがなければ無證據ゆゑ、義理ある親仁に三百兩損を掛けねばならぬ仕儀、殊には實のお袋が中へ這入つて其の迷惑、なまじ小言をいはぬだけのめ〳〵家にも居られぬ此身、死なうと覺悟を極めたゆゑ、お園にちよつと餘所ながら暇乞をしようと思つて、爰まで出かけて來たけれど、逢はない方がましか知らぬ。

ト右の唄にて腕を組み、舞臺の方へ來て、また跡へ戻らうとする、是をお園見て、

お園　や、六三さんぢやござんせぬか。

六三　おゝ、お園か。

ト六三郎向うへ行かうとするをお園とらへて、

お園　どこへお出でなさんすのか、まあ〳〵爰へ來て下さ

りませ。
　トこれにて六三郎お園に連れられ舞臺へ來て、
此間から逢ひたうて、お待ち申して居りました、なぜ顏見せては下さんせぬ。
六三　わしも逢ひたく思つたが、此頃はやる風を引き五六日寐たゆゑに、それで此方へ來なんだのだ。
お園　いえ／＼さうぢやあござんすまい、大方どこぞに面白い所があつて此頃は、そこへ行かしやんすのでござんせう。
六三　そんな浮いたどころか、日外とられた埋草に、跡の月から心を入替へ、商法大事に精を出し風の直るを待ちかねて、儲け口で長崎へ急行に行かねばならぬゆゑ、久しく逢はれぬ言譯と、暇乞に今日來たのだ。
お園　さあ其長崎へお出でなさるも、日外とられし品々の其埋草とおつしやるゆゑ、お待ちなされて下さりませ。
六三　そりやまた何ゆゑ、留めるのぢや。
お園　日外とられし紙入の、思はず在所が知れました。
六三　え、あの紙入の在所が知れた。して／＼、それは何處から知れた。
お園　こつちの見世へいつも來る、紙屑屋が持つて來たゆゑ、今兒さんが賣先きへ、出所を聞きに參りました。
六三　して、紙入の賣主は。
お園　あの久保町の曲り角で、五郎七といふ牛鍋屋が、賣つたさうでござります。
　ト是れを聞き六三郎思入あつて、
六三　あの紙入の出所が知れゝば、こいつァうつかり死なれぬわえ。
お園　なに、死なれぬとは。
　ト思入、合方きつばりとなり
六三　さ、盜み取られし紙入の中にあつた證書といふは、三百兩の貸證文、湯屋の二階で失ひしと親仁の前へ言はれぬゆゑ、たゞお袋へ內證で話し、證文箱へ入れた積りで今日まで隱しておきたれど、その貸先が夜逃げして、願つて出るに貸方證書が、なければ出るにも出られず、義理ある中の親仁ゆゑお袋がそれを苦にして昨夜から、胸の痞にたつての苦しみ、側で見て居るわしが苦しさ、まだ部屋住みに商法も利を得ることのないおれが、三百兩の貸證文に損をかけ、產みの恩あるお袋に苦勞を掛ける身の不孝、濟まぬことだと思ひ詰め、死ぬる覺悟で長崎へ行くと言つたは餘所ながら暇乞をしに來たのだ。

ト お園、これを聞いて六三郎に縋り

お園　さういふ事ならなぜわたしに、話しをしては下さんせぬ、親御さんに濟まぬというてお前が死ぬる其覺悟も、元の起りはわたしゆゑ、お前が死ぬなら共々にわたしも死にたうござんすが、其紙入の出所を今兄さんが詮議に行つたゆゑ、家へ歸つてござんすまで、どうぞ待つて下さんせいなあ。

六三　その手掛りが知れたとあれば、左吉殿が歸るまで死ぬのは思ひ止まるから、必ずともに案じやるな。

お園　そんなら兄さんの歸るまで、思ひとまつて下さんすか。えゝ有難うござんすわいなあ。

ト手を合せ拜む、六三郎思入あつて、

六三　思へばさつき一途に迫り、おぬしに逢つたら未練が出ようと、實は逢はずに死ぬところ。

お園　さういふ事があつたらば、尋ぬる證書が出たとても、

六三　是れがあつたら死ぬまいものと、親に苦勞を掛けるのみ。

お園　わたしを思うて餘所ながら、

六三　未練に逢ひに來たばかり、

お園　あやふいお命助かりしは、

六三　神の助けでありしよなあ。

ト兩人思入、奧より以前の吉出て、

吉　もしお園さん、奧に誰も居ないから、留守番をしておくんなせえ。

お園　えゝ、今行くわいなあ。

吉　これは若旦那、いらつしやいまし。

六三　久しくお前にも逢はなんだ。

吉　どうなされましたかと、此間からお噂を申してをりました。お園さん丁度兄貴が居ないから、若旦那をお連れなすつて。

お園　ほんに、裏口の番をしながら、

吉　隣り知らずのしつぽりと、

兩人　え。

吉　話しでもなさいまし。

六三　それでは、兄御の歸るまで。

お園　わたしと一緒にござんせいなあ。

ト端唄になり、お園六三郎の手を取り奧へ入る。吉跡を見送り、

吉　若旦那も此間までは、來る度毎に一圓づゝ口塞げに

下すつたので、程よく幕を切つてあげたが、今日此頃は不都合か一歩の渡りもくんなさらねえ、奢る平家は久しからずと、よく言ふことだが、成程沒落は早いものだ。

ト端唄になり、花道より秋津豊羽織着流し駒下駄、商人のこしらへにて出來り、花道にて、

豊　今日は十日で金比羅さまへ人の出るので賑かだ、おれも晝から參らうと思ふところへ寄合を、觸れて來たから行かねばならぬが、ちよつとたばねて行きたいものだ。

ト舞臺へ來り、

吉公親方は家か。

吉　これは旦那いらつしやいまし。今久保町まで參りました。

豊　金比羅さまへ行つたのか。

吉　いえ、據ないことで參りましたが、名代新造でよろしくば、私が遣りませうか。

豊　いやお前なら結構だが、急に寄合へ行くのだから、撫附けて貰はうか。

吉　そりやあ私の手にかゝるより、上分別でござります。

豊　どうして親方より、お前の方が心持は。

吉　よつぽど惡うござりませう。

豊　惡いどころか、實にいゝのさ。

吉　そんなに油をおつしやらずと、まあお急ぎならいらつしやいまし。

豊　それぢやあちよつと、撫附けてくんなせえ。

ト豊二重へ腰をかける、吉後へ立掛る、此とき花道の揚幕にて、

仙右　どうぞ御免なされて下さりませ。

三義　えゝやかましい、うしやあがれ。

ト是れをきつかけ床の淨瑠璃になり。

〽世の中は淵瀬と潜る飛鳥川、深き其身の罪科に盲目となりし仙右衞門、杖と頼みし子に別れ、足許わるくとぼとぼと、突當りたる生酔に、詫びをなせども聞き入れず。

ト此うち花道より前幕の仙右衞門、亂れし鬘そぼろなるこしらへ、胸へ「俄目くら」といふ札を掛け、杖と鼻緒の切れし下駄を片々持ち、以前の三五郎義七生酔の思入にて、仙右衞門を引摺りながら出來り、花道にて、

三五　これ、此廣い往來中を、何でうぬァ突當りやあがつた。

仙右　御覽の通り俄目くらで感が惡うござりますから、つい突當りましてござりまする。

義七　たゞ突當つたばかりなら、文句を言はず通して遣るが、厭といふほど足を踏んで、おれが方から突當つたやうに不理窟を言やあがるから、毆りつけにやあ腹がいねえ。

三五　御免なせえと手を突いて、うぬが方からあやまりやあ、盲目を相手にしやあしねえわ、いけ強情をぬかすから、了簡がならねえのだ。

義七　盲目くらゐ根性の、曲つた者はありやあしねえ。それだから、目が潰れたのだ。

仙右　そりやあ皆さんがおつしやらずとも、斯うして兩眼潰れましたも、みんな私の心立てが惡いからだとあきらめまして、假令途中で打たれても、ぢつと辛抱してをります。定めてお腹も立ちませうが、どうか御勘辨なされて下さりませ。

三五　心立てが惡くつて、目が潰れたとあるからは、どうでろくな奴ぢやァあるめえ。

義七　天道さまの名代に毆つてやるから、

兩人　うしやあがれ。

〽詫びるも聞かず兩人が、引摺り來り蹴倒せば、涙にまろぶを兩人が、見るに忍びず囁けば、

ト此うち兩人仙右衞門を引摺り、舞臺へ來り撲りつけて酷く蹴倒す、仙右衞門悔しいといふ思入にて涙ながらに手を合せ詫びる、豐これを見て不便だといふ思入あつて吉に囁く、吉門口へ出て兩人を留め、

吉　コウ〳〵、どんな惡い事をしたか知らねえが、何しろ相手は盲目だ、いゝ加減にしなさらねえか。

三五　よく見や、降りさうもねえ天氣だが、とんだ生利が降つて來たな。

義七　さうよ、いゝ加減に仕ようとどうしようと、人の指圖を受けるものか。

三五　餘計な口を利きなさんな。

吉　コウおめえ方は、二合半か葛西の若い衆か知らねえが、此東京のものなら、盲目を相手に喧嘩はしねえ、天から降つた生利なおれの云ふこと聞けばよし、聞かれなけりやあ仕方がねえ、お巡り方をお頼み申して、お上の御苦勞に掛けるから、屯へ一緒に歩びなせえ。

三五　おゝ何所でも裁判所でも、どこへでも行きやせう。
吉　さあ、行くならおれと一緒に來い。
三五　行かなくツてどうするものだ。
ト三五郎ふる／＼顫へながら歩むを義七留めて、
義七　これ／＼三五郎、暴りかすみのねえこちとら、どこへ行くのも怖くはねえが、暇ツつうやしだ、よしにしろ。
三五　生利兄いが行けといふから、行くところまで行かにやあならねえ。
義七　これさ、いゝかげんに野暮を云へ、手めえやおれが行つた日にやあ。何も怖いことはねえが、今もいふ暇ツつうやしだ、今日は負けて歸つてやれ。
三五　外の奴が留めるならどんな事でも歸らねえが、さつきも布手の世話になつた、手前の詞は背かれねえから、今日は負けて歸つてやらう。
義七　それぢやあおれが詞を立て、今日は手めえ歸つてくれるか。
三五　然しこの儘歸るのは、癪に障つてこてえられねえ。
〽またも盲目を蹴倒せば、
ト三五郎仙右衛門を蹴倒す、仙右衛門どうと倒れる。

吉　えゝ、酷いことをしやあがるな。
三五　したらどうする。
吉　どうするものか力みやあがると、樫の棒を背負はせてやるぞ。
三五　おゝ面白い、背負はされよう。
〽屯と聞いて身の罪に、口と心の裏表、ふる／＼もので歸り行く。
ト三五郎ふるへながら力むを、義七是れを留め、捨ぜりふにて、息込む三五郎を押へながら、兩人花道へはいる。
〽跡に盲目は顔をあげ、
ト仙右衛門顔をあげ、思入あつて、
仙右　どなたさまでござりますか、危い所をお助け下され、何とお禮を申さうやら、有難うござります。
豊　如何に生酔だといひながら、目の見えねえお前を捉へ、酷いことをしやあがつたが、何ぞ遺恨でもありやあしねえか。
仙右　私も若い時分には、負けぬ氣性でござりましたから、仰しやる通り喧嘩でもした奴かも知れませぬ。
ト仙右衛門の足へ血糊の附いてゐるを見て、

吉　おゝ、おめえ、足から血が出るぜ。
仙右　ぴり〳〵すると思ひましたが、それでは膝をすりむきましたか。
豐　血が止まらずば、爰にいゝ血止めがあるから上げませう。
〽情も厚き紙入より、血止めの藥取り出し、思はず盲目の顏を見て、
ト豐紙入より藥包を出し、仙右衛門に遣らうとして、
や、こなたは。
トびつくり思入。
仙右　え。
豐　はて、思ひがけない其の姿。
吉　旦那は、お近附きでござりまするか。
豐　いや、近附きといふ譯でもないが。
ト豐よろしく思入、仙右衛門思入あつて、
仙右　さういふお聲は、私も承はつたやうでござりまする。
〽いふ顏見れば面やつれ、髮も亂れて古への、姿あらぬを不便に思ひ、

ト仙右衛門件の血止めを足へ附ける、吉古手拭で結へてやる。
豐　してお前は達者な時分、何生業をしなすつた。
仙右　はい、私は舂米屋を年來いたしてをりました。
吉　米を舂くのは毒だといふが、脾胃を揉んで其やうに、目が潰れなすつたのか。
仙右　いえ、さういふ譯でもござりませぬ。
豐　何しろ中年で、目が潰れては困りなさらう、定めてお前のお上さんや、子供衆があるだらうな。
仙右　はい、女房もござりますれば、悴も一人ござりまする。
吉　爰においでなさる旦那は、お慈悲深い旦那だから、品によつたら御助力を、お願ひ申して上げようから、どういふ譯で目が潰れたのか、譯を話して聞かせなせえ。
仙右　えゝ有難うござります、御親切なお詞に、包まずお話し申しまする。不圖風眼を煩つて、俄に兩眼潰れましたも、みんな御罰でござりまする。
豐　兩眼俄に潰れるほどな、罪を受けたと云ひなさるが、どんな事をしなすつた。
吉　金比羅さまへ斷つた酒を、破つて罰を受けなすつた

か。

〽問はれて浮む涙を拭ひ、

ト床の合方になり、仙右衛門思入あつて、

仙右　斯様に兩眼潰れましたも、年來いたす米屋の科、上より渡る一升の枡へ一升はからねばならぬ稼業を手の先きで、素人衆には見えませぬが、一升の米を九合五勺、枡目を盜むはかり方、それが勝れて上手ゆゑ十五の年から此年まで、枡目を盜んだ其米は何萬石だか知れませぬ。遂には天の御罰を蒙むり、再び米の量られぬ盲目となりし身の罪科、米屋ばかりぢやあござりませぬ、酒屋油屋一切の枡を扱ふ生業は、正路にせねばなりませぬ。枡目を盜めば末々は、斯様になると私が世界の人のよき手本、今更後悔いたしまする、曲つた事は出來ませぬ。

〽先非を悔んで身の耻を、明す赤米仙右衛門、聞くも哀れに問ひかへし、

ト仙右衛門先非を悔む思入、豊思入あつて、

豊　枡目を盜んだ其罰と、氣の附いたのはお前の仕合せ、今にその目も直らうから、氣長に療治をしなさるがよい。して、其目の潰れたのは、何時頃からのことであつた。

仙右　はい、潰れましたは五つ月跡から、まだ半年にはなりませぬが、年來たゝまる借金に身代限りをいたしまして、小松川の女房の里に二月餘りをりましたが、何の中でも二人の厄介、目には見えねど詞の樣子邪魔になるのが知れますゆゑ、僅な金を借りまして、知邊を使つて新網の裏家を借りてをりまする、力と思ふ其金も二兩に足らねば使ひなくし、其日に困つて女房は附木やたわしを賣り歩き、また私は若い時から按摩が好きで揉んで貰つた、其手附きを眞似まして、上下揉んで百文と呼んで歩けど今の世は直は高くとも良きもので、なければ買はぬことなれば。

〽鑿もかれ〳〵夜更まで、呼び歩いてもたゞ一軒、按摩さんよと呼ぶ人もなく、暮し兼ねるを誰が言つたか、戸長さまが救育所へ願つてやるとおつしやれど、どうかなしたら取附かうかと、お禮を申してお願ひ申さず、斯うして毎日出歩きまするが、まだ今日などは朝からして、百のお錢も取りませぬ。

〽胸の苦勞に兎や角と、とぼつく足に躓きて、今のやうな亂暴者に、蹴たり踏んだりされまするも、枡目を盜んだ罪滅し、

今となつてはつく〴〵と、若い時から非道した、此身の悪事を後悔なして、親が死んでも涙の出ぬ、情を知らぬ私が、日には幾度か身を悔み、泣かぬ日とてはござりませぬ。

〽見えぬ其目に聲をあげ、人目を耻ぢず泣き伏せば、貰ひ涙に下劑が、

ト仙右衞門よろしく思入あつて、汚なき手拭を額に當て泣伏す、此うち豊ぢつと思入、吉涙をこすりながら仙右衞門の脊中を擦り、

吉　おゝ尤もだ〳〵、嘸おめえ悲しからう、おれが親仁も貧乏ゆゑ餓鬼の折から苦勞もしたが、おめえ程の難儀をしねえが、かういふ身分になつたらばと思ひ過しにさつきから、貰ひ泣きに泣いて居た。もし旦那、可哀さうなことぢやあござりませぬか。

豊　むゝ、聞けば聞くほど哀れな話し、お前も今の了簡が、早く出たならそれ程に、おちぶれることもあるまいが、今更いつても返らぬこと。是れから頼みは子供の運だが、一人あると言ひなすつた其子は何處ぞへやんなすつたか。

仙右　これは私と違ひまして、利口な生れでござりますゆゑ、女房が好んで學校所へお願ひ申しておきましたが、人に勝れて讀めるので、懇意なものが口入で、北海道へおいでなさるかりたくとかかいたくとか申すお役の官員さまへ、其身の出世になることゝ承つて遣りましたが、身代限りをせぬ前ゆゑ、五つ月越しになりますが何の便りもござんせぬは、もし難船でもいたしまして、遠い國へ吹き流されたか、但しは鯨の餌食にでもなつた事やら知れませねど、斯うして存へをりますも、實は悴が安否をば今日か明日かと待つて居ります、今にも悴が死んだといふ便りがあれば何樂しみ、直きに身でも投げまするか首でも縊つて死ぬ覺悟、生きて居る氣はござりませぬ。

豊　それは一途な狹い了簡、賴みに思ふ子に別れ、何樂しみもないゆゑに死なうといふは無分別、お前が死ねば連合も亭主に別れ子に別れ、何で生きて居るものだ共に死ぬは知れたこと、斯かる開化の世の中に愚痴な事を云ふやうだが、二人の親がとも〴〵に命を捨てたら死んだ子が、冥土で罪を重ねるとも決して菩提にはならぬから、必ず死ぬなどゝいふ惡い心を出しなさんな。

ト此うち紙入より十圓札を出し紙に包み、

これは少しばかりだが、お前に合力しますから、氣を取り直して長生きするやら、生業大事に精出しなさい。吉公、これを進ぜて下せえ。

ト札の包を出す、吉取つて、

吉　それ、お慈悲深い旦那から、御合力を下すつた。おめえには見えめえが、下すつたのは十圓札だよ。

ヘ手渡しなせば探り見て、仙右衛門は打ち驚き、

ト仙右衛門札を受取り探り見て、

仙右　すりや十圓下さりますとか、え丶有難うござります。

ト札を戴き、

然し見ず知らずの旦那さまに、十圓といふ此お金を、お貰ひ申しては濟みませぬ。

豊　其遠慮には及ばない、まんざらわたしもお前をば、見ず知らずといふではなし。

仙右　それではあなたは、私を。

豊　いやついに逢ふたことはないが、以前に若る不仕合せ、盲目となりしが氣の毒ゆゑ、お前に進ぜる其十圓、所詮それでは足りまいから、また其うちも合力しませう、必ず死なうなどゝいふ、無分別を出しなさんな。

仙右　有難うござりまする、見ず知らずの私に十圓といふ此お金を下さりまする思召し、何とお禮を申さうか、かやうに世にはお慈悲深い、お方もあるに私などは、若い時から浮々と其日を徒に送りました報いで斯かる不仕合せ、せめて悴が達者にて、此結構な世の中の人にいたして私が、見えぬ目ながらももう一度、世界が見たうござります。

ヘ見えぬながらも這ひ上り、四邊見廻す心根を、思ひ遣りて打ちうなづき、

ト仙右衛門目を明きたき思入、豊不便なといふ思入あつて、

豊　よく世の譬にもいふことだが、人は七轉び八起きといつて、一生涯の其うちには何不自由のない身でも零落するが、丁度わしが知つて居る若い人だが、元舊幕の直參で家禄を相應に取つて居たれど、若氣の至りに其身の放埓遂には、家も零落なし、たつた一人の母をさへ育み兼ねし困窮に、賊心生じて道ならぬ人の物を盗まんと、さる商家へ忍び入りしが、不圖せし事より改心なし、是れまで母に苦勞を掛け、道に缺けたる身の行ひ、濟まざることゝ氣が附けば、天の惠みで測らずも、舊領分の百

姓より三百圓の貢を得、それを元手に商法を開けば多分の利分を得、今は此やうな身の上、いやなに、丁度わしと同じやうな身分になつた人があるから、こなたも心を改めたら、天の惠みで助けを得、元の身分になられよう。必ず愚痴な心を持たず、末の榮えを願はつしやい。

仙右　えゝ、有難うござりまする。

〽厚き惠みを伏し拜み、嬉し涙にくれ近く、塒へかへる鳥さへも、夫の噂に氣遣はしく、おむつはとつかは走り來て、

ト仙右衞門は豊を伏し拜む、吉捨ぜりふにて豊の髪を撫附ける。此うち花道よりおむつ切繼窶し装にて附木と棕梠だわしへ紐を通し、是れを提げ足早に出來り、花道へ留り、

むつ　今四つ辻で噂を聞けば、俄盲目が生酔にぶたれて居たといつたは若し、こちの人ではあるまいかと、案じるせゐか胸騒ぎ、早う逢ひたいものぢやなあ。

〽心忙しく來かける道、それと見るより走り寄り、

トおむつ舞臺へ來て仙右衞門を見て、

むゝ、こちの人、爰に居なんしたか。

ト縋り寄る。

仙右　おゝ、おむつか、よく來てくれた。今日はとんだ目に逢うた。

むつ　それでは噂に違ひなく、お前打たれなさんしたか。

仙右　惡い奴に出會し、蹴たり踏んだりされたわいの。

むつ　そりやまあ危いことでござんしたが、どこぞ怪我でもしなさんせぬか。

仙右　膝を少し擦つたばかり、もつと怪我をするところ、よいお方が留めて下され、剩さへ、是れ見やれ、俄盲目に不便だとて、十圓札を下すつた。

ト仙右衞門以前の札を見せる、おむつびつくりなし、

むつ　え、十圓お前に下すつたとは、そりや何處のお方でござりまする。

仙右　どこのお方か知らねども、そこにおいでなさるから、ようお禮を申してくりやれ。

むつ　あい／＼、只今お金を下さりましたは、どなた樣でござります。

吉　爰においでなさる旦那樣だ。

むつ　左樣でござりまするか。

〽小腰を屈め側へ寄り、思はず見合す顔と顔。

ト辭儀をしながら、二重の前へ來て顔を上げ、豊が見

てびつくりなし、
や、あなたは。
豊　あ、これ。
〽あたりを憚り目で押へ、
些少なれども先達て、受けたる恩を謝す金子、何にも言はず納めて下さい。
むつ　えゝ有難うござりまする。して只今では、あなたのお宅は。
豊　南傳馬町二丁目で、秋津屋といふ紺暖簾の掛つて居るがわしが宅、然し見世には手代もあれば裏からこつそり尋ねてござれ、十や二十はいつ何時でも、二人へ貢いでやりませう。
むつ　返す〲も有難い、旦那さまの思召し、お禮の申しやうがござりませぬ。
トおむつうれし泣きに泣く。時の鐘。
豊　思はぬことで寄合へ、行くのが大きに遅くなつた。吉公、髪はもうよからうか。
吉　はい、よろしうござります。また明日いらつしやいまし。
豊　おゝ、明日剃つて貰はう。それぢやあわたしは用があるから。
仙右　左樣なら旦那樣、もおう歸りでござりますか。
むつ　お名殘り惜しうござりまする。
豊　是れぎり逢はれぬといふ譯ではなし、いつでも家へ尋ねて來なせえ。
むつ　はい、お尋ね申しまするでござりまする。
豊　兎角時候が惡いから、其目を大事にしなせえよ。
仙右　有難うござりまする。
トみすぼらしげなる裝を豊見て、
豊　あ、思へば不便な、
兩人　え。
豊　いや、降らぬうちに行きませう。
〽みすぼらしげな兩人が、姿に浮む涙をば、砂に紛らし立歸る。
ト唄により、豊二人を見てホロリと思入あつて、砂の目にはひりし思入にて、指でこすりながら花道へはひる、仙右衛門おむつは後を拜み居る。
吉　お前方の三の切で、こつちも思はず涙をこぼして、目の縁が腫れたやうだ。どれ奥で顔でも洗つて來よう。
〽暖簾かゝげて入りにけり、跡に二人は吐息をつき、

ト吉奥へはひる。後に仙右衛門おむつ思入あつて、

仙右　これおむつ、おぬしが詞の様子では、今の旦那を知つて居るか。

むつ　あい知つてる段ではござんせぬ、わたしがかゝさんがお乳を上げた、秋津さまの若旦那。

仙右　おゝそれぢやあ、いつぞやおれの家へ、泥坊に來た若旦那か。

むつ　あこれ、滅多なことを。

トおむつは髪結床を窺ふを、仙右衛門どうと下に居る、床の合方になり、

仙右　あゝ面目ない〳〵、いつぞや家へ泥つくにござつた時に引捉へて、縄を掛けて突出すと無慈悲なことを言つたのみか、縁に繋がる御主人へ拳を上げた仙右衛門、憎い奴とも思召さず今日下されし此十両、この目が見えた事ならば、何でお貰ひ申されうか、早く此場を逃げようもの、あゝ面目ない面目ない。

〽身をかきむしりひれ伏して、面目涙に暮れければ、

ト仙右衛門よろしく思入、おむつ介抱しながら、

むつ　おゝ尤もでござんすが、あの時わたしと仙太郎が少しなれども若旦那へ、お貢ぎ申した其禮ぢやと、おつしやつての事なれば、今お貰ひ申したとて、済まぬことがござんせう。

仙右　さあ、おぬしと伜はよからうが、おれはあの時嘸因業な無慈悲なことを言つたゞけ今となつては面目ない、嘸お心のその内では、盲目になつたはよい氣味と、思召してござりませう。

むつ　何でそんなお心が若旦那にありませう、露ほどそれがあるならば、お前にお金を下さりませうか。

仙右　成程いへばそんなものぢやが、それに違ひはあるまいか。

むつ　そんな事は決してないから、必ずきな〳〵思はしやんすな。わたしやそれより合點の行かぬは、其日に困りし若旦那が、僅かのうちに今の様な、どうして立派な御身分に、おなりなされた事であらう。

仙右　おゝ其事なら今の先き、人に擬へてお話しあつたが、今々思へばあなたのこと、元御領地の百姓衆が三百両の貢ぎをなし、それを元手に商法を開いて今は一廉の身分になつたとおつしやつたはあなたの事に違ひない、一度零落なされても其お心が正直ゆゑ、再びさういふお身にもなれど、此仙右衛門は不正直、假令心を改めても

どう人らしくなられよう、それを思ふといつそのこと、早く死んでしまひたい。

むつ　え丶めつさうな事言はしやんせ、お前に死なれてなるものか。かういふしがない暮しをしても、生きて居たいは蝦夷地へ行つたあの忰。さあ、其忰の事に附いて、今日聞いた話しがござんす。

〽忰と聞いて氣を取直し、

仙右　そりや、よい便りでもあつたのか。

むつ　いえ／＼さうぢやござんせぬが、今日愛宕下のお得意先で、忰が事を言ふたれば、それは慥に世話人が心よからぬものであらう、御政事厳しい掟を背き、此頃異國へよく金で子を賣るものがあるとのお話し、そんな事もあるまいと思うて居れど人心、ひよつと牛屋の五郎七が慾に迷つて仙太郎を、異國へ賣りはせまいかいなあ。

〽語るを聞いて仙右衛門、子ゆゑに迷ふ心より、一途にそれと思ひ詰め、

ト仙右衛門さてはといふ思入あつて、

仙右　おゝそれにて思ひ當りしは、此頃あいつの都合のよさ、何でも道に間違つた非道な金に違ひない、それに此節五郎七が癇が起つて舌がつれ、口の利けぬは惡事の報い、こりや捨てはおかれぬぞよ。

ト兩人思入、此時髪結床の内にて、吉これを聞き居て、

吉　今爰でちよつと聞いたが、そんならおめえの息子といふは、世話をする人があつて、遠い國へやんなすつたのか。

むつ　はい、久保町の牛肉屋の五郎七さんがお世話にて、北海道へやりましたわいなあ。

吉　え。

トびつくりして、

そんなら久保町の牛肉屋が、おめえの息子の口入で、北海道へ遣んなすつたとか、そいつあとんだ事をしなすつたね。

ト是れな聞き兩人聞き耳を立て、

仙右　もし／＼、とんだ事とおつしやいますのは、どういふ譯でござります。

吉　さあ、どういふの斯ういふのと、その五郎七といふ奴が今日自分の見世先きで、通り掛りの紙屑屋に、泥坊ものゝ紙入れを賣つたとこからもくが割れ、其代物一件でさつき家の親方が屑屋を連れて調べに行つたが、お前

方も先の相手が牛肉屋ぢやあ安心ならねえ、こいつア捨てちやあおかれねえ。

仙右　え、何とおつしやりまする、そんならあの五郎七が盗み物の紙入を紙屑屋に賣りましたとか、さういふ心の五郎七なら、擔を賣つたに違ひない。是れから行つて彼奴めを、しつかり詮議をせねばならねえ。

むつ　あゝもし／＼、是れから詮議にござんすなら、わたしも一緒に行きませう。

仙右　いや／＼、女が行つては面倒ゆゑ、そちは家で待つて居やれ。

むつ　それぢやといふて目の悪い、お前一人を遣られませうか。

仙右　いや、目の悪いがおれが徳、喧嘩をせずに談判なしいよ／＼それに極まらば直に屯へ訴へて、彼奴に繩を掛けてくれる。

吉　何にしろ盲目一人で、嘸困るだらう。

ト吉空を見て、

どうか今夜はばれさうだ、ばれねえうちに早く行きねえ。

仙右　ばれるといふは顯れ口。

むつ　よい辻占でござんすぞえ。

仙右　その辻占を頼りにして。

トつか／＼と行きかけ、看板へ突當る。

兩人　あゝもし、あぶない。

ト抱き留めるおむつを振拂つて、

仙右　杖さへあれば、

兩人　怪我せぬやうに、

仙右　なあに、大丈夫だ。

〽おゝ合點と夕まぐれ、杖を力に、

ト時の鐘、仙右衞門杖を突きばた／＼にて花道へ行く、おむつは氣遣ふ思入、吉は看板を片附ける。此見得三重時の鐘の送りにて、仙右衞門花道へはひる。これと一時に道具廻る。

（元の牛鍋屋の場）――本舞臺元の牛鍋屋の道具、平舞臺上手に髪結左吉住ひ、眞中に五郎七、下手にお咲住ひ、門口の外に權兵衞窺ひ居る。此見得道具中程より四ツ竹節にて道具留る。と右の合方にてお咲盆へ茶碗を載せ、

お咲　もし、お茶を一つお上りなさいまし。

ト左吉知らぬ顔をして居るゆゑ、

もし、お茶を一つお上りなさいまし。
ト左吉の前へ出す。
左吉　お構ひなすつて下さいますな。
ト思入あつて、
左様ならお前さんが、五郎七さんでございまするか、わたくしは比丘尼橋の、髮結左吉といふものでございます。
ト五郎七うなづいて辭儀をする。
お咲　何の御用でございますか、こちの人は癇のせゐで舌がつッて此頃は、少しも口が利かれませぬから、私へおつしやつて下さりませ。
ト佐吉知らぬ顏をして居るゆゑ、
もし、何の御用でございますか、私へおつしやつて下さりませ。
左吉　おめえ何か言つてるやうだが、わつちやあ逆上性で耳が遠いから、大きな聲をしてくんなせえ。
ト左吉大きな聲をする、お咲びつくりして、
お咲　えゝも、びつくりするわいなあ。
左吉　おい屑屋さん、おめえこつちへはひつてくんねえ。
權兵　はい、御免なさいまし。

ト權兵衛内へはひる五郎七見て、こつちへ來いといふ。
お咲　おゝ、お前はさつきの屑屋さん。
權兵　もし、屑屋さんもねえもんだ、とんだ物を賣りなすつた。よくも、わたしに難儀を掛けなすつたね。
お咲　お前に難儀を掛けたとは。
權兵　さつき五郎七さんが請人で、わたしに賣つた紙入は、ありやあ盜み物でございます。
お咲　えゝ。
ト五郎七ぎつくりせし思入。
左吉　もし五郎七さん、此紙入はおめえの所で、さつき屑屋に賣つたさうだが、此紙入があるからは、此蟇口に入れてあつた三百圓の證文と、藤鎖りの金側時計が一緒にある筈だ、それをお貰ひ申したい。
〽味な詞に五郎七も、扨は主人の銀次郎が盜みし品と覺れども、素知らぬ體に見向きもせず。
ト此うち五郎七主人が盜みしに違ひないといふ思入、お咲その品はと言ひたきこなしを、五郎七留める、左吉思入あつて、
默つて居るのは知らねえと、しらばッくれる氣だらう

が、此紙入は新開町の湯屋の二階へ雇はれたおれが妹が
お客から、預つたのを盗まれて、お張り出しは云ふに及
ばず、新聞にさへ出て居る品、此紙入を證據として恐れ
ながらと云ふ日にやあ、客の名前も出ることゆゑ、內證
でおれが今日來たが、其證文と時計をば返してくれゝば
穩便に、こつちも愛敬、生業ゆゑ濟ます心で出て來たの
だ。さあ、殘りの品を渡して下せえ。
〽いふに五郎七頭を振り、口は利かねど覺えなき、仕方
に左吉はせき立ちて、
ト五郎七是れを聞き、覺えないといふ思入。
もし屑屋さん、今おめえの見る通りだ、首を振つて五郎
七さんが、知らねえといふからは、買つたといふのはお
前の嘘か。
ト權兵衛首を振る、
何だ、おめえまでが首を振つて、嘘でなけりやあ言はし
て下せえ。
權兵　あゝ言はなくツてどうするものか、屑屋仲間へ嚴し
い御法度。
ト懷から鑑札を出し、
それ見なせえ、上より此通り御鑑札が下つて、生業して
居るからは嘘はつかねえ。早く言つて下せえ、おめえは
毫毛でもしなすつたか。
〽疊を叩いて屑買が、詰寄る中を押し隔て、
ト權兵衛疊を叩いていふ、お咲これを留め、
お咲　あ、これお前も知つての通り、こちの人は癇の病
で、口が少しも利けぬゆゑ、お前のやうに疊みかけては、
猶々癇が起るばかり、まあ靜かに言うて下さんせ。
權兵　いや賣つたと言はねえうちは、おれの目串が拔けね
えから、靜かにしちやあ居られねえ。
〽口をば利かねど五郎七は聞える耳に持ちまへの、癇を
怺へる身の苦しさ、左吉は人の言ふことも耳に聞えず氣
をいらち、
ト五郎七は癇に障るを怺へる思入、左吉は始終聞えぬ
思入にて掛り、
左吉　これ〲屑屋さん、何でおめえは默つて居るのだ。
權兵　何で默つて居るものか、これ程口を利いて居るの
に。
左吉　おめえのやうに口ばかり、動かして居ちやあ分らね
え、しつかり物を言ひねえな。
權兵　しつかり物は言つて居るが、おめえが聾で聞えねえ

のだ
　ト左吉ぢれ込み、
左吉　えゝ、もつと大きな聲を出しねえ。
權兵　何だ、もつと大きな聲を出せ、五節句はお廢止だ。
〽いふも聞えずぢれ込みて、
　ト左吉聞えぬ思入あつて、
左吉　これ、今更貰つたの貰らねえのと、未練な事を言はねえで、殘りの品を出しなせえ。
　ト紙入を見て、
此紙入に入れてあつた三百圓の貸證文、あれがなけりやお取られた人が、命も捨てにやあならねえ譯だ、さうなる時には妹もともに命を捨てにやあならねえ、一人といはず二人の命、此紙入があるからは、おめえの知らねえ事はあるめえ、人の命の助かることだ、盗んだ品を出して下せえ。
　ト五郎七首を振る、
〽紙入取つて五郎七が、片頰打てば持前の、癇に怺へず立掛るを、
　ト左吉紙入で五郎七の頰を打つ。五郎七何をしやがると煙管を持つて片膝立てるを、お咲すがり留め、

お咲　あゝこれ、こちの人待ちなさんせ、こんな疑ひうけるのも、心良からぬ若旦那ゆゑ、是れまで種々の厄介掛け、まだ懲らないで此樣な、難儀をかけるはあんまりぢや、もう何もかも打明けて、お前が身晴れをしなさんせいなあ。おゝお前は口が利かれぬゆゑ、わたしが譯を言ひませう。
〽いふ女房を引留めて、十二の時から大恩をうけた御主人の血の餘り、よし此口が利けたとてそれがあらはに言はれうか、假令この身が疑ひ受け繩目に逢ふとて締め掛む、義理は捨てぬと言ひたさも、癇の病に口へ出ず、歯を喰ひしばるいぢらしさ。
　ト此うち五郎七お咲を留め、文句の模樣仕方にて切なき思入よろしくあつて、口が利けぬが悔しいと口へ指さしお咲をこづく、
お　ゝ尤もでござんす〳〵、嘸口が利きたうござんせう。
あゝいぢらしいことぢやなあ。
　トお咲せき込む五郎七の脊中をさする、權兵衛前へ出て、
權兵　いくら口が利きたくつても、五郎七さんは利けねえから、お前代りに言ひなせえ、さつき爰で紙入をわたし

に賣つたあの人は、どこの人だかそれが聞きてえ。

お咲　さあ、其名はどうも言はれぬわいなあ。

ト左吉はこれを構はず、五郎七に向ひ大きな聲で、

左吉　これ程おれが譯を言ふに、やつぱりおめえはしらを切るのか。

權兵　こつちでせりふを言つて居るに、野暮に大きな聲ぢやあねえか。

とお咲に向ひ、

さあ、言はねえと言つたとて。

トきつといふ。

左吉　それぢやあ二人を殺す氣か。

ト權兵衞せりふを言はうとして口を開いたまゝ留り、

權兵　また口を出すか困つた人だ、折角油が乘つて來ると、口を出すので氣が拔けらあ、さあ、言はねえと言つたとて。

左吉　おめえの口の利けねえのも。

權兵　おめえの口の利けねえのも、えゝ釣込まれてしまつた。

左吉　それも何かの、罰であらう。

權兵　それも何かの、また、釣込まれたか。

左吉　二人が命を助けたら、

權兵　出る所へ出たならば、

左吉　少しは報いで利けようぜ。

權兵　少しは報いで、えゝどつちが何うだか分らなくなつた。どうでもいゝからお上さん、早く言つてくんなせえ。

〽お咲が手を取り引寄せるを、五郎七見るより襟上取り緣より下へ蹴落せば、

ト權兵衞お咲の手を取り引寄せるを、五郎七見るより權兵衞を引寄せ、投げ退ける。

あいたゝゝ、何でおれを投げたのだ。

ト五郎七の傍へ來る、五郎七へ指で書いて見せる、權兵衞これを見て、

なんだ「主ある女の手を握れば、こなたは云はずと間男だ。」面白くもねえ、ちよつと手を握つたばかりで七兩二分、懲役一ケ年は眞平だ。

ト權兵衞後へ下る、左吉思入あつて、

左吉　これ屑屋さん、どうした。

權兵。どうしたどころか、御廐川岸で大南を喰つたのだ、もう〳〵わたしぢやあいけねえ。

ト權兵衞手を振つて見せる。左吉思入あつて、

左吉　こなたの力でいけねえけりやあ、是れからお前が腕づくで、利けねえ口を利かしてやらう。

〽片肌脱いで五郎七が、胸倉取るを振拂ひ、身構へなせだ詰寄つて、

ト左吉片肌ぬぐ、下は筒ッぽ、胸倉を取るを五郎七煙管を持ちきつと思入、是れにて左吉ぢつと下に居て、兩人氣味合の思入、誂への合方へ屋體囃子をかすめて冠せ、左吉件の紙入を出して、

これ此墓口の紙入より、しつかり悪事の口を閉ぢ、どんな詮議に逢はうとも口を開かねえ氣だらうが、急所を一番押されたら、開かねえ口も開かざあなるめえ、三百圓の借證文、この紙入が印紙より盗んだ慥な證據ゆゑ、反故にならねえ騒ぎ、巾着切りには出來過ぎた金側時計の鎖附、しかし直段は二百圓、慾に心は狂つたらうが時計は狂はぬ六時前、言譯くらき黄昏に、襟にかけたる鍵の手で、くさりの繩の掛らぬうち、盗んだ品をまき出しなせえ。

〽聞えぬ耳の高聲に、隣り憚る悪名も解くに解かれぬ二重帶、忠と義心に喰ひしばる心を察して女房が、

ト左吉きつと思入あつて、煙草を呑み居る、五郎七は隣りを憚る思入、お咲こなしあつて、

お咲　そんならお前はどうあつても、覺えないこちの人を、盗人だと言はしやんすか。

權兵　おゝ覺えがあらうがあるまいが、此の紙入が出たからは、おめえ方の目串は拔けねえ。

左吉　さあ、盗んだ品を出さねえか、えゝ、いけッぷてえ野郎だなあ。

〽猶も左吉が盗人と呼はる折から門口に、樣子窺ふ仙右衞門、さては盗みをするからは、我が子を賣りしに違ひはないと、一途に思ひ格子戸を明けて其儘内へ入り、

ト此以前よき程に下手より仙右衞門出來り、門口にて内の樣子を窺ひ、憎い奴だといふ思入あつて、門口を開け、

仙右　五郎七どのは、内でござるか。

ト下駄の儘内へはひる。

お咲　誰かと思つたら仙右衞門さん、ようお出でなさんしたなあ。

仙右　いや餘りよくも來ませぬが、五郎七どのはどこに居る。

〽探り廻れば手を取りて、

ト仙右衞門下駄をはいた儘あたりを探る、五郎七仙右衞門の手を取つて、額へ指さし爰に居るといふ思入あつて、あゝ見えぬかといふこなし、

お咲　五郎七どのは爰に居ますが、まあ履物を脱ぎなさんせいなあ。

ト是れにて仙右衞門下駄をふるひ落し、五郎七を探り見て、

仙右　おゝ五郎七どのか、早速わしが聞きたいは、いつぞやこなたの口入で、北海道へ遣つた仙太郎、あれは何處へ遣らしつた、其行先きが聞きたいのだ、早く言つて聞かして下され。

お咲　あゝもし、仙右衞門さん、こちの人は癇が起つて、口が少しも利けぬわいな。

仙右　その口の利けないのも、此間から聞いて居るが、そりやあ癇の病ぢやあない、惡い事をする報いだ。

〽そりや何ゆゑと五郎七が、言ひたい體を妻が見て、

ト五郎七思入よろしく。

お咲　もし仙右衞門さん、惡い事の報いとは。

仙右　さあ惡い報いと言つたのは、人の體を養ふ爲め、表に官許の幟を立て牛を商ふこなさんが、裏は大きな僞りで、人の子までを異國へ賣つた、こりやあみんな天の罰だ。さあ、わしが忰を何處へやつた、其先きを言はつしやい。

〽その行先きはと五郎七が、疊へ書くを妻が見て、

お咲　それ、仙太郎さんの行先きを、疊へ書いて居やしやんす、早う讀んで見やしやんせ。

仙右　えゝ、よいかげんにたわけを盡くせ、盲目に物が讀めるものかえ。

お咲　おゝほんにさうでござんした、それではわたしが讀んで上げませう。お前の息子の仙太郎どのは北海道の開拓へ、御出張なされる三春陸さまへ、測量のお弟子にお願ひ申しました。

〽いふをこなたは半分聞かず、

ト五郎七疊へ書くをお咲讀む、仙右衞門これを聞き、何を言ふといふ思入あつて、

仙右　えゝ、そりや噓だ〳〵、あれは餘所の子供と遊び、八ツの年から學校へ好んで行つたゞけあつて、人に勝つて覺えもよく物の理合も分るゆゑ、おれと違つて親孝行、北海道へ行く時もあちらへ附けば無事狀を、直ぐによこ

すと云つたものが五ッ月越しに音沙汰なし、不思議なことだと思つたが、便りをせぬも尤もだ、親切らしくわしを欺し、銭に目がくれ人の子を、異國へ賣つた人でなし、さういふ事とは知らぬゆゑ、おれは仕馴れぬ按摩となり、暗き浮世を送るのも、便りに思ふ仙太郎が出世するのを樂みに、待つ甲斐もないおのれが惡心、ようもようも人の子を、遠い異國へ賣りをつたな。えゝ、おのれはなあ／＼。

〽目くら探りに五郎七へ、むしやぶり附いて悔み泣き、

權兵　見るから哀れな俗按摩、目の不自由な人を欺し。

　ト左吉の耳へ口に寄せ、

此五郎七は泥坊ばかりか勾引しもするさうだ。

　ト大きくいふ、左吉思入あつて、

左吉　なに、勾引しをしたといふのか。

權兵　何と太え奴ぢやあねえか。

左吉　さういふ事があるからは、いよ／＼時計は五郎七がとめて居るに違えねえ、さあ三百兩の證文を、揃へておれに渡してしまへ。

仙右　人の物をわが物と、盜むほどの了簡では、勾引したに違ひない、さあおれが悴を返してくれ。

左吉　さあ盜んだ品を早く出せ。

　ト五郎七の胸倉を取つて引附け、

いやさ、これでもわりやあ出さねえか。

仙右　さあ、悴を何處へ遣りをつた。

　ト仙右衛門下から五郎七の胸へ取附き、

左吉　さあ、きり／＼と出さねえか。

仙右　さあ其行先きを吐かさぬか。

〽右と左に兩人が、さあ／＼／＼と引据ゑるを、まあ／＼待つてと女房が、留めるを邪魔と支へる曆屋、お主大事と五郎七がぢつと怺ゆる辛抱も、流石男にたまり兼ね、もろてを拂つて突き退ければ、

　ト此うち左吉は立身にて、五郎七の胸倉を取り引立てる、仙右衛門は五郎七の足に縋り、三人引張りの見得、五郎七ぢつと辛抱して切なき思入、お咲側へ寄らうとするを權兵衛引附ける。此立廻りよろしくあつて、トド怺へかねし思入あつて、左吉の手を拂ひ退けて突廻し、足に縋る仙右衛門を振拂ふ、是れにて仙右衛門後へ引くり返る。

おのれ盲目を投げをつたな。

〽起き上りしが途を失ひ、探り廻つて左吉が足を、しつ

かと取るを蹴倒され、

ト仙右衛門起上り、方角を違へ門口へ行つてぶツつかりどうとなり、這ひながら五郎七と心得左吉の足に取附くを、酷く蹴倒す。仙右衛門またむつとなり、

恨みはこつちにあるものを、ようも／＼目の見えぬ、おれを、二度まで蹴倒したな。えゝ口惜しい口惜しい。

〽涙ながらに恨み言、左吉は猶もいらだちて、

左吉　もう此上は四の五のと、論をするにやあ及ばねえ、うぬを是れから屯所へ、そびいて行つて仕埒を附ける。

權兵　それが何より近道だ。

左吉　野郎め、一緒にうしやあがれ。

〽屑屋諸共左右より、引立てかゝる其所へ、息をばかりに下剃が、此家を目がけ駈来り、

ト左吉權兵衛立掛り、五郎七を引立てにかゝる。ばたばたになり、花道より以前の吉出来り、門口より、

吉　これ親方、大變だ／＼。

ト内へはひりうろ／＼するを見て、

左吉　や、手めえは吉か、何しに來た。

吉　さあお関さんが書置を、家へおき居なくなつたゆゐ、方々捜したが知れねえのは、あの六三さんが連れ出したに違えねえ。

權兵　なに、妹御が逃げたといふのか。

吉　さあ逃げたのならいゝけれど、多分死にゝ行つたのだ。

權兵　そいつアとんだ事だなあ。

ト左吉聞えぬ思入にて、是れに構はず、

左吉　さあ、きり／＼とうしやあがれ。

吉　これ親方、そんな詮議どころぢやあねえ。お関さんが六三さんと、心中に行つたといふことよ。

〽書置取つて突き附ければ、

ト吉書置を出し開いて見せる、左吉見てびつくりなし、

左吉　やゝ、すりやお関には六三さんと。こりや、斯うしては居られぬわえ。

權兵　ひよつと死ぬまいものでもねえ。

左吉　ちつとも早く。

仙右　おれは屯へ注進するわ。

權兵　時計の盗賊、

吉　おのれ五郎七。

左吉　そんなら是れから、

仙右　少しも早く。

左吉　むゝ、さうだ。

ト尻端折つて駈け出し、飛ぶが如くに。

ト仙右衞門行かうとする、お園帯をつかまへ、是れにて仙右衞門引かるゝこなし、左吉はつか／＼と花道へ行く。權兵衞、吉、五郎七の手を取る、此見得三重にて引張りよろしく、

幕

三　幕　目

芝新網裏借家の場
新橋鐵道外圍の場
築地海岸浪除の場

(役名――盲人仙右衞門、天麩羅銀次、西洋床左吉、絹屋息子六三郎、下駄菊込はね吉、新網の家主杢右衞門、町人三人、牛鍋屋五郎七。左吉妹お園、仙右衞門女房おむつ、同悴仙太郎。)

(新網裏借家の場)――本舞臺一面の平舞臺、後へ下げて古びたる屋根附き、上の方一間折廻し切張りある古障子を建て、上手一間中仕切りのある押入戸棚、内に素麵箱の佛檀誂への位牌、此前瀨戸物の佛具を並べ、此脇破れたる鼠壁、上手一間板羽目にて見切り、いつもの所門口、揉療治といふ札を掛け、下の方路地口、向う惣雪陰にて見切り、板塀の前に井戸流しを取附け、總て芝新網裏借家の體。爰に前幕のおむつ襷前垂かけにて手拭を冠り、下駄をはき、井戸端にて米をとぎ居る。此見得四ツ竹の合方にて幕開く。とやはり右の合方にて、下手より家主杢右衞門、鼠返し當番つなぎの半纏、着流し駒下駄にて出來り。

杢右　あい、御免なせえ、仙右衞門どのは内かの。

ト門口を開け内へはひる。おむつこれを見て、米かし桶を持ち門口へ來り、

むつ　どなた樣かと思ひましたら、お家主さまでござりましたか、ようお出でなされました。

ト手拭襷を取り内へはひる。

杢右　見れば夜食炊きと見えて、忙しい樣子、必ずおれに

構はつしやるな。
ト上手に住ふ、おむつ汚なき煙草盆へ、竈の中の火を入れて出す。
むつ　生憎お茶がぬるうござりますから、お上げ申しませぬ。まあ一服お上りなされませ。
杢右　これさ、必ず構はつしやるなと言ふに。ときに、仙右衛門どのは内かな。
むつ　夜分遅くなりまするので、少し風氣でござりますゆゑ、二疊に臥せつてをりまする。
杢右　大分風が流行るさうだから、重らぬやうにするがよい。どうだちつとは療治がふえましたかな。
むつ　何を申すも俄盲目、習ひ覺えの按摩ゆゑ、いくら安く揉みましても、揉ませて下さるお方のないので、いたし方がござりませぬ。
杢右　いや何生業でも中年から、覺えたことはいかぬもので、幾ら仙右衛門どのが骨を折つても、療治のこつがまだ知れまい。さうして、こなたの商ひ物は。
むつ　お前さまのお勸めで附木やたわしを賣りまするが、世間に鬼はないもので、身の上話をいたしますると、可愛さうだとおつしやつて、よう買つて下さりまするので、思ひの外商ひをいたしましては歸りましたが、此間からのお日和ぐせで、晝から兎角雨勝ちゆゑ、少し歩いては歸りますのでまことに困りきりまする。
杢右　大方さうであらうと思ひ、今日は主人の仙右衛門どのに一理窟言ひに來ました。
むつ　そりやまあ、何のお腹立ちにて。
杢右　寐て居るなら、起して下せえ。
ト此うち上手障子屋體のうちにて、
仙右　何事か存じませぬが、只今それへ參りまする。
ト合方持つて障子屋體を開け、前幕の仙右衛門探りながら出て來るを、おむつ手を取り眞中へ住はせる。此うち杢右衛門は煙草を呑み居る、おむつ上手に杢右衛門が居ると知らせる、仙右衛門思入あつて、
これは〳〵、お家主さま、ようお出でなされました。
杢右　いや〳〵、ようは來ませぬ、今日は惡く來ました。
ト是れにて仙右衛門思入あつて、
仙右　只今あれにて承はりますれば、何かお腹立ちの事があつて、此仙右衛門に一理窟言ひにお出でなされたとやら、いやもう、俄盲目の私に心の附かぬこれなる女房、定めて御意に入らぬだらけでお腹立もござりませうが、

御縁あつて此お長屋へ越して參つた其日から、一方ならぬ御厚情、縁者に勝つたお世話にあづかり、あゝ捨てる神あれば助ける神と、夜分來るにもあなたのお宅へ足を向けたことはござりませぬ。如何なることとの不調法で、お腹立ちか存じませぬが、俄盲目の私ゆゑ、どうぞ御了簡なされて下さりませ。

ト仙右衛門手を合せ拜む、此うちおむつは釜へ米を入れ、竈の下を焚いて居て、此時前へ出て、

むつ　仙右衛門も此通り、お詫びを申してをりますから、お腹立ちの御機嫌を、お直しなされて下さりませ。

杢右　いや／＼、假令何と詫びようとて一理窟並べた上、返す物を返さぬうちは、腹の蟲が承知せぬ。

仙右　して、お腹立ちの其譯は。

むつ　どういふ譯でござりまする。

ト此れにて杢右衛門懐より店賃の通ひと一圓札を出し、

杢右　いや譯といふは外でもねえ、何でさつきわしが留守へ三月滯つた店賃を、耳を揃へて持つて來たのだ。

兩人　何とおつしやりまする。

杢右　さあ今更いふにも及ばぬが、わしが店へこなた衆が、越して來たとき樣子を聞けば、以前は隨分相應な暮米屋であつたさうだが、長の病氣や不仕合せで按摩渡世をすると聞けど、揉み習ひか呼ぶ人なく、其日に困る樣子ゆゑ、先達も戸長へ話して救養所へ願つてやらうと、二三度おれが勸めたが、もう少ししたらどうか暮しが附きませうと、こなたが云ふゆゑ其儘に、内儀へ少しの合力して、附木やたわしを賣らせるが、此間から日和ぐせで思ふやうに療治もなく、又商ひにも出られぬに、なけなしな物を質においたか、但しは高利でも借りたのか、どの道ひどい算段で、こしらへた金であらうのに、何でこんなに義理ばつて、三月ぶりの店賃を、一度に持つて來さしつたのだ。それがおれの氣に喰はぬ、さあ一月ぶり受取りにして持つて來たから二月分は、そつちへ取つておいて貰はう。

ト店賃の通ひと一圓札を仙右衛門へ突附ける、此うちおむつは竈の下を焚いて居て、これを聞き思入あつて、前へ出て、

むつ　もしこちの人、何事のお腹立ちかと、わたしも案じてをりましたが、御親切なお家主さま、三月振りあげたのを、困るであらうとお腹立ち、何と有難い事ぢやござ

んせぬか。

仙右　いやもう有難いの何のと、どんな不調法なことでもしたかと、此頃にない心配したが、今のお詞を聞いたので、さつぱりと胸の痞へも下りました。

むつ　さあ困るであらうとあのやうに、お案じなされて下さるから、今日のことを打明けて、お話し申さうぢやござんせぬか。

仙右　成程、それがいつちよい。

　トこちらへ向ひ、

むつ　只今あなたのおつしやる通り、私共の商ひと、馴れぬ手業の稼ぎにて、思ふやうには行かぬゆゑ、休み勝にて朝夕の、細き烟りも立て兼ねまする貧乏暮しの其中で、一圓半といふお金の出來よう筈はござりませぬ。それゆゑあなたが只今の、御親切なお腹立ち、あだおろそかに存じませぬ。

仙右　今日はからず女房の母が勤めてをりました、御主人樣にお目に掛り、お惠み受けし十圓のお金、思ひがけない金が手に入り、何事おいてもまづ先へ雨露凌ぐ家賃のたゝまり、御勘定せねば濟まぬゆゑ、三月ぶり一圓半、差上げましてござりまする。かゝる譯ゆゑ其儘に、

兩人　お納めなされて下さりませ。

　ト是れを聞き、思入あつて、

杢右　それぢやあ昨日おむつどのゝ、親御が勤めた主人に出逢ひ、十圓金を貰つたとか。

むつ　以前は秋津豐さまとて、駿河臺にいらつしやいました、其お方さまにお貰ひ申しました。

杢右　さういふ事ならよけれども、苦しい中ゆゑ貧の盗みで。

兩人　え。

　ト思入。

杢右　いやさ、必ず氣に掛けて下さるなだが、夜るを稼ぎの按摩渡世、もし得意先で料簡違ひをさつしやりはせまいかと、思ひ過して心配しました。よく噺し家の言ふことだが、大家といへば親も同然、三月や四月店賃が、滯つたとて苦にさつしやるな。はて十三軒ある店子のうち、月々きつと納めるものは、新橋の鐵道へ出る月給取りの安兵衞ばかり、一月や二月の滯りのない店子はない必ず心配さつしやるな。

仙右　人樣は兎も角も、私ばかりはお家主さまへ、御損を掛けては濟みませぬ。出所知れたる此金子どうぞお納め

下さりませ。
むつ　それともお納め下さりませぬは、もしや不正の金子かと、お疑ひでござりまするか。
杢右　いや〳〵さういふ譯ではないが、高い利息の附く金でも、借りて持つて來たかと思つたゆゑ、二月ぶり返しに來ましたが、さういふ金とあるからは、受取つておきませう。
仙右　そんなら、お受取り下さりまするか。
むつ　やれ〳〵、それで落着きましたわいなあ。
杢右　さう極つたら二月分、受取りにして持つて來ませう。
仙右　いえ〳〵態々お持ちなさらずとも、お序でよろしうござります。
杢右　とんだわしも聞き違ひで、不理窟を言ひに來ました。夫婦の衆、許して下され。
兩人　恐れ入りまする。
杢右　どりや。受取りにして屆けませう。
　ト通ひと札を懷中して門口へ出る、おむつ送り來り、
むつ　左樣なればお家主さま。
杢右　これおむつどの、くどい事をいふやうだが、店子と云へば子も同然、三圓や五圓の金なら、どうなりとして進ぜるから、高い利の附く金などは、借りようと思はつしやるな。まして當時大藏省で御製造になる此札には、一々番號が記してあれば、めつたな事は出來ませぬぞ。
　トきつと言つて氣を替へ、
はゝゝゝゝ、言はずともよいことを、くど〳〵云ふのが年のせゐ、爰らが耄の弛んだところだ。
　ト四ッ竹節になり、杢右衞門下手へはひる。これにて仙右衞門上手へ住ふ、
むつ　もしこちの人、此裏のお家主ぐらゐ、親切なお人はござりませぬな。
仙右　あのやうな氣立のよいお方は、またと二人外にはない、御布告の表を守り、先づ樽代はいふに及ばず、節句錢釣瓶錢の集めッこは一切なし。
むつ　まだ其上に來る年毎、神武さまの御祭典氏神さまのお祭りには、強飯をふかして店子へ配り、
仙右　實にもいふ大家根性、取りたがるのがあたりまへだに、
むつ　あゝ慾氣のないといふは、
仙右　世に珍らしいお家主ぢやなあ。

ト此時仕掛にて竈へ煙り立つ、仙右衞門思入あつて、
これおむつ、大分焦げくさいぜ。

むつ　ほんになあ。

トあわてゝ竈の下の火を引く。

仙右　麁相なれば仕方もないが、なるたけ麁末にならぬやう、おれが夜食に喰はうから、焦げた所を握つてくれ。

むつ　お前がそんなにならしやんしても、お米を麁末にしたゆゑかと常から思うて居るからに、決して麁末にはせぬわいなあ。

トお櫃へ飯をうつして居る。仙右衞門思入あつて、

仙右　此眼病も、枡目を盗みし。

むつ　え。

仙右　いやさ、此眼病もますく重り、其日に困つて昨日まで、三度の飯も粥ばかり、力が抜けたが久し振り、飯にあり附く其嬉しさ、是れといふのもそちがお袋、おせつどのが勤めて居た秋津さまがお情ゆゑ、あだおろそかには思はれない。あゝ拜みますく。

むつ　どうしてあだに思はれませう、昨日お禮に上らうと、思つたなれど身裝の惡さに、旦那さまのお恥を思ひ、お寄り申さず歸つたが、お惠み受けしお金にて、質に入れた半纏を、今朝出したれば是れを着て、お臺所からそつと上り、お禮を申して來ませうわいな。

仙右　おれもお禮に行きたいが、こんなざまゆゑ御遠慮申せば、二人前旦那さまへ、厚くお禮を申してくれ。然し今から遲くはないか。

むつ　いえく晝より夜の方が、人の目褄にかゝらいでようござんす。今から急いで行つたなら、九時頃には歸られませう。

仙右　なるたけ早く歸つてくれ。是れにつけても五郎七めは昨夜屯へ引かれたさうだが、いよく彼奴が金側の時計を盗んだ本人なら、北海道へ遣るといつて、金が欲しさに悴をば異國へ賣つたに違ひない。

むつ　それも嚴しき御吟味で、白狀すれば分ること。

仙右　どうぞお上のお調べで、早く口が開けばいゝが、何をいふにも啞とやら、嘸御吟味にお骨が折れよう。

ト此うちおむつ半纏を着、下手から古行燈を出しあかりをつける。

むつ　もし、少し早いが行燈へ、あかりをつけておきますぞえ。

仙右　おゝ、手探りではむづかしい。

むつ　そんならちよつと、行つて來ますぞえ。
仙右　なるたけ早く歸つてくれ。
むつ　つい歸つて來るわいなあ。
　ト四つ竹節にておむつ足早に花道へはひる、仙右衞門これを知らず、門口へこなしあつて、
仙右　これおむつ、どうぞ早く歸つてくれ。これおむつこれおむつ。
　トいへども答へなきゆゑこなしあつて、
あゝもう行つたか。
〽鐘の音も六ツか七ツか指折りて、算へ盡きせぬ仙右衞門、思案に餘る胸のうち、吐息をついてかこち言。
　ト此れより床の合方になり、仙右衞門思入あつて、
今打つたはもう八時か、あゝ今更言つても返らぬが、可愛さうなは女房おむつ、おれが盛りの時分には毎日相場で會所へ行き、崩れが酒から女郎買ひ、三日も四日も歸らぬので異見をすれば撲り附け、あらひざらひ引つ攫ひ車を飛ばして廓へ行き、榮耀榮華の仕度い三昧、跡に殘つた女房や悴にたゞの一日も樂をさせた事もなく、今々思へばこれだけの、罰でも此目が潰れる筈。
〽左程邪慳にしたおれを、無慈悲な者と恨みもせず。

長の病氣のかんがくも手に手を盡した甲斐もなく、盲目となりしを助けんと、晝は町家の門へ立ち、夜は金杉の毘沙門さまへ百度を踏みに行くと僞り、大門邊で往來の袖に縋つて合力受け、やうやう其日の活計立て、不正直な此おれを過してくれる情なさ、今となつては面目ない、我が身の惡事に目は見えず長生きしても此先に、何樂みのない體、女房に苦勞をかけようより、留守を幸ひ一思ひ。
〽とは云ひながら、我が悴いづくの果てに居る事やら、案じ過して氣を取直し、
あゝいつまで言つても返らぬこと、幸ひ今日は親父の命日、見えぬ目ながら手探りにお膳を供へて回向なし、心靜かに死に支度。むゝ、さうだ〳〵。
　ト是れをキツカケに地藏經になり、仙右衞門探りながら下手へ行き、手桶の水でうがひを遣ひ、上手佛壇にある瀬戸物の佛器を持つて來り、おはちの飯を盛り佛前へ供へよろしくあつて、
折も折とて棟割りの、隣り長屋で此間子供が死んで一七日、回向の爲の地藏經は、生死分からぬ悴めが、死んで彼の世に居るといふ、是れも佛の知らせなるか、此世で

なした罪科で、兩眼ばかりか身代まで、潰した詫びは冥土へ行き、呵責を受けるが罪滅し、どうぞ許して下さりませ。

〽位牌に向ひ手を合せ、過ぎし懺悔を死出の旅、涙ながらに勝手より身の錆庖刀探り取り、

ト此うち仙右衛門佛檀へ向ひよろしくあつて、臺所へ探り行き、俎板の上にある菜切庖刀を持つてこちらへ來り、撫廻しこなしあつて、

身代限りをする時に、簞笥は元より鏡臺まで、皆ばつたりに賣つたゆゑ、今となつては剃刀一挺小刀一本ない始末、刃物と云つては錆びついた此庖刀があるばかり、出刃の替りや小刀の替りも勤めた擧句の果が、今日はおれが腹切刀、然しこの錆びやうでは切れまいが、砥石もなければ瓦もなし、研ぐに研がれぬ此身の錆、あゝ力任せに遣つたなら、死なれぬ事もあるまいわえ。

〽肌押脱ぎて仙右衛門、胸撫でおろし二度三度、死なうとすれど死に兼ぬる、折から爰へ錆附きしその庖刀より親と子の、血筋切れざる仙太郎、爰やかしこと尋ね侘び、

ト此うち仙右衛門肌を脱ぎ襦袢になり、胸をあけ腹へ庖刀を當て、痛いといふ思入、死なうとして死なれぬこなし、庖刀を下に置き當惑の思入。時の鐘。花道より序幕の仙太郎、散切り頭、西洋服のこしらへ靴にて出來り、花道にて襟に掛けたる時計を出し、ちよつと見ることあつて、

仙太　おゝ、時計は二分おくれてゐるが、今打つたのは八時の鐘、親に逢ふのも僅か二時間、今入口で聞きたれば、裏へ曲つて三軒目と、敎へてくれたは慥に向う、あれへ參つて尋ねて見よう。

〽言ひつゝ門へ歩み寄り、

ト仙太郎舞臺門口へ來り、

お頼み申します。

〽内にはそれと知らざれば、

仙右　何の用か知らぬけれど、今家が取込んで居れば、明日のことにして下せえ。

仙太　いえ、火急な事でござりまするが、仙右衛門さまは、此方でござりまするか。

仙右　仙右衛門はこちらだが、今お留守で分かりませぬ。

仙太　でも、誰やらおいでの樣子。

仙右　いえ〳〵、だれも居りませぬ。

〽急ぐ最期に挨拶も、後や先なる父の聲、門に倅は氣もせかれ。

ト此うち仙右衛門早く歸つてくれゝばいゝといふ思入、門口に仙太郎當惑のこなし、トヾ門の戸を覗くこなし。

仙太　そこにおいでなさるは、お父さまではござりませぬか。

〽いふ聲聞いてびつくりなし、

仙右　やゝ、さういふ聲は、仙太郎ぢやないか。

仙太　はい、仙太郎でござります。

仙右　なに、仙太郎だ。

ト立上り門口の方へ行かうとして飯櫃につまづき、どうと倒れる、仙太郎門口を明け、

仙太　あゝ、お危うござります。

〽靴ぬぎ捨てゝ走り寄り、介抱すれば其儘に、側へ引き寄せ親と子が、涙先立つばかりなり。

ト此うち仙太郎靴をぬぎ、こちらへ來り、仙右衛門を抱き起す、仙右衛門仙太郎を引き寄せ、

仙右　おゝ、倅か。

仙太　おとつさま。

仙右　死んだとばかり思つてゐたが、よくまあ達者でゐてくれたなあ。

〽嬉し涙に泣き伏せば、仙太郎も目を押し拭ひ、

ト仙右衛門嬉し泣きに泣く、仙太郎手を突き、合方になり、

仙太　久々お目に掛りませぬが、御健勝にゐらせられ、恐悦至極にござりまする。

仙右　先づおれよりは仙太郎、よく息災で歸つて來た、忘れもせぬ五月あとの四月廿日の事であつたが、牛肉屋の五郎七が親切ごかしに勸めるゆゑ、そなたに出世がさせたいばかりに、北海道へ遣つたあと、世間で人の口の端に異國へ子供を賣る者があるといふ話しを聞き、明暮おむつと案じて居たが、もし五郎七に異國へでも、賣られて行きはせなんだか。

仙太　いえ／＼左樣な事ではござりませぬ、旦那さまのお供を致して、所々を廻つて參りました。

仙右　おゝそれならやつぱり旦那のお供で、そなたは方々廻つて來たとか。よくまあ、歸つて來てくれたなあ。

〽一目見たさも見えわかぬ、親は涙の目なし鳥、子は賢しくもそれと見て、

ト仙右衞門よろしく思入、仙太郎仙右衞門を見て、
仙太　おとつさまにはいつの間に、そんなお目におなりなされました。
仙右　さあ問はれて話すも面目ないが、年端も行かぬ手前にまで、異見をされたおれが不所存、若い折から三十年來、枡目を盜んで生業した其報いにて目が潰れ、所へこれまで借込んだ借金方から願ひ立てられ、身代限りをしてしまひ、おつかあが里の小松川へ、引取られて行つて居たが、米の高いに二人口長く居るのも氣の毒ゆゑ、少しばかりの元手を借り、三月跡此裏へ、しがない世帶を持つたのだ。
仙太　以前の所においでがないゆゑ、それで狀が屆きませぬか。
仙右　なに、狀が屆かぬとは。
〽いふに忰はしとやかに、
ト誂への合方になり、
仙太　先づお聞き下さりませ、北海道へ下る途中、銚子口も無事に越し、金華山の沖合へ、掛りし折柄一天曇り、俄に西北の暴風吹き、船頭盡力いたせども逆浪高く搖り上げられ、遂に輪船の器械を損じ、船中一同死を極め、止むを得ずして風波に任せ、凡そ日數五日程、大洋中に漂ひしが未だ運命盡きずして北アメリカへ漂着なし、主人と共に上陸後、右の次第を書き認め、郵便船へ出しましたが、身代限りに住居分らず屆かぬことゝ見えまする。
ト仙太郎よろしく思入あつていふ。
仙右　それぢやあ難船して、北アメリカへ流されたとか、道理で手前の言ふことは、唐人臭くちんぷんかんで、おれにはさつぱり分らぬが、何しろ危ねえことだつた。さうしてこつちへいつ歸つた。
仙太　船の破損を繕つて、昨夕方に横濱へ着船いたしてそれぞれへ、お屆け濟んで又候や、北海道へ明朝出帆、今日お目に掛らねば、
〽何時またお目に掛れるか、生死知れざる浪の上、一日なりともお顏が見たく、涙ぐんで居りましたを、早くも主人が心を察し、嘸や親に逢ひたからう、家でも案して居ようから、無事を知らして來るがよいと、十時間の暇を貰ひ、やれ嬉しやと鐵道でステーションへ上るがいな、直ぐにお尋ね申しましたが、身代限りで小松川へ、お出でと聞いて力も拔け、またもや車で小松川へ參つて

開けば三月あと、爰へお出でと承はり、お婆さまにもそこ／＼に、お暇申してとつて返し、やう／＼爰を尋ね當てお目に掛りに參りました。
〽逢ふは別れと子心に、縋り歎けば仙右衞門・可愛のものと抱きしめ。
ト此うち仙太郎よろしくあつて、仙右衞門に縋るを、抱きしめて思入。
仙右　親といふのも面目ない、親甲斐もない仙右衞門、それを慕うて此やうな、穴のやうなる新開までよく尋ねて來てくれた。嘸おつかあが悦ぶだらう、幸ひ飯も炊きたてなれば、手前の好きな饅でも馳走するからゆつくりと、四五日逗留するがいゝ。
仙太　いえ／＼さうしては居られませぬ、明朝未明に出帆ゆゑ、晝十二時から十時まで、十時間の暇を貰ひ、參りましてござりまするから、十時の車に乘りませねば、未明の間には合ひませぬ。
仙右　それぢやあ十時の鐵道へ、乘らねば主人へ濟まねえか。
仙太　お上の御用で碇泊中、主人の情で十時間の暇を貰ひし私ゆゑ、出帆の期に後れましては、主人の情が無になりまする。
仙右　そいつア本意ねえことだな。
仙太　見受けますれば最前から、おつかさまはお留守の樣子、何れへお出でなされましたか、十時と云つても僅かゆゑ、お目に掛りたうござります。
仙右　あれも明暮逢ひたがつて噂を言はねえ事はねえ、今京橋まで行つたから、もう少ししたら歸るだらう、何しろ物言ひは十五六の子のやうだが、どんなに形が大きくなつたか、顏が一目見たくつても見ることならぬ此眼病、せめて女房に二人前・顏の見覺がさせたいが、斯ういふ事と知つたなら、秋津さまへ遣らにやあよかつた。
〽見えぬ眼ながら延び上り、妻の歸るを待ち侘ぶる、側に倅は主人より貰ひし金子取出し、
ト仙太郎洋服の隱しより蟇口の巾着を出し、中より紙に包みし五圓の金貨を二枚出し
仙太　もしおとつさま、爰に五圓金が二つ、十圓貨幣がござりますが、こりや主人よりお手當にお貰ひ申せし旅費ながら、さして入用もござりませねば、これをあなたに上げますから、お好きな物を召上り、お氣をお晴らし下さりませ。

〽手渡しなせば採り見て、
ト仙右衛門の手の上へ載せる、仙右衛門さぐり見て、

仙右　すりや御主人からお手當に、お貰ひ申した此金を、其儘おれにくれるとか。

仙太　測量方を勉強なし、上より月給たまはるやうに、登用いたせばその時は、お樂をおさせ申しますから、それを樂みにおとつさま、御不自由でも兩三年、お待ちなされて下さりませ。

〽健氣な詞に仙右衛門、さし來る涙胸一杯。
ト仙太郎も愁ひの思入にていふ、仙右衛門始終涙を拭ひ、

仙右　その志しは嬉しいが、此金ばかりは貰はれぬ、おりや其金より時の鐘、せめて一時も暇を貰ひ使ひにやつたおつかあに、ゆつくり逢はせてやりたいわい。

仙太　どうぞ私も今のうち、おつかさまにお目に掛り、立ち歸りたうござります。

〽言ひつゝ取出す懷中の、時計の表見てびつくり、
ト此うち仙太郎襟に掛けし時計を出し、是れを見てびつくりなし、

やゝ、いつの間に九時を打ちしか、時計は九時と三十分。

仙右　えゝ、そんなら十時にもう半時。

仙太　新橋までは道程も近いといへど十町餘り、直に行かねば間に合はぬ。

ト是れより床の早き合方になり、仙太郎心の急く思入。

仙右　それぢやあ手めえはおつかあに、逢はずに是れから直ぐに行くか。

仙太　さあ一目なりともおつかさまに、お目に掛りたうござりますが、時刻を缺いては主人へ濟まず殘念ながら參りまする。

〽見えぬ兩眼幸ひと、いはぬ色なる置土産、父はそれとも氣が附かず。
ト此うち仙太郎金を出して行燈の臺の上へ載せ、下手へ來り靴をはいて居る。仙右衛門探り／＼、下手へ來り。

仙右　あこれ、何でおむつは歸らぬ、今歸つて伜に逢はねばいつ逢はれるか知れぬのに、車にでも乘ればよいが、大方歩いて居るであらう。

〽氣を揉みあせれど女房の、歸り知れねば是非なくも、

こなたは容を改めて、
ト仙右衛門氣を採む思入、仙太郎身支度をなし仙右衛門に向ひ、
仙太　左様ならおとつさん、隨分ともに御機嫌よろしう。
仙右　そんならどうでも、もう行くか。
仙太　おつかさまには持病あるゆゑ、御身を大事になされるやう。
仙右　おゝ、そちや煩はぬやうにしやれ。
〽未練殘さぬ男氣も、名殘りは惜しき恩愛に、妻の歎きや子の歎き、我が身に思ひ行く影を、見送る限さへ涙の種、跡を見送り〳〵て子は悄々と別れ行く。
ト此うち仙右衛門門口にてよろしく愁ひの思入、仙太郎は振返り〳〵花道へ行き、跡へ心の殘る思入あつて時計を出しこれを見てきつとなり、逸散に花道へはひる。
〽跡には一人張詰めし、心も撓み仙右衛門、わつとばかりに泣き伏せしが、涙拭うて起上り、
ト仙右衛門尻邊にどうとなり、泣伏し、また起き上つてこなし、
仙右　一途に迫つてすんでのこと、今庖刀で死ぬところ、半時伜が遲かつたら逢はずに死んでしまつたら、あゝ思ひ出しても忌はしい。それはさうと女房は、何でこんなに遲いことか、早く歸つて來ればよいに。
〽待つ間ほどなく女房が、時刻の遲れにとつかはと、心せわしく我が家の門。
ト花道より以前のおむつ片手に壜を提げ、足早に出來り、直ぐ門口へ來り、
むつ　こちの人、今戻りましたぞえ。
ト内へはひる、仙右衛門顏を上げ、
仙右　おゝおむつか、あゝ遲かつた〳〵。
〽いふに女房は合點行かず、
むつ　道を急いで歸つたが、そんなに遲うなつたかいなあ。
仙右　遲いといふは、たつた今尋ねて來て、今歸つた。
むつ　そりや、誰れが來ましたぞいなあ。
仙右　えゝ手めえもまあ呑込みの悪い、來たと言つたら知れさうなものだ。
むつ　ほんにまだ油屋に、借りが殘つてござんした。
仙右　えゝ、さうではない、伜が來た。
むつ　え、伜が來ましたえ。

仙右　おゝ、たつた今來た。
むつ　もし、そりや幽靈ではござんせぬか。
仙右　あゝ鶴龜々々、緣起でもない、達者で歸つた。
むつ　そりやまあ、ほんまの事かいなあ。
〽嬉し悦び女房が、四邊うろ／＼立ちつ居つ、尋ね搜すぞいぢらしき。
ト此うちおむつ上手の屋臺を開けて見て、あちこちと搜す思入、仙右衞門じゆつなきこなしにて、差しうつ向き居る。
むつ　仙太郎は何處に居やる、早く顏を見せてくれぬか、仙太郎。
〽呼べど答へのあらざれば、
もし、仙太郎は湯へでも行つたかいなあ。
仙右　おゝ、仙太は行つた／＼。
むつ　行つたとは、そりや何處へ。
仙右　さあ、たつた今横濱へ行つた。
むつ　あゝそれでは何ぞ横濱へ、忘れ物でも取りに行つて、明日家へ歸るのかいなあ。
仙右　いや家へ歸つて來るならいゝが、明日の朝北海道へ出帆すると言つたから、またいつ歸るか知れぬわい。

むつ　えゝゝゝゝ。
〽妻はびつくり氣も半亂。
トおむつどうとなる、是れより床の合方、仙右衞門の胸づくしを取り、
これこちの人、さういふ事なら留めておいて、なぜ逢はせては下さんせぬ、お前ばかりの子ではなしわたしの爲にも大事のかゝり子。五月あとに北海道へ行つてそれきり便りもなく、大方海で難船して死んだと思へどもしひよつと、歸つて來まいものでもないと、明暮待つて居るものを、わたしに逢はせず歸すとは、そりや胴慾ぢや、聞えませぬわいなあ。
〽愚痴は女房の常ながら、夫を捉へかぞへ立て、恨み歎くぞ哀れなる、涙拭うて仙右衞門、女房の脊撫でおろし。
ト此うちおむつよろしく思入、仙右衞門泣き伏すおむつの脊中をさすり、
仙右　おゝ尤もだ／＼、其恨みを聞くまい爲、いまにおむつが歸つて來るから、それまで待つて居てくれろと、云へど猶豫のならぬのは、明日夜明けの出帆で、今日十二時から十時までのお暇を貰つて來た所、そちが歸りの遲

いので、本意なく逢はずに歸つたのだ、譬にもいふ主と病奉公の身は仕方がない、逢はれぬ時節と思つてくりやれ。

〽一部始終を女房も、聞いて涙を押し拭ひ、

むつ　さういふ事なら是非もないが、ちよつとなりとも見たかつたに、形は大きうなりましたらうな。

仙右　それもおれが見えぬ眼に、形は知れぬが物言ひは、十五六の子供のやうだ。

むつ　小さい折からませて居たゆゑ、應高慢になりましたらう。

〽言ひつゝ傍の行燈を、掻立てんとして、包みを取上げ、

ト　おむつ行燈をかき立てようとして以前の金包みを取上げ、

こりや鍋錢かと思ふたら、ほんまのお金の五圓金、十圓爰にお金のあるは。

仙右　扨は最前返したを、またもや其處へ置いて行つたか。

むつ　置いて行たとは、そりや誰が。

仙右　さあ旅の手當に御主人から、悴が貰つた其十圓、貧乏暮しを助けようとおれにそれをくれたれど旅では金の入るものゆゑ、志しは貰ふ程に金は其儘持つて行けと懷へ入れてやつたが、やはり爰へおいて行つたも知らぬ盲目の面目なさ、さうだ。

〽血相變へて立上るを。

ト　仙右衛門立上るを、おむつ留めて、

むつ　さあ其見えぬ目も一度は、見える稀代の此良薬、秋津さまから下すつた硝酸銀といふ水藥、また一品は價の高い、世にも稀なる鮑の眞珠、善は急げといふからは、是れを吞んで水藥を、少しも早く附けなさんせ。

ト　此うち帶の間より巾着を出し、此うちより眞珠の包み紙を出し、有合ふ盥と二品を仙右衛門へ渡す、仙右衛門押し戴き、

仙右　すりや眼病には稀代の効ある、價の高い此藥を、憎い奴とも思召さず、此仙右衛門に下すつたとか、あゝ勿體ない〳〵。

ト　此うちおむつ下手の手桶の水を、茶碗へ汲んで持ち來り、

むつ　その勿體ない入譯は、なほつた上で旦那さまへ、お詫びの仕様もあらうわいなあ。

仙右　お〻、忰が達者で居る上は、此眼をあいてもう一度、
人間らしくなりたいわい。

むつ　さあ〱、早う呑ましやんせ。

〽差出す眞珠を仙右衞門、押し戴きてぐつと呑み、

ト此うち仙右衞門藥を呑むことよろしくあつて、

仙右　まだ十時にはなるまいから、車の出ぬうちそちにも
逢はせ、此十圓を返さにやならぬ。

むつ　ほんにこれから新橋の、鐵道までは十町餘り、道を
急いで行つたなら、逢はれぬこともござんすまい。

仙右　そんならおむつ、支度はよいか。

むつ　あい、杖も草履も、これ爰に。

〽馴れし女房が介抱に、杖に縋つて仙右衞門、立出る門
口杢右衞門、

トおむつ介抱して仙右衞門に草履をはかせ、杖を突か
せ、手を引き門口の外へ出る、此以前下手より幕明の
家主杢右衞門出て窺ひ居て、

杢右　樣子は聞いた夫婦の衆、爰構はずと行かつしやい。

むつ　そんなら何分お家主さま。

仙右　留守をお賴み、

ト花道へ行きかけ、ひよろ〱として杖をとんと突く
を道具替りの知らせ、

申しますぞ。

〽道を急いで、

ト三重になり、おむつ仙右衞門の手を引き逸散に花道
へはひる。此模樣よろしく道具廻る。

（新橋停車場夜の場）＝本舞臺三面に白ペンキ塗り
の柵矢來、内に樹木の植込み、後石造のステンショ
ン、下手蓬萊橋の石橋、向う西洋造りの蓬萊社を見
せ、汐留川岸通りの遠見、日覆より松の釣り枝、總
て新橋ステンション夜の體、爰に前幕の下剃の吉、
廣袖三尺麻裏草履、湯屋の三助、着流し草履にて福
壽湯といふ弓張提灯を持ち、二人捨石へ腰を掛け居
る、此見得浪の音合方にて道具留る。

三助　ときに吉さん、とんだ事が出來たぢやあないか。

吉　さうさ、お園さんと六三さんは福壽湯に居た時か
ら、い〻仲といふことは親方もおれも知つて居るが、よ
もやこんな事にもなるめえと、油斷をしたのがこつちの
あやまり。

三助　たゞ逃げたならい〻けれど、ひよつと心中でもした

吉　日にやあ、直に新聞に載る話しだ。何にしろ親方がすてきに心配をして居るから、二人が行方を捜しに出たが、丁度いゝあんばいにお前に逢つて、脱れぬ中の湯屋と髮結、氣を揃へて捜したら、知れねえこともありやすめえ。

三助　さうとも／＼、もしや二人が陸蒸汽で横濱へでも走りはせぬか、ステンショへ行つて聞いて見よう。

吉　それがいゝ／＼、何でも二人は逆上して居るから、こりや蒸汽でもござりませう。

三助　いや、とんだお茶番だ。

吉　さあ／＼行きやせう／＼。

ト吉、三助思入あつて正面柵矢來の内へはひろ、中にて鈴を振り立て、浪の音になり、上下より仕出思ひ／＼のこしらへにて、捨ぜりふを言ひながら出來り、

△　まだ十時にやあ大丈夫だから、ゆつくりと行きませう。

皆々　それがいゝ／＼。

ト此時後木戸のうちより○、散髮、木綿の夏洋服片腕に番號を縫ひ附け、紺足袋麻裏草履にて出來り、皆々を見て、

○　さあ／＼、早く札を買つた／＼、さあ／＼急いで急いで。

トこれにて皆々びつくりして、

△　やあ、こいつは大變だ／＼。

皆々　早く行かうぜ／＼。

ト皆々木戸口へはひろ、また鈴の音になり、是れより床の淨瑠璃になる。

〽日に增しに、世界開けて雁よりも、早き便りの電信機、八里の道も一時間、煙草吞む間に横濱へ、通ひ路しげき蒸汽車も、暮れて暫しは音絶えし、鐵道館の十時前。

トよき程に蒸汽の出る笛になり、花道よりばた／＼にて、以前のおむつ先きに仙右衞門、杖に縋り走り出て花道にて躓きばつたり轉ぶ、おむつこれを介抱して抱き起し、

むつ　もしこちの人、何處ぞ傷めはなさんせぬか。

仙右　いや何處も傷めはしないから、おれに構はず先へ行き、車の安否を聞いてくれ。

むつ　心も空に急いだせゐか、切通しの鐘を聞かぬから、まだ十時にはなるまいわいなあ。

仙右　暮れると間もなく八時を打つから、もう十時に間も

あるまいか、鐵道へはまだ來ないか。
むつ　あい、もうつい向うでござんすわいなあ。
仙右　さういふ事なら少しも早く、もう一遍逢ひたいものだ。
〽痛む足許踏みしめて、おむつに縋りたど〳〵と、來かかる折から、鐵道より乘りおくれたる人々が。
ト浪の音になりおむつ仙右衛門等舞臺へ來る、爰へ上手より、一、二、三の町人、思ひ〳〵のこしらへにて出來り、
町一　もし〳〵、お前やつぱり濱へ行きなさるのか、此夏から、蒸汽が朝の七時から晩の十時まで休みッこなしに出るゆゑに、つい煉瓦石の方をぶら〳〵と、ひやかして居たうちに七時四十五分の車が出て、今度は十時と思つて居るうち、わしが時計が狂つて居たか、急いで爰へ駈け附けたが、
町二　もう一足早く來ると、今の車に乘れたのに、
兩人　惜しい事をしたなあ。
ト言ひながら下手へ行くをおむつ見て、
むつ　もし〳〵、お前さま方は、鐵道へお出でなされましたのでござりまするか。

町二　あい、今行つてあぶれて來ました。
仙右　え、それぢやあ蒸汽は出ましたか。
町一　あい一足違ひで乘りおくれ、
町三　すご〳〵あぶれて歸りますのさ。
むつ　それなら十時の、あの車は。
仙右　一足違ひで出ましたとか。
むつ　こちの人。
仙右　女房。
兩人　はい。
〽車におくれ思はずも、大地へどうと伏し轉べば、立寄る人も氣の毒顏。
ト仙右衛門おむつどうとなり、當惑の思入。
町二　から見たところがお前方も、大方急な用だらうが、乘りおくれたら是非がない。
町一　歩いて行けば横濱まで、八里からある道程に、今夜中にはとても行かれず。
町三　それゆゑ今宵は我慢して、明日の朝來て七時の車に乘つて行くのが上分別。
町二　わしらも其氣であきらめて、一先づ家へ歸ります。
町一　お前方もあきらめて、家へ歸つてあした來なせえ。

町三　やれ〳〵、氣の毒千萬な。

三人　さあ〳〵、早く歸らう〳〵。

〽乘りおくれたる人々は、おのが心にたくらべて、悔みたら〳〵別れ行く。

〽跡に夫婦は茫然と、暫し詞もなかりしが、逢うて別れし夫より、逢はぬ女房の猶本意なく。

ト仕出し三人は花道と下手へ別れはひる。おむつよろしく思入あつて、

むつ　もし、こちの人どうせう。

仙右　おゝ尤もだ。

むつ　どうせう。

仙右　尤もだ。

むつ　どうせう〳〵、どうせうぞいなあ。今更いふも愚痴ながら、斯ういふ事と知つたなら、最前家へ戻つた時、直に後を追駈けたら、逢はれぬこともなかつたに、お前が兎やかう言はしやんして、期を延ばしたゆゑ逢はれぬか。

〽何の因果で斯くまでに、薄き緣と口說き立て、涙のはてしなく聲を聞くも哀れと盲目の、目にもあふるゝ溜め淚、前後正體なかりける、女房きつと立上り。

ト此うち兩人よろしく愁ひの思入あつて泣き落し、トドおむつきつとなつて、

もう此上は女の一心、道は何程あるとても、今宵のうちに濱へ行き、我が子に逢はいでおくべきか。

〽狂氣の如く帶引きしめ、行かんとするを引き止め、

トおむつは血相して行かうとする、仙右衞門探り寄りてきつと留めて、床の合方早めになり、

仙右　こりやおむつ、その歎きは尤もだが、八里からある橫濱へ晝でもあるか夜を掛けて、女の足で行かれるものか、所詮及ばぬことだから逢はれぬことゝあきらめて、たゞ此上は時節を待ち、悴の無事を祈つてゐやれ。

むつ　そんならどうでも逢はれぬか、えゝ情ないことぢやなあ。

〽またも女房が泣き沈めば、空も淚の雨催ひ、むらだつ雲に雷の音。

ト兩人よろしく思入、此時薄く雷の音になり、おむつこなしあつて、

あゝ折惡い雷さま、空の光りの樣子では、どうやら強う鳴りさうぢやわいなあ。

仙右　產れ附いての雷嫌ひ、強くならぬ其うちに。

ト雨車になり、

家へ歸らうと思ふうち、もうばら〳〵と降つて來た。

むつ　どこぞこゝらに知つたお家が。

仙右　おゝ木挽町に以前使つた、舂屋が世帶を持つて居れば。

むつ　そんならそれへ。

仙右　さあ、少しも早う。

むつ　とはいへ此儘。

ト立掛ろを仙右衛門留めて、

仙右　はて、人は時節を、

トおむつを引廻し、

待つものぢやわえ。

〽次第〳〵に、

ト兩人引張りの見得、床の三重、雷の音はげしく、此道具廻る。

(築地海岸浪除の場)――本舞臺上手へ寄せて、柳の大樹、同じく日覆より釣枝、下手に疊んである葭簀張りの出茶屋、後一面黒幕、据通り葛籠石を漆喰留めにて一枚通り並べたる海岸の石垣、總て築地海岸浪除夜の體よろしく、浪の音にて道具留る、と上手より以前の三助先きに下剃の吉出來り、

三助　どう調べて貰つても、乘合のうちには居ない樣子だ。

吉　さうして見ると二人とも、築地の方へ追駈けて、惡くしたらどんぶりと、飛込んだかも知れねえわえ。

三助　風呂の中ならどんぶりやつて、何にも案じる事はないが、川の中では命があるまい。

吉　そりやあ言はずと知れたことだ、女がお土左で男の方が土左衛門とならにやあならねえ。

三助　何にしろ大事だが、どうか仕樣はあるめえか。

吉　外に仕樣といつちやあねえが、是れからおらあ船を借りて、すばりで川をさがして見よう。

三助　すばりをするより網を借りて、散蓮華といふ渾名だから、すくつた方が早からう。

吉　お前はまた湯屋だけに、流れツ木を拾ふ氣で、川岸通りを捜してくんねえ。

三助　そりやあおれが得手ものだが、斯ういふ事と知つたなら、相棒でも連れて來るのに、一人でうろ〳〵尋ねるのも、これがほんのゆやな番だ。

吉　そんな駄洒落を言はねえで、眞劍で捜してくんね

え。

三助　そんなら吉さん。

吉　番頭さん。

兩人　どうか知れて、くれゝばいゝが。

ト兩人別れて上下へはひる。跡浪の音、ばた／＼になり、花道より銀次、巾着切り頬冠り尻端折り草履にて逃げて出來り、跡より前幕のお咲牛鍋屋の女房にて、片褄端折り前垂かけ、下駄にて追つかけ出來り、直に舞臺へ來り、お咲銀次の袂を捉へ、

お咲　もし銀次さん、ちよつと待つて下さんせいな。

ト是れより端唄の合方、かすめて浪の音になり、銀次手拭を取り、

銀次　おれが名を呼んで來るものは損料取りより外にねえから、譯も分らず逃げ出したが、おめえは牛屋のお咲ぢやあねえか。

お咲　あい、ちつとお話し申したい事があつて、それでお呼び申しましたのさ。

トこれにて銀次、有合ふ捨石へ腰を掛け、

銀次　そりやあ丁度いゝ所で逢つた、おれもちつと譯があつて、急に濱の方へ行かにやあならねえから、逢ひたく思つて居たところだ、これお咲お定りのせりふだが、ちつとばかり貸して貰ひてえものだ。

トお咲思入あつて、

お咲　もし銀次さん、それどころではござんせぬ、お前ゆゑにこちの人、五郎七どのは縄目に逢ひ、屯へ引かれて行きましたわいなあ。

ト愁ひの思入、銀次これを聞いてびつくりして、

銀次　これお咲、そりやあいつてえどういふ譯だ。

トこれにてお咲下に居て、

お咲　さあ昨日お前方がわたしの家で、紙屑屋を呼んで賣らしやんした紙入が、新開町の湯屋の二階で金側の時計と一緒に盜まれた、不正の品で二階番の、娘の兄が其紙入を證據にして、こちの人が盜んだやうに時計を出せと惡口たら／＼、段々聞けば京橋邊で散切り左吉といふ髮結で、見掛けによらぬかな聾、言譯しても聞き入れず、それにまたこちの人が持病の癇で、口が利けず、中へ這入つてあちこちとわたしが言譯するうちに、お巡りさまのお耳に入り、相手の左吉を屯所へお連れなされてまた間もなく、こちの人に縄を掛けお連れなされてござりますが、口は利けずどの位困つて居るか知れませぬ、殊に

は露にいふ時は、お前さまのお身の上へ、其身に引負ひ暗い所へ送られるか知れませぬ、もし銀次さん、元の起りはお前ゆゑ、よく思案して下さんせいなあ。

銀次　むゝ、それぢやあ昨日手めえの家で、紙屑屋を呼込んで、おれが賣つた品物から、おぬしの亭主が調べになつたか、そいつあとんだ事だなあ。

ト ぢつと銀次思入あつて、

お咲　まあ何にしろ木挽町の、伯父さんの所へ行き、お慈悲願ひを頼むゆゑ、一緒に行つて下さんせ。

ト 銀次の袂を捉へ、連れて行かうとするを振拂ひ、

銀次　いやお慈悲願ひにやあ及ばねえ、さういふ譯ならおれが是れから、連れて行かれた屯所へ駈込んで言ひ開きをしたならば、元より知らぬあの五郎七、後方までに返してやるから。

お咲　いえ／＼そんな嘘を言つて逃げる氣でござんせうが、其の口先には乘らぬわいなあ。

銀次　成程これまで五郎七や、手めえに嘘も度々ついたが、こればかりは本當だ。

お咲　いえ／＼何と言はしやんしても、そりや本當とは思はれぬ、まあ伯父さんの所へ一緒に。

ト 引つ張る。

銀次　えゝ、聞きわけのねえ、爰を放せ。

お咲　いえ／＼、爰は放されぬわいなあ。

銀次　えゝ面倒な。

ト 是れより浪の音になり、銀次振拂つて行かうとするをお咲支へてちよつと立廻り、トゞ銀次お咲を振拂つて上手へ逃げてはひる。やはり浪の音にて上手より銀次跡を振返り／＼出て、

天水桶の蔭へ隱れ、やう／＼のことでまいてしまつた、亭主が屯へ行つて居るから、半氣違ひも尤もだ、さて／＼女といふものは、いけしつこいものだなあ。

ト 跳への端唄の合方になり、銀次あたりを見廻し思入あつて、

今お咲の話しぢやあ、昨日ばらした紙入から湯屋の二階の足が附き、賣主にした五郎七が屯へ引かれて行つたさうだが、おれも是れまで彼奴にやあ、故主ごかしで借込んだ、金も積つて四五十兩、その恩のある五郎七が、無實の難で引かれたと聞いちやあおれも最うこれまで、丁度爰らが惡心の改め時に名乘つて出て、牛に縁ある闇黑から明るい所へ五郎七を引出した上お仕置うけ、ぶら

ぶら遊んだその稼り何ケ年でも微役場で膏をしぼるが罪滅し、思へば首のねえ科も命を助けて下さるとは、以前に替るお上のお慈悲、夢で暮らしやあ知らねえこと、済まねえ事だと目が覺めたら、悪い事は出來ねえなあ。

ト銀次よろしく思入、上手にて人音するゆゑ、

またお咎めが引返し、爰へ來ちやあ面倒だ。どれ、此間にさうだ。

ト浪の音佃になり、銀次逸散に花道へはひる、浪の音打上げ、下座の唄淨瑠璃になり、

〽川岸に茂る柳の影くらく、雨持つ空にむら立ちし、雲足早き夏の夜の。

ト本釣鐘雨車、薄く雷の音をあしらひ、花道より前幕の六三郎、着流し尻端折り頰冠り、縞立を着て出來り、お園手拭を吹流しに冠り、跣足にて出て花道に留り、振返り跡を見て、

〽光り鋭き稻妻や、遠音にひゞく鳴神の、間に一聲ほととぎす、なれも戀路にぬるゝ氣か、若葉隱れに啼いて行く。

ト此うち兩人花道で振あつて舞臺へ來り、合方になり、

六三　これお園、昨日おぬしに話した通り、いつぞや取られた紙入に入れてありし三百圓の貸證文を失ひて義理ある親父に言譯立たず、舊弊ながら死なうとまで、覺悟を極めたことゆゑに、跡に殘つて一遍のどうぞ回向をしてくりやれ。これが一つの頼みぢやわいなう。

お園　そりやお情ない六三郎さま、その證文を取られしも預り主はわたしゆゑ、科はわたしにあるものを、あなた一人に難儀を掛け、どうまあ生きて居られませう。

ト六三郎に縋り附く。

六三　すりや、どうあつても此六三と、

お園　一緒に死にたうござんすわいなあ。

六三　はて、聞きわけのないことぢやなあ。

〽木々の雫のはら／＼と肌に冷たき夏の夜も、薄きえにしの袷どき、沖を越え來る汐風に、

ト此うちお園一緒に死なしてくれろといふこなし、六三郎それでは濟まぬといふ思入、此うち下手より前幕の左吉、番傘下駄がけにて出て窺ひ、兩人の話しを聞かうとすれど聞えぬ思入、段々側へ來り、思はず兩人と顏見合せ、双方びつくりして、

左吉　や、わりやお園ぢやねえか。

お園　お前は兄さん。
六三　左吉どのか。
〽濕りがちなる袖の村雨。
ト唄の上にてお園六三郎逃げにかゝる、左吉兩人を捉へ、
左吉　こりやいゝ所で見つけたわえ。
兩人　どうぞ逃がして下さりませ。
左吉　めつたに逃がしてなるものか。
ト此うち始終雨車雷の音にて、お園六三郎振切つて逃げようとする。左吉遣るまいとよろしく爭ふ。此うち段々雷の音はげしく、トヾ雷の落ちたる心にて、本鐵砲の音して三人とも舞臺へ俯伏せになる。これと一時に後の黒幕切つて落す、向う一面鐵砲洲の沖を見たる波手摺、海の遠見、これにて雷の音止みて、本釣鐘を打込み、跡しんみりとした合方、かすめて波の音になり、六三郎心附きキッと思入、下手へ來りお園に雨水を呑ませ介抱する、これにてお園心附き六三郎を見て、
お園　六三さまか。
六三　あこれ、此間に早く。
ト左吉へ思入、お園こなしあつて、
お園　そんなら此儘、
六三　さあ來やれ。
ト波の音、六三郎お園上手へはひる。床の淨瑠璃になり、
〽折から爰へ五郎七が、繩目を許され駈け來て、思はず左吉に躓きて、うんと此方は心附き、あたり見廻しびつくりなし。
ト花道よりばた〳〵になり、前幕の五郎七逸散に走り出で、舞臺へ來り思はず左吉につまづく、これにて左吉心附き、あたりを見廻しびつくりなし、
左吉　やゝ、こりやいつの間にか二人とも、おれを出しぬき逃げて行つたか、こりや斯うしては居られぬわえ。
〽駈出す袖を五郎七が、引き止むれば振返り、
や、わりや牛屋の五郎七が、昨夜屯へ引かれて行つたに、どうして爰へ出て來たのだ。
〽いふにとつかは懷より、三百圓の證文に、添へて差出す銀次が書置、これ見てくれと五郎七が、仕形をなすも悟り得ず、
ト五郎七懷より三百圓の證文と銀次の書置を出し、

左吉にこれを見てくれといふ仕形をする、左吉お園六三が氣に掛り、心の急くまゝ思入あつて、

えゝ、しみしつこい、おれを留めて仕形をするのは、其書附をおれに讀んでくれといふのか。

ト五郎七うなづく、

それを讀んだら分らうが、おらあ無筆で少しも讀めねえ。

〽讀めぬといふを無理やりに、また差しつくれば捥ぎ取つて、

えゝ、一字一點讀めねえといふに。

〽あたりへ手紙を投げ捨てれば、爰へ來かゝる仙右衛門、足にさはるを取上げて、

ト此うち左吉書附を下手へ投げつける、下手より仙右衛門杖をつき出來り窺ひゐて、

仙右　なに、此手紙が讀めぬとか。

左吉　おゝ、おめえは昨日の按摩さんか。

ト仙右衛門は件の書附を見て、

仙右　「書置のこと。」

左吉　なに、書置とは。

仙右　「先達て新開町の福壽湯の二階に於て、金側時計に蟇口の紙入、三百圓の證文とも盗み取りしは我等にて、五郎七は無實の難ゆゑ、今宵屯へ名乘つて出で、お仕置受ける所存ゆゑ、此證文を先方へ御返し下さるべく候。五郎七どの親類中へ。天麩羅銀次。」

ト仙右衛門讀み終るを、左吉聞きて、

左吉　や、それぢやあ時計と紙入を、湯屋の二階で盗んだは、天麩羅銀次であつたるか。

トこれを聞き仙右衛門思入あつて、

仙右　こなたは昨日聾だつたが、どうして是れが聞えたぞ。

ト左吉思入あつて、

左吉　おゝ、さういふこなたも盲目であつたが、此書置がどうして讀めた。

仙右　おゝ今まで心附かなんだが、此兩眼の見えるのは、さてはさつきの眞珠のきゝめか。

左吉　おれが雷の聞えたは、お園を捉へた其時に、あたりへ落ちた雷の、響きに耳が直つたか。

〽これは不思議と兩人が、悦び合へば五郎七が、これで盗まぬ疑ひを晴らしてくれろと、書置を二人へ見すればうなづいて、

此書置で五郎七どのが、盜まぬことが慥に知れ、今となつては濟まない譯。
仙右　わしも疑ふ悴が歸り、こなたの仕業でないことが、さつき分かつて面目ない。
左吉　昨日はおめえの知らねえ事を、さぞ腹が立つたらう。
仙右　その腹いせに二人とも、
左吉　存分にして五郎七どの。
仙右　疑ぐつたのを、
兩人　許して下せえ。
〽後悔なして兩人が、身を投げ出して詫びければ、五郎七も吐息をつき、
ト仙右衞門左吉下に居て、五郎七に詫びるこなし、五郎七思入あつて、
五郎　それならわしが盜みもせず、勾引しもせぬことが、お前方に知れましたか。
仙右　おゝ、知れなくッて、
兩人　どうしませう。
〽いふに二人も心附き、
仙右　や、こなたも口が、
左吉　利けて來たのか。
ト五郎七思入あつて、
五郎　おゝ二人に逢つて疑ひが、晴れたと聞いて嬉しやと閉ぢた癇が開いたか、不斷のやうに口が利けます。
仙右　あゝ、思ひがけなく今日爰で、
左吉　啞と聾と盲目の、
五郎　三人片輪が打寄つて、
仙右　測らず一度に治るといふは、
左吉　是れも藥や神の加護、
五郎　あゝ有難い。
三人　事だなあ。
〽三人手に手を取交し、悦び合ふぞ道理なる。
ト三人よろしく思入あつて、波の音ばた／＼になり、下手より以前の吉、金側の時計を持つて出來り、
吉　おゝ親方、爰に居なすつたか。
ト左吉に手眞似するゆゑ、
左吉　これ吉や、其手眞似にやあ及ばねえ、今しがた落ちた雷の響きで、聾が直つたから、話しがあるなら言つて聞かせろ。
吉　そいつあ何より目出たいことだ。外ぢやあねえが、

もし親方、金側の時計が手に入りました。

左吉　え、さうしてそれはどういふ譯で。

吉　さあ今宵おめえの言附けで、お園さんを尋ねに出て、あちこちと搜しても、影も形も見えねえから、こいつあてつきり飛込んだと、船を頼んで大川をすばりをして見たら碇へかゝつた此時計、見れば似寄りの金側ゆゑ、おめえに見せに歸つて來たが、湯屋の二階で盜まれたのは、もしやこれぢやあござりませんか。

ト件の時計を左吉に渡す、五郎七是れを聞き思入あつて、

五郎　これにて思ひ當りしは、さつき屯で天麩羅銀次が、時計は其夜永代橋から測らず川へ落せしと、白狀したる上からは、慥にそれに違ひあるまい。

左吉　してまた、これなる證文は。

ト以前の證書を出す、仙右衞門引取り開き見て、

仙右　こりや三百圓貸渡せし、印紙を貼つた慥な證文。

左吉　これで妹が盜まれた、品は殘らず揃つたが、二人が、死んでは水の泡。

吉　この度を外さず、もう一息、二人の行方を搜しやせう。

ト此時上手にて

むつ　そのお二人は搜さずとも、爰においでなされまする。

ト以前のおむつ、お園六三郎を連れて出る。皆々見て、

仙右　や、そちや女房、どうして二人を。

むつ　今この先きで身を投げて死なうとなさる其所へ、お前を搜しに通り掛り、お助け申してござりまする。

五郎　左吉どのも安堵であらう。

六三　樣子は小蔭で聞きましたが、思ひがけなく皆さんの、病氣も直り二品の、

お園　取られし品が戻りしも、爰に連なるお人のお蔭。

六三　えゝ有難う。

お園　ござりまする。

ト波の音ばた〳〵になり、下手より以前の家主杢右衞門出來り、

杢右　おゝ夫婦の衆爰に居たか、今横濱から電信で、便りがあつて家への使ひ、明日出帆するところ、急にお上の御用が出來、立ちが二三日延びたゆゑ明日息子がゆつくりと、逢ひに來るとの此の知らせ。

ト電信局の書附を出して見せろ。

仙右　そんなら立ちが延びたとか。

むつ　こりやまあ、夢ではないか。

五郎　なあこれで双方悦びの、

左吉　重なるにつけ悪人も、

六三　改心したとあるからは、

お園　お慈悲を願つて命を助け、

むつ　まことの人になる時は、

吉　天麩羅銀次も大きな仕合せ、

五郎　から物事が極つたら、

左吉　善は急げといふからは、

杢右　此差配人が先棒で、

仙右　お慈悲願ひに、

ト立上るを、木の頭、

皆々　出かけませう。

ト引張りよろしく、波の音、本釣鐘の寺鐘にて、

ひやうし幕

繰返開花婦見月（終り）



是は今日の新聞と街を呼で賣歩く次第は然も熊谷の宿屋の湯場で散切の書生と見られし乳房より明す女に御家直が横に車の強れだり餘儀なく結ぶ夢さめて右膳へ貢の其金も位牌へ頼み故郷を後に繁が伊香保にて追手の小助に捕へられ盗みの詮議に惣助がなさけ荒氣の折檻を留めて戀慕の神保氏罪を許して權妻にかはす小梅の枕橋うきに迫りて身を投るおよしが迷ひさつぱりと晴れて悦ぶ利右衛門が斷しに知れし父の仇世を牛島で倉橋に恨みを返せし烈女おしげが本望遂げし雜報奇談

隅田川容寫

富士額筑波繁山



富士額筑波繁山（女書生繁―四幕）

序幕

筋違萬世橋の場
駿河臺神保邸の場
熊谷宿小松屋の場

役名――書生妻木繁實は右講娘お繁、人力車夫御家直實は倉橋直次郎、厩別當小助、書生牛窪角藏、同馬淵大藏、人力車猿粂、同豚吉、小松屋若い者與助、座頭玄龍、戸倉屋利右衛門、神保正道、同若黨惣助。戸倉屋娘およし、戸倉屋の下女お虎、神保の下女お辰、同お咲、女按摩お鍋、小松屋の下女お仙、其他。

（萬世橋の場）――本舞臺一面の平舞臺、上手萬世橋の棲、橋の袂に瓦斯燈を建て、眞中埒垣の内樹木の植込み・高札に諸木折取るべからずと記し、此後上手へ片漏斗に湯島より聖堂を見たる遠見、上手ペンキ塗西洋の柵矢來、此内租税局の家根を見たる心、總て筋違萬世橋の體、爰に豚吉人力車夫のこしらへにて西洋の赤い玉を持ち、下手に長太の丁稚持運びの手車を側へ置き立掛り居るを、猿粂やはり人力車夫のこしらへにて其中へ這入り、留めて居る。此見得かつぽれの鳴物にて幕明く。

猿粂　いつまで手前が追つ駈けても、どうせありやあ取れねえから、もうあきらめろ〱。

長太　いや〱何でも捉へたら、おれにくれると言つたから、どうしても取らずには置かれねえ。

豚吉　さあ、威張るなら取つて見ろ〱。

ト是れにて豚吉上手へ逃げる。玉は段々上へ昇る。長太は跡を追つ駈ける。猿粂思入あつて、

猿粂　待て〱、斯うしろ〱、手前に鬮を引かせるから、當つたら玉を取らせて遣らう。

豚吉　成程こいつあ面白い、さあ引いて見ろ〱。（ト猿粂木札の附きし細引の鬮を出し、）

猿粂　さあ此鬮に當つたら、手前に玉を取らして遣るが、

若しあぶれたら其稼り、拳骨を喰はせるぞ、

長太　そりやあおいらも合點だが、拳骨より此車を、お前達へたゞ遣るぜ。

豚吉　生利な事を言やあがつて、其車を取られたら、此れから旦那へ歸られめえ。

長太　それは言はずと百も承知さ、さうなるからには飽までもだ。

猿粂　えゝ悪く洒落やあがる、こいつも番頭にはなれねえ代物だ。

長太　さうさ、どうで始終は人力屋だ。

猿粂　えゝ口の減らねえ小僧だぜ。

長太　えゝ口の減らねえ人力車だ。

豚吉　成程毎日爰へ來て、油を賣つて居るだけあつて、悪い事を覺えるばかりだ。

長太　是れもお前達に仕込まれたのだ。

猿吉　えゝ碌でもねえ事を言やあがるな。

猿粂　さあ鬮を引け〳〵。

ト猿粂出す、長太選取る思入あつて、木札の鬮を引く、

長太　さあ當つたから、こつちへ出しねえ。

猿粂　や、こいつ何うして當てやがつたか。

豚吉　忌えましい事をした。

ト玉を出す、長太受取り、

長太　毎日使ひの歸りがけ、油を賣つて居るうちに、お前達の當り鬮へおれが印をして置いた、是れから煮込でも呑つてくれゝば、直に種を教へて遣るぜ。

猿粂　そんなら鬮へ印があつたか、酷い事を仕やあがるぜ。

豚吉　まるで生馬の目を拔くやうだ。

長太　お前達は死んだ馬の目で、まるで節穴同然だから、おれが療治を頼んでやらう、さあ此車へ乘つて行きねえ。

ト件の荷車を出す。

猿粂　人を馬鹿にして居やあがる。

豚吉　さうして何所へ連れて行くのだ。

長太　湯島の病院で、佐藤先生に見て貰ふのだ。

猿粂　悪く洒落る小僧だぜ。

ト此内長太玉の絲を車へ結び附け、

長太　おい車屋さん、此車で思ひ出したが、毎晩おいらが習ふ本に、お前達の事が出て居たぜ。

兩人　そりやあ何と出て居たのだ。

長太　車屋は三百の玉を買つて、小僧の爲には損す。

兩人　そりや何のこつた。

長太　それ見ろ、何だか分るめえ、こりやあお前達のする事よ。
兩人　え。
長太　い、どうじ敎だといふ事よ。
猿粂　えゝ、何所まで白痴に仕やあがる。
豚吉　忌えましい小僧だな。
ト此内下手へ車を引いて行き、
長太　又明日遊びに寄るぜ。はい、玉です〳〵。
トやはり右の鳴物にて長太玉の附きし車を引いて下手へ這入ろ。兩人跡を見送り、
猿粂　まだ口の明かねえうちに、とんだ小僧のペテンに掛り飯屋の殘りの三百を、棒に振つてしまつたが、こいつがほんの玉なしだ。
豚吉　どうかあいつの埋草に、小僧は懲りたが大店の、いい若い衆でもつらめえて。
猿粂　持込みの仕事でも仕てえものだ。
トやはり右の合方にて、花道より牛窪角藏、散髮着流し下駄がけ書生のこしらへ、馬淵大藏同じこしらへにて、蝙蝠傘を突き出來り、
角藏　日に増し暖氣の時候に移り、追々薄衣の身輕となりて、大きに安堵の思ひでござる。
大藏　其暖かに引替へて、君も僕も御同樣に、甚だ嚢中淋しいには、ほとんと恐縮仕つる。
角藏　それは心配したまふな、諸事は僕の權にある事、ただ弱りますは車道の塵埃、是れには大きに恐怖いたすが、兎に角あれへ行きたまへ。
大藏　オーライ〳〵。
ト兩人舞臺へ來ろ、猿粂豚吉兩人を見て、
猿粂　若し旦那、御都合まで參りませう。
豚吉　えもし、旦那〳〵。
ト是れにて兩人車屋を見て、
角藏　おゝさう言ふはいつも乘る、馴染の顔の車屋だな。
猿粂　旦那お久し振りでござりました。新宅へ入らつしやるなら、お供をさせて下さいまし。
豚吉　綱引を附けて威勢よく、直に吉原へ持込みませう。
角藏　いや、どうして今から白晝に、吉原などへ行かれるものか、先づぶら〳〵と遊歩がてら、紋左衛門の温泉から、花岡町の火除地で見世物を見物するのだ。
大藏　それから先きはお成道の梅月へ行き、天麩羅で數盃喫した其上で、如何に成行くか未だ確證は得ざれども。

猿雀　そんな事をおつしやらずと、時が早うございますから、是れから、奥山へお供しませう、別品さんの顔を見ながら、揚弓でもお引きなされませ。

豚吉　此頃新子で、滅法いゝ新造が出ましたぜ。

角藏　先々月の日曜より、久しく山へ行かぬから、運動ながら、赴きたいが何しろ嚢中錢なしには恐縮いたす。

大藏　過日より當今は、煙草さへもない始末、幸ひ車屋一服いたしたまへ。

猿雀　さあ〳〵お上りなさい、煙草は惡うございますが、煙管は今通しました。

　ト吸煙草入れにマチの箱を出す、

大藏　酒は我慢が出來るけれど、煙草ばかりは我慢が出來ぬ。

角藏　君うまくのたまふな。酒なら我慢が尚出來まい。

大藏　是れは眞に當てられました。

角大　はゝゝゝ。

　ト端唄の合方になり、花道より妻木繁、散髪鬘シャツポを冠り、羽織着流し駒下駄がけ、書生のこしらへにて洋杖を突き、片手に嚢口の胴亂を提げ出來る、少し跡より御家直逆熊の蔓、人力車夫のこしらへにて、毛布を腰に卷き出來り、

直　若し旦那、御都合まで如何でございます、お安くまゐります、若し旦那々々。

　ト呼びかける、是れにて繁後を振返り、

繁　おゝ丁度よい、是れから乘らうと存ぜし所、ちと遠方だがよろしいかな。

直　よい所ぢやあございませぬ、何所までゞも參ります。

繁　そんなら是れから熊谷まで、直ぐ遣つて貰ひたいが、代價は何程で參るな。

直　お高い事は申しませんから、一圓二分下さいまし。

繁　よい共〳〵一圓二分が二圓でも、急いでさへくれるなら、其邊に厭ひはない。

直　二圓下さいますならどんなにも急いで參りますから、車を取つて參りますまで、ちよつとお待ちなすつて下さりませ。

繁　そんなら僕は目鏡の袂に、待合はして居るぞ。

直　直ぐ取つて參ります。

　ト御家直足早に引返して這入る。繁舞臺へ來る。角藏等兩人見て、

角藏　それへござつたは妻木氏。

大藏　君は何れへお出でゞござる。
繁　どなたかと存じたら、牛窪氏に馬淵氏、今日は休暇で御遊歩かな。
角藏　如何にも近邊でありながら、未だ見物をいたさぬから、馬淵氏と兩名で、花岡町の見世物場を見物いたす目的でござる。
大藏　然し君に出會の上は花岡町でもござるまい、是れから直に北廓か乃至は假宅へ登樓いたし、愉快を極めようではござらぬか。
角藏　成程是れはよい思し立ち、妻木氏一つ出掛けませう。
繁　折角のお誘ひながら、今日は遁れぬ私用にて、是れより直ぐに淺草邊へ是非參らねばならぬゆゑ君のお供はいたし難く、殘念の至りにござります。
角藏　御同伴が出來ぬとは、折角目的が附いたのに、はて扨困つた。
大藏　これ。
ト制す。
角藏　近頃殘念にござります。
猿粂　入らつしやいますなら、丁度五大區の車が居ります。
豚吉　お供をさせて下さいまし。

繁　いや只今是れへ參る途中で、約束をいたし參つた。
猿粂　ほい、是れも近頃殘念の至りだ、はゝゝゝ。
トやはり右の合方にて、花道より以前の御家直、御免なさい〳〵と人力を引き足早に出來り、
直　旦那、大きにお待遠でござりました。
ト下手へ車を置く、提灯桐油などを纏め臺箱へ仕舞ひ、草鞋を二足こしらへ居る、猿粂の兩人見て
猿粂　誰がこせえた仕事かと思つたら、御家直の旦那か。
直　おれの所へ、うたひ込みで、漸う口が明けたのだ。
豚吉　見りやあ燈火や雨具まで仕度をして、何處へ行くのだ。
直　おらあ是れから押通しで、熊谷まで引ッ張るのだ。
猿豚　なに、熊谷まで行くのだ。
ト繁これを打消し、
繁　あこれ〳〵、僕が熊谷と申したのは、淺草の熊谷稻荷へ參るのぢや
ト御家直へ言つては惡いといふ仕形にて呑込ませる、御家直思入あつて、
直　へい、熊谷稻荷は承知して居ります、兼、やつぱり七曲りから新堀端がいゝの。

紫東　龍行さまなら、其道だ。
ト角藏大藏思入あつて、
角藏　君は開化の書生に似合はず、龍術所持を値段のさる
か。
大藏　新聞紙にも見えたる如く、鍼灸を施すとは、怒りと
に、不開化と見受けますて。
紫　いや御尤もにはござれど、僕が國元の叔父と申すは、
大の頑固でござるゆゑ、鍼灸術を稽古へ籍り〳〵れと意見
致が着いた故、據なく参覧いたすが、まだ龍術を用ふる
様、なか〳〵龍術を致しませぬに、ほとんと困窮いた
しまする。
大藏　いや左様と申せば、僕等二名もちと困窮の至り
ながら、僕に斯入つて御願がござるが、何とお聞届下さ
れぬか。
紫　して君等に依頼の件とはな。
角藏　外の事でもござらぬが、先年中は鳥貫熊の新富町に
下宿なし、隣室と両名で日々讀書に勉強なせしが、月
に雪雪花に鳥と共通の繁華に気を奪はれ、更に家族の茶
店に遊び変に出れる事を忘れ、婦女が床几に夜を更か
し、多は午後の定客に下女を相手に戯を致し。

大藏　夜更けて歸宿に翌日は、睡眠ゆゑに讀書も出来兼ね、
常には忘れ、夜は芳え、只婦人のみに勉強せしゆゑ、當今
復讐の貧書生。
角藏　今日の休暇に運動がてら、漸く遠歩はいたすものゝ、
鉄中十銭の礼もなく、ほとんと困窮いたした所。
大藏　計らず是れにて出會せしは、是れ誠に天の賜賜
幸一時の會話に二圓程借用したし、偏に君等頼み入る。
角藏　どうぞ御承知下されい。
ト兩人紫に願む、此内御家前は草鞋を揃へ、黴燈頭
人は煙草をなみ呑る、紫思入あつて、
紫　新富町の下宿にては、先づ十名が九名までは大學校
にあらずして、昔殺しの大學医学名所に入るの門なりと、
多分は婦女の地獄にて、君達もそれへ入學でござりまし
たか。
兩人　誠に所謂の至りでござりまする。
紫　今時婦人の漫遊なれば、日本よりもいつその事、サ
ントウイスへ遊行して、婦人の窮理學へ入門なさりませ。
角藏　はゝあサントウイスと申すのは。
大藏　どういふ所でござりますな。
紫　日本より海上凡に千五百里足らずの島にて、男女

の間の馴れ易く、極野靈國と申すこと、君達如何でござりまする。

角藏　早速塾を出門して、どうかサントウイスへ參りたいものぢや。

大藏　いや、助平な牛窪氏だ、はゝゝゝゝ。

角藏　又僕の恥を申さるゝか、いや恥と申せば妻木君、どうぞ二名の願ひの件をば、

兩人　お聞屆けを願ひます。

ト繁思入あつて、

繁　如何にも御兩名のお頼みは、只今是れにて御用達申す。其替り君達に、爰にて願ひ置きまするは本日面會いたせし事は、密々にお願ひ申す。

角藏　金圓お調へ下さる上は、如何にも口外いたしませぬか。

大藏　定めて何所ぞへ穴ッぱいりでござらうな。

繁　いや、聊かも左樣な事はござりませぬ。

ト此内繁懐中より紫の袱紗包を出し、中の紙入より一圓札を二枚出す、此時手紙を一通落す。

然らば二圓お渡し申す。

ト角藏受取り、

角藏　早速のお聞濟み、眞に忝うござる、何れ近日國元より、學費が參らば其時は。

大角　正に返上仕つる。

繁　御返金は御都合次第で、決して苦しうござらぬが、くれ〴〵も面會の儀を。

角藏　聊かも心配したまふな、斯く貧書生に此場にて、お惠み下さる恩返し。

大藏　君の信義は我輩始め、なか〳〵餘人の及ばぬ所、此儀厚く謝しまする。

ト兩人繁に禮を言ふ、御家直思入あつて、

直　旦那、よろしくばお召しなされませ。

ト繁立上り、

繁　然らば君達。

角大　何れ近日。

繁　失敬許したまへ。

ト繁車に乘る、御家直毛布を掛ける、猿象豚吉思入あつて、

猿象　直公しつかり、

猿豚　稼ぎねえ。

直　みんなも早く上げて來ねえよ。

ト御家直轅棒を上げる、猿粂豚吉ちよつと後を押して
遣る、

はい、頼みます〳〵。

トやはり右の合方にて、御家直繁を引いて上手石橋を
渡り這入る、跡合方引流し、

角藏　思ひ掛けなく繁に逢ひ、當てにいたさぬ金札が二圓
手に入る上からは、是れより直ぐに同伴して。

大藏　花園町の秋葉へ赴き、運動巡りの杉林、絹絲渡りを
一見なし。

角藏　御成道の梅月で、天で一杯きこし召さう。

ト兩人立上る。

豚吉　旦那、御成道の天麩羅なら、帳場の側に娘が見えま
すぜ。

猿粂　えゝ、助平な事を言ふなえ。

豚藏　是れも僕等と同輩ぢやな。

豚吉　サントウイスへ行きませうかね。

猿粂　それよりは梅月へ行きてえものだ。

角藏　一所に連れて行きたいが、今見る通りの始末ゆゑ、
今日の所は願ひ下げだ。

大藏　然し煙草を借りた替り、殘は必ず持つて來て遣はす。

豚吉　それは有難うございます。

ト角藏大藏上手へ行きかける、
旦那殘を忘れちやあいけませんぜ。

角藏　それは僕の懷中時計だ。

豚吉　なぜでございます。

角藏　はて、胸にあると申すのぢや。

猿粂　時計がありもしねえくせに。

角藏　何だと。

猿粂　いえ、時計を忘れないやうに願ひます。

角藏　どれ、花園町を。

大角　遊歩いたさう。

ト端唄の合方にて兩人上手へ這入る。

豚吉　殘りを持つて來るといつたが、冷てえ天麩羅は眞平
だ。

猿粂　あの二人も牛鍋と、矢場へ學資を入揚げる、年中寢
臭え、生利連だ。

豚吉　それに引替へ御家直が、乘せて行つた書生さんは、
男も好けりやあ形もよし、錢放れがよさゝうだが。

猿粂　熊谷稻荷といつたのは、何か差合でもあると見えて、
何でも直の仕度を見るに熊谷へ行くに違えねえが、うた

ひ込みとは言ひながら朝ッぱらから一人占めで、いゝ仕事をしやあがつた。

ト前に落ち散る手紙を見附け、

や、爰に手紙が落ちてゐるぜ。

ト拾ひ上げ豚吉思入あつて、

豚吉　そりやあ今の書生さんが、袱紗包みを開ける時、落したに違えねえ。

猿粂　何と書いてあるか讀めねえが、手前は元が士族だから、此上書を讀んで見ろ。

ト出す、豚吉受取り

豚吉「東京駿河臺神保樣御内にて、妻木繁殿、同苗右膳」としてあらア。

猿粂　それぢやあ今の書生さんは、神保樣に居るお人か。

豚吉　そんなら手前は神保樣と、心易くして居るのか。

猿粂　二三度仕事を頼まれて、心易くなつたから、おれがそれを届けて遣らう。

豚吉　常事の手紙ぢやあ詰らねえが、若しや札でもありやあしめえか。

ト大きく言ふ。

猿粂　これさ靜かに言へ、

ト立上り、四邊へ思入あつて、

一番目方を、

ト床几へ腰を掛け、

引いて見ろ〳〵。

ト兩人頻りに手紙の目方を引く、此模樣よろしく、寄席の鳴物にて道具廻る、

（神保邸庭口の場）――本舞臺三間の間中足の二重、上手一間床の間、此脇三尺の地袋戸棚、眞中太鼓張りの出這入口、下手腰張りの茶壁、上手の褄掃出しの腰窓、平舞臺上手紅梅の立木、四つ目垣石燈籠突這を置く、下手ペンキ塗西洋開き門の裏を見せ、上下建仁寺垣の張物にて見切り、いつもの所枝折戸、總て駿河臺神保邸庭口の體。爰に惣助袴裝若黨のこしらへにて、徳利と茶碗を盆に載せ、酒に醉ひし思入にて臂を枕に寢て居る、お辰下女の裝にて箒と采配を持ち、掃除をして居る、此模樣鞠唄にて道具留る。

お辰　又極りで惣助さんが、旦那のお留守を幸ひに、臺所で呑口を捻り、所もあらうにお座敷で、やれ梅がよく咲

いたの敷松葉が感服だのと、とう〳〵爰で呑ん倒れ、正體なしに大鼾き、呆れて物が言はれぬわいな。

　ト お辰惣助の側へ行き、

若し惣助さん、今に旦那樣がお歸りゆゑ、掃除をせねばならぬから、ちよつと起きて下さんせ。若し惣助さん惣助さん。

　ト 搖起す、惣助目を擦りながら、

惣助　もう呑めねえ〳〵、是れから呑むと留守居が出來ねえ、勘忍してくれ〳〵。

お辰　そんなに爰であやまらずとも、誰がお前に呑ませるものかいな。

惣助　何だ、呑ませるから聲色を遣へ。

お辰　是れはしたり、何を寢言を言ひなさんすのぢや。

　ト 是れにて惣助采配を取つて振りながら、

惣助　さあ新橋と京橋へお乘りなさい、さあどうでございます、エ、ヨイ〳〵。

お辰　それは何の眞似でござんすぞいな。

惣助　分らねえ人達だ、聲色を遣へと言つたから、千里軒の馬車の聲色だ。

お辰　何を寢言を言ひなさんす、ほんに不斷は好い人だが、お酒に醉ふと此位困る人はないわいな。若し惣助さん惣助さん。

惣助　むう〳〵。

　ト 搖り起せども惣助其儘に寢る。誂への合方になり、花道より神保正道羽織袴、シャッポを冠り、駒下駄にて出來る。跡より小助紺に印附の法被、同じ股引、足袋跣足にて人力の毛布を抱へ附添ひ出來り、花道にて、

正道　去年と違つて一月から、今年は寒さが薄いゆゑ、凌ぎよい替りには霜解けで道が惡いな。

小助　下町と違ひまして、山の手は赤土ゆゑ、車の歯が吸附いて、日蔭の所は困り切ります。

正道　それゆゑ今日は骨折りであつた。

　ト 兩人舞臺へ來り、小助駈拔け、

小助　お歸り。

　ト 言ふ、是れにてお辰びつくりして、

それ、旦那樣のお歸りぢや、惣助さん〳〵。

　ト 搖り起しお辰は下手へ出迎ふ、惣助びつくり飛び起き、上手へ向ひ、

惣助　はッ、お歸りでござりまするか。

お辰　是れはしたり、こちらぢやわいな。

ト是れにてびつくり向直る。此内正道は内へ這入る。

惣助　是れはよくお出でなされました。

小助　又惣助さんは寢惚けたのか。

ト正道は笑ひながら二重上手へ來る、お辰袴に手あぶりなどを出す、正道よろしく住ふ、惣助は寢て居たを隱さうと思ひ、下手へ手を突へ、

惣助　今日は嘸お寒うございましたらう。

正道　宅は寒かつたか知らぬが、外は殊の外暖氣であつた。

惣助　いえ、お寒いのではござりませぬ、お暑うございましたらう。

ト もぢ〳〵して居る。

小助　惣助さん、もう何時だらうね。

惣助　さうさ晩飯を喰つたッけか、喰はなかつたけか、ドンを聞かねえから分らねえ。

小助　まあ臺所へ行つて顔でも洗つて、寢惚け目をば覺して來なせえ。

惣助　何をおれが寢惚けるものか。

小助　それでも時を知らねえぢやあねえか。

惣助　何知らねえ事があるものか、言ふだけ遲いといふのを差引け、今日は昨日の今時分だ。

ト此内お辰は正道の懷中物シヤツポなどを片附け茶を出す、正道茶を呑みながら、

正道　成程惣助が申す通り、今日は昨日の今時分、是れより確な時計はない。

惣助　どうだ、おれが勝ちだらうな。

小助　成程こいつア理窟詰めで流石のおれも一番跣足だ。どれ、裏へ行つて足でも洗はう。

ト小助正道の駒下駄を持ち、下手へ這入る。此内正道地袋の戸の明いて居るに目を附け、

正道　今日は留守に何れよりか、誰ぞ人が參つたか。

惣助　いつもは少し居睡りますが、今日ばかりはお玄關にちやんといたして居りましたが、どなたもお出ではござりませぬ。

正道　いや、そちが申すは當てにならぬ。辰、誰も參りはいたさぬかな。

お辰　はい、いつもお出でになりまする、碁のお相手も今日は、どなたもお出でなさりませぬ。

ト正道地袋の内にある、用簞笥の引出しを拔き中を見

て、

正道　在宅いたす折とても、是れへ錠前しかと下し、慥に中へ入れ置きしが。

ト思入。

それとも圍碁に心奪はれ、外へ仕舞ひ置きたるを、我が失念いたしたるか。

トちつと考へる、惣助思入あつて、

惣助　若し旦那様、何ぞ紛失いたしましたか。

正道　如何にも見失ふた物がある。して、妻木が見えぬが宅に居るかな。

お辰　妻木様は今しがた、急な御用があるというて、町へお出でゞござりまする。

正道　むゝ、すりや外出せしとか。

ト考へる思入、合方きつぱりとなり、下手の門より出前の小助案内して、猿爺豚吉の人力屋おづ／＼と附き出來り、平舞臺下手へ扣へ、

小助　旦那様へ申し上げます。

正道　おゝ、何の用ぢや。

小助　外の事でもござりませぬが、是れへ連れて參りましたは、萬世橋に居りまする人力車でござりますが、此手紙を拾ひましたと、態々届けてくれました。

ト正道の前へ出す、正道取上げ上書を見て

正道　こりや妻木繁方へ親右膳より參りし手簡、何れで是れを拾ひしぞ。

ト猿爺前へ出で、

猿爺　へい、私共が目鏡の袂へ仲間の者と寄り集り、客待ちをして居りますと、今日は日曜に引替へ朝から車がから隙で、こぼして居ります所へ、御家直といふ友達の車に乘つてお出でなすつた年の頃は、左様さ、吉幾歳だらうな。

豚吉　廿四五位に見えましたが、瘦ぎすな書生さんが多分落した此手紙、直ぐに追ッ駈けて届けようと出掛けて見ると上書に、神保様とありましたから。

兩人　それでこちらへ持つて參りました。

ト此内惣助兩人を見て、

惣助　おゝ、さういふ貴様は此間、仕事に頼んだ車屋だな。

猿爺　左様でござります、それゆゑお名前を存じて居りますから、早速持つて參りました。

惣助　何しろ親切によく届けて下すつた。

ト禮を言ふ、正道思入あつて、

正道　して其書生は車にて、何れの方へ參りしか、其行先は知るまいな。
小助　その行先は淺草の、熊谷稲荷と申しましたが、
豚吉　それはほんの表向きで、何でも詞の樣子では、中仙道の熊谷へ、
兩人　行つたやうでござります。
正道　なに熊谷の方へ參りしとか、むゝ。
トぢつと思入あつて氣を替へ、
いや其方も心に掛け、忙しい中を駿河臺まで、大きに御苦勞であつた。
小助　よく新聞の廣告にも、落し物が出て居るが、お前のやうな車屋に拾はれゝば世話なしで、斯うして直ぐに屆けてくれるが、左もない日には手紙なぞア、所詮出ッこはありやあしねえ。
正道　惣助、二人の者に禮を遣はせ。
惣助　へい、畏まりました、一錢づゝも遣りませうか。
正道　えゝ、心の利かぬ奴ぢやわい。
惣助　左樣なら、二錢も遣はしませうかな。
正道　其方では取計ひが出來ぬ。
トお辰を呼び囁く、お辰心得奥へ這入る、正道手紙を開き讀む、
猿粂　そんな御心配などには及びませぬ、毎度御贔屓になりますお家、
豚吉　駿河臺と申したとて、目鏡からは僅かの道程、決してお禮には及びませぬ。
惣助　えゝうまく嘘をついて居るぜ。
小助　これさ惣助さん、默つて居なせえ。
ト爰へ奥よりお辰紙包みを持ち出來り
お辰　是れは少しばかりだが、旦那樣がお前方へ、お禮の印に上げますわいな。
猿粂　お禮を戴かうといつて、持つて參つた譯ではござりませぬ。
豚吉　決してそんな事をなすつちやあいけませぬ。
小助　これさ〳〵、そんな義理を立てねえで、下さるものなら夏もお小袖、お貰ひ申して置くがいゝ。
猿粂　まことに是れぢやあ濟みませぬが、
豚吉　左樣なら、お貰ひ申して置きませう。
正道　甚だ些少ぢやが、遠慮なく取つてくりやれ。
兩人　大きに有難うござりまする。
ト受ける。

惣助　それ見た事か、貰つたくせに、そんなら先刻から断らなければいゝに。

お辰　これさ、黙つて居なさんせいな。

ト正道思入あつて、

正道　又是れを縁に、其方達に頼む用があらうも知れぬが、宅は何れに居られるか、ちよつと承はつて置きたいものぢや。

猿兼　大抵は筋違に居りますが、家は下谷の山崎町十五番地の棟割長屋、斎藤兼吉と申します。

ト お辰正道の前へ硯箱を出す、

吉、手前もお話し申して置け。

豚吉　私も同長屋で、込山吉之進と申します。

小助　人力車に吉之進は、豪勢不都合な名前だ。

豚吉　今でこそ人力車、是れでも元は茨城縣で槍一筋の士族でござる。

トちよつと侍の思入。

小助　自慢らしく言ひなさんな、先祖が涙をこぼして居よう。

豚吉　違えねえ、こいつア大きに閉口だ。

ト此内正道両人の名前を書留め、

惣助　禮をお貰ひ申したら、もう用はあるまいから、早く仕事に行くがいゝ。

猿兼　左様なら私共は、お暇いたしますが、

豚吉　何ぞ御用がござりましたら、ちよつとお人を下さりませ。

ト立上る。

小助　御用があつたらお前の所へ、おれが知らせて行つて遣らう。

両人　どうかお頼み申します。

ト枝折戸の外へ出て、両人紙包みを探り見て、

猿兼　今日は朝から三百の、玉を小僧に巻揚げられて、法が附かねえ所であつたが、

豚吉　是れで延喜がすつかり直つた。

ト鞠唄にて両人下手の門へ這入る。跡合方になり、正道思入あつて、

正道　こりや惣助、過日より其方が周旋いたして此方へ寄留いたさす妻木が在所は、慥上州と申したな。

惣助　妻木繁の在所と申すは、上州の伊香保在で、蓮華寺村と申します、邊鄙な所でござります。

正道　むゝそれにて思ひ當りしは、妻木が親の右膳より送

り越したる此一封、只今篤と一見せしに繁が旅行も正しく其件、失せたる品の目的が、こりや判然といたしたわえ。

ト是れにて小助前へ出で、

小助　して旦那様のお留守中に、何ぞ無くなりものでもござりましたか。

正道　如何にも、用簞笥に入置きし、金貨二百圓紛失いたした。

皆々　え。

トびつくりする。

お辰　そんなら、若しや妻木さまが。

正道　はて、人は見掛けに寄らぬものぢや。

トぢつと思入、惣助は面目なき思入にて、

惣助　是れと申すもお留守のうち、一杯遣つて前後も忘れ、とろ〳〵したのが此身の誤り、盗みひろいだあの妻木が親仁は頑固者ゆゑに此惣助と心合ず、不斷絶交同様なれど、實の妹の悴ゆゑ、便つてこられて仕方なく、碁のお相手に旦那様へ、お見目得させたが御緣となり、塾の入費の御苦勞やら町の下宿も爲にならぬと、厚い旦那の思召で百も入らずにお家に泊り、今では御家來同様に一方ならぬお世話になつた、御恩を仇で返すとは、言はうやうない憎い奴、何と申してよからうやら、濟まぬ事をいたしまして、面目次第もござりませぬ。

お辰　私共もお留守を仕ながら、よもや〳〵と油斷せしゆゑ、斯ういふ事になりまして、申譯もござりませぬ。

トよろしく詫びる。

小助　女中方も濟むまいが、先づ第一に惣助さんが、周旋をした繁さん、又二つにはお留守居を怠るからこんな事を仕出來して、只面目次第もないと、そんな曖昧な言譯ぢやあ、こりやあなか〳〵濟むまいぜ。

惣助　さうお前に言はれると、わしは穴へでも這入りたいが、定めし側の了簡では手引でもしたと思はうが、なかなかさういふ譯ではない、其證據といふは今爰で旦那様へ潔白に、命を捨てゝ言譯します。さうぢや。

ト有合ふ手焙りの火箸を取り、咽喉を突かうとする、

小助止め、

正道　狼狽たか、こりや惣助、そちが日頃の正直は、某常から存じ居るぞ。

惣助　ではござりまするが命をば、捨てねば知らぬといふ事が。

小助　はて一途に命を捨てずとも、まあ氣を落附けて話しを仕なせえ。

お辰　旦那様の仰せもあれば、まあ慌てずと待たしやんせいな。

ト皆々留める。

正道　未だ妻木が二百圓を盗みしといふ確證を、得たと申すわけでもなければ、決して心配せぬがよい。

惣助　それぢやと申して、此儘では。

ト死なうとする。

正道　はて、犬死いたすか狼狽者めが。

トきつと言ふ、是れにて小助火箸を捥ぎ取る。

惣助　二百圓といふ金を、紛失さした罪のある此惣助をそれ程に、お助け下さる思召し、何と申してよからうやら、有難涙がこぼれまする。

ト惣助涙を拭ふ、正道思入あつて、

正道　其了簡に引替へて日本は墨西洋の、翻譯物を學ぶ身に、斯様の事件はあるまいと思へど知れぬ人心。

小助　若し此事が探訪の、耳へはひつた曉は、直ぐに明日の新聞紙。

お辰　直きにお名前の出る事ゆゑ、迂濶に人にも話されず。

正道　それゆゑ我も心配いたす。

トぢつと思入、

小助　それぢやに依つて申譯に。

ト死なうとするを小助これを留める、

正道　はて、正直な、

ト件の手紙を懐中するを道具替りの知らせ、

男ぢやなあ。

ト惣助死なうとするを小助お辰留める、此模様合方にて道具廻る。

（小松屋奥二階の場）―本舞臺一面の平舞臺、上手一軒塗骨障子家體、正面西季の花を畫きし袋張りの襖、下手一間脊掛窓、障子を建て、腰張り茶壁、欄間に火の用心と記せし丸い掛行燈、下手へ二階の上り口を出し、總て熊谷宿小松屋奥二階の體。爰にお鍋丸髷鬘着流し、前掛按摩のこしらへ、手探りにて錢勘定をしながら緡へ通して居る。此模様宿場騒ぎにて道具留る。

お鍋　昨夜は深谷の近彦で思ひの外療治をしたから、今夜

は定めし暇だらうと熊谷へ出掛けて來たら、いゝ時にはいゝもので、まだ日が暮れて間がないのに、今ので丁度五人目でお負けに東京者ばかり、四百の療治も一朱になつて、こんな旨い事はないわいな。

　トお鍋錢勘定をして巾着へ入れろ、此内下手より玄龍坊主鬘着流し、座頭の裝にて探りながら出來り、窺ひ居て、唐突にお鍋に抱き附く、

えゝ、びつくりする、誰だえ。

玄龍　おれだ、靜かにしねえ。

お鍋　おゝ玄龍さんかえ、びつくりしたよ、常談もいゝ加減におしよ。

玄龍　これさ、さう無情言はねえものだ、疾うからおぬしにあつ盛で、どこぞで逢ふたら口說かうと思ふ所も熊谷の、宿で逢つては緣の端、さつきも見世で呼び戻さうと、思つたけれどいつその事直ぐ組打に掛らうと思ひは深き盲目同士、二度とは言はぬ一の谷でわしに功名さして下され。

　トお鍋の手を取るを振拂ひ、

お鍋　止してもおくれ、斯う見えても歷然とした亭主のある身、去年の暮に三河から二人手に手を鳥が鳴く東を指して登つて見ると、やれはあ萬歲なんぞはまつちやらこで、國へ行くにも路銀は盡きとう〳〵鼓も賣拂ひ、其日に困る安泊りに二人相談納得づく、才藏さんは三十になるやならずで鴻の巢の陸軍會社の持運び、わたしは宿々療治をして、夫婦中よく暮す身を、無法無體に後から抱き附くなんぞは、まつちやらこ、はい才藏の女房でござんす。

　ト大きな聲でいふ。

玄龍　これさ、靜かにしなせえ、あゝ萬歲樂々々。

お鍋　それ程女が戀しくば、宿で押しッくらでも買ふがいい。

玄龍　さう無情く言はないで、おい才藏のお上さん。

　ト又寄らうとするを、

お鍋　えゝ何をするのだ。

　ト振拂ふ、此機會にお鍋件の巾着を落す、

ほい、しまつた、巾着を落した。

玄龍　え。

　ト是れにて兩人段々と探りながら前へ出で、互ひに鉢合せをなし後へ下ろ、可笑味の合方になり、爰へ階子口より與助小松屋の若い者のこしらへにて、棕梠箒を

持ち出來り、此中へ這入り、兩人の鼻へ箒の先きを出す、是れにて兩人嚔をする、此間に與助箒の柄に巾着を結び附け兩人の顏の先きへ出す、賑かな鳴物になり、與助巾着でじらす、兩人是れを探りながら起ちつ居つ洋犬の思入にて、跡を追ひ三人下手へ這入る、此時障子の內にて、

お仙　お客さま、御飯が濟みましたら、こちらへ入らつしやりませいなあ。

トやはり宿場騷ぎの合方にて、上手の障子を明け、お仙着流し前掛、下女のこしらへにて、丸行燈を提げ案內して出る、跡より繁小楊枝を遣ひながら出來る、お仙直家體の內より座蒲團胴亂などを持つて來り、繁よき所に住ふ、お仙下手に手をつかえ、

爰は見世二階と違ひまして、お馴染樣の外お合宿は一切家ではいたしませんから、お着物などは御心配はござりませぬ。

繁　いろ／＼今宵は其方の、大きに世話になりまする。

お仙　よろしければ只今の內、直ぐお湯に入らつしやりませ。

ト繁思入あつて、

繁　いや新らしき湯は體の毒ゆゑ、ずつと後にいたさうわい。

お仙　東京のお湯と違ひまして、宿屋の風呂は汚れますから、お先きへお入りなされませ。

繁　いや汚れても苦しくないゆゑ、旅人が殘らずはひつたら、大儀ながら知らしてくりやれ。

お仙　左樣なら皆さんが、お入りなされましたらば、直ぐにお知らせ申しまする。

ト立上り、

何ぞ御用がござりましたら、奥二階で聞えませんから、廊下にござります針金をちよつと引いて下さりませ。

トお仙は二階の口へ這入る、繁思入あつて、

繁　流石は名代の旅籠屋だけ、諸國の者と合宿せず、此奥二階に一泊いたすは、五月蠅らなくて至極よいわい。

ト合方になり、階子口より以前の御家直着流し半纏がけにて出來り、

直　旦那、嘸お草臥でござりましたら、最う御飯を上りましたか。

ト下手に住ふ。

繁　おゝ車屋か、今しがた食事はいたした。

直　へい左様でござりましたか、さつき一口召上つたお殘りものをそつくり貰ひ、二本御馳走になりました。

繁　二本と申さずもつと呑めばよいに、然し十時でなければ着くまいと、思つて居たが早かつたな。

直　吹上の饂飩屋から綱ツ引を頼んだので、一時間早うござりました。

繁　是れと申すも其方が、一方ならぬ骨折ゆゑぢや。

ト蟇口より一圓札を三枚出し、

萬世橋から二圓で極めたが、酒手ぐるみ一圓増して三圓そちに遣はすぞ、終日大きに御苦勞であつた。

ト御家直思入あつて、

直　それは有難うござりますが、旅籠を持つてお貰ひ申し、二圓でも多い所へ其上酒手を戴いては、誠にお氣の毒でござりますが、實は此頃人力も顔が多くなりましたので、から隙で居ります所へ旦那樣のお供をしたので、久し振りで三圓といふ、金の顔を拜みまして、生返つたやうでござりまする。

繁　明日は歸りの仕事を見附け、早く東京へ歸つたがよい。

直　いえ三圓お貰ひ申しますれば、歸り仕事を捉めえずと、ぶら〳〵歸りに參りますが、斯うして色々御世話になつた上は、とてもの事に、旦那のお出でなさいまする先まで御供をいたしませう。

繁　其親切は厚く謝するが、是れから僕の行く先きは熊谷の在方にて、車のきかぬ細道ゆゑ必ず一所に行くには及ばぬ。

直　それぢやあ車を爰へ預け、せめてお荷物でも持ちまして、お供をさせて下さりませ。

繁　荷物と申しても蟇口だけゆゑ、決して行くには及ばぬわえ。

ト二階口よりお仙出來り、

お仙　お客樣、お湯がよろしうござります。

繁　先刻頼み置きしが、旅人は殘らず濟んだのか。

お仙　へい皆さんは、最う濟みましたから、直ぐ裏階子から入らつしやいまし。

繁　然らば一風呂はひつて參らう。

トやはり右の合方にてお仙附いて階子の口へ這入る、御家直札を財布へしまひながら、

直　一分の酒手は假宅か、元地へ持込む仕事でなけりやあ人力などにはくれねえが、一圓といふ酒手を出し旅籠

までもしてくれる、こんな種はありやあしねえ、明日もどうか供をして、もう一圓も貰ひてえが、何にしろごま擂りに、是れから湯殿へ出掛けて行つて、脊中でも流して來よう。

ト御家直立上り、思入あつて奥へ這入る、合方になり階子口よりお仙茶盆に土瓶茶碗を載せ持ち出で來る、後よりお芳世話娘旅裝のこしらへ、お虎同じく旅裝下女のこしらへにて附添ひ出來り、

お虎　もし女中さん、わたし共のお座敷は、どちらへ行くのでござんすえ。

お仙　はい、此お座敷の廊下づたひで、一番先きでござります。

ト下手へこなし、

お虎　さうでござんすかえ、さうして爰のお座敷は、書生さんのお座敷かえ。

お仙　はい、左樣でござります。

お虎　もしお孃さん、今爰においでなさつた、書生さんを御覽じましたらうね。

ト お芳耻しさうに、

お芳　さつき途中でお目に掛つた、よいお方でござんすかえ。

お虎　今夜爰へ御一所に、泊らうとは存じませなんだが、嘸あなたお嬉しうござりませうね。

お芳　こんな嬉しい事はないわいな。

お虎　もし女中さん、あの書生さんを知つておいでかえ。

お仙　今夜初めてのお泊りゆゑ、一向に存じませぬが、若し御用なら見世へ參つて、宿帳を見て上げませうか。

お虎　どうぞ後で知れたらば、内證で敎へて下さんせ。

お仙　あのお客は、東京の、菊五郎に似ておいでなさいますな。

お芳　お前よく菊五郎を知つておいでだねえ。

お仙　一昨々年高崎へ、大芝居の出來ました時、私共へお泊りなさいましたわいな。

お虎　さうして其時のお座敷は、何所のところでありましたえ。

お仙　今晩あなた方がお休みなさる、お座敷がさうでござります。

お虎　おやまあ、嬉しいねえ。

ト 大きな聲をする。

お芳　えゝも、びつくりするわいな。

お虎　さうしてあの書生さんは、今湯殿へお出でなすつたが、定めてどこもかも綺麗でござんせうが、ちよつと覗いて見たうございます。
お芳　そんなはしたない事をしやると、父樣に叱られるわいな。
お虎　なに、あなた覗く位は大丈夫でございます、若し湯殿はどこで見えますえ。
お仙　そこの窓から見えますわいな。
お虎　おやまあ嬉しい、どれ助平をやりませうか。
　ト下手窓の障子へ穴を明け、お虎向ふを覗き、
若しお孃さま、ちよつと覗いて御覽じませ、風呂場がすつかり見透しで、まるで芝居の二階座敷か、三井の五階のやうでございます、あまあのお體の白いこと、爰から舌が屆くなら、べろ／＼なめたいやうでございます。
　トお芳心遣ひの思入にて、
お芳　これさ靜かにせぬか、聞えるわいな。
　ト是れにてこちらを向き、
お虎　はい／＼畏りました、どれもう一遍覗いて見ませう。
　ト又覗き、
いつの間にか惡い所へ、ランプの火屋が邪魔に出て、ちらちらして見憎くなつた、えゝ氣のきかないランプだねえ。
　ト思はず柱を打ち、
あいたゝゝゝ。
　ト此時奥より繁湯上りにて出來る、お虎びつくりして飛退く、繁はお芳と顏見合せ、お芳は恥しさうに下手へ來り、お虎の側へ住ふ、お仙茶をつぎ繁へ出す、
お仙　お湯はお熱うございましたか。
繁　いや、丁度入り頃であつた。
お仙　それはよろしうございました、お手拭を掛けませう。
　トお仙手拭を取つて後の掛竿へかける、繁墓口を明け中を尋ねる思入あつて、
繁　櫛を入れて置いた筈だが、こりや何れへか失念したと見える、はて困つた事をいたしたわえ。
　ト此内お虎お芳に櫛を貸せといふ仕形する、お芳恥しき思入ゆゑ、お芳の挿して居る蒔繪の櫛を取つて、
お虎　お頭髮をお梳きなさいますなら、櫛をお貸し申しませう。
繁　是れは御挨拶もいたさず、甚だ失敬でござつた、折

角の思召しは忝けないが、綺麗な櫛が汚れますれば、拜借には及びませぬ。

お芳　いえ〳〵大事ございませねば、どうぞお遣ひなされて下さりませ。

お虎　もしお客様え、私共のお孃さまは、こちらから願ひましても、汚してお貰ひ申したいのでございます。

お仙　あのやうに仰しやいますから、お梳き上げをなされませ。

繁　左樣なら仰せに任せ、暫く拜借いたしまする。

ト繁、髮をかく、お芳是れに見惚れて居る、お虎思入あつて、

お虎　お孃さま、お頭を分けてお上げなされませ。

お芳　それぢやと言うて。

ト恥しきこなし、お虎無理にお芳の手を持添へ、繁の側へ行き、

お虎　御遠慮には及びませぬ、こちらへお出しなされませ。

ト繁の櫛を取つてお芳に持たせ髮を分させる

繁　是れは計らずお世話になり、誠に憚りでございまする。

ト後を向きちよつとお芳と顏見合せ、思入あつて其櫛を取り紙で拭ひ、

大きに有難うございました。

お芳　いえ、其櫛は其儘にどうぞお手元で、お遣ひなされて下さりませ。

繁　有難うはございまするが、初めて面會いたしたこなたに、斯樣の品を貰つては。

ト階子の口にて、

利右　いえ御心配には及びませぬ、其儘お納め下されませ。

ト合方きつぱりとなり、階子の口より戸倉屋利右衛門旅裝好みのこしらへにて出て來る、皆々見て、

お芳　や、さう仰しやるは、

お虎　旦那さま。

繁　さてはこなたは娘御の。

利右　へい、親共にございます。

ト下手に住ふ、繁利右衛門を見て、

繁　おゝ、あなたは先刻上尾の宿にて、お目に掛りしお方ならずや。

利右　成程左樣にございましたが、測らず今宵もまた爰で。

お芳　斯うしてお目に掛りますも、
お虎　それもやつぱり盡きせぬ御縁。
利右　あゝ、娘の思ひが、
繁　え。
利右　いえ、思ひの外お早うございました。
繁　こなたも定めし人力で、熊谷までお出でございませう。
利右　ちと時刻が廻りまして、餘程道は手張りましたが、明日を乘附にいたしませうと、やう／＼是れまで乘り附けました。
繁　見れば東京の方のやうだが、何れへお出でなされまするな。
利右　私共は淺草の花川戸でございますが、元上州の高崎から出ました見世ゆゑ、今度も實家に法事がございまして、娘を連れて參りまするが、さうしてあなたは何の邊までお出でなさるのでございまする。
繁　僕は上州伊香保在に、知邊の者がござるゆゑ、それへ便つて參りまする。
利右　それでは定めてお歸りには、伊香保で湯治をなさいませうな。

繁　如何にも先方の用辨次第、一兩日も逗留なし、湯治をいたしたく存じ居ります。
利右　それは丁度よい御都合、私共も戻りには廻る積りでございますれば、又候其節あなた樣へお目に掛るかも知れませぬ。
　トお芳お虎に向ひ、
お芳　成らう事なら伊香保とやらへ、わたしや御一所に行きたいわいな。
お虎　ほんにお孃さまの仰しやる通り、御法事は旦那さまへお願ひ申して、明日からあなたと御一所に行きたうございまする。
利右　これはしたり、そちまでが何をづか／＼申すのぢや。
　ト繁思入あつて、
繁　何もお愛想はございませぬが、煙草を上りませぬかな。
利右　決してお構ひ下さいますな、煙草は持參いたして居ります。いや、煙草と申せばあなた樣は、若しや先刻上尾の原で、煙草入を落しはなされませぬか。
繁　如何にも麁末な煙草入を、失ひましてございまする。
利右　左樣ならお落しなされましたか、それは丁度よろし

うござりました、實は先程天神橋の立場で拾ひし煙草入、家の女中に聞きますと、今方車でお立ちになつた、書生さんだと申しますゆゑ、段々樣子を聞いて見ますと、何でもあなたと思はれますから、供の者に申し附け、假令車でお出でなさつても、僅か時計で十分か十五分の違ひゆゑ、追附くには違ひないと申し附けて遣りましたが、そちらは急ぎの人力車、こちらは疲れた旅の足、追駈けますうち御案内のうねりし道の上尾の原、とう／＼影を見失ひ空しく歸つて參りましたが、嘸まあ是れを落したお人は困つておいでなさるだらうと、お案じ申す私は片時も煙管を置く事の出來ない大の煙草好きに、申し暮して居りましたが圖らず今晩お目に掛り、爰でお返し申しますれば、大きに安心いたしまする。

繁　それは餘計なお手數掛け、御氣の毒にござりました、いやもう煙草を吞み附けまして、急に吞まずに居ると申すは、とんと手持不沙汰なもので、實は當家で煙管をば借用いたして吞んで居ります。

利右　それに附いてあなた樣へ、ちと折入つて私が、お願ひがござりまする。

繁　むゝ、して僕にお頼みとはな。

利右　ト合方きつぱりとなり
外の事でもござりませぬが、親の口から娘の事を、申すは我が子に甘いやうで、お話し憎うござりまするが、此お煙草入を拾ひし時、これが一目見まするよ、是非ともあれを欲しいものと、口へ出しては申しませねど、自然と樣子に知れますゆゑ、どうか望みを叶へて遣り度く存じますゆゑお見掛け申し、麁末な品を替りに差上げ、あなた樣の御煙草入を、娘へお讓り下さりますやう、どうか願ひたうござりまする。

ト よろしく思入あつて言ふ。

繁　何事かと存ぜしに、それはいとより易きこと、然しながら旅行中、持ち古びたる煙草入、却つて失禮にござりまする。

利右　いえ／＼其御遠慮は大きな違ひ、御所持なされて汚れたのが、却つて娘の望む所。

ト 言掛けるを

お芳　あもし。

ト 利右衞門の袖を引く、

利右　なに、望むと申すは手前こそ、却つて失禮と申すもの、定めてお持ち憎うござりませうが、持參いたせし替

りの品と、お替なされて下さりませ。

ト繁思入あつて、

繁　いや決して替りを受けませいでも、いはゞ一旦落せし品ゆゑ、其儘お遣ひなされたとて、聊か差構ひござりませねば、其品にてよろしくば、御遠慮なくお用ひ下され。

利右　左様なら此煙草入を、娘にお譲り下さりまするか、それは早速のお聞済み、有難うござりまする。

トお芳に向ひ、

そちが欲しがる煙草入を、お客様から頂戴したから、よくお禮を申したがよい。

ト繁煙草入をお芳へ渡す、

お芳　是れも全く父さまのお蔭、こんな嬉しい事はないわいな。

お虎　お嬢さま、早くお禮をおつしやりませ。

トお芳思はずお虎に向ひ、

お芳　もしお客様、誠に有難う存じまする。

お虎　私も有難う存じまする。

トお芳と向ひ合ひ、兩人顔見合せ、

おや、是れは失敬、只今は有難う存じまする。

お芳　又違つたわいな。

トお芳嬉しき思入、利右衛門は風呂敷包より煙草入を出し、

利右　定めしお氣味が惡うござりませうが、此煙草入に只今の、櫛を添へて差上げますから、お遣ひなされて下さりませ。

繁　煙草入は頂戴いたすが、櫛までお貰ひ申しては、却つて氣の毒千萬でござる。

利右　其心配には及びませぬから、どうか是れをお間に合せに、お納めなされて下さりませ。

繁　折角の思召し、強て申すも如何ゆゑ、左様なれば二品とも、お貰ひ申すでござりまする。

ト櫛と煙草入を受ける、此内お仙は掛行燈の心を掻き立て、

お仙　かれこれ十時前でござりますから、皆さまお休みなされませ。

利右　ついから／＼と話し好きに、思はぬ長居をいたしまして、嘸お睡うござりましたらう。

繁　一人旅にて徒然の所、お蔭で退屈を忘れました。

お芳　左様なればあなたさま。

お虎　一人でおよるは、惜しいものだ。
利右　これ。
お虎　いえなに、おツつけ十時でございますから、御ゆつくりと御寢みなされませ。
繁　然らば親御、御縁があらば又重ねて、
利右　伊香保でお目に掛りませう。
ト合方にてお仙先きにお芳煙草入を抱へ、跡へ心の殘る思入、利右衛門無理に急き立てお虎も見返りながら下手へ這入る、繁思入あつて
繁　思はぬ旅人の長話しに、大層湯ざめが致して參つた、幸ひ借りたさつきの褞袍、これなと掛けて居ようわえ。
ト有合ふ褞袍を引つ掛ける、爰へ襖を明け、御家直手を拭きながら出來り、
直　旦那は大層お早いお湯で、直にお上りなさいましたな。
繁　車屋まだ下に居つたか、僕は逆上性だから、長湯は出來ぬその上に、百度以下の熱さでなければなか／＼入つて居られぬわえ。
直　道理で滅法お早うございました、全體書生さん方は皆温湯好きでございまするが、私共は朝湯に行つて熱いのに入り附けて居りますから、實に遲くは這入れませぬ。
繁　遲いと申せば今夜は最う、大分世間が靜かになつた。
直　それに取り分け百姓や上り下りの道者なざア、不斷入れない奥二階、隣座敷も寢ましたさうで、見世とは違ひ別段に、しんとして參りました。
繁　大層靜かになつたなう。
ト時の鐘誂への合方になり、繁立上り、四邊へ思入あつて、
車屋、爰へ來やれ。
直　へい。
繁　はて遠慮せずに、來やれと申すに。
直　へい。
ト御家直側へ來る、繁進み寄り小聲にて、
今入湯をいたした時、何か其方見たらうな。
直　え。
繁　はて、隱さず爰で言ふてくりやれ。
直　いえ、何も私は見たものがございませぬ。
繁　なに、見ない事があるものか、見たら見たと隱さず

に、どうぞ爰で明してくれ。

直　假令旦那が見たらうと、何をお疑ひかは存じませぬが、風呂の中は湯氣が籠り、何が何やらぼんやりと、さつぱり分りやあいたしません。

繁　なに見ないとは申させぬ・慥に見たに違ひあるまい、丁度世間も寢靜まり、誰も四邊に聞手がなければ、決して洩れはいたさぬゆゑ、見た通りを言うてくりやれ。

ト御家直思入あつて、

直　別に風呂場で見たといふ慥なものもありませんが、旦那の脊中を流す時、ちらりと見たのはあなたの乳房、はてなと思つたばかりの事、外にやあ何も氣に附きませぬ。

ト繁ぎつくり思入あつて

繁　これぢやあ、そちは氣が附いたか。

直　あんまり大きうございますから、若しや旦那は。

トいふを冠せて、

繁　あゝこれ、何にもいふな。

ト繁はつか／＼障子の口、御家直は四邊を窺ひ、元の所へ來り、

さう氣が附いたらば隱しはせぬが、實の所は、おれは女だ。

直　え。

トびつくりする、

繁　これ。

ト制す、時の鐘、合方きつぱりとなり、

直　若し、そりやあ本當でございますかえ。

繁　そちに見られた上からは、何しに噓をいふものだ、斯ういふ姿になつて居るのも、此身に志願があつての事、貫くまでは隱したいから、必ず他言をいたすまいぞ。

直　旦那の口から女だと、言はれてさへも氣が附かないから、わしが他言を仕ませんければ、決して誰も存じませぬ、況してあなたのお爲ゆゑ、必ず御安心なされませ。

繁　そちのやうに申してくれゝば、大きに是れで安心いたす。

ト繁墓口より十圓札を出し、紙に包み、

是れは甚だ些少なれど、口留め金にそちに遣はす。

ト出す、御家直受取り開き見て、

直　や、こりや十圓ございますね。

繁　それで何にも申してくれるな。

直　お貰ひ申しては濟みませぬが、是れをお返し申した

ら必定人に言ふだらうとお疑ひがございませうから、言はぬ證據に此十圓、お貰ひ申して置きまする。

ト札を敷き、叺煙草入の中へ入れる。

繁　納めてくれゝば此方も、安心いたすと申すものぢや、何れ其内歸京いたさば、直と尋ねて遣はすが、所は何れに住居るのぢや。

直　お尋ねなされて下すつちやあ面目次第もござりませぬが、御徒士町一丁目十五番地の大長屋で人力車の御家直とお聞きなされば直に知れます。

ト繁鉛筆にて書留め、

繁　斯様に判然と分り居れば、必ず尋ねて參るぞよ。

直　うつかり人にも話されぬ事を聞いても仕方がないが、何ういふ譯でお前さまは、姿をお替へなされまするな。

繁　其譯れは尤だ、斯うして男に姿を替へ學問修行いたすのは、まあ斯うぢや。

ト合方きつぱりとなり、

子育ちがなく幼少より名まで男で育つた體、當今開化の時世には學がなければ人にはなれぬ、それゆゑ市中に女學校も立つては居れど今更に、女になるよりいつその事、書生となつて熟に入り勉強なして一廉の腕に力を得た上で、心に望む志願を貫き、江湖へ其名を賣る所存、先づそれまでは男にて、勉強なさんと思ふゆゑ、必ず他言はいたしくれるな。

ト御家直感心せる思入にて、

直　成程譯をお聞き申すと、色々深い望みのある事、さうして世間へ氣を配り、學問修行なさるのも、容易な事ぢやあござりませぬね。

ト此時宿屋のぼん〳〵時計の音する、

勘定するのを忘れましたが、最う何時でござりませうな。

ト繁懐中時計を見て、

繁　今打ちしは十一時だ。

直　九時か十時と思ひましたら、最う十一時でござりまするか、餘程夜は詰りましたねえ。

繁　嘸おぬしも草臥れたらう、早く行つて寢るがいゝ。

直　有難うござります、あなたもお休みなされませ。

繁　さ、構はずと行くがいゝ。

直　左様なら又明朝、お目に掛りませう。

ト御家直會釋して階子口へ下りる、繁手を叩く、是れにてお仙煙草盆の上へ二つ物、徳利すましの丼を載せ

　二階口より出來り、
お仙　これは先程の御女中さまより、お遣ひ物でござりまする。
　ト繁の前へ置く、
繁　是れは見事な酒肴、然し氣の毒千萬な、よろしく禮を申してくりやれ。
お仙　畏まりましてござりまする。
繁　序に床を延べてくりやれ。
お仙　はい〳〵。
　トお仙上手屋體より夜具蒲團を出し、よろしく敷き、
又御用がござりましたら、何時でも起きて居りますから、お呼びなされて下さりませ。
繁　いろ〳〵大きに世話であつた。
お仙　左樣なら、御機嫌よろしう。
　トお仙上手へ行燈を直し、階子口へ這入る、時の鐘合方になり、繁思入あつて、
繁　四邊に旅人の話しも絶え、晝の疲れに高鼾、是れから先きが不用心、うつかり枕に附かれぬは、肌に附けたる二百圓、此程故郷の親仁より屆いた狀の封じ目も、心に掛る左り前、先祖の代から持ち傳へた田地も今度人手へ渡し、僅な米も金を出し買はねばならぬ瘦世帶、日々の烟りも立兼る燃ぬ生木に咽せ返り、涙の絶えぬ老の愚痴、終には長の病氣となり、僅か五人や七人の世話も屆かぬ私學校、顫へる筆に細々と書き送つたる郵便の、手蹟がかたみにならぬ内、逢うて不孝の詫びもなし、死する命を取り止める獨參湯の金策に、奔走なせど整はぬ矢先きに目に附く二百圓、弓より曲る惡心に盜み取りしも親の爲、よしや此身は縛に附き如何なる所刑に逢ふとても、親の一命助けたく、厚恩受けし、神保氏へ、それも謝さずに難儀をば、掛りや繫がる惣助どの、嘸や恨んでござらうが、どうぞ許して下さりませ。
　ト向うへ思入あつてよろしく詫びる、此時階子の口より、後家直出來り、下手に手を突きうづくまり居る、繁透し見て、
そこへ來たのは、誰だ。
直　へい、私でござります。
繁　おゝ、さういふ聲は車屋か。
直　左樣でござりまする。
繁　何ぞ用で參りしか。
直　ちと、お話しがござりまして。

繁　むゝ、何用なるか爰へ來やれ。

直　左樣なら、眞平御免下さりませ。

ト譴への合方になり、後へ思入あつて進み出で、

繁　疾うに寢たと存ぜしに、何用あつて今時分、此所へ參りしぞ。

直　先刻頂戴いたしました、口留金の十圓を、お返し申しに參りました。

ト紙に包みし札を出す。

繁　一旦そちに遣はした、金を又候返すとは、一向其意を得ざる事だが。

直　さあ、其御不審をなさいますのは、御尤でございますが、先程三圓酒手までお貰ひ申した其上へ、又此金を頂戴しては、濟みませぬからお返し申します。

繁　それは入らぬ義理立てぢや、先刻三圓遣はしたは萬世橋から熊谷まで、乘つた車の代と酒手、又十圓の其金は、密事を包む口留めゆゑ、聊か辭退に及ばぬ事ぢや、遠慮いたさず取つて置きやれ。

ト後家直思入あつて、

直　其口留めの金よりか、外にお願ひがございます。

繁　なに、外に願ひとは。

直　さつきあれから下へ行き、此街道の車引が寢込み座敷へどしごみに、膝を抱へて寢て居りましたが、さて寢附かれぬは旦那樣を、女と聞いて謀叛が兆し、此十兩の口留めを返して一晩お情を、受けたく是れへ參りました。

ト後家直よろしくこなしあつて俯向きゐる、繁思入あつて、

繁　おぬしも目から鼻へ拔ける、狡猾者に似合はざる、左樣な無駄な口を利くな、ちらりと湯殿で乳房を見られ餘儀なく隱さず話したが、さつきも爰で申した通り、女の所業をするがいやさに、眞の男で今日までも、不審を受けし事もなく書生で暮した此體、今更となり馬鹿げた事が、何で出來よう譯がない、一人で淋しく寢られずば宿へ頼んで車を置き、深谷へ行けば娼妓もあり、何でも自由の足りる事、然しそれより此金を、抱いて寢るのが上策だらう。

直　それぢやあ是れほど手を下げて、お頼み申すにお前さんは、聞かれぬと言ひなさるのか。

繁　此件ばかりは不得心ぢや。

直　假令お前がいやだと言つても、無理にも抱いて寢にやあならねえ。

繁　何と。

ト誂への合方になり、後家直思入あつて、

繁　目鏡の袂で朝から晩まで、口を酸くして客を引き、負けずに仕事をした所が、馬車に撼られ此頃は、一里の丁場も五錢か六錢、滅多にならねえ端た錢、一日藻掻いて歩いても一分か二分が關の山で、見附けもしねえ十圓札は三拜なして飛附くほど、欲しいが返すといふ譯は、運せえありやあ一錢で十圓取れる取拔け無盡、手に入らねえ事もねえが、お前のやうな別品は、どうして一生手に入らねえ、然し高の知れたわつち共ゆゑ、其身の程を知らねえ奴と、定めて思ひなさらうが、斯う見えても辻駕から肩を替へてなつたといふ人力車とは譯が違ふ、元は舊幕德川家で、御徒士を勤めた士族の果、其頃近所の茶屋小屋で疫病神よりいやがられた、倉橋直次郎といふ御直參だ。

ト後家直思入あつて言ふ。

繁　其大小をたばさみし、身分を以て一新後、何故官途につかざるぞ。

直　さあそこが名代の頑固連で、二君に仕へぬ心底だとか、何所が何所まで、お供をするとか、理窟を附けて靜岡へ行つた所が茶畑の、世話さへ出來ねえ怠けもの、只賣喰ひに遊んでしまひ、二進も三進も行かねえとこから、又東京へ出掛けて來て、とう／＼家祿も奉還なし、資本に貰つた其金で紅梅燒や鹽煎餅を賣るのもあんまり氣が利かねえから、當時世間が肉流行に、鍋へ切り込む葱よりか五分もすかねえ了簡で、始めたしやも屋ですつかり耗り、首の廻らぬ借金に身代限りをしてしまひ、とうとう果が人力車、それから先きが脚氣を踏出し、養育院の御厄介と、覺悟を極めて居る所、思ひ掛けねえ幸ひは、ちらりと風呂場で見た乳から、心が變つて口留めの十圓札を返したのは、おれが思ひを晴らしたさ、酒手替りの無理口說き、決して、跡はねだらねえから、惡い車に乘つたと思つて、うんと言つてくんなせえ。

トよろしく思入、繁思入あつて、

繁　暴言醜語もそちのやうに、無理にも理窟を並ぶれば、どうやら道理に聞ゆれど、又此方とて長の年月、聊さか人にも悟られず、斯くして居るには容易では、開化の世界は渡られぬが、そこらの邊も其方は、定めて知らずに申すのだらう。

トきつと言ふ。

直　どうしたと。

　　ト合方きつぱりとなり、繁氣を替へ、

繁　貴樣のやうに強面におつゥ凄味で持ち掛けずと、外の事なら身の大事を、聞かれたそちの事だから、聞いて遣るまいものでもないが、小供の折から色氣をば捨てた天窓の散切りに、二重廻りの兵兒帶でしつかり腹を締めて掛り、身の勉強にこゝかしこ、試驗の折も及第して、彼處や此處へ下宿を借り數多落込む書生の交際、君の僕のと口では言へど、心の内はうぬのわれ、學費も遊里で遣ひ捨て懷中錢なき懶惰の友が、誘ひに來れば散步と名を附け、牛肉店で胡坐をかき、些細の事にも權をつけ身のすき鍋で茶碗酒、男も及ばぬ所業をして來て、今更女になられるものか、口留金が不足なら、色氣を附けまいものでもないが、此身の色氣は眞平だ、幸ひ貰つた酒肴、その十圓を肴にして、是れでも存んで寢るがいゝ。

　　ト繁思入あつていふ、後家直進み寄り、

直　さあ、さう色氣なく言はねえで、出來ねえ無心をいふぢやあなし、つい出來る事だから、うんと言つて聞いてくんねえ。

繁　何といつても是ればかりは、氣の毒ながら斷りだ。

直　それぢやあどうでも聞かれねえかえ。

繁　まあ、きゝ憎いの。

　　ト是れにて後家直むつとして、

直　聞かれねえと言やあ仕方がねえ。

　　トずつと立つて下手へ行きかゝるを、

繁　車屋何所へ行くのだ。

直　どこへおれが行くものか、此宿の屯所へ行くのだ。

繁　むゝ、そりや何しに。

直　はて知れた事、男女姿を替へるのは、お布令のあつた天下の禁制。

繁　や。

直　拘引されるを待つて居ろ。

　　ト又行き掛ける、繁思入あつて、

繁　いや、行くには及ばぬ、まあ待ちやれ。

直　むゝ、それぢやあ賴みを聞いてくれるか。

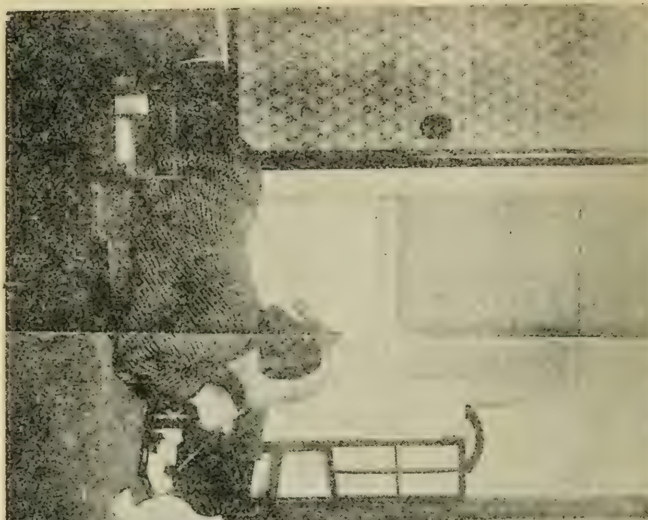
繁　さあ、それは、

直　よもやいやとは言はれめえ。

　　ト繁もう是れまでといふ思入あつて、

繁　隱す素情が顯はれゝば、親の貢も心に任せず。

直　や。



繁 こいつア心を入替へて。

ト有合ふ酒を茶碗へつぎ、ぐつと呑んで、

さあ一杯呑みやれ。

トさす、後家直受けて、

直 思ひ掛けねえ此酒は、

繁 心に隨ふ固めの盃。

トついで遣る。

直 そいつア何より有難い。

ト酒を呑む、繁は天窓の痒き思入にて以前の蒔繪の櫛を取上げ、天窓をかき其儘横へさす、後家直四邊へ思入あつて、

それぢやあ今夜は、おれと一所に。

ト側へ寄る、繁顏を見て忌々しい奴だといふ思入あつて氣を替へ、

繁 何だか極りが、

ト女のこなしにて兵兒帶を前へ廻すを木の頭、

わりいねえ。

トちつと思入、御家直はしめたといふこなし、時の鐘割竹の音にてよろしく、

ひやうし 幕

二幕目

蓮華寺村閑居の場
伊香保湯治場の場
駿河臺神保邸の場

役名――妻木繁、人力車御家直、廐別當小助、湯場の若い者喜助、人力車猿爺 同豚吉、醫者山井養仙、中間杢助、同專平、妻木右膳、戸倉利右衞門、神保正道、同若黨惣助。戸倉屋娘お芳、神保の下女お辰、湯場の女お山、其他。

(妻木右膳内の場)――本舞臺一面の平舞臺、上手一間反古張りの障子屋體、正面上の方一間の押入戸棚、此内三尺を佛壇に仕切り、中に佛具よろしく並べ、前面へ四枚の小障子を建切りあり、此下手一面鼠の破壁、此前に手習机大分積み上げてあり、下手の棲半窓のある鼠壁、正面の柱へ私立學校妻木と記したる札を掛けあり、いつもの所藁屋根附きの門口、此外一面玉椿の生垣、よき所に榎の大樹、總て片田舍私立學校休業中の體、上の方に蒲團を敷き、此上に右膳惣髪、切繼ぎ裝にて、上へ搔卷を引掛け住ひ居

る、眞中に山井養仙胡麻鹽の惣髮、羽織着流しの醫者にて住ひ、傍に古びたる手水盥ある事、下手にお倉雇ひ婆の拵らへにて穴だらけの古き手拭を、膝の上にて皺を伸し疊んで居る、此見得在鄕唄にて幕明く。

養仙　いや、四五日後に診察いたしたとは大分腹力が附いて參つたから、此分では遠からず杖でも突いて、近所位は歩けるやうになるでござらう。

右膳　是れと申すも先生の御丹精、それにて安堵いたしまする。

お倉　一體こちらのお師匠さんは、何時見てもお若いお人で、御丈夫なお方であつたが、今年はいつより餘寒が強く御持病の足が痛み、歩く事がならぬといふは、ほんにほんにお氣の毒な。さうしてまあ此病氣は、何といふ病でござりまする。

養仙　されば此病症は風毒の滯りで、あがきの筋を縮めるゆゑ、それで斯樣に兩足とも引きつツて痛み出し、歩行が自由にならぬのぢやて。

ト件の盥にて手を洗つて居る。

お倉　はい、お手をお拭きなさい。

ト手拭を出す、養仙手に取り見て、

養仙　婆さん、是れはあなたの手拭か。

お倉　はい、東京土產に貰ひました、誂へ染めでござります。

養仙　大分時代が附いて居るが、何時こなた貰はしつた。

お倉　左樣さ、いつでございましたか、何でもわしが新造ツ子の時分、新屋の小旦那に貰ひました。

養仙　それでは彼れ是れ六十年にもならうに、物持のいゝ婆アさんだ。

お倉　三年程あと餘所行きにしましたが、最う取る年で先きがないから、思ひ切つて下しました。

養仙　斯ういふ手拭は東京へ持つて出て、內國博覽會へでも出したらよからう。

お倉　錢儲けにでもなりますかね。

養仙　はて、餘りぼろ〳〵して珍らしいから。

お倉　えゝもう、口の惡い養仙さまだ。

右膳　いや〳〵、養仙さま、晝は左のみではござらぬが、夜分になると引ッ切りなく咳が出て難儀いたしますが、何うか此咳の止ります御配劑はござるまいか。

養仙　それでは加減をして進ぜよう、婆さん藥を煎じさつ

しやつたか。
お倉　いえ今朝一貼煎じたきりで、まだ後は煎じませぬ。
養仙　そんなら加減をいたすから、其薬を出さつしやい。
お倉　はい／＼畏りました。
ト手文庫より薬の入りし袋を出す、養仙受取り、
養仙　今日は薬籠を持参せぬゆゑ、宅で調合をして届けませう。これ婆さん、用がなければ一所に行つて下さい。
お倉　左様なら、御一所に参りませう。
右膳　それは早速の御配劑、何分よろしくお頼み申す。
養仙　いや最う斯様に御不快では、教授をなさる譯にも行かねば、定めて生徒も休みでござらう。
右膳　此間まで半日づゝ教授をいたして見ましたが、皆六歳から十歳までを、頭にいたす小供等ゆゑ、兎角に世話が成兼ねまして、それ／＼宅で稽古するやう、申し含めて歸してござる。
養仙　いや皆幼年の小供のみゆゑ、お世話のやける事でござらう。いや、小供と申せば右膳殿にも、お娘御がござるさうなが、今は何れにお出でゝござるな。
右膳　仰せの如く一人の娘はござれど、是れとても幼年よりして文事を好み、女教師にでもなる所存か五ヶ年以前修行の爲に東京へ出て只今では、然るべき教師の方に寄留いたして居るとやら、行末何になりまするか、知れたものではござらぬて。
養仙　いや／＼それは結構でござる、何藝にても勵みまするには名に負ふ天下のお膝元ゆゑ、東京に限りますて。
右膳　先頃手前が病氣の事も、東京表へ書翰に認め、郵便にて出しましたれば、近い内には娘方より多分便りがあるでござらう。
養仙　それは何よりお樂しみな事ぢや。
ト此時七輪の土瓶煮えたつゆゑ、
お倉　もし養仙さま、藥土瓶が煮たちますが、まだお歸りなされませぬか。
養仙　おゝ、餘談で大きに遲くなつた、どれ／＼お暇いたしませう。
右膳　まだよろしいではござらぬか。
養仙　何れ又明後日、お見舞申してお話し申さう。
右膳　病中ゆゑ麁茶さへも献じませいで、甚だ失敬。
養仙　いや、こちらの茶なら吞まぬが勝手、いやさ、却つて御配慮なされぬがよろしい。
ト此内お倉門口へ履物を直し、

お倉　さあ養仙さま、參りませう。
養仙　右膳どの、お大事になされい。
ト在郷唄、時の鐘になり、養仙先きにお倉附いて花道へ這入る、時の鐘打上げ、床の淨瑠璃になり、
〽春の日も身に秋を知る山里の、蓮華寺村の侘住居、妻木といへど連合は、三年以前に世を去りて、淋しく暮す年の坂、越えて病の足惡く、右膳は獨かこち言、
ト此内右膳膝行ながら、そこらを片附ける事などよろしくあつて、
右膳　人を使へば使はるゝとは、はてよく言うたものぢやなう。
ト床の合方になり、
一人の娘が東京へ修行に出でし其後に、女房めは病死なし、不自由の上に又候や、年々惱みし足痛も今年は強く發せしゆゑ、隣家の者を雇ひしかど、兎角に世話の行屆かず、かてゝ加へて此程は、溜飲積にて難儀せしが、養仙老が配劑の藥が適當いたせしやら、一兩日は痞も薄らぎ、次第に氣分もよろしくなりしは、是れも開化の蔭なるか、かゝる邊土の山里を見舞うて歩く藥醫さへ、免許を受けて配劑なせば、以前に替る藥の效驗、何うぞいたして今一度、全快したいものぢやわえ。
〽惱む病苦も良藥の、效驗に足のたつか弓、矢よりも早き人力の、便利に旅も書生裝。
ト此留り在郷唄になり、花道より前幕の繁書生羽織、兵兒帶、下駄がけにてシヤツポを冠り、天鵞絨の襟卷にて、蟇口の胴亂を提げ出來り、花道にて、
繁　久方振りにて故郷の空、歸りて見れば以前とは樣子の替る家屋の築造、分けて田野は改正に道路の修繕行屆き、開化に進む土地の狀、只替らぬは年經りし我が家の軒のあの槐、どりや御病氣を見舞はうか。
〽我が家の門に佇みて、樣子如何にと差覗き、
ト繁舞臺へ來り、門口より内を窺ふ事あつて、
お床の上にござるのは、如何と案ぜし現の父上、思ひの外に御病氣も、御重態ではなき樣子、先は是にて安堵いたした。
〽威儀を改め外面より、
お賴み申す／＼。
〽音なふ聲に、
ト右膳聞き耳を立て、
右膳　はい／＼、どなたのお出でか存じませぬが、只今雇

ひの老婆も居らず、手前はかゝる病中にて、歩行も心に任せねば、お構ひなくとお通り下さい。

〽容と思へば居ながらに、斷りいふも禮なれや。

ト繁門口を明け、

繁　お父上、繁めでござりまする。

〽ずつと這入りて門口を、締める姿を見てびつくり、

ト右膳思入あつて、

右膳　や、そちや娘、やれ／＼よく參つた、さゝ、是れへ來やれ／＼。

ト合方になり、繁襟卷にて塵埃を拂ふことなどよろしくあつて下手へ住ひ、

繁　御重態と心得まして大きに心痛いたせし所、先は御安泰の尊顏を拜し僕に於ても恐悅に存じまする。

右膳　おゝ、そちも無事にて目出たいぞよ、さて先頃郵便にて、知らせ遣りしが屆きしゆゑ、我が病氣をば心配なし、立歸つて參りしか。

繁　御紙面を拜見いたし、取る物も取り敢ず、立歸りましてござりまする。

右膳　おゝ左樣か、實は久しう逢はぬゆゑ、どのやうに成り居つたかと逢ひ度う思ひ居つたるに、以前に替らぬ男子の行ひ、いや堅苦しくなり居つた。

繁　先年お暇を賜はりまして學問修行の志願により、東京へ出でまして後、母上には敢ない御死去、その時一度立ち歸るべきを、入學中にて寸暇を得ず、存じながらの不孝、跡御疎遠の段幾重にも御赦罪願ひ奉りまする。

右膳　何の／＼修行中ゆゑ暇のなきは、左こそと推察いたし居れば、疎遠の詫びには及ばぬぞ、して其方が世話に相成りし、東京の惣助どのも息災で居らるゝかな。

繁　伯父上事も御壯健にて、御精勤で居られまする、何は扨置き伺ひ度きは、御不快の御容態、當今如何にござりまする。

右膳　そちが當地に居つた時分も、毎年起りし持病の足痛今年は餘寒の強きゆゑか例より念が入り、其上餘病の溜飮積にて晝夜差込み難儀せしが、漸く昨今快氣に赴き、痛みも少しく薄らぎたれど未だ歩行が叶はぬゆゑ、是れにはほとんと當惑いたす。

繁　それは嘸かし御難儀ならん、して御病中の御介抱は、誰がいたし居りまするな。

右膳　幸ひ隣家に作男の太郎助後家と申す老婆が、其日に迫り居りしゆゑ、それを雇うて病中の、世話を萬端頼み

置くのぢや。

繁　すりや其ものが御病中の、御介抱をいたしまするとか、して其老婆は何れへか參りましてござりまするか。

右膳　只今醫者へ藥取りに、遣はしたれば宅には居らぬ。

繁　左樣にござりまするか。

〽他見のなきは豫てより、望む所と打ちうなづき、丁度幸ひ。

右膳　や。

繁　いえ、丁度左樣なお雇ひがござりまするので、御病中よい御都合でござりました。

〽言ふ物ごしは現在の、父が見てさへ女とは見えねど案じる親の常。

ト右膳思入あつて、合方きつぱりとなり、

右膳　今開明の世の中に公然人には話せぬが、我等夫婦は子に緣薄く、そちが產れぬ其前に、男女で三人死亡なし、其後そちが出產せしゆゑ、女子に男の名を附けて男子となして育つれば成長なすと聞きしゆゑ、まだ其頃は呪禁や陰陽博士の敎へなど人の信ずる時なれば、終に男子の姿となし、幼同士の遊びにも、女子と交りせざりしゆゑ、眞の男子も同樣にて六歳の折學に入り、敎へ賢しく覺ゆるは天晴父の子程あると、褒めそやされし我が悦び、とても事に洋學をも學ばせたしと思ふ折、東京へ出て入學なし勉強したいと望むゆゑ、男子の姿を幸ひに道ならざれど書生と僞り、我とは心合ずして不和なる妻が一人の弟、惣助どのを便りとなし、學問修行に東京へ出府なしたき望みに任せ、五年後に遣せしが、嚴しき布告もあるものを、女子を男子と僞りしは、今々思へば子の愛に溺れしまゝの違式の罪、危ふい事でありしよなあ。

〽過ぎ越し方の物語り、聞くに繁も胸の雲、晴れぬ夕の仇嵐。

ト此内繁思入あつて。

繁　其身の上をも、誰一人悟りし者はあらざりしが。

右膳　や。

繁　いえ、猶も女と悟られぬやう、心を用ひてござりますれば、隱し果せて故郷へ、お尋ね申してござりまする。

右膳　さゝ隱す事こそ漏れ易しと、誰知るまいと思ふは愚なり、其間違ひのなき内に、蕾の花も早や年頃、男姿を改めて、女敎師となり今日より、父の側にて手助けなし、故郷へ錦を飾つてくりやれ。

繁　そりやはや、父上御一人かゝる邊土へお置き申し、子としてお側に居らざるは不孝の至りにござりますれど、今一年も勉強なされば、此身の志願を貫きまする期に至らねば歸縣の儀は、何卒今より一ケ年御猶豫願ひ上げまする。

右膳　そりや一年が二年にても待つのは易き事ながら、ただ案じるは違式の罪、事なきうちに生來の女子に返りて形を改め、父に安堵をさせてくりやれ。

繁　仰せに任せ近々に、姿を替へるでござりませう。

右膳　おゝそれでこそ我が安堵、必ず猶豫をいたすまいぞ。

〽案じるも猶子を思ふ、親の慈悲こそ有難き、こゝぞ機嫌のよきしほと、繁は所持の胴亂より、何か一品取り出し、

ト件の蟇口より金包を出し、

繁　さて久々にて、土產の品と存じましたが、火急の出立心に任せず、こりや御病氣のお見舞かたがた、心ばかりの僕がお土產、何卒御受納下さりませう。

〽父が前にと差出せば、

右膳　なに、土產をくれるとな、無用にいたせばよい事を、

〽打ちほゝ笑みて手に取上げ、見る間にかはる父の顏。

ト右膳不審の思入にて、

これ娘、病氣見舞の土產と申すは、こりや金貨にはあらざるか。

繁　失敬にはござりますれど、御病氣のお手助けと心得まして持參いたせば、お心置きなく御費用に、お遣ひなされて下さりませ。

右膳　むゝ、して此金貨は何程ある。

繁　はッ、二百圓ござりまする。

右膳　なに、二百圓とな。

〽聞くもびつくり手に取りて、見るも我が子にふさはしからぬ、土產の金の出所を、糺さんものと何氣なく。

ト右膳思入よろしくあつて、

父の病苦を助けんと、貢の金の二百圓、其眞情は忝けないが、此土產は受取れぬ。

繁　えゝ、そりや何ゆゑでござりまする。

右膳　そちや東京で何れへか、拜命なして出仕いたすか。

繁　さあそれは。

右膳　いやさ、學問修行に自宅を出しより、教師の月謝下宿の食料、書籍を求むる價まで、旣に去冬の始めまでた

しなきながら我が方より、月々送りし其方が、僅か半年立たざるうち二百圓の此金貨、如何いたして手に入りしぞ。

繁　さあそれは。

右膳　身分相應二分か三分、菓子料なりと持參いたさば、悦ばしく受納いたすが、不相應なる二百圓、不義の富貴は望みでないぞ。

〽今まで機嫌の父右膳、金の包みを投返し、怒る胸さへせき入れば、直ぐな氣質も横道へ、言ひ紛らして納めんと。

ト繁思入あつて、

繁　父上、こりや斯樣でござりまする。

ト合方きつぱりとなり、

そりや早や只今仰せの如く、昨年までも國元より學費を送つてお貰ひ申し、修行いたせし身の上に、其御疑念もござりませうが、圖らずかゝる金圓を得たる仔細は去年の末、親友の周旋により米國の、ある異人の許へ日本語學の教授に雇はれ、一日種々の談話中故鄕に殘る一人の父へ貢をいたしたきが、寒生ゆゑに心に任せず不孝の至りと歎息せしを、流石は世界隨一の文明國と稱されし異人の度量大にして、僕が悲嘆を憐みしか是れにて父へ孝養を心の儘に盡されよと、惠みくれたる二百圓、誠に天の賜なるかと異人が厚き信義を謝し、折がなあらば國元へ送らんものと存ずる折、火急の御紙面到來にて御病氣の由承知いたし、爰ぞ御恩を報ずる期なりと、三日の間の暇を乞ひ受け、取敢ず持參いたせしことなれば、不正不義なる金圓を、父へ呈上いたすにあらず、斯かる次第の二百圓、お心置きなく御費用に、お使ひなされて下さりませ。

〽淸くはいへど濁江の、水は淀みて底知れず、

ト此内右膳思入あつて、

右膳　して其異人は米國にて、何と言はれる異人にて、居館は何れいづくなるぞ。

繁　さあそれは、

トちよつと思入あつて、

即ち米國サンフランシスコ、テイフルドといふ異人にて居留地は築地に居られまする。

右膳　すりや、其異人に。

繁　左樣にござりまする。

右膳　はてなう。

ト是れより床のメリヤスになり、右膳思入あつて、

故郷を出でゝ五年が間、假令いかほど勉強なすとも、未だ二十に滿たざるそちが、文明國の異人へ對し、教授をいたす學力は、まだあるまいと思はれる、さ、それも父への孝道を、不便に思ひ異人どのが、さしたる役にも立たざるそちに、二百圓といふ金貨を惠みくれしとあるなれば、空には思はぬ忝ない、恩義は恩義此方より書翰を以て謝せし上、金貨は受けぬと申し送れば、それは其儘返納いたせ。はて、斯く閑靜なる住居はなせど、所に古く居る上に正路を守る我なれば、區戸長始め四隣の者まで、厚く世話をばいたしくれるが、田地田畑貯への金子を持ちしに勝りし強味、假令財寶なきとても生徒の世話をいたし居れば、彼等の親より貢を受け、今日煙りを立つるに困らぬ。いやなまじ黄金を得る時は火難賊難心に掛り枕を高くふせられぬ、矢張り貯へなき方が心易くて夜も寢られう。

ヘ貧苦に窶き懷を見せじと親は小搔卷、身に引き掛けて諭しける。

ト右膳宜しく思入、

繁　すりや、父上には斯程まで、事明白に申し上げても、御疑念あつて此金圓、御受納なされて下さりませぬか。

右膳　父は受けぬ、戻してくりやれ。

ヘそれと言はねど白浪を、諭すは深き慈悲の海、さては淺瀬を知られしかと、思へば汐に逆らはず。

ト繁思入あつて、

繁　左程に父の仰せあるを、是非にと申すは却つて御不興、此趣きを異人に語り返納いたすでござりませう。

右膳　おゝ、それでこそ我も安堵ぢや、然らば是れより片時も早く、歸京いたして異人どのへ、慥に返納いたすがよい。

繁　左樣いたすでござりませうが、せめて今宵はお側にて御介抱なと仕り、明朝未明に出立がいたしたうござりまする。

右膳　我れも今宵は留め置いて、篤と教諭もいたしたけれど、娘と流布なすそちが姿、斯かるさまにて居る時は布告に悖る他見の虞、雇ひの歸らぬ其うちに、片時も早く歸京いたせ。

繁　成程他見を厭ひますれば、左樣いたすでござりませう、

右膳　宅を出でなば村内を、面體隱して通り拔けよ。

繁　はい。
〽急き立てられて兎や角と、思ひ當りし佛の日。
ト繁思入あつて、
右膳　父上今宵は母人の、お逮夜にござりまするな。
繁　誠にかゝる病人ゆゑ、とんと失念いたし居つた。
右膳　御死去の節も在合さず、又も是れより一ケ年程立たねば歸縣をいたしませねば、せめては母の御靈前へ、參つて行きたうござりまする。
繁　然らばなるたけ早くいたせ。
右膳　はッ。
〽いそ／＼立つて佛壇の、障子はさつと明くれども、明けて言はれぬ山吹の、色香を包む二百圓、殘し行くとは氣も附かず。
ト此内繁上手の佛壇の障子を明け、線香を上げることよろしくあつて、件の金包をそつと香爐の前へ置く、右膳は是れに心附かず思入あつて、
右膳　あゝ、申すも愚なる事ながら、斯く成長せし姿をば、世に亡き妻が見るならば、
繁　御靈前にて御回向を、いたすより猶勝りたる、
右膳　其悅びは如何ばかり、

繁　それも草葉におく露と、
右膳　消えて空しき玉の緒の、
繁　繰る珠數よりも憂き事を、
右膳　積る山家に花もなく、
繁　細き煙りが名のみの香、
右膳　世にも侘しき、
兩人　回向ぢやなあ。
〽見ぬ間としめる破れ障子、中に包みも入相の、早暮近き鐘の音に、
ト此内繁佛壇の障子をしめる、時の鐘になり、
右膳　おゝ、あの鐘は最早五時、暮れては道も不都合ゆゑ。
繁　車で急がせ行く時は、高崎までは日のあるうち。
右膳　さゝ、回向が濟んだら早く行きやれ。
繁　左樣ござればお父上、隨分共に御機嫌よろしう。
右膳　おゝ、そちも達者で勉強いたせ。
繁　お暇いたすでござりませう。
〽急ぐ心はありながら、名殘惜しげに悄々と、出行く姿見るに附け又も樣子を案じやり、
ト此内繁愁ひの思入にて身仕度をなし、下駄を履き出ようとするを、

右膳　娘、待ちやれ。

紫　はツ、何御用でござりまする。

ト跡に返り下に居る、右膳思入あつて、

右膳　返す／＼も其金を、元へ戻して姿を改め、父に安堵をいたさせくれよ。

紫　畏りましてござりまする。

右膳　はや行け。

紫　おさらばでござりまする。

〽さらばといへど去り兼ぬる、親子の縁恩愛に引かれて戻る心根は、流石に女こなたにも見送りたさの足立たず、悩む病苦に咳入る聲、聞くに堪らず門の戸を、明ける途端に見合す顔。

ト此内紫門口にてよろしくこなし、右膳立たうとして足の痛む思入にて咳入る事よろしく、紫是れを聞いてつか／＼と跡へ戻り、門口を明け、兩人顔を見合せ、

右膳　まだ行かぬか。

紫　お大事になされませ。

〽故郷を跡に出でゝ行く。

ト紫シヤツポを冠りながら胴亂を提げ一散に花道へ這入る。

〽跡にやう／＼父右膳、門の口まで這ひ出でゝ、

ト右膳膝行ながら門口の所へ來り、向ふを見送り、

右膳　物ごしといひ氣質といひ、男子に勝る彼れが所業、女でなくば力とも我が片腕ともなるべきに、何で女子には生れしか、はて殘念の事ぢやなあ。

ト床の合方になり、右膳門口をしめ元の所へ來り、

然るにても心得ぬは書生の身にて、二百圓といふ金を所持し參りしは、よもや賊をば働いて親に難儀を掛けるやうな、性來にてもあらざるゆゑ、左樣な事はあるまいとは思へど受納いたされぬは、

〽人の非道を正道へ、導く爲の私學校、

教師の端をもいたす身が、今開明の聖代に斯く曖昧なる出所の、故なき金貨を二百圓娘の手より受取りしと、人に口外いたされず、萬一あれが不正なる金にてあらば親の身にて、

〽却つて事を荒立てゝ、彼れに罪科を負はするも。

不便と思ひ餘所ながら說諭を加へ戻せしが、異人の手より貰ひしといふは僞りにて、跡の難儀を辨へず盜みをなして二百圓、持參いたせしものなるか、何に附けても久々にて別れし娘が尋ね來て、悦びあれば悲しみと、苦勞

の絶えぬ事ぢやなあ。
〽よきに附けてもあし痛みの、案じ煩ふ折からに。
ト又在郷唄になり、花道より以前のお倉、藥袋と椿の枝を持ち出來り、花道にて、
お倉　ほんに〳〵お醫者といふ者は、外に藥取りも居ないくせに容態振つて人を待たせ、僅か二貼か三貼の藥を調合して居るうちも、えへん〳〵の咳拂ひを、幾つ聞いたか知れやあしない。
ト言ひながら舞臺へ來り、門口を明け、
お醫者さまで待たされまして、大きに遲くなりました。
右膳　いや、其遲いのがこつちの幸ひ。
お倉　えゝ。
右膳　いやさ、幸ひ今日は快いゆゑ、其心配には及ばぬて。
お倉　左樣ならば此お藥は、加減いたしてござりますると、養仙さまが仰しやいました。
〽藥袋を差出す、皺枯れし手に花の枝、
ト右膳件の花へ目を附け、
右膳　見れば見事な椿ぢやが、どこからこなた取つてござつた。

お倉　はい、養仙さまの庭にござりましたから、お師匠さまがお足が不自由で、花を見たくも出られぬから、一枝折つて參りたいと、お貰ひ申して參りました。
右膳　それはよくこそ心附いて、親切に忝けない。
お倉　どこぞ其所らへ插して置きませう。
ト あちこちと搜す思入、明時仕掛にて椿の花落ちるゆゑ、お倉びつくりして、
おや、此花は障りもせぬに、ころりともげて落ちました。
右膳　なに、落花せしとな。
〽案じる矢先きぎつくりと、胸にこたへる玉椿。
ト右膳思入あつて、
椿は花の散り易き、脆いものとは知りながら、はて忌はしい。
お倉　何とおつしやります。
右膳　いやさ、今わしも心附いたが、今日は佛の逮夜であつた、佛壇へ供へて下さい。
お倉　ほんに花がございませんと、とんと樒でございます。
〽一本花も氣にかゝる、此方は何か目にかゝり、
ト お倉上手の佛壇より花立を出し、件の椿を插し元の

所へ直しながら、金包みに目を附け、
おや、爰にあるのは何だ知らん。

有膳　はて、どんな物がそこにあるな。

お倉　お金のやうでござります。

有膳　なに、金がある、どれ〳〵。

お倉　はい、是れでござります。

〽差出す包み見覺えの、紛ふ方なき以前の金。

ト お倉金を持つて來て渡す、有膳手に取りびつくりなし、

有膳　おゝ、扨は母への回向と言ひなし、窃に置いて行き居つたか。

お倉　へえゝ、誰が置いて參りました。

有膳　えゝ、跡追掛けて行かうにも、步行叶はぬ此業病。

お倉　お使ひなら、參りませうか。

有膳　行衞知れねば屆ける事も。

お倉　何だかさつぱり分らない。

有膳　はて、困つた事が、

ト立たうとして足の痛む思入にてどうとなるを、道具替りの知せ、

出來たなあ。

〽又も苦勞の。

ト此模樣時の鐘、床の送りにて道具廻る。

（湯治場の場）――本舞臺五間通し中足の二重、本庇本緣附き、眞中に一間程の石の杳脫ぎ、軒口一間角からの欄間、正面上の方九尺の床の間、此下手違ひ棚、地袋戸棚、下の方一面內地へ唐書の襖、上下の棲塗骨の障子を建切り、二重の上手風呂場の心にて、中窓のある板羽目の建物、下手いつもの所枝折戶、其外正面藥家根附の門、左右板塀、門の柱へ伊香保溫泉と記したる札を掛けてあり、よき所に梅の立木、日覆より同じく釣枝、總て湯治場客間の體、爰に○△の湯場の下女二人、緣端に立ちかゝり、お虎町家の下女のこしらへ湯上りの心にて濡れた手拭を持ち立ちかゝり居る、此見得賑かなる流行唄にて道具留る。

お虎　さあ〳〵大變だ〳〵。

○　もし〳〵お女中さま、大變とおつしやりまするは、

△　お湯へおはひりの內、何ぞ紛失でも、

○△　いたしましたか。

お虎　さあ紛失も紛失、人間一人なくなした。
○　あなた方はお三人連れ、旦那さまはお湯にいらつしやいますし、お孃さまはお湯から上り、
△　お顏を直しておいでなさいまするが、外にお連は昨晩から、ない筈でございますが。
お虎　いえわたし共三人が、お湯に入つてゐる内に、お隣り座敷の書生さんが、何所へか紛失したわいなあ。
○　おゝ、あのお湯のお孃ひな、よい男のお客さまは、
△　蓮華寺村まで御用があるとて、先程お出掛けなされました。
お虎　あれ、それだからお立ちになるなら、ちよつとわたしに敎へておくれと、昨夜頼んで置いたのに。
○　いえ、お立ちになつたのではございませぬ、まだお預りの品もあれば、
△　大方又程なくこちらへ、お歸りになるに違ひございませぬ。
お虎　そんなら又お歸りになるのかえ。
○△　左樣でございます。
お虎　やれ〳〵それで落附いた、わたしやお立ちになつたかと思つて、大きなお腹が浪を打つてどき〳〵としたわいなあ。
○　それではあなたは、御懷姙でございますするか。
お虎　あれさ、孕んだのではない、是れで自腹さ。
○△　左樣でございまするか。
ト合方になり、正面の襖を明け、お芳前幕の娘にて出來り、
お芳　これ虎や、そんならまだお立ちではなかつたかいなう。
お虎　お悦びなされませ、まだお立ちではございませぬといなあ。
△　左樣ならあなた方は、あのお客さまのお馴染さまでございますか。
お虎　あれさ、お馴染といふ程でもないが、此伊香保へ來る道すがら、上尾の立場でお目に掛り、それから又其晩に熊谷の宿で、思ひがけなく一つ宿屋へ泊り合せ、翌朝お別れ申したのが、又もや爰て同じ宿へ、泊るといふのも不思議な御緣。
お芳　ほんに熊谷へ泊つた折、お上げ申した煙草入を、捨てもなされず其儘に、お持ちなされておいでゆゑ、わたしや嬉しくてならぬわいなあ。

お虎　あなたもお貰ひなされましたあの煙草入は大事にして、持つてお出でゞござりませうな。

ト お芳袂より切の煙草入を出し、

お芳　是れをなくしてなるものかいなう。

ト お虎に見せる。

○　左様ならお孃さまは、あのお客さまとお煙草入を、

△　お取替なされまして、お持ちなされてゞござりまするか。

お虎　そればかりぢやない、お頭髪をかく櫛までお上げなされたのさ。

○　道理でお裝に不相應な、

△　お櫛を御所持と思ひました。

お芳　そんなら櫛も其儘に、お持ちなされてゞおいでかいなあ。

ト 嬉しきこなし。

お虎　それといふのもお孃さまが、あのお方に思召しがあつてさ。

お芳　あれ、もう氣障な、其やうな事は。

お虎　それではおいやでござりますか。

お芳　いえ〳〵さうでは無いわいの。

お虎　それ御覽じませ、お前さまは矢ッ張り思召がござりませう。

ト お芳向ふへこなしあつて、

お芳　何れへお出でなされしやら、早うお歸りになればよいが。

○　蓮華寺村と申しまするは、爰から直でござりますれば、

△　もう程なく此宿へ、お歸りでござりませう。

お虎　さあ〳〵これから碁石を摑んで、來るか來ないかをして待ちませう。

お芳　ほんに、それがよいわいなう。

ト 昔々上手の床の間にある碁盤を出し、碁笥の中より石を出し算へて居る。是れよりしつとりとした端唄になり、花道より以前の繁しほ〳〵として出來り、花道へ留り跡へこなしあつて、

繁　御病氣ゆゑに親人の、困苦をお助け申さんと、思へど任せぬ金策に道ならぬとは知りながら、神保氏の金貨を掠め、持參なせしが物堅き、父にはそれと悟られしか元へ返せと餘所ながら、お諭しあつてお受けなされず、とあつて最早元々へ返す譯にもならざれば、詮方盡きて

佛前へ窃に供へて參りしが、後にてあれを御覽あつて、お取り納めになればよいが、あれが却つて御苦勞の種となつては寸孝を、盡せし事も水の泡、是れを思へば道ならぬ、事はせまじきものぢやなあ。

ト右の唄にて繁しを〳〵として舞臺へ來り、枝折戸を明け中へ這入る、下女二人是れを見て、

○　や、あなたは昨夜のお客さま。

△　ようまあ、お歸りなされました。

ト是れてにお芳お虎も繁を見て、

お虎　ほんにあなたは、妻木さま。

お芳　ようまあ、お歸りなされましたなあ。

ト二重より跣足で下りるゆゑ、お虎びつくりして、

お虎　もしお孃さま、跣足でござりまする。

お芳　下駄を履いては、勿體ないわいなう。

ト繁思入あつて、

繁　何か僕に、各々方には、至急の御用がある樣子。

お虎　はい〳〵、御用が大ありでござりまする。

繁　それへ參つて承はりませう。

お芳　さあ〳〵、あれへ入らつしやいまし。

繁　然らば、御免下されい。

ト繁二重へ上る、お芳も續いて上らうとするゆゑ、

お虎　もし、お孃さま、おみ足を。

ト手拭を出す。

お芳　いえ、もうそれでは勿體ないわいなう。

ト其儘二重へ上り、繁は上手お芳は下手へ住ふ、後皆皆よろしく住ふ、

あなた、ようお歸りなされましたなあ。

お虎　あなた、ようお歸りなされましたなあ。

○　あなたようお歸り、

○△　なされました。

ト皆々辭儀をなし、お虎有合ふ煙草盆を持つて行かうとするをお芳留めて、

お芳　あれ、わたしがするわいなう。

ト煙草盆を引取り、恥しさうに繁の前へ持ち行きこちらへ下り、

あなた、ようお歸りなされました。

ト辭儀をなす、繁合點の行かぬ思入にて、

繁　何か仔細は存じませぬが、僕をお待ち兼ねの御樣子は、何か書物を飜譯の御用向きでもござるかな。

お虎　はい、ほんやくやら膏藥やら、私には分りませんが、お孃

さまには蒟蒻のやうに、ぐにやりとなられてゞござりまする。

お芳　あれ又虎の差し出口、ちと嗜んだがよいわいなう。

お虎　いえ嗜むことは。

○　何にいたせお客さまが、お歸りなされて御安心、

△　私共はお邪魔ゆゑ、どれお次へ參りませう。

お虎　もし女中さん。

　トちよつと囁く。

○　畏まりました。

　ト下女二人奥へ這入る。繁思入あつて、

繁　何は然れ此お座敷に、親御がおいでなされねば、僕も長居は無遠慮ゆゑ、何れ後程伺ひませう。

お芳　いえ／＼あなたに父さんが、お願ひの儀もござりますれば、御迷惑でも最う少々おいでなされて下さりませ。

繁　親御が僕へお頼みとは、はて何用でござるやら。

お虎　どれ、私は旦那さまを、お呼び申して參りませう。

　ト立ち掛るをお芳留めて、

お芳　そなたが居ねば、心細いわいなう。

お虎　はて、お差向ひの其内に、思ひのたけを仰しやりませ。

繁　なに、思ひのたけとは。

お虎　さあ、其だけは、おゝそれ／＼、耳から耳へ通じまする、去年流行つた電信の、玩具のやうな竹でござりまする。

お芳　えゝもう、何を言やるぞいなう。

繁　はて、お氣輕な女中である。

　ト爰へ奥より利右衛門、前幕の親仁にて布子の下へ浴衣を重ね、湯上りの心にて濡れた手拭を持ち出來り、繁を見て、

利右　おゝ妻木さま、お歸りでござりまするか。

　ト皆々利右衛門を見て、

お芳　てもよい所へ。

お虎　旦那さま。

繁　先づ／＼是れへお出で下され。

利右　只今御挨拶をいたしまする。眞平御免下さりませ。

　トお虎に手拭を渡し、羽織を引掛ける事などよろしくあつて、下手へ住ふゆゑ、

繁　それでは僕が高上り、先づ／＼是れへ。

利右　いえどうぞ、それにおいで下さりませ。

繁　ト是れより合方きつばりとなり、繁思入あつて、
私用ござつて蓮華寺村まで、立越しまして歸宿の所、何か至急の御用向きでも、ある御樣子にて各方が、僕を頻りにお待兼は、何等の御用でござりますな。

利右　ちとお願ひがござりまする、ゆつくりお話しいたしませんでは、御相談が成り兼ねまする、御迷惑ではござりませうが、さしたる御用がござりませずば、まあお話し下さりませ。

繁　何か仔細は存じませねど、只今私用を辯じましたれば、別に用事もござりませぬ。

お虎　それがこちらの丁度幸ひ。若し旦那さま、申し附けませうか。

利右　今おれが誂へて來たが、成るたけ早くと急いで來てくれ。

お虎　畏りました。

ト立上り、

若しお孃さま、こりや御相談が整ひますぞえ。

お芳　えゝもう、默つて居やいなう。

お虎　あれ、瘦我慢をなされまする。

トお虎奥へ這入る、繁思入あつて、

繁　して御親子にて此伊香保に、御逗留なされまするは、何か遁れぬ御用向きか、又は御持病御養生の爲、御湯治をなされますかな。

利右　いえ、養生やら用向きやら、色々譯がござりまして、時候違ひに梅の咲く時分、斯樣な山家へ參りまして、逗留をいたしまする。

繁　樣子ありげな其お詞、さて世の中にはさま〴〵なる事件も往々ある習ひなれば、袖振り合ふも御緣とやら、今宵はゆる〳〵お話しを承はるでござりませう。

お芳　あれゆる〳〵と、お話しをお聞き下さると、仰しやるわいなあ。

利右　えゝ仰山な奴だ。

ト同じやうに悦ぶこなし、爰へ奥よりお虎先きに、下女二人廣蓋へ肴の皿を載せ、燗德利を持ち出來り、

お虎　はい、お誂へが參りました。

利右　おゝ大分早かつた。さあ妻木さま、召上るものもござりますまいが、お一つお上り下さいまし。

繁　昨日といひ今日まで、重ね〴〵の御馳走に預り、近頃恐縮いたしまする。

お虎　さあ〳〵どうぞお盃を、お取上げ下さりませ。

繁　いや／＼それは御親父から、何卒お始め下されい。
利右　左樣なれば年役に、御免を蒙つて始めませう。
　ト猪口を取上げる。
お虎　どれ、お酌をいたしませう。
　ト利右衞門一口呑み、
利右　妻木さま、御免下さりませ。
　ト猪口をさす。
繁　いや、御酒はとんと不得手にござれど、折角の思召し頂戴いたすでござりませう。
○　どれ、お酌をいたしませう。
　ト德利を取らうとするを、
お虎　おつとどつこい、お酌はわたしが持ち切りだよ。
○　左樣なら、お誂への、
△　お跡を急いで參りませう。
　ト下女二人奧へ這入る。お虎酌をして繁一口呑む、お虎別の猪口を取上げ、
お虎　さあお孃さま、お上りなされませ。
お芳　それでもわたしや不調法ゆゑ。
お虎　はて、さう仰しやらずと今日は、召上るものでござりまする。

お芳　そんならどうぞぽつちりと、つぐ眞似をしてたもいなう。
　ト猪口を取る、お虎酌をしながらお芳の手を押へ、
お虎　あれお孃さま、お待ちなさい、三度つぐ眞似をしませんでは、今日はいけませぬ。
　トよろしく注ぐ、お芳うれしきこなしにて呑干す、利右衞門こなしあつて、
利右　妻木さま、頂戴いたしませう。
繁　然らば御返盃いたしまする。
　トお虎酌をする事よろしく、お芳こなしあつて、
お芳　此お猪口は、何う仕ようわいなう。
お虎　はて知れた事、お聟さまへ。
繁　えゝ。
お虎　いえ、お向ふの妻木さまへ、思ひざしをなされませ。
お芳　左樣なら、憚りながら。
　ト恥かしさうに猪口をさす。
お虎　どれ、お取次をいたしませう。
　ト酒盛りよろしく、此以前奧より喜助若い者着流しにて、燗德利を持ち出來り、此體を窺ひ居て、
喜助　千秋萬歲千箱の玉を奉つる。

ト謠曲をうたひながら前へ出る。

お虎　おや喜助どん、大きに御苦勞。

利右　いや、今の謠曲は感心々々。

喜助　あんまり役が好過ぎまするが、親方手合の眞似をして、こは〴〵ながら遣りました。先づお目出度うございまする。

繁　なに、目出度いとは、そりや何が。

喜助　へい、お目出度いと申しまするは、斯うお見受け申した所は、あなたが差詰めお聟さまで、お孃さまがお嫁さま、旦那さまが舅御で、お虎さんと私は待女郎媒人役、御夫婦さまのお釣合は、至極よろしうございまするが、只不足なのは私にお虎さんの女房役、不釣合ではございますが、押しッくらの牛だと思へば、肉のあるのを取得にして、所柄ゆゑ我慢をします。何は兎もあれ三三九度のお盃をなされまして、跡はしつぽりお床入り、それから半でお湯へはひり、又二番目のお床入り、それからお湯へおはひりなされて。

利右　あゝこれ〳〵、喜助どのとやら、そこらで留めて貰ひませう。

喜助　へい〳〵、先づお目出たうございまする。

ト辭儀をなす、是れにて繁合點の行かぬ思入、お芳恥しきこなし、利右衛門思入あつて、

利右　さて妻木さま、つかぬ事を伺ひますが、あなたは御獨身でございますか。

繁　御覽の通りの若輩者、學問修業の其爲に東京へ出て居りますれど、未だ獨立に至りませねば、中々以て妻などを、迎へる力はございませぬ。

喜助　それで猶々お目出たうございまする。

繁　なに、獨身で目出度いとは。

喜助　はて御獨身とあれば、御得心の地口で、猶々お目出たうございまする。

利右　して又あなたは此伊香保に、長く御逗留をなされまするか。

繁　只今申す修業中ゆゑ、なか〳〵長く此處に逗留もいたされませねば、是非明朝は暗きうちに出立いたす積りでござる。

お芳　そんならあなたは、あの明朝、御出立でございまするか。

ト本意なきこなし。

利右　餘事はさて置き、あなたには、全く御細君はござり

ませぬか。
繁　いやもう、逝妻などゝは以ての外、今一兩年東京で勉強いたす所存ゆゑ、何れ其内東京にてお尋ね申して貴面を得、此お禮をも申すでござるが、してそこ許の御第宅は、何れの區にて何番地、御姓名は何と仰せられますな。
利右　私宅は淺草の、花川戸にて三番地、書物を渡世にいたしまする、戸倉屋利右衞門と申しまする、平民でござりまする。
繁　すりやそこ許は聞き及ぶ、戸倉屋の御主人なりしか。
利右　それゆゑどうか東京へお出での節は手前宅へ、下宿をお取り下さいまして、失禮ながら御入用の御書物などは何なりとも、見世にあるだけ御遠慮なく、御用にお立て下さりませ。
繁　何れ其内御第宅へ、願ひに出るでござりませう。
お芳　どうやらそれではお詞のみで、わたしや安心せぬわいなう。
お虎　いえ〳〵是れから肝腎の、お話しになる大事な所、まあお聞きなされませ。
繁　して又何かお頼みでもござるやうに、仰せられしが、如何なる儀でござりまするな。
利右　其お頼みと申しまするは。
ト四邊へ思入あつて、
これお虎、誂への物を急いでくれ。
お虎　はい〳〵畏りました。
喜助　いえ、急き立てゝ參りませんでも、只今直きに參りまする。
お虎　あれさ、お前も察しの惡い、それ、急かねばならぬわいなあ。
ト呑み込ませる。
喜助　へい成程、どれ〳〵急いで參りませう。
ト利右衞門紙入より札を取出し、紙に包み、
利右　お虎これを、若い衆に。
トお虎に渡す。
お虎　はい、喜助どん、よろしくお禮を。
ト渡す、喜助受取り、
喜助　是れは有難い、山吹の黄金に換る札切手。
お虎　あれ、切手などゝ延喜の惡い。
喜助　いえなに、御縁のつながり手、お次へ參つて紙包みを、どれお開きといたしませう。

お虎　無駄を言はずと、早くお出で。

喜助　左樣ならお孃さま、先づお目出たうございまする。

お虎　さあ〳〵早くお出で。

ト　お虎喜助中へ這入る、利右衛門四邊へ思入あつて、

利右　なに妻木さま、其お賴みと申しまするは、餘の儀でもございませぬが、不束ながら、此娘、お連合にお持ち下さりませぬか。

繁　何と言はるゝ。

ト是れより合方替つて、

利右　斯樣申せば私が年甲斐もなく御昨今の、あなたを捉へ差附けた御相談とも思召さうが、家内に死なれ私もはや段々と取る年に、是れなる娘も年頃ゆゑ、よい聟あらば貰ひ受け、家督を渡し樂々と孫の顏でも見せうと、諸方へ賴んで置きますが、外生業と事替り、書物を渡世に致すゆゑ、讀めぬ者では間に合はず、どうか書生のお方をとお出入り先きの先生方へ、賴んだ事もございますが、扨ないものは聟養子、その癖書生のお方も多く東京にはございますれど、十に八九はお酒好きやお遊び好きで學問の道へは勉強なさらいで、遊里の道へ御勉強と聞いて御緣も結ばれず、此度本家の法事に附き此上州へ參りまする、途中で圖らずお前さまに、上尾の立場でお目に掛り、お忘れなされしお煙草入が御緣となつて又候や、此旅籠へ泊り合せ、段々との御樣子を見れば見るほど御發明、あゝ斯ういふお方をどうぞして、娘の聟に欲しいものと、思へば娘は猶一倍、あなたに焦れてゐる樣子。

お芳　あゝもし。

ト利右衛門の袖を引くゆゑ、

利右　はて言はねば譯が分らぬわえ、そりやもう、自分は町人ゆゑ高の知れたる平民ながら、住居の所は所有地にて、外に少々地面もあれば、假令火難に逢ひましても、普請位に差支へる瘦身代でもございませぬゆゑ、どうかそれなる娘の聟に、お成りなされて戸倉屋の、家名をお繼ぎ下さりませぬか。さ、お賴み申すといふ譯は、此御相談でございまする。

ト此内お芳繁に見惚れて居る事よろしく、繁じゆつなき思入にて、

繁　こは何事のお賴みかと、存じの外なる貴君のお詞、物數ならぬ僕が身を、左程にまで御所望下され、お家をお讓り下されんとは汗顏の至りながら、男子にあらねば、

利　いやさ、男子といへど若輩者、未だ未熟の修業中ゆゑ、思ひも寄らぬ儀でござる。

利右　さゝ、其御修業は私方で何ヶ年でも、御随意御勝手におさせ申せば、どうか戸倉屋利右衛門の家督におなり下さりませ。

繁　左樣に仰せ下さるを、否と申すも片意地ながら、どうも只今即答に御挨拶がなり兼ねまする。

利右　そりやはや斯樣な旅中といひ、まだ昨今の我々共、しかと身元も知れぬ者に、御即答は成兼ねませうが、それを承知で此樣に、無理をお賴み申しまするも、餘儀ない譯がござりまして、取急がねばなりませぬ。

繁　して、其餘儀ない譯と申すは、如何なる仔細でござりまするな。

利右　さあ別儀でもござりませぬが、何をお隱し申しませう、私事は先代の目鏡で家督に直りました見世の手代でござりまする、其恩義のある主人の弟に破落漢がござりまするが、先代の存生中は家へ出入りもさせませず、兄弟なれど音信不通、又現在の姪に當れど死んだ家内の居るうちは、寄附かずに居りましたが、今は義理ある私の弱身へ附込む破落漢、おのれの悴を此娘の聟にいたして行く／＼は、兄の仕出せし身代を掻き廻さうとの底巧み、主人の目鏡で讓られました家督をむざ／＼潰されては、先祖の位牌へ濟まぬ譯、それゆゑ今度の法事を幸ひ、本家へそれらの相談に參りましてはござりますが、外に養子と定めたるお人が無ければ第一不都合、兎やせん角やと思ふ折、圖らずあなたにお目に掛り、娘は元より私がお見込み申して此お願ひ、實はお跡を慕ひまして此湯地場へも參りました。さ、御昨今にて斯樣な事を、お願ひ申すは氣の早い、親仁と思ひなされませうが、早く極めねばなりませぬ、苦痛をお察し下さりまして、親子二人を妻木さま、どうぞお助け下さりませ。

ト思入にていふ、繁こなしあつて、

繁　御尤なる其お賴み、そりや早や昨今旅行中にて、御面會はいたすといへど、僕もかね／＼東京にて聞き及び居る戸倉どの、此身に取つて言分なけれど、手前方にも言ふに言はれぬ、深き仔細がござるゆゑ、此儀は承引なり兼ねまする。

利右　むゝ、扨はあなたは御家祿のお望みあつて平民ゆゑ、御相續はなりませぬか。

繁　いや全く以て左にあらず、平民ゆゑに相續の成兼ぬ

るなんぞとは、開化を知らぬ昔にして、當今四民同權の世に至つては何として、左樣な差別はござらねども、外に仔細がござるゆゑ、此儀は承引成り兼ねまする。

利右　外に仔細があるとばかり、仰しやりましては私に、どうも合點が參りませぬ。

ト是れにてお芳扨はといふこなしあつて、

お芳　あゝもし父さん、分りました、あなたは外にお許嫁の、お方があるのでござんすぞえ。

利右　いや、若い者は若い者だけ、こりやいゝ所へ氣が附いた、扨は御修業中の御保養に、御朋輩の御交際でお遊びにでも入らつしやつて深い馴染でも出來まして、其女中への御義理立てかな。

繁　いや／＼全く左樣なる、浮いた事ではござらぬて。

利右　して又仔細とおつしやりますは、どういふ譯でござりまする。

繁　さあ、それは。

利右　何ゆゑ御返事なされませぬか。

お芳　お包みなされず妻木さま。

利右　お聞かせなさつて。

兩人　下さりませ。

ト詰寄つて言ふ、是れにて繁困る思入にて差俯向いて居る、爰へ奥より以前のお虎喜助出て、

お虎　こりやお目出度いお話しも、どうやら風が替りまして、

喜助　兎角お手間が取れまするが、何は兎もあれ御酒をはやらせ、陽氣になつて御覽じませ。

ト お芳本意なきこなしにて、

お芳　女子の口から恥かしい、此やうな事を申し出し、人の手前も面目なうて、御酒どころではないわいなう。

利右　おゝ尤もだ、そちよりも好い年をした此親仁、人一倍に面目ないわえ。

喜助　いえ／＼何で私共に面目ない事がござりませう、幾ら豪家の大分限で、金はあつても娘さんが此お虎さんを見るやうに、虎河豚のやうな顔附きでは、こりや御相談もむづいかしが、斯樣な頗る別品の飛切りのお孃さま、忠臣藏の九段目なら、欲しがる所は山々あると、親御が威張らにやならぬ所を、それを嫌ふといふ事が、いやさ、それを兎やかく仰しやるには、何か仔細がござりませう。

お虎　もし／＼喜助どん、大概にしておくれ、お孃さまに

假托けてわたしの顔の棚卸しは、何ぼ伊香保の湯治場で、洗ひ方をするといつても、聞き流しにはして居られぬ、さういふお前の顔色は目尻が下つてちよんぼり鼻、おまけに形がちんちくりんで、ちよこまかするのが見られた態か、それに引替へ妻木さまは、何所に一つ言ひ分のない御器量人ゆゑ東京で、定めて藝者か女郎衆にお馴染でもござりませう、さういふ事なら金錢づくで、濟ませておしまひなされませ。憚りながら此お虎が掛合方になりませうわいなあ。

利右　失敬ながら妻木さま、若しお馴染でもござりまして、其方へお義理立てなら、又如何樣とも御相談の調ふ工風にいたしませう、何うぞ仔細を打ち明けて、お聞かせなされて下さりませ。

ト言へども繁默つて居るゆゑ、お芳こなしあつて、

お芳　もし父さん、もう／＼何にも仰しやりまするな、御返事のござりませぬのは、不束な私ゆゑ、お氣に入らぬのでござりますわいなあ。

利右　成程そちの言ふ通り、娘がお氣に入りませぬか。

繁　あいや全く左にあらず、此身に過ぎたる御息女を、何ゆゑ僕が嫌ひませうぞ。

お虎　そんなら何でお繁さまが、不承知でござりまするぞ。

喜助　何か仔細がござりませうに、其譯とても仰しやらず、

利右　たゞお斷りなされまするは、

お芳　ちとお恨みでござりますわいなあ。

ト皆々にて詰掛けて言ふ。此内繁思入あつて、

繁　さあ其仔細と申しますは、老後に及ぶ一人の、病に臥したる親ある身ゆゑ。

利右　なに、親御樣が御病氣で。

お芳　それでお斷りを仰しやりますとな。

ト是れより合方きつぱりとなり、

繁　此度當地へ立越えましたも、其親人へ見舞の爲、先刻當所の裏手にある蓮華寺村まで尋ね行き、病氣の見舞をいたせし所、追々快氣に趣くとは申せども所謂老病、明日をも知れぬ父が一命、若し萬一の事あつては他家へ養子の身となりて、親の家名を絶すの不孝、それゆゑ餘儀なく御返事が成兼ねまして斯くの仕儀、中々以て御息女や平民が不足にて、兎やかく申す次第でござらぬ、尤も學問修業の上、官へ勤める志願など昨年まではござつたれど、方今江湖の景況にては、一度過分の祿を得ると

も、榮官の列に入り其職を、免せらるれば一時日途を失ひて狼狽いたす者多し、されば生涯安全は商家に越したるものあらじと、僕も決心いたし居れば、二言と申さず承諾なし、お返事いたす筈なれど、兄弟とてもござらぬゆゑ、父の家名を立てませねば不孝に相成る身の上ゆゑ、緣邊の儀は幾重にも、御用捨なされて下されい。

　ト是れを聞き利右衞門思入あつて横手を打ち、

利右　いや、したり、此利右衞門が目利は違はぬ、御孝心の程感心いたしました、そりやさうなくては叶はぬ事ぢや。

繁　すりや、お聞き濟み下されしか。

利右　御孝心の程戸倉屋利右衞門、承はりましてござりまする。

　ト是れにて繁先づは安堵といふ思入、お芳氣の揉めるこなしにて、

お芳　もし父さん、わたしやあなたと添はれねば、不孝なやうぢやが、此世には。

利右　はて、何にも言ふな是れまでの、御緣と思つてあきらめろ。

お芳　いえ／＼わたしや。

利右　えゝ未練な奴めが。

　トきつと言ふ。お芳ハッと泣伏す、利右衞門こちらへ向ひ、

扨妻木さま、して其親御と仰しやりまするは、蓮華寺村にて何御家業、御姓名は何とおつしやりまするな。

繁　御父は私立ながら、小學校の教師をいたす妻木右膳と申すもの。

利右　それ承はつて先は安堵、これ娘悦べ、この緣邊は整つたぞ。

繁芳　えゝ。

　トびつくり思入、

利右　さあ、御孝心なる妻木さまゆゑ、御病氣でござる親御さまを、見捨てゝ養子に行かれぬと仰せあるは御尤も、さういふ譯なら是れから直に、蓮華寺村へお尋ね申し、其親御にもお目に掛り、お頼み申した其上で、若しも養子に下されずば、そちを嫁に遣つてなりと、見事一所に添はしてやるぞ。

　ト是れにてお芳嬉しきこなしにて、

お芳　父さんのお情お慈悲、有難いやら嬉しいやら、もし、此通りでござりまする、

繁　ト手を合せて拜む、繁はよしなき事を言つたといふ思入あつて
　　それと知つたら曖昧に、
利右　えゝ。
繁　いえなに、それと存じたら、必ず父は逢ひますまい。
利右　所を程よく私から、申し入れるでござりませう。
お芳　そんならあなたと御一所に、少しも早く蓮華寺村へ、
繁　あいや、是れよりは山續き、暮れては甚だ物騒ゆゑ、
利右　成程最早入相ゆゑ、明日の事に仕ようわえ。
お芳　それでは早く夜が明けて、明日の朝になればよい。
利右　まだ今日の日が暮れもせぬに。
　　トお芳いそ〳〵するこなし、此時風の音鳥笛になり、日覆より下手へ合引にて烏三羽舞ふ、繁思入あつて、
繁　春とはいへど山里は、繁る木の間に薄闇く、
利右　夕日も早く入相に、塒に迷ふむら烏
お芳　只さへ旅は物憂きに、聞くも淋しきあの啼く音、
繁　其烏より烏羽玉の、
利右　戀の闇路に迷ふ身の、
お芳　願ひが叶ふ知せなるか。
繁　心に掛る我が身の上。

利右　どうぞ首尾よう。
　　ト案じる思入、爰へお虎燗徳利を持ち出で、
お虎　はい、出來ました。
　　ト大きくいふ、皆々驚くを道具替りの知らせ、
繁　あゝ、びつくりした。
　　トよろしく思入、追分節にて此道具廻る、
（伊香保道の場）——本舞臺一面の平舞臺、向う山組の張物、後同じく山の遠見、据通り一面の藪疊み上下山組の張物にて見切り、下手は杉林、日覆より同じく吊枝、霞附の半月をおろし、よき所に是れより伊香保湯治場道と記したる榜示杭、爰に前幕の小助股引法被装にて立ちかゝり、猿衆、豚吉人力車夫にて、側に車を置き立ちかゝり居る、此見得山おろし木魚入りの合方にて、道具留る。
猿衆　もし小助さん、入費を掛けて遠方まで、出掛けて來た甲斐あつて、
豚吉　斯ういふ工合に追込みものも、足が附いたらこつちのもの、まあ安心を、
兩人　なせえまし。

小助　お前方のいふ通り二三十里もある所を、物を遣つてやつて來たのだ、是れなり行衞が知れねえと言つて歸るのも氣が利かねえが、それは蛇の道はへびとやらで、立場々々で人力車に、聞いて爰まで追込んだが、伊香保の湯場に居ると知れりやあ、籠の鳥も同然だ。

猿彜　それぢやあ直に湯治場へ、

豚吉　三人連れで仕掛けませうか。

小助　いや、此儘三人踏込んだら、向ふが素早い散切だから、風を喰つて逃げるも知れねえ、それよりおれが先きへ行つて、とつくり樣子を見て來るから、突き留たら二人共捉摸をするから一所に行き、若し手向ひでも仕やがつたら助鐵砲に出てくれろ。

猿彜　そりやあお案じなせえますな、こつちやあ腹から平民で、喰ふに困つて人力車、なんの役にも立たねえが、こいつあ元が士族だから、少しやあ腕も利いて居りやす。

豚吉　あんまり自慢も出來ねえが、弓馬槍劒柔術まで、武藝は大抵習つたから、高の知れた生利書生一人や二人は何でもねえのさ。

小助　それぢやあおれは一足先きへ、探りに行つて突留めるから、二人は爰に待つて居てくれ。

猿彜　知れねえやうに、見え隱れに、

豚吉　跡から徐々行きませうか。

小助　そんなら跡から附いて來やれ。

兩人　承知しやした。

ト三人花道へ行きかける、猿彜揚幕の方を透し見て、

猿彜　若し小助さん、月はあつても湯煙りで、判然とは分らねえが、向ふから來る散切りは、目鏡橋で此間見掛けた書生に似て居ますぜ。

ト小助向ふを透し見て、

小助　成程身形が似て居るやうだ、こいつは向ふへ行かうより、爰等あたりに隱れて居て、いよ／＼あいつに極つたら、捕ッ捉めえて掛合ふから、二人は後に聞いて居てくれ。

猿豚　えゝ、承知しました。

ト三人は後の藪蔭へ忍ぶ。花道より以前の繁出來り、此時跡を見返りほつとこなしあつて、直ぐ舞臺へ來る、此時上手の藪蔭より以前の小助出で、繁を透し見て、

小助　おい、妻木さん待ちなせえ。

ト聲を掛ける、繁びつくりして小助を透し見て、

繁　や、こなたは小助、どうして此所へ。
　ト ぎつくり思入、小助前へ出て、
小助　どうして爰へ來るものか、お前の親が上州の、伊香保在にあると聞き、大方こつちと足を附け、跡から追込む道々も、立場々々で人力の仲間に聞いてやつて來たのだ、爰で逢つたは丁度幸ひ、おれと一所に歩びなせえ。
　ト 此内繁思入あつて氣を替へ、
繁　そりや何ゆゑに態々と、僕を爰まで追掛けて。
小助　えゝしらばつくれるなえ。
　ト 合方きつぱりとなり。
　どういふ譯と聞かねえでも、こなたの胸に覺えがあらうが、知らざあ言つて聞かせよう、旦那の居間の用箪笥に、仕舞つてあつたお手許金、然も金貨で二百圓、こなたが盗んで逃げたらう。さあ素直に一所に行きやあよし、否だと言やあ腕づくでも、駿河臺まで連れて行くから、性根をすゑて挨拶しなせえ。
繁　こりや／＼小助何を申す、父の病氣を見舞の爲、一兩日の暇を乞ひうけ、故郷へ參りし此繁、どの道是れより東京へ立歸らねばならぬゆゑ、一所に行けたら參りも仕ようが、金貨を奪ひしなんぞとは、此身に取つて覺えはないぞ。
小助　いや、覺えがねえと言張りやあ、出る所へ出て調べを受け、こなたに白状させにやあならぬが、さうする日にやあ表向き、旦那のお名の出る事ゆゑ、穩便にして連れに來たのだ、兎やかう言はずとおとなしく、素直に一所に行きなせえ。
繁　いや、惡名を附けられては汝と同道いたされぬ、僕一人にて勝手に歸る。
小助　脛に疵持つこなただから、こいつあ一所に歸られめえ、こう二人とも遣ッ附けろ。
　ト 此以前より後に猿余豚吉出で、窺ひ居て、
猿豚　うぬ、覺悟しろ。
　ト 左右より繁に組附くを、繁ちよつと立廻つて左右へ投げ退け、きつとなり、
繁　扨は大勢語らつて、繁に無禮をいたすのぢやな。
小助　おゝ、どうで素手ぢやあ歸るめえと、まさかの時の助鐵砲、玉を逃さぬ其爲に跡追附きの人力車、わざ／＼雇つて東京から、伊香保まで連れて來たのだ。
猿余　生業づくぢやあ客足も、見りやあ遁さぬ目鏡橋、しかもこなたがお徒士町の御家直といふ人力車に乘つた其

時落したる、こなたの手紙を拾ひ取り。

豚吉　名宛を證據に駿河臺の、神保樣のお屋敷へ、わざわざ屆けて行つたので、横筋違の道を行き、追込み者と足が附き、突留められたが百年目だ。

小助　否だと言やあ簀巻きにして、此人力車へ括り附け、引いて行くから、

三人　覺悟しろ。

繁　扨はそれゆゑ此狼藉、賊を爲したる覺えはなけれど、手籠めにするとあるからは、今廢刀の世の中に、廢りし劍道柔術も、少しは覺えの妻木繁、わいらの自由に相成らうや。

小助　えゝ面倒な、疊んで仕舞へ。

猿豚　合點だ。

ト是れより禪の勤めになり、小助、猿兼、豚吉の三人縫包みにて打て掛る、繁これを相手に無手の立廻りよろしくあつて、猿兼、豚吉を投げ退ける、小助打つてかゝり兩人立廻り、左右へ別れきつと見得、此時知せに附き月隱れて闇黒になり、探り合になり、繁は思入あつて後の藪蔭へ隱れる、三人は是れを知らず、猿兼、豚吉起上り、左右より小助に打つてかゝる、小助其手を捉へ、

小助　おれだ／＼。

兩人　小助さんか。

小助　これ。

ト兩人に囁き、三人は探りながら後の藪へ隱れる。跡本釣鐘凄き合方になり、正面の藪を押分け繁出で、四邊へ思入あつてほつとこなし、此時ばた／＼になり、上手より前幕の御家直、頬冠りにて左の手の小指を血に染みたる紙にて結へながら出來り、繁に突當り、双方びつくりして跡へ下り、互ひに透し見て、繁は今の者ではないかといふ思入、御家直は南無三といふ思入にて、そつと摺抜け、花道へかゝる。繁これを透し見て、

繁　今のはどうやら。

直　えゝ。

トぎつくり思入、此時後の藪蔭より以前の三人出て、猿兼後より組附くを繁振り解いて投げ退ける。爰へ又豚吉窺ひ寄つて組附くを、繁突廻し手を捻ぢあげ、向ふを見込む、花道の御家直は思入あつて小指の紙の解けかゝりしを口にて啣へきつと結ぶ。双方見合つて木の

頭、小助は舞臺上手にて、繩捌きをする。御家直一散に花道へ這入る。繁是れを見送る仕組み、山おろし、双盤の責めにてよろしく、

ひやうし幕

ト幕引き附けると、道具廻しにて、直に引返す。

（神保屋敷の場）——本舞臺三間の間中足の二重、本庇本縁附き、眞中に石の沓脱ぎ、二重の上手跡へ下げて縁側續きの厠、石の手水鉢、葉蘭など植込み、鉢前の模様よろしく。二重下手板塀にて見切り、二重正面上手一間の床の間、是れへ唐紙の羅雪谷の掛物、此下手一間地袋戸棚違ひ棚、下手銀地の襖、いつもの所枝折戸、所々に飛石、雪見形の石燈籠などよろしく、よき所に梅の立木、日覆より同じく釣枝、總て東京駿河臺神保屋敷内庭先の模様、二重にお辰の下女、煙草盆を掃除して居る、平舞臺に〇△の中間二人、竹箒、水手桶を持ち、庭掃除をして居る、此見得調べにて幕明く。

ト中間あちこちを掃除する事あつて、

〇　おいお辰どん、金を盜んで逃亡した、繁さんが捕つたさうだな。

△　よくそれでも早く知れたが、まだ歸つては來ないではないか。

お辰　捜しに出た小助どんから、昨日伊香保の湯治場で、突留めたといふ電信が掛つたから、晝夜車で急いだら、今日あたりは歸りませうが、新聞にでも出てはならぬと旦那さまには御心配、必ず世間へ言はしやんすな。

〇　それは口塞げを貰つて居るから、世間へ出ては言はないが、あの物堅い繁さんが。

△　どういふ事で顏に似合はず、あんな事をしなすつたか、人の心は知れねえものだ。

お辰　さあ繁さんは心柄ゆゑ、捕つても仕方がないが、只氣の毒なは惣助どの、自分の甥だと旦那さまへ、其のお相手に繁さんを連れて來たのが始りで、身元を請合ひお屋敷へ住込ませた證人ゆゑ、申譯がないといつて、既に命を捨てる所、旦那様がお聲掛りでやう〳〵死ぬのは止めになつたが、何でも遠くへ逃げぬ樣にと、走り大黒さまを逆さに吊して、針をさしたり何かして、氣を揉んで居なさんすわいなあ。

〇　聞けば惣助どのは此間から、柳原だの兩國だので、

占ひを見て貰つたさうだが、そんな無駄な事はねえ。
△ まあ其錢があるならば、煮込の牛で立ちながら盛切り酒でも呑む方が、餘つぽど増しといふものだ。
お辰 お前方はさう言はしやんすが、占ひだとて一概に、當らぬとばかりは言はれぬわいなあ。
○ そりやあ當るも八卦當らぬも八卦で、何の何某といふ占ひ者なら、十に一つは紛れ當りに當らねえとも言はれねえが、
△ 大道中で玉をあふぎ、天眼鏡を捻くり廻して、間拔な奴の面を見ると呼び掛けて居る占ひ者が何で當てになるものか、
お辰 そりやお前方の惡口といふもの、わたしなども迷ひ性で、よく往來で見て貰ふが、當らぬ事はござんせぬ。
○ それぢやあ矢ッ張りお辰どんも、亡者の仲間にされた方か。
お辰 なに、亡者の仲間にされたとわえ。
△ はて占ひ仲間の符牒では、客を亡者といふさうだ。
お辰 まさかさうでもござんすまいわいなあ。
ト此時花道揚幕の内にて、
惣助 えゝ、きり／＼と歩びやがれ。

小助 まあ／＼惣助どの、靜かに仕なせえ。
トやはり合方調べにて、花道より惣助袴股立若黨のこしらへにて、腹の立つ思入にて出る、其れを前帶の小助宥めながら出る、跡より前帶の繁着流しにて連れて出る、其跡より猿鍬、豚吉の人力屋、繁の羽織、胴亂、シャツポなどを持ち附添ひ出來り、花道にて、
惣助 えゝ、よくもうぬは此惣助に、酷い熱湯を呑まし居つたな。
小助 これ／＼惣助どの、いふ事があつたら後で言ひなせえ、腹を立てたとて仕方がねえ。
繁 必ず逃げはいたさぬから、さう大聲を發せずと、先づ／＼靜かにいたされい。
惣助 えゝ、是れが靜かに言へるものかえ。
ト側へ寄らうとするを、
小助 はてまあ、跡で分ることだ。
猿鍬 お屋敷内のお庭先き。
豚吉 まあ／＼靜かになさいまし。
ト皆々舞臺へ來る、お辰此體を見て、
お辰 おゝ、小助どん、歸りなさんしたか。
小助 繁さんを連れて戻つたと、旦那樣へ申し上げて下せ

え。

お辰　あい／＼、合點ぢやわいなあ。

ト お辰奥へ這入る。

惣助　これ中間衆、御門の口を固めて下せえ。

○△　畏まりました。

ト 中間二人件の竹箒と水手桶を跡へ殘して下手へ這入る。

小助　さあ繁さん、爰へ出なせえ。

繁　承知いたしました。

ト 平舞臺の眞中へ下に居る、惣助腹の立つ思入にて、

惣助　えゝ、よく洒蛙々々とお庭の先きへ、恐れ氣もなく出られたものだ。

ト 繁の側へ詰寄り、

これ繁、おのれはなあ／＼。

ト 下に居る、是れより合方になり、

此惣助が改めて、今言はずとも知れた事だが、おのれはおれが血を分けし實の姉の忘れ筐、しかも娘で、いやさ、娘ではない姉の子だ、親父は田舍で私學校の師匠をしてゐて幽な暮し、學問修業の其爲に東京へ出て勵みたい、五年後から出て居る所、下宿を取つても月々に多分の入費が掛るゆゑ、身貧な親の仕送りを、助ける工風はあるまいかと、相談掛けられ去年の秋、こちらのお屋敷の旦那さまへ、お願ひ申して兎も角もと、碁のお相手に出した所、御意に叶つてお屋敷へ置いて下さる有難さ、其大恩も打忘れどういふ心で大それた二百圓といふ大金を、おのれは盜んで逃げ居つた。こりやい、此惣助は數年來若黨奉公して居るが塵ツ葉一本人の物を掠めた事はなきゆゑに正直ものゝ名が通り、其お蔭やら此やうに、以前と替りお屋敷も狹くなつたるお住居にお人減らしの其中で、お使ひ下さる御高恩、身の面目もおのれゆゑ、若し手引でもしはせぬかと、旦那樣に思はるゝが、口惜しいやら悔しいやらで、夜の目も碌々寢られぬぞや。さあ二百圓の其金をば、何所へ隱した、それを吐かせ、あの胴亂にもないといへば、何の爲に遣つたか、それをきりきり吐かしてしまへ。

ト きつといふ、此内繁差俯向いて居て、此時顏を上げ、

繁　そりや早や僕が奪ひしなら、伯父上にも御迷惑が、掛るまいとも申されぬが、其儀は毛頭覺えのなき事、只今それにて旦那樣へ、申し開きを仕つれば、先づ／＼お控へ下されい。

惣助　えゝまだ〳〵そんな事を申して、しらばッくれるか。こりやい、幾らそんなにしらを切つても、おのれより外盗んだ者が、ないといふのが知れて居るわえ。さあ旦那さまの前へ出て、なまじ知らぬと言ひ張つて拷問にでも掛る時は、白狀ばかりか身の素性、いやさ、見す見す知れて居る事だ、現在伯父の惣助に、包み隱さず言つてしまへ。

繁　あいや伯父上、お案じあるな、假令拷問受けませうとも、存ぜぬ事を何ゆゑに、白狀がいたされませうぞ、開化に進む世の中ゆゑ、旦那さまにも舊弊な野蠻な事は仰せられまい。

惣助　えゝ何ぞといふと不斷から、おれを捉へて舊弊だの、やれ頑固だのと吐かし居るが、人の物を斷りなしに掠め取つてそれが開化か、正直正路にするのが開化か、開化競べをして見よう、あゝまだまだおのれに言ふ事がある。此おれなぞは今以て、神や佛を拜むのに、穢れと思へば牛肉などはついまだ喰つた事はないが、此日本に生れながら目玉の靑い外國人の、眞似をするのは何の醜態だ、先づ第一に氣に喰はぬは、散切天窓が癪に障る。

小助　これ〳〵惣助どの、めつたな事を言ひなさんな、旦那も矢つ張り散切りだぜ。

ト是れにて惣助心附いて、氣を替へ、

惣助　いや、旦那様も散切りだが、おのれと違つて形がいい。さあ繁、有體に言つてしまへ、言はずば斯うして言はせて遣るのだ。

ト胸倉を取てこづき廻すゆゑ、小助始め車夫二人惣助を留めて、

小助　これ〳〵惣助どの、待たつしやい、腹の立つのは尤もだが、旦那の御詮議ない内に、疵でも附けちやあ不都合だ。

猿傘　まあ〳〵靜かに、

豚吉　なさいまし。

惣助　えゝ、無口な乃公にこんなに喋らせ、何を言つても馬の耳へ、念佛程も聞き居らぬ、おのれ伯父をば馬鹿に仕居るな。

ト腹の立つ思入よろしく、

猿傘　どうせ二百圓といふ金を、望むくれえの肚胸だから、

豚吉　こなたが兎やかう言つたつて、何とも思ふ氣遣ひなし。

惣助　それゆゑ爰でしめあげて。

ト又立ち掛る、此時奥にて、
正道　惣助待て。
ト聲をかける、
惣助　や、あのお聲は、
小助　旦那さま。
猿兼　まあ〳〵靜かに、
豚吉　なさいまし。
ト是れにて惣助思入あつて、
惣助　旦那さまのお聲とあれば、腹が立つても仕方がない。
ト是非なく控へる、爰へ正面の襖を明け、お辰出てよき所へ褥を敷く、正道散髪羽織着流しにて出來り、眞中へ坐ふ。是にて皆々下に居る、繁も差俯向いてゐる、正道思入あつて、
正道　いやなに小助、よくぞ繁を連れて歸つた。
小助　へい、昨日ちよつと電信で、申し上げて置きましたが、伊香保の湯場でやうやつと捕り、押へましてござりまする。
ト惣助前へ出で、
惣助　扨旦那樣、斯樣な奴とも存じませず、お手許へ差上まして、只今となり私も、面目次第もござりませぬ。その申譯に惣助めが、白狀をさせ御覽に入れゝば、何卒詮議の役目をば、仰せ附けられ下さりませ。
正道　いや我が思ふ仔細もあれば、其方は先づ控へて居よ。こりや小助、同道なせし車屋兩人、定めて如在もあるまいが、他へ此事を漏さぬやう、申し附け置いたであらうな。
小助　其儀は豫て兩人に、申し含め置きましたれば、漏れる氣遣ひはござりませぬ。
正道　おゝ然らば是れを褒美に取らせい。
ト懷中より目錄包みを二つ出し、小助に渡す、小助受取り此方へ來り、
小助　さあ、旦那樣から二人へ御褒美、是れで一杯呑まつしやい。
ト渡す、猿兼受取り包みの上書を見て、
猿兼　や、こりや二人へ五圓づゝ、
豚吉　これは澤山、有難うござります。
正道　おゝ、大儀であつた、休息しませい。
猿兼　それではシヤッポと胴亂は、
兩人　そちらへお渡し申します。
ト小助受取り、

小助　早く歸つて休まつしやい。
猿条　左樣なら私共は、
豚吉　是れでお暇いたします。
ト兩人花道へ這入る、正道思入あつて椽端へ出で、
正道　こりや繁、それへ出い。
繁　はッ。
ト前へ出ろ、是れより本調子の合方になり、
正道　事新しく申さずとも、こりや其方の身の上ながら學問修業の其爲に、五ケ年以前國を立出で、旣に是れまで有名の教師に附いて東京にて、勉强なせし程あつて、なかなか以て某などが遠く及ばぬそちが學才、天晴何れの學校にても教師になるべき器量あれば、我が學問の友となし、側近く召使ひしに、斯く聖賢の道を學び人に教諭もなすべき身にて、何ゆゑ斯かる所業をなせしぞ、それとも又聖賢の域に至りて非義非道を行ふ事の例あるや、われは素より淺學ゆゑ、それ等の邊を辨へざるが、愚昧の心に了解なすやう、此場に於て諭し聞かせよ。
ト思入にて言ふ、繁じゆつなきこなしにて、
繁　まことに左樣仰せられましては、二言と申し上げやうもなく、只々恐縮仕りまする。

正道　いや、恐縮とばかりにては、更に其意が相分らぬ、尤も諸校の塾となる書生は十が八九まで、學事に勉强いたすべき職を忘れて酒色に溺れ、或ひは北廓柳橋などの娼妓や歌妓に魂奪はれ、學費に充つる定額を皆遊興に遣ひ捨て、買整へし書籍まで賣代なすに至りては、其身を寄する所もなく、路傍に迷ふ者多し、かゝる懶惰の輩とはそちが行ひ大いに反し、我が邸宅へ來りても日夜書籍に心を委ね、勉强衆に勝れしゆゑ、見所あつて寄宿を許し、盡力なして世話なせしが、如何なる天魔が魅入れたるや、案に相違の所業をなし、わが用簞笥へ入れ置きし金貨の内の二百圓、何等の趣意にて掠奪なせしや、さゝ、有體に申し上げよ。
トきつと言ふ、是れにて繁思入あつて氣を替へ、
繁　こは案外なるお疑ひ、其儀は毛頭此身に取り、覺えぬ所業にござりまする、
正道　むゝ、然らば何ゆゑ斷りなく、其日汝は旅行なせしぞ、それにも何ぞ謂れあるや。
繁　はッ、其御不審も左る事ながら、君には豫てお手に觸れしと承はりし父の書翰、在所表より到來なし披見いたせば先頃より、持病發して當今にては、兩足ともに

立たざる程に、難儀の由の知らせの文面、見るに心中混亂いたし、取る物も取り敢へませず、出立いたしてござりまする。

正道　そりや早や父の病氣とあれば、止むを得ざる事ながら、假令心中混亂なすとも、日頃恩義にあづかり居る伯父惣助へ其由を、托して置いてなぜ立たぬ。

繁　折惡く其砌、伯父惣助は他行いたし、居合はせませぬそれゆゑに。

　ト此内惣助自烈込む思入あつて、

惣助　えゝ、どういへば斯ういふと、旦那の御前でふてぶてしい。こりややい。よしんばおれが居ぬにもせよ、無人のお宅といふではなし、なぜ辰どのか小助どのに、譯を話して立たねえのだ。

繁　さあ、それは。

小助　斯ういふ譯で行つて來ると、たつた一言この小助に、言つても手間は取れめえに、それをこつそり沙汰なしで、在所へ行くとは合點が行かねえ。

正道　日頃愚昧の匹夫ならば、麁忽とのみにて聞き捨てんが、敎への道に勉強なす、博學多才の其方が申譯には相成らぬぞ。

繁　ト此内繁いろ〳〵思入あつて心附き、氣を替へ、

　其儀はそれなるお辰どのへ、申し置きましてござります。

お辰　えゝ。

　トびつくりなし、

正道　なに、是れなる辰へ言ひ置きしとな。

お辰　いえ〳〵何で私へ。

　ト言ひ掛けるを、繁冠せて、

繁　はてこなたも覺えの惡い、あれ程僕が頼み置きしに、失念されては、

　トちよつと思入あつて、

それ頼まれたでござらうがな。

　ト思入にていふ、お辰扨はと呑み込み、

お辰　ほんにあの折お頼みを、つい忘れて居りましたわいなあ。

惣助　えゝ、其間に合せはまことにせぬ、扨はこなたは繁めを、まことの男と、いやさ、誠の奴と心得て、心を掛けて居るのだな

お辰　いえ〳〵、何でいやらしい、そんな事がござりませう。

小助　いや〳〵それに違ひねえ、戀人ゆゑに庇ふとしても、其手は喰はぬ御前の面晴れ、但し不義をして居ずば、有體に言ふがいゝ。
お辰　さあ、それは。
惣助　何で繁を庇ふのだ。
お辰　さあ、それは。
小助　有體に言つてしまふか。
お辰　さあ、
惣小　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
ト詰め寄る、是れにてお辰困つて居るゆゑ、
正道　こりや繁、何科もなき此辰に、難儀を掛けるは卑怯なるぞ。
トきつといふ、繁ぢつと思入、正道こなしあつて、實に朋輩の誼とて、目交で悟り是非なくも、それと言ひしは辰が信義、假令如何程其方が、黑きを白きと言ひなすとも、豫て先手の閭みをなし、兩眼共に明らかなるに、潰すとしても最う叶はぬ、無益の中手は未練なるぞ。
ト是れにて繁ぐつと詰つて差俯向くを、惣助襟首をとつて引起し、

惣助　さあ繁、且那樣のおつしやる通り、もう繕面は作れぬから、恐れ入つたと白狀しやれ、言はずば伯父の惣助が、拷問に掛け言はすぞよ。
繁　いや、假令如何程糺問の責に逢ふとも此繁、覺えなければ白狀いたさぬ。
惣助　えゝさりとては死太い奴、言はずば斯うして、
ト下手にある竹箒を取つて、
こう〳〵〳〵、
トよろしく打するゑ、
是れでも白狀仕居らぬか。
トきつとなる、正道思入あつて、
正道　惣助、待て。
惣助　でも、白狀いたしませねば。
正道　いや、是れと申すもあの砌り、番をいたせし其方が、熟醉なせしゆゑの事、そちも罪科は遁れぬぞ。
惣助　それゆゑ拙者は申譯に、切腹なさんといたせしが、お聲掛りに今日まで、命を延はり居りましたが、遁れぬ科ゆゑ此場に於て。
ト有合ふ柄杓の柄を拔取り腹へ突立てようとするを小助留めて、

小助　これ惣助どの、早まらつしやるな。

惣助　いや〳〵留めて下さるな、是れには段々譯あつて、義理ある兄の右膳より繁が身分を頼まれし、此惣助ゆゑ死なねばならぬ。

正道　こりや繁、そちやあれなる現在の、伯父惣助に自殺させても、白狀せぬ所存なるか。

繁　さあそれは。

正道　但しそれにて罪に伏すか。

繁　さあ、

惣助　腹を切らうか。

繁　さあ、

小助　言つてしまふか。

繁　さあ、

皆々　さあ〳〵〳〵。

正道　伯父に無實の罪を負はせ、それにて教師の名義が立つか。

　トきつと言ふ、是にて繁是非なき思入にて、

繁　はゝッ、御推察の通り二百圓、掠奪いたしてござりまする。

正道　おゝ、しかと左樣か。

繁　はッ。

　ト平伏なす、惣助きつとなつて、

惣助　主人の金を盜みし大罪、他人の手にて殺さんより、幸ひ是れなる竹のつかにて。

　ト立上るを、

正道　こりや〳〵、惣助暫く待て。

惣助　えゝ、又お止めなされまするか。

正道　人命を斷つ所存なれば、斯樣に我も心を勞し、事穩便にはいたさぬぞ。

惣助　でも此儘に、置かれぬ仔細が。

正道　はて、主の詞を用ひぬか。

惣助　はゝはッ。

　ト餘儀なく扣へる、正道思入あつて、

正道　惣助始め小助、辰、用事があらば呼ぶ程に、暫く次へ遠慮いたせ。

小助　でも罪人を、是れへ置き、

お辰　旦那樣には御一人。

正道　はて苦しうない、次へ立て。

　ト惣助思入あつて、

惣助　あ、是れと知つたら疾くより素性を。

正道　や。
惣助　いや、お次ぎへ立つでござりませう。
　ト惣助は上、小助は下手、お辰は奥へ這入る、跡正道、
　繁残り正道こなしあつて、
正道　こりや繁、近う進め。
繁　はゝ。
　トおづ／＼として居るゆゑ。
正道　はて、苦しうない、進め／＼。
繁　はッ。
　ト恐る／＼前へ出る。
正道　日頃博學秀才なる、そちに似氣なく金子を奪ひ、立去るなどゝは其意を得ず、そりや早や若氣の至りゆゑ、遊里の金子に差支へ、賊心の發するなどは古今往々ある例ながら、婦女に心を寄せざる事は、活眼を以て見拔き置いたり、何等の望みで二百圓掠奪なして立去りしか、次第によらば此儘に見遁しやるまいものでもない、委細をそれにて言ひ聞かせよ。
　ト物柔かに言ふ。
繁　はゝッ、恐れ入つたる其お尋ね、君の御恩を顧みず、金貨を掠奪いたしましたる、餘儀なき次第を旦那樣、お聞きなされて下さりませ。
　ト是れより謎への合方になり、
世の諺にも申す如く、貧の盜みに戀の慾と、學問修業をいたす身が、かゝる所業を働きまするは、心苦しき事ながら、故郷に殘る我が實父、不幸續きて三年前妻に別れて又候や、今年持病の足痛發し家内も歩行の叶はぬ難儀の由を書翰にて、申し越せども救ふべき、力及ばぬ書生の身、千々に心は碎きしかど、先刻仰せのありし如く知己はあれども懇情の輩、頼みになるべき親友なく、ふッと浮みし賊心も御恩を仇と存じながら、お手元金の二百圓掠奪なして國元の、父方へ持參せしかど、不正の金貨と覺りしか、悦ぶ氣色更になく、それと言はねど餘所ながら、教諭を加へ元々へ、返納せよとの父の言附け、とあつて一旦犯したる此身の罪科は遁れじと、思ひ餘つて佛前へ、竊に供へ、其儘に立歸つたる伊香保にて、圖らず追手の捕縛を受け、お調べ受くるも身の大罪、遁れぬ所にござりますれば、是非なき事にござりまする。
　ト愁ひの思入にていふ、正道是れを聞き、扨はといふこなしにて、
正道　むゝ、我も先日父方より、届きし書翰が手に入りて

繁　披見いたせば斯くあらんと、疾より遠察いたしたり。只此上の願ひには、此場に於てお手討に、御成敗なし下さりませ。

ト覺悟の思入、正道合點の行かぬこなしにて、

正道　はて心得ぬそちが言ひ分、孝心厚き身の上に、父なき後まで一命を、助けくれよと願ふべきに、此場で成敗いたしくれとは、未だ分別の至らざるか。

繁　其一命を差出しますとも、お情厚き君ゆゑに、假令此儀を御內分に、なされまするも世の人口、惡事千里を走るの諺、いつかは此身の犯せる罪、世上へ流布なす其時は、伯父が迷惑二つにはお目違ひとなりますゆゑ。

正道　なに、目違ひと相成るとは。

繁　かゝる書生の姿となり、妻木繁と申しまするも、此身は女でござりまする。

正道　何と申す。

トびつくり思入、是れより替つた合方になり、繁形を改め、

繁　何をお隱し申しませう、私父母は子に緣薄く、先へ離れし子供等は皆幼少にて病死なし、せめて此身は息災に育てんものと呪禁や人の敎へを信じまして、男姿で何事も男子の積りで育てしゆゑ、いつか男の所業となり、女の身には憎らしき高慢顏も田舍では、させる修業も出來ませねば伯父を便りて東京へ、學問修業に出でましたが、年月經ちて早や五ヶ年、何卒男女同權になりたき事を希望なし、是れまで身の上を包みましたが、犯せる罪のいつか又露顯とならば違式の罪、此身ばかりか旦那樣の、お目違ひとなりし上、恩ある伯父も御主人を、欺く罪は免かれず此恥辱のなき內に少しも早くお手討に御成敗なし下さりませ、只此上のお願ひにはお情お慈悲と思召し、最期の跡の死骸をばお隱しなされて下さりませ、女子の身にて大膽にも是れまで男子に成り果せ、お上の布告もあるものを、僞り居りしそれのみでも、此身の罪科は遁れませぬわいなあ。

ト繁愁ひの思入にて女のこなしよろしく、此內正道扱はといふ思入にて、繁に見惚れるこなしよろしくあつて、

正道　すりや、いよ〳〵其方は、眞の女に相違ないか。

繁　君に命を差上げまするに、何僞りを申しませう。

正道　そりや、あのいよ〳〵。

繁　はい。

ト女のこなし。

正道　むゝ。

ト思入。是れにて媚いたる合方になり、

然らば繁、これへ參れ。

繁　でも、罪人の私ゆゑ。

正道　はて大事ない、是れへ參れ。

繁　御免なされて下さりませ。

ト恐る〳〵二重へ上り、正道の側へ恥かしさうに手を支へる。正道四邊へこなしあつて、

正道　眞女に相違ないな。

繁　はい。

正道　思ひ掛けない。

ト正道繁に見惚れる、思入、繁顏を上げ思入あつて、

繁　さあ、御成敗なし下さりませ。

トちつと思入あつて、

正道　いや、成敗はいたすまい。

繁　えゝ、そりや何ゆゑでござりまする。

正道　はて、よくも女であつたな。

ト餘念のなき思入、爰へ上手より以前の惣助出で、

惣助　旦那さま、どうぞお許し下さりませ。

正道　なに、許せとは、そりや何を。

惣助　死んだ妹の頼みにより、現在お主をお擬し申し、女を男と申し上げた罪をお許し下さりませ。

正道　疾くより女と申しなば、其詮議にも及ぶまいに、其詫言には及ばぬぞ。

惣助　すりや此儘に繁めを、お許しなされて下さりまするか。

正道　おゝ許さいで何といたさう、女であらば疾よりか思ひを掛けし妻木繁、よくぞ推擧をいたしくれた。

ト此時下手より以前の小助出て、此體を見てびつくりなし、

小助　こりや罪人がいつの間に、旦那のお側へ參りしは。

正道　おゝ紛失せしと思ひしは、我があやまりにて、取られはせぬぞ。

繁　すりや親共へ贈りましたは、

正道　ありや其方の、仕度金ぢや。

惣助　扨は繁を、旦那さまには。

正道　我が權妻にいたしたぞ。

繁　えゝ。

トびつくり思入。小助扨はといふこなしにて、

小助　そんなら男と思ひしも、
惣助　今日よりしては、お妾さま。
繁　せめては髪の延びるまで。
正道　其斟酌には及ばぬわえ。
ト此時薄く雷の音になる、皆々空へ思入あつて、
惣助　や、春の習ひといひながら、
小助　俄に空が搔つたのみか、
正道　遠く聞ゆる雷鳴は、
繁　思はぬ御縁を、
惣助　結ぶのかみなり。
正道　今宵はしつぽり、
ト繁の手を取り引寄せるを木の頭。
雨になるわえ。
トにつたりと思入、繁恥かしきこなし、惣助小助は空を見て態と見ぬ振りをする、此引張り、雷の音、なまめいたる合方にてよろしく、

ひやうし　幕

三幕目

小梅別荘の場
向島枕橋の場

役名――神保の権妻お繁、倉橋直次郎、庭別當小助、牛窪角蔵、馬淵大蔵、戸倉早利右衛門、神保正道、戸倉の娘お芳、女髪結おれん、神保下女お辰等。

(小梅別荘の場)――本舞臺一面の平舞臺、四間通しの欄間、向ふ一間床の間好みの掛物、籠花活へ椿をいけ、眞中太鼓張りの襖、上手一間銀張り地袋戸棚、此上茶壁、上の方一間茶壁、下地窓腰張り下の棲木地障子、よき所に誂いの鶯籠、いつもの所枝折戸、下の方家根附の門二枚開きの戸、此左右建仁寺垣、見越しに本物の松、總て小梅別荘の體。上手に角蔵大蔵序幕の書生にて、短き煙管で煙草を呑み居る、下手にお辰前垂れ掛け、下女のこしらへにて小さき擂鉢で鶯の餌を摺つて居る、此見得端唄にて幕明く。と右の合方彈流しにて、

角藏　いや、此別莊も上下では、五六名の人員だらうに、よく其摺鉢で間に合つたものだ。

大藏　今お辰が摺つて居るを、君は何と見られたぞ。

角藏　あれは明日の汁であらう。

お辰　何ぼ皆さんがお小食でも、此摺鉢では間に合ひません。

角藏　さうしてそれは何を摺るのだ。

お辰　こりや鶯の餌でござります。

角藏　はゝあ鶯の餌は摺つてやるのか、それは手數で面倒だな。

大藏　どうで斯らいふ樂みは、權君などの持遊びだ。

お辰　それはさうとあなた方は、どちらへお出でなさいました。

角藏　今日は例の日曜ゆゑ、馬淵氏と兩名で、東照宮へ參詣かた〴〵公園地の花盛りに、ぶら〳〵遊歩いたせし所、

大藏　何れの茶店も吸筒やさゝへを開いて風雅連がてにはも合はぬ歌を詠み、櫻の枝に無性に下げ花の眺めを、失ふは、實に殺風景な族でござる。

角藏　時にお辰、御主人は御閑室で、例の閑碁かな。

お辰　いえ旦那樣はお午過ぎから、瓦町の溫泉へ、小助がお供でお遊びながら、お出でなされましてござります。

角藏　瓦町の溫泉といふは、佐竹邸の後へ出來たカルヽスといふ溫泉だな、淺草邊へ遊歩の度每、入湯なすが極潔だ。

大藏　それに隣家が梅林ゆゑ、滿開の折は風呂場へ香り、あれで庭前から墨水の眺望があれば東京一だ。

お辰　私などもお繁さまの、お供をいたして參りましたが、水が綺麗でござりますから、底まで透いて見えますな。

大藏　そんなに透いて見えるなら、お辰と一所にはひりたいものだ

お辰　又そんな事を仰しやいますが、入込みは御法度でござります。

角藏　いやお繁さんといへば、まだ今日は、艶顏を拜さぬが、何所へかお出でなすつたかな。

お辰　今日は髮をお洗ひなさいましたが、今髮結さんが參りましたので髮を結つてお出でなさいます。

角藏　洗ひ髮は又一段、嘸や美なる事であらう。然し、お庭の櫻で仕方がない。

大藏　貴妃にも勝る別品を、市中を放れて圍つて置く、當

家の主人にあやかりたい。

お辰　そんな事は存じませぬわいな

大蔵　なに、存ぜぬ事があるものかこ

　ト此時奥にて、

お繁　辰や、おれんさんがお歸りだよ。

角蔵　や、あの聲は。

兩人　お繁の君。

お辰　今の事を申しませうか。

大蔵　あゝ、それを言はれて、

兩人　なるものか。

　ト端唄になり、奥よりお繁好みの結び髪、着流し、權妻好みのこしらへにて出て來る、後よりおれん女髪結のこしらへ、櫛箱を入れし風呂敷を持ち出で來る。

お繁　是れは牛溲馬渤の御兩氏、久しくお目に掛りませぬな。

　ト男のやうに言ふ。

大蔵　此頃嚢中錢なきに依つて、據なく二週間、金を得る爲著作に掛り、大勉强をいたしました。

角蔵　所が意中は深川か柳橋あたりで遊んで居るゆゑ、文中疎漏に書林から賣物品にならぬと言はれ、

角蔵　誤謬遺漏の校正も、面倒ゆゑに文庫へ投じ、

大蔵　今日は愉快を極めんと、運動かたがた出掛けました。

お繁　それでは歸路は向ふへ渡り、廓中に登樓の思召しかね。

角蔵　君の活眼見拔かれました、何れ明朝昇堂して、

大蔵　作境に入りし御物語は、僕が證言いたしませう。

　トお繁女の思入にて、

お繁　それぢやあわたしの察し通り、これから登樓なさるのか、甚だ失敬極まるが、一體君達お二人とも造化の細工が精巧ならねば、歌妓や娼妓に散財なさるは、まことに無駄な事だねえ。

角蔵　普く天下に比較なすべき、好男子はあるまじと、思ひ居るに豈計らんや。

大蔵　造化の細工が精巧ならねば、歌妓、娼妓に散財は、無駄とは酷い激言だ。

お連　さつきから私は默つて聞いて居りましたが、あなた方の仰しやるは、只一言も分りませぬが、造化の細工とおつしやりますはなんの事でござりますかね。

お辰　お前ばかりぢやござりませぬ。わたしもさつぱり分

りませぬが、どうか了解いたしますやう。
角蔵　えゝ、どうか了解いたすやうと、漢語などで生利な。
大藏　妾らが彼の俗諺にいふ、習はぬ經を讀む所だ。
お辰　そりやあお家に居りますから、私だつて因循や曖昧位は知つて居ります。
お連　おゝ、にんじんの和たのとは、此頃來る煮染屋かえ。
お繁　又おれんさんの分らぬことを、ほんにお前では抱腹するよ。
お連　私の顔がへこんで居るとて、炮碌とはひどうござりますね。
角蔵　成程顔のへこみ鹽梅、炮碌とは適當だ。
大藏　これも造化の不細工だな。
　ト おれん思入あつて、
お連　はゝあ、それぢやあ造化とおつしやるのは、顔の事でござりますね。
　ト角蔵大藏の顔を見て、
これは君達御兩氏も、精巧ならぬ不細工だ。
お辰　おや何時の間にかおれんさんまで。
お連　團子を遣ふは今の流行さ。

角大　なに團子とは。
お連　それ、皆さんの仰しやるちんぷんかんさ。
角蔵　はゝあ、團子といふは漢語の事か。
大藏　僕は言問の土産と思つた。
兩人　はゝゝゝ。
お繁　それはさうと君達は、旦那樣のお歸りまで、何所ぞそこらを一廻り、散歩しておいでなさいな。
角蔵　いや、瓦町の温泉なら、最う今に御歸館だらう。
大藏　土手をぶら〳〵歩くより、庭前の花でも見ませう。
お辰　丁度昨今滿開ゆゑ、詩でも吟じてお待ちなさいよ。
角蔵　過日參つて頂戴した、御主人のお呑料、
大藏　宇治から參つた別品を、どうか一煎頂戴したい。
お繁　いや、煎茶よりも君達には、唐茶の方が適當だらうね。
角蔵　又活眼で見拔かれました、唐茶と來ては極の至り。
大藏　最早僕が喉などは、ぐび〳〵響きを生じました。
お繁　これ辰や、何ぞお肴を見繕つて、お燗をつけて上げてくりや。
お角　はい、白魚がござりますから、お椀でもこしらへませう。

角藏　なに、肴などの手數は無駄だ。
大藏　たゞ酒さへあればよい。
お辰　左樣なればお二人さま。
角藏　君の御厚意、
兩人　頂戴します。
　ト右の合方にて角藏大藏お辰に附いて奧へ這入る。
お連　書生さんといふ者は、よくお酒を上りますね。
お繁　あの衆二人は其内にゃ、酒といふと目がないのさ。
お連　鼻のないのは私かね。
お繁　なに、お前の鼻は立派だよ。
お連　いえ〳〵造化の不細工で、有るといふのはほんの名ばかり。
お繁　おゝ造化といへば此頃出た、造化機論といふ本は、女が見なくてならない本だよ。
お連　そりやあどんな本でござります。
お繁　先づ夫婦の仲の事からして、男の子でも女の子でも、自由に出來る教への本さ。
お連　それがお内にござりますか。
お繁　お出入りの書林から、此間持つて來たゆゑ、旦那さまがお求めなされて、わたしにお見せなされました。

お連　それはお樂しみでござりまするな、今更言つても仕方がないが、さういふ本が早く出たら、こんな中低な顏は出來ますまいもの。
　ト此内お繁傍にある反物を取つて、
お繁　そんな愚痴を言はないで、是れを持つて早くお出で。
　トおれんに渡す。
お連　おや、是れを私に下さいますか。
お繁　不斷着にでもしておくれ。
お連　どうして〳〵不斷着どころか、立派な餘所行になります、是を持つて歸りますれば、低い鼻が高くなります、誠に有難うござります。
　ト風呂敷へ包み。
お繁　おれんさん、洗ひ髮だから、又明日來ておくれよ。
お連　あゝ參りますとも〳〵、造化とやらの御本があつては、お髮はだいなしに毀れませう。
お繁　えゝ餘計な事をお言ひでないよ。
お連　はい左樣なら又明日。
　ト端唄になり、おれん花道へ行く、此時花道より御家直の直次郎、着流し長半纏、下駄がけにて出來り、花道にて、

直次　もし、ちよつと物が聞きたうござります、向ふの寮は駿河臺の、神保樣の別莊かね。

お連　はい左樣でござります、御用ならば其木戸が、お庭の入口でござりますよ。

直次　あすこの家にお繁さんといふ、お妾がありませうね。

お連　あゝありますとも〳〵、元書生さんで居たとやらいふ、別品さんが居ります。

直次　それをお聞き申したいのだ。

お連　それぢやあ最うようござりますか。

直次　大きに有難うござります。

トおれん少し行きかけ、

お連　はて、あの人は人力だつたが。

直次　え。

ト振返る。

お連　これは失敬、御免なさいまし。

ト端唄になり、おれん足早に花道へ這入る、直次郎は舞臺へ來り、枝折戸から内を覗く、お繁ちよつと見て、

お繁　そこへお出でのは、どなたゞえ。

直次　誰でもねえ、おれだ。

ト内へ這入る。

お繁　や、お前は。

トびつくりする。合方になり、

直次　何もびつくりする事はねえ、人力車の御家直だ、久しくお前に逢はねえから、態々今日は尋ねて來たのだ。

ト下手よき所へ住ふ、お繁惡い奴が來たといふ思入にて、

お繁　駿河臺から此小梅へ、こつそりと忍んで來たわたしを、どうして知つて來たのだえ。

直次　そりやあ蛇の道はへびだ、芝の巣から淺草まで、顏を知られた人力車、仲間の者の話しに聞き、疾から知つちやあ居るけれど、半股引に筒ッぽぢやあ、お前の恥にならうと思つて、鳥羽の算段の出來るまで、我慢をして來ねえのだ。

お繁　此間筋違ひの待合茶屋へ呼び出され、お前に逢つた其時に、二度と再び來ないから貸してくれとお言ひだから、そんならさうと言ふなりに、金を持たして歸したのに、何で今日又來なすつたのだ。

直次　さあ、あの時はなくてならねえ金を借りようばつかりに、再び來ねえと言つたけれど、短い髮も段々延び、

男姿に打つて替り、洗ひ髪の達磨返し、九年面壁座禪をする和尚も迷ふお前の體、氣障な事を言ふやうだが、實の事は顔が見たさに、のろい奴だが出て來たのだ。

お繁　味に搦んでお言ひだが、何もお前と末始終の約束をしたといふではなし、ほんの一晩熊谷で餘儀ない譯で一つに寢たれど、跡で兎や斯う言ふまいといつて別れた二人が仲、そんな氣障を言はないで、一旦來ないと言つたらば、男らしくお出でゞないよ。

直次　來るなといふのはそりやあ無理だ、お前の方ぢやあ此おれを、氣障な野郎と思ふから、さう無情くいふだらうが、おれが方ぢやあ一晩でも、お前が思ひ切られねえから、無けなしの中で算段して身裝をこせえて逢ひに來たのも、實は顔が見てえからだ、いやでもあらうが煙草位は、吸附けてくれてもいゝぢやあねえか。

お繁　折角のお頼みだが、わたしやあ此頃口が荒れて、煙草を呑むことが出來ないから、呑みたければ爰にあるから、勝手についでたんとお上り。

ト煙草箱と煙管を突出す。

直次　自分でついで呑む位なら、附けてくれろと言やあしねえ。

ト お繁思入あつて地袋戸棚から札を出して紙に包み、

お繁　人目に立つと面倒だから、是れで歸りに淺草で、一口呑んで早くお歸り。

ト札包みを出す、直次郎見て、

直次　なに金を貰ひに來やしねえ、萬人講の無盡へはひり、思ひ掛けねえ金を取つて、身裝を拵へた其殘りが、まだ四五圓こゝにあるから、其心配にや及ばねえ、今日わざわざおれが來たのは、假令一晩でも抱寢をした、お前が旦那の世話になるなら、一言禮が言ひてえのだ、ちよつと逢はしてくんなせえ。

お繁　それは折角のおいでだが、今日は旦那はお留守だから、お前に逢はす事は出來ませんよ。

直次　旦那が家に居なさらねえのか、お留守ならお歸りまで、爰にお待ち申して居よう。

お繁　碁がお好きだからお出先きは、いつお歸りになるか知れないよ。

直次　官員方の車を引きやあ、九時に出て三時まで、御門前に待たにやあならねえ、人力車だから待つのは平氣だ。

お繁　まあそんな事を言はないで、少なからうが小遣ひに、是れを持つて歸つておくれ。

直次　さう何も歸れ〳〵と、歸したがらねえでもいゝぢやあねえか、何百圓といふ金を一月に取るこつちの旦那と日に一圓拵いだところが、たつた月に三十圓、慾を知らねえ者はねえから、いやがられるのは當りめえ、お前ゆゑなら旦那を捨て、喰ふに困りやあ出稼ぎを、しても一所になりてえと言はれるやうな役は附かねえ、そこはおれも苦勞人、盆の上が見えるから、とんだ琴責の阿古屋だが四三を語つて未練らしく九二も附かねえ事は言はねえ、旦那に逢つて禮を言ひ、一六勝負に惡足の、處分を附けて貰ひてえのだ。

お繁　さういふお前が心では、わたしが兎や斯う言つたとて所詮聞きはしまひから、日が暮れたらばお歸りにならうかも知れないから、又出直して後にお出で。

直次　待つて居るのが邪魔になるなら、又出直して後に來るから、留守を遣ふときかねえぞ。

お繁　お歸りなさらにや知らぬ事、誰が留守を遣ふものかな。

直次　それぢやあきつと逢はせるな。

お繁　ほんにお前もしつこい人だね。

直次　碁が好きだといふ事だから、きつと駄目を押して置くのだ。

ト立上ろ、此時小指を白き切で結へて居るを、お繁目を附け、

お繁　左の小指を何うしたのだえ。

直次　え、此小指か。

ト びつくりして手を隱し、

こりやあ此間こしらへ附けねえ、鴉をこせへた其時に、はずみで小指を一本切つた。

お繁　いゝえ、それは鳥ではあるまい、大方どこぞへ色が出來、指を切つて遣つたのだらう。

直次　何ぼ以前が士族だつて、そんな野暮な事をするものか。

お繁　ほんに今では指などを、心中に切る者はないねえ。

直次　そりやあ五十年も昔のことだ。

ト 懐から小指をきかし手を出して思入、此時懐が明いて鬱金木綿の財布をばつたり落す、お繁財布を取つて、

お藏　財布が落ちたよ。

ト 出す。

直次　こいつを落しちやあ大變だ。

ト思入あつて懐へ入れる。

お繁　お前大層持つて居るね。

直次　なに、大層持つて居るとは。

お繁　重みは金貨で二百圓ほど。

直次　え。

トぎつくりなし、

馬鹿な事をいつたものだ、こりやあ一錢の赤錢だ。

ト門口へ出る。

お繁　お前是れを、持つて行かないのかえ。

ト包んだ金を出す、

直次　百圓ばかりの金は入らねえ、貰ふ件になつたらば、纏めて千圓貰ふ氣だ。

お繁　え。

直次　どれ、出直して又來ようか。

ト時の鐘端唄になり、直次郎懐の中で財布を見て、思入あつて花道へ這入る、お繁門口から向ふを見て、男の思入にて、

お繁　あゝ人の身の災厄は、いつ受けるか知れぬもの、至急の道に壯健の車夫を選んで雇ひしが、見るから一癖あるものと目を附けたるが案に違はず、舊幕臣の士族の果て、其夜泊りし熊谷の宿の風呂場で我が乳を認めしゆゑに隱しがたく、包む素性を明せしに、それを言立て無理口說き、得心せねば天下の掟、違式詿違の條例に、觸れし科をば訴へられなば、直に屯所へ拘引され、詰問されなば懐中に、所持なす金の二百圓、如何なる事件にならんも知れず、父が貧苦を救はんと思ひし念も水となり、それのみならず厚恩ある神保氏の名まで出で、本意ならざる事なれば、百計盡きて餘儀なくも、其場を遁れん其爲に身を任せしが我が誤り、これといふのも道ならぬ所業をなせし天の罰、今にも爰へ立歸らば今日まで包み隱したる此身の耻も露顯なし、新聞紙上に載せらるゝは心苦しき事ぢやな。

トよろしく思入、よき程に、奥よりお辰出來り、下手へ來て、

お辰　はい、お風呂がよろしうござりますが、直にお召しなされますか。

お繁女の思入にて、

お繁　おゝ、きよかと思つたら辰か、最うお湯が沸いたのかえ。

お辰　丁度よい加減でござります。

ト　お繁思入あつて男のこなしにて、
お芳　あゝ、其風呂ゆゑに。
ト　ぎよつと思入、
お辰　え。
ト　顔を見る、お繁心附き、女のこなしにて、
お芳　どれ、一風呂、
ト　立上るを道具替りの知らせ、
入らうかいな。
ト　女のこなし、端唄にて此道具廻る。

(向島枕橋の場)――本舞臺眞中より上手へかけて丸物の橋、出入りあり、上の方町家の張物、柳の立木にて見切り、下の方草土手、松の立木、向ふ八百松より隅田川を見たる夜の遠見、日覆より柳の釣枝總て枕橋夜の體、波の音にて道具留る。と波の音打上げ、本釣鐘への獨吟になる。

〽東風にちぎれ〳〵の雨雲も、一つになりて影闇き、繁る柳の幾筋か、よれてもつれてもつれてよれて、解け心の春の宵。

ト　本釣鐘かすめて波の音を冠せ、花道よりお芳前幕の娘世話装にて紅絹の切を持ち目を拭ひ、目病みの思入にて出來り、花道にて、

お芳　ふとした人を思ひ染め、道ならぬとは知りながら、心に染まぬ其人と女夫になるのが厭なゆゑ死ぬる覺悟で家を出で、東橋から大川へ此身を捨てんと思ひたれど、往來の人の多いので、隙がなければ是非なく〳〵、忍ぶ涙を呑込みて、短い命をやう〳〵と、長い橋をば跡になし、爰まで忍んで來はしたが、往來の人も稀なれば、家より追人の掛らぬうち、少しも早うさうぢや〳〵。

〽昨日に今日と綻びて、雲か雪かと疑ひの、花の色香も仇嵐。

ト　本釣鐘やはりかすめて、波の音を冠せ、お芳物思ひのこなしにて目を拭ひながら、平舞臺へ來る、此唄のうち向ふより正道散髪書生羽織、着流し駒下駄にて出て來る、後より小助紺の着附、同じく腹掛股引尻端折り草履にて、浴衣を包みし風呂敷包みを持ち出來り、花道にてお芳の素振を見投げに違ひないといふ思入あつて、そつと舞臺へ來り、下手松の蔭に窺ひ居る、お芳は是れを知らず思入あつて、

空も曇りし雨雲に、ふさがる胸の薄闇がり、枕橋から其

先きは、道も淋しき水戸樣前、今身を投げて死ぬる身に、怖いことはなけれども、若し惡者に見咎められ、どんな憂き目に逢はうも知れぬ、人目に掛らぬ其うちに、枕橋から身を投げん。

〽盛り短く散りて行く、身の末淸き水の上。

トお芳は石を拾ひ袂へ入れ橋の上へあがる、正道いろいろ身投げに違ひないといふ思入あつて、小助に囁く。

母さまには五つの年お別れ申したそのまゝゆゑ、お顏も碌々知らねども、父さまには此年まで、一方ならぬ御恩になり、それも送らず先立ちます不孝は存じて居りますが、覺悟を極めし上からは只何事も是れまでの、約束と思召して、お許しなされて下さりませ。

ト手を合せ向ふを拜み、

南無阿彌陀佛。

〽若芦生ふる川の瀨に、浮寢の鳥の騷立ちて、ぱつと立つたる水煙り。

トお芳思入あつて身を投げようとするを、小助つかつかと行つてお芳を抱き留め、

小助 姉さん危ねえ、まあ待ちねえ。

お芳 死なねばならぬ身の上ゆゑ、どうぞ放して下さりませいな。

小助 いや〳〵お前は放されねえ。

ト振放さうとするを、小助捉へて本舞臺へ來る、正道側へ寄り、合方にて、

正道 定めて身をば投げるには、深い仔細もあるであらうが、我が目に掛りし上からは、最早そなたは殺さぬぞ。

お芳 お留めなされて下さりますは、有難うはござりまするが、其お慈悲より此儘に、お見遁しなされて下さりまするが、遙かにお慈悲でござりますわいな。

小助 取り逆上て居なさるから、お前の目には見えまいが、お留めなされた旦那さまは、神保さまとおつしやつて、御身分のあるお方さまだ、今溫泉からお歸りがけ、お前の素振がをかしいから、若し身でも投げるなら、どうか助けて遣りたいと、見え隱れに附けて來たのだ。

正道 如何なる事でも取扱ひ、望みを叶へて遣らうから、何れの誰が娘なるか、包み隱さず身を投げる仔細を我に話して聞かせよ。

お芳 御親切におつしやつて、下さりますは身に取りまして、有難うはござりますが、命を捨てます其譯は、どう

も申されませぬわいな。

正道　娘心の一途に迫り死なうといふは悪い了簡、知らぬ先きは兎も角も、斯く某が留めたからは、何うでもそなたは助けにゃ置かぬ。

小助　悪い事は言はねえから、仔細を早く言ひなせえ。

お芳　さあ其仔細を申しますと、直に家へ知れますから、堪忍して下さりませいな。

ト　お芳泣き伏す、正道思入あつて、

正道　はて扨年が行かぬとて、さりとは聞き分のないことぢや。

小助　こりやあ旦那いつその事、交番所へ訴へて、渡した方がようござりませう。

正道　それは何より易い事だが、どうかさうせず説諭を加へ、住所を聞いて親元へ引渡して遣りたいものぢや。

ト又お芳に向ひ、

こりや娘、今其方を交番所へ身投げの者と引渡さば、何やうそちが隠すとも人民保護の役目ゆゑ、問ひ糺さねば置かぬぞよ、さすれば仔細を言はねばならぬ、人目に掛らぬ其内に、早く仔細を申さぬか。

お芳　それ程までに仰しやつて下さりますを無にしては済みませぬことながら、どうも申されませぬわいな。

小助　事を分けて旦那さまが、為を思つておつしやつても、それでもお前は言はねえのか。

お芳　はい、嘸お腹も立ちませうが、お許しなされて下さりませいな。

ト又泣伏す。

正道　是れは困つたことぢやなあ。

ト正道困りし思入、此時橋の上より、以前のおれんぶら提灯を提げ出來り、正道を見て、

お連　そこにおいで遊ばすは、小梅さまではござりませぬか。

正道　おゝ、そちは髪結のおれんなるか。

小助　こりやあよい所へ来てくれた。

お連　見れば小助さんが娘を捉へて、こりやどうしたのでござります。

正道　今此娘が枕橋から、身を投げようとせし所を通り掛つて留めしが、何れの者か仔細を申せと、繰返して尋ぬれど、其住所さへ未だ申さず、

小助　たゞ堪忍してくれとばかり、まことに困つて居る所だ。

お連　へゝえ、それおやあ身投げでござりますか。
　ト提灯でお芳を見てびつくりなし、
や、お前さんは戸倉屋の、お嬢さんではござりませんか。
お芳　あゝもし、其名をいうて下さんすな。
お連　どうして〳〵私が、あなたと知つて此儘に、是が言はずに居られませう。
正道　すりや其方が存ぜし者か。
お連　存じたどころではござりません、此お嬢さんはお得意先きでござりまして、つい川向ふの花川戸で、戸倉屋といふ本屋の家の、お嬢さんでござります。
正道　扨は書林で名の高い戸倉屋の娘であつたか、いやそちに逢はぬと知れぬ所、住所が知れゝば此娘は、宅へ連れて行く程に、そちは先方へ仔細を知らせ、迎ひに來るやう申してくりやれ。
お連　畏まりましてござりまする、嘸お知らせ申したら、お家でびつくりなさるだらう。
小助　どうでびつくりする話しだ、早く知らせてくんなせえ。
お連　はい〳〵、提灯は是れへ置いて参ります。

正道　ト松の枝へぶら提灯をかける。
　道が闇くて困るであらうに。
お連　いえ、水明りで明るうござります。
　ト波の音ばた〳〵になり、おれん花道へ走り這入る。
正道　さあ、家へ知らせて遣つたれば、今に迎ひが來ようから、先づ我が宅へ参るがよい。
お芳　有難うはござりまするが、どうぞお慈悲に私を、お見遁し下さりませ。
小助　一旦助けたお前をば、何で此儘見遁されよう、そりやあ姉さん無駄な事だ。
正道　如何なる仔細か存ぜねど、是れが小供といふではなし、十八九に見ゆる其方、藁の上より今日まで育てし親の其恩は、滄海よりも猶深し、それを送らず先立つは、此上もなき不孝なるぞ。
お芳　はあゝ。
　ト泣く。
正道　済まぬと心が附いたらば、先づ我が宅へ一所に來やれ。
お芳　はい。
小助　悪い事はおつしやらぬから、仰せに随つて行きなせ

え。

トお芳思入あつて、

お芳　はい、參りますでござりまする。

正道　いや、向ふ川岸は淋しいから、瓦町を廻つて行かうか。

小助　それがよろしうござりまする。

ト波の音を打込み、正道思入あつて、

正道　運動がてら温泉から、東橋へ廻つたゆゑ、味な素振が目に附いて、

小助　お助けなされし此娘御、

正道　あの時逢はずば今頃は、

お芳　最早この世に無い私、

正道　危ない事であつたなう。

ト獨吟になる。

〽心土筆や蒲公英の、草の葉に置く忘れ霜、あゝ忘れがたなき戀ゆゑに、月はあれども薄曇り、空も朧の夜るの道、深き田の面へ淺草の、鐘の音おくる雨催ひ、鳴音忍びて歸る鰍金。

ト此内かすめて波の音、時の鐘を冠せ、小助包みと提灯を持ちて先きに立ち、お芳せり立てられて泣く〳〵立上り、正道附添ひ、東の假花道より花道へ廻り、お芳後へ歸らうとするを、正道留めてよろしく思入、此内舞臺は知せなしに廻る。

（元の別荘の場）――本舞臺元の別荘の道具。お辰行燈を附けて居る、此見得にて道具留る。ト唄一杯に門口へ來り、

小助　お歸りでござります。

トお辰前へ出で、

お辰　旦那さま、お歸り遊ばしましたか、大分お遲うござりましたな。

正道　途中に手間取る事があつて、思ひの外遲くなつた。

小助　さあ姉さん、お前も内へはいんなせえ。

お芳　はい、お許しなされて下さりませいな。

ト端唄の合方になり、お芳小腰を屈め内へ這入る。正道は上手、お芳は下手に住ふ。

正道　今に迎ひが來ようから、まあ氣を落附けて居たがよい。

お芳　有難うござります。

ト辭儀をする。右の合方にて、奥より以前の角藏大藏

角藏　出來り、是れは御歸宅でござりましたか、先刻よりお留守へ上り、

大藏　唐茶の御馳走になりまして、大酩酊いたしました。

正道　おゝ、牛窪馬淵の御兩名、久しくお出でがなかつたな。

角藏　さる書林の依賴を受け、著作に掛つて二週間程御無音に過ぎました。

正道　お著術は何でござるな。

角藏　小學生徒が作文の、自由自在になるといふ、一小册を綴りました。

大藏　斯樣申すは外裝にて、其内實は妓樓へ登り、大愉快をなした報いで、長く謹愼いたしました。

正道　それは餘程の御散財、學資を水になされたな。

角藏　いや、見れば頗る別品を、御同伴なされしは。

大藏　お繁の君のある上へ、又御愛妾のお抱へ入れかな。

正道　いや／＼、左樣な浮いた譯ではない。今此娘が枕橋から、既に投身なす所、通り掛つて助けたのだ。

角藏　はゝあ、それではお連れなされた別品は、身投げでござるか。

大藏　定めてそれは戀情に、迫つた上の事でござらう。

お辰　それはまあ、危ない事でござりましたな。

　ト正道お芳に向ひ、

正道　こりや娘、測らず其場へ通り掛り、死する命を助けしは是れも宿世の奇緣なり、假令如何なる事なりとも、力を盡して某が取計らうて其方の、望みを叶へて遣らうから、斯かる事ゆゑ是非なくも、命を捨てると有體に、包まず仔細を言うて聞かせよ。

お芳　見ず知らずの私を、それ程までにおつしやつて下さりまするお志し、身に餘りたる事なれば、申し上げねばなりませぬが、此事ばかりはどうあつても、お話し申されませぬわいなア。

正道　定めてそれは言ひにくい、事もあらうが言はざれば、取計らうて遣りたくも、どういふ事か譯が分らぬ。

小助　餘計な口を旦那さまに、お聞かせ申さず、これ姉さん、早く譯を言ひなせえ。

お芳　分らぬ者と思召しませうが、どうぞ堪忍して下さりませ。

　トお芳俯向き泣く。

角藏　是れほどまでに事を分け、お慈悲深くおつしやる

に、
大藏　默して居るは、頑固な娘。
小助　そんならどうでも言へないのか。
お芳　はい、申されませぬわいな。
　ト泣伏す。
正道　あゝ、女子と小人養ひ難し、はて困つた事ぢやなあ。
　ト正道持て餘まし思入、やはり合方にて、花道より以前のおれん戸倉屋といふ弓張提灯を持ちて先きに立ち、跡より前幕の利右衛門羽織着流しにて、足早に出來り、花道にて、
利右　これ／＼おれんどの、神保さまの別莊は、まだ餘程ござりますか。
お連　表口は此田甫を、ぐるりと廻らねばなりませぬが、お庭口はつい向ふでござります。
利右　それでは向ふのお家でござるか。
お連　さあお早くお出でなされませ。
　ト合方にて兩人舞臺へ來り、おれん直に内へ這入る、
旦那さま、其お娘御の親御さんを、お連れ申して參りました。
正道　おゝ、おれんか、待つて居た／＼。

お連　さあ、こちらへお入りなされませ。
利右　御免なされて下さりませ。
　ト合方きつぱりとなり、利右衛門腰を屈め内へ這入るをお芳見て、
お芳　父さま、堪忍して下さりませいな。
利右　おゝ娘か、よく達者で居てくれたな。
　ト嬉しき思入にて側へ寄り、
書置殘して出て行つたゆゑ、必定是れは東橋から、身を投げた事と思ひ、再び親は見られまいと、覺悟極めて居つた所、こんな嬉しい事はない。
　ト利右衛門我を忘れ嬉しき思入。
正道　すりや其許が助けたる、娘の親御でござるよな。
　ト利右衛門心附き後へ下り、
利右　これは／＼、旦那さまでござりましたか、死んだと思ひし娘よしが、無事な顏見て嬉しい餘り、御挨拶も申し上げず、失禮の段は幾重にも、御免なされて下さりませ。
　ト手を突き辭儀をなし、
始めまして御意を得まするが、私事は花川戸で、書籍を渡世にいたしまする、戸倉屋利右衛門と申しまして、お

助けなされて下さりました、娘の親にござりまする。

角藏　はゝあ、それでは娘は花川戸の、書林の娘であつたるか、

大藏　書物を求めに一兩度、見世へ行つたが知らなんだ。

利右　只今是れなるおれんどのより、委しい事を承はりましたが、あなた様のお蔭にて、たつた一人の娘をば拾ひましてござりまする、何とお禮を申しませうやら、有難うござりまする。

ト辭儀をする。

正道　定めて親御の事なれば、死する譯を知つてゞござらう、包まず話して聞かされよ。

利右　お尋ねなくとも娘をば、お助けなされて下さりました、大恩のあるあなた様、お話し申し上げまする。

お芳　あゝもし父さま、其仔細をあなたへお話し申しては、

利右　いや仔細をお話し申さねば、如何なるそちが道ならぬ事を仕出して言譯なく、それゆゑ川へ身を投げて死ぬであらうと思召せば、ありし次第を打明けて、お話し申さにやならぬ。

お芳　假令何と人さまに思はれましても身の不幸、今更いうて返らねば、どうぞ言はずに下さりませ。

利右　いや〳〵お話し申すのも、そちを不便と思ふゆゑ、

お芳　それぢやと言うて、

お連　あゝ、これはしたりお嬢さま、委しい譯を包まずにお話しなさらにや分りませぬ、默つておいでなさりませ。

トおれんお芳を留める。

正道　して、其仔細と言はるゝは。

利右　先づ一通り旦那様、お聞きなされて下さりませ。

ト誂への合方になり、利右衛門思入あつて、

何をお隱し申しませう、元私は戸倉屋の召仕ひでござりますが、主人の目鏡で聟となり、家督相續いたしまして、是れなる娘を儲けましたが、五つの年に母に別れ男の手にて此年までやう〳〵育て上げましたが、三月跡に我が實家、高崎宿に年回の法事があつて、娘を連れ、故郷へ參る其途中上尾の宿の立場にてお目に掛りし旅のお方、姿は書生と見受けましたが、丁度娘に似合の年配、斯ういふお方を聟養子に欲しいものぢやと思つたが、緣の端にて其立場へ、お忘れなされし煙草入が媒介となり其晩も、熊谷宿で同じ宿、それから伊香保の湯治場でも又もやお目に掛りしゆゑ、これ幸ひと四方山の話しに寄

せて押附けに、聟になつては下さるまいかと、強てお頼み申しましたが、娘がお氣に入らぬのか其夜の内にこつそりと伊香保を立つておしまひなされ、詮方なさに東京へ歸つて是れまで所々方々、お尋ね申しましたれど、未だに於てお行衛知れず、娘は元より私もまことに本意なく思ひまして、心の迷ひに占や又は御鬮のお告を願へど、手掛りとてもあらざれば、無い縁なりと娘にも思ひ切るやう申しましたが、爰に一つの難儀と申しますは、今も申し上げます通り元私は奉公人、目上と崇む家附の心良からぬ親類より娘も嫌へば私も嫌ふ養子を達てと言はれ、何をいふにも先代の弟御ゆゑ斷り難く、兎やせん角やと親子して顏を合す其折柄、娘は心の一途に迫り命を捨てんと覺悟を極め、書置殘して暮方から家出いたしてござりますゆゑ、東橋から身を投たと思ひまして最前から、船を頼んで川下を尋ねさがして居りました。娘が命を捨てまする仔細と申すはあなた樣、斯樣な事でござりまする。

ト よろしく思入にて言ふ。

正道 扨は左樣な事あつて、一途に迫り娘には、其身を投ずる心になりしか。

角藏 それは如何なる好男子か、かゝる優れし別品に、死ぬほどまでに思はるゝは。

大藏 此上もない果報者、さりとは女に富みたる事だ。

ト 小助お芳を見て、

小助 今まで心附かなんだが、見ればお前は目も腫れて、どうやら惡い樣子だね。

お芳 はい、今父さまの申せし通り、思ふお方に別れし後、心に濟まぬ親類より聟を達てと勸められ、切ない譯ゆゑ明け暮れに涙の絶える隙もなく、遂には斯樣に目も泣き腫れ、見えぬといふにはあらざれど、霞んで物のあいろも分らず、なまじ此身がござりますので、餘計な御苦勞父樣に、お掛け申さにやならぬゆゑ、早う死にたうござりましたわいな。

ト 泣伏す。

利右 又其やうな事いうて親に苦勞をさせるのか。多い子供といふではなし、天にも地にもそなた一人わしは養子の身なれども、女房は家の娘ゆゑ、數代傳はる戸倉屋のそなたは大事の血筋なるぞ、命を捨てればわしばかりか、世になき母が冥土にて、嘸や嘆く事であらう、惡いやうにはせぬ程に、必ず死なうなどゝいふ、無分別を出

してくれるな。

お連　今旦那さまのおつしやる通り、あなたがお死になされますると、お血筋が絶えまする、悪いやうにはなさらぬと仰しやりますればお嬢さま、御苦勞お掛けなされまするな。

正道　利發なやうに見ゆれども、また其年が行かぬゆゑか、死なうといふは愚なる事、我が身に迫る事のみ思ひ、斯くまで親が悲しむを、思はざるのは何よりか、子として親に不孝なり、これ、人倫の道ならぬぞ、いや斯うばかりでは合點行くまじ、そちが會得いたすやう、說諭を加へて遣はさん。

利右　え丶有難うござります。とてもの事のお情に、娘が迷ひの晴れますやう、お諭しなされて下さりませ。

正道　如何にも諭して進ぜませう。

ト此時奥にて、

お繁　いえ、其娘御は私が、それへ參つて諭しませう。

利右　や、あのお聲は、

角藏　この旦那の御愛妾。

大藏　彼の權てきの、

小助　あこれ、

お連　お繁さま。

ト合方になり、奥より以前のお繁出て來るを、利右衞門お芳見て、

利右　や、あなたはどうやら、

利芳　伊香保にて、

お繁　測らずお出合申したる、妻木繁でござりまする。

利芳　え丶。

トびつくりなし、合方きつぱりとなり、利右衞門お芳お繁の顏をとつくり見て、合點の行かぬ思入にて

利右　そんならあなたは其時の、

お芳　書生さまでござりましたか。

繁　疑はしくば熊谷で、下さりました蒔繪の櫛、これを御覽下さりませ。

トお繁さして居た序幕の櫛を取つて出す、利右衞門お芳見て、

利右　まことに是れは熊谷で、差上げました蒔繪の櫛、それでは男と思ひました。

お芳　あなたは女子でござりましたか。

お繁　お耻しうござりまする。

正道　扨こそ斯くと思ひしが、娘が思ひ焦れしは、

お辰　書生姿でおいでなされし、
お連　お繁さまでござりますとは。
利右　あなたが女子でござりましたか。
お芳　思はぬ事でござりましたなあ。
　ト兩人ほつと思入、正道こなしあつて、
正道　戀焦れた其男が、女であれば娘御が、思ひ迫つて身を投じ、命を捨てるに及ぶまじ、今日計らず某が枕橋へ通り掛り、死すべき命を助けしは、即ち天の助けにて、是れも繋がる奇緣なり、最早是れにて娘御も、今より心入替て、良き聟迎へ身を全う親御へ孝行盡されよ。
利右　えゝ有難き其お詞、娘ばかりか私も、是れで思ひが晴れました。
お芳　それも焦れし此身には、まだ實とは思はれず。
利右　思へば夢に夢見たやうな。
お芳　父さま、
利右　娘、
お芳　本意ない事で、
兩人　ござりました。
　ト兩人本意なき思入、
角藏　日々進歩の開化の世に、斯かる事はあるまいと、思ひの外に舊習の未だに去らぬ男女の情慾、早く斯樣な事のないやう、文明國にしたいものだ。
大藏　などゝはいへど我輩も、やはり脫せぬ情慾に、年中學資を失ひます。
　ト利右衞門思入あつて、
利右　今更言つて返りませぬが、あの折あなたが私へ女といふ事内々で、お明しなされて下さらば、娘も疾くに思ひ切り、斯樣な事にもなりますまいに、なぜお明し下さりませぬな。
　トお繁思入あつて、
お繁　あの折切なるお賴みゆゑ、打明さんと思ひましたが、明さば直に人に知れ身の禍になる事ゆゑ父に逢うて其事をお賴みあれと申せしは、お逢ひなされし其時に、女といふ事打明けて申しまするか左もなくば、結び難き緣なれば、よしなに申すと存ぜしゆゑ、切ない時に親を出せと、世の諺に基いて其場を遁れん其爲に、お明し申しませなんだが、あの折あなたは我が父の在所へお出ではなされませぬか。
利右　いや參らぬどころではござりませぬ、夜の明けるのを待兼ねて、湯場をお立ちなされました、あなたも大方

親御様の、所においでと存じまして、直にお尋ね申しました。

お繁　其折あなたへ我が父は、何と御返事いたしました。

ト是れにて利右衛門合點の行かぬ思入にて、

利右　合點の行かぬ其詞、親御様の御身の上を、あなたは御存じござりませぬか。

お繁　其後絶えて父上より、何の便りもござりませねば、たゞ御無事とばかり思ひましたが、變りし事でもござりましたか。

利右　さあお尋ね申してびつくりなせしは、其前夜に賊が這入り、金子を盗んで親御様を、殺害なして逃げ去りしと、お世話をなさるお方の話し。

お繁　えゝすりや父上には賊の爲、非業な御最期なされしとか、えゝゝゝ。

トお繁びつくりなし、

正道　扨は繁が父なる者は、賊に殺害されしとか。

角藏　して御親父が強賊に、

大藏　奪ひ取られし金子といふは、

お繁　五年此方家出せし我身の不孝を詫びの爲、父の貧苦を貢がんと持參なしたる二百圓、それが却つて害となり、非業な御最期なされしは、取りも直さず我が身の科、是れといふも道に缺けたる、いやさ、心に掛けし孝行も、今では不孝となりました。

トお繁ぢつと思入、

角藏　扨々これは計らざる、哀れな話を承はり、

大藏　お繁の君の御愁傷、僕等も心中お察し申す。

お辰　いつも立派にお結びなさるを、今日に限つてあのやうに結び髪になされましたは、こんな知らせでござりましたか。

お連　まことに承はつて私も、驚き入りましてござりまする、不斷お世話さまになりますから、斯ういふ時は御恩返し、お葬式には内の人をお手傳ひに上げますが、何時でござりますな。

お辰　是れはしたりおれんさん、是れはお國であつた事、今の事ではござんせぬ。

お連　おや／＼お國であつた事かえ、それではお饅頭を喰べ損なつたか。

小助　いや其お話しでは旦那様が、お惠みなされし二百圓は、賊が盗んで行きましたか。

正道　二百圓の其金貨は、假令一度失ふとも、又得る事は

易けれど、再び返らぬ一命を、失ひたるは遺憾の至り。
お繁　して何者の仕業なるか、父を殺せし其賊の、何ぞ證據になるべき事を、其折お聞きなされませぬか。
利右　委しい事は他の者ゆゑ、承はりもいたしませぬが、殺害されし御親父の死骸の口に喰切りし、小指が殘つてありましたと。
お繁　すりや死骸の口に喰切りし、小指が殘つてありましたとか。
トお繁是れを聞きつゝと男の思入にて
扨は小指のなき者が。
ト向ふを見込みきつとなつて心附き、女のこなしにて、
父の敵でござりましたか。
ト優しくいふ、正道思入あつて、
正道　思ひがけなく娘御が身を投ぜんとなしたるを、我が助けたる縁により、今日まで繁が知らざりし父の横死を聞くのみか、敵の手掛り知れるといふは、思へば不思議なことであつた。
利右　疾くにも御存じあるべきを、蓮華寺村から其時に、なぜお知らせがござりませぬな。
お繁　繋がる縁にてありながら、惣助どのとは絶交同然、とんと便りをなさゞる上、我が子ながら其時分男姿で居る事を、父には深く世間に耻ぢ、住居を人に隱せしゆゑ、誰も知らぬと存じまする。
利右　さういふ事で今日まで、御沙汰がないのが計らずも斯ういふ事から知れましたは、冥土にござる御親父さまの、お導きでござりませう。
ト此時下手より○△の手代二人散髪鬘にて、戸倉屋といふ弓張提灯を持ち出來り、
○　はい、御免下さりませ、神保樣はこちらでござりまするか。
お辰　はい、こちらでござりますが、お前さん方は。
△　私共は花川戸の、
お連　おゝ戸倉屋さんの若い衆か。
○△　お迎ひに參りました。
正道　迎ひの者が參りしとは、それぞ幸ひ利右衞門どのには、嘸かし宅で案じてござらう、少しも早く歸られよ。
利右　此場の御樣子承はり、歸りまするも本意ならねど、宅でも案じて居りますれば、仰せに任せ私はお暇いたすでござりまする。これ娘、よくお禮を申しやいの。
ト是れにてお芳前へ出で、

お芳　繁様を眞實の男と存じて戀焦れ、終には此身を大川へ沈むる心になりましたも、神保さまのお蔭にて危ふい命を助かりまして、何とお禮を申しませうやら、詞で申し盡されませぬ、えゝ有難うござりまする。

ト手を突いて禮をいふ、此時本釣鐘を打込む、

お連　ほんに最前どんぶりと、なされし跡で女と知れても返らぬ事でござりましたが、お命助かるのみならず戀に焦れしお心も、さつぱり晴れて此やうな、お目出度いことはござりませぬ。

お繁　それに引替へわたしが身は、少しは孝を盡さうと思ひし事も水となり、憂きを重ぬる今日の仕儀悲しい事でござりまする。

利右　娘が入水いたしますれば、其悲しみを私がいたさねばなりませぬゆゑ、お察し申し上げまする。

お芳　是れを思へば私が、身を投げようといたさずば、親御様の事も知れず、此お嘆きを掛けますまいもの、お氣の毒でござりますわいな。

利右　お氣の毒とはいふものゝ、親御様の事なれば御存じなければならぬ譯。そちが事からお繁さまへ測らずお知らせ申したは、まことにこれが過ちの功名とやらでござりまする。

ト皆々愁ひの思入、時の鐘、

お連　おゝあの鐘は最う八時、小梅通りは淋しいゆゑ、更けぬ内に參りませう。

利右　御免を蒙りお暇いたさう。

ト正道に向ひ、

左樣なれば旦那さま、何れ明日改めて今宵のお禮に上りまする。

正道　いや、決してそれには及びませぬぞ。

利右　いえ〳〵あなたのお蔭にて、娘を拾ひましたれば、お禮をいたさにやなりませぬ。

トお繁思入あつて、

お繁　よしない事でお二人に、是れまで御苦勞掛けましたが、たゞ何事も此仕儀ゆゑ。

利右　切ないあなたのお胸の内、

お芳　お察し申し、

兩人　上げまする。

ト三人涙を拭ひ、愁ひの思入、

正道　いや野道は人の往來も少なし、

小助　女中連ゆゑ少しも早く、

お芳　左様なればお繁さま。
お繁　お二人さま、
利右　明日お目に掛りませう。
　ト利右衞門お芳おれん門口へ出で
お連　もし、大層空が曇りました。
お芳　どうやら今宵は、
利右　降らねばよいが。
　ト唄になり、若い衆提灯を持ち、先きに立ち、利右衞門、お芳、おれん、跡に附き花道へ這入る。跡にお繁俯向き、ぢつと泣き居る。
正道　今更千悔なすとも、返らぬ事をくよ〳〵と、日頃のそちが氣にも似合はぬ、奥へ參つて佛前の香でも手向けて回向をしやれ。
お繁　仰せに任せ私は、奥へ參つて父上へ今日まで知らで過したる、不孝のお詫びをいたしませう。
お辰　御靈前へ御回向をなさいますなら私が、お水を汲んで上げませう。
お繁　左樣なればお二人さま。
角藏　ゆるりと亡父へ。
大藏　御回向召され。

　トお繁立上り、思入あつて、
お繁　これといふのも金ゆゑに。
　トきつと男の思入にて、彼れが殺せしといふこなし、
お辰　え。
　トお繁の顔を見る、お繁氣を替へて、
お繁　あ、夢の浮世でござりますなあ。
　ト唄になり、女のこなしにてお辰附いて奥へ這入る。
角藏　今宵我輩北廓へ登樓なさんと存ぜし所、遲刻せしゆゑ御當家へ一泊願ひ夜と共に、圍碁のお相手いたさんと思ひの外に此椿事。
大藏　何ぼお好きなあなたでも、今宵は棊は出されますまい、更けぬ内にお暇いたさん。
正道　圍碁の勝負は兎も角も、今兩名に歸られては愁ひに沈む家内の者、後が淋しくて仕方がない、繁が父の通夜心、今宵は夜と共、呑み明さん。
角藏　それは何より有難い、お酒と聞いては立所に、
大藏　下宿へ歸る方角を、忘れる書生の大酒黨。
正道　これ小助、八百松へ行つて肴をば、申し附けて來てくりやれ。
小助　畏りましてござりますが、最う賣切つてしまひまし

たらう。
正道　何はなくとも鰹はあらう、ちよつと洗ひに玉子焼、なんぞ見繕つて來てくれろ。
小助　畏りましてござりまする。
角蔵　夜中大きに、
兩人　御苦勞でござる。
小助　なに、造作もござりませぬ。
　ト合方になり、小助下手へ這入る。
角蔵　扨々椿事が出來いたし、公にも嘸かし御心配。
大蔵　憂ひを掃ふ玉箒、斯かる時には酒に限る。
正道　今に肴が參らうから、暫時是れにて四方山の、雜事をお談じ申すでござらう。
　ト端唄の合方になり、花道より以前の直次郎、袴下駄がけにて出來り、花道にて、
直次　瓦町の温泉から、日の暮方に此寮へ、歸つた事を聞いたから、是れから行きやあ丁度いゝ合、一網ばつさり打込んで、大きな獲物をしてえものだ。
　ト本舞臺へ來り、門口の側にて思入にて、
頼まう〳〵。
角蔵　はて、舊弊な案内だが、
大蔵　どうれ。
　ト大きな聲して門口へ來り、
何れからござられしぞ。
直次　拙者は徒士町より參つてござるが、當家の御主人神保氏に、御面謁がいたしたい。
大蔵　只今お取次いたすから、暫くそれにお控へなされい。
直次　承知いたしてござる。
大蔵　お聞きなされましたか。
正道　何御用なるか、通し召され。
大蔵　いざ、お通りなされい。
直次　然らば御免下され。
　ト合方になり、ずつと内へ這入り、眞中へ住ひ、
拙者事は舊幕府の、徒士役を勤めたる倉橋直次郎と申す者、以後お見知り置かれ下されい。
正道　手前ことは神保正道、何御用にて此所へ御入來なされしぞ。
直次　今晩推參いたせしは、貴君へお禮を申し度く。
角蔵　扨は最前助けられし、
大蔵　娘の貴殿は御縁家か。
直次　あいや、左様な者ではござらぬ。

正道　して某へ御禮とは、
直次　只今貴君の愛妾となり、榮耀榮華をいたし居る、繁がお禮に參つてござる。
角藏　それでは貴殿はお繁の君の、
大藏　身寄りの衆でござつたか。
直次　如何にも彼とは疾くよりして、拙者は深く言交し、末々妻にいたさうと存じ居るうちお手が附きかゝる美麗な御別莊に、寵妾と相成りしは、此上もなき仕合せゆゑ、厚く御禮申し上げます。
正道　扨は貴殿は我が妾の、繁と言交し居らるゝとか。
直次　君のお手が附かぬ先きより、言交して居りまする。
角藏　これは思ひも寄らぬ事、お繁の君は先頃まで男子の姿で居られしからは、左樣の事のあらうやうなし、
大藏　公より先と言はるゝが、我輩一圓合點が參らぬ、何時頃こなたは言交さしれぞ。
直次　三月後に、上州の、故鄕へ赴く其途中、熊谷宿の小松屋へ泊つた晩に一つ寢して、しつぽり其夜言交した。
正道　すりや上州へ赴きし、途中で繁と言交せしとか。
角藏　最前より何れでか、見た顏なりと存せしが、今の詞で思ひだした。

大藏　妻木氏が筋違で、雇つたこなたは人力車、何と相違はござるまい。
直次　各々方の仰せの通り、拙者は人力車夫でござる。
角大　何と。
ト誂への合方になり、
直次　何を隱さう今日の、生活の爲め耻を捨て、萬世橋で人に知られた、御家直といふ人力車、思ひ掛けねえ旅仕事で、熊谷宿まで曳いて行き、其夜泊つた小松屋で、味な事から情事になり、それから再び東京へ歸つてお手が附きたれば、假令三日が五日でも、先きへ抱寢をしたけれど、上と下ゆゑ生中な事を申し出したとて、及ばぬ事と存ぜしゆゑ、今日まで控へて居りましたが、これが我れ我れ同士なら、我が女房と思ふ女を、斷りなしに引き揚げられゝば、たゞ其儘にやあいたしませぬ、いはゞ間男同然に、無法な事もいたしますが、斯く開明な世の中に、また半髮ではござりますが、そんな事はしませぬ、今日推參いたしましたは、御禮かた〴〵折入つて、お願ひの筋がござりまする。
正道　成程先頃上州へ參りし事はあつたれど、途中に於て其許へ言交せしといふ事は、未だ噂に聞かざりしが、そ

れは兎もあれ、折入つて我へ願ひと言はるゝは。

直次　世俗に申す士族の商法、資本も盡きて生活の道を失ひ止むを得ず、人力車とまで成り下り、襤褸半纒に切れ股引、あれが情人かと言はれなば繁が耻ゆゑ今日まで、差控へて居りましたが、天道人を殺さずと思はぬ金を得ましたから、早速身裝をこしらへて、以前の士族で上りました、生計の道を得ましたゆゑ、長々お世話になりました、何卒繁を拙者方へ、お返しなされて下さりませ。

角藏　いや、こなたが情人か存ぜぬが、お繁どのは御家來の、惣助どのゝ身寄りにて、お抱へなされし圍者。

大藏　それをこなたが受判の、惣助どのへ掛合はず、直ぐに返してくれといふは、それでは道が違ふであらう。

直次　道が違ふか違はぬか、我が言交した女をば人に取らるゝ間抜だから、何も知らずに出ましたが、定めてお繁は是れまでに、斯ういふ男がありますと、申さぬ事もあるまいが、高の知れた人力車打捨つて置けと今日まで、只の一言斷りなく、人の女をぬく〳〵と、抱妻をなされる神保氏、道の違ふはどちらだか、其筋へ出て分けようと、それゆゑ今日は裝を替へ、元の士族で參つてござる。

正道　如何なる約束あるかは知らねど、繁は家來の惣助が身寄りによつて抱へし我が妾、左樣な事は今日まで枕交せし床の內緖物語りにせし事も、遂になければ存ぜぬ縱、まこと約束あるとても受判なせし惣助へ、引渡すのがこれ順道、こなたに繁は渡されぬ。

直次　渡されないと仰しやれば、闇黑の耻を明るみへ出して事を計らひますが、さうした日には事柄を一これは今日の新聞一と往來中を讀賣や繪入の賣子に賣られたら、貴殿の耻でござりませう、拙者も元は士族だが、今職業の人力車、耻を耻とも思ひませぬ、お繁も今日まで我家で、女房になつて居たならば、汚れた袷に半纒がけ、膝の切れた前垂でしがを隱して朝夕に、一升買ひの貧乏暮し、それをあなたの權妻になつたばかりに苦勞もなく、此別莊でお蠶包み、雪の降る日の寒さも知らず、厚いお世話になりました、御恩を思つて言ひたい事も、申しませねば此儘に、綺麗にお渡し下さりませ。

角藏　斯うして判然言交したと、立派に言つてござるからは、まさか形のない事を、士族の貴殿がお言はれはしまい、然し渡せと言はれても、又渡される譯でもない、どうで語りは手切金。

大藏　長くごた〱言はずとも、早くそこへ基いて、談判をした方がよからう。どうで此場に我輩も居り合すれば關係なし、どうか穩よく取扱はう。
直次　貴殿方も御親切に、お詞お添へ下すつて、忝なくはござれども、失敬ながら御兩所に、此お取扱ひは出來ますまい。
ト是れにて兩人むつとなし、
角藏　なに、出來ぬといふがあるものか、天下の諸罰諸規則は、何くれとなく諳記なし、免許を受けて代言を勤めようかと思ふ我輩、さりとは失敬千萬だ。
大藏　何ぞといふと舊幕時代と、袖手座食に甘んずる、今日不明の士族輩とは、比較にならぬ開化の先導、窮理に長けし書生だぞ。
直次　是れは砂村窮理先生、失敬御免下されい、頑固の士族がお詫を申し、お取扱ひをお頼み申す、御心得の爲御兩所へ、額を申し置きますが、手切を下さる思召しなら、千圓お貰ひ申したい。
角藏　え、千圓手切が、
兩人　貰ひたいとか。
ト兩人呆れし思入。

直次　一圓缺けても不承知だが、お取扱ひは出來ますまい。
角藏　物には法のあつたものだ、手切といへば十か二十、五十が極の至りだ。
大藏　千圓などゝは法外千萬、此取扱ひは出來るものか。
直次　それだから最初から、出來まいと申したのだ。
角大　むゝ。
ト詰る。
直次　さあ此扱ひが出來ぬなら、お繁を拙者へお渡し下さい。
ト正道此内思入あつて。
正道　我が妾繁と其許は言交してござるゆゑ、返してくれと言はるゝが、片口にては證と仕難し、繁を尋問なせし上、まこと言交せし事ならば、如何にも上げまいものでもなし、仕儀によりなば手切金、望みの通り千圓出すまいものでもあらざるが、篤と實否を糺さねば、否やの返事はいたし難い。
直次　御尤もなる其仰せ、直次郎が實言か又虚言かは此ところへ、繁をお呼出しなされた上、一應お糺し下さりませ。

正道　如何にも呼出し糺すであらう。
角藏　然らば是れへお繁どのを、
大藏　お呼び申して參りませう。
　ト立ち掛る、奧にて、
お繁　いえ、お出でなさるには及びませぬ、只今それへ參
ります。
　ト合方替つて、奧より以前のお繁出來り、直次郎と顏
見合せ、思入あつて、正道の側へ住ふ、
正道　こりや繁、養子は奧で聞いたであらうな。
お繁　はい、大きな聲ゆゑ何事も、襖の蔭で逐一に承は
りましてござりまする。
角藏　熊谷驛の旅店にて、言交せしと彼れは申すが、
大藏　我輩どもが臆測では、正しく事實と保證仕難し。
正道　今御兩名の言はるゝ通り、其方我が妾にならぬ先き、
是れに居らるゝ倉橋殿と、言交したる事あるか。
お繁　はい。
　ト俯向き居る。
正道　虛實に依つて某が取計らふべき旨あれば、包み隱
さず有體に、此場に於て申し聞かせよ。
お繁　はッ。
　トやはり俯向き居る。
正道　默して居ては事實が分らぬ、猶豫いたさず疾く／＼
申せ。
　トきつと言ふ、お繁思入あつて、
お繁　まことに申し兼ねましたが、あなたのお情受けませ
ぬ、其前方に倉橋殿と、熊谷宿の旅籠屋で申し交してご
ざりまする。
角藏　やあ、すりや、人力車の倉橋氏と、
大藏　はて扨、それは物好きだ。
お繁　それも遁れぬ譯あつて。
正道　や。
　ト聞き咎める、お繁思入あつて、
お繁　月下の神の媒介に、風呂から上つてまだ汗も乾かぬ
内にしつぽりと、味な事から一つ寢なし、初めて男と枕
を交し、思はぬ夢を結びました。
角藏　扨はまことの事であつたか。
大藏　これは驚き入つてござる。
　ト直次郎思入あつて、
直次　何と嘘ぢやあござるまい、言交したる當人が、何よ
り證據、さあ此上は先約ゆゑ、拙者に唯今下さるか、そ

れ共に御寵愛ゆゑ御執心なら相談づく、手切を千圓下さ
らば、綺麗にあなたへ差上げませう。
ト正道思入あつて、

正道　倉橋氏の申す如く、熊谷驛の旅店にて、言交せしと
あるからは、僞りならぬ事情ゆゑ、そちが心次第にて、
何れへなりと取計はん、先約ゆゑに道を立て、倉橋氏へ
參る心か、又是れまでの義を捨てず、我が妾となり居る
心か、そちも此場で決定なし、如何いたすか所存を申
せ。

お繁　此御返事は今爰で、申し難うござりまする。

正道　そりや申難なうあらうけれど、言はねば我も計らひ
難し、先づ打開けて申さうならば、倉橋氏へ執心あるを無
理に引留め置いた所、心替りし其方を妾となしても面白
からず、附いては長き其内に、苦情の起るは必定ゆゑ、
此侭暇を遣はさん、又さはなくて我が妾とならん心の其
方を、暇を出すは不便の至り、然すれば手切の金を以て、
生涯身儘にいたし得させん、不思議の縁にて今日まで我
が心をば慰めし其方ゆゑに如何やうとも、心任せにいた
さうから、遠慮いたさず事實を申せ。
ト正道思入にていふ、お繁ぢつと思入あつて、

お繁　不束な身を斯程まで思召し下さりまする、深き惠み
のお志し、實に涙の溢れます程、有難うござりまする
が、どちらなりとも私の心任せにいたせよとの、仰せ
に甘へてお願ひ申すは、今日を限りに私へ、何卒お暇
を下さりませ。

正道　むゝ、すりや先約の儀を立てゝ、倉橋氏へ身を任す
所存に決して今日限り、暇をくれと申すのか。

お繁　定めて恩を辨へぬ犬に劣りし者なりと、お憎しみも
ござりませうが、お許しなされて下さりませ。

角藏　お繁どのには取り逆上、こりや發狂でもいたされた
か、此結構な旦那を捨て、暇をくれと言はれるのは、

大藏　何ぞ外に目的が、あつての事でござるかな。

お繁　外に目當はござりませぬが、假令一夜の契りでも、
先きに此身を任せたる、直次郎さんと夫婦になるが、女
子の操でござりまする。

角藏　それが操か存ぜぬが、馬車手俥にも乘れる身を以て、
人もあらうに人力車に、乘り替へるとはどうしたこと
か。

大藏　產れは麻布か知らないが、餘りといへば氣が知れぬ。

お繁　旦那を捨てゝ直さんと、添ふのは深い譯あつて、い

や、深い中ゆゑお暇を、貰ふわたしが胸の内、色には闇いお前方の知らぬ事でござりまする。

ト お繁よろしく思入にていふ。

直次　それぢやあお繁は旦那を捨て、見る影もねえ此おれと夫婦になつて暮す氣か。

正道　初めてお前に此身をば任したゆゑに末始終、わたしや添ふ氣でござります。

直次　こいつあ運が向いて來たわえ、是れと知つたら兩國の無盡に這入つて五百圓、濡手でおれが取らうもの、惜しい事をしたぢやあねえか。

ト 此内よき程に、下手より以前の小助出來り、門口にて様子を窺ひ、腹の立つ思入よろしくあつて、ずつと内へ這入り、お繁の側へ坐り、

小助　様子は門で聞きましたが、御恩になつた旦那様を捨てるといふはお繁さま、そりやあ平氣でござりまするか。こんな事は言ひたくないが、只とは違ふお前の身の上、持逃げをした二百圓、表沙汰になる時は、いはずと知れた役だ、それを何とも仰しやらず、仕度金に下すつて直に小梅の此寮へ、男女を使はせて何不自由のない權妻さま、そりやあ器量が十人並に勝れて居るから仕方もないが、今旦那さまが手切まで、出して遣らうと仰しやるに、それも聞かずにぴいつくの、後家人上りの人力車の、女房になるとはあんまりだ、旦那さまの御恩になれば、腹が立つて堪へられねえ。

ト 小助腹の立つ思入、お繁こなしあつて、

お繁　あゝ靜に言つても分ることを、口やかましい小助どの。

ト 誂への合方になり、惡婆の思入にて、

お前方に結構な身の上などゝ言はれるが、わたしやそれが大嫌ひ、斯うして旦那に圍はれて男女を遣つて居れば、此上もない身の仕合せ。

ト ちつと思入あつて、又言葉を替へ、

月々出入りの呉服屋から、仕立おろしの着物が出來、簞笥の數の殖えるより、着て居るものを減らしても、好きな酒を勝手に呑み、樽もころりと横になり、寢たい時には晝までも寢られる體がわたしの望み。

ト 濟まぬといふこなしあつて、ちよつと書生の思入にて、

此惡癖を脱せぬも、情慾の目が覺めぬゆゑ

ト 又女の思入にて、

是れから爰を出て行けば、此直さんと夫婦になり、氣も相乘りに共稼ぎ、亭主が車を引きに出れば、女房は內で鼻緖を縫ひ、針より細い暮しをしても、氣兼のないのが證の藥、毒と知りつゝ氣兼して、旦那の側に居る時は、長い月日の其內に。

ト難儀を掛けねばならぬといふ思入あつて、又男の思入になり、

身の健康を害すゆゑ、止むを得ずして退身なす。

ト氣を替へ、

いやな所に榮耀して、長居するより短い命、好いた男と共々に、苦勞するのが女の樂しみ、色戀知らぬお前達の知つた事ぢやアありませんよ。

トよろしく思入にて言ふ。

小助　いや、おれだといつて若い身だ、一人や半分言交した女のないでもねえけれど、そんな不實な者はねえ、書生の折から學力は、人に勝れた妻木さま、論語讀みの論語知らずと、譬にいふはお前の事だ、孔子の敎へにあるかは知らぬが、旦那を捨てゝ出て行くとは、義理を知らねえ恩知らずだ。

ト小助詰寄り、腹の立つ思入。

正道　こりや〳〵小助控へて居よ、そちが律義な了簡では、腹の立つのは尤もだが、繁は愚な生れでなく、英才男子に勝りし者、是れには定めて深い樣子が、いや、深い仔細があつても無くても、そこが譬の思案の外、主人はおろか現在の、親さへ捨てるが色の道、いくら說諭を加へたとて、牛に經文無駄なことだ。

小助　成程旦那のおつしやる通り、人に勝れた才智もあり、義理人情を知りぬいて、居ながら斯ういふ事をするのは、魔のさしたのでござりませう。

角藏　然し條理に背いたる、斯かる行ひなすからは、始終は天の罰を蒙り、長煩ひか災難事不幸の續いた其果は。

大藏　身の活計を立兼ねて持つて產れた賊心に、ちよつくら持ちか板の間稼ぎ、懲役人になるのは必定。

お繁　大きにお世話な苦勞性、先きを枯らしておくれでない、所も廣い六大區名に負ふ本所深川へ餅を配つた三野村さん、三井組の楠と言はれる程になつたのも、是れも一つは人の運、明日が日どんな身の上にならうも知れぬわたしら二人。

直次　是れから一先づ旅へ出て、お繁を玉に一稼ぎ、やつてそれから小金貸、憎まれ口の烏から、一足飛びに日步

を貸し、米商會所の賣買で、巨萬の金を儲けたら、末は國立銀行でも官許を受けて立てる氣だ。

お繁　立派な旦那を幇にして、暇を取つて出るからは、右の腕とも思ふのは、直さんお前一人だから、必ず見捨てておくれでないよ。

ト直次郎に寄添ふ。

直次　そりや何で見捨てるものだ、斯ういふ事に行かうとは、實の所は知らなんだ、どうで手切と思ふから、千圓と脅して、人が入つて七十か百、一割取る氣で損料を借りて出て來た、厄介士族、思ひがけねえおぬしが寢返り、夢かと思ふ今夜の仕末、旦那を捨てゝ出るからは、生涯見捨てる事はやあねえ。

お繁　さういふお前が心なら、願ひも叶ふわたしの本望、

ト きつと直次郎を敵といふ思入あつて、氣を替へ優しく、

それでは旦那私に、どうぞ暇を下さりませ。

正道　斯かる所存と知らずして、今日まで妾となしたるは、我が眼力の届かぬ所、望みの通り暇を遣はす、心任せに出て行きやれ。

お繁　すりや私へお暇を、えゝ有難うござりまする。

ト手を突き禮をいひ、

とはいへ是れまで長々の、厚い御恩を仇にて返す

ト正道へ濟まぬといふ思入あつて、

返す／＼も長居は恐れ、昨夜までも百萬年お側に居ると氣休めに、言つたわたしが極りが悪い、早く爰を立退いて、宿屋へ行つて今夜は泊らう。

直次　初めて逢うた其晩が、熊谷宿の宿屋だつたが、又もや今宵宿屋へ寢るのか、さう極つたら早く行かう。

ト お繁思入あつて正道に向ひ

お繁　それでは旦那、御機嫌よろしう。

正道　むゝ。

ト 顏見合せ、兩人思入あつて、

お繁　牛鍋馬淵の君達も、その内僕が弊屋を、郵便を以て報知するから。

直次　これ、そんな女があるものか。

お繁　つい昔が出てならない、牛で一杯上げたいから、休暇に必ず出ておいでよ。

ト角藏大業腹の立つ思入にて、

角藏　年中襟の汚れた羽織に、自で買つたは一昔、鼠に汚れた兵兒帶で、腰に挾んだ手拭と、共にぶら／＼遊歩は

するが、元より嚢中錢なき貧生、
大藏　いつでも犬の川端だが、恩を知らねえ畜生に、如何に酒が呑みてえとッて、尻尾を振つて行くものか。
お繁　來いといふのもほんの世辭、來られないのが嬉しいのさ。
直次　これ、お歴々な書生さんに、そんな失敬な事をいふな。
ト侍の思入にて、
左樣ござらば神保氏、仰せに任せ是れなるお繁は、拙者が連れて參りますが、申し分はござらぬな。
正道　望みに任して遣はすからは、何申し分がござらうぞ。
直次　それは千萬忝ない。
お繁　それぢやあ直さん、出掛けようかね。
直次　おゝ、御兩所、失敬。
ト辭儀をなし立上る、正道思入あつて、
正道　こりや、繁待て。
お繁　はツ。
ト下に居る、正道見て、
正道　何も忘れものはないか。
トお繁うなづき、
お繁　衣類手道具何やかや、山ほどあれど出て行くに、まさか持つても行かれまい。
小助　えゝ、誰が持たして遣るものだ。
お繁　こつちも邪魔だ、置いて行くよ。
ト正道へ濟まぬといふ思入あつて、つか／＼と門口へ行く。此時雨車になり、
おや、ばら／＼降つて來たよ。
直次　濡れるといふは嬉しいな。
お繁　小助どん、遣ひ納めだ、傘を一本取つておくれ。
小助　えゝ、旦那の息が掛らにやあ、うぬ等に遣はれる覺えはねえ。
お繁　よく、動き泣きをする男だ。
直次　これ、傘を借りるにやあ及ばねえ、土手へ行きやあ車がある。
お繁　それぢやあ是れから合乘りで。
直次　幌をかけさせ、ゆつくりと、
お繁　話しながら行かうね。
トお繁内を覗くを直次郎隔てろ、これを切ッ掛けに端唄になり、お繁直次郎よろしく思入あつて花道へ這入

る、此内小助は身拵へして、

小助　うぬ畜生め、待ちやあがれ。

ト跡を追かけようとするを、

正道　これ小助、行くに及ばぬ、捨てゝ置け。

小助　爰であいつを打ちのめさば、旦那さまの御厄介ゆゑ、歸るを待つて居りました、跡から追掛け大川端で、息の根留めにやあ腹が癒ねえ。

正道　その腹立は尤もだが、譬にもいふ癩病に棒打ち、益なき事だ捨てゝ置きやれ。

小助　それだと申して。

角蔵　はて、御主人がお留めなされば、

大藏　腹も立たうがまあ〳〵待つた。

小助　えゝ忌々しい事だなあ。

ト腹の立つ思入にて下に居る。

正道　最早臺所へ八百松より、肴が參つて居るでござらう、御兩名には奥へござつて、一獻上つて下されい。

角蔵　それは我輩、何より好む所でござれど、

大藏　先づ御主人と御一所に、

正道　手前は此小助に、申し附ける用事あれば、お構ひなくとお開き下され。

角蔵　然らば仰せに隨つて、

大藏　お席を開いて置きませう。

正道　さゝ、御猶豫なさらず、

角蔵　どれ御馳走に、

兩人　なりませうか。

ト合方になり、角蔵大藏奥へ這入る、小助思入あつて

小助　若し旦那さま、餘りといへば御恩を忘れ、不人情な仕方ゆゑ、腹が立つてなりませぬに、よくまああなたはお妾を、人に取られて其儘に、お腹をお立てなされませぬな。

正道　心の替りし上からは、兎やかう言ふは益ない事だ。

小助　私ならば二人とも、只返しはいたしませぬに、御勘辨強うござりますな。

ト正道ちつと思入あつて、

正道　これ小助、今日まで繁を正道が、愛して居つたと思つて居るか。

小助　え、何とおつしやります。

ト誂への合方になり、正道思入あつて、

正道　先達て我が手元金二百圓を盜みし折、彼が伯父たる惣助が正直一途な了簡に、繁を縛して罪條を逐一官へ訴

へんと、以ての外の憤り、是れ人倫の道なれど盗みし金もおのが身の、榮耀に遣ひし譯にもあらず、貧苦に迫る父の爲、道ならねども其父へ對して孝の端なれば、官へ訴へ其律に行はん事不便ゆゑ、如何はせんと思ふ折包み隠せし身の素性、女といふ事明せしゆゑ、彼れが容貌勝れしに懸想なしたる體に持てなし、盗みし罪條問はずして二百圓は仕度金と、名義を替へて妾となし、此別莊へ匿ひ置きしも、學事に秀でし博識を空しくなさんは遺憾の餘り、旣に古語にもいへる如く、罪を憎んで人を憎まず、養ひ置きしは髮の毛が延びなば父の許へ返し、小學生徒の女教師になさんと思ふ我が所存、されば家內の者までに色に溺れし體に見せ、此別莊へ泊る夜も建廻したる屛風のうち、媚く事は露ほどなく、和漢の談話に夜を明かし、今日までそちにも悟られぬ我が心配は如何ばかり、斯くまで彼を庇ふのも數千人の其內に、又と女子にはあるまじき其秀才を惜しむゆゑ、末々官のお役に立てば、假令一人なればとて、皇國へ盡す我が忠節。

ト よろしく思入にて言ふ。

小助　すりやお妾と思ひしに、旦那樣には色氣を放れ、お世話なされてござりましたか。

正道　彼れを愛する其時は、情を以て助けしも、色ゆゑなりと世の人に言はれん事なこれ必定、さすれば水の泡ゆゑに、一夜の枕もかはさぬぞ。

小助　左程御恩を蒙りながら、愛想づかしを旦那へ申し、お暇を取つて參りましたは。

正道　これにも深き仔細ぞあらん、必ず明日は知れるであらう。

角藏　驚き入つた御心底、小蔭で伺ひ我等も、

大藏　まことに感服仕りました。

正道　聞かれし上は是非もなけれど、他家へお話し下さるな。

角藏　神へ誓つて此事は、

大藏　決して他言は、

兩人　仕らぬ。

ト 此時奧よりお辰上包みをせし書附を持ち出で、手を支へ、

お辰　お繁さまが旦那樣へ、後にお渡し申してくれと、仰しやり附けてござりまする。

正道　むゝ、そちへ申し置きたるか。

ト 書附を取り開き見て、

角藏　して、置土產の、
大藏　一通は、
正道　此正道へ後難を、掛けまい爲の則ち謝狀。
小助　そんなら若しや。
お辰　お繁さまは。
ト此時鶯鳴く、是れを聞きて、
正道　燈火の明りに惑ひてか、
角藏　籠中に囀る、
大藏　經讀鳥、
正道　これぞ無常の、
ト考へる思入、ほうほけきようと鶯の鳴く音の留り木の頭、
むう。
トよろしく思入、鶯の谷渡りにて、
ひやうし　幕
ト波の音にてつなぎ直に引返す。

四幕目大切　隅田川道行の場

(淨瑠璃)朧の空に雲流す隅田川

夕立碍春雷　(清元連中)

「役名 ― 倉橋直次郎、柴又講中妙法蓮七、鹿別當小助、植木屋ひよろ松、同藪竹、同ぼく梅、柴又講中題目七兵衞、若黨惣助。神保の姿お繁。」

(向島土手の場) ― 本舞臺一面の平舞臺。上の方に藁家根葭簀圍ひの出茶屋、床几と茶道具の臺のみ片附けたる體、下の方同じく葭簀圍ひ、出茶屋の張物打返し淨瑠璃臺、向ふ所々に櫻の立木、此後隅田川山谷堀今戸河岸を見たる灯入り夜の遠見、日覆より松櫻の釣枝、總て向島土手の體。爰にやぶ竹ひよろ松紺半纏、同じく腹掛股引草鞋植木屋のこしらへ、鋤鍬鋸を一つに結へ、是れをかつぎ、一人は辨當箱を肩へ掛け立掛り居る。此見得時の鐘、波の音にて幕明く。

松　此四五日の暖かいので、花がちらほら咲いて來たから、餘程人が出て來たな。
竹　出て來た所か昨日などは、八百松でも魚十でも、大層な客だつた。
松　今度柳畑へ出見世を出した木母寺の植半も、嘸客が

竹　あつたらうな。
　何といつても古いから、お馴染の客はたんとあるし、それに又新見世だから、どんなだか行つて見ようといふ、振りのお客とお馴染で、座敷がなかつたといふ事だ。
松　向島でもあすこらが、毎日どん／＼する日にやあ、言問ひ團子はいふに及ばず、茶見世の慈姑も餘計に賣れ、幾ら錢が落ちるか知れねえ。
竹　それに今日は庚申で、竹筒ツぽうや德利を、ぶらぶら提げた法華宗が、帝釋樣へ出掛けたから、向島は賑かだ。
松　喰物見世でも、神佛でも、流行るといふは別ものだ、先づ水天宮さまに金比羅さま、それに續いては帝釋さまだ、曲り金の渡しから粟餅屋や鹽煎餅、けふ一日でどの位錢儲けをするか知れねえ。
竹　今しがたのばら／＼降りで、人力車も思ひ掛けねえ餘計な錢を取つたらう。
松　何にしろ下々へ、錢の廻るはいゝこツた。
　ト此時上手よりぼく梅紺半纏着流し、下駄がけにて、板へ附けしお觸書を持ち出來り、
梅　おゝ、其所に居るのは松公に竹公か、今歸りか、遲かつたな。
竹　今日は旦那場の仕舞仕事で一杯御馳走になつたので、いつもより遲くなつた。
松　さうしてお前はどこへ行くのだ。
梅　今差配人の權兵衞さんから、是れは急なお觸ゆゑ、早く廻せといはれたから、喜三公の所へ持つて行くのだ。
竹　急なお觸といふのは、何のお觸だえ。
梅　聞かれてまことに面目ないが、悴は牛島學校へ六つの年から上げたお蔭で、どんなむづかしいお觸でもさつさと讀めるけれど、おれは少しも讀めねえから、悴が居ねえ其時は、只判を押して廻すばかりだ。
松　おれの所もやつぱりさうだ、娘が居ねえとお觸は讀めねえ、これを思ふと子供を持つたら、早く學校へ上げにやあいけねえ。
竹　よく戸長さんが其事を、村の者に諭すけれど、困つて見にやあ學校の有難い所が分らねえ。
梅　おら達と違つて竹公は、少しは目が明いて居るから、何のお觸か讀んで見てくれ。
竹　此頃のお觸には、大概假名がふつてあるから、讀めない事はねえ筈だが。

梅　其假名からして讀めねえから、まあ手前讀んでくれ。
竹　どれ／＼、それぢやあ讀んでやらう。
ト觸書を取り、
「淨瑠璃名題――」
ト太夫連名役人替名を讀む、
松　こう、お觸にしちやあ可笑いな。
梅　こりやあ何か間違つたのだらう。
竹　新富町の番附を書く、粂さんの所で違つたのだらう。
梅　それぢやあ内へ持つて歸らう。
松　おら達も湯へ這入つて、早く夜食にあり附かう。
梅　然し爰まで無駄に出て、只引込むのも氣が利かねえ、「イヨ／＼此所、淨瑠璃始まり。」
松　「其儀口上左樣。」
竹　これでお役が濟んだ。
三人　さあ、行きやせう。
ト波の音にて三人上手へ這入る、知せに附き下手葭簀張の張物を打返す、爰に淸元連中居並び、直に淨瑠璃になる。

〽卯月とはいへど櫻も蕾勝ち、川風寒き隅田堤、筑波おろしに花よりも、更けて往來の人散りて、空に殘りし朧月。
ト本釣鐘合方になり、花道より前幕の直次郎、頰冠り尻端折り、番傘を提げ出て來る、跡より同じくお粂片褄を端折り出來り、花道にて直次郎へ息込むを、直次郎振返り見る故、胸を押へ癪の痛む思入、
直次　どうした、胸でも痛えのか。
お粂　あい、さつきからきや／＼と、癪が差込んでいけないのさ。
直次　それぢやあ向島を止しにして、廣小路へ行つて泊らうか。
お粂　なに、きつい事はないから、植半の方が知つて居てよいよ。
〽誰を待乳の山蔭へ、漕ぎ行く船の櫓の音も、絶えて中洲へ落ちる雁、なれし女夫かこれもまた、塒へ急ぐ二人連。
ト癪の痛む思入、直次郎後へ歸らうといふを、構はず行くといふこなし、是れにて直次郎先きへ行くを、粂今に見ろといふ思入にてきつとなる、直次郎まだ來

れえかと振返る、繁氣を替へ、連立つて舞臺へ來る、直次郎躓き、ひよろ〳〵として下駄の前緒を切る。

あゝ危ない、躓いたのかえ。

直次　木の根がこゝへ出て居たので、すんでの事轉ぶ所だつたが、踏みこたへる其機會に、忌えましい鼻緒を切つた。

お繁　そりやあ困つた事をしたね。

直次　梅川が居りやあ立つてくれるのだが、何ぞ立てるのが欲しいものだ。

お繁　今わたしが鹿島で借りた傘の天窓に二枚糸が、掛ける爲に附いて居るから、それを取つてお立てな。

ト直次郎傘を見て、

直次　これがありやあ譯はねえ、少し爰に待つて居てくれ。

ト茶見世の床几を出し、是れへ兩人腰を掛け、直次郎傘のあたまの絲を解く、

お繁　いつもは爰等に車屋が、客待をして居るけれど、今の降りで歸つたと見えるね。

直次　それに今夜は十時過ぎ、今時分まで居やあしねえ。

〽岸に枝垂れし青柳の、絲の根〳〵も川水に、さえし端唄の障子船。

直次　あの三絃は向ふ川岸か。

お繁　いゝえ、上手から歸る屋根船だよ。

ト端唄模様になる。

端唄　〽香水の薫り床しき鬢の毛も、搔き上げしまゝ横櫛に、さすや窓もる月の影、どれが女か男やら、分かぬ姿の梅柳、憎い仲ではないかいな。

ト此内直次郎は床几へ腰を掛け、傘のあたまの絲を取る、此時端唄を聞く思入あつて、下駄の鼻緒を立てる、繁は直次郎の方へ脊中を向け、下締の紐を結び直し、身拵へなする思入。

直次　べらぼうにいゝ聲だな。

お繁　藝者かと思つたら、男だね。

直次　濱町の家元が、上方から歸つたといふが、太夫に聲がよく似て居るな。

お繁　ほんにお前がさういへば、家元かも知れないね。

直次　今の端唄は誰の作だか、豪氣に書生を當て込んだな、香水の薫り床しき鬢の毛を、搔上げしまゝ横櫛にさすや窓もる月の影、忘れもしねえ熊谷で、湯からあがつた其時に、毛を搔分けて其儘に鬢へさした横櫛にやあ、ぞつとする程惚れこんで、とう〳〵思ひは晴らしたが、今の

端唄で思ひ出し、何だかをかしな氣になつた。

お繁　月日の經つは早いもの、昨日今日のやうだつたが、算へて見れば三月後、

〽まだ其時は如月に、山家は雪に故鄕の、便りに急ぐ旅の空、思はぬ人に合宿の、人目忍びし風呂あがり、つひ綻びし褄ならで、包む素性を香に知られ、中を隔てし垣越えて、結びし夢の草枕。

ト繁は過ぎし話しの心、直次郎は繁を捉へ、なまめいたるこなしにて、口說模樣よろしくあつて、

何だなお前、せわしない、今夜泊つてゆつくりと。

直次　それまで待つて居られねえ。

　ト此時上手で題目太鼓になる。

や、あの太鼓は何だらう。

お繁　庚申だから柴又へ、行つた法華宗の歸りだらうね。

直次　それぢやあ今日は庚申か、そいつア今夜はいけなんだな。

〽見返るこなたへ柴又から、歸る法華の講中か。

ト題目太鼓になり、東の假花道より七兵衞、非桁に橘、稻妻菱の端出なる着附、脚絆尻端折、草履、肩へお水を入れし德利を割掛けに掛け、吸筒の大きな瓢簞を持ち出來り、よき所へ留る、

〽連れに四つ木の藁屋から、はぐれて一人畦道を、肩に掛けたる吸筒の、瓢を友にふら〳〵と、土橋を後に隅田村や、里の子供が鄙びたる、唄に興じて來りける。

　ト此内よろしく振りあつて舞臺へ來り、

七兵　おゝ、そこに居るのは講中の衆か。

直次　いゝえ、講中ぢやあござりませぬ、往來の者でござりまする。

七兵　あゝさうでござりましたか、わたしや兩國講中だが、あんまり酒が好きなので、連に途中でまかれました。

直次　それぢやあお前は酒が好きかね。

七兵　いや、好きも〳〵大好きで、此瓢簞は五合入りだが、今朝から三度詰替へました、時に相手がなくつて困つて居るが、一つ受けてくんなさらないか。

　ト茶碗と吸筒を出す。

直次　そいつあ何より有難い、酒と聞いては見遁せねえ。

　ト茶碗を取る。

七兵　さあ〳〵、遠慮なくやんなさい。

　ト吸筒からついでやる。

直次　あゝ溢れます〳〵。

　トぐつと呑む、
こいつあ大層いゝ酒だ、最う一杯頂戴しませう。
　ト又ぐつと呑む、
お繁、どうだ御馳走にならねえか。
　トお繁幸ひといふ思入あつて、
お繁　それぢやあ半分頂戴しませう。
七兵　半分ぢやあ心持が悪い、一杯呑んでくんなさい。
　トついでやる。
お繁　いゝえたんとは行けませぬ。
　トお繁酒を呑み、胸を撫でおろす。
七兵　これはお前のお上さんか、但し情婦か知らないが、何にしろ別品だ、是れぢやあ酒がうまく呑める。
直次　駈附け三杯も贅だが、もう一杯頂戴しませう。
七兵　さあ／＼たんと呑みなせえ、又無くなりやあ注ぎ足すから。
　ト瓢箪を渡す。
直次　それぢやあ、遠慮なく御馳走になります。
七兵　世の中に酒位早く心易くなるものはねえ、お前方に初めて逢つたが、おらァ百年も馴染んだやうだ、是れといふのも皆歸妙法、偏に高祖の御利益だ。
直次　ほんにお前さんの仰しやる通り、こんな有難い事はない。
　ト酒を呑む。
お繁　思ひ掛けない此酒で、お前が酔へばこちも御利益、
　ト酒を呑して酔はさうといふ思入あつて、
何ぞ有難いお話しを、お聞かせなすつて下さいな。
七兵　おゝ話さうとも／＼、御難の話をして聞かさう。
直次　こつちは其内この酒を。
七兵　どれ、辰の口から話さうか。
　ト七兵衛前へ出る。
〽抑法華經弘通の行者、高祖日蓮大聖人は、大難四ヶ度小難は數白浪の龍の口、させる罪なき御身さへ、遁れ片瀬の土の牢、引出す駒を松の葉へ飯盛婆が志、厚き涙の汐曇り、礒端近く着きたまふ。〽情を知らぬ北條が、命令受けて、太刀取りが、後へ廻り振上ぐれば、〽不思議や一天曇る空を、流すが如く雲覆ひ、〽電光はげしくぴか／＼／＼、〽鳴る雷はぐわら／＼／＼、〽忽ち太刀は三段に、權威も折れてわな／＼／＼、〽響きにひよつくり目が飛出し、俄盲目に探るもあれば、〽又腰がぬけ甦るもあり、〽呼べど叫べどきよろもろと、聞えぬ耳、

のかな罰、〽えゝ憎い賣僧といきまきて、檢使がくわつと腹立てば、〽膝や腕を擂こはし、痛さに士卒は泣き出す、〽てもよい氣味と諸見物、どつと笑うてハ、ハ、、、、腹をハ、、、、抱えてム、、、、、えゝ堪らぬとハ、、、ハ、、、、、、〽是れも偏に妙法の利益と天を拜しける。

ト此内六兵衞よろしく振りある、お繁は直次郎を醉はせる氣で酒を吞ませる、此時上手より蓮七七兵衞と同じ拵へにて團扇太鼓を二本持ち出來り、

蓮七　おゝ七兵衞さん、爰に居たか、後だと思つて搜して居た。

七兵　おれは又お前方が先きだとばかり思つて居たが、いい所へ來てくれた、おれと一所に踊つてくんねえ。

蓮七　何でまた踊るのだ。

七兵　あすこに居る二人の衆に、弘宣流布の御利益を仕形話しで聞かせるのだ。

蓮七　そんならおれにも踊れといふのか。

七兵　さあ〳〵一所に遣つたり〳〵。

ト兩人扇團太鼓を持ち出て、

〽上總濱邊は七里の法華、爺さまござれや婆さまもござれ、葛籠脊負うて千ケ寺參り太鼓叩いて題目唱へ、どこどんどがやれどがやつしよ、叩く拍子の面白や。

ト七兵衞蓮七太鼓の拍子になる、此内お繁直次郎囃き合ひ、葭簀の蔭へ這入る、拍子よろしくあつて是れより早き振になる。

〽祖師のえゝ祖師の眞筆帝釋天王、利益はあふるゝ井筒の清水、庚の申ぼで七杯吞んだら、腹がだぶ〳〵だぶだぶ〳〵、野掛半分女中の一群、きやつきやと騷げや、お猿の縁日、賑はしいではないかいな。

トよろしく振あつて納り、四邊を見て、

七兵　や、今の衆はどこへ行つたか、爰は所も三圍堤。

蓮七　もしや二人は狐ぢやないか。

七兵　こいつは彼奴に、

兩人　化されたか。

〽ぞつと怖氣も立つ鳥の、羽音におぢて跡も見ず、眉毛濡らして急ぎ行く。

ト七兵衞よろしく眉毛を濡らし、花道へ這入る、本釣鐘を打込み、凄味の淨瑠璃になる。

〽折しも告ぐる淺草の、鐘の音沈む雨催ひ、水に映りし星影を一つ二つと算ふれば、三つは浮世を捨鐘と、心せわしき十二時に、堀の火影も影薄く、闇き堤へ立出でゝ、

ト此内本釣鐘、薄き波の音をあしらひ、葭簀の蔭より直次郎、お繁出で、

直次　五合足らずあつた酒を、空腹へ呑んだので晝間の醉を引出して、何だか足がふら附くやうだ。

お繁　そんなにお前醉つたのかえ。

ト　お繁直次郎の樣子を見る。

直次　こいつあ所詮歩けねえ、車屋へ行つて乘つて行かう。

お繁　なに、乘らずとも此土手を、少し歩くと川風で、直に醉ひが醒めて仕舞ふよ。

直次　何にしろ水が呑みてえ、喉が渇いて堪へられねえ。

お繁　おゝ、水が呑度くば丁度幸ひ、今の人が忘れて行つた、これをお前呑んぢやあ何うだえ。

ト　お水の德利を出す、

直次　むゝ、帝釋さまのお水か、そいつあ何より有難い。

ト　獨吟の題目になる。

〽南無妙法蓮華經々々

ト此題目のうち德利の口から酒を呑む、お繁は懐からちよつと匕首を拔きかけて見ろ、兩人思入よろしく、

あゝうめえ〳〵醉ひ醒めの水ばかりは、こいつあ下戸の知られねえ味だ。

ト凄き合方になり、お繁きつと思入あつて、

お繁　うまけりやあたんと呑みな、それが末期の水だから。

直次　えゝ、延喜でもねえ、末期の水とは。

お繁　わたしやあお前と心中する氣だ。

直次　何でそんな事をいふのだ、如何に所が三圍だつて、此結構な世を捨てゝ心中などを仕ようといふはあんまり馬鹿げて居るぢやあねえか。

お繁　そんな未練な事を言はずと、覺悟をして命を捨てな。

直次　何も命を捨てる程、義理の惡い事はねえ。

お繁　いゝえ無いとは言はなさい、命を取らねば孝が立たぬ。

直次　え。

ト　ぎつくり思入。

お繁　伊香保在の蓮華寺村で、二百圓の金を盗み、妻木右膳を殺したらうな。

直次　どうしてそれを。

トびつくりなす。

お繁　何と死なずばなるまいが。

直次　どうして／＼人などを、何でおれが殺すものか、そんな覺えはありやしねえ。

お繁　いゝえ覺えがないとは言はさぬ、左の小指はどこで切られた。

直次　え、むゝ、鴨をこせえて切つたといふは、實はありやあ僞だ、こりやあ千住の中田屋で、女に切つて遣つたのだ。

お繁　其言譯は愚なことだ、身の健康を辨へて月々醫師の檢査を受け、開化に進む今の娼妓、野暮をいふのは舊弊に、形物さへもせぬ世の中、誰が指を切るものか、喰切られたといふ確證は、さつき落した財布の重み、二百圓程あるゆゑに、どうして持つて居る事か不思議に思ふ其所へ、非命に死せし我が父の、死骸の口に喰切りし、小指のありしといふ事を、娘が緣に戸倉屋の親仁が委細の物語り、扨こそ父を害せしは、落せし金の員數といひ、おのれが仕業と認めしゆゑ、深きお惠み蒙りし神保樣へ御恩を返さず、御難儀掛けては濟まざるゆゑ、お詫びの状を殘し置き、おのれを爰まで連出したは、人家離れた此土手で父の敵を討つ所存、元が士族とあるからは、卑怯未練に包み隱さず、名乘り合して勝負しや。

ト　お繁匕首を持つて詰寄る。直次郎きつと思入あつて、

直次　扨はあの折熊谷で、泊り合した戸倉屋の、親仁が始終を話したか、それを知られた上からは、手前の緣も最う是れまで、色氣を捨てゝ名乘つて聞かせる。

ト　合方になり、

あの折おれを熊谷で、まいて行くのは怪しいから、車を預けて見え隱れ伊香保の湯場まで跡を附け、蓮華寺村の親仁の所へ行つた其晩裏口に、隱れて手前が二百圓、置いて行つたを慥に認め、日割れの戸から窺へば昔を忘れぬ一腰が、床に飾つてあつたを幸ひ、裏からそつと忍び込み、金より先きに一腰を取るより早く無慘にも、妻木右膳を切り倒し、蒲團の下へ入れてあつた二百圓を引出す折、手負ながらも武者振り附き、爭ふ機み左の小指を喰切られ、忌々しさに刺殺し逃げる其折出會つたが、見咎められぬを幸ひに、素知らぬ振りで車を引き、東京へ歸つたが、うつかり遣へば足が附き、御用の聲と諸共に直に繩が掛るから緣の下へ埋めて置き、丁度足掛け三月越し、日數がたつてこつそりと、今日掘出した二百圓、さつき落した其時に目を附けられたが天の網、遁れぬ所

と覺悟して、殘らず言つて聞かせるから、手前も此儘安穩に、最う生かしちやあ置かれねえ。
〽傘おつ取つて立上れど、風に追はれる鷺ならねど、ふらつく足を踏みしめれば、
ト直次郎傘を持つて立上り、醉ひたる思入にて、ひよろひよろとなりきつとなる、お繁思入あつて、
お繁　流石は惡い性根だけ、よく隱さずに言つてしまつた、おのれが盜んだ二百圓は、親の貧苦を救はんと、道ならざれど大恩ある、神保氏の所有を掠め、竊に盜りし其金ゆゑ、おのれが非道の刄にかゝり、
〽盡せし孝も不幸となり、水のあはれや父上は、果敢ない最期をなしたまふ。
敵を取つて手向けねば、よしや此身を捨つるとも、冥土へ行つて言譯なし、今日の今まで其事を露聊かも知らざりしが、圖らず聞くも導きなるか、思ひ掛けない紫文の歸りの信者が勸めたる酒は此場の助太刀に、醉はして殺すに如くはなしと、無理に呑まして醉ひ醒の、水の替りにひいやりと、冷たい白刄を振舞ふから、覺悟をなして往生しやれ。
直次　以前が書生の男姿に、さりとは色氣のねえ事だ、强淫同樣熊谷で無理往生に抱いて寢た、可愛い手前も斬うなりやあ親仁と共に殺して遣る、たゞ悔しいはうか〳〵と、酒を呑んだがおれが誤り、然し一合や五合の、端た酒に醉ふやうな、そんなけちな奴ぢやあねえ。
お繁　非命に死する父上の、仇を報する所さへ、櫻に埋む隅田川。
直次　流るゝ水の淀みなく、人足しげき茶屋小屋も、更けては土手に火影なく。
お繁　船の往來の三味線も、
直次　絕えて車の音もなく、
お繁　夜學にふける牛島の、
直次　生徒が讀書の聲ばかり、
お繁　四邊に憚る事なければ、
直次　梢の花の落花微塵に、
お繁　小癪な事を。
〽覺悟をせよと振上ぐる、白刄の光り川水に、きらめく春の稻光、夕立塚の三圍に後の浮名ぞ。
トお繁懷劍を拔き、突いてかゝる、直次郎身を交しちよつと立廻つて傘にて留める、是れにて淸元連中を張物で消し、時の鐘誂への淒き鳴物になり、兩人立廻り

よろしくあつて、トヾお繁直次郎の肩先きを一刀切る、
糊紅になり、

直次 うぬ、切りやあがつたな。

お繁 父の無念を晴らさにや置かぬ。

ト又立廻りになり、立身にて直次郎の脇腹へ突込む、直次郎苦しむ、お繁白刃を拔く、直次郎ばつたり倒るる、お繁乘つ掛り、

天命思ひ知つたるか。

ト止めを刺す、ばた／＼になり、上手より惣助二幕目の若黨、小助別當にて出來り、

惣助 こりやお繁、よくぞ親の敵を討つた。

小助 お出來しなされましたな。

お繁 おゝ、よき所へ二人の衆、父を害せし直次郎が、盜み取つたる二百圓、再び我手に入つたれば、神保樣へお渡し下され。

ト直次郎の財布を取出す、惣助受取り、

惣助 慥にお渡し申すであらう。

お繁 是れにて思ひ置く事なければ。

ト短刀を取直し、死なうとするを小助留める。

惣助 やれ早まるな、これお繁。

小助 何ゆゑ死なうとなさるのだ。

お繁 人を害せし上からは、縄目に逢ぬ其うちに。

惣助 死なうといふのも尤もだが、元より人を殺せし上、

小助 金を盜みし直次郎、あなたの科にはなりますまい。

お繁 親を害せし者なれど、敵討は天下の法度、それを犯せし我が身の上、先非を悔いて自殺いたせば必ず留めて下さるな。

ト覺悟の思入、惣助も思入あつて、

惣助 さう又覺悟を極めたら、此趣きを自訴なして、お上の御所置を受けるがよい。

小助 惣助さまのお詞に、附くのが何より上分別。

お繁 成程伯父が意見の如く、罪を犯せし此身ゆゑ、上の御所置を受けるが道。

惣助 そこへ心が附いたらば、

小助 少しも早く、

お繁 おゝ、さうぢや。

トお繁立上る。此時幕明きの植木屋やぶ竹出で、

竹 人殺し、動くな。

ト組附くを振解き、引附け、

お繁 いで、身の科を、

ト投退ける。竹ぽんと轉るを木の頭、
訴へ出でん。
トきつと見得、波の音、佃の合方、水鳥を日覆へ引き
あげる、三人、引張りよろしく。

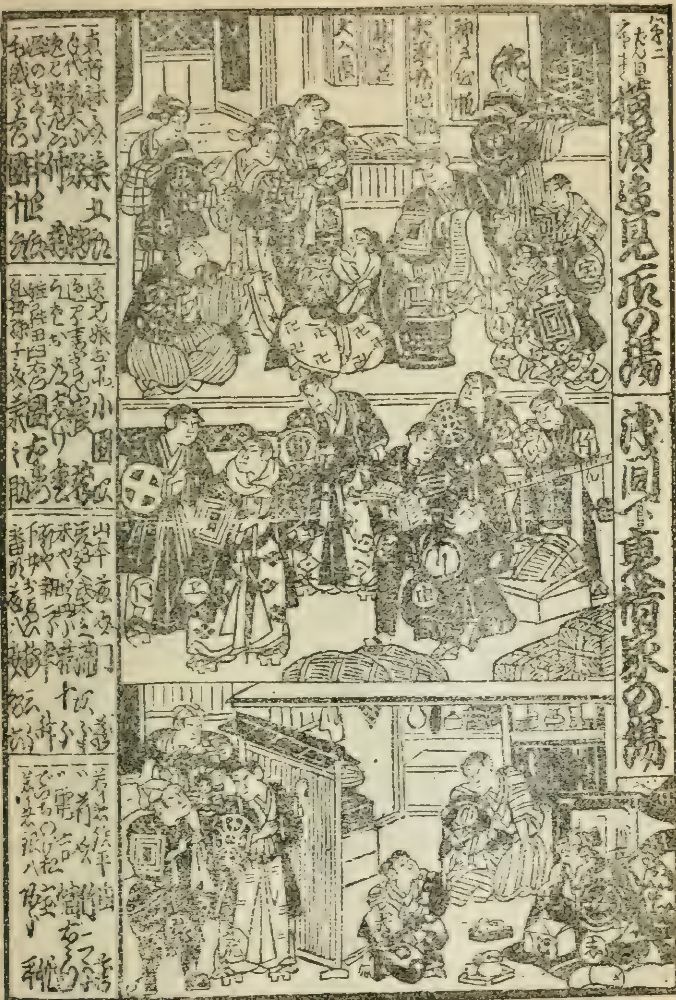
ひやうし　幕

富士額筑波繁山（終り）



第貳番目は英國の名譽の學者リトン氏が筆を揮ひしモニーの劇演大意は人のまじはりも兎角に金へ目をつけて浮薄にながるゝ人情を穿ちつくせし西洋の狂言趣向も深き池の端名におふ福地先生が飜譯なして御蔵ありしを及ばぬ筆に横濱へうつす脚色も春の夜のおぼろに筋も波戸場の月影まとまり兼れしをやう／＼に綴りあげしは此演劇外へ取られぬ其のうちにと座主も作者も俳優も慾が先立つ新狂言

人間萬事金世中


横濱遠見屋の場

人間萬事金世中（金の世の中―二幕）

序幕

横濱境町邊見店の場
同仙元下裏借家の場
同邊見宅遺狀開の場

役者――毛織五郎右衛門、邊見勢左衛門、門戸の手代藤太郎、雅羅田臼右衛門、親類山本當助、邊見の番頭蒙八、美配人武太兵衛、米屋宇四郎、薪屋勘次郎、邊見の若者鐵造、同電吉、邊見の妻おらん、同娘おしな、おらんの姪おくら、林之助乳母おしづ、乳母の孫千之助、其他。

（邊見店先の場）――本舞臺上手へ寄せて三間の間常足の二重、金網の蹴込み、下の方二間の落間、この正面土藏の入口、二重の正面上の方一間、中仕切りのある間平戸の戸棚、この前に帳場格子、眞中一間大阪格子の出這入、下の方一間の板羽目、これへ狀差し帳面など書割り、五間の間一面の瓦庇、軒口積問屋の板看板その外蒸汽船の名を記したる板札を大分に掛けてあり、例のところ門口、此の外正面ペンキ塗りの板塀、總て横濱境町積問屋見世先の體、上手帳場格子の内に蒙八、散髮髷羽織着流し前垂掛けの番頭にて帳面を附けて居る、下手落間の前に鐵造、電吉、荷介何れも散髮髷着流し前垂れ掛けの若い者にて、銘々荷拵へをして居る。野毛松散髮の丁稚にて取散しある繩を片附けて居る、この見得玩具の木琴の入りし濱唄にて幕明く、

鐵造　もし番頭さん、神戸行きの海上丸へ積込む荷物は、これで仕揚り、

電吉　これから直に積出さうとも、少しも差支へはございませんから、

荷介　どうか帳面へ間違はないやうに、控へておいておくんなさい。

蒙八　いや貴樣達が間違へればとて、おれの記した帳面に間違ひのあつた例はない、餘計な心配はせぬが好い。

野毛　そんな口綺麗なことを言つて、お前さんの顏のやうに叉凹んぢやいけませんよ。

蒙八　えゝ、この才槌めが、引込んで居ろ。

ト爰へ與より、おえい下女のこしらへにて盆へ茶碗を四つ載せて持つて出て、

えい　皆さん御苦勞でございます、お茶でもあがつてお出掛けなさい。

蒙八　いや、さう氣が附いてくれるから、どうでもおえいどんは賴もしい。みんなもわしの、相作をさつしやい。

鐵造　わたし共こそ力業をして、だいぶ息が切れたから、

電吉　茶の一杯も吞まないぢやあ、波戸場へ擔いで行かれぬが、

荷介　蒙八さんは帳場へ坐り、骨なんぞは折れない筈だ。

えい　ほんにお前さん方三人に、汲んで來たのでございますよ。

蒙八　いや人目があるゆゑさうは言へど、わしに吞ませようと持つて來たのぢや、吞んでやるから爰へ出しな。

ト皆々茶を吞むことよろしく。

野毛　おい／＼おえいどん、おいらにも茶をくれないのか。

えい　いえ／＼、お前は大きな形で遊んでばかりおいでだから、お茶も何もいらぬわいなあ。

野毛　えゝ何で遊んでゐるものか、繩からげの手傳ひをして、一人前は働いて居らあ。

蒙八　これ／＼野毛松、ふざけるな、小僧のくせに利いた風に、茶など吞むには及ばぬことだ。

野毛　いや小僧だつて番頭だつて、開化の世界は同じ權だ、さう安くして貰ひますまい。

蒙八　えゝ、ふざけたことを言やあがるな。

鐵造　これ／＼野毛松、茶が吞みたけりやあ臺所へ行つて、手前の勝手に汲んで吞め。

電吉　どこの家でも小僧の分まで、茶を汲んで來て吞ませるものか。

荷介　早く貴樣も出世をして、肩揚げの下りた着物を着やれ。

えい　吞みたくばお前にも、今汲んで來てあげるわいなあ。

蒙八　おえいどん打捨つておかッし、そんなことをすると癖になります。

野毛　えゝ夜遊に行つてはぢかれた癖に、女の肩を持つて

も無駄なことだ。
蒙八　うぬ、そんなことを吐かしをつて。
ト算盤を持つて立掛る。
野毛　やあ、はぢかれ番頭が算盤を持つた。
蒙八　えゝ、どうするか見やあがれ。
ト野毛松を追廻す。爰へ奥より勢左衛門散髪に白毛鬘羽織着流しにて出來る、野毛松奥へ逃込むゆゑ、蒙八勢左衛門を打たうとして心附き、
やあ、こりや違つた。
勢左　蒙八どん、何の眞似だ。
蒙八　そろばん先きの杖、いや、間違へました。
勢左　いゝ年をして小僧を捉へ、馬鹿な眞似をさつしやらずと、積込みの荷の間違はぬやうに、帳へちやんと控へさつしやい。
蒙八　へい、もうちやんと控へました。どれ手水にでも行つて來よう。
トつんとして奥へはひる。
勢左　これおえい、貴樣も何で女のくせに、見世先きへ出て遊んで居るのだ。
えい　いいえ、遊んでは居りませぬ、荷拵へのお見世の衆へ、お茶を汲んで參りました。
勢左　えゝそれが餘計な世話焼きだ、餘所から來た客ぢやアあるめえし、茶が呑みたけりやあ勝手に呑むわ、茶を汲んで來る暇があるなら、臺所へ行つて雑巾でもさせ。
えい　はい／＼、御免下さりませ。
トつんとして奥へはひる。勢左衛門若い者三人に向ひ、
勢左　又貴樣達も貴樣達だ、荷拵へが出來たなら早く波戸場へ持つて行くがいゝ、物の高い横濱に居て大飯を喰ふ奉公人に遊んで居られてたまるものか。
鐵造　どれ、それぢやあ今のうち、
電吉　波止場へ行つて船の中へ、
荷介　積込んでしまふとしよう。
勢左　積込む時にひよろついて、海へ荷物を落すまいぞ。
鐵造　よい／＼、ぢやアあるめえし。
勢左　何だと。
鐵造　いえ、よろしうございます。
勢左　よろしくなくツてどうするものか。
トこれにて三人件の荷物を擔ぎ下手へはひる。勢左衛門下に居て、

いや人を使へば使はるゝと、少しでも目が放れると奉公人め等がふざけてならぬ。それに因果とこの家ほど喰ひ潰しの多い家はない、一人の甥を據ろなく家へ引取りおいてやると、又女房の一人の姪を餘儀なく引取ることになり、十人からの暮しゆゑ喰せるばかりも年に積ると三百圓ではあがらぬから、餘程稼がにや引合はぬわい。

ト思案の思入、やはり木琴入りの濱唄になり、花道より臼右衞門散髮變羽織着流し駒下駄がけ、襟卷、獵虎のしやつぽを冠り出で、直に舞臺へ來り、門口にて内をのぞき、

臼八　勢左衞門さん、お見世にござつたか。

ト内へはひる。

勢左　いよ、これは臼右衞門さん、よくござつた、まあこつちへ上らつしやい。

臼右　いゝ儲け口でもないかと思つて、ぶらりとこつちへ出かけて來ました。

ト二重へあがり、よろしく住ふ。

勢左　今も一人で考へてをつたが、知つての通りわしの家は十人からの暮しゆゑ、どんなにしても家の掛りが月に三十圓は堅くかゝり、其の外地代や商法の税で十圓づゝはきつと出るから、積問屋位で斯うして居ては所詮殘る所へ行かぬから、石炭油の出る山でも見出して、何萬圓といふ大金の蔓にでも取附きたいものだ。

臼右　先づわしの目的では、毎年箱根や伊豆の熱海が夏季になると繁昌するゆゑ、もつと手近な大山の麓へ温泉を開いて、東京中の地獄を殘らず狩集め、湯女と號して娼妓をさせ湯場と貸座敷の元締をしたら、きつと金儲けが出來ると思ふが、此の企てはどうでござらう。

勢左　成程それは好い思ひ附きだが、大山邊で湯の湧き出る場所でも見出してござつたのか。

臼右　いや其の目途はまだ立たぬが、不動が祀つてあるからは、湯が湧き出るに違ひない。

勢左　そりや又どういふ見込があつて、

臼右　はて不動明王の眞言にも、あびるおんせんそわかと言ひます。

勢左　えゝ、落し噺しか、馬鹿々々しい。

兩人　はゝゝゝゝ。

ト煙草をのみ居る、やはり木琴入りの濱唄になり花道より林之助散髮變羽織着流し駒下駄にて小さな風呂敷包みを持ち、後より以前の荷介出來り、

荷介　もし林之助さん、今お歸りでござりますか。
林之　おゝ荷介どんか、今歸りました、お前は何處へ行きなすつた。
荷介　今波戸場へ荷を積込みに行きましたが、判取を忘れたゆゑ取りに歸つたのでござりまする。
林之　それでは又、これが大小言であらう。
荷介　なに、朝から晩までの小言ゆゑ何とも思ひはしませんが、お前さんは奉公人と違つて現在の甥御さんでありながら、私共同樣にあゝがみ〳〵おつしやるとは、實に喧しい旦那でござります。
林之　浮沈みとはいひながら、親に死なれ家に離れ、便りない身に親類の伯父の家へ居候、朝晩箸の上げ下しに、やれ喰潰しの意氣地なしのと、口汚なく追ひ使はれ、こんな悔しい事はない、掛取にでも出た時が少しはこつちの壽命延し、家へ歸れば又がみ〳〵、伯父の小言を聞かねばならぬが、あんまり小言はどつとせぬものではないか。
荷介　その內にもわたくしは大嫌ひでござりますが、どうかお前さんが內々で、入口にある判取をちよつと取つて下さいませんか。

林之　ありさへすれば知れないやうに、わたしが出して上げよう。
荷介　どうぞお願ひ申します。
林之　さあ〳〵早く行きませう。
ト舞臺門口へ來て、
伯父さん、行つて參りました。
ト內へはひり、門口にある判取を勢左衞門に知れぬやうに外へ出してやる。荷介悦んで下手へはひる。勢左衞門林之助を見て、
勢左　えゝ行つて來たもねえものだ、僅か五丁か十丁の所へ掛取りに行つて二時間餘り、何でこんなに手間取つたのだ。
林之　先方の旦那がお留守ゆゑ、歸りを待つて居りましたので大きに遲くなりました。
勢左　むゝ、歸りを待つて居たのなら、掛金は殘らずよこしたであらう。
林之　へい、取つて參りましてござりまする。
勢左　そんなら早く爰へ出せ。
林之　へい〳〵、お納め下さりませ。
ト小風呂敷の包みを出す、これにて勢左衞門風呂敷を

開き、通ひの帳面と札を出し算へて居る。
臼右　林之助どの、何處へ行かしやつた。
林之　これは本町の臼右衛門さま、よくおいでなされました、吉田橋の手前まで掛取りに參りました。
臼右　それは御苦勞なことであつた。
勢左　（此の内札を算へ居て思入あつて、）やい林之助、こりや十三圓と三錢きりで、三厘不足をして居るぞ。
林之　へい文久の端金がないから負けてくれと申すゆゑ、お序さまで宜しいと負けてやつて參りました。
勢左　えゝそれだからおのれの事を世帶知らずだと常から言ふのだ、三厘のことはさておいて、一厘でも一毛でも勘定の内が不足では請取れませぬと何故言はぬ、文久錢が二つあれば煮込みのおでんが二本喰はれる、おのれ棒先を切りをつたな。
林之　いえ、どういたしまして、そんな賤しいことをいたしませう。
勢左　いや／＼それに相違ない、有體に言つてしまへ。
臼右　はて、三厘位の不足なら小遣ひにやつたと思つて、まあ／＼勘辨さつしやるがよい。
勢左　いや、默つて居ると癖になります。

林之　おゝ、默つて居ると申しますれば、今途中で本町の五郎右衛門樣にお目にかゝりましたが、長崎にござる伯父樣の御病氣の事は、まだ此方へ知せの手紙が屆きませぬか。
勢左　何だ、長崎の藤右衛門が病氣で居ると聞いて來たと。
林之　へい、二三日後に長崎から郵便が屆いたと、五郎右衛門樣がおつしやりました。
勢左　（思入あつて、）あの藤右衛門は相場で儲け今では彼の地で何萬圓といふ大身代になつたといふ事、三年あとに女房に死なれ、家督を讓る子とてもなく、今ぽつくりと死んだ日には、跡はみんな他人のものだが、近い所なら駈附けて親切ごかしに身代をこつちへ悉皆ずり込まうもの、長崎では都合が惡い。
臼右　その門戸どのは、こなたを始め林之助どんや此のわしまで、脫れぬ中の縁者ゆゑ死ぬと見込みが附いたなら、こなたと二人で蒸汽へ乘り、入費をかけて乘込んでも、こりや若干か儲かる仕事だ。
勢左　いや／＼それも藤右衛門がきつと死んでくれゝばいいが、もし全快でもされた日には入用の遣ひ損で、指を

與へて歸らにやならぬ、こりやうつかりと手は出されぬ。

林之　いえ〱九死一生との手紙が來たと申す事ゆゑ、成らうことならわたくしは見舞に行きたうござりまする。

臼右　いや、さう聞いて見れば猶の事、全快したら入費だけ向うに出させてやつてもいゝから、親切ごかしに行かねば噓だ。

勢左　いや入費位を出させても、こつちの暇が缺けるから、全快されては罰に當らぬ。

臼右　はて、そこが所謂一かばち、危ふい橋を渡らねば大きい儲けは出來ぬ世の中。

勢左　こりや女房とも相談の上、どうか工風を附けねばならぬ。

臼右　まあともかくも奥へ行つて、とつくり相談いたしませう。

勢左　そんなら奥で、臼右衞門さん、

臼右　儲かることなら、厭とはいはぬ。

臼左　とつくりと相談しませう。

ト勢左衞門件の札を持ち、臼右衞門附いて奥へはひる。林之助跡に殘り呆れし思入にて。

林之　いやも、眼の寄る所へ玉とやらで、伯母御を始め娘まで慾に目のない義理知らず、そこへ立入る親類も義理人情はそつちのけで、寄るとさはると慾張り話し、呆れ返つた人ではある。

ト奥よりおくら島田髷やつし裝、下女同樣のこしらへにて出來り、

くら　林之助さん、お歸りでござんしたか。

林之　おゝおくらどのか、お前にも話さうと思ひましたが、長崎の伯父樣が大病との郵便が屆きました。

くら　今奥でそのお話し最中でござんすが、お前さんやわたしの爲にも大事の伯父樣でござんすゆゑ、近いとこなら早速にお尋ね申しに行かねばならぬが、何をいふにも長崎ゆゑちよつと自由は足りませぬわいな。

林之　さあ、それも當時は開けて居るゆゑ、金さへあれば蒸汽にて早速行かれぬ事もないが、蒸汽どころか電信を掛ける錢さへ自由にならぬ、實に不仕合せなわしが身の上、愚痴のやうだが其の以前は辨天通りで惠府林と人にも知られた瀬戸物問屋、異國へ手廣く取引して豐かに暮した身代も、母がこの身を産んだ時産後で死んで父もなく、乳母の世話にて成人するうち、親父樣には慾に迷

ひ、不圖米相場にかゝりてより損亡續き身代潰れ、遂には御病死なされしゆゑ、わしは此の家へ引取られ、養育うけし乳母とても掛り息子の夫婦に死なれ、十一になる孫を相手に仙元下に幽な暮し、其の上ならず先頃より長の病氣で居るとの事、どうか以前の恩返しに貢いで遣り度く思へども、僅か二厘か三厘の不足に目角を立てられる伯父の家に厄介人、長く斯うして居た日には義理の缺ける事ばかり、どうしたものと明暮に、苦勞の絶えたことはありませぬ。

くら　そりやもうお前さんばかりぢやござんせぬ、わたしも以前は本町の倉田宗右衞門と人に知られた生絲の仲買をする人の娘、何不自由なく育ちしもその父さんが蠶種紙で大そう御損をなされしゆゑ、それから身代左り前、引續いてのお煩ひで終に果敢なくなられしを、氣病に母が煩ひつき又も御病死なされしゆゑ、便りない身に伯母の家へ引取られて來て下女同樣、追使はれてをりますが、以前の事を考へますと、悔しいやら悲しいやらで、夜の目もろく／＼合ひませぬわいなあ。

林之　成程こなたも本町で、それ相應に暮したる宗右衞門どのゝ一人娘、

くら　お前も以前は辨天通り、瀨戸物問屋の息子さん、

林之　世が世であるなら、此の家と親類同志の附合に、

くら　甥よ姪よと呼ばれても、斯うすげなうされまいに、

林之　厄介人よ喰潰しと、たゞ取るやうにこき使はれ、

くら　辛い思ひを押し怺へ、我慢に我慢はして居れど、

林之　濁るは涙の瀨戸土瓶、

くら　心細いも生絲の緣、

林之　思へばしがない、

兩人　身の上ぢやなあ。

ト兩人萎れしこなし、やはり木琴入り濱唄になり、花道より千之助散切鬘襤褸裝藁草履にて、辻占昆布の入り籠を肩に掛け出來り、

千之　辻占昆布ぢや、板こぶぢや、頭を打たれていたこぶぢや、

ト呼びながら門口へ來て内を覗き、

若旦那樣、それにおいでゞござりますか。

林之　（千之助を見て、）おゝ千之助か、よく商ひに精が出ますの。

くら　あの子はたしか仙元下の。

林之　わしを育てた乳母の孫、高島町へ辻占こぶを、毎日

賣りに行くとのことぢや。

くら　でもまあ、それは感心な、どれお品さんへ内證で、お菓子を持つて來てやりませう。

林之　いや、その志しは有難いが、知れると悪い、止しにさつしやい。

くら　いえ腐るほど仕舞つてあるゆゑ、知れる氣遣ひはござんせぬ。

トおくら奥へはひる、千之助も内へはひり、あたりを見廻し、

千之　若旦那様、餘儀ない事でお前様に、お願ひがあつて參りました。

林之　丁度折よく見世の者も爰に居ぬゆゑ遠慮はない、どういふ頼みか言うて見やれ。

千之　祖母さんの病氣の事で、お願ひがあつて參りました。

林之　おゝ其の病氣が氣になるゆゑ、見舞に行きたく思つて居れど、使ひに出ても心が急き、少し歸りが遲くなると伯父にがみ／＼、嚙附れるので心に任せず無沙汰をしたが、乳母の病氣はどんな樣子だ。

千之　御親切にお前様がお案じなされて下さいますが、鹽梅が悪いその上に貧乏に追はれますので、段々重くなるばつかり、あれでは快くなる筈はないと案じられてなりませんから、それでお願ひに參りました。

林之　さうして頼みといふ譯は、どういふ譯か言うて見やれ。

千之　若旦那様、まことに申し兼ねましたが、お金を少々貸して下さりませ。

林之　そりや頼まずともこつちから、持つて行かうと思つて居るが、幾らばかりあればよいのだ。

千之　いえ幾らでも宜しうござりますが、お金の入用一通りお聞きなすつて下さりませ。

ト大方になり、

祖母さんが達者で居れば、異人さんの洗濯屋の下仕事をして稼ぎますから、そんなに困りもしませんが、其おばあさんが去年の暮から長煩ひをして居るので、米屋や薪屋へ借りが出來、やいやい催促されましても、辻占こぶを賣つた位の儲けの内では返されず、藥を買つてお米を買ひお粥を炊いて二人して啜つて居るのが精一ぱい、餘計な錢が儲からぬ故それを案じておばあさんが、年の行かぬ一人の孫に苦勞をさせるが氣の毒だから、一日も早

く死にたいが、病氣で死んでは葬ひや何かでやつぱり跡で物が入るゆゑ、いつそ人に見られぬやう海ッ端まで這つて行き身を投げて死ぬと言ひますから、そんな事でもされましては大變でござりますゆゑ、案じなさんなと力をつけ、據ろなく御無心に參りましてござりまする。

　ト泣聲をして言ふ。

林之　おゝ尤もな其の心配、わしもそれゆゑ疾うからして尋ねてやらうと思へども、今いふ通り少しの間も暇がないゆゑ無沙汰をした、さうして米屋薪屋の拂ひは幾らばかりあればいゝか、それを序に聞かしてくれ。

千之　はい薪屋は僅かでござりますが、米屋は二圓も遣りませんでは中々あとを送りません、其の内一番困りますのは大家さんに三月ぶり、店賃の借がござりますので、それをやらねば店を明けろと毎日やい〳〵言はれますので病人が氣を揉みますを、昨夜もだまして寐かしつけ、高島町へ商ひに行き、夜通し賣つて歩きましても四錢か五錢の儲けゆゑ、お米を買つてしまひますと藥の手當がござりませぬ。

林之　去年の暮から又一倍諸式の相場があがつたから、其の困るのは尤もだ、然し必ず案じるな、何れ後方都合をして金をわしが持つて行くから、料簡違ひをせぬやうによく病人にも力を附け、わしの行くのを待つて居やれ。

千之　そんなら願ひをお叶へなさつて、お金を貸して下さるとか。

林之　おゝ育ての恩ある乳母の病氣や、年端の行かぬそちの苦勞を、何で見捨てゝ居られうぞ。

千之　そんならどうぞ若旦那樣、お助けなすつて下さりませ。

林之　必ず心配せぬがよい。

　ト爰へ奥より以前のおくら、菓子パンを紙に包み、奥を憚りながら、持つて出で、

くら　聞けば聞くほど哀れな話し、これは同じお菓子のうちでもお腹の足しにならうから、內證でお前に上げますぞえ。

　ト出す。千之助開き見て、

千之　こりや菓子パンでござりますな。

林之　爰で喰べては差合ひゆゑ、袂へ入れて持つて行きやれ。

千之　持つて歸つて病人の、お婆さんに喰べさせます。

くら　ても感心なことぢやなあ。

千之　左樣なら若旦那樣、姉さん有難うございます。
林之　早く家へ歸るがよいぞ。
千之　是れでお暇申しまする。
　ト門口の外へ出で、
辻占昆布ぢや、板昆布ぢや。
　ト呼ぶ、これより木琴入りの濱唄になり、千之助呼びながら花道へはひる、おくらこれを見送り、
くら　斯うして互ひに人の家で辛い思ひをすると思へば、又あのやうに幼年にて苦勞をして居る子供もあり、あれから見れば二人とも、少しはましでござんせうわいなあ。
林之　それゆゑ餘計な心配が、
くら　えゝ。
林之　いえなに、餘計な心配をしてくれたので、あれも悦んで歸りました。
くら　あんなお菓子は腐るほど、奥にしまつてありますわいなあ。
　ト爰へ奥よりおらん半纏着流し、婆アにて出來り、
らん　何が腐るほどしまつてあります。
林之　や、こなたは伯母樣、さては樣子を。

らん　腐るほどしまつてあるとは、何の事だか耳障りだ。
くら　さあ、それはあの、奥の間にお金が腐るほど、しまつてあらうと。
らん　えゝ餘計な事を喋べらねえで繼ぎ物でもするがいい、間がな隙がな見世へ出て男の側へ寄りたがるとは、こんないやらしい奴はありやしねえ。
くら　それでは、お菓子といふことを、
らん　何だと、
くら　いえ、をかしな事はいたしませぬわいなあ。
　ト奥へはひる、林之助思入あつて、
林之　もし伯母樣、折入つてお願ひがございますが、お叶へなされては下さりませぬか。
らん　改つて願ひがあるとは、娘の聟にでもなりたいといふのか。
林之　いえ左樣ではございませぬ、實は唯今見世先へ、あなたも豫て御存じの乳母の孫が參りまして段々との因果ばなし、婆あが長の煩ひにて其の日の煙りを立兼て困つて居ると申すことゆゑ、私も其の以前母のない身を乳母の乳で養育受けし恩あるゆゑ、貢いで遣り度く思ひますが、唯今の身分では金子の工面も出來ませねば、どうぞ

あなたのお計ひで十圓ばかりわたくしに、お貸しなされては下さりませぬか。

らん　何だ十圓貸せ、これ林之助何處を押せばそんな音が出るのだ。十圓の事はさておいて一圓たりとも埋めた金を何でそなたに貸されるものか、よくまあ物を積つて見なさい、いはゞ此富の家の喰潰しで一錢一厘の働きもなく、頭の天邊から足の爪先まで伯父の厄介になつて居ながら、乳母に貢いで遣り度いから金を貸せなどゝは呆れた料簡、乳を吞んで育てられようがたゝでも吞ませて貰やあしまいし、高い給金でそなたの親が乳母に抱へた雇人、いはゞ此方がお客さまだ恩にきる所は少しもない、人間らしい料簡で恩返しをする心なら、親に別れ家に離れ途方に暮れてゐる所を引取つて、世話をしてやるこちら夫婦は大恩人、恩人れ孝行するがよい、奉公人なら貸した金を給金で差引くといふ見當があるゆゑ、少し位貸してやるまいものでもないが、厄介人のそなたなどに、何で金錢が貸されるものか。

林之　あなたは左樣におつしやりますが、死んだ親父の遺言にも母が產後の懈みで死に、乳に困つて居たところを乳母の丹精一方ならず養育うけしそちなれば、母同樣に心得ろと末期の際に言殘し此の世を去つてござりますゆゑ、乳母の難儀を聞きながら、捨てておく譯には參りませぬ、厄介人ゆゑ貸されぬとおつしやりますならわたくしは、何れへなりとも雇ひに出て、主人に頼み給金の前借をいたしてなりと貢いで遣りたうござりますから、お金をお貸し下さらずば、どうぞ伯父樣へお話しなすつて奉公に出して下さりませ。

ト此の以前奥より勢左衞門出で、これを聞き居て、

勢左　いや奉公に出す事はならぬ、貴樣は一生この家で飼殺しにして使はねば、この伯父が引合はぬわえ。

ト前へ出る。

らん　おゝ好い所へ旦那どの、聞いてござつたか知らねども、あんなふて勝手を言ひますわいなう。

林之　いえ喰潰しとおつしやりますゆゑ、奉公に出ると申しましたのが、なんでふて勝手でござりまする。

勢左　えゝ、それだからおのれの樣な理も非も分からぬ奴はないと、おれが不斷から言つて居るのだ、親なき後は伯父が親と、此の日本はいふに及ばず、各國まで例へてあれど、親なき後は乳母が親だと、そんな間違つた譬はない、その乳母に貢ぎたいといつて親同然な伯父を捨て

奉公に出て、それで濟むか、給金の前借をして乳母に貢がうと思ふなら、その金を伯父によこせ、それでこそ孝行者と直新聞へ出て褒められるが、乳母に貢ぎをしたいから金を貸してくれろなどゝは、途方とてつもない奴だ、金も貸さねばおのれの自由に奉公にも出さぬから、伯父へ孝行と思ふなら、喰潰しにならぬやう一生懸命に働きをれ、そんな曲つた料簡だから、伯父の心にかなはぬのだ。

らん　こりや旦那どのゝ言はれる通り、親なき後は伯父が親、母なき後は伯母が母、家の身代さへ肥してくれゝば、何でこつちで邪魔にしよう、料簡違ひな事を言はずと一生懸命に働くがよい。

林之　そんならどうでもわたくしを、奉公に出しては下さりませぬか。

勢左　大恩のある伯父を捨て、不實をすると捨ておかぬぞ。

林之　そんな手前勝手な。

らん　何だとえ。

林之　いえ手前の勝手を申しまして、お腹をお立せ申しました。眞平御免下さりませ。

勢左　さう詫るなら料簡してやる。

　ト爰へ奥よりおしな島田髷振袖娘にて出來り、

しな　もし父さん、臼右衛門さんがお歸りなさるが、何ぞ御用はござりませぬか。

勢左　いや金儲けの病氣見舞に、半口乘つておかねばならぬ。

らん　儲かる事ならわたしも半口、娘と二人で乘りませう。

勢左　いや乘られては割が惡い。

　ト勢左衛門奥へはひる。

らん　何だかこりや甘さうな話しだ。

　ト後を追かけ奥へはひる。おしな思入あつて、

しな　これ林之助どの、いつも見世へ東京から來る、小間物屋さんは見えなんだかえ。

林之　東京から來る小間物屋とは、吉兵衛さんでござりますか。

しな　あの人に少し頼むものがござんすから、來たら奥へ知せて下さい。

林之　畏りました。頼むものとは又指輪でござりますか。

しな　いえ、此の間出來て來たこの銀簪の耳掻きが少し小さいゆゑ、直して貰はうと思ふのぢやわいな。
　ト珊瑚珠の玉の入りし簪を見せる。
林之　成程玉に合はせましては少し小さいやうでございますが、色氣と云ひ形といひすなほな玉でございますな、こりやあ古渡りでございませう、なか〳〵安くは出來ますまいね。
しな　いえ、そんなに高くはございませぬが、玉ばかりが十圓でござんした。
林之　へえゝ、玉ばかりが十圓でございますか、いや此の位の分があつては、無瑕でございますからその位はいたしませう。
しな　銀簪だけの損さへすれば、いつでも十圓で引取るといふゆゑ、四五日あとに拵へたのぢやわいな。
林之　左樣でございますか、好い簪でございますな。
　ト簪を持ち思入あつて、
おしなさん、折入つてお前さんにお願ひがございますが、此の簪をわたくしに、少しの內貸して下さりませぬか。
しな　えゝもう馬鹿らしい、お前に貸さうと思つて拵へはしないよ。
　ト簪を引取る。
林之　そりやさうでございませうが、長くではございませぬ、二三日貸して下さりませ。
しな　誰がお前に貸しませう、常談をお言ひでないよ。
林之　いえ常談ではございません、眞實に貸して下さりませ。
　ト袖にすがる、
しな　えゝも、厭だヨウ。
　ト袖を振拂ひツンとして奧へはひる、林之助これを見送り、
林之　親が親なら娘まで、色氣を捨てゝ慾がたつぷり、ここらが開化の娘か知らん。
　ト呆れし思入。引違へて奧より以前の臼右衞門出來り。
臼右　入費を遣つて見舞に行き、向うが死ねばたんまりと儲かる仕事の目論見も、乘り手が殖ゑては割に當らぬ。
　ト懷より札を出し、
然し土產の資本金も半分出ればこつちも氣安い、ちつとも早く買立てよう。

ト札を紙入に納め門口の方へ行かうとする、林之助この體を見て羨しきこなしにて、

林之　もし雅羅田さま、お見掛け申して、折入つてお願ひがござりまする。

臼右　見掛けて頼みがあるといふは、貴様も半口乘せてくれろか。

林之　いえ左様ではござりませぬ、差當りまして今日中に金子が十圓ござりませねば、義理のかけまする事が出來て當惑いたしてをりまする、どうぞあなたのお情で親類うちの誼を思ひ、十圓お貸し下さりませぬか。

臼右　これ〳〵林之助どん、その親類呼はりは止して下さい、そりやあそなたの親父とは商法仲間で入懇を結び、親類の附合もしたが家が潰れてこつちの家へ引取られてゐるそなたへ對し、金を貸す謂れはない、十圓どころか少しの縁も、今となつちやあ他人向きだ。

林之　さうおつしやらずと、お達引にて、

臼右　いや見當のねえのに、金は貸せねえ。

林之　そこを何卒、

ト袂にすがるを、

臼右　えゝうるせえ、放されえか。

ト袖を振拂つて花道へはひる、林之助これを見送り思入あつて、

林之　伯父は勿論今の人も、元は親類同然の附合をしたお人だが、斯うも分からぬ人ばつかり揃ひも揃つて居るものか、金が出來ねば千之助の貧苦を助ける事もならず、乳母の命にかゝはる大事、いつそ此の間に本町の五郎右衞門樣の所へ行き、膝へ縋つて頼んで見よう、それが何より上分別だ。

ト身支度をする、爰へ奥より幕明きの蒙八出て、

蒙八　これ〳〵林之助どの、金がいるなら蒙八が差繰つて貸して進ぜようか。

林之　おゝ蒙八どの、有難い、どうかなるなら貸して下さい。

蒙八　その代り又こつちでも、こなたに一つの頼みがあるのぢや。

林之　さうして、其の頼みといふのは。

蒙八　外でもないが、こなたの縁者でこつちの家に厄介者で居る、あの倉田のおくらさんを、わしに取持つて貰ひたい。

林之　人が心配して居る所へ、そんな常談を言はないで、

金の都合が出來るなら、どうかわしに貸して下さい。

蒙八　いえ常談ではない、おくらさんさへ取持つて下されば、きつと金は都合して貸してあげませう。

林之　それだと云つて色事の取持はどうもわたしには出來ませぬ、それぢやあもうお前にも借りませぬ、やはり本町の、いえなに、外で都合をしませうから、みだらな事はお斷り申します。

蒙八　さういつこくを言はないで、取持つことが出來ずば、せめて、おくらさんと情人になる智慧をわたしに貸して下さい。

林之　情人などをした事のないわたしだから、そんな智慧はありません。

蒙八　さうおつしやらずとお達引にて、

林之　え丶色氣のないのに、智慧は貸されぬ。

蒙八　そこを何卒、

ト袂へすがるゆゑ、

林之　え丶うるさい、放しなされい。

ト袖を振拂ひ逸散に花道へはひる、此の内奥より幕明きの野毛松此の體を見て居る、

蒙八　旦那もいつこくだが、今の人も身内だけ揃ひも揃つたいつこく者、いつそ此の間に當人の尻へ縋つて頼んで見よう、それが何より上分別だ。

野毛　番頭さん、わたしが取持つてあげるから、晩に軍鷄でもお奢りな。

蒙八　いや情事などをしたことのない小僧に此の取持ちは頼まぬから、それよりやつぱり直談じに、いえなに、旦印に小言をいはれるから、みだらなことはお斷りだ。

野毛　さういつこくを言はないで、軍鷄が厭ならせめて牛でも、

蒙八　おごつたことはないわたしだから、そんな散財はまつぴらさ。

野毛　さうおつしやらずと、お達引にて。

蒙八　え丶色氣のないのに、牛はおごれぬ。

野毛　そこを何卒、

蒙八　え丶うるさい、放しなされい。

ト追かけて奥へはひる、入替つて奥より以前の勢左衞門おらんを連れて出來り、

らん　もし旦那どの、内々用とは何事でござるか、晝日中見世先で、まさか提灯で餅もつけまい。

勢左　え丶馬鹿な事を言はつしやるな、内證の用とは外で

もないが、あの林之助めが乳母へ貢ぐと十圓の金を借りたがるは、何に遣ふか分らぬゆゑ持逃げでもされぬやうに、貴樣もこれから氣を附けさつしやい。
らん　ほんに彼奴めも年若ゆゑ、いつか近所へ馴染をこしらへ穴ツ這入りでもするのか知れぬ、こなたも是れから林之助は金の使ひなどにせぬがよい。
勢左　いやそればかりぢやない、今聞けばあの番頭めが林之助に金の工面をしてやると言つて、爰で吐かしてをつたは、くすね錢でも持つては居ぬか。
らん　いやもう家に居る奴はみんな泥坊、少しも油斷はならぬから、今夜から代り〴〵に金の番人に起きて居ませう。
勢左　どうか他人を遣はずに、金の儲かる工夫はないか。
らん　又見世の奴が奥へ行つて、女共とふ狂つて居るか。
勢左　貴樣は奥を氣を附けろ、おれは帳面を調べにやならぬ。
らん　やれ〳〵世話の燒けたことだ。
ト　おらんは奥へはひる。勢左衞門は上手帳場の内にて帳合をして居る、やはり木琴入りの濱唄になり、花道より毛織五郎右衞門散髮鬘羽織着流し駒下駄がけにて先へ立ち、後より門戸の手代藤太郎同じく散髮半合羽脚絆草履がけの旅裝にて、下等の蝙蝠傘を突き出來り、花道にて、
五郎　向うの家がお前に話した、邊勢といふ積問屋の見世だ。
藤太　成程、强慾と呼ばれるだけあつて、金のありさうな見世構へでございますな。
五郎　あすこへ行けば、門戸どのゝ身寄りの者が寄合つて居れば、遺言狀はあすこで開きませう。
藤太　勝手を知らぬわしの事ゆゑ、何分よろしくお賴み申します。
ト　右の唄にて兩人舞臺門口へ來て、
五郎　邊勢どの、お店に居られましたが。
ト　内へはひる。
勢左　これは本町の五郎右衞門どの、お珍らしい、よくおいでなされた、まあこれへお寄んなさい。
五郎　それぢや藤太郎どの。
藤太　先づ〳〵お先きへ。
五郎　御免なさい。

ト五郎右衛門二重へ上りよろしく住ふ、藤太郎平舞臺下手に住ふ、これにて勢左衛門帳面を片附け前へ出て、

勢左　繁用に取紛れ、毎度御無沙汰に打過ぎましたが、五郎右衛門どのはいつもながら、お替りなうて結構でござる。

五郎　その御無沙汰はお互ひの事、用がなければ年始の外、問ひ音信もしませなんだが、いつもこなたもお達者で、お見世も繁昌すると聞き、蔭ながらお悦び申します。

勢左　有難いことに、どうか斯うか取り續いて居るものゝ、旨い儲けが少ないので、思ふやうには行きませぬ。

藤太（前へ出て、）これはお初にお目にかゝりまする。

ト辭儀をなす、勢左衛門藤太郎を見て、

勢左　ついぞ見馴れぬ旅の御仁、これは何れのお人でござる。

五郎　あれはこなたも知らぬ筈、今度始めて出て來ました長崎表のこちらの親類、門戸どのゝ手代にて藤太郎どのといふ若者、先頃より藤右衛門どのには大病で居られた所養生叶はず病死され、それに附いて遺言状を預り今方蒸汽で此の地へ着き、わしの家へ尋ねて來たゆゑ、直ぐに連立つて、こちの家へお知らせ申しに來ました。

トこれを聞き、勢左衛門〆たといふ思入あつて氣を替へ、態とびつくりせしこなしにて、

勢左　えゝ、そんならなんと言はつしやる、長崎表の門戸どのには、大病で死なれましたか。

藤太　後月二十八日の夜、果敢なく病死を遂げられました。

勢左　やれ〱それはお氣の毒な、さつき林之助が途中で五郎右衛門どのにお目にかゝり、長崎の門戸どのが大病だといふ書面が屆き御心配との噂を聞き、まだ六十にもならぬお人、どうか本腹させたいと、丁度その折雅羅臼どのも店へ來合せて居ましたゆゑ、見舞に行かうと相談極まり今度の蒸汽の出帆には乘込む積りで居ましたに、その見舞さへ間に合はず死なつしやつたとは情ない、末期に一目逢はぬのが、まことに殘念な事でござる。

トわざと愁ひのこなしよろしく、

藤太　それに附けてもこちらのお家へ、主人の血縁の林之助さまや倉田の娘御おくらさまが、先年より引取られ御厄介人でをられますとのこと、これなる毛織五郎右衛門さまより承はりましてござりますゆゑ、先づ兎も角もそ

の方へと、お知せ申しに參りました。

勢左　いやその二人より藤右衞門どのゝ緣に繋がるわしの女房おらんを始め、娘のおしなも嘸この事を聞いたなら、力を落すことであらうが、言はずに居れば後での恨み、これへ呼んで言ひ聞かせませう。

ト奧へ向ひ、

これ〳〵婆さん、大變だ、娘をつれて爰へ出さつしやい。婆アどん〳〵。

ト呼び立てる。これにて奧より以前のおらん、おしなを連れて出來り。

らん　大變だとは旦那どの、何事が始まりました。

しな　父さん、何ぞ見世の品でも紛失をしましたかいなあ。

勢左　いやそれしきの事ではない、長崎表の藤右衞門どのが、たうとう病死さつしやれたのだ。

らん　それはお氣の毒なことなれど、四百里餘りも隔たつて居るゆゑ。

しな　爰でとやかういうたとて、仕方がないではござんせぬか。

勢左　なに、仕方がない事があらうぞ、藤右衞門どのは女房もなく跡を取るべき子供もないから、何萬兩といふ大身代も他人の物にせねばならぬ、そこは差詰め緣者のものが跡へ乘込み丸取りに、いやさ、まるで他人の其の中で病死をしては看病も屆かぬ勝であらうと思へば、おりや殘念でこたへられぬ。

ト わざと愁ひのこなし、

らん　成程、それでは、わしの姪のおくらの親の兄御なる藤右衞門どのゝ事なれば、わしの爲にも繋がる緣、

しな　又父さんの甥に當る林之助どのゝ實家とは、脫れぬ緣者の門戶さまゆゑ、父さん始めわたしとてもやつぱり緣者に違ひない。

勢左　おゝさうだとも〳〵、親子三人その外に、二人の緣者を家へ引取り世話をして居る勢左衞門だ、形見分けなら五人前、いやさ、五人の淚を三人で、女房も娘もたんと泣け、おれは一倍悲しいわえ。

らん　さう聞いて見れば誰よりも、一番緣者のわしが悲しうござる。

しな　林之助どのよりおくらどのより、わたしがたんと悲しいわいなあ。

ト三人わざと泣くことよろしく、五郎右衞門藤太郎顏

見合せ思入あつて、

五郎　扨それについて藤右衛門どのが、末期の際に緣者のものへ所有の金を取調べ、殘らず形見に割附けられて遺言狀を書殘し、これを故鄕の緣者のものへ病死の後に渡してくれと、言殘されて死なれし由。

藤太　壯年ながらわたくしが主人の手許で病氣中晝夜の世話をいたしましたゆゑ、我が亡きあとで橫濱へ手前がこれなる遺言狀を持參いたし、五郎右衛門さまへお屆け申せと主人の言付け、葬式萬端濟ませまして直に蒸汽へ乘込んで、三日三晩で波濤を越え、先刻この地へ着しました。

勢左　さう聞いて見れば猶以て、こりや泣いて居る所ぢやない。

らん　さうして、どういふ形見わけか。

しな　早う聞せて下さりませ。

五郎　その遺言狀は、親類一統寄り集りし列座の上、開封してと佛の遺言。

藤太　お手數ながらこちらから緣者の衆を廻狀にて、お呼びなされて下さりませ。

勢左　緣者といつても本町の雅羅臼どのと、太田町の山當どのゝ二軒なれば、早速呼びにやりませう。

ト有合ふ帳場の掛硯を出し、卷紙へ廻狀を書く、おらん奧へ向ひ、

らん　これ〱野毛松、使ひがあるぞ。

ト呼ぶ、奧より以前の野毛松出來り、

野毛　へい〱、何處へお使ひでござります。

しな　大急ぎで、本町から太田町まで行つて來るのぢや。

野毛　はぢかれ番頭に、お暇でも出ますのでござりますか。

しな　えゝもう、そんな譯ではない。

ト此の內勢左衛門廻狀を書いて、

勢左　これを本町の雅羅臼から、太田町の山當へ持つて行き、急に耳よりな儲け口が、いやさ、儲け口だと噓をついて、早く來るやうに呼んで來い。

野毛　へい〱儲け口だと噓をついて早く呼んで來いと、言附けられましたと申しますのでござりますか。

勢左　えゝ馬鹿野郎めが、默つて行つて來い。

野毛　それではだまつて行つて來ませう。

ト廻狀を持つて門口へ出る。

らん　又道草を喰つてはならぬぞ。

野毛　なんでも默つて行つて來ます。

ト野毛松花道へはひる。

五郎　いやなに勢左衞門どの、今度長崎の藤右衞門どのが不慮の病死を遂げられても、家督を嗣ぐべき子がないゆゑ、年頃仕出した身代も他人のものにせねばならぬ、それに附けてもこちらの家、斯うして立派な娘御が年頃になつて居られるゆゑ、跡を取るべき聟をこしらへ、老後の安心さつしやれたらよからうやうに思ひますが、お心組でもござりまするかな。

勢左　それはおつしやるまでもなく、疾うから搜して居りますが、扨搜さうとなりますと氣に入つたのは少ないもの。

らん　偶々あれば長し短かし、これぞと思ふ相手のないので、未だに聟が定まりませぬ。

五郎　いや外を穿鑿するに及ばず、勢左衞門どのゝ一人の甥ゆゑ、あの林之助どのを聟にしたら、男も好し、氣立も好し、殊に娘御のおしなどのとは丁度似合の從妹同志、他人交ずの水入らず好い都合ではござらぬか。

藤太　遠國生れのわたくしゆゑ、詳しい譯は存じませぬが、病死いたした主人にも林之助さまのお身の上を案じておいでなされましたゆゑ、こちらのお家の御養子にお直りなされば冥土から、佛もさぞや喜びませう。

勢左　いや折角のお勸めだが、あの林之助は聟養子に直す譯にはなりませぬ。

五郎　扨は若氣の過失にて、心得違ひの事でもして、

藤太　こちらの親御のお眼識に、叶はぬ事でもござりますか。

らん　いえ、これぞといつて疵もないが、相場にかゝつて身代を潰した人の忰ゆゑ、男は好いが三文の働きもない彼れの性分。

勢左　どうか持參の一萬圓も持つて來るやうな、聟があつたら周旋をして下さりませ。

五郎　それでは持參を澤山持つた、聟が望みでござつたか。

藤太　しかしあんまり不釣合の醜男にては、御當人が、

しな　いえ持參金さへたんとあれば、男振には構ひませぬ。

勢左　おゝ、それでこそわしの娘、

らん　なんでも當時は、慾の世の中、

五郎　はて、今時の娘御は、

藤太　氣立が替つて居ると見える。
勢左　それにつけても遺言狀を、
らん　早く開封した上で、
しな　形見分けなら何人前でも、
勢左　あこれ、
ト抑へ、
早く使ひが歸ればいゝが。
藤太　でも、呆れかへる。
ト言ふを窺せて、
五郎　はて、爰等が地金の、
ト煙草盆にて煙管をはたくを道具替りの知らせ、
開けた所だ。
ト皆々引つぱりよろしく、木琴入りの濱唄にて道具廻る。

（仙元下裏借家の場）――本舞臺一面の平舞臺、上の方折廻しの反故張りの障子屋體、正面上の方一間の押入戸棚、内三尺の佛檀、この下手一面の風壁、下手の褄古びたる竹格子の半窓、この内に一ツ竈、その外臺所道具よろしく並べ、いつもの所古びたる門口、此の外正面總後隱の屋根を見せたる板塀、總て横濱仙元下裏借家の體、上手に古びたる蒲團を敷きこの上におしづやつし裝の老母病人のこしらへにて、行火に凭れ起き直り居る、これを以前の千之助後へ廻り脊中を摩り介抱して居る、この見得四ツ竹節の合方にて道具留まる。

千之　これ祖母さん、若旦那さまからお金が届き、これで當分安心ゆゑ、もう身を投げて死なうなどゝ悲しい事を言はないで、土産に貰うたパンの菓子でもしこたま喰つて力を附け、早くよくなつておくんなせえ。
しづ　さあ思ひ掛けなく十圓といふお金が届き、こちらでは飛立つ樣に嬉しいが案じられるは若旦那さま、以前と違ひ今の身は伯父御のお家へ掛人、どんな工面で十圓といふお金をお貸し下されしか無理な事でもなされたる工面の金ではあるまいかと、又案じられてならぬわいなう。
千之　なあに、そんなに案じなさんな、居候でも若旦那のおいでなさる彼のお店は、土藏があつて五間間口、おいらの家よりよッぽど立派だ、十圓ばかりの金などはそこらに轉がつて居さうな家だ。

しづ　さあ、それゆゑに猶々心配、伯父御といへど日頃から强慾非道なお人と聞けば、もし若旦那が掛先のお使ひ込みでもなされたら、どんな憂き目に逢はうも知れぬと、それが心配でならぬわいの。

千之　その心配をするよりは早くよくなつてくれさへすれば、おいらも稼いで金を溜め、若旦那にお返し申して、御迷惑なざあ掛けやあしねえ。

しづ　そなたが晝夜呼び歩き、聲をからして稼いでも高の知れた辻占昆布、纏めた儲けは出來ぬわいの。

ト この時下の七輪へかけし藥土瓶吹きこぼれるゆゑ、

千之　お前、藥を呑まないか。

しづ　煎じあがつた様子ゆゑ、枕頭へ持つて來や。

千之　あい／＼。

ト 四ツ竹の合方きつぱりとなり、花道より以前の林之助腕組をして出來り、花道にて、

林之　五郎右衛門さまのお宅へ行きお願ひ申さうと思つた所、生憎お留守で用が足りず、乳母の家へも行き難いが、といつて此の儘捨ておいては、乳母が短氣な事でもしてあの千之助が路頭に迷ひわしを恨むは知れたこと、假令賴みの金は出來ずとも力を附けて言延し、金の工面に取り掛らう。

ト 門口へ來り、内を窺ひこちらへ來り、

せめて一錢でも持つて居れば、見舞に來たと入られるが、どうも手ぶらでは入りにくい、いつそ寄らずに出直さう。

ト 花道の方へ行きかけ、

いや／＼それでは爰まで來て、こつちの心が届かぬゆゑやつぱり寄つて力を附け金を言延べて歸るとしよう。

ト 門口の外にまご／＼してゐる、おしづこなしあつて、

しづ　これ千之助、誰か表へ來たではないか。

千之　誰が來ようとも大丈夫だ、もう掛取りには恐れねえ。

ト こちらへ來て門口をあける、これにて林之助びつくりして、

林之　おゝ千之助、歸つて居たか。

千之　や、若旦那さまでござりましたか。

しづ　なに、若旦那がおいでなされた。

千之　さあ／＼おはひり下さい。

ト これにて林之助是非なく内へはひり、

林之　乳母や、久しく御無沙汰をしました。
しづ　これ千之助疊がきたない、せめて寢蓙なと敷いたがよい。
千之　あい〳〵。
ト押入より破れた寢蓙を出し上手よき所へ敷き
さあ若旦那さま、これへお坐り下さりませ。
林之　いやそれでは却つて面目ない、必ずともに構はぬがよい。
しづ　はてむさくるしうござりますから、どうぞあれへお坐り下さい。
トこれにて林之助是非なく上手へ住ふ。
千之　祖母さん、お茶でも買つて來ようか。
林之　あゝこれ、決してそれには及ばぬ、茶などを買はれてはわしが困る。
トこの內おしづ蒲團より這下りて、
しづ　扨若旦那さま、何とお禮を申しませうか、口では申し盡されませぬが、以前の誼を思召され世に落果しわたくし共をお救ひなされて下さりまして、有難い事でござりまする、お蔭さまにて病人も大安心をいたしまして、これでは追々藥もきゝ全快いたすでござりませう。
ト頻りに禮を言ふゆゑ、林之助術なきこなしにて、
林之　これ〳〵乳母や、其の樣に丁寧に禮を言はれては、わしは穴へでもはひりたい、成程さつき千之助から話しを聞いて氣の毒ゆゑ、僅かながらも貢ぐ氣で心はやきもきして居れど、何をいふにも出來ぬは金。
しづ　さゝ、其の出來難い金子をば十圓まとめて下さいますとは、なか〳〵容易な事ではないと、實はどうして御都合をなされし事かと、老の身の取越し苦勞をいたすくらゐ。
林之　さあ、十圓出來るか五圓出來るか、そこの所は知れぬけれど、遲くも明日の夕方までには、工面をしてよこしませう。
千之　いえなに、さつきお使ひで屆きましてござりまする。
トこれを聞き林之助びつくりして、
林之　なに、使ひで屆いたとは。
しづ　さあ、四十恰好な使ひのお方が、あなたさまから頼まれたと金子を十圓お持ち下され、使ひの事ゆゑ面倒なから端紙でよいから、請取をくれとおつしやりますゆゑ千之助に印紙を買ひにやりまして、請取を書き判を押し

お渡し申してござりまする。

千之　それでは先刻のお使ひは、あなた御存じござりませぬか。

ト林之助合點の行かぬ思入にて、

林之　さうして使ひの持つて來た、其の十圓はまことの札かな。

トこれにておしづ蒲團の下より紙に包みし札を出し、

しづ　一圓札で此の通り、十枚揃いてござりまする。

ト出す、林之助改め見て、

林之　僞物にあらぬ眞の札、はて、何者が屆けしか。

千之　それではもしや門違ひで、持つて來たのぢやありますまいか。

林之（思入あつて、）いやこりや千之助の孝心を神や佛も憐みて、貧苦を救ふ天の惠み、よも門違ひではあるまいわえ。

しづ　とあつて出所もたしかならぬ、お金をお貰ひ申したとて遣ふわけにもなりませぬ。

千之　慾張り大家に話したら、取り上げばゞあにするかも知れぬ。

林之　いや、後日に主が知れたらば、此の林之助が借りた積りで二人の科にはせぬ程に、心おきなく此の金で、諸方の拂ひをするがよい。

しづ　道ならぬとは思ひますれど、貧苦に迫りどの道とも、なくてかなはぬ切羽ゆゑ、

千之　若旦那さまのお詞に、隨ひますでござりませう。

林之　いづくの誰が惠みしか、不思議な事もあるものぢや。

トよろしく思入、やはり四ッ竹の合方になり、花道より家主武太兵衞半纏着流し下駄がけにて先に立ち、字四郎の米屋、勘次郎の薪屋兩人着流し前垂掛にて通ひ持ち出來り、花道にて、

武太　これ／＼二人の衆、あんな貧乏人を相手どつて願つた所が入費損で、向うの入費を差配人が立替るやうな事に成行き、甚だ迷惑しますから、それよりわしが承知だから家のがらくたをあらひざらひ、貸の抵當に持つて歸らつしやい。

字四　家のがらくたといつた所が、油揚のやうな三布蒲團に荒布のやうな掻巻が一枚、腐つた疊が三疊半に反古張障子が二三枚、行火が一つに口の缺けた藥土瓶や七輪では、五厘の直打も覺束ない。

勘次　金氣といつたら臺所に鍋が一つあるツきりで、素麪箱に古手桶瀬戸物小鉢をかき集めた所で、天道干に並んでゐる一品文久の代物ばかり、掘出し物にならうといふめぼしいものは一つもない。

武太　はてそこが所謂百貫の抵當に編笠一蓋で仕方がない、此の差配人もあんな者にいつがいつまで店を塞がれては、店賃は取れず手數はかゝる、こんな迷惑な事はない。

宇四　御差配人が承知なら、構ふ事はない、やツつけませう。

勘次　斯ういふことなら道具屋でも、一緒に連れ立つて來ればよかつた。

武太　まあ、ともかくも責掛けさつしやい。

ト三人舞臺門口へ來て、

三人　さあ／＼、來たぞよ／＼。

ト内へはひる。千之助見て、

千之　大家さまも御一緒に、米屋さんに薪屋さん、よくおいでなされました。

武太　いや／＼何でよく來るものか、あんまり貴樣達がいけづるいから、心持惡く出掛けて來たのだ。

宇四　御差配人へ斷つて、今日こそ一番膿ひつけようと、二人揃つて出かけて來たを、

勘次　大家さんの御理解で、身代限りと相場が極り、家中さらつて歸るのだ。

武太　さあ／＼身ぐるみ、

三人　脱いだり／＼。

トわや／＼言ふ。

しづ　成程段々あなた方へ差上げまするお拂ひも、延び延びになりましたゆゑ、そのお腹立ちは御尤もなれど御覽の通りお客もあれば、まあお靜かになされませ。

武太　えゝ客來があるの何のと、しやあ／＼とした落着き顏。

宇四　客といふが、大方借金取りか代言人だらう。

勘次　まご／＼するとがらくたでも、向うへ持つて行かれるから、

武太　わしが承知だ、やツつけなされい。

宇勘　さうしませう／＼。

ト三人立ちかゝり、臺所道具を前へ持ち出し並べる事あつて、トヾ林之助の前にある行火を取りあげ下手へ持つて來、敷いてゐる寢蓙をあげにかゝる、この内林

之助烟草を呑みゐて、此の時むつとせし思入にて、

林之　えゝ、人に一言の挨拶もなく、餘りと言へば無法な衆達だ。

武太　いや無法も作法もあるものか、爰の店を貸しておく此の差配人が先へ立ち、店立てをする貧乏神。

宇四　貸した錢をよこさぬから、不足ながらもがらくたを家中浚つて持つて行き、それで勘辨してやるのだ。

勘次　いはゞこつちは大負けに負けた捌きのお客さま、客であらうが親類だらうが、遠慮會釋があるものか。

武太　それともこなたが中へはひり、

宇四　貸した拂ひをすつぱりと、

勘次　綺麗に勘定つける氣か、

武太　それが出來ずば、

三人　退いて居なさい。

林之　さうして幾干ありましたら、拂ひが綺麗に附きますな。

武太　おゝ五十錢づゝの店賃が三月溜つて一圓二分、今月になり今日までを日割にすれば日に二錢、六日溜つて十二錢。

宇四　こんなにづるいと氣も附ず、二分づゝ送つた米の代も一斗が二斗と度重なり、地藏の顔も三斗六升、金に直して三圓二分、

勘次　土釜が二俵に炭團が十五、薪が十把で一からげ三錢づゝゆゑ三十錢、都合で一圓八十錢、

武太　双方しめて六圓二分と、

宇四　二十二錢の勘定だが、

勘次　家中さらつて、

三人　負けてやるのだ。

林之　それでは七圓あげましたら、一分と三錢釣錢が來ますな。

武太　そりや言はずと、

三人　知れたことだ。

ト林之助件の札を七枚出し、

林之　さあ、改めて請取らつしやれ。

三人　やあ。

トびつくりする、合方きつぱりとなり、

林之　いくら借りがあるかは知らぬが、十圓あつたら追附かうと、これこの通り持つて來て、拂ひを取りにござるを先刻から待つて居ました、長屋の差配もなさるといふお前さんも無慈悲なら、また米屋さんも薪屋さんもあん

まり因業ではござりませぬか、とさあ、厭やなことを言度いところだが病人で居る年寄りや、小供に免じて何事も言はずにお歸し申しますから、拂ひを取つたら近所の衆、あとを送つてやつて下さい。

武太　いやさういふ慥かな身寄の衆が、後楯に附いてござれば、これで大家も大安心。

宇四　米屋もこれから安心して、どん／＼米を送りませう。

勘次　まき屋もぱツぱと燃えるやう、枯れた薪を送りませう。

しづ　それでこちらも、安心して、

千之　肩身が廣くなりました。

林之　いや地獄の沙汰も。

ト件の札を下へ置くを道具替りの知せ、

金次第ぢやわえ。

ト皆々引つぱりよろしく、四ツ竹の合方にて道具廻る。

（邊見宅遺言狀開きの場）——本舞臺一面の平舞臺、上下折廻し障子屋臺、正面上の方一間の床の間、この次一間地袋違ひ棚、下手一面腰張りの茶壁、總て邊勢の宅奥座敷の體、爰に以前の五郎右衛門遺言狀を持ちて眞中に住ひ、上手に勢左衛門、おらん、おしな、下手に藤太郎、蒙八の番頭住ひ、この見得合方にて道具留まる。

勢左　先づ兎も角も遺言狀を開いて、讀んではどうでござるな。

五郎　いや／＼親類一同が列座の上で開かねば、後で兎や斯う苦情があると、死んだ佛へ言譯がござらぬ。

藤太　さうして本町の雅羅臼さまや、太田町の山當さまは、まだお見えなされませぬかな。

蒙八　今又小僧を追ひ迎ひに、急がせてやりましたれば、程なくおいでゝござりませう。

らん　遺言狀を開封して、形見の高が極らぬ内は、どうやら心が落着きませぬ。

しな　何の事はない、無盡に行つて鬮を引く前のやうに、胸がどき／＼するわいなあ。

勢左　これ／＼蒙八、もう一度誰か迎ひにやるがよい。

蒙九　いえ、迎ひに參つた野毛松が、まだ歸つて參りませぬ。

勢左　いや小供では埒が明かぬ、貴樣急いで行つて來い。
蒙八　いえ、わたくしが參りませんでも、程なく見える時分でござります。
勢左　えゝ何時まで待つて居られるものか、行けといつたら行かねえか。
蒙八　へいへ畏りました。
ト澁々立たうとする、爰へ下手の障子を開けおえい出て、
えい　只今お歸りでござりまする。
らん　おゝ野毛松が歸つたか。
しな　御親類も一緒であらうの。
えい　いえ、林之助さんがお歸りでござりまする。
勢左　えゝあんな奴はどうでもいゝ。
五郎　いやいや戻りし林之助どのは、藤右衞門どのゝ身寄りゆゑ、是へ來るやう、さう言つて下さい。
えい　畏りましてござりまする。
ト下手へはひる。
蒙八　どれ、わしも行つて來よう。
ト下手へはひる、入替つて以前の林之助出來り、
林之　これは五郎右衞門さまを始めとして、長崎よりのお使ひのお手代、只今見世で承はりますれば、藤右衞門さまには御養生叶はずたうとう御病死なされし由、承はつて驚き入り、遠路のことゆゑ御末期にお目にかゝらぬ此の身の殘念、たゞたゞ愁傷いたしまする。
ト皆々へ辭儀をする。
藤太　扨はあなたが惠府の御子息、林之助さまでござりましたか、私事は門戶の手代藤太郎と申す者、以後はお見知り下さりませ。
林之　左樣ならお前樣が豫てお名を聞き及びし、藤太郎どのでござりましたか、定めて伯父の病中もお手を盡されました御丹精を、なされたでござりませうが、其の甲斐もなく相果てまして、お力落しお察し申しまする。
五郎　林之助どのは藤右衞門どのゝ、肉身分けし甥なれば、遠慮に及ばぬこれへござれ。
林之　それでは餘り高上りゆゑ。
五郎　はて、不斷とは違ふゆゑ、遺言狀を讀むまでは、血緣の者が上席ぢや。
林之　左樣なら藤太郎どの、眞平御免下さりませ。
ト藤太郎へ會釋して五郎右衞門の次へ住ふ、此の内勢左衞門、おしな、おらん立つたり居たりして、待ち詫

　　びろこなし、
勢左　えゝ、まだ親類は參らぬか、第一使ひが野呂間だか
　　らだ。
らん　又巽人館で玉轉しでも、見て居るのでござんせう。
しな　母さんわたしが、一走り行つて來ようぢやござんせ
　　ぬか。
藤太　はて其のやうにお急きなされずとも、もう程なく見
　　えられませう。
　　ト此の時下手障子の内にて、
家八　さあ〱お早くおいでなされませ。
勢左　やれ〱、嬉しや、見えたやうだ。
　　ト合方きつぱりとなり、下手より以前の家八ついて臼
　　右衛門、後より山本當助、散髮羽織着流しの親類に
　　て出來る、林之助これを見て、
林之　こりや、わたくしが是れに居ては。
　　ト立たうとするを留めて、
五郎　はて、今日ばかりは爰に居さつしやい。
　　ト無理に住はせる。
臼右　勢左衛門どの、先刻はおやかましうござつた。
勢左　二度まで迎ひをあげたのに、大そう遲いではござら
　　ぬか。
臼右　いや、太田町が一緒に行くと言傳をしてよこしたの
　　で、待合せて居て遲くなりました。
當助　(前へ出て、)思ひも寄らぬ廻狀を讀んで、びつくり
　　いたしましたが、長崎表の藤右衛門どのにはとんだ事で
　　ござりました、緣者の衆のお力落し、嘸かし御愁傷でご
　　ざりませう。
勢左　いや〱紋切形の悔みなどは、長々しいから預りに
　　して、後でゆつくり言ふとしませう。
らん　さあ〱、これで人數が揃へば、
しな　お早くお開きなされませ。
五郎　いや、まだこれへもう一人、血緣の者が坐らねばな
　　らぬ。
勢左　いや〱、これでよい筈ぢや。
五郎　はて、倉田の娘がもう一人、是れへ列座せねばなら
　　ぬ。
らん　いえ、あのおくらはわしの姪ゆゑ、形見分なら二人
　　前、
しな　母さん、わたしが預からうわいなあ。
林之　丁度只今次の間に、淚に暮れて居りましたゆゑ、こ

れへ呼んでやりませう。

らん　えゝ、呼ばいでもよいといふに。

蒙八　いえ、別に手間は取れません、おくらさん〳〵。

　卜呼び立てろ、これにて下手より以前のおくら、悄々として出で、下手下に居る。

くら　何ぞ御用でございまするか。

藤太　只今主人が形見分の遺言狀を開きますから、お血筋ゆゑに林之助さまのお側へおいでなされませ。

くら　いえ〳〵、これが勝手でございまする。

　卜やはり下手に居る。

五郎　これで人數が揃ひし上は、

當助　藤右衛門どのゝ遺言狀を、

勢左　さあ〳〵、早く讀み上げて下さい。

五郎　わしの名宛で屆きしゆゑ、嗚呼がましいが讀み上げませう。

　卜これより誂への合方になり、上手に勢左衛門、臼右衛門、おらん、おしな、下手に林之助、當助、藤太郎蒙八、おくら、眞中に五郎右衛門件の遺言狀を取上げろ、皆々耳を澄まして聞くこなしよろしく。

「形見分遺言狀の事」一、我等儀商法上の都合に依り、先年此の地へ引移り開店以來運に叶ひ昌盛致し居り候所、此の度不慮の重病に臥し、藥用手當等屆き過ぎ候程手を盡し候へ共、全く定命の來りしにや冥土黄泉へ旅立ち候事是非もなき次第に御座候、たゞ〳〵殘念に心得候は、我等不幸にして孤獨の身ゆゑ家督を讓るべき、一子御座なく賴みに思ふ親族とても皆故鄕なる其の御地にて國を隔て候ゆゑ、末期の際に至り候ても他人のみの世話に相成り空しく相果て候は、約束事とは申したから遺憾の至りに御座候。」

　卜是れを聞き上手の四人態と愁ひの思入にて、

勢左　おゝ尤もぢや〳〵、嘸末期の際までも親類の者に、唯一目逢ひたかつたであらうわえ。

臼右　病氣と聞いて虫が知らせ、明日にも蒸汽で見舞に行かうと土產物まで買ひ調へ、

らん　えゝ、そんならあなた早まつて、もう見舞物を買はしやつたか。

しな　それでは半口母さんと、乘つたお金が無駄になり、

勢左　こつちもやつぱり、

四人　殘念ぢやわえ。

林之　して〳〵、お後は五郎右衛門さま。

當助　何と認めござりまするか。

藤太　承はるも涙だから、

蒙八　これから先が肝腎ゆゑ、

くら　お讀みなされて、

五人　下さりませ。

五郎　就いては、身寄り緣者の方へ垢附の形見にても差送り度候へ共、里數隔てし此の地の儀ゆゑ所有の金圓爲替手形にて差送り候間、御手數ながら名宛通り貴所より御分配下さるべく候、一、金千圓、右は一の親類貴所樣へ形見のしるしに差送り候間正に御落手下さるべく候、一、金五十圓右は太田町山本當助殿儀、我等此の地へ引移り候てより遠路の所每度心に掛けられ、新聞を送り下され候ゆゑ御禮として形見の印に些少ながら差送り候、次は本町の臼右衞門殿儀は親類とは申しながら、商法上の取引より入魂を結び候までにて、我等此の地へ引移り候ても音信不通に御座候間、我等病死の儀を御申し傳へ下され候のみにてよろしく、』

トこれを聞き臼右衞門氣を揉み出し、

臼右　これ〳〵五郎右衞門どの、其の遺言狀當てにならぬ、如何にこなたが讀まつしやるとて、おのれの田へのみ水を引き、此の臼右衞門に傳言のみとは、當ずつぽうを讀むのであらう。

五郎　いや、何もわしが讀めばといつて、勸進帳ではあるまいし、書いてないものが讀まれませうぞ疑はしくばこれを見さつしやい。

ト件の遺言狀を突附けて見せろ、臼右衞門よく〳〵見て、

臼右　えゝ、斯ういふ事と知つたなら、不斷手紙の音信でもしておかうもの、忌々しい。

勢左　扨これからがこつちの番だ、切つても切れぬ緣者の上に斯うして身寄りを二人まで、世話をして置く大親類。

らん　しかし初筆に記してある、一の親類が千圓では、

しな　たいがい相場が知れて居れば、百圓位でござんせう。

勢左　いや〳〵向うの身代は何萬圓と聞いて居れば、まだまだこんな事では。さあ〳〵、讀んで聞かせて下さい。

五郎　（又遺言狀を取り上げ、）『金百圓、右は以前本町に生絲問屋致し居り候倉田惣右衞門儀は、我等父の代より重緣の親類にて二ケ年以前病死後相續人娘くら事、境町

の伯母の方へ引取られ厄介人と相成り候由不便の至りに存じられ候間、當人身に附き候やう致し度く然るべき緣も御座候へば、貴所の御周旋を以て、緣邊の儀御取結び下さるべく候。』

らん　えゝ、そんなら姪のあのおくらに、百圓形見を下さるとか。

しな　成程これでは後の方でも、なか〳〵馬鹿にはなりませぬ。

くら　不便な奴と思召して、藤右衛門さまのお情お慈悲、有難い事でござりまする。

藤太　これから跡に殘りしは、林之助さまとこちらのお宅如何なる形見が記してあるか、現在使ひに參りし者すら、主人の深慮は分りませぬ。

勢左　無盡でいへば爰等が切分け、年のせゐゆゑ此の頃は耳がくわん〳〵してならぬ、大きな聲で五郎右衛門どの、高らかに讀み上げて下せえ。

五郎　『次に長崎へ移りてより、此方よりは書狀を出し、寒暖の見舞として國產なども度々贈り候へ共つひに一度返書も送らず、餘りと申せば不實意に存じ候ゆゑ、形見として金三圓、』

ト讀みかゝるゆゑ、勢左衛門氣の揉めるこなしにて、

勢左　これ〳〵五郎右衛門どの、それは大方林之助めであらうの。

五郎　いや、『邊見勢左衛門殿親子三人へ。』

三人　えゝ、

ト びつくりなし、

勢左　これ常談も時によるわえ。

五郎　いや、常談ではない。此の通りだ。

ト勢左衛門に見せる、勢左衛門よく〳〵見て、

らん　旦那どの、

しな　父さん、

勢左　えゝ忌々しい。

ト遺言狀を打ち附ける。

當助　して〳〵、これなる林之助どのへは、何程形見を分けられしか。

家八　親子三人三圓では、此の番頭はあきらめもの。

くら　後をお讀み下さりませ。

五郎　(件の遺言狀を取上げ、)『右不實意なる伯父に引替へ遠路の所長崎まで月々機嫌きゝの書狀を送り多年の間實意を盡し心に掛けくれ候は、壯年の身ながら行き屆き

し心底の提寳に感心致し居り候且又我等肉身分けし一人の甥に候間、惠府林之助へ形見として金二萬圓遣はし申すべく候。』

ト これを聞き勢左衞門思はず立上り、

勢左　なに、二萬圓、む〻〻〻。

ト びつくりして氣絶する、これにて皆々驚き、おらんおしな勢左衞門を介抱して、

らん　これ〳〵旦那どの、どうさつしやつた。

しな　こりや癲癇と見ゆるわいなあ。

業八　癲癇ならば草履がい〻。

ト 有合ふ上草履を取つて勢左衞門の頭へ載せ、手拭にて結へつけ、

親類　勢左衞門どのいなう。

らん　旦那どののいなう。

しな　父さんいなう。

ト 皆々にて呼び生ける、勢左衞門心附き、

勢左　いや死にやあしねえ、大丈夫だ〳〵。

臼右　そんならいよ〳〵林之助は、伯父の形見を二萬圓、

五郎　それ、此の通り相違はあるまい。

ト 突き附けて見せる。

らん　え〻今度は、ほんまに悲しくなつた。

しな　母さん、わたしも悲しいわいなあ。

ト 兩人めそ〳〵泣出す、

林之　いやも夢にも知らぬ二萬圓、お形見分を下さるとは、潰れし家名を立てよといふ、亡き伯父さまのお情お慈悲こんな嬉しい事はない。

藤太　（懷中より手形を出し、）大金ゆゑに爲替にて送る積りで此の如く、何れも手形で持參いたせば、御銘々にお渡し申しまする。

ト 林之助、おくら、當助へ渡し、

金三圓の爲替手形、勢左衞門さまお受取り下さりませ。

ト 勢左衞門の前へ出す。

勢左　え〻こんなものが、

ト 打附けようとするを、おしなおらん、モシと兩方の袖を引くゆゑ、勢左衞門思入あつて、

取らぬにましか。

ト 懷へ入れる。

五郎　いや流石は、門戸藤右衞門どの、

當助　賞罰正しきお形見分け、

藤太　潰れし惠府のお家も立ち、

林之　こんな嬉しい事はなく、
くら　お目出度いことでござりまする、
勢左　そつちは定めて目出度からうが、
らん　こつちは少しも目出度くなく、
しな　こんな悲しい事はない。
臼右　とんだ見舞の買損をした。
蒙八　それも日頃の强慾から、
臼右　やあ。
蒙八　いえ、お早くお歸りなされませ。
臼右　えゝ、おのれが言はずと、勝手に歸る。
五郎　どれ、親類一同、
當助　これにてお暇、
藤太　いたしませう。
林之　これなる手形は、五郎右衞門さま。
くら　あなたへお預け申しまする。
　ト兩人手形を出す。
勢左　いや、その手形はおれが預かる。
　ト取りに掛るを、五郎右衞門手早く引取り、
五郎　いや佛の遺言、
　ト手形と遺言狀を持つて立上るを木の頭、
反故にはなるまい。
　トにつたり笑ふ。勢左衞門、おらん、おしな手形が欲しきこなし、林之助おくらは嬉しきこなし。跡皆々引ばりよろしく、木琴入りの濱唄にて、

ひやうし幕

二幕目大切

横濱本町惠府新宅の場
同　境町邊見見世の場
同　波戸場臨海岸の場
同　惠府林宅婚禮の場

役名――惠府林之助、邊見勢左衞門、毛織五郎右衞門、壽無田宇津藏、雅羅田臼右衞門、代言人口上糊ス。落語家梅生、邊見番頭蒙八、惠府の若者藤七、同喜助、同錦藏、邊見若者織造、電吉、荷介。邊見の妻おらん、同おしな、おらんの姪おくら、下女おえい。

(惠府新宅の場)――本舞臺四間通し、常足の二重、更紗の暖簾口、左右の棚薩摩燒金入青模樣の花瓶、香

爐、茶碗、大皿などの書割、上の方一軒障子屋體、いつもの所門口、下の方喰違ひに土藏二棟、此前に惠府林と記せし用水の桶、總て横濱本町陶器店の體爰に喜助、錦藏散切紺の前垂手代のこしらへにて陶器を帳面に記し居る、藤七羽織着流しにて眞中に住ひ、下手に○□△の三人羽織着流しにて足附の鰹節箱を前へ置き扣へ居る、小僧三人へ茶を出して居る、此の見得、合方へ異國の鳴物を冠せ幕明く。

小僧　へい、お茶をおあがりなされませ。

三人　これは〳〵、有難うございます。

藤七　してお前さまは、何方からおいでなされました。

○　へいわたくしは辨天通りの、元濱十兵衛の手代の者でございまする、惠府林さまには御舊地へお立歸りで御開店は、まことにお目出度いことでございまする、わざとお祝ひ申しまする。

藤七　御丁寧に御祝ひ下され有難う存じまする、主人お目に掛りますでございますが、只今客來にございますればこれよりお禮を申し上げます、して又そちらのお二人さまは。

△　手前ことは太田町の、吉田七右衛門の代の者にござります。

□　又わたくしは馬車道の、櫻木五郎兵衛の代の者にござります。

△　御先代林左衛門さまとは、まことに御懇意にいたしましたゆゑ、

□　どうか相變らず先々通りお取引を願ひます。

△　これはほんの印ばかり、

□　お祝ひ申し、

兩人　上げまする。

藤七　舊地とは申しながら、いはゞ歸り新參ゆゑ手前方から皆樣へ、お願ひ申しに出ます所、まことに恐入りまする。

○　何れ主人もお祝ひに、出まするでございますが、

△　憚りながら旦那樣へ、

□　よろしく仰せ下さりませ。

藤七　申し傳へますでございまする。

○　左樣なればわたくし共は、

藤七　まだ宜しいではございませぬか。

△　先づお暇。

三人　いたしまする。

ト三人辭儀をなし、右の鳴物にて下手へはひる。

藤七　これ小僧、この箱を片附けておけ。

小僧　はい〳〵。

ト鰹節箱を片附ける。

藤七　今朝ッから祝儀の人で、何をする事も出來ぬ。

喜助　まことに人は正直なもので、家の旦那が零落中は詞もかけぬ其の人が、二萬圓のお形見で爰へ店をお出しになると、

錦藏　やれ以前の近附だの、昔は懇意にしたのといつて、うるさく人が出て來るが、みんな金が見當てだか、氣の知れたものではない。

藤七　世界は開化に進むほど人が薄情になるといふが、成程學者の言ふ通り、落目になれば往來で逢つても顏を背けるのに、

喜助　ろく〳〵顏も知らぬ者が、俄かに追從輕薄を言つて來るのも無理ではない、一夜の中に二萬圓の金がお手にはひつたからだ。

錦藏　これといふも日頃から不實な心が少しもなく、目上の人を敬つて遙々遠い長崎まで、よく音信をなされたゆゑ。

藤七　門戸さまからそれを褒め、二萬圓と、いふ金をお形見に下すつたのだ。

喜助　其の古への富でさへ、千兩取りが高だのに、二萬圓お手に入るとは、

錦藏　何といふ御運だか、斯ういふ所に仕へるのは、奉公人まで仕合せだ。

藤七　この御新宅のお祝ひに、諸方から來る遣ひ物、

喜助　鰹節玉子はいふに及ばず、

錦藏　鯛や海老の山をなし、

藤七　ほんに肴の喰ひあきだ。

ト右の鳴物にて花道より前幕の臼右衞門羽織着流し駒下駄にて、下男鰹節の箱を持ち出來り、花道にて、

臼右　こりや杢助、惠府林が本町へ見世を出したは向うの家か。

下男　へい、左樣にござりまする。

臼右　成程これは立派な家だ、かゝる見世をば開くといふも、長崎表の門戸どのから形見に寄越した二萬圓、斯ういふ金を持つ者に、近しくせぬのはこつちの損だ。

下男　此の間まで食客でおいでなされた惠府林さま、大した事でござりますな。

臼右　こんな仕合せな事はない。
　ト右の鳴物にて本舞臺へ來り、下男入替つて、
下男　へい、お頼み申します。
藤七　はい、どちらからおいでなされました。
臼右　雅羅田臼右衞門でござりまする。
喜助　これは雅羅田さまでござりまするか。
錦藏　さあ／＼お通りなさりませ。
臼右　左樣なら御免下され。
　ト合方になり内へはひり上手へ通り住ひ、
　御主人にはお内でござりまするか。
藤七　へい、宅にをりますでござります。
臼右　お内であらば臼右衞門がちよいとお目にかゝりたいと、御主人へ申して下さい。
藤七　畏りましてござります。
　ト奥にて、
林之　雅羅田さまがお出でとか、
　ト奥より林之助羽織着流しにて出來り、
　これは／＼臼右衞門さまには、ようこそお出で下さりました。
臼右　御開店のお喜びに昨日參る所であつたが、脱れ難き用事があつて、大きに延引いたしました。
林之　御繁用でござりませうに、わざ／＼お出でなされずとも、お使ひで宜しうござりますに。
臼右　いや／＼使ひなどでは失禮千萬、自身に上らにやなりませぬ、これは甚だ些少ながら、わざとお祝ひ申します。
　ト下男に持たせし鰹節箱を取り、
　こりや其の方は先へ歸れ。
下男　畏りましてござります。
　ト下手へはひる。臼右衞門鰹節の箱を林之助の前へ出す。
林之　新居をお祝ひ下さりまして有難う存じまする。
　ト辭儀をする、臼右衞門思入あつて、
臼右　扨此の度は御親父の跡を立てられ陶器の開店、以前にまさる御見世附き何れの棚もぴか／＼と、光り輝く赤繪の金入、目を驚かすお見世附き、まことにお喜び申しまする。
臼之　父林左衞門が大借に據ろなく家名を失ひ、所詮生涯開店は思ひも寄らぬことゝ存じ、暫く伯父の厄介になり徒に月日を過せしも測らず青雲の時到り、長崎表の門

戸さまが厚き惠みのお形見分けに、昔に歸りし陶器の開店、無や冥土で亡親が喜んで居りませう。
臼右 草葉の蔭でどの位なお喜びだか知れはせぬ、實に冥土ばかりでなく此の世の一家親類まで、世間の見得になりましてまことに嬉しうござりまする。
林之 御親類とは申せども遠い御縁のお前樣が、左樣に仰せ下さりますは、實に有難うござりまする。
臼右 いや血筋をいはゞ遠からうが、御先代とは近しくいたし、水魚の如く交はりました、以前に返りて親御同樣、どうぞ親しくして下され。
林之 それは縁家も少なきわたくし、お前樣よりわたくしから、親しくお願ひ申しまする。
臼右 どうした事がこれ迄は、つい御疎遠にいたしたが、これから先は火の中でも當家の事なら飛込む心、其の代りに又此方に困る事がござつたら、そこはどうか奮發して力になつて下さりませ、爰が親類の誼でござる。
林之 左樣な時がござつたら、及ばずながらお力になります心でござりまする。
臼右 それは千萬忝ない、斯樣な富家の親類を持つたはまことに身の仕合せ、いとゞ大きな此の體が猶々肩身が廣くなります。
林之 これ、お茶を早く持つて來ぬか。
藤七 只今差上げますでござります。
ト前の鳴物になり、菓子鉢に茶を出す、此の内花道より前幕の勢左衛門羽織着流し駒下駄、おしな紋附裾模樣綺麗なこしらへ、おらんも紋附の着附、おえい下女、何れも駒下駄、鐵造手代のこしらへ尻端折り草履にて反物を臺に載せしを風呂敷に包み、是れを持ち出來り、花道にて、
しな もし父さん、林之助さんのお家といふは、あの向うでござんすかえ。
勢左 おゝ二ッ藏のある家だ、丁度そつくり居抜きがあつて、地面ぐるみ買つたさうだが、まことに運のいゝ男だ。
らん ほんに家に居る時分も、なに一ッ拔目なく、癡といふのは朝寐であつたが、とう／＼果報を寐て待つたか。
えい 此の間までわたくしどもと、一つに御膳をあがつたお方が、
鐵造 居附地主の旦那樣とは、夢のやうでござりますな。
勢左 何にしろ、二萬圓の金を持つてる親類が出來たは、

おれが仕合せ。
らん　何でも今日はこぢ附けて、
勢左　あゝこれ、往來中でいらぬ事を、
しな　早く向うへ參りませう。
鐵造　それが宜しうござりまする。
　ト皆々本舞臺へ來て、門口へ來り、
勢左　林之助は內かな。
喜助　はい、在宿でござりまするが、
錦藏　何方さまでござります。
　ト門口をあける。
勢左　誰でもない邊勢だ。
林之　これは伯父樣でござりまするか。
臼右　おゝ、勢左衞門どのか、さあ／＼これへ通らしつやい。
勢左　誰かと思へば臼右衞門、もう摺込みに先へ來たのか。
　ト內へはひる。
らん　さあ娘、早くはひりや。
しな　わたしや何だか恥かしくつて。
らん　何の恥かしい事があるものかいの。

えい　さあ／＼おはひりなされませ。
　ト皆々內へはひり、勢左衞門おらんおしな三人上座に住ふ。
勢左　よい家とは話しに聞いたが、これ程とは思はなんだ、婆あどん見さしつたか、まことによい見世附だな。
らん　よいとも／＼申分のない見世附き、これを他人に取られるのは、いや、他人にあらぬ親類中、こんな嬉しい事はない。
しな　緣に繋がるわたしまで、お嬉しうござりますわいな。
鐵造　まことにお見事なことで、
兩人　ござりまする。
勢左　さうして、開店は何日さつしやる。
林之　やう／＼棚廻りが出來いたし、明日開店いたしますゆゑ、後程お屆けに上らうと存じました所でござります。
勢左　義理堅いそなたゆゑ、大方そんなことであらうと、家でも噂をして居たが、
らん　一人體で留守居はなし、嘸お困りと思つたゆゑ、
しな　三人連れでお悅びに上りましてござります。

林之　手前の無人をお察し下され、よくおいで下さりました。
勢左　これ鐵造、包み物を爰へ出しやれ。
鐵造　畏りましてござりまする。
ト風呂敷を解き臺に載せし反物を出し、
これは主人から御開店を、わざとお祝ひ申しまする。
林之　これは〳〵結構な品を、有難うござりまする。
錦藏　へい、お茶をお上りなされませ。
林之　これ、御酒の支度を早くしやれ。
錦藏　畏りましてござりまする。
勢左　あ、いや〳〵必ず構はつしやるな、他人ではない親類中に、馳走振りはいらぬことぢや。
らん　この間までこちの家に親子同樣にして居た中、決して義理立てには及ばぬわいの。
臼右　勢左衞門どの御夫婦の言はるゝ通り、われ〳〵は切つても切れぬ親類中、構はぬ方が嬉しうござる。
林之　なか〳〵以つて開店前、家內も取込みをりますれば、お構ひ申すことは出來ません。
勢左　その取込みを知りながら氣の毒ではあるけれど、ちとそなたへ密々に話したいことがあるが、若い者を暫く奥へ。
林之　畏りましてござりまする。
臼右　いかなることか存ぜぬが、御密々とあるからは、
勢左　いや〳〵貴樣は脱れぬ親類中、その遠慮には及ばない。
林之　皆のもの、暫く次へ。
藤七　はツ、御內々とござりますれば、
えい　わたしどもゝとも〴〵に、
鐵造　お奥へ一緒に參りませう。
喜助　さあ、おいでなされませ。
ト合方にて、藤七先に五人奥へはひる。
林之　して密々にわたくしへ、お話しとおつしやりますは。
勢左　いや話しといふは外でもない、そなたとおれは甥と伯父、元より深い緣なれど猶も深く緣を結ばゞ、死んだそなたの兩親も草葉の蔭で悅べば、又この世に居る伯父伯母の我等二人も悅ぶ譯、まだ此の外に大悅びに悅ぶもののある譯だが、そなたはおれの言ふことを、うんと言つて聞いてくれるか。
林之　どういふことか存じませぬが、さう皆樣がお悅びで

は悪いことではございますまい、よいことなら聞きますから、早うおつしやつて下さりませ。

勢左　それではきつと聞いてくれるな。

林之　して悦びとおつしやりまするは。

勢左　さあ、悦びといふは、これなる娘を、そなたの女房にやりたいのだ。

林之　え、悦びとおつしやりますは、其の事でございますか。

らん　丁度二人は年頃もまことに似合ひ相應ゆゑ、お前が家に居た折から末々二人を夫婦にせうと親父どのと言つて居たが、まだ運からぬことゝ思ひその儘に延ばしおいたが、斯うして見世を出すからは、無くてならぬ家の締り、早く女房を持つのが肝腎、見張るものが一人ないとどの位臺所に損がたつか知れはせぬ。

しな　所詮不束な者ゆゑにお前のお氣には入るまいが、疾うからわたしは女房になる氣で、いつぞやお前が二見さんで寫した寫眞をこの通り、肌身離さず持つて居るのは朝夕一つに居る心、いつ親達が言出して縁を結んで下さんすかと、淸正さまへ茶斷ちをして待ちに待つてをりましたわいな。

勢左　こりや娘ばかりぢやない、我等二人も同じこと末々妻す心ゆゑ、そなたの親父が死んだ後直ぐに家へ引取つて息子のやうにしておいたのだ、親なき後は伯父が親、わるい事は言はぬから娘と夫婦になるがよい。

らん　知らぬ所から氣心も知れぬ者を貰ふより、一つ所にゐた二人、見合ひもいらねば身許をも問合せるにも及ばぬ中。

臼右　成程これは好い御縁、脇から貰ふその時は互ひに見得も飾りもあれば大した物が掛ります、邊勢さんと惠府林さんは親類中の水入らず、見得も飾りもあらざれば、こんな御縁は又とない、幸ひ爰に臼右衛門が居たも不思議な御縁ゆゑ、此の媒人は親類中でわしら夫婦がいたしませう。

勢左　成程外へ頼まずにこなたが媒人してくれゝば、他人入らずの身内ばかり、此の林之助の親父といふは我が現在の弟ゆゑ、元より深い縁者なれど、親子となれば又一倍、縁が深くなることゆゑ、こんな悦ばしいことはない。

らん　両親のないお前ゆゑ、親代りにわたし等が替り〴〵家へ來て、萬事の事を搔廻し、いや萬事の世話をするか

らは、第一家の爲めによい。

しな　わたしも思ひに思うたことゆゑ、お前と夫婦になるからは、お上さんのする事は、こりや言はいでも知れたこと、中働きから小間使ひ、下女の代りもいたします。

臼右　まことに一家親類の緣に緣を重ぬるは、此の上もない目出度いこと、幸ひ今日は日柄もよし直に爰で極めるがよい。

勢左　そなたが貰ふ心なら、明日とも言はずこつそりと內祝言の杯して、娘を置いて行きませう。

らん　長々お前の世話をしたも魚心ありや水心、是非とも貰うて貰はにやならぬ。

しな　疾うから思ふ身の願ひ、どうぞかなへて下さりませ。

臼右　さあ〳〵早く惠府林どの、

勢左　色よい返事を、

三人　聞かして下さい。

ト皆々詰め寄る、林之助困る思入。

林之　伯父さま伯父さま始めとして、臼右衛門樣まで共々に、御親切なそのお詞、實は家を持ちましても、留守居がなくて困りますゆゑ。

勢左　それを察して押掛けに、

らん　娘を連れて來たのだ。

臼右　さあ〳〵、早く返事をしなさい。

勢之　さあ無くて困る所ゆゑ、直にも御返事いたしたけれど、其の御返事のならぬといふは、所々方々言込みがござりますゆゑ、其の方を斷りませねば御返事がいたし難うござります。

勢左　おゝ二萬圓の身上ゆゑ所々方々から言つて來ようが、それはみんな金が目當で慾張つた奴ゆゑに片ツ端から斷るがいゝ、おれなどのは金に構はず、親類中で勸めるのだ。

らん　知つての通りこちの家も、萬福長者といふではないが、その日に困る家でもなければ、何萬圓あらうとも、決して金には目を掛けませぬ。

しな　今お母さんの言ふ通り、わたしも金には目は掛けませぬ、押掛け女房に今日來たは、男振なら器量なら人に勝れたお前ゆゑ、それが目當でござんすぞえ。

臼右　そりや我等とても同じこと、今勢左衛門どのも言はれたが所々方々から言込むは、みんな二萬圓の金が目途、それに引替へ我々は金には少しも目は掛けぬ、たゞ親類

中の濃くなるのを悦んでお世話するのだ。
林之　家を買つたも昨日今日、まだ開店もいたさぬのに所所方々から言込む嫁は、皆二萬圓の金が當て慾張連でござりますから、末々頼みになりませねば、迂濶に相談はいたしませぬ。
勢左　慾張連とは事變り、こちらなどのは親類合、一切金に目をかけず、
らん　末々思ふ伯父伯母が、親切づくの此の縁談、
しな　どうぞ貰つて下さるやう、
臼右　媒人役の我等もとも〲。
勢左　よい返事をば、
四人　いたして下され。
林之　直にも屹と御返事を申し上げたうござりますが、慾氣を離れた五郎右門樣から、申し込みがござりますれば、此のお話しを致しませねば御返事がなりませぬ。
勢左　その五郎右衛門も親類中、とや斯ういふ譯もなし、
らん　後で言うても濟むことなれば、
しな　後とも言はず今爰で、
臼右　強談めくが、此の返事を、
勢左　どうぞ早く聞かして、
四人　下さい。
林之　そりや何樣おつしやるとも、どうも只今お返事は。
勢左　それでは折角伯父伯母が、
らん　爲めをば思ふ親切を。
しな　お前は無足にしなさんすか。
林之　中々もつて、さういふ譯では。
臼右　さうでなくば、貰はつしやるか。
林之　さあそれは。
勢左　但しは心にかなはぬか。
林之　さあそれは。
らん　貰うてくれるか。
林之　さあ、
四人　さあ。
五人　さあ〱〱〱。
勢左　否やの返事を、
四人　聞かして下さい。
ト四人詰寄る、林之助困る思入、此の内下手より宇津藏羽織袴下駄、梅生長き羽織木綿の襠高袴下駄、代言人のこしらへにて出來り、門口にて内を窺ひ思入あつて、

宇津　いや御免下さい、惠府林さんのお宅はこちらでござりますか。
林之　はい、惠府林は手前でございます。
宇津　左樣なら、御免下さい。
　ト門口を明け內へはひる、林之助見て、
林之　何方かと存じましたら、須無田宇津藏樣でござりましたか。
宇津　まことに久々お目に掛りませぬ。
白右　いや何方樣か存じませぬが、わたくしどもは皆親類。
らん　內輪の者にござりますれば、御遠慮なされず、先づ先づこれへ。
宇津　いや、餘りそれでは高上り、
勢左　いえ、お構ひなされませず、
らん　これへお通り下さりませ。
宇津　然らばどなたも御免下さい。
　ト上手へ通り、梅生シヤッポを持ち、
梅生　甚だ失敬。
　ト辭儀をなし同じく上手へ通り、宇津藏の側へ住ふ、勢左衞門皆々は後へ下り樣子を窺ふ。

宇津　承はれば惠府林殿には大した金がお手に入り、昔へ返つて御當所へ陶器の開店なされしは、まことにもつてわれ〳〵も、喜ばしいことでござりまする。
林之　お聞き及びもござりませうが、長崎表の伯父が歿し、則ち惠みの形見金でこれへ宅を持ちましたが、親共からの御懇意ゆゑ疾くにもお宅へ上りまして、委細をお話し申さねばなりませぬ所でござりますが、何を申すもわたくし一人、それゆゑ御無沙汰になりました。
宇津　實は四五日あとからおいでをお待ち申しましたが、何の御沙汰もござりませぬから、今日上りましてござりまする。
林之　こちらから上らぬうち、あなたからおいでを蒙つては、まことに申譯がござりませぬ。
宇津　前以ておいでがあつたら、御相談づくに致さうと思つてをつた所なれど、おいでがないゆゑ今日はお掛合に參つてござる。
　ト宇津藏きつと言ふ、林之助當惑の思入、勢左衞門、思入あつて、
勢左　これ〳〵林之助、二萬圓を目當にするあなたも嫁のお口入なら、親類共から貰ひますと、

らん　早くお斷りを申すがよい。
林之　いえ／＼、左樣な譯ではござりませぬ。
白右　そんなら嫁ではなかつたのか。
しな　それでわたしも落着いたわいな。
宇津　爰においでの皆樣は、御親類の方とあるからは、御遠慮申すに及ばぬから、是れにてお話し申します。
勢左　どういふ事か存じませぬが、親類中にござりますれば、
らん　御遠慮なさらず何なりと、
白右　これでお話し。
三人　なされませ。
宇津　（思入あつて、）今改めて言はずとも知つて居なさる事だけれど、お前の親父の林左衛門殿へわたしが貸した一萬圓、利息もろく／＼取らぬうち思ひ掛けなく死なれてしまひ、地面家作有代物殘らず外へ書入の抵當に取られて家は退轉、家内の衆も散り／＼に催促をする當もなく、一萬圓のその抵當に紙一枚を持つて居たが、紙魚に喰はれてしまふことかと思つて居たらお前の手へ、二萬圓といふ金がはひつたことを聞いたゆゑ、貸した時から今年までの利子を計算して見たら、一萬圓から上になるが、端たは負けて二萬圓、そつくり返して貰ひたい。
林之　それでは親父がお借り申した一萬圓のあの金は、一萬圓餘の利子が積り、二萬圓になりましたか。
宇津　これまで一度も催促せず、長々待つた其の代り、又貸すとても一度は元利揃へて二萬圓、器用に返しておくんなせえ。
林之　親父が死んで負債の爲、惠府の家名も退轉なし、暫く緣家の厄介になつてをります流浪中、遂に一度御催促をなされたことのないあなた、實に感心いたしました、それゆゑ元利揃へましてお返し申すでござりまする。
宇津　むゝ、それぢやあ元利二萬圓、揃へてお返しなされますか。
林之　へい、お返し申しまするでござりまする。
宇津　流石は親に孝心と噂に聞いた林之助さん、元利揃へて二萬圓後とも言はず返すとは、わたしもお前に感心した。
梅生　とやかう言はず壽無田氏の助言を仕ようと思つて來たが、元利揃へそつてくりと返すといふは珍らしい、こんな人が澤山あると、代言人は揚つたりだ。
林之　何も珍らしいことはござりませぬ、親父が借りたを

子が返すは、こりや當り前でござりまする。

ト此の内下手で勢左衞門始め四人顏見合せうなづきあつて、

勢左　これ〳〵林之助ちよつと來やれ。

ト林之助を下手へ連れて來り、

さつきから掛合を默つて聞いて居たが、何で親父が一萬圓あなたにお借り申したのだ。

らん　そんなに借りのあることは、ついにこれまで聞かなんだが、

臼右　いつたい借りたその金を、何に親父が遣つたのだ。

林之　堅い人ではござりますが、米相場が大好きで上ると見込んで買ひ込んだ米が非常の下りとなり、今日は賣らう〳〵と待つて居るうちずん〳〵下り、遂に彼方に一萬圓借りるやうになりましたが家藏まで抵當に入れる程ゆゑ金はなく、借用證を入れましてお借り申した一萬圓、元は相場にかかりまして損した金でござります。

勢左　それでは借りたは米相場のだれへ廻つて損した金か、假令一萬圓が二萬圓でも正金で借りたといふ譯ではなし、いはゞ博奕も同然な米相場の借りなどは、いくらあつても怖くはない。

臼右　そんな借りを今が今、返すには及ばない。

宇津　もしそこに居なさる親類方、お詞の中でござりますが、返すには及ばないとはどういふ譯か知らないが、御制禁の博奕で勝つた金なら知らぬこと、假令負勝はあらうとも天下晴れての米相場、金で貸したも同じこと、それも大きな勝負をするから一萬圓といふ金だが、居候に居る人に催促をしても無駄だから今日まで默つて捨てておいたが、昔にまさる陶器の開店、二萬圓といふ大金が手にはひつたといふ事を、聞いたから取りに來たのだ、返さなくつていゝ金なら返すにやあ及ばねえ、出る所へ出て取つて見せよう。

林之　いえ〳〵これは私が只今お返し申しますから、お腹をお立て下さりますな、全く親父が借りました金に相違ござりませねば、假令これなる親類共が何やう申しませうとも。

宇津　それぢやあ金を返しなさるか。

林之　元利揃へて二萬圓、お返し申しますでござりまする。

ト勢左衞門又林之助を引張つて來て、

林之　これ〳〵林之助、親の借りた金だから子が返すは當

り前だが、餘りといへば馬鹿正直、これが十か二十の金なら返すのもよいけれど、元金といふ一萬圓は空米相場で損した金、まだその上に一萬圓、たゞ取られる利息まで、そなたは揃へて渡す氣か。

らん　形見に貰つた二萬圓、それで地面や家作を買ひ、見世の仕入れや何やかや、

しな　大したお金が入りましたらうに、

臼右　元利揃へて二萬圓、どうしてこなたは返す氣だ。

林之　一萬圓の爲替手形に地面家作有代物、そつくり附けて渡す積り。

宇津　さういふお前が料簡なら、假令二萬圓にならずともこつちも不足で料簡しませう。

勢左（これを聞き思入あつて、）それではこなたは二萬圓に、借りた地所から家藏まで、そつくり渡してしまふ氣か。

らん　こんな馬鹿げたことはない。

臼右　こりやあわたしに任しなせえ、一萬圓の借高へ半金入れゝば結構な、言分なしの掛合だ。

林之　いえ〳〵それでは濟みませぬ、親の借を子が濟すは、こりや當然でござりますから、揃へてお返し申します。

勢左　當然だらうが何だらうが、古い借をそつくりと返すものか。

らん　こりや代言人の眞似をする、臼右衛門さんに任しなせえ。

臼右　おれが引受け裁判所で、半金濟しにして見せよう。

林之　そりやさうでもあらうけれど、不意に貰つた二萬圓貰はぬ昔と思ひますれば、親父が借りた一萬圓を返しただけが儲けゆゑ、悔む所はござりませぬ。

勢左　えゝ、聞けば聞くほど馬鹿〳〵しい、貴樣はそんな慾のない時世に合はぬ料簡だから、悔む所がないか知らぬが、娘をやつて其の金をおれが自由に、いやさ、おれが金ではないけれど、

らん　他人にあらぬ親類中、損をするのを見ては居られぬ。

臼右　何でもこれはおれが引受け、一裁判受けねばならぬ。

ト三人きつと思入、林之助は困る思入。

宇津　それぢやあお前方は、借主が返す金を横合から返すなと言ひなさりやあ、言はずと知れた故障人お前方が願はずとも、おれが方から願ひ立て、御用狀を附けてやるから家へ歸つて待つて居ろ。さつきから聞いて居りや

あゝおれを白癡だと思つたか、代言めかした事を言つて、いやに脅した事を言ふが、平假名付の用書を手本に讀みのくだらぬ漢語の文面、筋が立たねば書く字さへ横に寐て居る鐵釘流、裁判所へ出て突き戻され書直さうにも根が盲目、字引がなければまご／＼と、杖に離れた座頭同然、走らぬ筆の探り足何處等が鍼の利所だか急所を知らぬへつぽこ代言、返す金を返すなと惡く採んで邪魔をすりやあ、故障の廉を言ひ立つて闇い所へ入れてやるぞ。

ト宇津藏思入にて言ふ、梅生前へ出て、

梅生　今日僕が壽無田氏と同道いたして參つたのは、とやから言はゞ有無を論ぜず、出訴いたす心で參つた。年中斯うして大金を盛に貸せる壽無田氏、出訴の絶ゆる間がないから斯くいふ口の上糊す委任を受けて原告人、これまで被告に一度でも說破された事のないのは、產れが士族に幼年より學資を費し書生となり、勉强なして漢學から英獨二國の學に亙り、佛の民法を心得て府廳の試驗を受けしゆゑ忽ち免許の代言人、北冥社の社員となれば二等と下らぬ僕が腕前、されば各區の分署から勸解又は裁判所、何處へ行つても先生と代言社會で立てられるは、條理を立てゝ義務を盡すから、今こなた衆が故障を言へば、それを書き立て出訴なすが今日僕が則ち職掌、片ッ端から勸解へ呼出してやるから待つて居ろ。

ト梅生立掛るを林之助留めて、

林之　そのお腹立は御尤もだが、先づ／＼お待ち下されませ、假令これなる親類共が何と申しませうとも、親父の借りゆゑわたくしが耳を揃へてお返し申せば、先づ／＼お待ち下さりませ。

梅生　そりやあお前が條理を立て、借りた金さへ返しなさりやあ、何ぼ僕が生業でも好んで出訴いたしませぬ。

宇津　第一お上へお手數を掛けるのが恐れ入るから、待てといふなら待ちませう。

林之　唯今お返し申しますから、暫くお待ち下さりませ。

勢左　これ林之助、どうでもそれでは二萬圓、元利揃へて返す氣か。

林之　へい、親父の借りた金ゆゑに、どうも返さにや濟みませぬ。

らん　濟まぬというて有金から、地面家藏そつくりと渡してしまつたことならば、

しな　又これからは一人身で、流浪なさらにやなりますまい。

臼右　あまりといへば馬鹿げた話し、是非ともわたしに任せさつしやい。

林之　いえ〳〵何とおつしやつても、お前方には任されませぬ。

勢左　人は正直がよいとはいへど、餘りといへば正直過ぎ、

らん　馬鹿に劣つた、

しな　惠府林さん。

臼右　えゝ、さりとは歯痒いことだなあ。

ト皆々悔しき思入、此の内林之助は奥へはひり手箱を持つて出來り、中より手形證文紙幣を出し、

林之　左樣なれば壽無田樣、一萬圓の爲替手形に居宅の地券、陶器の控へ、紙幣の殘りが千二百圓殘らずお渡し申しますから不足の所は舊來の誼にお負け下さりませ。

宇津　おゝ負けますとも〳〵、爲替手形で元金の一萬圓がそつくり返れば、千二百圓の有金に地面家作に有代物、これ丈が只儲け、不足はいくらあらうともさらりと負けて證文は、お前へお返し申します。

ト宇津藏、勢左衛門皆々へ見せびらかす、四人は悔しき思入、宇津藏紙入から一萬圓の證文を出し林之助へ渡す。梅生感心なし、

梅生　これまで僕も壽無田氏の、委任を受けて貸先きを相手取つた事があるが、先づ被告から掛合へば第一等が半金濟し、二等が三ッ割三分の一、三等四等は五分の一、僅かな金の入金に跡は月賦か年賦の濟方、二萬圓といふ金をそつくり返すは前代未聞、實に身代限りをする世間の太い借方に、爪でも煎じて呑ましてやりたい。

ト林之助證文をいたゞき、

林之　嘸やこれまで親父樣が、草葉の蔭でこの借りがお心掛りでございましたらう、唯今元利返濟いたせば、お悦び下さりませ。

ト勢左衛門四人は呆れし思入。

勢左　借りたものを返すといふは、まことに道であらうけれど、先づ半金か三ッ一分、

らん　大概相場のあつたもの。

しな　お金は元より地屋敷まで、

臼右　殘らず渡してしまふとは、

勢左　餘りと言へば、

四人　馬鹿々々しい。

ト藤七、喜助、錦藏、鐵造、おえい出來り、

藤六　唯今奥で御様子を、承はりましてござりますが、御先代の旦那様が、
喜助　お借りなされた其の抵當に、地面家藏お金まで、
錦藏　お渡しなさるとあるからは、お抱へなされたわたくしどもは、
林之　氣の毒ながら今日限り、暇をやらねばなるまいわい。
藤七　御縁あつて良いお店へ、御奉公しましたと、
喜助　悦びました甲斐もなく、
錦藏　僅かなうちにお暇とは、
三人　本意ないことでござりまする。
ト三人手を突き別れを惜しむ思入。
鐵造　内の旦那もお孃さまを、嫁にやらうとおつしやりましたが、お家がなくてはこれも破談、
えい　爰をば早くお開きに、なされましたがようござりまする。
勢左　おゝ目當に思つた二萬圓の、金がなければ何を當に、可愛い娘がやれませう。
らん　まだしも遣らぬ其のうちゆゑ、これきり破談にすれば濟むが、
しな　來てから後であつたらば、仕様模様もない所。
臼右　わしも媒人せぬが仕合せ。
林之　伯父様始め皆様へ面目もない事ながら、又もや元の身の上に零落なせし林之助、どうぞこれから親類の誼をもつてわたくしの、力におなり下さりませ。
勢左　その親類は今日限り、餘りと云へば馬鹿々々しい、こなたに愛想が盡きたから、これから甥と思はねば、必ず伯父と思つてくれるな。
らん　目當の金がない上は、最早こなたに用はない、決して家へお出では御無用。
林之　そりやさうでもござりませうが、切つても切れぬ親類ゆゑ。
臼右　その親類は嚮にも是れから言つて下さるな、折角肥つた臼右衛門肩身が狹くなりますわ。
林之　それではこれからわたくしの、力になつては下さりませぬか。
勢左　誰が力になるものだ、人を恨むな心柄だぞ。
ト憎く言ふ。
林之　はて、是非もないことぢやなあ。
ト林之助腕を組み、ちつと思入。

宇津　さあ、此の家は一萬圓の抵當に取つた上からは、今日からしてはわしが家、お前方には用はないから、早く歸つてくんなせえ。
勢左　お、、歸らないでどうするものだ、居ろと言つてもこんな家に、
臼右　誰が長居をするものだ。
しな　さあ母さま、早く歸りませう。
らん　お、歸らうとも〳〵。
　ト立上り、
いやうつかりとは歸られない、先刻祝ひに持つて來た、あの緋縮を返して下さい。
宇津　いや〳〵あれは一萬圓の、高のうちゆゑ返されねえ。
椿生　逢て欲しくば十圓も、金を置いて行くがよい。
らん　十圓出せば新規に買へます。
鐵造　所詮こんな因業な人に言つても無駄なこと。
えい　早くお歸りなされませ。
　ト合方にて勢左衞門先きに皆々附き、花道へ行き、
鐵造　とはいへ、餘程な、
えい　金目な品を、

臼右　利息の抵當にしてやられ、
しな　大阪天滿の唄ではないが、
らん　こんな酷い目に逢うたことは、
勢左　緋縮一反たゞ捨てた。
　ト合方、異國の鳴物にて皆々花道へはひる、林之助思入あつて、
林之　もう四時過ぎでござりますから、暮れぬ其のうちわたくしはお暇いたすでござりまする。
宇津　斯う貸借の片が附けば、昔馴染の惠府林さん、今夜は一杯呑みませう。
椿生　知つての通り壽無田氏は俠客肌の氣性ゆゑ、お前の爲めにもならうから、今夜は泊つておいでなさい。
林之　有難うはござりますが、此の證文を菩提所へ持つて參つて石碑へ手向け、草葉の蔭の親父さまへお目に掛けたうござります。
藤七　そりやさうでもござりませうが、明日それを御菩提所へ、
喜助　お持ちなされましたとて、
錦藏　お遲いこともござりますまい。
林之　いや〳〵これは少しも早く、お目に掛けるが親父へ

孝行、日には見えねど心の內に、嘸やお悅びなされませうと、思へば早く持つて行きたい。

宇津　親孝行のお前ゆゑ、さういふ心で居なすつては所詮止めても止まるまいから、これから直においでなさい。

梅生　身の振方の御相談があるなら、明日出直して、ゆるりとおいでなさるがよい。

林之　御親切なる其のお詞、いづれ再び上りまして、お願ひ申すでござりまする。

藤七　それではこれより、

三人　あなたは直に、

林之　暮れぬそのうち菩提所へ、

宇津　左樣なれば惠府林どの、

林之　これでお別れ申しまする。

ト唄になり、林之助しを／＼と花道へはひる。

藤七　どれ、わたくし共も荷を片付け、これから宿へ、

三人　下りませう。

宇津　いや貴樣達は置据ゑに、これからわしが抱へませう、

喜助　それではこの儘あと／＼へ、

錦藏　お使ひなされて、

三人　下さりますか。

宇津　一萬圓の利息の抵當に地面家藏有代物、そつくりわしが取つたけれど、人がなくては困るから、貴樣達を改めて今日からわしが使ひたいのだ。

梅生　商人衆とはいひながら、一厘錢から取上げるけちな稼業と事替り、ちよつとしても百圓から何千圓といふ高の商ひをする米の相場師、惡いやうにはなさるまいから、出精して奉公しなせえ。

藤七　わたくし始め二人とも、中年者にござりますゆゑ、

喜助　半途でお暇が出ましては、まことに困り切ります所。

錦藏　跡へお使ひ下さりますれば、何より有難う、

三人　ござります。

梅生　時に旦那、お祝ひに一杯どうでござります。

宇津　おれも丁度呑みたい所、何ぞ肴を言ひ付けてくれ。

藤七　いえお肴ならば諸方から、貰つた魚が臺所に山ほど積んでござります。

喜助　幸ひ少しはわたくしが、料理心がござりますゆゑ、摑み料理にいたします。

錦藏　お酒も樽でござりますれば、先づ今日は有合で、

藤七　目出度くおあがり、

三人　なされませ。

宇津　それぢやあ骨はぬすまねえから、酒の支度をして下せえ。

三人　畏りましてござりまする。

　ト合方にて三人奥へはひる。梅生四邊を見廻し、

梅生　もし旦那。

宇津　何だ。

梅生　まことに首尾よく行きましたが、お禮はいくら下さいます。

宇津　さうさ、いくらやつたものだらうか、先づお前の禮は片手だな。

梅生　なに、片手禮を下さいますえ、五百圓ではあるまいね。

宇津　慾張つたことを言ひなさんな。

梅生　それぢやあ五十圓下さいますか。

宇津　どうして／＼、もつと下だ。

梅生　それより下では五圓かね。

宇津　まだ／＼。

梅生　五百疋といふのは今はないか。

宇津　おれが片手は五十錢だ。

梅生　え、たつた二分かね。

宇津　何も驚くことはない、一枚貰へばたつた二分だが、十枚貰へば五圓だぜ。

梅生　むゝ、百枚貰へば五十圓、えゝ、忝けない。

　ト宇津義煙管で灰吹を叩く、梅生ヲッと定九郎の鐵砲で打たれし思入。

宇津　とんだ五段目だ。

　ト異國めいた唄にて道具廻る。

（邊勢宅の場）――本舞臺序幕邊勢宅の場の道具、爰に以前の勢左衞門、おらん、おしな住ひ、前の唄にて道具留る。

勢左　婆アどん、馬鹿々々しい目に逢つたぢやないか。

らん　馬鹿々々しいの、馬鹿々々しくないのと、此の間からのことを考へて見ると、夢ぢやあないかと思はれますよ。

勢左　いつたい長崎から屆けて寄越した、形見別けが不當な割方、いくら音信をよくしたとて二萬圓とは大したくれやう、おれが所へ遺言狀を持せて寄越せば開封して、

調合して置いたけれど、流石は門戸も目が高い、正直物の五郎右衛門へ當てゝ來たゆゑ仕方がないわえ。

らん　親類一同立合で居候の林之助へ、二萬圓の形見分け、餘りといへば氣の惡さに、

勢左　このおしなを女房に持たせ、そなたとおれが親顔で家の中を掻廻し、二三千圓ずり込まうと覘つた的の矢が外れて、

らん　あの相場師の宇津藏に一萬圓の爲替手形に地面藏までたゞ取られ、こんな悔しいことはない。

しな　わたしもあそこの嫁になつたら、頭の物から衣類手道具心のまゝにこしらへて、今日は芝居明日は花見と榮耀をしようと、思ひの外、樂しみ損をしましたわいな。

勢左　まだしもおれが仕合せは、昨日行つて相談極め內祝言でもさせたらば、聟は我が子と林之助をまた／＼家へ置かねばならぬ。

らん　どうしてあんな間拔になつたか、こちの家に居た時分は目から鼻へ拔けるやうな、利口ものであつたのに、古借金をまる／＼に返すといふは馬鹿々々しい、然し男は立派ゆゑ、おしなは殘り惜しからう。

しな　何であんな意氣地なしが殘り惜しうござんせう、二萬圓といふお金があるから行く氣でござんしたが、もう斯うなつては林さんと夫婦になるのは厭でござんす。好い男を亭主に持つてしがない暮しをするよりか、どんな醜い男でもお金のうんとあるのが好き、わたしやお金にや惚れるけれど、男に惚れはしませぬわいな。

らん　流石はわたし等二人の娘、金にや惚れるが男には惚れぬといふは感心な、斯うも親に似るものか。

勢左　世間の娘は十に八九は男選みをするものだが、金でなければ惚れぬとは、まことに見上げた心立て、末頼もしい料簡だ。

らん　詰らぬ男をこしらへて逃げ隱れした其の果てが、此の世で添はれぬことならばと、心中をして死ぬ者などには、此の上もないよい手本。

しな　お金に惚れて二目とも見られぬ男を亭主に持てば、女狂ひの氣遣ひなく、却つて氣樂でござんすわいな。

らん　然しあんまり醜い男を、亭主に持たすも可愛さう。

しな　いえ／＼わたしや厭ひませぬ、業平さんでもひよつとこでも灯りを消したその時は、別に替りはござんせぬ、お金のあるのと無いのとは一目にそれと知れますれば、わたしや男にや惚れませぬ、お金のあるのに惚れま

すわいな。

勢左　お〻金に惚れるは開化進歩、さて〳〵開けた娘だなあ。

ト謡へ異國の唄になり、花道より以前の林之助悄々として出來り、花道にて、

林之　まことに人の貧福は天より授かる所にして、一度我が家退轉なし、伯父の方に身を寄せて果敢ない月日を送りしも、思ひがけない長崎の門戸さまの形見分けに立派の姿に立至り、やれ嬉しやといふ間もなく親の古借を取立てられ、又もや元の身となりしはよく〳〵金に見放されしか、あ〻生き甲斐のない事ぢやなあ。

ト門口へ來り、内へ入らうか止さうかといふ思入あつて、小聲にて、

はい御免下さりませ。

勢左　誰か表へ來たやうだ。

らん　はい、何方でござります。

ト門口を明け林之助を見て、

や、林之助か。

林之　はい、左樣でござりまする。

勢左　もうおれの家に用はないのに、何しにこなたは爰へ來た。

林之　お禮に上りましてござります。

らん　禮とは、何の禮に來たのぢや。

林之　數ならぬわたくしを、お二人さまのお眼識で、お話しありし御縁談、まことに身に取り何程か有難うござります。

勢左　その縁談が、どうしたといふのだ。

林之　古借の抵當に家藏を渡して家がござりませねば、嫁にはお貰ひ申されませぬが、是れからどこへか御厄介にならねばならぬ林之助、お二人さまのお眼識で不束者ではござりますが、聟になされて下さりませぬか。

勢左　何だ、聟にしてくれぬかとは、そりや誰がことだ、晝寐でもして來たか、顔でも洗つて來るがよい。

らん　そんな寐惚けた散切を誰が聟にするものだ、さつき口の酸くなる程二人で勸めたその時に、外から澤山言込みがあるとそなたは言つたぢやないか。外へ行つて聟になれ、おらが所では眞平だ。

林之　お腹立ちは御尤も、申し譯もござりませぬが、先刻御覽なされる通り親父の借りを返しまして、身に一錢の貯へなく、實に路頭に迷ひますから親類合の誼を以て、

勢左 どうかお貰ひ下さりませ。

勢左 親類合の誼といふが、おれを伯父と思ふなら二萬圓貰つた時、なぜおれに預けないのだ。親父の古借があらうとも、二割も毀で入金して跡は年賦に掛合つて、どうでもかたの附くことだ、それを親父の借だから殘らず返さにや濟まぬなど、馬鹿律義の道立てして家藏地面代物までそつくり渡すといふやうな、そんな間拔けを邊勢が、何で聟にされるものか。

らん 親父どのも此の婆も金がなければ何を目當に、こなたに娘をやるものか、第一わたし等二人よりこなたは娘の氣に入らぬわ。

林之 そんなら最前、疾うからしてわしと夫婦になりたいと、言つたはまことでなかつたか。

しな わたしがお前に惚れたのは、男振ではござんせぬ、二萬圓のお金が目當、それがなければ何でまあ、お前などに惚れませう。

らん 娘が斯ういふ心だから、所詮聟には貰はれない。

林之 (呆れし思入、)さういふ事なら仕方がないが、先刻あれ程御親切に、おつしやつて下さいましたお詞がござりますゆゑ上りましたが、家藏までも失ひし足らはぬ心に愛想が盡きたとおつしやいますれば仕方がない、左樣なれば緣談はない御緣とあきらめまして、これから一先づ何れへか立退きますでござりまする、路用の當もござりませねば、親類合の誼にてどうか十圓私に、お貸しなされて下さりませ。

勢左 なんだ親類合の誼を以て十圓金を貸してくれろ、いや途方もない事を言ふ奴だ、十圓は扨おいて一圓も貸されない、決しておれを伯父だと思ふな、おれも甥だと思はぬぞ。

林之 それではあなたは伯父甥の、切つても切れぬ深い緣を、

勢左 金があるなら親類だが、無ければあかの他人附合、決してあると思つてくれるな。

林之 そりやさうでもござりませうが、今となつては何處といつて便る方なき林之助、どうか不便と思召し、十圓出來ずば五圓でも、お惠みなされて下さりませ。

勢左 假令僅か一圓でも貸さぬといつたら貸さぬから、口數きかずと早く歸れ。

らん 何處へなりとも勝手に行つて、人らしい身になつたらば、それは五圓でも十圓でも貸すまいものでもないけ

れど、その有樣では百も御免だ。

しな　大した金を持ちながら、殘らず人に渡してしまひ、そんな僅か五圓のその金を借りに來るとは意氣地なし、そんな人とは思はなんだが、夫婦にならぬがわたしの仕合せ。

勢左　ぐづ／＼せずと早く歸れ。

林之　そんならどうでもわたくしへ、お貸しなされて下さりませぬか。

勢左　えゝ、百の錢でも貸せるものか。

林之　餘りと言へば、

ト悔しき思入、奧より前幕の蒙八出來り、

蒙八　これ／＼林さん、樣子は奧で聞きましたが、長居をすればお前の恥、あゝお二人がおつしやつては、所詮貸しては下さらぬから、早く東京へでも行きなすつて、車でも曳きなさるがよい。

林之　伯母でない甥でないとおつしやいますれば、もう再びお家へ參りはいたしませぬ。

勢左　おゝ、そりや見上げた、いゝ料簡。

らん　必らず家へ來てくれるな。

蒙八　さあ／＼早く行きなさい、長くぐづ／＼して居るうち、巡査さんの目にかゝると、こちらの家も迷惑します。

林之　只今參りますでござります。

ト立ち上り行きかけるを、

勢左　これ林之助、何處へ行くか知らないが、もし是れから喰ふに困り、死にでもするなら一思ひに、海か川へどんぶりやれ。

らん　親類合に家の前へ、ぶらりなどは眞平だぞ。

林之　それほどまでに、わたくしが。

ト立ち戻るを蒙八留めて、

蒙八　あもし、憎まれ口は不斷の常、聞き流しになされませ。

林之　(氣を替へ、)そんならお暇いたします。

蒙八　さあ／＼、早く行きなさい。

林之　思へばこれまで長い間、厚いお世話になりました。

ト立ち戻り辭儀をする。

勢左　えゝ口數きかずと、

勢ら　早く行きやれ。

林之　參りますでござります。

ト門口へ出で思入あつて、

情を知らぬ人達ちやなあ。

ト唄になり、林之助よろしく思入あつて花道へ入る。

蒙八後を見送り門口をしめる。

勢左　おゝ蒙八、よく林之助を追ひ出してくれた。

蒙八　爰へ出ますも如何と存じ、樣子を聞いて居りましたが、餘り果てしがござりませぬから、ちよつと仲裁にはひりました。

らん　そなたが出ずば未だぐづ〱、なか〱歸ることぢやない。

勢左　子供の内から目から鼻へ拔ける程の利口であつたが、どうしてあんな間拔になつたか。

らん　あの鹽梅では喰ふに困り、仕舞は身でも投げませう。

しな　ほんに男と產れながら、意氣地のない人でござんすな。

らん　あんな間拔けな男でも、形見の金がそつくりあれば、

しな　それを目當に女房になれど、

勢左　金がなければ七里けつぱい、

しな　摘んで捨てるげじ〱同樣、

蒙八　おとゝひ來いでござりますな。

勢左　あゝ歸つた後は鼻花だ、はツくしよ。

ト勢左衞門嚔をする。

らん　おや、風邪氣かえ。

勢左　なに、彼奴が惡く、

ト肩を叩くを道具替りの知らせ、

言つて居るのだ。

ト幕明きの鳴物になり、皆々よろしく此の道具廻る。

（波戶場脇海岸の場）―本舞臺一面の平舞臺、上の方煉瓦造りの異人館鐵の駒寄せ、内に冬木の植込み下の方石造の異人館、松の立木、正面は海岸より神奈川を見たる灯入り夜の遠見、港に掛りゐる外國船の書割よろしく、月を下し、總て横濱海岸通りの體。波の音にて道具留まる。と本釣鐘、謠への獨吟の唄淨瑠璃になる。

〽青柳の枝に風なき春の宵、岸へ打ちくるさし汐の音も靜けき海原へ、照り添ふ月はさゆれども、さえぬ思ひにしよんぼりと、佇む影の薄霞、

トうすく波の音を冠せ、花道より林之助腕組をなし、出來り花道へ留り、本釣鐘を打込み思入あつて、

林之　今更いふも愚痴ながら落目になるは情ないもの、形を

見に貰うた二萬圓の金が手許にある内は、他人ばかりか現在の伯父伯母までがやれこれと、無理に女房の押掛け相談、金がなければ直に斷り僅かな事の無心さへ聞かぬ其の上伯父甥の緣さへ切ると愛想づかし、斯うも人が薄情になるのも元は皆金づく、利口になるも馬鹿になるも、まことに金の世の中ぢやなあ。

へまだ如月もきのふけふ綻ぶ梅も開きかね、餘る寒さの身にしみて塒はなれし水鳥の、行きつ戻りつたゞ一羽、

トやはり本釣鐘、うすき波の音にて林之助よろしく思入あつて舞臺へ來る、此の時上手より以前の臼右衞門出來り、林之助思案の思入にて行き當るを、臼右衞門突き退け合方になり、

臼右　えゝ、氣を附けて步かぬか。

林之　や、さういふこなたは臼右衞門どのか。

臼右　誰かと思つたら裏店林か、何をまご〳〵して步くのだ。

林之　最前こなたが見らるゝ通り、親父の苦勞な借金から地面藏まで渡してしまひ、今日に迫りし我が身の上、どうしたらよからうと、途方に暮れて居ります。

臼右　そりやあ貴樣の心柄だ、先刻おれに任せれば半金遣れば皆濟に、すましてやるに地面から家まで渡してしまふとは餘りといへば馬鹿々々しい、これが正金といふではなし、米の相場で借りた金いはゞ博奕も同然だ、そんな金を耳を揃へて返すといふがあるものか。途方に暮れて困るのもみんな貴樣が間拔だからだ。

林之　そりやさうでもございませうが、正しく親父の借りた金ゆゑ返すが道でございますから、家藏までも添へまして返しましてございますが、これから何處へ參りますにも小遣さへもございませねばどうすることも出來ませねば、申し兼ねましてございますが、どうか親類の誼を以て、五圓お貸し下さりませぬか。

臼右　えゝ五圓金を貸してくれ、途方もない事を言はつしやい、親類だつてほんの遠緣、不斷附合せぬけれど立派な家を持つたといふゆゑ、何ぞの役に立たうと思つて家見にやつた鰹節でさつき一圓損をした、其の取返しがありやあしない。五圓の金はさておいて五錢の銀貨も貸されるものか。

林之　御親切なお詞を用ひませぬはわたくしが、如何にも惡うございました、お腹立ちは幾重にもお詫びいたしますから、どうぞお許し下さりませ、今の世界は薄情な人

ばかり多いに最前も、これまでよりか親類の緣を深く重ねたいと、御親切なお詞に甘へてお願ひ申しまするが、どうぞ親類の誼にて、お貸しなされて下さりませ。

臼右　どうして〳〵親類は今日限りお斷り、元より鰯を煮た鍋くらゐ腥さい中のこなたとおれ、灰汁でさつぱり洗ひ落し、腥さッ氣を去つてしまへば、五錢でも貸す緣はない。

ト臼右衞門行き掛けるを袖に縋り、

林之　さう仰しやらずと此れまでの、親類中の緣をもつて。

臼右　まだ〳〵そんなことを言ふのか、一圓損した上からは、一錢たりとも貸されねえ。

林之　すりや、どうあつてもわたくしへ、

臼右　貸してやる緣がない。

ト振り切つて行くを、

林之　そこをお慈悲に、

ト又すがる。

臼右　執拗い、知らぬといふに。

〽礒馴の松に去年のまゝまつはる蔦も二葉三葉、殘る古葉も夜嵐に散りて行方も白波の、

ト臼右衞門振拂ひ行かうとするを林之助前へ廻り留る、これをかき退け林之助を突倒し、起き上らうとするを、臼右衞門むごく蹴倒し花道へはひる。

〽沖に漂ふ蜑小船、篝の火さへ消えがてに、空も朧の雨もよひ、

ト林之助後を追つかけ行かうとして、着物へ附きし砂を拂ひぢつと向うを見て口惜しき思入、この時下手より前幕のおくら出來り、四邊を窺ひ側へ寄り、

くら　もし林之助さん、お前怪我でもしなさんせぬか。

林之　おゝ、誰かと思つたらおくらさんか、仕合せと何處も怪我はしませぬ。

くら　揃ひも揃つてあの衆は、情を知らぬ人でござんす。

林之　初手から知れたことではあるが、愛想もこそも盡きました。

ト誂への合方になり、おくら思入あつて、

くら　さつき家へお出での時お氣の毒だと思つたれど、情を知らぬ人達ゆゑなまなかわたしが口出しをいたしましたらお前さんの、却つてお爲になりませねば、素知らぬ振りで清正樣へお詣りいたす積りにて裏からそつと脱けて來ました、實に無慈悲な人達は言はずと知れた事ゆゑ

に、いつぞや門戸の伯父さまから形見に貰うたお金をば、お預け申した五郎右衛門様からわたしに十圓下さんしたが、何も其の後入ることのないので持つて居たこそ幸ひ、此の十圓を上げますから先づそれまでの小遣ひに、お遣ひなされて下さりませ。

ト懐から紙入を出し、此の中より紙に包みし札を出す、この時書附を落すこと。

林之　人の落目を見捨てざる情を知つたお志し、まことに嬉しく思ひますが、お前も今は掛人、これで着物の一枚も早く拵へて着なさいまし、何處へ取付く島もたく困りはすれど男の一人身、此れから雇ひにはひつても命は繋いで行かれます。お志しは受けましたが金はお返し申します。

ト札の包みを出す。

くら　そりやさうでもござんすが、折角お前に上げようと人目を忍んだその志しを、林之助さん、どうぞ受けて下さんせいな。

林之　その志しは此の如く頂いて受けました、必ず徒には思はぬから、此の儘納めて下さいまし。

くら　それではどうでも此の金を、お前は受けて下さんせぬか。

林之　さあ受けぬといふではないけれど、お前とても掛人、あり餘るといふ金でないゆゑ。

くら　成程お前のいふ通り、便りに思ふ兩親にとうに別れて寄邊なく、伯母を便りて掛人、餘計なお金はなけれども、形見に貰うたこの十圓、なければ無いで濟みますゆゑ、これをお前の用に立て、どうぞ使うて下さんせ、今にもお身の納りが附きましたらば其の時に、わたしに返して下さりませ。

林之　それほどまでに言はれるを、無下に返すも本意でなければ、これはお借り申します。

くら　そんなら使うて下さんすか。

林之　これを力に何れかで、身の振方を附けまする。

くら　それで心が晴れましたわいな。

〽曇りて見えぬ遠山も、思はぬ東風に吹き晴れて、景色整ふ春の月、

トおくら嬉しき思入、林之助札包みを頂きおくらの親切に感心の思入、おくらは林之助がいとしいといふ思入。

林之　忠臣藏の淨瑠璃に、國が亂れて忠臣が知れると書い

てありますが、なるほど違ひござりませぬ、落目になつて構ひ手のなき時信を盡すのが、これがまことの人の親切、おくらどのゝ志し生涯わたしは忘れませぬ。

くら　僅かな事を其のやうに、厚くお禮をおつしやつては、お氣の毒でござります。

林之　思へばこれまで二人共、長年伯父の厄介にて、一つ所に居たけれど、

くら　お前もわたしも物堅く、四邊に人の居ぬ時は、話しもろくにした事なく、

林之　常の朋輩同樣に、たゞ睦まじくしたのみにて、色戀といふ譯でもなく、

くら　人に勝れた眞實に、惚れてお貢ぎ申します。

林之　その心ならどうか末々。

くら　え。

林之　末々までも信義を盡し、

くら　永く御親意結びませう。

林之　いや人通りなき海岸に、長居は恐れ、少しも早う。

くら　左樣ならば御機嫌よう。

林之　お前も達者で居て下され。

くら　わたしよりお前の身を。

トほろりと思入。

林之　それ程までに。

くら　煩うて下さんすな。

〽梅の薫りの慕はしく、後のよすがと袖に留め人來と告ぐる鶯の、初音待たる、聲ぞ樂しき、

トおくら跡を見返り／＼花道へはひる。林之助跡を見送り思入。獨吟の切れ誂への合方になり、

林之　まことに人の親切は落目にならねば知れぬもの、現在伯父でありながら見下げ果てた清左衞門どの、目の當る所へ玉とやらで伯母御といひ、娘といひ揃ひも揃ひし薄情者、乳母が難儀を救ひたく十圓貸して下されと頼みし時に貸しもせず、門戸どのゝ形見にて元の身分に立歸れば、娘を女房に遣りたいと金を目當に押しての頼み、それも古借へ返してしまへば伯父でなければ舅でないと、今となつて他人より、情ない心の二人の衆、それに列なる臼右衞門親類中を深くしたいと、追從輕薄言つたのも、つまりみんな金を目當、それに引かへおくらどの、親切づくで此の金を貸してくれたは忝ない、今に禮をしますぞや。

ト舞臺に落散りある書附を見附け取上げ、

爰に落ちてる此の書附は、金を出す時おくらどのが大方落した書附ならん、拾つて置いて其の内に金諸共に返しませう。

ト月影にすかし見てびつくりなし、

や、こりや十圓の請取書、

トよく〳〵見て、

慥に是れは千之助が拾ひ書きにかいた請取、それではいつぞや乳母の所へ十圓の金を送つたのは、おくらどのであつたか、それと言はずに我が名にて送つてくれし親切は、世にも稀なる心立て、爰から禮を言ひますぞ。

ト林之助手を合せ拜み、

一度ならず二度までも我れを助けしおくらどの、禮は詞に盡されぬ。

ト花道の方へ思入れ、下手より以前の宇津藏出で、

宇津　林之助さま。

林之　おゝ宇津藏どのか。

宇津　ちつと時代なせりふだが、まんまと首尾よく。

ト大きく言ふ。

林之　これ。

ト抑へるを木の頭。

大きな聲だな。

ト波の音合方へ、ラッパを冠せよろしく　ひやうし　幕

ト波の音にてつなぎ直に引返す。

（邊見見世の場）―本舞臺元へ戻り邊勢宅の道具、二重に勢左衞門紙幣の五圓札を二百圓算へ居る、おらん煙草を呑みながら見て居る、異國めいた唄にて幕明く。

勢左　これ婆あどん、惡い跡は善いといふが、昨日林之助が新宅の祝ひに氣張つて絲織を一反土産に持つて行つて七圓五十錢損をしたゆゑ、昨夜は寐心が惡かつたが、思ひ掛けなく二百圓不意な金を今日取つた。

らん　あの五郎右衞門さんがおくらをば、急に娘にくれろといつて、養育金を二百圓出して貰つて行きなすつたのは、まさか自分の權妻になさるのでもあるまいし、らしやめんにでも遣る氣かしらぬ。

勢左　いや〳〵それは大丈夫、おれも度々勸めて見たが、なか〳〵頑固な女ゆゑ、そんな氣遣ひは決してない。

らん　二百圓でも取らぬは損だが、もそつと家へ置いたな

ら、髭さんからでも貰ひに來て、大きな金になりませうに。
勢左　所があれは髭さんなぞへ行く心は少しもない、始終は何處へかおれが手で片附けてやらねばならぬ、さうした日には裸でやつても二十と三十掛けねばならぬ、まことにそれは入れ佛事、親類中の五郎右衛門へ、二百圓の養育金でやつたは大極上々吉、この上もない仕合せだ。
らん　あれはわたしの姪だから、養育金の二百圓は、半分わたしへおくれだらうね。
勢左　どうして〳〵、長年喰はした雜用代、これはみんなおれが取るのだ。
らん　それはあんまり慾どうしい。
勢左　數年來添つて居ながら、おれが慾どうしいのを今知つたか。
らん　とうから知つては居るけれど、それはわたしが貰つてもいゝ金だからおくれといふのだ。
勢左　何といつても、これは遣られぬ。
らん　くれずばわたしが手籠めに取ります。
勢左　これを取られてなるものか。
ト勢左衛門手早く紙に包んで仕舞はうとするを、おらん取りに掛る、異國の見世物の鳴物になり、これを拾ひ合ふ立廻り、トヾ札の包みを投り出しぱつと散る、奥より蒙八、おえい、前幕の鐵造、電吉、荷介、出來り、
蒙八　旦那さまが祀文もどきで、札を爰へお蒔きなされた。
皆々　拾へ〳〵。
ト五人拾ひに掛るを、勢左衛門あちらへ突きこちらへ突き、をかしみの立廻り、トヾ札の上へぺつたり坐り
勢左　あゝこれ〳〵蒔いたのではない、飛ばしたのだ、一枚でも、これを拾ふものは直に給金で差引くぞ。
鐵造　それぢやあ、蒔いたのでござりませぬか。
勢右　誰が札を蒔くものだ。
電吉　しわんばうの旦那だから。
荷介　不思議なことだと思ひました。
トばた〳〵になり、下手より以前の臼右衛門足早に出來り、直に門をはひり、
臼右　邊勢どの、大變だ〳〵。
勢左　いやそつちよりこつちが大變、くすねぬやうに拾つてくれ〳〵。

五人　はい〳〵畏りました。

ト皆々札を拾つて出る。

臼右　これ邊勢どの、大變な次第を聞いて下せえ。

勢左　何だか知らぬが、勘定をしない内は聞かれない。

ト此の内勢左衛門勘定をして、

やあ三枚誰かくすねたな。

蒙八　いえ〳〵どうして、

五人　わたくしどもは、

らん　その三枚はわたしが拾つた。

勢左　早くそれを出しをらぬか。

ト取りに掛るを臼右衛門留めて、

臼右　あゝこれ〳〵、札の三枚や四枚は後でどうでも分かる事だ、まあわしが云ふ事を聞いて下せえ。

勢左　して大變とは、どんな事だか、

らん　早く話して聞かせなさい。

臼右　昨日貸方へ家を渡した、あの惠府林が元へ返つて明日開店するに就き、今夜嫁が來るさうだ。

勢左　え、あの惠府林が元へ返つて、明日見世開きをするといふは、

蒙八　分らぬ話しでござりますな。

らん　さうして嫁の來るといふのは、そりや本當でござりますか。

臼右　そこは臼右衛門如在なく、しやつぽを冠つて店へ立ち、家の樣子を見た所、羽織袴で林之助が町内廻りをして歸り、家はどん〳〵賑はふ樣子、近所の知つた者の家で、今夜嫁が來るといふ慥なことを聞いて來たのだ。

ト皆々びつくりして、

勢左　それにいよ〳〵相違なくば、このまゝにしてはおかれない。

らん　元へ返らば先約ゆゑ、娘を女房にさせねばならぬ。

蒙八　何にしろお孃さまに、早くお支度おさせ申せ。

えい　畏りましてござります。

ト奧へはひる。

鐵造　どういふことで御親類の、

電吉　こちらへお話しなされずに、

荷介　嫁をお貰ひなさりまするか。

蒙八　これは最前旦那さまが、伯父でなければ甥でないとおつしやつたからでござりませう。

勢左　今々思へば貸方の、宇津藏とやらいふ男も、何だか胡散な物の言ひやう。

らん　代言人といつたのが、慥あれは落語家かと、わたくしは思ひます。
臼右　こいつは一番あいつ等に、狂言をかゝれたわえ。
ト奥より前森のおしな、おえい附き出來り、
しな　樣子はおえいに聞きましたが、林之助さんが元へ返り、外から嫁を貰ふとは憎い仕方でござんすなあ。
らん　これから直に押掛けて、術よく娘を貰へばよし、
勢左　兎やかう言はゞすてばちに、思入れ恥をかゝせてやらう。
蒙八　わたくしどもゝ御一緒に、
三人　お供をいたして參りませうか。
勢左　臼右衛門どのが一緒に行けば、番頭どのも皆の者も、家の留守居をしてくりやれ。
四人　畏りましてござります。
しな　ちつとも早く行きたいが、歩いて行つては遲くなる。
らん　後押し綱引三枚で、車を早く頼んで來い。
荷介　はツ。
ト駈出して下手へはひる。
蒙八　何なら家の荷車で、
鐵造　わたくし共が、
電吉　曳きませうか。
臼右　それでは向うに幅がきかぬ。
らん　まだ車は來ないかな。
蒙八　まだ〳〵、めつたにや參りますまい。
勢左　あゝ待ち遠で、
トぽんと俯へ煙管を入れるを道具替りの知せ、
ならぬなあ。
ト待ち遠なる思入。皆々よろしく、右の見世物の鳴物にて道具廻る。

（惠府林宅婚禮の場）——本舞臺一面平舞臺、正面床の間鶴龜の掛物、陶器の花瓶へ梅を活け、續いて金地の袋戸棚、此の下腰張の茶壁、上の方一間折廻し障子屋體、下の方同じく障子、下手へ金屏風を立て、眞中に式臺、三方に三ツ組杯、同じく干肴、長柄、くはへ銚子女蝶男蝶を附け、左右に菊燈臺を置き、總て惠府林宅婚禮の體。上手に林之助羽織袴、下手におくら綿帽子をかぶり白の打掛、白の着附、眞中に五郎右衛門羽織袴にて扇を持ち左右に子役袴裝、同

じく振袖にてよろしく控へ、四海波の謠曲にて道具留まる。とやはり謠曲にておくら杯を取上げ子役の媒酌をなし、おくら呑んで三方へ杯を置く、五郎右衛門林之助の前へ持ち行き、子役の男の子酌をなし祝言の模樣よろしく。ばた／＼になり花道より藤七、喜助袴羽織、手代にて手を廣げ留めながら出來る、後より以前の勢左衛門、おらん、おしな、臼右衛門出來り、花道にて、

藤七　只今御婚禮の杯最中、

喜助　お通し申すことはなりませぬ。

勢左　その婚禮を留めに來たのだ。

らん　假令杯最中ぢやとて、

しな　親類中のわたし共、

臼右　通されぬとは何のことだ、

勢左　留立てせずと、

四人　通した／＼。

藤七　いえ／＼奥へは、

兩人　通されませぬ。

ト合方にて留るを搔き退け、四人舞臺へ來り、

勢左　合點の行かぬは林之助、昨日親父の古借の抵當に、渡した家藏、

らん　今日又家へ立歸り、婚禮するとは何うした譯、

しな　なぜ、親類のわたし等へ、

臼右　此の相談をしないのだ。

五郎　貴樣達は林之助へ絕交すると申せし由、それゆゑ沙汰はしないのだ。

勢左　して、此の家へは、どうして歸つた。

ト上手にて、

宇津　その譯、只今お話し申さう。

勢左　何と。

ト合方になり上手屋體より宇津藏羽織袴にて出來る、

や、こなたは昨日の古借の貸方、

臼右　して又、話しといふ譯は。

宇津　昨日これなる林之助さんの、親御へわしが一萬圓貸したといふは、ありやあ噓だ。

四人　え。

トびつくりして、

勢左　貸したといふが、噓だとあれば、

らん　有金地面この屋敷まで、

しな　林さんの手へ返りし上は、

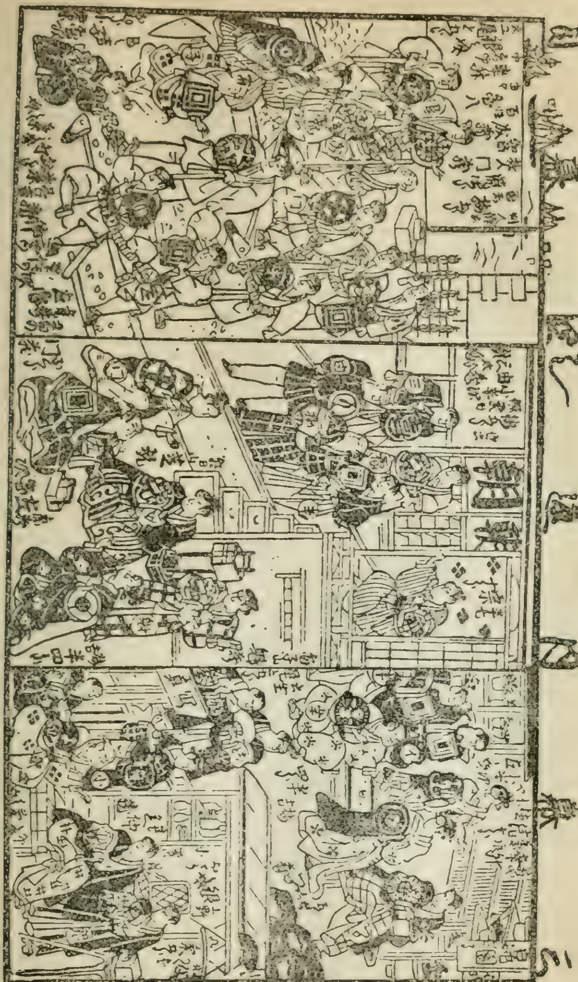
臼右　又元々に親類附合。
勢左　娘を嫁にやらねばならぬ。
宇津　どつこいさうは行きませぬ、嫁御は爰に極つて居る。
三人　何處の娘だ。
五郎　今そなた衆に逢はせませう。
勢左　そんならそれが、
しな　花嫁なるか。
らん　何處の娘か帽子を取つて。
　ト立ち掛るを、
五郎　いや急ぐに及ばぬ、花嫁は今近附きにいたします。
　ト五郎右衛門おくらの帽子を取る、皆々見てびつくりなし、
勢左　や、嫁は誰かと思つたら、五郎右衛門どのへ、今日やつた、
らん　そなたは姪のおくらなるか。
臼右　どうして嫁になつたのだ。
五郎　先頃これなるおくらから、形見の金の爲替手形を此の五郎右衛門が預りし、其の夜窃に店へ來て、急に十圓入用ゆゑ形見の内を貸してくれと、頼むは如何なる譯なるかと、様子を聞けば林之助が乳母へ貢ぎの十圓を、母の形見の櫛笄脇へ預けて金を借り、それと言はずに林之助の許より送りし積りにて、乳母へ惠んで遣りしと聞き、奇特な事と櫛笄を取り入る金を貸して遣りしが、又もや昨日我が方より十圓借りて林之助の落目を救ふ志し、實意なものと見拔きしゆゑ、二十圓を十倍に二百圓を是れ迄の、養育金にこなたへ渡し、おれが娘に貰ひ受け、改めて林之助へ送りしおくらは嫁なるぞ。
しな　わたしが嫁と思つたに、そんなら先へおくらさんが、
くら　毛織さまへ貰はれて、わたしや爰へ參りました。
宇津　この身代の嫁になるのも、人を憐むお心ゆゑ、卽ちこれが天の惠みだ。
勢左　して又貸しもせぬ金を、
臼右　貸したといつて僞つたは、
林之　お前方の薄情を、試さう爲めにしたことだ。
勢左　扨はさつきの推量通り、
臼右　貸したといふのは、
四人　狂言なるか。
宇津　その立作者はこの宇津藏。
　ト奥より梅生羽織着流し、落語家のこしらへにて出で、

梅生　狂言廻しは圓生の、前座を勤める此の梅生。
勢左　して又何ゆゑ、此のやうな、そちは狂言書いたのだ。
宇津　その略筋は立作者があらまし話して聞かさうが、これなる主人の恩有林之助が乳母の難儀を助け度く十圓の無心を云つた時、僅かの金を貸しもせず、門戸どのから二萬圓形見が來ると忽ちに、それを目當に追從輕薄、この身上を乘つ取らうと娘を餌に押掛け女房、古借の抵當に家藏まで渡した體に見せかければ、切つても切れぬ伯父甥の縁をば切つて立歸り、
林之　猶も心を試さんと路頭に迷ふ體に見せ、又も十圓無心を言へばけんもほろゝの挨拶にて、一錢たりとも貸されぬと、伯父、伯母、娘、臼右衛門揃ひも揃ふ強慾者、たゞ金にのみ目がくれて義理を知らざる薄情に、愛想もこそも盡きました。
勢左　いや、その薄情は當時の流行、凡そ三千五百萬の人は殘らず薄情だ。
五郎　曲つた目から見たならば人も曲つて見えようが、林之助どの始めとして條理を守る我々ども、道に缺けたる事はしない。幾ら慾の世の中でも我さへよければどうでもよいと、人の難儀も構はずに、たゞ慾張るばかりでは、親しむ人も無くなる道理。
林之　これから心を入替て、慈悲善根をなさるがよい、たゞ金にのみ目がくれて人を惠まぬその時は、天の御罰で忽ちに、
宇津　こなたが企む嫁入も、裏をかゝれて鶍の嘴、
しな　今更女房にしてくれと、言つても外に極つたからは、
勢左　いふだけ野暮な禿頭。
らん　何にも言はぬ其の代り、
臼右　どうか親類附合を、
くら　伯父さま始め皆様が心をお替へなされしからは、以前に替らず睦まじう、どうぞお願ひ申します。
林之　一旦お世話になつたれば、何處がどこまで此方では、伯父と敬ひ親類附合、
宇津　拵へおいた引物を、お四人へ上げてくりやれ。
藤喜　はッ。
　ト床の間の廣蓋の中にある鰹節の切手の包みを、四人の前へ竝べる。
勢左　この包みは、
宇津　中を開いて御覽下され。
　ト勢左衛門開き見る、中に百圓札入れてある。

勢左　や、こりや鰹節の切手かと、
らん　思ひの外に百圓札、
しな　そんなら是れをわたし等へ、
臼右　今日の祝ひに下さりまするか。
五郎　それで目出度く、
　トうなづくを木の頭。
林之　お開き下され。
　ト下座にて「千秋萬歳千箱の玉を奉る」と、謠にて、林之助の側へおくら寄るを見て、おしな立掛るを、勢左衛門留める、皆々よろしく、

ひやうし　幕

金の世の中（終り）



第二番目は新聞の小學雜誌の美談をば劇場に新茶の一夕話結ぶ縁しも短夜の夢に三浦の高尾が切れ文重三の思ひ半七が覺て悔しきお梅の行方尋ねて爰へ北庭の情に明す甚兵衞が盜みし古着の罪科を我身に着たる仙吉は世間へ恥を柿染の身はゞも狹き懲役人逢れぬ親に寫眞の對面筑波の妻が贈りたる菓子を土産に卯之助が親孝行に北向の腹に毒ある寅藏も己が不孝を後悔なし善に還りて惡黨の野毛重右衞門巳之吉お村悦びあれば悲しみと池田の息子が兄弟とも知らで契りし畜生道はかなき戀に墓原で死るを止る朝日山屑屋は貧に修羅道の苦しみをなす其處へ地獄で佛忠八が掘出す金の三千圓忽ち元の福住と家富榮える極樂世界

勸善懲惡孝子譽



勸善懲惡孝子譽

孝子善吉、一名懲役改心錄——五幕

序　幕

萬年橋茶見世の場
三浦屋別莊夢の場
仙臺堀巳ノ吉内の場

（淨瑠璃）あれと言ふ間に遠ざかる時鳥　夢結葉影一聲　（淸元連中）

役名——朝日山浦右衞門、船乘北向の虎藏、池田の手代忠八、島田重三郎、虎藏弟巳之吉、淸元延梅後に藝者梅吉、三浦屋の傾城高窓、虎藏母おしげ、其他。

茶見世の場——本舞臺上の方九尺葭簀張の茶見世、眞中より上手へ薔心に萬年橋、正面柾木の稻荷より大川を斜に見たる遠見、下手石置場、柳の立木上下樹木の張物にて見切り、總て深川萬年橋袂の體。床几に金太淺黄筒ッぽ草鞋がけ魚賣の打扮にて盤臺をおろし財布の錢勘定をして居る、勇次同じく賣にて燒團子を喰つてゐる。長八着流し駒下駄船頭の打扮にて兩人に茶を出して居る、此見得波の音飴賣の鎌倉節にて幕明く、

金太　今向う河岸を流して來るのは、何時も假宅に居る伯屋ぢやあねえか。

勇次　さうよ、ありやあ一昨日の晩手前とひやかしに行つた時、金瓶の横丁で、二階の部屋から客がやらした新内の邪魔をしたと、そいつが種で喧嘩をした伯屋の聲に違えねえが、あいつもたうとう新聞に出たぜ。

長八　定めし其時手前達は、彌次馬に出たらうな。

金太　人聞の惡い事を言ふなえ、以前と違つて此頃は喧嘩や火事の彌次馬は藥にしたくもありやあしねえが、こりやあまつたく昔と違つてお巡りさんのお骨折だ。

勇次　お骨折といへば、長八の野郎はおむらッ女の亭主氣取で、がうせい働いて居るぢやあねえか。

長八　なに今し方爰へ來たら、此頃水道が水切で、船が廻つて來ねえから、掘拔を汲んで來る内見世の番をしてく

れと、頼まれたから居てやるのだ。

金太　そんならもうちつと待てばいゝのに、おら達が汲んでやらうもの。

勇次　いや、手前もやつぱり魚賣より經師屋の仲間だが、いくら張つてもあいつア無駄だ、それより早く家へ歸つて、女房に水でも汲んでやんねえ、きつと效驗が違はうぜ。

金太　成程手前の言ふ通り、

長八　こんな丈夫な事はねえ、

ト上手よりおむら島田髷前垂茶見世の娘にて、手桶を提げ出來り、

むら　長八さん、有難う、見世へお客はなかつたかえ。

長八　ないどころか、入替り立替りめつぱふけえに忙しいので、團子を燒いたり茶を出したり、よつぽどお前の穴は埋めたぜ。

むら　そりやあお氣の毒だつたね、さうしてお客はお歸りなすつたかえ。

長八　まだ二人賣溜の勘定を仕ながら、團子を喰つて居らあ。

むら　おや、お客といふのは、金太さんと勇次さんのことかえ。

金太　おいおむらさん、おら達では客でねえかえ。

勇次　毎日商ひの歸りがけに、きつと寄る定得意だ。

むら　それだからお前方を、他人とは思ひませんよ。

長八　そんなうまいことを言ふと、自惚が強いから兄弟か身内の氣取で、團子を喰つても拂やあしめえ。

金太　なに拂はねえことがあるものか、かうして毎日定客で、歸り掛に休む故、つど〳〵置くのも面倒だから、かためて晦日と十四日に勘定をしてやるのだ。

むら　えゝも、人聞のいゝことをお言ひでない、つひに拂つたこともないのに、

長八　なるほど、こいつあ拂ふめえ、自分の住ふ店賃さへ滿足に遣らねえから、どうして茶代や團子の錢は、のんこのしやあで居るたまだ。

勇次　こいつあ圖星當てられた、長家内でも金太のことを、皆がのん金〳〵と言ふぜ。

金太　なんぼ己が魚賣でも、そんなにあらを言つてくれるな、承知で拂ひをしねえのは、一件が一件だからよ。

勇次　さうよ、拂はねえでも大よしだ。

むら　なぜ拂はねえでよいのだえ。

金太　言ふだけ野暮な兀天窓、
勇次　毎日團子をたゞ喰ふのは、
金太　こりやあお前の、
兩人　受賃だ。
むら　なに、受賃とはえ。
金太　なに、受賃とはえと、がうせいお前はしらばッくれるか、内證の事なら人並より先へ聞出す早耳に、ちらりと聞いたは此間仙臺堀へ横濱から引越して來た小舟乘の巳之の野郎と疾からしていゝ仲だといふことは、己が鐵棒引だから長屋中で誰一人知らねえ者はありはしねえ。
勇次　ほんのことだがおらなども、面はまづいが心意氣でお前と色に成らうと思つて、無駄に團子をよつぽど喰つたが、今となつちやあ癪に障つて、文久一つ置くのもいやだ。
むら　何のことだと思つたら夢にも知らない其疑ひ、そりや巳之さんと譯でもあるなら、たゞ喰くられても仕方もないが、假令人が何と云はうとも、證據もない噂話しを眞に受けられてはうまりませぬよ。
金太　さう口綺麗に言ふことなら、巳之と譯がないにして、茶代も團子も拂つて行くが、
勇次　もしも譯があつた時は、其替り罰金に、五圓取るが出すだらうな。
むら　さあ、それは。
長八　いや喰物と色の思ひは、譬の通り恐ろしいが、罰金と來りやあ半口乘りてえ。
金太　おむらさん、罰金を取らずにやあ、
金勇　おかねえよ。
　　トおむら術なきこなしにて、
むら　さあ、そんな覺えは露程もなけれど、お前方には叶はないから、澤山上つておいでなさいよ。
金太　それ見たことか、喰へと言ふからア何と嘘ぢやアあるめえが、さう極つたら構はねえから、思入れ團子を喰ふがいゝ。
勇次　いくら喰へと言はれても、胸がやけて澤山は喰へねえ、其代り己の喰ふだけ、嬶の所へ持つて行くから。
長八　えゝ色氣のねえことを言ふなえ、深川の魚寶ぢやねえか。
勇次　いや、こいつあ己が閉口だ。いや常談は常談、茶代は爰へ置いて行くぜ。
むら　なに、それには及ばぬわいなあ。

勇次　なに、受賃は團子より、
長八　此の頃又ゆつくりと、
金太　一ぺえ呑まして貰ふとしよう。
むら　長八さん、まことに有難うござりました。
勇次　跡でお樂しみョウ。
ト鎌倉節波の音にて、勇次魚を賣る眞似をしながら兩人付いて橋を渡りはひる、跡流行唄の合方になり、おむら思入あつて、
むら　思ふ事一つ叶へば又二つと、巳之吉さんといゝ仲になつたことをばいつの間にか、世間の人に噂され、なぶられるのは嬉しいけれど、末始終を考へると、もしあの人の氣が替り、是見よがしにされたなら、何うしようかと先を思ふと、氣掛りでならぬわいなあ。
ト案じるこなし、流行唄になり、花道より巳之吉長半纒三尺藁草履船頭の打扮、小さなお櫃を網に入れ、是を肩へ掛け出て來り、
巳之　花見の客も先月限り、是から涼みになる迄は車に押されて仕事がねえから、引越しの荷を頼まれ牛込迄行つて來たが、眼鏡橋から先の落汐ぢやあ骨ばかり折れて叶はねえ。

ト舞臺へ來りおむらを見て、
おいおむらさん、何を考へて居るのだ。
むら　おや巳之さん、何故お前來ておくれでない。
ト側へ寄る。
巳之　何だ藪から棒に不意をくはして、びつくりした。
むら　それでもあんまり來ないからさ。
巳之　なに、來ねえことがあるものか、昨日一日拔いたばかりだ。
ト床几へ掛ける、おむら茶を出し、
むら　今も今とてお前のことを、わたしや爰で一人言に言ひくらして居たのだよ。
巳之　道理でめつぱふ嚔が出たが、大方惡く言つたのだらう。
むら　そりやあお前が何處ぞへ出來た、お樂しみの所へお出で、大方私の噂をば惡く言つたのでござんせう。
巳之　こいつあ大きに逆捻だが、誰にお前は煽てられたか、證據もねえに何で又、そんなことを言ひ出したのだ。
むら　別に誰も言はぬけれど、毎日爰へ遊びに來る魚屋の衆や近所の人が、お前と譯のある事を、何のかのと言ふ故に、ぱつと世間へ知れぬ内、少しも早く一緒になり、

共稼をしたいものと不動樣へ御願を掛け、わたしやそれのみ樂しみに暮して居るのにお前の方では、外に思ふ情人でも出來てか此間からよそ〳〵しく、爰へは少しも立寄らず、あんまりひどい仕方故、嫌になつたらなつた樣に、打明けて言うて下さんせいな。

 トよろしく思入にて言ふ。

巳之　いやつまらねえことを言つたものだ、今もお前に言ふ通りたつた昨日一日見世へ來ねえばかりだ、そりやあおち〳〵此頃ぢやあ逢つて話しもしねえけれど、以前と違つて己だつて親掛りと言ふではなし、兄貴に別れてお袋と居馴れた土地の神奈川から追手の風に東京へ流れ流れて深川へ、碇を下すと言ひてえが、もやひの綱の漸々に細い煙りの棟割長家、板子一枚其下は薪と草履の一座から、壁の境に隣の內と話しの出來る貧乏暮し、稼がにや其日が送れねえから、一番水棹を突張る氣で、うんとこたへる料簡故、それでこつちへ來ねえのだ。

むら　そりやわたしとて同じこと、斯うして見世を出して居るのも微な暮しに親の手助け、そりやもうお前が稼ぐのを惡いと言ふではなけれども、以前に替り此頃はどうも樣子が違ふ故、定めし心が替つたことゝ、疾より思つて居るわいな。

巳之　なに、おれの心が替つたとは。

むら　さあ、お前の心の替つたと思ふ證據は此間、不動樣の歸りがけおつかさんをお尋ね申しに家へ寄つたら、美くしい別品さんが居た故に、それで私を袖にして少しも顏を見せてくれぬは、てつきりそれと氣が付いたら、夜もろく〳〵寐られぬ程苦勞になつてならぬわいな。

ト愁ひの思入。

巳之　いや大方そんなことだらうと思つた壺に違ひなく、こいつあ大きな間違だ、あの娘ッ子は斯ういふ譯だ、己のおつかあが若い時分乳を上げてお育て申した御恩になりし若旦那、又側に居た女と言ふのはありやあ濱の太田町で、淸元の師匠をして居る延福といふ別品だが、當時も濱で催しのある旦那手合の義太夫へ、一番向うを張る積りで富貴樓でやつた溫習の時若旦那と情人になり、互ひに思ひ思はるゝ仲から土地を退く氣になり、以前の緣にお母あを目當に賴つて來なすつたがそれから間もなく念の入つた風から重い病氣になり、先づ全快迄と其儘に後の月から二月越し、穢い家に假住居、なんぼ色とはいふものゝ、立派なお家のある身分で、おれなどの內に居

なさるかと、思ふとお二人を、表向で添はして上げてえ。

むら　人のことよりわたしをば、早く家へ引取つて女房にして下さんせぬと、世間の口がうるさい故、さうした上で共稼ぎに、暮して見たうござんすわいな。

巳之　そりやあお前が言はねえでも早く一緒になりてえが、爰に一つ困るのはあのお二人のある上に惡い心の己の兄貴が堅氣になつて神奈川から泊りがけに來て居るが、根が性惡の產れ故堅いといつても心がゆりねば、それらこれらの一件が片付く迄は待遠でも、家へ引取る譯には行かねえ。

むら　さういふ込み入つた譯があるなら、そりやもう今が今といつて急く譯ではないけれど、お前が不斷浮氣故若しとやかういふ人が、外にあつても其時に心を移しておくれでないよ、

巳之　そりやあ己の方で言ふことだ。

むら　なに、お前の方で言ふことゝはえ。

巳之　さ、十人並の女なら安心をして居るけれど、口前といひ程のいゝ男好のする顏だから、お前よりは己の方が案じられてならねえのだ。

むら　えゝも止してもおくれ、その口前に惚れるのだよ。

　ト巳之吉の膝をつねる。

巳之　あゝ痛え、酷いことをするぢやあねえか。

　トおむら巳之吉をぢつと見て、

むら　お前はよつぽど性があるね。

巳之　當りめえよ、生きてゐらあ。

むら　それぢやあきつと、今のことを、

　ト四邊へ思入あつて、

　忘れるときかないよ。

　ト波の音端唄になり、花道より虎藏半天着流し船頭の打扮、草履下駄にて出來り、

虎藏　朝の蒸汽船で神奈川の高島町から、判人の源六が向うの茶屋へ尋ねて來る約束だが、まだ出掛けて來ねえかしらぬ。

　ト舞臺へ來り兩人を見て惡き思入にて、

　えへん〱。

　ト咳拂ひをする、是にて兩人びつくりして飛退き、

巳之　や兄貴か、何うして爰へ。

虎藏　何をそんなにびつくりするのだ。

むら　よもや爰へ虎さんが、

巳之　來ようとは思はなんだ。

ト虎藏思入あつて、
虎藏　邪魔になりに來度くもねえが、さつき向う河岸へ行つた時、お前の所へちよつと寄つたら、是から寺町迄行きてえが留守居がねえので行かれねえと、おつかあが困つて居た故見世番はしてやるから、早く家へ行つてやんねえ。
むら　それは有難うござんした、そんならどうぞ少しの內、見世をお賴み申します。
虎藏　おゝいゝとも〳〵、ゆつくり行つて來てやるがいゝが、お前一人ぢやあ淋しからう、巳之お前も一緒に行つてやれ。
ト巳之吉思入、巳之吉面目なき思入にて、
巳之　なあに、わつちが行かずとも、
虎藏　えゝ我慢をせずと、早く行つてやんねえ。
巳之　それだといつて、眞ッ晝間、
虎藏　留守居をするに、時はいらねえ。
むら　ほんに、兄さんは通り者、
巳之　それぢやあ一緒に行つてやらうよ。
むら　これで思ひが、
巳之　これ、
ト押へる。
虎藏　こつちも都合が、
兩人　え、
虎藏　早く行けといふに。
むら　あい、さあ巳之さん。
ト波の音流行唄にて、おむら巳之吉橋を渡つてはひる、虎藏伸上り跡を見込み、につたり思入あつて、
虎藏　飛んだ七段目の由良之助だが、間夫があるなら逢はしてやらう、夫があるなら添はしてやらうと立役らしい思入で二人の幕を切つてやつたら、尻尾を卷いて行きやあがつたが、實は爰で判人の源六と打合せをするに邪魔を拂はうばつかりだ、早く此間に來りやあいゝが、
ト端唄になり、上手より源六半合羽判人の打扮にて出で來り、
源六　おい〳〵虎兄イ、ごうせい待たしたぢやねえか。
虎藏　あゝ源公か、己の方でも待つて居たのだ、まあ爰へ掛けねえ、ゆつくり話さう。
ト兩人床几へ腰を掛け、
己も氣が急いてならねえのだが、漸々今邪魔を拂つた。
源六　己もこれで三四度爰へ尋ねて來て見ても、お前の居

る様子がねえから、こいつあきつと前祝ひにお神酒を上げに行つたのだらうと、此近所を捜したのだ。

虎藏　どうして〱仕上げる迄は酒所ぢやあねえ。極く堅氣だ、それに昨日出した郵便は定めし讀みにくかつたらうが己は手が書けねえから、話しの樣にぼつ〱書いてお前の處へ出したのだが、よく早く來てくれたな。

源六　今朝早く屆いたから直開封して見たが、どうしてどうして分らねえ所かひじきの行列でもお前のはたちがいいから大分りだ、所で極內證なのは此頃馬喰町へ上州から倉ケ野屋の三郎兵衛さんが藝者を捜しに來て居るから、かいつまんで話した所がそんなら早速行つて見ようと、八時の汽車で直に來たのだ。

虎藏　そいつあ何しろいゝ都合だ、以前の日にやあ飛脚と駕籠でよつぽど錢を取られる所だが、二錢の郵便に一分の鐵道、便利な世界になつたぢやねえか。

源六　そりやあさうと其玉を、己が知つてると書いてあつたが、それぢやあ神奈川近所の者かえ。

虎藏　なあにお前も知つてる、それ、横濱の太田町で淸元の師匠をして居た、延梅よ。

源六　あの延梅なら別品だが、ありやあ朝日山といふ角力取の妹で、めつぽふ淸元の旨え師匠だが、あれがどうしてお前の手で始末を付けるやうになつた。

虎藏　さあ其譯といふのは、一通り長い話しがあるのだが、他聞を憚る一大事、まあ少し待つてくれ。

源六　いや、がうせい時代に出かけたぜ。

ト此內虎藏立上り四邊を見廻し、思入あつて誂への合方になり、

虎藏　定めし話しに聞いて居ようが、神奈川の宿で指折の靑木町の酒問屋池田の息子の半七さんが、疾より色になつて居たが、先々月の末つ方家をこつそり出たッ限り、歸つて來ねえ所から己も其時掛り合ひ、所々方々を尋ねた所が丁度濱の競馬の日で群集の中で出ッくはした東京の淺床に樣子を聞いて知れたのは、以前の緣にお袋の所に隱れて居ると聞き、こいつあまとめた金儲、蒸汽のはしけへ積むよりも此荷を積んで乘廻しやあ、先當分は樂が出來ると見込みを付けて居所を池田へ知らして禮を取りそれから堅氣の立役仕込みで、身裝を拵へ出て來たのは、旨く騙して旅へ賣り金をどしいと握る積りだ。

源六　さういふ仕事になつて居りやあ、無論れきにやあなるけれど、飯より好きな酒呑だ何だか知れたものぢやね

え。
虎藏　さう思ふのは尤もだが、金にする迄死んだ氣で、おらあ休まずに辛抱するのよ。
源六　何にしろあの師匠なら、先づ三年と見積つて百五十兩は默つて出すぜ。
虎藏　所がさう長えと折合ねえのは、昨日郵便へ書いた通り、男の病氣をみつぐ金故、側を離れるのは厭がるから、先一月二十圓と手輕く言つて證文させ、後で百といふ字を書込み二の字を五の字に書直し、百五十圓と證文面を旨くごまかす魂膽だが、只困るのは田舍へやるのに、肝腎の籍がねえが、こいつに實は當惑した。
ト思入あつて
源六　籍なら決して案じなさんな、己の娘の籍があるから、名前は違ふがごまかして、それを向うへ送つてやれば、どうか濟むに違えねえ。
虎藏　それぢやあお前の娘の籍を、師匠の方へ廻してくれるか。
源六　おゝ貸すとも〳〵、無駄にしまつて置くのもつらえ、働かせるのが割事だが、二割の禮は呉れるだらうな。
虎藏　二割はちつと高過ぎるぜ。

源六　默つて出しねえ、爰らが判人の付目だ。
ト花道の方へ思入あつて、
虎藏　おい付目といやあ、ちよつと目を貸してくれ。
源六　え、
虎藏　向うへ來るのは、師匠ぢやあねえか。
源六　お前の目玉で見分らねえのが、何で己のへこんだ目で、遠くが見えよう譯がねえ。
虎藏　どうもさうらしい、何にしろ爰に居ちやあまづい、ちつとの内隱れてくれ。
源六　おい〳〵。
ト上手へ行きかけるを、
虎藏　おい、ちよつと待ちねえ、筋は昨日の郵便の通りだぜ。
源六　そりやあ源六だ、如在はねえ。
ト源六上手へはひる。跡しんみりした端唄の合方になり、花道より延畝、やつし裝駒下駄にて出來り、花道に留り、
延畝　わづかな風から半七さんが二月越しの長煩ひ、思ひ掛なく治つたは水天宮樣の御利益故、お禮參りに出て來たれど、いはゞ日蔭の身の上なれば、どうぞ誰にも逢は

ねばよいが。

ト右の合方にて舞臺へ來り、橋を渡らうとするを虎藏茶見世の蔭より、

虎藏　もし／＼延梅さん、どちらへおいでゞござりました。

ト振返り、

延梅　どなたかと存じましたら、巳之さんのお兄いさん、只今水天宮樣へ御禮參りの出がけでござりまする。

虎藏　さうでござりましたか、まあお掛けなすつてお茶でも上つておいでなさい。

延梅　有難うござりますが、家が氣がせきますから、直にお暇致しまする。

虎藏　まあ宜しいではござりませぬか、爰の見世は懇意な者で今留守を頼まれまして、外に誰も居りませぬから、御遠慮なくお茶を一つお上りなさい。

ト茶を汲んで出す。

延梅　どうぞお構ひ下さりますな。

ト餘儀なく床几へ腰を掛ける、虎藏思入あつて、

虎藏　看病なさる其あひに水天宮樣へお參りは、大抵なことぢやあござりませぬが、何にしろ若旦那の御病氣が治つたので、嘸御安心でござりませう。

延梅　それといふのもお前方の、みんなお蔭でござりまする。

虎藏　いえどう致しまして、私共のはお世話ばかり御病氣の治つたのは、ありやあ全く御信心と名高いお醫者と値の高い藥の利目でござります、こんな事を申すのも恩に掛けるやうで濟みませぬが、立派なお醫者のその替り診察料が一度二分、藥の代が一日に煎藥丸藥水藥で一分宛故勘定しますと、二十圓から掛りましたが、それも命の助かることゆゑ、考へて見りやあ安いもの、いくらかゝつてもようござります。

延梅　とはいふものゝ其お金を、立替へて下さいましたは、誠にお氣の毒でござります。

ト延梅當惑の思入、此内以前の源六出て窺ひある、此時虎藏目くばせをなし、源六前へ出て、

源六　そこに居るのは、虎藏ぢやあねえか。

虎藏　や、わりい所へ源六さん。

ト態とびつくりなし、

源六　いや、おれが方ぢやあいゝ所で丁度お前に逢つたのだ、今家へ行つた所が留守だといふから出直して後に行かうと思ふ矢先、爰で逢つたはこつちの仕合せ、もう居

催促でも取らにやあならねえ。

ト床几へ腰を掛ける、虎藏茶を汲み、

虎藏　まあお茶を一つお上りなさい。

源六　いや茶などは呑み度くねえ。さ、此間貸した二十圓、たつた今戻して下せえ。

虎藏　其の御立腹は御尤もだが、中々其儘棄ておく樣なわたくしぢやあござりませぬが、何分都合に行きます先が、今日や明日には出來ませぬから迚ものことの待序、どうぞもう四五日の所をお待ちなすつて下さりませ。

源六　どうして〳〵四五日所か、もう一日でも一時間でも待たれねえといふ譯は、いはゞ、こりやあ恩金だぜ、深い話しは知らないが、慥お前のお袋が大恩受けたお主の息子を仔細あつて家へ引取り、思ひ掛けない大病に旣に命も危い所を救つて貰つた診察料と、藥の代に差支へるから、どうぞ主人の實家から金の來る迄時借に二十圓貸してくれろと、淚をこぼして賴みなさるから、親切づくで貸した金だ、それも達て出來ねえなら文句を言ふにやあ及ばねえ、これから勸解へ願つて出るから、差紙の來るのを待つて居なせえ。

ト源六立上り下手へ行かうとするを、

虎藏　あゝもし〳〵、まあ待つて下さりませ、そりやあ今も仰しやる通り診察料と藥の代に遣つたあれは恩金故、家を賣つても上げませねばならぬ所だが家は店借り、又造作を拂はうにもやうやく五圓か六圓では百貫の抵當に編笠一蓋、それも上げぬとは申しませぬが、さうした日には二月越し苦しい中でお世話をした若旦那も置くことが出來ねば、折角盡した是迄の親子の忠義も水の泡、こんな困つたことはござりませぬ。

ト虎藏延梅に見えるやうに泣く。延梅氣の毒なる思入にて、俯向き居る。

源六　さうお前の方で譯を言ふと、是が女郎買に遣つたといふぢやあなし、人一人助けたこと故少しの勘辨はしてやりてえが、又此方に言はせると知つての通りわしは判人、あの時貸した二十圓は、此頃上州の高崎から藝者を抱へに、馬喰町へ泊つて居なさる倉ケ野屋の三郎兵衞といふ旦那から請取つて來た手付金、今日藝者に行かうといふ娘ッ子があつて出て來た故、あの金を取らねえ日にやあ、旦那に顏が出せねえ譯だが、まあ己の身にもなつて見なせえ。

ト源六當惑の思入、虎藏延梅に向ひ、

虎藏　今お聞きなさる通りの譯で實に源六さんにもお氣の毒でござりますが、こりやあ何も出して下さいと申す譯ぢやあござりませぬ、まあ御相談でござりますが、長く借りて置きませんでも、是から夏季になりますから、涼み舟の腕艪を押しても十五や二十は返せますから、それ迄の御工風は付きますまいか。

トぢつと思入あつて、

延梅　虎藏さんやおつかさんに、斯ういふ御苦勞掛けるのも半七さんの御病氣故、私がどうかしてなりとお返し申さにやならぬけれど、横濱とは違ひ東京では四邊に知つた所もなく、それには女のこと故に思つたばかりで心に任せず、お氣の毒でござりまする。

ト俯向き居る。源六思入あつて、

源六　お詞の中でござりますが、此間虎藏さんからちよつと話しに聞きましたが、お前さんが横濱の延梅さんでござりますか。

延梅　誠にお恥かしう存じまする。

源六　こりやあお初にお目にかゝりましたが、定めしお聞きでもござりませうが、此金の一件ぢやあ誠に迷惑して居ますが、お前さんも思ふお方の命を助けた二十圓、お掛り合の其金故どうか仕ようと思召すお心ならば今が今、金をいらずに濟ませます工風もないぢやアありませんが、此虎藏さんを延梅さん、助けてやる氣はござりませぬか。

延梅　其お金とて虎藏さんの身に付けたといふではなし、半七さんの御病氣へ遣ひました事故に、私で濟みますことならば、助けて上げて下さりませ。

ト源六虎藏顏見合せ、こなしあつて、

源六　其思召しならお前さんに、御相談がござります。

延梅　して其相談とおつしやりますのは。

源六　外の事ぢやあござりませぬが、此人に貸した金は今爰で話した通り上州の高崎から藝者を抱へに來たお方が、わしに渡した二十圓、どの道金で返さずとも詰り藝者をやれば濟むこと、まあ話さないことは分らないが、十日か二十日の所をお前さんが高崎へ行つて、藝者の眞似をしちやあどうでござりますね。

虎藏　もし〳〵そんな失禮を言つちやあいけませぬ、金は金で返すとして、延梅さんを藝者などに。

源六　これさ、つまらねえ事を言つたものだ、何も是が延梅さんがお嬢さんといふではなし、稽古の間には淨瑠璃

で座敷があれば、お客をも勸めにやならぬお師匠さん、東京でなら家元へ濟まないといふ譯もあらうが、譬にもいふ旅の恥二十何里とある所、こつちへ知れる氣遣ひなしだ。

虎藏　そりやあ東京へ知れもしまいし、又女郎でもなし藝者の事故身を穢す事もなければ、少しも恥にはならぬから師匠がわしの姉なら、默つてお前に渡してやるが、現在恩ある旦那の色を、そんなことでもした日には、天道樣へ濟まぬからそりやあどうも不承知だ。

源六　さ、さういつて居ると果しがないから、是非勸解へ出にやあならねえ。

虎藏　いくらとやかういつた所が、渡す金が出來ないならようござります、是から直に勸解へ召連れ訴へをして下せえ、わつちやあ鎌倉へ這入る氣で、もう覺悟を極めました。

源六　それぢやあどうでもお袋が、恩を受けた主人の爲故、罪を着て行く心か。

虎藏　妾らが御恩の送りどころだ。

ト覺悟の思入、是を聞き延梅氣遣ひのこなし、

延梅　あゝもし〳〵、源六さんとやら、お世話になつた虎藏さんへ、御苦勞掛けては濟まぬゆゑ、わたしをどうぞ高崎へ藝者にやつて下さんせ。

虎藏　どうして〳〵お前さんに、そんなことをさせる位なら、此の心配は致しませぬ。勸解へ願つて下せえ。

延梅　其の御親切は忝いが、所詮今の所では半七さんも又わたしも、不義理に家を出たことなれば、斯うしてくれと親許へ無心を言うてやるにもやられず、いつその事に旅へ出て覺えた業の三絃で稼いだことなら此お金が戻せようかと思つて居た故、決して遠慮に及びませぬから、どうぞやつて下さんせ。

ト愁ひの思入にて言ふ、虎藏しめたといふ思入にて、氣を替へ、

虎藏　それぢやあ誠に濟みませぬが、厭でも三日か五日の所を高崎へ行つて下さいまし、其替りお店から金が屆いた其時は、直お迎ひに參ります、どの道長いことぢやあなし、十日より先へは延びますまい。

延梅　其の替り私の留守中、まだ病擧句の體故、どうぞ風を引かぬやう氣を付けて上げて下さいまし。

虎藏　そりやあお言ひなさる迄もござりませぬ、お袋が付いて居りますから、必ずお案じなされますな。

源六　さう相談が極つたら、念の爲め證文は返してやらう。

　ト源六懐中より呉服屋の引札と文紙を出し

さあ證文はそつちへ渡します。

　ト出す、虎藏受取りよく／＼見て、

虎藏　こりやあ引札のやうだぜ。

源六　あゝこれ、引替の古證文渡したら言ひ分あるまい。

　ト呑込ませろ。

虎藏　へい慥にお貰ひ申しました。

　ト懐中なし、又文紙を取上げ、

此の證文は版でござりますね。

源六　それも今のと同じ事で、段々世界が開化に任せ、此頃用ふる文紙といふのだ。

虎藏　初めてこりやあ見ましたが、まるで御布告の様でござりますね。

源六　こんな調法なものはない、只金高と名前さへ書入れれば、それでよいのだ。ちよつと硯箱を貸して下さい。

虎藏　へい／＼。

　ト茶見世より硯箱を持つて来る、源六書入をして、

源六　則ち此の證書は二十圓で、名前はうめと書きましたから、爰へ爪印を押して下さい。

　ト延梅の前へ出す、延梅爪印をする。

延梅　此處で宜しうござりますか。

源六　それでようござります。

　ト證文をしまひ、

さ、よければお梅さんわしと一緒に出かけませう、

　ト立上る、延梅ちつと思入あつて、

延梅　とは言ふものゝ十日でも、旅へ稼ぎに行くことなれば、半七さんへ相談して、

虎藏　成程そりやあ御尤もだが、然しそれを打明けられては。

延梅　え。

虎藏　いえなに、打明けたら若旦那へ、私親子が濟みませぬから、助けて下さるお心なら、どうぞ逢はずに下さいまし。其替り、後でとつくりお話しは致しまする。

延梅　それでも心が濟まねば、ちよつと門から一目逢うて、暇乞をさして下さんせ。

虎藏　そんなら宜しうござりますから、何にも言はずに見たばかりで、直お歸りなされませ。

延梅　決して何も申しませぬわいな。

虎藏　きつと言つてはいけませぬぜ。あ、これでやう／＼

落着いた。
源六　何にしろ爰は往來、魚幸へ行つて待合せよう。
延梅　どうぞ其間に水天宮様へ、お禮參りにやつて下さいまし。
虎藏　御信心のことだから、早く行つておいでなせえ。
源六　それぢやあ魚幸に待つて居ますぜ。
ト延梅立上り思入あつて、
延梅　あ、どうやら氣掛り、
兩人　え、
延梅　いえ直に行つて參りまする。
ト端唄になり、延梅愁ひのこなしにて橋を渡りはひろ。
兩人跡を見送り、
虎藏　源六どうだえ、旨くいつたぢやあねえか。
源六　すつかり筋が立つて居るから、利口さうだが一べえ喰つたな。
虎藏　此の狂言を書かうばつかり、濱からこつちへ出掛けて來てから、お袋初め家の奴等へ堅氣になつた面をして、好な酒も吞まずに居たが、是からあいつを玉に遣つて、先づ百五十兩で上州へはめ込む所迄仕上げたから、其證文へ書き足して、早く直しておいてくれ。
源六　案じるなえ、其處は拔目のねえ俺だ。
ト源六文紙へ書足し、
どうだえ、手際の程を褒めてくれ。
ト手に取りよく／＼見て、
虎藏　むゝ旨え／＼、斯う證文が仕上つたら、早く金を取りてえものだ。
源六　魚幸に倉ヶ野屋の親指が待つて居るから、水天宮様から歸つたら、娘を連れて直に來ねえ。
虎藏　それぢやあ爰に待合して、女が來たら直に行くぜ。
源六　まあ手付に五十圓、こりやあ今渡しておかう。
ト紙入より紙幣を出し、
紙はあるか。
虎藏　さつきの古證文があらあ。
ト以前の引札を出し、
いや有難え／＼。
ト紙幣を包みながら、
古證文といやあ、こいつぢやアさつきおれはひやりとしたぜ。
源六　大丈夫だ、知れッこはねえ、文紙が版の所から引札でごまかしたのは、何と己が智慧だらう。

虎藏　しかもこいつあ呉服屋の、夏物賣出しの引札だ。
　ト札帖を懐中する。
源六　其の夏物の賣出しより、先づ口明に五十兩
虎藏　是から方々脊負ひ廻し、荒い利得を取つた上、
源六　本場の柄で賣り込めば、
虎藏　一といつて二のねえ代物、
源六　寫眞で客に見立てさしても、
虎藏　正札付掛値なしだ。
　ト此以前橋の上より以前のおむら出來り、是を聞く、虎藏心付きびつくりし、
むら　もし、兄さん。
虎藏　や、おむらさん、其處に居たか。
むら　いゝえ、わたしやたつた今。
源六　むゝ、それぢやあ二人の今の話しを。
むら　なに、今の話しとお言ひのは。
源六　それ、呉服屋の、
　ト言ひ掛けるを、
虎藏　あゝこれ、
　ト留める、
めつたに符牒を。

　ト源六と顔見合せ思入あるを、道具替りの知せ、
言つちやあいけねえ。
　ト呑込せる、おむらは合點の行かぬこなし、此の模様宜しく流行唄波の音にて道具廻る。

（夢の三浦屋の場）

本舞臺三間の間常足の二重、正面上手一間床の間、月に時鳥の掛物、籠花生に杜若を活け、下手銀襖紅葉に流れ、光琳風の畫、上の方一間障子屋體、正面一面に伊豫簾をおろしいつもの所枝折戸、下の方二階家の淨瑠璃臺、是も伊豫簾を下し、二階下舟板の塀、此の前卯の花の四ツ目垣、總て三浦屋別莊の體、爰に太助若い者の打扮竹箒を持ち、土松奴鬘紺半纏、腹掛股引植木屋の小僧にて番手桶にて水を打つて居る、高窓振袖、高人留袖新造にて、柴折戸の側に立掛りゐる、此見得端唄にて道具留る。

高窓　太助どん、よく綺麗に掃除が出來たね。
太助　あんまりしたくもないけれど、旦那が來ると小言だから、見えるだけ掃除をしたのさ。
土松　なに、太助さんは邪魔をするばかり、みんな私が掃除をしたのだ。

太助　そりやあ手前は小さくつても、日に幾らといふ立前を取る植木屋だから、當りめえだ。
高人　そんな骨をしみを言はないで、まあ爰へ來て一ぷくお上りな。
太助　さつきからのみてえ所だ。どれ足を拭いて一ぷくやりませう。
ト手拭で足を拭ひ、こちらへ來て煙草を呑む。
高窓　廓と違つて此の寮は、何かゞ不自由な其替り、向島を一目に見て、こんないゝ所はございませぬ。
高人　それに又お客は取らず、勝手に宵から早く寐られ、何よりわたしや嬉しうござんす。
太助　是で色男に逢はれゝば、言ひ分なしでござりますね。
高人　おゝ情人と言へば、文さんの返事をお前預いておくれか。
太助　昨日江戸へ行きましたから、お前の文をお渡し申し、返事を取つて參りました。
高人　おや返事を書いてよこしたら、早く見せておくれならよいに。
高窓　太助どん位見世中で、意地の惡い人はありませんね。
土松　喜助さんはいゝ人だが、太助さんは意地が惡い、それといふのも曲つて居るからだ。
太助　なに、曲つて居る、おらあ神田で生れやあしねえ。
土松　ほんにお前も氣の早い、曲つて居るのは、いつけんぢやあないよ。
太助　さうして、何が曲つて居るのだえ。
土松　根性ぽねが。
太助　何だと。
土松　なに、こつちのことさ。
高人　そんなことはどうでもいゝから、何といつてよこしたか、早く見せて下さんせ。
太助　見せるのは造作もないが、昨日文さんを尋ねるのでどんなに暇をつぶしたか知れません、只ぢやあ是は渡されない。
ト懐から手紙を出して見せる。
高人　そんなことを言はないで、早く私に渡しておくれ。
高窓　此のお禮には高人さんが、不斷お前が賴みなさんす、願ひを叶へて上げるとさ。
太助　それなら直に渡しますが、高人さん、違ひないかえ。
高人　まあ違ひないのよ。
太助　まあといふのは怪しいね。

高窓　そりやあわたしが證人だから、早く見せて上げて下さんせいな。
太助　高窓さんが證人なら、文ちやんの返事を渡しませう。
ト高人へ渡すを、高人開き見て、
高人　おや〳〵是は四角な字ばかり、假名がなくツては讀めはしない、高窓さん讀んで見て下さんせ。
高窓　お前に讀めない文が、何でわたしに讀めようぞいな。
高人　何でこんな分らぬ返事を、私の所へよこしたのか、此頃聞けば新聞の投書とやらをするとやら、それで四角な字を書くのか、ほんに生利ぢやアありませんか。
高窓　さまして置いて澤山お上り。
ト脊中を叩く。
高人　太助どん、お前それを讀んでおくれな。
太助　どうして〳〵、わたしにやあ讀めねえ。
ト土松竹切を取り、
土松　おい太助さん、お前杖を上げようか。
太助　なに、己に杖をくれようとは。
土松　それでもお前は目が見えないから。
太助　見えねえことがあるものか、大きな目が二つある。
土松　三つあれば化物だが、幾つあつても此文が讀めないければ節穴同然。
太助　そんな憎まれ口をきいたつて、手前にも讀めやしめえ。
土松　これが讀めねえなどゝいふのは、そりやあお前の子供の時分だ、今時の子供に新聞位讀めねえ者があるものか。
高人　ほんに、此子は手を能く書くよ。
太助　それぢやあ是を讀んで見ろ。
土松　今讀むから、御苦勞ながら、東西〳〵と言つてくんねえ。
太助　惡く洒落やがある。「東西〳〵。」
ト土松件の文を開き、
土松　淨瑠璃名題。
ト太夫連名役人替名を讀む。
太助　イヨ口上、成程、是は感心だ、
土松　何とおいらの目は見えるだらうね。
太助　こいつあ一番閉口した。
高窓　さうしてこりやあ文さんの所から來たのかねえ。
土松　なあに、こりやあ、爰の隣の塾へ、今日清元の家元さんが來て、新淨瑠璃を語る連名だ。

高人　それおやあ後に、淨瑠璃があるのかえ。
高窓　そりやあまあ嬉しいねえ。
高人　然しそりやあほんたうかえ。
土松　なに、噓をつくものか。「いよ〳〵此の所淨瑠璃初まり左樣。」
太助　おゝ、御苦勞々々。
土松　どなたもおやかましう。
ト見物へ辭儀をして上手へはひる。
高窓　今の手紙は太助どん、お前がした戲事だね。
太助　なに、そんなことをしますものか。
高人　ほんに憎らしい太助どんだよ。
ト脊中を叩く。
太助　どうで年中憎まれ役、可愛がられる方はむづかしい。
高人　お前そんなことをお言ひだが、遣り手衆のお爪どんが、お前に思ひ付いて居なさんすよ。
太助　そりやあほんたうの話かえ。
高窓　毎日願の叶ふやうにと、頻に拜んで居なさんすわいな。
太助　しつかり溜めて持つて居るから、眞實ならば有難い。
高人　そんなに嬉しうござんすかえ。
太助　それでも女だから嬉しいのさ。
高人　おやまあ、あんなどら猫を。
ト此時奥よりお爪遣手の裝にてずつと出て、
お爪　なに、どら猫がどうしたえ。
高高　え、
トびつくりする。
太助　其どら猫と言つたのは。
高人　あれさ、それを言つてはいけませんよ。
太助　えゝ、言ひたくッて〳〵、むか〳〵胸へこみ上げて來た。
高人　太助どん、覺えておいでよ。
ト端唄にて高窓高人奥へはひる。
お爪　今どら猫と言つたのは大方わたしのことだらう。
ト此内太助番を直し、お爪を尻目で見る。
これ太助どん、何故をかしな目付をするのだ。
太助　お前が私に氣があると、高人さんが言つたから、それでお前を當込む氣だ。
お爪　えゝ氣樂なことを云ひなさんな、そんな色氣は取つておいて、慾氣で急に話があるよ。
太助　そいつは何より耳よりだが、其慾氣といふ話しは。

お爪　外でもないが高尾さんを、今度いよ〳〵頼兼様が、身請をなさる事に付き邪魔になるのは悪足の浪人者の重三郎、此間から說得して、先づ花魁は得心させ思ひ切らせることにしたが、今にも爰へ重三郎が來たらば思ひ切る樣に、恥をかゝせて遣りたいから、助鐵砲に出てくんなせえ。

太助　憎まれ口は己が持まへ、厭がらせるのは譯はねえが、それが慾氣になるのかね。

お爪　腹を立たして突出せば、頼兼樣から一廉の御褒美を下さるのさ。

太助　御褒美にさへなることなら、思入恥をかゝせてやらう。

お爪　得心ならば奥へ來ねえ、言ひ合せをして置かう。

太助　わたしを奥へ連れて行つて、慾氣と言つて色氣かね。

お爪　えゝ己惚れたことを言ひなさんな。

太助　さう言ひなさるが、此の中ぢやあ、

お爪　ほんに慾氣と色氣ばかりは、

太助　幾歳になつても拔けやあしねえ。

お爪　其の色慾でゆつくりと、

太助　奥へ行つて話しませう。

ト端唄の合方にて、兩人上手へはひる。時鳥笛になり、知せに付き、下手二階家の伊豫簾を卷上げる。爰に淸元連中羽織袴にて居並び、延壽太夫獨吟の淨瑠璃になる。

浄るり〽幾かへり待乳越行く時鳥角田の渡りに程近き、三浦が寮は里遠く浮世離れて靑々と、茂る樹木の若楓、

ト此内時鳥笛をあしらひ、知せに付正面の伊豫簾を卷上げる、内に高尾裲襠好の打扮にて唐机に向ひ、立文を書いてゐる。

〽高尾は爰へ川竹の、憂を脫れて出養生濁に住めど川水の、淸き流れに影寫す筑波の山もまだ春の名殘惜しみて薄霞、

ト此内高尾墨を磨り、書きかけて考へる事など宜しくあつて合方になり、

高尾　物の本にも光陰は、矢よりも早く月日には關守なしと記せし通り花の盛と諸人が愛しもいつか昨日と過ぎ今日は梢も緑して、おち返りなく時鳥、此の啼音をば聞くにつけ、君の身請に是非なくも言交したる重三さんと、切れねばならぬわたしが身の上、月日と共に指折れば言交してより三年越し、二夜と逢はぬことのなき一方なら

ぬ深き仲、後へ心の引かされて、鳴く音血を吐く思ひぢやわいなあ。

〽雨もつ東風に誰が寮か、梛に通ひし大和琴、・

琴うた『世をうしと言ひし御前の神垣へ、掛し誓ひも洩れ易く浮名の立ちて人毎に、よしなき事を廓崎や、

ト此内花道より重三郎着流し大小浪人の打扮、富士編笠を持出で來り、花道へ留り思入あつて、

重三　替り易きは秋の空と世の諺に言ふけれど、時鳥啼く頃ほひはしげ／＼雨も降勝に、兎角に空も定まらず、見る間に移る卯の花くだし、是に付ても三浦の高尾、二世の誓ひをなせし故よもやと思へど人心、頼兼公に身請され俄に館へ參るよし、それが實の事ならば我に話のあるべきに、今に文さへよこさぬは卯月の空の心替りか、はて頼み少なきことぢやなあ。

ト又琴唄模樣になり、

〽心關屋に書送る筆の綾瀬の水かれて、絲淺瀬の葭蘆原に愚癡を水鷄の啼くや短夜。

ト此内高尾は文を書居る。重三郎高尾の心がどうであらうといふ思入あつて、舞臺へ來る。よき程に奥より高窓、高人出來り、重三郎門口から覗く、高窓つかつかと枝折戸の側へ來る、高人は誂へ二枚折の御簾屏風で高尾を圍ふ、合方にて、

高窓　もし、其所へござんしたは、重三さんではござんせぬか。

重三　おゝそちは高窓、花魁は此寮にか。

高窓　あい、此間から氣合が惡く、廓を離れて此寮で、養生してござんすわいな。

重三　寮で養生するといふは、大したことであつたのか。

高窓　いえ／＼、さのみなことではござんせん。

重三　さのみでないとは何より嬉しい、重三が來たと言うてくりや。

高窓　あい、さう申しませうわいな。

ト立掛る、此時高人前へ出て、

高人　あゝもし高窓さん、花魁は氣合が惡く、人に逢ふのが面倒故、誰が來ても逢はぬから、斷つてくれと言ひなさんすれば、折角お出なさんしたが、お目にかゝりはなさんすまい。

重三　いや逢はぬ故に斷れと、いふのはそれは外の者、なに遠慮ない此重三、起返るのが面倒なら寐て居てよいから逢はしてくりやれ。

高人　誰彼なしに人さんに、逢ふのが厭ぢやと言はしやんすれば、今日はお歸りなさんせいな。

ト重三郎思入あつて、

重三　すりや重三郎でも逢はぬといふのか。

高人　お氣の毒でござんすわいな。

〽すげなき風に花散りて葉隱れに咲く遲櫻、ふつと目につき見合す顏、

ト此内高人氣の毒だといふ思入、重三郎合點の行かぬこなし、高窓は高尾に逢へといふ思入にて二枚折を明ける、是にて高尾重三郎顏見合せ、

重三　や、其處に居るのは高尾ぢやないか。

高尾　あい、わたしでござんす。

重三　脱れぬ事で二月越し、逢はぬ重三が尋ねて來たに、其處に居ながら最前から只の一言詞も掛けず、知らぬ顏をして居やるは、

高尾　氣合が惡うござんす故、人に逢ふのが厭でござんす。

重三　氣分が惡く逢ふのが厭とは、そりや人にもよつたもの、末は夫婦の約束なし何隔なき重三郎に、逢はぬといふはどうしたことだ。

高尾　さあ、いやと言うて逢はぬのは、お前のお爲を思ふ故。

重三　何と言やる。

ト重三郎つか／＼と行かうとするを、高窓高人もしと重三郎を留める、高尾立上り、

高尾　今更言うて返らねど、馴初めたるは三とせ後、

ト口說になる。

〽櫻まばゆき花の頃、人目忍びし富士笠に腰卷羽織主や誰、内やゆかしくさし覗く戀の山口巴屋で初に逢ひしが緣となり、其夜は雨にしつぽりと曉傘のきぬ／＼も、しらで契りし二世三世、

ト高尾よろしく振あつて、さほどの仲でありながらと立掛るを、高窓高人是を留めることあつて、

重三　さ程迄に言交せしに、何故あつて今となり、おぬしは左樣な事を言ふぞ。

高尾　さあ、雪の降る日も雨の夜も通ひ詰めたる重三さん、大門を打つ大盡も郭の金には詰るの習ひ、此後長く逢ひ通さば、末は互ひに身のつまり、死ぬより外はござんせぬ、さうならぬ内お互ひに別れてしまふが上分別、何よりお前の爲めでござんす。

重三　それは今更言はずとも疾より知れたことなれど、い

つもと逢ひ今日に限り、何故左樣なる事を申すか、それとも久しく參らぬ故惡しき氣合の其所で、何ぞ心に障りしか、障りしならばゆるしてくりやれ

高尾　何も許すの許さぬのと、そんな譯ではござんせぬが、わたしや疾より心が替り、切れる氣になりましたわいな。

ト思ひきつて言ふ、重三郎思入あつて、

重三　すりや、二世迄と言交したる、二人が仲を今となり、切れる心になりしとは、合點の行かぬこなたが詞、以前に替り某が尾羽打からせし浪々に、愛想をつかす心底か、隱さず爰で言うてくりやれ。

〽野邊に萠出し早蕨の拳握りて詰寄れば、折から奧の一間より立出る遣手、若い者、

ト重三郎思入あつて、高尾へ詰寄る、高人支へる、此時奧よりお爪太助出て來る。重三郎高人を振拂ひ、立掛るをお爪太助立ふさがり、

お爪　これ〳〵重三さん、見世とは違ひ此寮へ、何でお前はござんしたのだ、高尾さんを以前の身と大方思つて居なさんせうが、賴兼樣に身請をされ、廓を引いた上からは、最早お妾同然故、指でもさして下さんすな。

太助　今花魁が見限るも、少しも無理なことはない、名におふ六十四萬石のおほ大名の賴兼樣と、三度の食もむづかしい瘦浪人の重三さん、身請に附て新造に出來た屋形の高尾丸、乘替るのは尤だ。

お爪　手鍋提げても添ひたいと、いふのは昔の君傾城、今時そんな野暮はない。

太助　そでないものと言はれても、襟に付くのがまあ當世、

お爪　身幅も狹い瘦浪人、しがないその身を顧みて、

太助　早く家へ歸りなさい。

重三　すりや高尾には心が替り、賴兼公に身請され、館へ參ると申すのか。そなたばかりは其樣な、そでないことはあるまいと思うて居たは我過り、百度千度悔ゆるとも今更返らぬことながら、思へば悔しきことぢやなあ。

ト悔しき思入、高尾ちつとこなしあつて、

高尾　嘸やわたしが重三さん、お前は憎うござんせうが、是には深い譯あつて。

お爪　あゝもし、深いも淺いもござんせぬ、金がないから嫌はれたのだ。

ト憎く言ふ。

太助　金のないのは重三さん、首のないのに劣つたものだ。

ト同じく憎く言ふ。

重三　何と。
　トロ惜しき思入。
お爪　首のないとは、失敬千萬。
太助　まつぴら御免下さりませ。
重三　諺に言ふ妓女に戀なし、寶を以て戀とする八つを忘るゝくつわの薄情、今ぞ思ひ當つたり。かゝる心と知らずして眞身の異見も餘所に聞き、通ひ詰めたる重三郎、人に面は合はされぬ。よくもうつけに致したな。
　トきつと言ふ。
お爪　こつちでうつけにせぬけれど、お前があんまり間拔だから、とゞの詰りが花魁から愛想をつかされ今となり、行所のないみじめな其のざま。
太助　二階をせかれて其後は、大引過にうろ〳〵と、格子の外で百度を踏み、按摩や犬に蹴つまづき轉んだざまはなかつたが、今考へると重三さんだ。
お爪　もし太助どん、替ればかはる今の此のざま。
太助　花魁が乘替へたは、こいつあ少しも無理ぢやあねえ。
重三　よくもわいらは言合せ、浪人なれど大小をたばさむ島田重三郎に、恥辱を與へたな。
高窓　是にも譯のあることなれば、

高人　今日は此儘お歸りなさんせ。
重三　歸れとそちが言はずとも長居致す所存はない、人と思へば今日迄、欺れしが腹立てど、人の皮着た畜生と思へばさのみ腹も立たぬ。
お爪　其處へ心が付いたらば、
太助　とつとゝ姿を、
兩人　歸らつしやい。
重三　とはいへ、此の儘、
〽落來る水に上げ南、風に波立つ風情にて立歸らんとなせしをば、
　ト重三郎しを〳〵として行きかけ腹の立つ思入にて、つか〳〵と立歸るを、お爪太助兩人重三郎を支へる、高尾思入あつて、
高尾　もし重三さん、二世も三世も言交し、一方ならぬ仲なれど、別れにやならぬ今日の仕儀、是もお前の爲ゆゑに。
重三　や。
高尾　さあ、爲にならうがなるまいが、構うた事はなけれども、浮世の義理に心では。
お爪　あもし、切れる男に入らぬ義理。

太助　お構ひなくと、花魁には。
高人　一先づ奥へ、
三人　ござんせいなあ。
重三　すりや、どうあつても、高尾には、
高尾　これが別れでござんすわいな。
重三　さう聞く上は。
　　ト立ちかゝるを留めて、
お爪　斯う嫌はれた上からは、
太助　兎やかう言ふはこなたの恥。
高尾　さりとは未練でござんすぞえ。
〽月の出汐に打寄する南も北に吹替り、日は山の端へ入相に胸に時打つ思ひにて、
ト此時高尾濟まぬといふ思入にて、側へ寄らうとするをお爪隔てる。重三郎口惜しき思入にて立掛るを太助支へ、双方宜しく、トゞ高尾、高窓、高人、お爪奥へはひる、重三郎、太助を投げのけ、きつとなり、
重三　あゝ、頼み少なき世の中に、昨日に替る飛鳥川、いかに流れの女とて二世の誓ひを水となし、深き契りに引替へて淺き心の高尾が薄情、何か仔細のある事と思ひの外に頼兼が、妾となつて榮耀なす、其身の榮華に見かへしか、清き心と思ひしも濁江に住む水臭き常の遊女であるからは、奥へ踏込み一刀に、此身の恨みを晴らしてくれん。
〽雲立つ空に雷の音も烈しく一陣の梢を落す夜嵐に、夢は破れて、
ト此内重三郎太助を相手に立廻り、宜しく雷の音にて奥へ走り入る、太助後を追掛けはひる。大ドロドロにて、此道具知せに付き、居所替りに替る。

(巳の吉内の場)――本舞臺一面の平舞臺正面一間押入戸棚、眞中一間障子二枚の出はひり、上下破れたる鼠壁、下手の屋根に引窓、平舞臺に一つ竈を置き、此外一間葺おろしの下家、三尺縄暖簾三尺中窓、いつもの所門口、總て仙臺堀船乘内の體。上手に小高き二枚折を立て、ドロ〳〵にて道具納まる。とさんげさんげ合方になり、奥よりおしげ世話装の母親にて盆へ急須と茶碗を載せ出來り、
しげ　若旦那はまた晩にはおよられまいに、高鼾でよくお休みの御様子だが、もうお目覺でもよからうが、
ト屏風の側へ行き思入あつて

胸へ手でもお上げなされてかだいぶ魘されておいでなさる、こりやお起し申して上げよう。

ト急須を置き、

もし若旦那々々、もうお起きなされませぬか、お目覺しを上げませうと、お茶を入れて參りました、もしお起きなされませぬか、若旦那樣。

ト大きく言ひながら屏風を取る、内に半七五十日鬘着流し前帶にて、床の上に起上り、ほつと思入あつて、

半七　扨は今のは夢でありしか、むう。

ト誂への合方になり、

しげ　お勞れのせゐか大そうあなたは魘されておいでなさいましたが、怖い夢でも御覽なさいましたか。

半七　まだ病擧句で身體が勞れたせゐか、枕に就くと夢ばかり見てならぬが、今日は取分け腹の立つ夢を見た故、思はずも魘されたことゝ見える。

しげ　なに、腹が立つとおつしやりますは。

半七　さあ、外の事ではないけれど、お梅が隣の娘から借りてくれた合卷は、芝居を直した伊達の狂言徒然の餘り一二枚讀んで其儘とろ／＼と、現の樣に夢に見たは、高尾が太守賴兼の心に從ひ、現在の間夫の島田重三郎へ愛想づかしを言ふ所を、あり／＼見し故まことゝ思ひ、人の事でもそでない奴と腹が立つてならなんだが、それで思はず魘されて今起されたと見えるわえ。

ト思入、おしげ介抱しながら、

しげ　何の事かと存じましたら、それはいらぬあなたの御苦勞、譬にも申す通り夢は五臟の勞とやら、まだお體がほんとでない故夢を見てさへ其樣に、魘されておいでなされば、もう一週間も牛の乳を上つて、御養生なされませ。

トおしげ力を付ける思入、半七思入あつて、

半七　見ればお梅が居らぬ樣ぢやが、何處ぞへあれは行きましたか。

しげ　はい、先程ちよつと水天宮樣へ、お禮參りに行くというてお出掛けでござりました。

半七　よくまあ彼女も心に掛けて參詣をしてくれる、わしが病氣の其内も每晩川岸で百度をあげ、水迄あびてくれた故、其一心でも此病氣は、治らぬ事はない筈ぢや。

しげ　お梅さんのお心立は、稽古所などをなされたやうなそんな樣子は露程なく、堅い所の娘にもまさつた優しい取廻し、あなたがお家を餘所にして連れてお逃げなすつ

たも御尤もでござります。そりやあ器量は十人並に勝れた娘は幾らもあらうが、あゝいふやさしいお心の、娘は外にはござりませぬ。

半七　いかにもそなたの言ふ通り、眞身も及ばぬ看病は、なか／＼餘人の及ばぬ所、それに引替へ今見し夢は、本ではあれど人情ゆゑ我身につまされ悔しかつたが、どうやら夢に縁のある所の名さへ仙臺堀、其三つ股も目の先に、愚痴の様ぢやがもしお梅が、二心にもなる時は一途にそれと定めたる深き思ひも今の間に、散るや紅葉の仇あらし、あゝどうかさういふことのない様、早く安心したいものぢや。

しげ　外の人なら知らぬこと、お梅さんに限つては、そんなことはござりませぬ。

半七　然し、知れぬが人心、もしや今のが正夢なら、

しげ　えゝ。

半七　無殘念なことであらう。

ト　ちつと思入、おしげ捨ぜりふにて茶をついで出す。此内下手より、以前の延梅へ虎藏付添ひ出來り、下手にて之を聞き延梅内へはひらうとするを虎藏留める、延梅許してくれと手を合せ拜む、虎藏見られぬ内と無理にせきたてる、此内源六出來り早くといふこなし、延梅名殘を惜しむを源六無理に手を取り、歸らうとする延梅を虎藏留める。之にて是非なく泣きながら源六にせりたてられながら花道へはひる、虎藏花道附際にて後を見送り、しめたといふ思入あつて足音をさせ、門口を開け、

虎藏　若旦那、お心持がよいと見えて、是へお出掛けでござりますか、かるはずみをなすつちやあいけませんぜ。

半七　おゝ誰かと思つたら虎藏か、今日は取分氣分もよく、まことに全快したやうだ。

虎藏　それはまア結構でござりまする。

ト　下手へ住ひ思入あつて、

おツかあ、今己が行つた先で、おつな話しを聞いて來たが、お梅さんは内に居なさるかえ。

しげ　水天宮様へお禮參りに、さつきおいでになつたわい。

虎藏　えゝ、

ト　合點の行かぬ思入あつて、

はてな、それぢやあ今聞いて來た話しに違えねえかしらぬ。

ト　半七おしげ思入あつて、

半七　なに、お梅の事に付いて、違ひないと言やるのは、

しげ　これ忰どういふことであるぞいの。

虎藏　まだ慥には申されませぬが、あなたにお話し申すのは、ちとお氣の毒な事でござりまする。

しげ　若旦那へはお氣の毒でも、言はずに居ては事が分からぬ。

半七　さ、どういふ事ぢや、話してくりやれ。

ト進み寄る、虎藏思入あつて、

虎藏　言はずに居ても氣掛り故、思ひ切つて申しますが、丁度只今汐時が下げへ廻つてをりますから、若旦那が召上るのに仙臺堀のへちへ行つて三ちよぼ許り白魚をすくつて來ようと存じまして、荷足を出した其所へ、佐賀町の方から銀次の野郎が汗を流して駈けて來て、わつちを呼ぶから行つて見ると、お梅さんが其以前死ね死なうといふ仲であつた、横濱の才取の慶次郎といふ男と相車で、水戸の方へ乘つて行くのを慥に見たと銀次が知せに來ましたが、よもやそんな不義理な事をしなさる人ぢやアあるめえと思つて歸つて來て見ると、留守と言はれて解せねえのは、御緣日でもねえ間日に水天宮樣といふのも怪しい、さうして見ると以前の蟲が喰ひつきに來て逃げたと見えるが、若旦那はいふに及ばずおつかあや己迄を、あんまり踏付にした仕方だと、癪に障つてこてえられね。

ト虎藏無念の思入、兩人びつくりなし、

半七　え、そんならお梅は其以前、言交したる男があつて、

しげ　一緒に連れて逃げたといやるか。

虎藏　さあ、銀次が車へ乘る所を慥に見たと言ふからにやあ、てつきり逃げたに違えねえ。

トきつとなる。

半七　扨はお梅は半七を、袖になして逃げたとかや。

し半　えゝゝゝ。

ト兩人びつくりしてどうとなり、

しげ　さういへばお梅さんは、水天宮樣なら疾のこと、お歸りなさらにやならぬ筈ぢやが、これで思ひ當つたわいの。

虎藏　なに歸つて來なさる譯がねえ、しかも車は後押附き、大急ぎだといふことだから、大方二人は今時分水戸街道の立場茶場で、ちん／＼かもでやつてるだらうが、酷い女もあるものだ。

ト半七に向ひ、

もし若旦那、飛んだやつにお掛り合ひなすつたね。

ト無念の思入にて、

半七　さういふやつとは露知らず、心を奪はれ現在の育ちし實家も外となし、以前のよしみに乳母が厄介、かゝりやつながる虎藏迄に難儀を掛けるも是迄に不孝をなせし親の罰、夢は正夢目前に斯ういふことのある端か、實に七人の子はなすとも女に肌をゆるすなとの、古人の詞に違ひなく思へばそでないやつだなあ。

ト思入あつてきつとなる、虎藏きつとなつて、

虎藏　流石は以前が懷育我身の上に引きくらべ、親の罰だと諦めてぢつと辛抱なさいますが、わつちは癪に障ります、死んだ後は兎も角も世界の內に居ることなら、何處の國へ洋行するとも、きつとそりやあ尋ね出し赤恥かかしてやりまする、車へ乘る時水戸街道と言つたさうだが當にもならず、こいつあ一番本國堂で、易の表で逃げて行つた方位を開いて參りませう。

半七　手數を掛けて氣の毒ぢやが、どうぞさうしてくりやいの。

虎藏　御心配もお察し申しますし、又癪にも障りますから、大急ぎに見て貰つて來ます。

ト尻を端折り門口へ行き、

しげ　それぢやあ早く吉左右を。

虎藏　よし、合點だ。

トつか〳〵と下手へ行き、內へ見える樣に、

えゝ、履物は面倒だ。

ト駒下駄を手に持ち門口をしめて、逸散に花道迄走り行き、後を振返りにつたり思入あつて舌を出し、駒下駄を穿いて悠々と花道へ入る、おしげ思入あつて

しげ　折角御氣分の宜しい所を、斯ういふことになりまして、定めしお腹も立ちませうが氣を落着けていらつしやらぬと、お體の爲めになりませぬから、冷えぬ樣になさいまし。

半七　お梅の心替りしは、全く長の看病に倦きはてた其所へ、以前馴染し其者が呼出せし故斯の仕儀、今となつては誓紙を取交したのが口惜しい、あいつの事が人の皮着た畜生といふのぢやわえ。

しげ　御尤もでござりますが、又お風でも召しますとなりませぬ。まあお床の上へいらつしやいまし。

トおしげ介抱して蒲團の上へ住はせ、搔卷など掛ける、甚九の合方になり花道より、朝日山浦右衛門羽織着流し角力取の打扮、雪駄にて出來り、

浦右　今中洲の新渡しで、船頭が教へてくれた小舟乘の巳之吉の家は、西向うに違ひないが、あれが池田の若旦那半七樣が妹のお梅と忍んでござる家、どれ行つて問うて見よう。

ト舞臺へ來り門口から、

ちとお頼み申します。

しげ　はい。

ト門口を明け、

どちらからおいでゞござります。

浦右　わしは横濱から參りました。

ト此聲に半七浦右衞門を見て、

半七　や、さういふは、朝日山ぢやないか。

浦右　へい、わしでござります、眞平御免なされませ。

ト合方になり、浦右衞門内へはひり下手に住ふ、半七思入あつて、

半七　思ひがけない朝日山、久しくそちにも逢はなんだが、どうして爰へ尋ねて來たのぢや。

浦右　いやもう其後絕えてお店へも大御無沙汰を致しまして、申し譯がござりませぬが、三月後からわたくしも上方筋から中國を所々方々と興行なし、やう〳〵一昨日神戶から東京丸で戻りまして、母に委細を承はり、そりやあとんでもねえ事と、取るものも取敢ずお尋ね申しに上りました。

半七　然し旅から歸り早々種々用事もあらうのに、濱でもあるか東京の、此深川迄親切に心に掛けて尋ねてくれた、まあ、ゆつくりとして行くがいゝ。

浦右　有難うござります、それに旦那は久しいこと御病氣と聞きましたから、一日も早く上りませねば、お店へ對して濟みませぬ、尤もまだ修業中故師匠の方へ參つてをり、濱の家はお袋と妹ばかりでをります故、覺えた業に淸元の稽古をさしてはおきますが、今にわしが出世をすれば、立派な家業は出來ませんでも、溫泉位は出させまして、堅氣にしたいと思ひますうち、若い同志とはいひながら、いやさ惡いこととは知りながら若旦那と言交し、後先見ずに親を捨て、此東京へ逃げて參り、跡はお袋只一人苦勞をするのを大旦那がお聞き遊ばし困るであらうと、今迄山程御恩になつた其上塗にお袋迄、お貢ぎ受ける有難さ、是といふのも妹が心得違ひに起りし事、それゆゑあなたのお見舞ひ旁々妹を連れて歸ります、所存で今日上りました。

卜よろしく思入あつていふ。

しげ　そんならお前はお梅さんのお兄イさんでござりましたか、嘸まあお家でおつかさんも御心配でござりませうとお察し申し、わたくしも今では堅氣になりましたが、一人の悴が放埓者で、寐る目も寐ずに心配を致しましたが、親が我子を思ふのは又格別でござりまする。

浦右　御挨拶も致しませぬで失禮を致しました、まつぴら御免なされませ。

卜辭儀をする、半七思入あつて、

半七　その連れに來た妹は。

浦右　えゝ。

半七　いやなに、その妹の心得違ひも皆我過りより起りし事、是にもいろ〳〵仔細はあれど今打明けて言はれもせず、十九や二十の者でも無きに、何んで斯ういふ事をしたかと、定めしそちも笑ふであらうが、それがまことに面目ないわえ。

浦右　そりやあ幾歳になりましても、色戀ばかりは思案の外、ない事でもござりませぬが、是に付けて私の難儀になることがござります。

半七　なに、此の事に付きそちが身に、

しげ　難儀がかゝるとお言ひなさるは。

浦右　（思入あつて）難儀のかゝると申しまするは、わしが師匠へ弟子入してまだ取てきの時分から、始終お店へ出入をして萬事お家の尻押に何處へ行つても肩身も廣く、やう〳〵是迄取上げた角力といへどまだ幕には遙に間はござりまするが、來る場所毎も大入に名前の太る仕合は、こりやあ全く天朝の治まる御代と二つには、御贔屓樣の皆お蔭、せめて萬分の一なりと御國恩を報ずる心で、別手組の消防方へ加入したのは片時も、御上の惠みと大旦那の御丹精をば忘れぬ氣で御恩返しを爲ようといふ、矢先へ妹が今度の一件、そりやア同じ身代なら丁度似合の年ばいに、好いた同志故妹立て表向で上げますが、違ひも違ふ大家の旦那、例へて言はゞ提灯に釣鐘所か天秤にも掛らぬ身分の不釣合、妹を餌に朝日山が金にする氣と世間の人に言はれるのみか横濱の、新聞へでも出された時は大旦那樣は言ふに及はず、神奈川きつて濱中の旦那方へ御機嫌を伺ふことが出來ませぬ、爰の難儀を御承知なすつて、お厭でもござりませうが、どうぞ只今妹をお渡しなすつて下さりませ。

卜宜しく思入にて言ふ。

半七　譯を詳しく聞いてみると、そちが難儀をする事故尤もとは思へども、再び實家へ戻らぬ氣で道ならねどもお梅を連れ、家出をなせし上からは、假令此末二人が身に辛い事があらうとも厭はず辛抱仕果せて、細い煙を立てる氣で、出たれど今はわし一人、いやさ、わし一人なら兎も角もお梅が行くとは言ふまいから事を分けての頼みながら、どうもあれは歸されぬわいの。

浦右　すりや、これ程に朝日山が事を分けてお願ひ申すに、聞分けては下さりませぬか。

　ト詰寄る、半七俯向いてぢつとなる。

いやさ若旦那、

　ト言へども默つて居る故、

えゝ情ないことだなア。

　ト宜しくこなし、おしげ見兼ねて、

しげ　さあ、其の御得心の行かぬのも、是にも深い譯あれば、言ふに言はれぬ此場の仕儀、直に返すと御返事をおつしやる譯には行きますまいから、今日は此儘お歸りなされ、後で御得心のなります樣、わたしがお話し致しませう。

浦右　いや、假令旦那が不承知でも、此の儘一人すご〳〵と、どの面さげて歸られよう。

　ト半七へ思入あつて、

もし若旦那、くどいやうだが妹をわしに渡して下さるか、それともに又親御樣が、御心配をしておいでなさる故、是よりお家へお歸りなさるか、どちらなりとも承知して下さらないと御實家へ、今日から出入りが出來ませぬが、それでも救つて下さりませぬか。

半七　さあ、それは。

浦右　お前も共々頼んで下せえ。

しげ　それぢやというて、お梅樣は。

浦右　渡されぬといはつしやるのか。

しげ　さあ、それは。

浦右　聞かれませぬか。

半七　さあ。

三人　さあ〳〵〳〵。

浦右　救つて下さる思召なら、此朝日山が面の立つやう、二つに一つの御返事を、どうぞ聞かせて下さりませ。

　トきつと言ふ。半七ぢつと俯向く、おしげは心遣ひのこなし、此の以前よき時分に下手より手代忠八羽織尻端折りにて出來り、門口に窺ひゐて思入あつて、

忠八　いや、關取、其の心配には及びませぬ。

ト門口を明けろ、皆々見て、

浦右　や、思ひがけないお店のお手代、

しげ　忠八樣でござりましたか。

忠八　まつぴら御免下さりませ。

ト內へはひり、下手に住ふ、半七思入あつて、

半七　おゝ忠八、よく來てくれたの。

忠八　若旦那、久しくお目にかゝりませぬが、おやつれなされし其のお姿、

トほろりと思入あつて氣をかへ、

先づ御無事のお顏を拜し、恐悅にござりまする。

半七　はからずそちに逢うたのは、わしも何より悅ばしいが、面目もない此のしだら、どうぞ堪忍してくりやれ。

忠八　いえもう御心配には及びませぬ、今日此方へ出ましたは、よいお話しでござりまする。

半七　なに、よい話しと言やるのは、

浦右　どういふ事か、忠八さん、

しげ　早くお話しなされませ。

忠八　さう急き立てられてはたまらない、まあ茶を一つ下さい。

しげ　はい〳〵。

ト茶を汲んで出す、忠八茶を飲みながら汗を拭き、

忠八　若旦那、まあ斯うでござりまする。あなたが家出をなされた後は、わたくし初め出入の者迄一統旦那へ詫言を致しますれどなか〳〵に、世間の人に後ろ指を指れるやうな事をしたと、もつての外の御立腹故、是ぢやあ所詮仕方がないと途方にくれた其晚に、見世の者を寐かした後でそつと一間へお呼びなされ、他人へ是は話されぬが實は今迄立腹したのも、內外の者のしめしゆゑ、表向では詫言を聞かぬといへど肚の內は、なにも是が世間にはないといふ事でもなければ、互ひに好いた其の仲を無理にも離した事ならば若い身そらの二人故、無分別でも出さうもしれず、さういふ事のあつた時は、かゝりやつながる難儀故、いつその事今の內女房に貰つてやりたいから、そちより相談してくれと打明してのお詞に、いやもう淚の出ます程有難い故取敢ず、お知せ申しに參りがけ、神奈川のステーションで札を買はずに乘る所、車長の咎めに氣が付いて、すんでのことに罰金を取られる所でござりました。

半七　すりや、親父樣が表向お梅を貰つて下さると、そち

にお話しなされたとか、そりやほんとのことかいの。

忠八　いやもうほんと所ではござりませぬ、それ故直に飛んで來ました。

半七　是迄少しの孝もせず、却つて不幸を重ねし身を、それ程迄に思召して下さるのみか表向き婚姻さすとは悦ばしいが、それに引替へあれが不實。

浦忠　え。

半七　いやさ、不實にしては濟まぬとは、知りつゝ今迄過したる詫をそちが親人へ、よう申してくりやいの。

浦右　（ト思入あつて）そんならわしの妹を、表向若旦那の女房に貰ふとおつしやりまするか。

忠八　いかにもお貰ひなさる事に、ちやんと話しが調つたら、關取お前も安心だらう。

浦右　いや、安心どころか、さうなるのはわしは、不承知でござります。

忠八　え、そりや又なぜに。

浦右　さあ、其不承知といふ譯は、わしは元より妹もつながる縁に賤しい身分、慾に迷つてやつたのだと近所隣で言はれなば、是迄山程お世話になつた大旦那へ濟みませぬから是ばかりは忠八さん必ず兄が斷りまする。

忠八　關取そりやあ入らぬ義理立て、不斷こなたの俠客に堅い氣立で思つたら、さう言ひなさるは無理ぢやあないが、大旦那樣の一の見込みは、好いた同志の生木をさいて、もし二人が料簡違ひに心中などゝ舊弊な事でもあつたらお家の不吉、第一先旦那へ濟まぬ故、必らず心配しなさらずと、表向で上げたがよい。

浦右　さう事柄を聞いて見ると、承知せねばなりませぬが、こいつはどうも困つたものだ。

トぢつと思入、忠八四邊へ思入あつて、

忠八　してお梅さんは先程から、お家にお見えなされぬが、何處ぞへお出でなされましたか。

半七　さあ、そのお梅は、

浦右　大方兄が小言を言はうと、それで隱れてをりますかな。

半七　いや／＼さうでは。

忠八　おしげどの、何處へ參られましたな。

しげ　さあ、あのお梅樣は。

浦右　何處にをります。

半七　さあ、

忠八　さあ、

皆々　さあ〳〵〳〵。
忠八　もし若旦那、なぜお隱しなされます。
半七　（ちつとなり）さあ、そなたに話すも面目ないが、實は此の家に居らぬわい。
浦忠　えゝ。
しげ　（思ひあつて、）今日迄露程若旦那も、御存じのないこと故に、よもや〳〵と思ひましたが、其の以前から二世迄と言交したる男があつて、今方逃げたと聞きましたわいな。
兩人　えゝゝゝ。
（トびつくりなし）
浦右　すりや妹はまだ外に、言交したる者あつて、
忠八　あなたを捨て不人情にも、逃げて行つたと、
兩人　おつしやりまするか。
しげ　お梅さんに限つては、こんな事はあるまいと思ひの外なるなされ方、嘸若旦那がお悔しからうとほんにお察し申しまする。
忠八　（きつとなつて）もし、若旦那樣、是だからわたくしが申さぬことではござりませぬ、人に物を敎へるゆゑ師匠と申す名はあれど、いはゞ浮氣な生業故上部は綺麗な事を言うても、腹にはどんな目算があらうも知れない代物故、うつかり是は引合ふと飛んだ損を仕ますから決してお掛り合ひはなりませぬと、懇々御異見申しました、それを用ひず仕入れをなされ、詰りが丸で算盤の玉にも當らぬ此の成行き、あんまり品に惚過ぎると、こんな目に逢ひますわえ。
トきつと言ふ、浦右衞門も氣の毒なるこなしにて、
浦右　若旦那は言ふに及ばず、忠八さんにも此の兄が、たつた一人の妹で面皮をかゝねばならぬ仕儀、おのれ其の儘にするものか。
トずつと立つて門口へ行かうとするを、忠八おしげ押留め、
忠八　こりや關取には、きつさう替へ、
しげ　何處へお前おいでなさる。
浦右　はて知れたこと、逃げたといつても今日の事、まだ遠くへは出まいから、探索方の手を借りて引捕へた其の上で、旦那へ言譯しなければ、わしがどうも濟みませぬ。
ト又行きかけるを、
忠八　これ〳〵關取、其の腹立も尤もだが、さう荒立てゝは世間へ知れ、却つてお爲にならぬゆゑ、まあ靜にして

下され。

浦右　それだと申して此の儘に、どうも捨ては置かれませぬ。

忠八　さあ〳〵、それも尤もだが、然し、是が表向ぱつとした曉は、若旦那樣も又お梅殿も互ひに日蔭の身にするも、是も本意でない譯故、一先爰は世間へ隱し、穩便にして下され。

しげ　忠八樣もあの樣に、御心配をなされますれば、まあお待ちなされませ。

浦右（思入あつて、）なるほどそれもお道理だ。

ト餘儀なく扣へる、忠八思入あつて、

忠八　さあ、お梅殿の居ぬ曉は、べん〳〵と爰にも居られませぬゆゑ、もうすつぱりと思ひ切り、直御實家へお歸りなされませ。

半七　いや、假令お梅がその以前馴染し者と逃げたというて、草を分けても尋ね出し、一目逢うてあれが胸を、聞かねばどうも思ひ切られぬ。

忠八　それは惡い御料簡、元より虫のある者がこつちで思ふ百分一も何で思つて居ますものか、そりやァあなたの己惚でござりまする。まあそんな事をおつしやらずと、お家へお歸りなされませ。

半七　今更家へどの顏下げ、戻る譯には行かぬわえ。

浦右　左樣なれば私が、これ迄積りし御恩返しに、家へお連れ申しませう。

半七　其の志しも忝いが、お梅に別れて又候や、兄の家へも世間を恥ぢ、參つて居るも面ぶせ。

しげ　今に忰が歸りますれば、吉左右も知れませうから、やはり此儘わたくし方に。

半七　いや最早此家にもをり難し、兩親初め人々に苦勞を掛けし此身故、一先是より緣家の菩提所祐天寺へ參りし上、改心なした其後に、再び實家へ立歸れば、どうぞそちより宜き樣に不幸の言譯申してくりやれ。

忠八　よくそこへお心が附きました、とは申すものゝ、

浦右　もしや、寺にて無分別な、

半七　いや、其の心配はなけれども是非共一度尋ね出し、いやさ、尋ねて人の來ぬやうに寺と心が付いたわえ。

ト是にて三人安堵をなし、

忠八　そんなら暫時祐天寺へ、其の身をお忍びなされませ。

浦右　其内草を分けましても、妹はきつと尋ね出し、御無念晴しは致しまする。

しげ　何にしろ其お裝では。ちよつと、お召し替へなされませ。

半七　成程着替を出してくりやれ。

しげ　はい／＼。

ト後の戸棚より着替を出し、半七に着替へさせる。

忠八　然し是から目黑迄、二里餘りの道なれば、これから直に車を雇ひ、

浦右　共々お供をして行けば、決してお案じはござりませぬ。

ト半七思入あつて、

半七　永々是迄其方の厚い介抱受けたのは、決してわしは忘れぬぞよ。

しげ　何のまあ勿體ない、妾らが身分相應の御恩返しでござりまする。

ト是にて三人門口へ出ろ、此の時薄く本釣鐘。

ありや靈岸の七時の鐘、

半七　暗き此の身の黃昏に、

忠八　人目厭うて行く先は、

浦右　今の浮名を捨法師、

しげ　左樣なれば、旦那樣、

半七　あゝ、どうも思ひが、

ト門口へ寄ろを忠八隔てゝ、

忠八　さ、暮れぬ內に、

浦右
忠八　ござりませ。

ト誂へしんみりとした合方になり、半七心の殘ろ思入、忠八浦右衞門せり立てながら花道へはひろ、おしげ門口に取付き後を見送り、

しげ　二つの年よりお乳を上げ、お育て申せし若旦那も、戀故其身を果すといふは、是が世間の若いお方へよい手本になると思へば、ほんにおいとしい事ぢやな。

ト門口に縋り泣く、さんげ／＼の合方ばた／＼になり、花道より以前の巳之吉お村急ぎ出來り、直舞臺へ來て巳之吉汗を拭ひながら、

巳之　おい／＼、おつかあ／＼、お梅さんは家に居なさるか。

しげ　さあ、お梅さんは今朝出た限り、いまだに歸つて來ぬわいの。

兩人　えゝ。

トびつくりする、

しげ　今方虎が知せに來たには、男があつて水戶の方へ車

で逃げたと言うたわいの。

巳之　えゝ是で思ひ當つたのだ、そいつあ兄貴の拵へ事で、實は上州高崎へお梅さんを百五十圓で、藝者に賣つたと聞いたから、びつくりして知せに來たのだ。

しげ　え、すりやお梅さんをあの藝者に、して／＼それは何處で聞きやつた。

むら　さあ、わたしの見世で判人の源六といふ奴と賣つた話しをして居る所を、小蔭で殘らず聞きましたわいな。

しげ　えゝ、

トびつくりしてどうとなり、

そんなら兄が惡巧みで、仕組んだ事とは露知らず、お歸りなされた若旦那に、もしもの事でもあつたなら、猶々私が濟まぬ譯、今方お出かけなされたばかり、まだ遠くへはござるまいから、是から行つて委細の譯をお話し申して來ようわいの。

トおしげ身仕度をなす。

巳之　そんなら旦那は居なさらねえのか、してこれから行つた先は。

しげ　先は目黒の祐天寺、車で行くと忠八さんがおつしやつたわいの。

巳之　それでは是から二人引で、急いで後を追掛けたらば、必ず逢ふに違えねえ。

むら　巳之さん、車を誂へようかえ。

巳之　いや道で乘るから構はねえ。

ト尻を端折り、

お前は留守を何分頼むぜ。

しげ　それでも家が一人では、

巳之　なあに、取られる物はねえ。

ト巳之吉先におしげの手を引き花道へ行く、やはりさんげ／＼にて花道より虎藏、酒に醉つたる思入にて出來り、花道にて巳之吉に突當り、入替つて又おしげに突當り、互ひにすかし見て、

虎藏　おい／＼おッかあ、何處へ行くのだ。

巳之　おゝ兄貴か。

しげ　なに、悴か、

ト虎藏を見て、

おゝいゝ所で出ツくはした。

ト胸ぐらを取る。

巳之　さあ、おれと一緒に歸んなせえ。

虎藏　藪から棒につかめえて、何の譯だか知らねえが、行

くなと言つても今行くとこだ。

しげ　えゝ、ふて〳〵しい野郎め

巳之　さあ、行きなさい〳〵。

虎藏　えゝい。

　ト息をかける、おしげ顔を背け、巳之吉と兩人にて無理に虎藏を引張り舞臺へ戻り、三人内へはひる。此の内おむらは行燈を灯し、虎藏眞中に住ひ左右より、詰寄り、

しげ　これ、おのれはなあ〳〵、よくも是迄親をだまし、堅氣になつたと見せかけて、お梅樣を一ぱいはめ、藝者などに賣りをつたな。

巳之　萬年橋の茶見世の縁で、高島町の判人と惡巧みの相談したのは、現在おむらが證人だ、愛想の盡きた根性だなあ。

虎藏　いや、そんな事は知らねえ。假令お村が證人でも誰が脇臚を押さうとも、そんなあぶねえ舟などへ己が何で乘るものか、そいつあ大方混雜する中洲の渡しで人違ひだ、おれは白川夜船と出かけて、是から一寐入りやッつける積りだ。

　ト横にならうとするを、

しげ　よくしら〳〵しくそんな事を。さ、何處へお梅さんをやつたのだ、其行く先をわしに話せ。

巳之　もし話さねえと若旦那が、飛んだ事にならうもしれねえ。さ、隱さずに明してくんねえ。

むら　もし虎さん、どうぞ言うて下さんせ。

　ト三人詰寄るを振拂ひ、

虎藏　えゝ、寄つてたかつてやかましい、何でまた形のねえ事を、ほんとの樣にぬかすのだ。賣つたといふにやあ手前の方に、慥な證據でもあつて言ふのか。

三人　さあ、それは。

虎藏　それ見ろ、證據はありやあしめえ。よくもうぬらは此の己を、勾引しにしやあがつたな。

　ト虎藏おしげを足蹴にする、おしげどうとなる、巳之吉むつとして、

巳之　何ぼ酒の上だといつて、現在實のおッかあを足蹴にするとは人でなし、こりやあお前は金比羅樣へ禁酒をしながら破つたので、それで罰が當つたのだな。

虎藏　禁酒をしたと言つたのは、ありやあほんの僞りだ。

巳之　どうしたと。

虎藏　實は溜から出て來てから、ぱつたり酒を我慢して、

堅氣になつたと見せかけたは、お梅を玉に金にしようと、是迄己が仕組んだのだ。

巳之　そんならいよ〳〵お梅さんは、

虎藏　おゝ、おれがいつぺい喰はしたのだ。

しげ　おのれどうするか、見てをれよ。

むら　もし〳〵、あぶないわいな。

トおしげ虎藏の胸ぐらを取りに掛るを、

虎藏　えゝ何をしやあがる。

ト振拂つて立掛る、巳之吉割て入り、おしげを庇ふ、虎藏有合ふ薪にて巳之吉へ打つてかゝる、此の立廻りの内ばた〳〵にて下手より藏明の金太、勇次、長八ぶら提灯を提げ尻端折りにて出來り、

金太　やあ、喧嘩だ〳〵。

勇次　虎さんを早く留めねえ。

長八　合點だ〳〵。

ト三人飛込み虎藏を留める、虎藏始終生醉にて三人を薪でなぐり、わつと後へ倒れる、巳之吉早緒を取つて縛らうとする、皆々こつちやの立廻り宜しくあつておしげ留めに出るを、虎藏薪にて肩を打つ、是にてどうとなる、おむらびつくりなして介抱する。巳之吉ウヌと組付くを振ほどいて額を打つ、巳之吉の眉間糊紅になりびつくりなし、

巳之　おッかあといひ己が眉間を、もう兄貴とは言はさねえぞ。

ト立掛るをおむら留める、三人は捨ゼリフにて虎藏を留めるを、

虎藏　えゝ、やかましい。

ト三人を蹴返し、ひよろ〳〵とするを木のかしら、

三人　長家の衆、留めて下さい〳〵。

ト虎藏上手の薪を振上げる、巳之吉眉間を押へ、三人わや〳〵言ふ。此見得さんげ〳〵にて宜しく

ひやうし　幕

二幕目

私學校門前の場
善吉裏住居の場
市中交番所の場

役名――紙屑屋善吉、善吉親甚兵衞、朝日山浦右衞門、警部濱崎重義、巡査浦部砂道、同入江蔭成、善吉悴卯之助、教員高山登、古着屋安達喜兵衞、

(私學校門前の場)――本舞臺正面上手へ寄せて瓦葺の軒口を見せ、此下白壁、角の所石にて積上げし西洋造り、三尺間に硝子張の窓を付け上の方一間持出しの破風の庇、ペンキ塗の唐戸此の柱に『官員昇降口』と記したる木札を掛け、下手ペンキ塗の柵矢來。同じく三尺の門、此柱に『生徒入口』と記したる木札を掛け、上下樹木の植込み舞臺前に床几二脚並べあり總て小學校門前の體。爰に□片褄やつし裝尻端折り、散髮鬘、學校の小使にて、○象股引尻端折りにてパンを入れたる大きな箱を風呂敷に包みて脊負ひ、△同じく散髮鬘前垂がけ書林の若い者にて本の包を持ち、何れも立ちかゝり居る、此模樣賑かなる鳴物にて幕明く。

□　いやお前方も、毎日〳〵此學校へ商ひに來さつしやるが、あの通りの徒だから、嘸商ひがしにくからう。

○　どう致しまして、わたくしなぞは問屋から日に十貫も買出しまするパンを殘らず賣りますから、いくら世話がやけましても、是が商法でござります。

△　それに引替へ小使衆は、湯茶の世話から跡掃除、また遊歩場の草取り迄、嘸お草臥でござりませう。

□　毎日何だかがつかりします。

○　然しまあ此頃は、何處の果も、此樣に小學校が出來たので、習ふ子供は言ふに及ばず、育てる親迄大仕合せ。

△　何でも勉強は子供の內で、大きくなつては學問より慾が先へつきますから、夜業に店でありものの本を讀んでも尻へ拔け、何の役にも立ちませぬ。

ト此時十二時の柝木の音する、皆々心付き、

□　や、うか〳〵して居る其の內に、もう今のが十二時だ、どりや辨當の支度でもしようか。

○　遊歩時間が、パン屋の附目、

△　訓導さんから御誂文の、輿地史略の次本を直に納めて參りませう。

□　それぢやあ一緒に、

三人　さあ、參りませう。

トやはり以前の鳴物にて三人上手へはひる。あと柝木の音になり、奥にて、

生大　毬を取つて見さいな〳〵。

ト駒鳥の合方になり、下手の門の內より小山大助、散切鬘生徒の餓鬼大將にて大きな西洋毬を持つて出る、後より生徒大勢何れも散髮にて袴など、思ひ〳〵の裝

にて、やはり西洋毬を持ち、卯之助やはり散切肩入の布子、やつし裝にて是を追ひながら出て來て、

卯之　小山さん、わたしにも其毬を少し貸しておくれ〳〵。

大助　いや貸す事は厭だ〳〵、側へ寄ると穢ないから、おら達と一緒には遊ばせぬ〳〵。

卯之　それでも先生が毬や輪を廻して遊べとおつしやつたから、どうぞ一緒に入れて遊ばせておくれな。

大助　いくら先生がおつしやつても、此の大助は一舍の生徒、下等小學を卒業して上等第八級、貸さうと貸すまいと、取締をする小山様だ。

生一　それに君の家は貧乏だから、去年の暮から其の裝故、

生二　側へ寄ると垢臭くつて、厭な匂ひがする様だから、

生三　誰も一緒に遊ばぬのぢや。

大助　おゝ穢ねえ、それ虱が上這ひをしてゐる、誰も側へ寄るな〳〵。

卯之　そんな事を言はないで、どうぞ毬を貸しておくれな。

ト大助の持ちたる毬を取らうとするを突退け、

大助　えゝ穢ない、そんな乞食を見る様な裝で、おいら達の仲間へ入れるものか、それにもう試驗が來るのにやつぱり着物を着替ることは出來まいから、今度は斷つて試驗の席へ出ぬがいゝ。

卯之　いえ〳〵試驗の時には、お父さんがよい着物を拵へてやると言つてだから、それを着て僕も試驗に參ります。

大　君のお父さんは紙屑買だから、大方古着でも買つて着せるのであらう。えゝ穢ない、土左衛門か行倒れか死んだ子の着物を安く見倒して、それを買つて來るのだらう。

生一　そんな延喜の惡い着物を着て來るのは、此學校の恥になるから、

生二　身分相應裏店か、占者の内職にやつぱりいろはを敎へる家か、

生三　お寺へ頼んでお經を讀み、味噌摺坊主になるがいゝ。

大助　さうだ〳〵、乞食の様な裝をして一つ机に並ぶのは、外聞が惡いから、早く爰を退校して舊弊の私學校へ上げて貰つて習ふがいゝ。

卯之　そんな意地の惡い事を言はずと堪忍して、どうぞ一緒に遊ばしておくれな。

ト大助皆々の袖をひかへ頼む、

大助　えゝ穢ない、何といつても遊ばぬから勝手に一人で、

皆々　遊ぶがいゝ〳〵。

ト卯之助を突倒し、皆々は遊んで居る、卯之助は是非なく一人で泣いてゐる、合方になり上手入口より登散髮、靴を穿き、洋服の打扮鞭を持ち、教員にて出來り、

登　こりや卯之助、何を泣くのぢや。

卯之　はい。

登　あゝ、又小山にいじめられたか。

大助　いえ〳〵何もいぢめたことはございません。

生一　僕はたゞ裝がきたないと言つたばかり、

生二　わたしは福住さんの脊中を、ちよつと打つ眞似をしたばかり、

生三　毬を貸さぬと言つたばかり、

大助　何にも申しは、

生大　致しませぬ〳〵。

登　いや〳〵只何も申さぬのに泣いて居る譯はない、いつもの様に卯之助が、身裝のことを申したのであらう。

大助　いえ〳〵申しはしませんが、只貧乏だと申したのでございまする。

卯之　いえ〳〵僕が悪いのでございますから、どうぞみんなを叱つて下さりますな、又後でいぢめられますから、泣かずにおとなしく遊びます。

登　年も行かぬにあの通り、朋友に信義を盡す卯之助に引替へて、最早十五に近い大助、其外の者もそれへ出い。

大助　へい〳〵。

ト皆々うじ〳〵する、登思入あつて、

登　はて、出いと申すに。

トきつと言ふ、合方になり、

こりや、子心にもよく聞けよ、彼の西洋の教にも、幼年の折は白糸にて何に染まるも教による、例へば赤く美しき忠孝信義と人に稱され、或は黒く文盲の文字さへ讀めず世の中を暗く送る者もある、されば福住卯之助が假令身裝は穢くとも多くの生徒に勝りし勉強、學問上達致せば自主獨立の體にて、成人なさばどの様な美麗な衣服も望みの儘、そたたなどより年下なれどなか〳〵及ばぬ此の卯之助、千金積んでも此の右へ出る才はあるまいと、教授を致す我々迄竊に褒めて居る位、必ず此後今の様にいぢめることは相ならぬぞ。

大助　へい〳〵、御免なすつて下さりませ。

登　然らば、福住卯之助を、一緒に中へ入れてやりやれ。

大助　それでも、着物が臭うござりますから。

登　はて、又そちが意地の悪い、早く一緒に遊歩して、

必ず口論なぞ致すまいぞ。

大助　いや〳〵先生、さう貴方がおつしやりますが、側へ寄ると虱が移り、寐臭い匂ひをかぎますと、身の健康を害しまするから、どうも一緒には遊べませぬ。

登　いや、口功者な事を申すな、卯之助が衣類よりそちが口中の惡臭は、寐ぐさいにも遙に勝るぞ。

大助　なに、そんな匂ひがしますものか、是でも毎朝花王散の西洋歯磨を遣ひます、小い時から胎毒で天窓は少し黴びましたが、もう此頃ではすつぱり治り、只耳垂はありますが、そんなに口は匂はぬ筈だが、

ト大助思入あつて、大勢の生徒に向ひ息を吹きかけ、

何と、厭な匂ひがするか。

生一　是はたまらぬ、臭い〳〵。

生二　君の口の惡臭では、健康を害すから、

生三　僕も一緒に、さあ、みんな、

大勢　逃げたまへ〳〵。

大助　いや、こいつはどうやら門違ひだ。

生大　さあ〳〵逃げよう〳〵。

ト駒鳥の合方になり、生徒皆々下手へはひる。大助も後より追掛けはひる。跡合方になり登卯之助をいたはり、

登　さあみんな叱つてやつたれば、そちも泣かずに機嫌を直し、早く行つて習ふがよい。

卯之　それでもまた參りますと、いぢめられますから、綺麗な着物の出來る迄わたくしは參りませぬ。

登　いや〳〵決していぢめはせぬ、左樣な事を流布なすと、此學校の規則にも拘る位の妨害なれば、涙を拭いて參るがよい。こりや爰は門前、人が見ると見ッともないから、早く教場へ參るがよい。

卯之　それでもわたしは悔しくつて、涙がこぼれてなりませぬ〳〵。

登　お、尤もぢやが機嫌を直して、早く勉強したがよい。

ト種々卯之助を介抱する。ト、卯之助は泣いて居る故登、當惑の思入にて、

年にませたる其方故、父が貧困を思ひてか、いまだに泣きゐる其樣子、扨々不便な事ぢやなあ。

ト誂への唄になり、花道より甚兵衛白髪鬘やつし裝世話親仁の打扮、重箱を包みたる辨當を持出來り、

甚兵　もう十二時だから、嘸孫が待つてゐよう、早く悦ばしてやりませう。

ト舞臺へ來り卯之助を見て、
そこにゐるのは、卯之助ではないか。

卯之　や、祖父さんか。
ト取縋る。

甚兵　おゝ嘸腹がすいたであらうが何を言ふにも腰が痛く、わづかな道も一時間、急いで歩けぬ此の親仁嘸まあ待つて居たであらう。
ト卯之助の泣いて居るを見て、
これ〱何をそちは泣いて居るのぢや、又お友達と喧嘩でもしたのか。

卯之　いえ〱喧嘩はしませぬが、わたしや悔しい〱。

甚兵　何が悔しいのだ。あゝ又いつもの様に着物が穢ないと言つて恥でもかゝされたのか。
ト ホロリと思入れ、登甚兵衛を見て、

登　おゝ、これは誰かと思うたら、卯之助の祖父の甚兵衛殿か。

甚兵　や、お前様は教員の高山様でござりましたか、其處においでと存じませず、御挨拶も致しませんで、これは失禮を致しました。

登　いや、其の挨拶には及ばぬこと、只今實は此方も當惑して居つたところ、是にて只今生徒同志物爭ひを致せし故、相手を嚴しく懲らしたれば涙を止めて勉强致せと、再應申せど悔しいと只泣いて居て聞入れず、ほとんと困却致して居つた。

甚兵　それはハヤお氣の毒でござりました、いやもう多くの子供をお預りで、日々御教授なされますれば、大抵のお世話ぢやござりませぬ、それに取分け此孫めは、年よりませてをります代り、誠に强情で困りきります。

登　いや〱決して强情ならず、四百名もある生徒の内で五本の指に算へる位、學才勝れし卯之助なれば、親父を初め貴君迄末賴もしく成人を待つて樂を致すがよいが、差當つて此の通り泣いてをつて困り入る、僕は教授の時間もござれば、跡にて篤と言諭し、早く校内へよこして下され。

甚兵　是は恐入りました、何を申すも頑是なくまだ十年になりませぬわんぱく者故わたくしが、跡にて篤と申聞け直お後から御教場へ、連れて參るでござりませう。

登　然らば、是にてゆつくりと、

甚兵　これ卯之助、お辭儀をせぬか。

登　いや〱、それには及ばぬ。

甚兵　へい〳〵、有難うござりまする。
ト合方になり、登宜しく思入にて上手口へはひろ、甚兵衛思入あつて、
これ卯之助、何でそなたは泣くのぢや、今先生がおつしやる通り見所があるそうだから、外の子供衆より一倍餘計に御教授下さる御親切、其先生のおつしやることを何故聞いて行かぬのぢや、えゝ泣いてばかりでは何も分からぬ、どういふ事でいぢめられたか、其譯を言つて聞かしや。
卯之　いえ〳〵先生のおつしやる事を聞かぬのではないけれど、私の裝が穢いから側へ寄るなと大きな者が、皆に意地を付ける故、私ばかり除者にされるのが、わたしや悔しくッてならぬ〳〵。
甚兵　大方それとは思つたが、何をいふにも今の身の上、子供でさへも肩身が狹く悔しいと思ふのに、纔三ッ身のさつぱりした縫返しの着替さへ着せられぬといふ親の身は、どの樣で居るだらうと、悴が胸は察しても心に任せぬ貧乏世帶、思へば生甲斐のないことぢや、それに付けても學校の教授樣は流石に開化、依怙贔屓は少しもなく地面持の息子でも又裏店の子供でも、上下の隔て少しもなく教へ諭して下さるに、其生徒でありながら着物が臭いと孫めをいぢめ、多くの中で恥をかかすは、てもまあ惡い、
ト悔しいといふ思入あつて氣を替へ、
いや〳〵、それもみんなこつちの愚癡だ、これ卯之助、今日は隣のをばさんから竹の子を貰うたから、お辨當へ入れて來た、是を持つて早く行き、負けぬ樣に習ふがよい。これもう泣くのぢやない、見ッともないぞや。
卯之　もう泣きはせぬけれど、又是を持つて行くと、やれ重箱でをかしいの、麥の樣なお飯だと、皆がいぢめていけぬから、今日は家へ歸りたい、どうぞ今度の試驗迄に、よい着物を着せて下され、これから毎日勉强して其時いぢめた者を追拔き、意趣を返してやりたいわいの。
甚兵　おゝよく言つた、感心だ〳〵、試驗迄には都合していゝ着物を着せてやるから、必ず負けぬ樣にしやれ。
卯之　穢い物は着て居ますが、稽古で負けは致しませぬ。
甚兵　さういふことなら今日は此の儘、内へ歸つてお辨當を喰べて、ゆつくり來るがいゝ、さあ泣顏をなほして行きや。
卯之　折角持つて來て下さいましたが、それでは家で喰べ

ませう、

甚兵　おれは少し用事があつて、外へ廻ればそなたは早く。

卯之　そんなら、お先へ。

甚兵　いや、そこ迄一緒に行きませう。

ト合方になり、卯之助先に甚兵衛花道へはひろ。上手の入口より、以前の登出て、

登　今卯之助の辨當を携へて來た老人は、僕がいまだ幼年の時には、慥神奈川の靑木町にて福住と苗字を名乘る米問屋、居附地主に貸藏から千石積の帆前船を、所持なす程の身代なりしが、世の盛衰とはいひながら纔三代の其内に零落なして、卯之助が父といふは賤業の紙屑買をなすとやら、然し富貴は天の賜、いまだ七年何ケ月と九歳に足らぬ卯之助は、天然備はる才智にて衆に勝れて學も進む、勉强なせば末々は官のお役に立つべきもの、平民にても學力あれば官位に登る開化の御代、末頼もしき、

ト花道の方を見て感心の思入あつて、

少年ぢやなあ。

ト此模様宜しく幾木の音、誂への合方にて、道具廻る。

（善吉住居の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面折廻し上手へ寄せ佛壇の書割、此下破れ襖の押入、眞中暖簾口、是より下手中敷居の押入、同じく反故張の障子屋體、下手破れのある鼠壁、所々を反故にて穴を塞ぎ、是より外一間の下家、引窓を見せたる柿葺の屋根を見せ、此下鼠壁と櫺子窓にて臺所を見せ、此内一ツ竈、荒神棚水甕手桶など、七輪に土瓶を掛けある、其外臺所道具宜しく、いつもの所世話門口、此外丸物の井戸、釣瓶など宜しく後ろ一間の入口、腰高障子隣家を見せたる張物、何れも裏借家の體、煙草盆長火鉢などを置き、爰にお鹿結び髮、前垂掛相長屋の女房にて皿へ小魚を載せ鰺切庖刀を持ち立掛り居る、下手井戸の側にお熊同じ女房にて、洗濯をしてゐる、此見得宜しくさんげ〳〵にて道具留る。

お鹿　お熊さん、爰の家ではみんな留守かえ。

お熊　今甚兵衛さんは、卯之ちやんの所へ、お辨當を持つて行つたのさ。

お鹿　おや〳〵、さうかえ、もう一足早いとお辨當の間に合つたのにそりやあ殘念な事をした。

お熊　それぢやあ何ぞ御馳走でもあるのかえ。

お鹿　なに御馳走といふ程でもないが、いつもの魚屋が小

魚が安いといつて無理に置いて行つたから、ねづぼうや石持だが、こつちの家の卯之ぼうに喰べさせようと持つて來たのさ。
お鹿 そりやあまあ惜しいことをした、お魚だといつたら嘸あの子が悦ぶだらうに。
お熊 わたしたちも貧乏だが、こつちの家の善吉さんは、毎日賃身に稼ぐけれど、落目になつてはいけないもので、爲る事なす事齟齬となり、今ぢやあ三度のお飯もむづかしい程とのこと。
お熊 それも根が身上のよかつた人の落ぶれだから、本當に可愛さうと、一つ長屋で替る〳〵惣菜でも斯うやつて持つてきて上げるのを、有難いと頂いて親子三人で喰べるのは、どんな心の內だらうと思ふと、實に淚がこぼれ、可愛さうでならないよ。
お鹿 たしか元は神奈川で、土藏の七つもあつた家で、奉公人も大勢居たと話しには聞いて居たが、今こそあんな老爺さんでも、昔は大の感服家で茶の湯や道具に金を遣つて、隨分贅澤に暮したさうだ。
お熊 悪い時には悪い事ばかりで、おかみさんが死んでからお飯拵へはいふに及ばず、洗濯迄も仕なさるから、時折わたしが洗濯の次手に洗つて上げるのさ。
お鹿 それはさうとお熊さん、善吉さんは一人身だから、世間の口が五月蠅よ。
お熊 おや〳〵常談言つちやあ厭だよ、誰がわたしに惚れるものかね。
お鹿 それでも人は相縁奇縁、割れ鍋にも閉ぢ蓋だから、どうして油斷はなりやしないよ。
お熊 これは失敬な御挨拶、然し此間も西洋床の鏡に向つてしげ〳〵と、初めて自分の顏を見たが、我身ながら驚いたよ。
お鹿 何をそんなに驚いたのだえ。
お熊 それでもわたしの御面相は、もう少しよからうと自惚て居たけれど、よく〳〵見ると人間が三分でお化が七分、是がほんとの人三化七。
お鹿 又いつもの常談ばかり、ほんにお前は愛敬者だねえ。
ト兩人宜しく、お熊は洗濯をしまひ內へはひり、煙草をのみ居る、合方になり、下手より以前の卯之助辨當の包を持出て來り、直に內へはひり、
卯之 小母さん、祖父さんはまだお歸りでないかえ。
お鹿 おや卯之ちやんか、祖父さんはお前の所へ、お辨當

を持つて行つた。
お熊　それぢやあ何處で行き違ひ、祖父さんに逢はなかつたかえ。
卯之　いえ／＼祖父さんには逢ひましたが、道で別れて歸りましたから。
お熊　あゝ、それぢやあ今日はお辨當を、まだ遣はずに居たのかえ。
卯之　今日はお午限りにしましたから、家でお辨當を遣ひます。
お鹿　そんならお前が持つておいでの、其の重箱はお辨當かえ、今日はお魚を喰べさせようと、これ此の通り持つて來たから、晩の御飯に煮てお上り、
お熊　今に祖父さんが歸つたら、拵へて貰ふがよい。庖刀までお鹿さんが持つて來ておくれだから、晩には澤山お上りよ。
卯之　それは有難うございます、久しくお魚を喰べませんから、祖父さんやお父さんが嘸お悦びでございませう。
お鹿　おゝ久しくお魚を喰べぬとは、お氣の毒なことでござんすな。
お熊　さあ／＼卯之ちやん、早くお辨當をお上り。

卯之　それぢやあ小母さん、御免なさいまし。
お熊　どれ、お茶でも汲んで上げようか。
ト卯之助は件の包をあけ、小重箱より茶碗へ飯を取つてお辨當を遣ふ、お鹿お熊は捨ぜりふにて茶などを汲んでやり、
お鹿　おやお辨當のおかずは竹の子だね、困る／＼と言ひなすつても、どうでも以前が以前だけ走り物を喰べなさるね。
お熊　まだわたしなどは初物だから、七十五日生延びるから、卯之ちやん一つ貰ひますよ。
卯之　あゝ、澤山おあがんなさい。
お鹿　おや／＼是は旨さうだ、わたしも一つ御馳走にならうか。
ト兩人竹の子を摘み、
ほんに大そう是は旨いが、祖父さんが煮たのかえ。
卯之　いえ／＼、是れはお隣の小母さんに貰つたのだ。
お鹿　あゝ、それぢやあ隣の芝居者かえ、錢もないくせに大そう洒落るの。
お熊　あれさ、大きな聲で聞えらあね。
トばた／＼になり、花道より以前の甚兵衞懐へ着物

を入れ、袖にて隱し、後を見返り〳〵出來り、門口を
明け直に内へはひり、息の切れる思入にて、
甚兵　おゝお熊さん、留守を大きに有難うございました。
お熊　おや祖父さんお歸りかえ、大そう息を切つておいでだが、
お鹿　道でも急いで駈けておいでのかえ。
甚兵　えゝ、
ト ぎつくり思入あつて氣を替へ、
なに、辨天通で馬車の馬がどうしてか暴れ出し、そこら中を飛んで歩くので、やう〳〵逃げて來ましたから、息が切れてなりませぬ。
お鹿　おやまあ、それはあぶないことだ。
お熊　さあ、お茶でも一つ呑みなさんせ。それに、襦袢は洗つておいたよ。
ト 茶を汲んでやる、甚兵衛ちよつと頂いて一口飲み、
甚兵　それは有難うございました。
お鹿　おや大そう懐が大きいが、何を入れて、
兩人　おゐでだえ。
甚兵　え、是かえ。
ト 思入あつて、懐より小裁物の着物を出し、
近い内に學校で試驗がある故、其時によい着物を着たいと言つて、朝に晩に卯之助が此親仁をせびりますから、其の時孫に着せてやらうと、丁度頃合のがありましたから、一枚買つて參りました。
お鹿　おやまあそれはお奇特な、かう言つては失禮だが、苦しい中で一枚づゝも斯うして可愛いお孫さんに着せて上げるは、どんなにか樂しみだか知れやあしない。
お熊　おや綿銘仙だと思つたら、本當の銘仙で裏も通しの縹色絹、こりやあよつぽど取りましたらうね。
甚兵　思ひの外見倒して安く買つて來ましたが、どの位にふめますか、どうぞふんで下さりませ。
お鹿　此の節古着が上つて居るのに、糶市が流行るので大そう景氣が惡いといふが、質においても一圓は默つて貸さうと思ふから、一圓二歩もしましたかえ。
お熊　新で買へば一反四圓、二圓を缺いては賣りますまい。
甚兵　成程、何方もお目利だ、實は二圓と言ひましたを、一圓三分で買ひましたが、丁度相場でございませうな。
卯之　そんなら是は祖父さん、わたしの着物でございますかえ。
お鹿　おゝ、試驗の時に着せるのだ、何と嬉しからうな。

卯之　あゝまことに嬉しうござりまする。
お鹿　丈はどうだか、ちよつと此の子に着せて見せてはどうでござんす。
お熊　もし短かければ、上があるから、わたしがおろしてあげませう。
　ト兩人合せりふにて件の着物を卯之助に着替へさせ、帶をしめ皆々見て、
お鹿　ほんに是は誂へ向き、
お熊　長くもなければ短かくもない。
甚兵　縞柄もよう似合ひました。
　ト甚兵衞ぢつと思入、卯之助嬉しき思入にて
卯之　かういふ着物を着たからは、先刻いぢめた朋輩に是れを見せてやりたいから、決して汚しはしませんから、學校迄是を着て行つて見せてやりたいわいの。
甚兵　おゝ見せたくば早く行つて、思入れいぢめた生徒達に見せびらかしてやるがいゝ。
お鹿　よいべゝだから學校で、文墨だらけにおしでないよ。
卯之　いえ／＼決して汚しはしませぬ。それぢやあ行つて參ります。
　ト卯之助嬉しき思入にて、いそ／＼花道へ駈けてはひる。甚兵衞後を見送り、
お鹿　男の子でさへあの樣に、着物を嬉しがるもの、女の子はほしがる筈だ。
お熊　わたしも洗つた此布子を、早く袷に拵へて、家の人に着せてやらう。
甚兵　いつでも留守をお頼み申して、有難うござりました。
お鹿　何のお前、どうで長家の鐵棒引き、何時でも遊んで居ますから、用があつたらいつでもおいで、ほんにさつぱり忘れて居た、此お魚は晩のお菜に、卯之坊に遣つておくれ、此鰈切をおいて行くから、後で魚を拵へたら、お向うへ返しておくれ。
甚兵　それは御親切に有難うござります、お蔭で晩には御馳走を久し振りで三人が、御飯をおいしく頂きませう。
　トお鹿は以前の魚と庖刀を置き門口へ出る、此時野毛のぢやん／＼になる。
お鹿　おや日が長いから油斷をしたら、もうあれは二時のじやん／＼。
お熊　それぢやあ襦袢は一緒に干して、乾いたら持つて來ますよ。
甚兵　それはお世話でござりました。

お鹿　さあ、お熊さん、

兩人　一緒に行かうねえ。

卜さんげ〳〵になり、お鹿お熊下手へはひる。甚兵衞思入あつて、

甚兵　あゝ昔の歌の譬にも、袖に涙のかゝる時、人の心の奥ぞ知らるゝとは、はてよく言つたものぢやなあ。

卜合方になり、

今も今とて相長家のかみさん達があのやうに、朝夕世話をしてくれるが、是といふのも善吉が、正路に稼ぐ皆お蔭、鐵砲笊や荷籠を擔ぎ、聲をからして歩いても稼ぐに貧乏追付かずで、足らはぬ勝の瘦世帶、かてゝ加へて頑是ない孫めが祖父によい着物を、着せてくれとせびれども、其の日の米さへ五合か一升買の今の身の上、苦しい中で學校へ月々納める月謝まで悴が腕の細元手、それも知らずに去年から着續けにした古布子、垢によごれて寐臭いと、多くの生徒にいぢめられ子供心に悔しいと、泣いて居るのを見る悲しさ、今の着物を着せてやつたら、いそ〳〵悦び學校へ行つたが、往來で人の目つまに掛つたら、此身の罪は脫れまい、思へば苦勞は絕えぬものだ。

卜甚兵衞宜しく思入、さんげ〳〵になり花道より善吉散髮鬘古手拭を冠り、木綿やつし裝紙屑買好みの拵へ、尻端折りにて荷籠を擔ぎ出來り、花道にて、

善吉　屑ござい、古着屑ござい〳〵。

卜呼びながら出來り思はず門口へ來り、

高島町から野毛山の下通りを呼びながら、考へ事をして來たので、思はず家へ來てしまつた。

卜門口を明け、内へはひり、

親父樣、今歸りました。

甚兵　おゝ善吉か、だいぶ今日は早かつたな。

善吉　いつもは是から住吉町の立場で一服やりまして、端口の物を賣りますが、今日ははからず一纏めによい買物をしましたから、早く歸つて參りました。

卜捨臺詞にて荷を片附ける、此の内より誂への反故を出し、下手よき所に住ふ、甚兵衞茶を汲み出し、

甚兵　しつけぬ事で朝から晩迄、此永の日を步くのだから、嘸がつかりするであらう。さうしてよい買物を今日はしたと言やつたが、どんな物を買つたのだ。

善吉　それはまあからでござります。

卜合方になり、

今日朝から常得意の大掃除に出ッくはし、木綿や絹の襤

褸ッ切をお錢は入らぬ持つて行けと、一貫目ばかり貰ひまして、直に問屋へ持つて行き、どうせ、二朱か三朱だと思つた襤褸も此の頃は、東京の蠣殻町や王子へ出來た製紙會社で西洋紙を漉きますので、ふんだ値段の倍になり、それを元手に一廻り流して歩いた先々で買つた品が多いので、實は財布の底を拂ひ、元手の薄い所から此荷を問屋へ持つて行けば、足許を見て安値故明日のことゝ、今日は早仕舞ひに致しました。

甚兵　それはまあよかつたが、其の日暮しの此の世帶、明日迄買つた代物を一晩家へ置くといふ猶豫がなければ安値でも、問屋へ賣つてしまふのだが、ぼろを貰つたお蔭ばかりで、明日の相場を待たれるのだ。

善吉　そればかりでなく是非あなたへ、お見せ申す物があつて、直に家へ歸りました。

甚兵　なに、見せる物とは。

善吉　さあお目に掛ける其の品は、まあ是れでござります、

ト件の反故の内より大きな繪圖を出し、

今日ある所で一纏めに、買つた破本の其内から數寄屋大工が念を入れ圍ひの繪圖の好きな道、及ばぬ事と思つても昔を忘れぬ物好み、かういふ家が出來たなら、嘸よからうと煩惱の起し繪圖さへ出た中に、目に付いたのは此の繪圖面、親父樣定めてお見覺えがござりませうな。

ト件の繪圖を見せる、甚兵衛見てびつくりなし、

甚兵　やあ、こりや神奈川に居た時分、何萬兩といふ金を積んであつた盛の時、箱根を切つての米問屋と人にもいはれ見世藏から、座敷を建てた其の時の、慥に是は普請の繪圖、

善吉　今更言ふも愚癡ながら、こんな家に其以前住つたことかと存じますと、夢の樣でござりますな。

ト合方替つて兩人繪圖をぢつと見て、

地所は海手に北を受け、間口四間の見世藏に、左右に並ぶ錢藏、

甚兵　奥の住居は二階家に、間毎隔てし其先は、海を見晴す廣座敷、

善吉　庭は樹木の植込に、至り盡せし圍ひの茶席、

甚兵　身分に過ぎし住居故、衣服は元より器財迄、

善吉　驕奢にふける物好み、

甚兵　先祖の罰を蒙むりてか、

善吉　續く不幸に左りまへ、

甚兵　抱へ地所から家藏迄、

善吉　終には人の手に渡り、
甚兵　思へば盧生の夢の世に、
善吉　昔懷しき、
兩人　此の繪圖面、
善吉　親父樣、
甚兵　忰、
善吉　思へば夢でござりましたなあ。
　ト兩人顔見合せ宜しく愁ひの思入、善吉氣を替へ、
いや、よしなき繪圖をお目に掛け、あたら涙を親人にこぼさせましてござりまする。
甚兵　指折り繰れば五十年、廻り〳〵て手に入るも、是も不思議なことであつた。
善吉　いや〳〵是も人の運、いつ何時よいことが續いて來れば又元の、地面へ返る事もあらう、其の時再び此繪圖が役に立つまいものでもなければ、賣らずにしまつて置きませう。
　ト件の繪圖を宜しく片付ける、善吉以前の卯之助が脱いだ着物に目を付け、
是は倅卯之助が不斷着て居た古布子、もし親父樣、あれは何處ぞへ參りましたか。
甚兵　今學校へ行つたのだが、もう押付歸るであらう。
善吉　一枚きりの布子を脱ぎ、外に何も着る物がないと思ふに脱捨て、學校へ行つたとあれば、何を彼奴が着て行きましたか、あなたは御存じでござりまするか。
甚兵　さあ、それは。
善吉　よもや裸で參りもしまいが、何を着て參りました。
甚兵　さあ、それは、
　トぎつくり思入あつて氣を替へ、
其の卯之助の着物に付いて、話さにやならぬことがあるのぢや。
善吉　何とおつしやります。
甚兵　最前隣で竹の子の煮たのを貰ひ辨當を詰めて午に間に合ふやう悦ばしてやらうと思ひ、それを持つて學校へ行つたところ十二時の遊歩時間で卯之助も大勢の子と遊んで居たが、何かしく〳〵泣いて居る故何を泣くと尋ねたら、お前の家は貧乏故去年から一つ着物をいまだに着て居て臭いから、仲間へ入れぬと餓鬼大將の大助とやらいふ生徒が、孫をいぢめて泣かしたと聞いた時の胸のせつなさ、それから家へ連れて來る途中に幸ひ着頃の古着、買つてやつたら着て行きたいと、嬉しさうに頼んだ

から今着せ更へてやつたらば、さつきいぢめた意趣返しに、是で再び學校へ行つて思入れ見せてやると、いそいそして行つたのぢや。

善吉　して其の衣類は如何して、あなたはお求めなされました。

甚兵　こりや珍らしい尋ね樣、金を出して買つたのぢや。

善吉　其の日の煙りも立兼ねます、貯のない今の身の上、如何致して其の金を御都合はなされました。

甚兵　さあ、其の金は。

善吉　高は知らねど其金が、あなたのお手に入りましたのが、どうも合點が參りませぬ。

　トきつと言ふ甚兵衛思入あつて、

甚兵　其の不審は尤もぢやが、おゝそれ〲其の金子は、我甥の朝日山がさつき來て、旅の土產と二圓呉れたを思ひがけない金故に、孫が着物を買つたのぢや。

善吉　すりや朝日山が呉れましたか、はてさてそれは奇特なことぢや。

甚兵　あれも眞身の妹お梅が、しかも今見た繪圖面の家をそつくり引受けた、酒問屋の池田の息子半七といふ若者に連れて逃げられたといふ話し、それを苦勞にする中で伯父と思つて小遣ひを送つて呉れる志し、鬼にも負けぬ形に似ず、あんな優しい者はない、そなたも逢つたら今日の禮を、必ず言つてくれたがよい。

善吉　此の善吉とは從弟同士、旅から歸つてまだ逢はねば、尋ねて行つて其の金の、出處をとつくり、

　ト思入あつて氣をかへ、

いや、ようお禮を申しませう。

甚兵　いや〲、內證で呉れた金、眞身の中でも此事が家へ知れては惡いから、必ず禮は言はぬがいゝ。

善吉　そんならそれも申しますまい。

　ト兩人氣味合の思入、流行唄へ大太鼓の入りし誂の鳴物になり、花道より浦右衛門若衆鬘羽織着流し前幕の角力好みの打扮にて出來り、花道にて、

浦右　家業續きで三月ほど家を留守にしたばかりで、苦勞を求めた妹が行方、あいつに限つて言ひ交した男を捨て外の男と、逃げるなどゝいふ道ならぬ事はせぬ筈だが、それもやつぱり思案の外の、譬の通りの人心、何にしろ妹にちつとも早く逢ひたいものだ。

　ト舞臺へ來り、門口を明け、

伯父御、家にごんしたか。

甚兵　や、さういふ聲は。
善吉　朝日山殿か。
浦右　おゝ二人共家であつたか。
　ト合方になり、浦右衛門內へ入り、よき所へ住ふ、甚兵衛は惡い所へ來たといふ思入あつて、
甚兵　さつき道で見掛けたに、又爰へ來さしつたか。
浦右　なに、わしを道で見掛けたとは。
甚兵　いやなに、かけ違つて久しく逢はなかつた。
　トもぢ／＼する、浦右衛門不審の思入にて、
浦右　餘儀ない事で難波から梅の咲く頃迎ひが來て、其魁の顏ぶれに替つた出合の取組も、十日の勝を取つた故、金主が勸めに蒸汽へ乘り下の關から長崎の船路も纔三月越し、漸も靜に恙なく家へ歸つて樣子を聞けば、妹が家出をしたと聞き知邊の所は尋ねたが、今に行方が知れぬので、伯父御の所へ思はぬ無沙汰、今日は留守中世話になつた、其禮がてら出掛けて來ました。
善吉　何のまあお禮どころか、常不斷厄介になる私等故、お前の留守もろく／＼に見舞はぬ位の無沙汰をして、譬の通り貧乏暇なし、何にしろ何事なく御無事でお家へ歸つたのは、何よりか目出たいが、氣にかゝるのはお梅どのが、色に迷つて家出をしたと、話にびつくりしましたが、伯母御一人でくよ／＼して、お前の歸りを待つて居たが、嘸やお前が歸つたので心丈夫になられたらう。
浦右　それも親子の情合故わしが歸る其日は、泣いてばかり居たとのこと、それを思へば妹が不孝の罪は免れぬ筈、伯父御を初めこんたに迄、留守中いかい厄介を掛けました。
善吉　いや／＼其の禮はこつちから申さねばならぬこと、さつきは親父へ小遣ひに二圓といふ金を下すつて有難うござりました。
　ト手を突き禮を言ふ、甚兵衛はぢつと俯向き居る、浦右衛門不審の思入にて、
浦右　あゝこれ／＼善吉どの、お前方お二人に今逢うたがわしは初めて、それにさつきも道で逢つたと伯父御の話しも不思議だと、思つた所に小遣ひなぞを上げた覺えは少しもないに。
　ト言ふを甚兵衛冠せて、
甚兵　あゝこれ朝日山殿、さつき逢うた其時に、小遣ひにしろと、呉れたではないか。
浦右　何の上げた覺えはないに、そりやあ大方人違ひであ

らう。

甚兵　いや／＼何で貸の頭の、そなたを見違へてよいものか、而もさつき學校の門前で、逢つたぢやないか。

浦右　何の、今朝から門口へも出たことはござりませぬ。

甚兵　はてさて、そなたは若いくせに物覺えのわるいことだ、あれ程逢つた其の時に、しかも二圓といふ金を呉れたことを忘れたのか。

浦右　何とお前が言はつしやつても、わしは少しも覺えはない。

甚兵　さて／＼覺えのわるい男だ。

ト　ばた／＼になり、花道より以前の卯之助泣きながら逸散に出て來る、後より吾助古着屋の若い者にて付いて出來り、卯之助が家へはひるを見て思入あつて直に引返して花道へはひる、卯之助はハット泣伏す、皆々見て、

善吉　こりや卯之助、ものをも言はず何で泣くのだ。

卯之　さつきお祖父さんが買つて呉れた此の着物を、學校へ着て行つたら襟に付いてゐる札を見て、こりや天道干で買つた着物大方是は死んだ者の古いのであらうから、死人臭いとみんなが言ひ、又恥をかゝされました。

ト　泣伏す、浦右衛門思入あつて、

浦右　年端も行かぬ卯之助を、そんなことを言つていぢめるとは、惡い生徒があると見えるな。

善吉　父は知らぬが不斷から、着替一枚ない者が、俄に綺麗な着物をきた故、人の目つまにかゝるも尤も、殊に出所知れざる其の品。

甚兵　や、

善吉　着物を父に見せるがよい。

卯之　あい／＼。

ト　卯之助立上り、善吉の側へ寄る、之にて襟に付いてゐる符牒を見て、

善吉　や、襟に付いたる此の符牒は、見覺えのある安達屋の小印を押した此符牒、どうして是が親父樣、いやさ、こりや安達屋でお買ひなされたか。

甚兵　さあ、其の安達屋で今し方、買つて孫めに着せたのぢや。

善吉　して代料はいか程で。

甚兵　慥一圓二分であつた。

善吉　此の符牒には一圓と五十五錢とござりますが。

甚兵　や。

善吉　それをあなたは一圓と七十五錢でお買ひなれましたか。

　ト　これにて甚兵衛ちつと俯向いて居る、浦右衛門氣の毒なる思入にて、

浦右　見世は隨分大きいが、世間で噂のいか物屋、それは大方見世の者が、つけかけをして賣つたのだらう。

善吉　よもやと思へど代料の其の出所も分明ならず、符牒と値段の違ふといひ、是からわしが安達屋へ行つて調べたことならば、委細の譯は知れるであらう、これから直に一走り行つて樣子を聞きませう。

　ト　善吉思入あつて立上る、甚兵衛あわてゝ留め、

甚兵　あゝこれ伜、行くには及ばぬ。

善吉　なに、及ばぬとおつしやりますは。

浦右　どういふ譯か來合した、此の朝日山も心掛り。

善吉　此の場で樣子を。

兩人　おつしやりませ。

　ト　兩人詰寄る、甚兵衛是非なき思入にて、

甚兵　面目ないが其の品は、何を隱さう買つたは僞り、實はわしが盜んだのだ。

兩人　えゝ。

　ト　びつくりする、甚兵衛思入あつて、

甚兵　孫が不便と道ならぬ盜みをしたも出來心、毎日通ふ學校の生徒に穢ない〳〵と、除者にしていぢめられ、しくしく泣くを見るにつけ、いとしく思へど氣替さへ內證で買つてやり度いと、思ふ矢先に安達屋の見世で目に付く三つ身の着物、寸尺さへもよさゝうと心が迷ひ四邊を見れば、幸ひ人影もなく見世には小僧が居眠り居れば、竊にそれを掠め取り孫に着せたが我過り、年がひもない事をして二人の手前も面目ないが、盜んだ上は此の儘に品を返してやつた迚、惡名拔けぬ此の身の科、實に今では死んでなとそなたに詫をせねばならぬ。

　ト　思入にて言ふ、善吉もちつと思入あつて、

善吉　いかに貧苦に迫つたとて、何故此樣な道ならぬ事をあなたはなされました、纔小裁の着物でも盜めば賊の汚名は脫れず、暗い所へ行つた擧句が懲役人にならねばならぬ。

　ト　以前の繪圖を出し、

これ此の繪圖の家造り立派な暮しをなされましたお身も段々不幸が續き、終にしがない暮しをすれど、なぜこんな事をなされました、えゝ情ないお人ぢやなあ。

浦右　おゝ其の腹立も尤もだ、此の朝日山も裕福な身の上へではござりませぬが、派手な家業をするお蔭で、どの且那方へ無心を言うても、五圓や十圓の金は出來ます。斯ういふ譯で卯之助に着物を一枚着せたいと事を分けておつしやれば、他人ではなし伯父御のこと、わしがどうなとして上げように、譬にもいふ親は泣寄り、つながる縁の浦右衞門、何故餘所々々しくして下すつた、えゝそれが恨みでござります。

甚兵　今言ふ通り朝日山や忰に是を聞かれたら、生きて爰には居られぬ甚兵衞、命を捨てねばならぬわいなう。

ト甚兵衞思入、卯之助之れを聞き、件の着物を脱ぎ襦袢一つになり、

卯之　これお祖父さん、お前が取つた此の着物を先へ返して下さりませ、穢ない着物でいぢめられてもぢつと辛抱しますから、泥坊になつて下さりまするな。

甚兵　おゝそなた迄が其の樣に、言うてくれると返す／＼面目もない私がふしだら、死んで言譯する程に盜みをしたは堪忍してくれ。

ト甚兵衞是迄といふ思入にて、つか／＼と立上り、以前お庭の置いて行つた庖刀を取つて、

幸ひ是で此の身のあかりを。

ト死なうとする、善吉浦右衞門あわてゝ留め、

善吉　えゝめつさうな事なされまするな、あなたが盜みをなされましたも、元はと言へばわたくしの稼ぎが疎く卯之助に襤褸を下げさせ置く故なれば、お前樣が死なつしやれば、又わたくしも言譯に命を捨てねばならぬ仕儀、

浦右　死んでは是迄善吉殿が、晝夜盡した孝行も無になる事故尤もだが、まあ／＼短氣はせぬがよい。

卯之　お祖父さんやお父さんが死ぬのもわたしが友達に、いぢめられて泣いた故、わたしも一緒に命を捨てねば、どうも義理が立ちませぬ。

浦右　年は行かねど學校の厚い敎を受けるだけ物の條理を辨へて、大人も及ばぬ今の詞、よく潔よいことを言つたなあ。

善吉　あなたが死ねば貧苦でも二人三人相續の、出來る血筋も絶えますれば。

浦右　氣を落着けてこれ伯父御、死を止まつて、

兩人　下さりませ。

甚兵　すりや、死ぬるにも死なれぬか。はあゝ。

ト甚兵衞泣伏す、善吉思入あつて、

善吉　からなる上は少しも早く、此の小袖を安達屋へ返して盜んだ詫をしたら、堪忍せぬこともあるまい、どりや一と走り是から直に。

ト立上るを浦右衞門留めて、

浦右　いゝや、假令品物を其の儘返して詫びたとて、盜んだ罪は消えぬから、それより是から己が行つて、其の代金を倍にして、金を拂つて詫びたなら、大抵先でも勘辨しませう。

甚兵　えゝ忝ない志し、わしが盜んだ其の代を、こなたが拂つて下さるとか。

善吉　お禮は詞に盡されませぬ、えゝ有難うござりまする。

浦右　いやうか／＼して居る所でない、先から來ぬ內こつちから、勘定なして身の詫なさん。

善吉　そんなら何分よい樣に、

甚兵　どうぞ詫をして下され。

浦右　必ず氣遣ひさつしやるな。

ト立上り門口へ出て、甚兵衞に向ひ、

私が先方へは掛合ふから、跡で必ず死なうなどゝ、惡い心を出さぬがよい。

甚兵　何から何迄、

兩人　忝ない、

浦右　どりや行つて來ようか。

ト早き合方になり、浦右衞門思入あつて足早に花道へはひる、跡甚兵衞見送りちつとこなしあつて、

甚兵　あゝ思へば纔か十何年我代迄は神奈川で、五本の指に折られた身代、父が跡を讓られて五十年の其の內に見る影もない姿となり、悴や孫に苦勞さすも、おれが榮耀にふけつた故、またも苦勞を掛け足らず、盜みをしたはどうしたことか、草葉の蔭で御先祖が、嘸や恨んでござるであらう。

善吉　其の御苦勞をさせまいと、思つて日夜稼げども、慣れぬ家業に薄元手、

甚兵　せめては孫が成長をと、樂しむ甲斐も情ない、

善吉　わづか氣替の着物もなく、去年の儘なる古布子、

甚兵　垢に親子がしめりがち、

善吉　淚に袖の綻びも、

甚兵　人手へ賴む不自由に、

善吉　年端も行かぬ悴まで、

甚兵　いかい苦勞を、

兩人　しやるなう。

ト兩人卯之助を引寄せ愁ひの思入、此以前下手より喜兵衞羽織着流し古着屋の亭主の打扮、以前の吾助附添ひ出て門口をそつと窺ひをり、此時ずつとはひり、兩人甚兵衞を捉へ、

喜兵　うぬ盜人め、見付けたぞ、

吾助　よく晝日中目を拔いたな。

ト甚兵衞を引きすゑる、善吉びつくりして甚兵衞を圍ひ、

善吉　あゝこれ、物をも言はず人の家へ、案内もなく親人を手籠めにさつしやる此方衆は、まあ何處からござらつしやつた。

甚兵　いや〳〵、忰面目ないが此のお人は、さつき盜んだ着物の主、安達屋の旦那樣だ。これ手を合して拜みます、どうぞ許して下さりませ。

喜兵　へへ、おつゥ哀れツぽく持掛けて、隙でもあつたら逃げる氣だらう。そんな甘口に乘る樣な安達屋喜兵衞樣ぢやあねえ。

吾助　とやかう言つても手證を見られ、家迄こつちで突留めて、捉めえに來たからは、何にも言はず往生して、さあ親仁め一緒にあゆびあがれ。

ト甚兵衞の胸ぐらをとつて引立てる、善吉是を留め、

善吉　あゝこれ待つて下さりませ、此方に覺えのある事故どうかお詫と今し方角力取の朝日山が、盜んだ品の代を持ち、お見世へお詫に行きました、ほんの親父が出來心で、いはゞ是が貧の盜んだ其代料を拂つたのでまだお心が濟まぬなら、此の善吉をどうなとして、どうぞ親父は此儘にお許しなされて下さりませ。

喜兵　飛んだ馬鹿を言ふものだ、今更代を持つて來たとて何しにそれを受取るものか、それで盜人にならなけりやあ、皆盜んで若し知れたら、後から代を拂つて歩かア。もう盜まれた其の事を委しく屯所へ屆けて出たから、これから親仁を連れて行き、お上の吟味を受けにやあならねえ。

吾助　貧の盜みの出來心と、そつちで言つても此方では、是迄度々盜まれた、見覺えのある此の親仁。

喜兵　それも大方汝等親子で、相ずりをして取つたのだらう、是から屯所へそびいて行つて、白狀させにやア腹がいぬ。

吾助　さあ、きり〳〵とあゆびやあがれ。

ト甚兵衞を無理に引立てる、善吉留めるを振拂ひ、ト

ド甚兵衞を引立てる。爰へ下手より佐次郎兵衞白髪鬘着流し、差配人にて以前のお鹿お熊付いて出來り、捨臺詞にて吾助を留め、

佐次 あゝこれ〳〵、樣子は小蔭で逐一聞いたが、お前方が甚兵衞殿を連れて行くのは尤もだが、話しを聞けば朝日山が金を持つて行つたとのこと。

お鹿 盜んだには違ひないが、いはゞ孫が可愛いので貧の盜みの出來心、

お熊 不斷正直々々と、長家中で噂をする、此人達に限つては、

佐次 此の差配人を初めとして、長家の衆が證人だ、晝挊ぎを生業なぞとそんな事は決してない。

お鹿 今はしがない暮しだが、元は立派ないゝ衆の果、

お熊 何でもちよつと魔がさして、欲しいと思つた小裁物。

佐次 符牒通りに拂ひを取つたら、二割か三割儲かる商ひ此長家を差配する、此の佐次郎兵衞が扱ひますから、まあ物靜かに言つて下され。

喜兵 いや御差配人の御挨拶だが、斯ういふ事を此の儘に金を取つて濟ましては、後日の爲になりませぬ。何でも召連れ訴へして、泥坊にせねばなりませぬ。お前さん方がどの樣に、言ひなすつても無駄なことだ、泥坊だから聞かれませぬ。

トきつといふ、佐次郎兵衞むつとして、

佐次 さう慳貪に言はずとも、膝を抱いて賴むのだ、是が場末のぽんぽち大家、たゞ差配人と一口にお前方は見て居るのか。ちつと古い文句だが、先づ肥代は言ふに及ばず、取るなと嚴しいお觸のあつた其の樽代も名を替へて引越し蕎麥の切手で濟ませ、お廢しにした節句錢や又挨錢釣瓶錢何だの彼だのと取立てる差配人とは譯が違ふ、表長家十軒に裏表家が兩側で八軒づゝで十六軒、合せて二十六軒の支配を預かる佐次郎兵衞、この頃火事が物騷と店子で廻る火の番へも、毎日炭や辨當の茶まで自腹で遣る位、店子の難儀は見て居られぬ、是非とも聞いて貰はにやならぬ。

ト思入にて言ふ、喜兵衞前へ出て、

喜兵 いやお前もたゞの差配人でないと、理窟を並べるなら、此方もたゞの古着屋で軒を並べる質屋あがり、紙屑買から出世をした天道干と思ひなさると、それは大きに違ひますぞ。以前柳原の土手側にまだ床店のあつた時

分、粘附仕事の貴物師、双子木綿へ絲拔を拵へて喰せる唐桟張り、唐絲入りを螺の香でごまかす薩摩のまがひ織、足らぬ行丈引張つて、さす物差の一分でも割を喰ねえ古着の目利、其の生馬の目をぬかれ、此間から幾度となく、見世の物を盜まれたは家の暖簾に拘はること、假令誰が口をきいても、親仁を屯所へ突出さねば、此の安達屋の顏が立たぬ。

吾助　旦那はともあれ見世を預かる、己が何時でも越度になり、是迄幾度も迷惑したから、爰でぐづ／＼分らねえ差配人の立入や、長屋の衆の義理立を聞いて居ては果しがつかねえ。

喜兵　それとも達てぐづ／＼言ふなら、ふんじばつても、行かにやあ。

兩人　ならねえ。

ト兩人甚兵衞を引立てる。佐次郎兵衞皆々悔しいといふ思入、善吉は此内術なき思入にて、

善吉　身に覺えある親父の罪、今更何と言譯しても所詮聞いては下さるまいと、思つて默つて居りましたが、御覽の通り七十に近い體で繩目にあひ、此先ひよんな事でもあると、やつぱり死なねばなりませぬ、せめて親父が罪を引受け此の善吉を名代に、お連れなされて下さりませ。

卯之　いえ／＼お祖父さんが盜んだ着物は、わたしに着せたいばつかり故、皆惡いは此の卯之助、どうぞ縛つてどんなめにでも、わたしをお連れなさりませ。

甚兵　あゝこれ、悴やそちには罪はない、必ず庇ふことはないぞ、若い者より老耄した、生い先短かい此の親仁、覺悟を極めて行きますから、あとは何分皆さんで、悴や孫を願ひます。

喜兵　何ぞといふと淚をこぼし、餓鬼を引合ひに出しやあがるが、何をいつても見脫すものか。

善吉　其のお腹立は無理ならねど、親父樣をやりましては悴のわしが濟みませぬ。

卯之　いえ／＼お父さんよりわたくしを、酷いめにあはして下され。

善吉　いや、わたくしを。

卯之　いえ／＼、わたくしを。

ト兩人身を突付け賴む、これを喜兵衞吾助振拂ひ、

喜兵　幾ら吼えても無駄なことだ。

善吉　其處を何卒、

喜兵　それから見物しやあがれ。
ト善吉をむごく突倒して、ばた〳〵、早き合方にて吾助甚兵衛を引立て、喜兵衛付いて足早に花道へはひる。卯之助は善吉を介抱する、善吉起上り是非なき思入にて。
善吉　長家の衆や朝日山が代を拂つて詫をするを、一足違ひで親切も みんな水の泡となり、情をしらぬ安達屋主從。
佐次　おゝ尤もだ〳〵、此の濱で名の高い、無慈悲な相手が安達屋故、
お鹿　どうでたゞでは濟みますまい。
お熊　是からお前や大家さんが、
善吉　歎願をしたらお惠みの、深いお上のお慈悲にて、
佐次　お下げになるまいものでもない。
お鹿　さういふことなら、
お熊　少しも早く、
善吉　跡をお頼み申します。
ト早き合方、善吉氣の急く思入にて逸散に花道へはひる、卯之助跡を追掛け出て、
卯之　わたしも是から跡追ひかけて、
佐次　あゝこれ卯之助、まあ待ちやれ、どうで己も行かねばならねば、一緒に連れて行つてやらう。
お鹿　そんならあなたも、
兩人　おいでなさるか。
佐次　差配人が行かなければ、何かに付けて不都合だ。
卯之　をぢさん、早く行きたいわいの。
佐次　歩いて行つては埒が明かぬ、早く己におんぶしろ。
ト卯之助をおぶひ、門口へ出る、
お鹿　こりやあ大家さん、御苦勞でござりますね。
佐次　途中で車に乘つて行く氣だ。
お熊　それぢやあ、何分、
兩人　大家さん、
佐次　おゝ、火の用心を頼んだぞ。
ト時の鐘の送りにて、佐次郎兵衛卯之助を脊負ひ花道へはひる。お鹿お熊後を見送り、よろしく此の道具廻る。
(交番所の場)――本舞臺正面八尺の交番所、兩褄硝子張の中窓、正面板羽目杮葺の本屋根、屋體の内に椅子を二ツ並べ、此の屋根の上の方ペンキ塗り西洋

風の柵矢來で見切り、下の方異人館を斜に見たる片遠見にて見切り、總て交易場交番所の體。爰に浦部砂道、入江葭成の二人黑の帽子黑の洋服靴にて椅子に掛り居る、屋體の外下手に畑右衞門、田舍親仁やつし裝尻端折り三尺の上帶、股引脚絆草鞋、太五平同じ裝にて腰をかゞめ、物を聞いて居る體、ラッパの節の音にて道具留る。

畑右　へい／＼、失禮ながら少々ものが承りたうござりまするる。

砂道　承りたいとは、何事なるぞ。

畑右　へい、仙元下へ參りますには、どう參りまして宜しうござります。

太五　お敎へなされて下さりませ。

砂道　仙元下へ參るのは、此の道筋を眞直に凡そ十町程參つたら、突當りから左へ曲り、右へ付いて二町行くと、最早其處が仙元下だ。

葭成　まだ近道もあるけれど、田舍の者には入組んで、中道が知れにくい、今同勤が申せし通り十町程參つたら又々そこで聞くがよい。

砂道　道の知れざる處をば、聞かずに參るは損の元、面倒でも幾度となく聞いて參るが宜しいぞ。

畑右　へい、今し方此先で職人體の若い人に尋ねましてござりますが、田舍者だと存じましてそんな所はないのあるのと、馬鹿に致しましたのを、側に居た年寄が見兼ねて、道を聞くならばお巡り樣に、お聞き申せと敎へてくれましてござります故、失禮をも顧みませず承りましてござりまするが、人民保護のお役目とて見る影もないわたくし共へ、御懇に行く先をお敎へなされて下さりますは、有難いことでござります。

太五　土地の勝手も存じませぬ田舍者が此樣に、道を聞き聞き歩きますも、あなた方のお勤めが行屆きます故でござります。昨日も惡い人力車に酒手をねだられ困りましたが、丁度折よくお巡り樣が御通行なされまして、人力車夫をお叱り下され、酒手を取らずしまひました。

畑右　畏れ多いことでござりますが、御一新此の方の好い事を算へますれば、先づ第一が御巡り樣、續いて郵便針がね便り、又鐵道に街の瓦斯燈、橋の掛替へ道普請、犬の糞のないばかりも、結構な事でござります。其のよい事を言ひもせず、やれ世が惡いの不景氣のと、おのが懶きのないのも言ず、苦情のみ言ふなまけ者、まことにお

世話のやけたこと困つた奴等でござります。

ト此内砂道、葭成新聞を見て居る、砂道懐中時計を見て、

砂道　こりや〳〵老人、最早西山へ日も傾き、四時四十分なれば、少しも早く參つたがよい、其の行先も何番地と確と番地を心得ずば、區務所へ參つて聞くがよいぞ。

畑右　勝手知らざる田舍者故、左程迄に御親切にお敎へなされて下さりますは、有難涙がこぼれます。

太五　是に付けてもおらが村の戸長殿は心得違ひ、新聞なども假名付でなければ讀めぬ位にて、

畑右　戸長の權で横柄に、小前の者は目も鼻もないもの〻やうに言ひをるが、

太五　大きな違ひでござるの。

砂道　こりや〳〵、最早五時を打つたれば、餘計な事は申さずとも、

葭成　早く尋ねに參るがよい。

畑右　へい〳〵、これより直に參ります。

太五　まことに有難う、

兩人　ござりまする。

ト辭儀をなし、上手へはひる。

砂道　田舍者といふ者は、餘計な事を申すものぢやが、問はず語りに申したる戸長の噂は何れなるか、

葭成　開けたやうでも在方は、諸事陰暦を用ひますれば、まだ舊習は脱しませぬ。

ト此時花道の方にて、

喜兵　うぬ逃げるとて逃すものか。

吾助　さあ、きり〳〵とあゆびやあがれ。

トやはりラッパの稽古笛になり、花道より以前の喜兵衞先に立ち、吾助甚兵衞の胸ぐらを取り、引ずりながら出て、

甚兵　どちらへでも參りますから、手荒い事してくださりますな。

喜兵　人の見世の代物をちよろまかした盜人め、手荒くしねえでどうするものだ。

吾助　ぐづ〳〵せずとあゆびやがれ。

ト右の鳴物にて舞臺へ引ずり來る、兩人是を見て、

砂道　こりや〳〵兩人暫く待て、見れば老人を引立て參り、

葭成　何らの件で其樣に、手荒きことを、

兩人　致すのぢや。

喜兵　此の老耄はわたくしどもの古着を盗みました故、お訴へを致しませうと召連れましてござりまする。
吾助　手荒いことを大人氣なく致し度くもござりませぬが、見掛けと違つてこいつめは、いけッぷとい奴でござりまする。
砂道　すりや召連れし老人は、
葭成　盗みを致せし者なるか。
喜兵　盗みし次第をお二人さま、お聞きなされて下さりませ。
ト此時上手にて、
重良　其の次第は濱崎重良、それへ參つて承らん。
ト合方になり、上手より重良黑の帽子同じ洋服にて出來る。
砂道　これは〳〵濱崎氏には、日夜を掛けて御巡行、
葭成　御苦勞千萬に、
兩人　存じまする。
ト辭儀をなす。
重良　各々にも御同樣。
ト會釋をする。
砂道　何はしかれ、
兩人　先づ〳〵これへ。
ト椅子を出す。
重良　ゆるしめされ。
ト椅子へ掛け、
只今あれにて承りしが、それに控へし兩人が召連れ來りし老人は、盗みをなせし者でござるか。
砂道　いかにも、盗みを致せし由、兩人訴へ、
兩人　申してござる。
重良　こりや老人、其方は何れの者ぢや。
甚兵　へい、わたくしことは元町の十番地に居りまして、紙屑買を渡世に致す、福住善吉が親甚兵衞と申しまする。
重良　して又衣類を盗まれし其方は、何れの者ぢや。
ト重良是を手帳へ書留め、
喜兵　わたくしことは住吉町十五番地に住居致し、古着渡世を致します、安達屋喜兵衞と申します者。
吾助　又わたくしは同家の手代、吾助と申します者にござります。
ト重良一々書留め、
重良　こりや喜兵衞、其方が甚兵衞に盗まれし其の品は。

喜兵　卽ちわたくし店先へ釣置いたる生薬物銘仙縞の小裁小袖、是なる老耶が盗みまして、大膽にも孫に着せ學校へやりましたを、見附けましたは襟裏に、符牒の付いて居るのが證據、それ故召連れ訴へに、親仁を連れて參りました。

晋助　まだ此外に先達より幾品となく盗まれましたが、こいつの仕業と存じられまする。

喜兵　太い親仁でござりますから、其の御詮議を共々にお願ひ申しあげまする。

甚兵　いえ、外の品は存じませぬが、小裁小袖を掠めましたは、何をお隠し申しませう、一人の孫がござりまするが學問がさせたく學校へお頼み申しましたが、其の日の煙も立兼ねますれば、穢ない装で參りまする故、側へ寄るなど朋輩の惡い子供にいぢめられ、どうぞ試驗の其の時は、綺麗な着物が着て行きたいと申しますのが不便故、假令此身はどの樣な憂目に逢はうとも、もう先の短い體に、生先の長い孫が朋輩と共々試驗に出られる樣、よい着物をば着せたさに、ついわたくしも道ならぬ事を致してござりまする。

ト是を聞き重良不便なといふ思入あつて、

重良　いや其方は殊の外とり逆上て居る樣子、申すこともそゞろなれば、悴を屯所へ呼出し逐一吟味致すであらう。

砂道　仰せの如く甚兵衛は、賊など致す者とも見えず。

葭成　彼が悴の善吉を、御吟味あるが宜しうござる。

喜兵　失禮ながら賊などを致さぬ者とはお目違ひ、見掛は殊勝に見せかけても、心の太い此の親仁、只一通りでは言ひますまい、體の骨が砕ける程拷問なされて下さりませ。

砂道　やあ、上の詮議に入らぬ口出し。

葭成　失禮千萬控へてをらう。

喜兵　へゝえ。

ト抑へる。

重良　兎にも角にも善吉を、呼出し問ひ糺さん。

ト此時早めたるラッパ、ばた／＼にて花道より以前の善吉卯之助の手を引き足早に出來り、あとより、佐次郎兵衛追ひかけ出來り、花道にて、

善吉　何れへ引かれてござつたかと、心も空に追ひかけしが、向うにござるは親父さま。

佐次　むゝ、甚兵衛殿とあるからは、ちつとも早く善吉

殿。
善吉　卯之助來やれ。
ト ばた／＼にて舞臺へ來るを、
砂道　こりや、其の方は、
葭成　何者なるぞ。
ト 是にて善吉下に居て、
善吉　はッ、わたくしことはこれに居ります甚兵衛が悴、善吉と申す者でござります。
佐次　又伴ひましたは孫の卯之助、差添ひ參りしわたくしは佐次郎兵衛と申します、差配人でござりまする。
砂道　お丶其方が善吉なるか、只今是なる濱崎氏、
葭成　父甚兵衛が儀に附いて、即刻屯所へ呼出すところ
重良　よくぞ是へ參りしぞ。
善吉　はッ。
ト 辭儀をなす、重良思入あつて、
重良　こりや善吉、其方が親甚兵衛は、當年何年に相成るぞ。
善吉　へい、六十七にござりまする。
重良　お丶六十七に相成るか、定めし老耄致しをらうな。
善吉　いえ、年程に老耄は。
重良　いや／＼老耄致し居らう、申さば小兒も同樣に、求むる心で其衣類持歸つたことであらうな。
善吉　へ丶え。
ト 思入
佐助　ても有難い今のお尋ね、左樣でござると善吉殿、早くお受をしたがよい。
ト 佐次郎兵衛勸める、善吉思入あつて、
善吉　へい、左樣にござりまする。
重良　然らば悴善吉より、其の代金を償ひなば、喜兵衛方には何がしか利を得る共損は行くまじ、甚兵衛は六十有餘で老耄なせしことなれば、取るに足らざる小兒同樣、其の代金を受取らば喜兵衛は此の儘料簡致せ。
喜兵　あなた樣の仰せなれど、此の料簡は出來ませぬ。
重良　なに、出來ぬとは。
喜兵　假令老耄致さうとも、人の物を只取つて金を渡さず老耄と、申せばそれで濟みますか、金を出してもわたくしは、其料簡は出來ませぬ。
吾助　今日に限らず是迄も、度々見世の代物を盗まれましてござりますが、大方こいつが人知れず盗んだことでござりませう。

喜兵　此の場で強い拷問なし、白狀させて下さりませ。

重良　拷問なすは其方が、指圖に及ばず我々が、今日務むる職掌なれど、老耄なせし甚兵衞故、借りて參りし心ならん。よしや其方存ぜずとも、家內に誰か甚兵衞に貸したる者のあらんも知れず、人に情を掛けるのも必ず家の祈禱なるぞ、篤と家內の詮議なし、再び屯所へ申出でよ。

ト思入にて言ふ、喜兵衞何をといふ思入にて、

喜兵　いえ、宅へ歸つて其の詮議を致す迄もござりませぬ、元より大家といふ程の身代にてもござりませねば、是なる吾助の其外に、貸します者はござりませぬ。

重良　すりや吾助、其の方貸した覺えはないか。

吾助　いえ假令親類緣者でも一切人に物を貸すなと、申し付かつてをりますれば、何しに親仁に貸しませうぞ。

喜兵　小裁小袖は甚兵衞が、我店先で盜みましたに聊相違ござりませぬ。

佐次　是はしたり喜兵衞殿、知らぬとこなたが言ふけれど、覺え違ひもあるものだ、情は人の爲ならずと事をわけておつしやるのに、よく考へて見たがよい。

喜兵　憚りながら古着屋の仲間內でも目が利いて、安達の鬼といはるゝ喜兵衞、また五十にもならぬ體一錢たりとも貸したものを、忘れる樣なことはない。

吾助　小裁小袖は甚兵衞が盜んで家にあつた故、脫れッこのねえ盜人を、何でお庇ひなさるゝか。

喜兵　昔と違つて上向は、依怙贔屓のない世の中に、さりとは分からぬ御詮議だ。

砂道　やあ、濱崎氏がお調べあるを分からぬ詮議とは、何事なるぞ。

葭成　上を上と思はざる、失禮極まる無禮者めが。

喜兵　それだといつて分からぬから。

砂道　やあ、まだ〳〵左樣な事を申すか。

葭成　強ひて申さば許さぬぞ。

ト是にて吾助喜兵衞の袖を引く。

喜兵　恐れ入りましてござりまする。

ト重良物柔らかに、

重良　こりや喜兵衞、其方貸した覺えなく、いよ〳〵以て甚兵衞が、盜み取りしと申すのぢやな。

喜兵　へい彼が盜み取りましたに、

吾助　聊相違ござりませぬ。

重良　むゝ、相違ないとか。

ト重良砂道と顔見合せ、是非もないといふ思入。
佐次　えゝ鬼と言はるゝ程あつて、さりとは情を知らぬことだ。
ト此内甚兵衛善吉は俯向き居る、重良甚兵衛に向ひ、
重良　こりや甚兵衛、安達屋喜兵衛が店で、小裁小袖を盗みしか。
甚兵　はい、盗みましてござりまする。
ト是を聞き、善吉前へ出て、
善吉　あゝ是はしたり親父様、お前様は何をおつしやります、其の小袖はわたくしが盗みましたのでござります。
甚兵　え、何と言やる、
善吉　稼人故わたくしを、おかばひなすつて盗みもせぬ小裁小袖を盗んだと、おつしやりますは身に取つて有難うはござりますが、親を罪に落しては天道様へ濟みませぬ。
ト重良へ向ひ、
只今甚兵衛が盗みましたは全く僞り、此の善吉でござりまする。
甚兵　いや〳〵それはこなたが僞り、小裁小袖を盗んだは、こなたではない甚兵衛だ。
吾助　親父に違ひござりませぬ。

善吉　違ひないと言はつしやるには、何ぞ親父が盗んだといふ、慥な證據がござりますか。
喜兵　おゝ慥な證據は安達といふ、小印を押した見世の符牒の襟に付いてる小裁小袖が、家にあつたが慥な證據。
善吉　符牒の付いた其の小袖が、家にあつたはわたくしが、盗んで持つて歸つたのだ、それを親父が盗んだ證據と、おつしやりましても喜兵衛様、そりや證據にはなりませぬ、あなたの見世で盗んだは、此の善吉でござります。
甚兵　いや〳〵善吉ではござりませぬ、貧に迫つて私が、盗みましてござります。
善吉　いえ〳〵親父の申すは僞り、其の小袖はわたくしが、盗みましてござりまする。
甚兵　まだ〳〵そんな事をいふか、道にかけたる事はせねど、引續いての此の不仕合に、其日の煙も立兼ぬれば、生甲斐のない此の甚兵衛、盗み致した其罪で今獄屋へはひるとも、生先のない體故、死んでも悔む所はない。
善吉　勿體ない事おつしやりませ、假令幾つになつたとて、死んでもよいといふ様な親がなんでござりませう、貧乏暮しに世を見限り、左様な事をおつしやるのも、此の善吉が意氣地のない故、庇つて下さるお志しは有難うは

ござりますが、盗みをしたは私故、必ずおかばひ下さりますな。

甚兵　えゝさりとては聞分のない、そなたが獄屋へ行つた日には、後に殘つて孫や己が、何で命が繋がれよう、其日に迫つて行末は首でも縊つて死なねばならぬ、とても死ぬなら獄屋へ行つて、そなたの苦勞が助けたい。

善吉　あなたを獄屋へやりまして、何で苦勞が助かりませう、跡をお案じなされまするが、幸ひ此頃朝日山も旅から歸つてをりますれば、譬にもいふ親は泣寄り、見て居ることではござりませぬ。

甚兵　何であらうと邪に、盗みをしたは此の甚兵衞、さあ繩かけて下さりませ。

ト後へ手を廻す。

善吉　いえ／＼盗みを致しましたは、此の善吉でござります。

甚兵　いえ／＼、甚兵衞でござります。

善吉　いざ、繩掛けて、

兩人　下さりませ。

ト兩人後へ手を廻す。此内重良ぢつと思入あつて、

重良　親子盗みを致せしと、互ひに罪を爭ふ兩人、我に於ても決定し難し、まことに盗みをせしといふどちらなりとも確證あらば、此場に於て申し立てよ。

甚兵　へい、此の甚兵衞が盗みし事は、これなる孫が存じ居ります。是が證據でござります。

ト重良物柔らかに、

重良　こりや小兒、其方は何と申す。

卯之　はい、卯之助と申しまする。

重良　當年何歳に相成るぞ。

卯之　七年三箇月にござりまする。

重良　おゝ、いまだ七年三箇月とか、年より餘程ませて居るな。こりや卯之助、今其方も聞く通り祖父と父が盗みしを、互ひに我と爭ひ居るが、其方それを存じ居るか。

卯之　はい、存じてをりまする。

重良　おゝ存じて居らばそちが證人、年まだ七年三箇月、幼年なれば心中に必ず巧みのあらう樣なし、さあ、祖父が衣類を盗みしか、又は父が盗みしか、有體に言うて聞かせよ。

卯之　はい、此の着物を盗みましたは。

甚兵　こりや、此の祖父であらうな。

善吉　いや、此の父であらうがな。

ト互ひにおれだと早く言へといふ思入、卯之助言兼れて、
卯之　さあ、それは。
重良　何れなるぞ。
卯之　さあ、
砂道　祖父か、
葭成　父か。
卯之　さあ。
重良　何れが盗みを致せしか、包み隱さず早く申せ。
トこれにて卯之助善吉と顔見合せ思入あつて。
卯之　盗みは父が致しました。
ト泣伏す。
甚兵　えゝ、そりやまあ何を言やるのだ。
善吉　おゝ、よく盗んだと言つたるぞ。
重良　少年なれど利發な生れ、親子の賊を定めしは、近頃感心致せしぞ。
ト重良感心の思入、善吉はよく言つたと嬉しきこなし。
甚兵　いえ／＼、孫が申しましたは、ありや僞りでござりまする。

重良　こりや／＼甚兵衛何を申す、貧に迫つて盗みせし倅善吉は言ふ迄もなく、まだ幼年の卯之助が苦心を思はゞ其方は、何も申さず控へ居よ。
甚兵　それぢやと申して。
重良　まだ／＼申すか、うろたへ者めが。
甚兵　すりや、助けることは叶ひませぬか、はあゝ。
ト甚兵衛泣伏す。
重良　罪條極まる上からは、善吉に繩掛けめされ。
葭成　心得ました。
ト善吉に繩をかける、卯之助見て、
卯之　こりやお父さんは縛られてか、悲しいことでござります。
ト泣く／＼、佐次郎兵衛介抱しながら、
佐次　おゝ尤もだ／＼、悲しいのは無理ではないが、命を取らるゝ譯ではないから、必ずともに案じるな。親の心を受繼ぎてわづか七つか八つにて、父と言つたは感心だ。明日はきつと新聞へ、そなたを褒めて出るのであらう。
ト喜兵衛吾助思入あつて、
喜兵　思ひがけない盗人が、あちらこちらになつたれど、何方にならうと此方では取られた小袖が返つた上、盗ん

だ奴が牢へ入り暗い所に居た擧句が、御處置が付いて懲役人。

晋助　油をしめたり米を搗いたり、仕なれぬ事の苦しみをさせるが此方の腹いせだ。

佐次　え丶取られた物が返つたら、さほどに言はずとよいことを、成程人が言ふ通り、主從共に安達の鬼だ。

ト此時砂道葭成右左へ立掛り、

砂道　こりや〳〵、何を立つて見物致す、往來の者は早く通れ。

葭成　車は道の妨げなるぞ、早く引いて參らぬか。

ト言捨て元の所へ來る、善吉顏を上げ甚兵衞へ向ひ、

善吉　もし親父樣、貧に迫つて盜みをなし、思はぬ御苦勞掛けますが、是も時節と思召し、必ず狹いお心をお出しなさらず身を大事に、お過しなされて下さりませ、どうで始終はわたくしも、懲役人になりませうから、滿期で家へ歸る迄、どうぞ倅が御面倒御覽なされて下さりませ。

甚兵　お丶其の事ならば案じるな、たとへ此身は喰ずに居ても、孫卯之助に一日でもひもじい思ひはさせぬわいの。

善吉　え丶有難うござりまする。

甚兵　とは言へ此身がなした事にて。

ト言ひ掛けるを、

卯之　あ丶もしお祖父さん、そんな事をおつしやると、お巡り樣へわたくしが、噓つきになりまする。

甚兵　え丶利口なことを言ひをるなあ。

ト泣く。

重良　人立なせば善吉は、屯所へ拘引致すであらう。

砂道　善吉立ちませい。

善吉　はあ丶。

ト此時ラッパ、ばた〳〵になり、花道より以前の浦右衞門走り出來り、花道にて此の體を見て、直に舞臺へ走り來り、

浦右　こりや善吉には何故に、か丶る繩目にあつたるぞ。

善吉　倅卯之助に着せようと、小裁小袖を盜みたる、其の科故に此の繩目。

浦右　すりや年とりし親に替つて。

善吉　あこれ、其の年とりし親父樣を殘して行くが心掛り、力と賴むはこなたのみ。

浦右　それは氣遣ひさつしやるな、跡の二人は及ばずながら、わしが引取り世話をします。

佐次　さつきこなたが古着屋へ掛合ひに行つて下すつたが、主人が此方へ來て居たれば、留守にて話が調はなんだか。

浦右　いや、似たもの夫婦と女房が、とつても付けぬ挨拶に是非なく歸つて樣子を聞き、爰へ駈付け來ましたが、纔な事で孝心の此の善吉が縛られしも、情を知らぬおのれら故。

ト喜兵衞吾助の首筋をぐつと摑む。

喜兵　あいたゝゝ、許して下せえ〳〵。

吾助　目が飛出る〳〵。

佐次　ても扨もよい氣味な。これでさつぱり溜飲が下つた。

ト胸を撫下す。

浦右　こりやア汝等を何うしてくれうぞ。

重良　こりや浦右衞門、粗暴致すな。

浦右　それだと申して、憎い奴故。

砂道　制し止むるを用ひねば、

葭成　其方とても容赦はないぞ。

浦右　えゝお巡り樣がなくばなア。

ト浦右衞門兩人をむごく突放す。

喜兵　あゝ痛い〳〵、すンでに此の首が、

兩人　落ちるかと思つた。

ト時の鐘、善吉思入あつて、

善吉　これ卯之助、爰へ來やれ。

卯之　あい。

ト側へ來る。

善吉　己が獄屋へ行つてゐる內、たつた一人の親父樣怪我でもあつては濟まぬ故、朝夕お側に付添ひて己に替つてお世話をしてくれ。

卯之　ようお世話を致しますから、それはお案じなされますな。

善吉　佐次郎兵衞樣へお願ひは、跡は子供と年寄故、御面倒でも火の許をお氣を付け下さりませ。

佐次　それは氣遣ひさつしやるな、わしと婆アで見廻ります。

善吉　是にて思ひ置くことなし。いざ、お引き下さりませ。

甚兵　そんならそなたは、もう行くか。

善吉　親父樣。

甚兵　悴。

善吉　お達者で居て下さりませ。

ト兩人四邊を憚り、言ひたき事も言はれぬといふ思入にて、親子の別れ宜しく。

喜兵　其の身の科とは言ひながら、見るも哀れな屑買善吉。

吾助　是でこつちの溜飲が下つた。

浦右　えゝ憎い口をば。

ト立掛るを甚兵衛留めて、

甚兵　あゝこれ、手出しをしてはお上へ恐れ、

浦右　ちえゝ、忌々しい。

ト持つて居る手拭を捻ぢ切る、

喜兵　やあ、こりや手拭ひを。

吾助　首であつたら大變だ。

ト頭を抑へる。

重良　喜兵衛は調ぶる事あれば、他行致さず沙汰を待て。

喜兵　はッ。

ト下に居る、重良善吉に向ひ、

重良　言ひ置く事は、

ト善吉と顏見合せ、氣味合の思入を木の頭、

最早ないか。

善吉　はッ。

ト皆々有難いといふ思入宜しく、調練の大太鼓にて、

ひやうし　幕

三幕目、同返し　奥山北庭宅の場　横濱角力内の場

「役名——寫眞師北庭筑波、北向の虎藏、朝日山浦右衞門、池田平七、善吉親甚兵衞、旅ぜげん源六、北庭弟子下谷上野、浦右衞門妹お梅、北庭女房おかつ、お梅母おくら、卯之助、其他。」

（北庭宅の場）——本舞臺一面の平舞臺正面眞中更紗の暖簾口、此左右ペンキ塗の壁、上手いつもの障子屋體の所一間のドンクロ、小窓付三尺の入口、開きの戸閉切りあり、下の方九尺晝心に寫眞の受場片流しの屋根付、此正面中塗の壁之へ更紗の幕を張つてあり、暖簾口の下手は幅三尺長さ一間の床几、此後の棚に硝子板藥を入れし瓶などを列べ、暖簾口の下手の壁に大きな姿見鏡掛けてあり、いつもの門口の所西洋風の枝折門、此外正面へ「北庭筑波」と記せし横物の看板を掛けし西洋造の塗家の正面を見せ、總

て花屋敷北庭寫眞場の模樣宜しく、爰に椅子をだいぶ列べ、上手よき所に三ッ足の風呂冠りの切掛けてあり、下手に賢七、繁藏洋服裝にて椅子に掛り煙草を呑みゐる、弟子の下谷上野散髮鬘着流しにて帶へ手拭を挾み、上手の床几へ腰を掛け火鉢にてガラスの繪をあぶり居る。此見得、唄、見世物の囃子にて幕明く。

賢七　いや、つかぬことをお聞き申す樣ぢやが、新富町に居る花輪吉野と申す女の寫眞師は、先生のやはりお弟子でござるかな。

上野　左樣でござります。女でこそござりますが、なかなかよく取りますから、どうぞ御贔屓を願ひます。

繁藏　當今俳優の寫眞では、花輪氏に限ると申す故、先頃僕も大阪土產に三圓ほど求めましたて。

上野　それは有難うござります。

ト件のガラスを箱へ入れ、

左樣なら仕上りました。

ト出す。賢七蓋を明けて見て、

賢七　いやこれでは僕の鼻の低いのが、どうやら高く相見えまする。

繁藏　兎角寫眞は筑波先生に、寫して貰ふことでござる。

ト爰へ暖簾口より、筑波散髮鬘着流し、寫眞師の打扮にて紙取りの寫眞十二枚を封じたると、請取を持ち出來り、

筑波　これは大きにお待たせ申しました、ツイまだ臺紙へ張らずに置きまして、甚失敬を致しました。

賢七　いや／＼其內硝子取を一枚仕上げをして貰ひし故、別に待遠なこともござらぬ。

繁藏　鼻の低いのは斯の如く寫し樣でしれませぬが、目の惡いのはどうか出來ませぬか。

筑波　いやお目ばかりは致し方がござりませぬ。

ト賢七洋服の隱しより札を出し、

賢七　然らば篠田君より聞きました、謝儀の三圓御受納下されい。

筑波　これは御叮嚀なるお禮に預り宜しくお願ひ申しまする。是に金子の請取も一緒に添へてござりまする。

ト寫眞と請取を出し、金を請取ること宜しくあつて、筑波有合ふ椅子へ掛ける、此時合方になり、花道より前幕の甚兵衞卯之助の手を引出で來り、花道にて、

甚兵　これ／＼卯之助、又はぐれるといけぬから、祖父の

手を放さぬがよいぞ。

卯之　祖父さん是から何處へ行くのだえ。

甚兵　此の花屋敷の北庭さんとおつしやる寫眞師の先生は、お上手ぢやといふこと故、寫してお貰ひ申さうと、それでこつちへはひつて來たのぢや。

卯之　わたしやまだ見たことがないから、寫す所を見たうございます。

甚兵　おゝ一緒に行けは見らるゝわいの。

ト舞臺へ來り、枝折門の外より内を窺ひ、うろ〳〵として居るを筑波見て、

筑波　これ上野、子供を連れて門口に老人がうろついて居るが、大方眼鏡を捜すのであらう、此奥だと教へてやれ。

上野　いゝしるべの看板が立つてゐるに、親仁は無筆で讀めぬと見える。

ト枝折門の所へ來り、

おい老爺さん、子供に眼鏡を見せるのなら、此の奥へ行くと門があるよ。

甚兵　いえ眼鏡ではござりませぬ、こちら樣の先生に、寫眞を願ひに參りました。

上野　なんだ、寫して貰ふのだ。

ト甚兵衛の裝を見て、

其の裝を寫すのかえ。

甚兵　北庭筑波とおつしやりまする先生の、お名を聞き及びまして、濱から出かけて參りました、どうかお安く一朱にて、お寫しなすつて下さいまし。

上野　そりやア折角のお頼みだが、宅の先生は官員方や世に有名の人達の寫眞ばかり取つて居るから、忙がしくつて寫されない、一朱の寫眞を頼むなら、奥山へ行くと何軒も代價一朱といふ看板を掲げた寫眞の見世があるから其處へ行つて頼みなさい。

甚兵　定めて左樣でござりませうが、觀音樣が信仰故お參り旁々横濱から名高いお名を聞及び、態々出かけて參りました、どうか先生へお願ひなすつて、一朱で寫して下さりませ。

上野　いや、いくらお前が頼みなすつても、一朱の寫眞は寫されねえ。

甚兵　それでは願ひは叶ひませぬか。

ト本意なき思入、筑波是を聞いて居て、

筑波　これ〳〵上野引込んで居ろ。

ト枝折門の所へ出て來り。

もしお老爺さん、樣子はあれで聞きましたが、お賴みは承知したから、まア此方へはひつておいで。

甚兵　それは有難うございます。

上野　もし〳〵先生、それでは沽券が下ります。

筑波　馬鹿なことをいつたものだ、假令百圓持つて來ても心に濟まねば天氣合が惡いと斷る客もあり、たとへ、一朱が一錢でも寫眞師多い橫濱から、態々尋ねて來た老人、其志しが嬉しいから、無代でも僕は寫してやる氣だ。

賢七　いや流石は有名な先生だけ、僕等もそれにて恐縮致す。

紫巖　先生のお寫しあるを拜見致して參りたいが、榊原の倭杖を一見致す心底故。

賢七　是にてお暇仕る。

筑波　丁度これからいらつしやると、名人方の試合になります。

賢七　それは重疊。

兩人　然らば先生。

筑波　篠田君へ宜しう願ひます。

兩人　失敬御免。

トシャツポを冠り、兩人花道へはひる。

筑波　さあお老爺さん、こつちへおはひり。

甚兵　左樣なら御免下さりませ。

ト卯之助を連れて枝折門の內へはひる。

上野　いや穢ない裝だ。

と言ひ掛けるを。

筑波　あこれ。

ト押へ、

丁度今が寸暇故、直に請場へござらつしやい。

甚兵　それは早速のお聞濟み、有難いことでござります。

筑波　さうしてお前一人取りかえ。

甚兵　はい、私ばかりで宜しうございますから、一朱でお寫し下さりませ。

筑波　はて、決して禮には及ばぬから、そんな心配をさつしやるな。

卯之　伯父さん今日は。

ト辭儀をする。

筑波　此の子はお前のお孫かえ。

甚兵　はい、卯之助と申しまして、一人の孫でござりますが、どうかお寫しなさる所をお見せなされて下さりませ。

筑波　こつちへはひつて見るがいゝ。さあ、お前は向うへ行つて掛けなさい。

上野　さあ〳〵、此方へ來なさい。

ト上野甚兵衛を下手の受場へ連れて行き、椅子へ掛けさせる、此内筑波は上手の棚より大阪のガラスを出し、風呂へはめ、冠りをして位置を見ることあつて、板と藥を持ち上手のドングロの内へはひろ、藥ごしらへあつて手拭を腰へ挾み出來り、風呂へ板をはめ、前へ出て、

筑波　これから、

ト風呂の蓋を切り、口の内にてセコンドの度を計りちよつと蓋をして、

宜しい。

ト風呂よりガラスを出して、上手のドングロへはひり、留藥をして出來り、

さあ上野、ニースをあぶつて仕上げをしてくれ。

上野　はい〳〵。

ト件の板を持ちて暖簾口へはひろ、筑波手拭にて手を拭きながら、

筑波　今直に仕上げるから、爰へ來て一ぷくお上り。

甚兵　へい〳〵有難うござりまする。

ト下手の椅子へ腰を掛ける。

筑波　さうしておぢいさん、其子は幾歳だね。

甚兵　へい、七年と三ケ月になります。

筑波　それでは定めて、學校へ上げさつしやれたでござらうな。

甚兵　へい、其の學校ゆゑ災ひを。

筑波　えゝ。

甚兵　いえ態々寫しに參りました。

ト甚兵衛始終しをれて居る、筑波思入あつて奥へ向ひ、

筑波　これおかつや、茶を持つて來い。

ト暖簾の内にて、

かつ　あい〳〵。

トおかつ女房の打扮にて茶盆へ菓子鉢と急須茶碗を載せ持つて出來り、卯之助を見て、

おや可愛らしい子でござんすなあ。

甚兵　それ、御挨拶を申さぬか。

卯之　をばさん今日は。

ト辭儀をする。筑波茶を汲んで茶托へ載せ、

筑波　さあ、おぢいさん、茶をお上り、

甚兵　これは恐入ります、お手で下さりませ。

ト頂いて呑む、おかつ菓子を取つて紙の上へ載せ、

かつ　さあ、お菓子を上げようわいなア。

ト出す。

卯之　をばさん有難う。

ト兩手で受けておし頂く。

かつ　ほんによい行儀でござんすなあ。

筑波　學校へ行くと見えて、なか〳〵行儀のよいことだ。

ト此内甚兵衛懐より塵紙を出し、一朱の札を紙に包み、

甚兵　これは甚だ輕少でござりますが、ほんのお禮の印ばかり。お納めなされて下さりませ。

ト筑波の前へ差出す。

筑波　いや〳〵そんな禮には及ばぬ、華族方や官員方のお頼みによつて寫す時は、過分な謝儀を受納すれば、お前方の一人や二人たゞ取つたとて何でもないこと、紙取にして遣りたいが濱と聞いては遠方故、又出て來るのも億劫と、未然を察して大阪のガラスへ取つて上げるから、又寫さうと思ふなら、何時でも頼みに來さつしやい。

甚兵　大判と申しましては百疋からのでござりませうに、所詮これでは足りますまい、どうか内金と思召してお納めなされて下さりませ。

かつ　はて其の御心配には及びませぬ、心が濟まぬとお言ひなら、一旦こちらへ受けまして又改めてそちらへ上げれば、是で其の子に入用の筆でも買つて遣らしやんせ。

ト件の札を取つてちよつと頂き甚兵衛へ返す。

甚兵　左程迄おつしやいますゆゑ、濟まぬことではござりますが、仰せに隨ひ此の孫めに、筆を買うて遣はしませう。

卯之　丁度筆がなかつた故、歸りに買うて下されや。

かつ　わづか七ツか八ツ故玩具のほしい年頃に、筆を買ふのを悦ふは、ても感心なことでござんす。

ト筑波思入あつて、

筑波　から見た所がお前方も、以前はよしあるお人と見えるが、今寫したる寫眞の面、どうやら愁ひに沈む樣子。

甚兵　えゝ。

筑波　いやさ、何ぞ苦勞になる事でもあつてのことか、おぢいさん何も御縁だ、其の譯を話して聞かせてくれまいか。

ト思入あつて、

甚兵　いやもう其のお尋ねに預りまして、申し上げるも面目ない身の上話しでござりますが、まあお聞き下さりませ。

　ト是より合方きつぱりとなり。

何をお隱し申しませう、元私は神奈川の青木町に住居を致し、福住甚兵衛と申しまして、米問屋をして居りましたが、纔二十年たゝぬうちにかゝる姿となりまして、する事なす事鶍となり、その日の煙りも立兼ねます程零落ましてござりまする。

筑波　むゝ、神奈川の福住といつては、名に響いたる富家であつたが、どうしてこんなに零落して其日の烟りに困る程、難儀の中で何で又、寫眞を取つて置かつしやる、是にも譯のあることか、包まず話して聞かせなさい。

甚兵　さあ、其譯と申しまするは、よい年をして私が心得違ひを致しまして、既に縲紲に及ぶ所を伜が罪を其の身に引受け、終に獄屋へ參りまして日影も見えぬ暗い所に難儀を致して居りまする。又跡に殘つた私と是れなる孫が艱難辛苦、尤も朝日山と申します角力が縁家でござりまして、是から見繼いで呉れますが、是も妹が家出なし物入多でござりますから、世話になるのも氣の毒故、わづかな元手で燧石やたはしを請けて賣りますが、それさへろくに賣れませねば、いつそのことに、わたくしが。

筑波　えゝ。

　ト聞咎める故、甚兵衛氣をかへ、

甚兵　さあ、いつそわたくしがをりませなんだら、是は子供の事故何處でも置いてくれませう。譬にもいふ人間は老少不定の習ひ故今日斯うして居りましても、明日知れぬが老の身の上、それ故今日はお暇乞に、いやさ老のいとまに觀音樣へお參り申しに參りまして、せめて伜に面影を殘して置いて遣りたいと、とてもの事に東京で名高いこちらの先生にお願ひ申す心得で、わづか一朱の此のお禮もやう／＼のことで都合して、持つて參りましてござりまする。

　ト愁ひの思入にて言ふ、此内筑波扨はといふこなしありて、

筑波　むゝ、其の話しの息子といふのは、もし善吉とはいひはせぬか。

甚兵　どうしてそれを御存じで。

筑波　はて知つて居るのは私の友達、假名垣魯文が編輯の

「かなよみ」といふ新聞に其の事柄が出て居ました。

甚兵　そんなら忰が入牢した、其の事柄が「かなよみ」の新聞に出てをりましたか。

卯之　お父さんの恥故に默つて居たが、此間表をよんで歩きました。

甚兵　其の新聞を御覽では委細の譯も先生には、よく御存じでござりませう。あゝ面目ない〳〵。

ト頭を押へてさし俯く、

かつ　そんなら此間の新聞にあつた、卯之助さんといふ親孝行は此お子でござんしたか。

筑波　親御はどういふ人かはしらぬが、今に此子が出世して、こなたに樂をさせるであらう。

甚兵　其の孝行な孫を捨て。

筑波　えゝ。

甚兵　いや、此孫を捨て忰めが、嘸や案じて居りませう。

ト此內卯之助件の菓子を持ちし儘、下手にちやんと扣へて居るゆゑ、

かつ　もし卯之さんとやら、何故其のお菓子をお上りでない。

卯之　はい、是は濱へ歸りまして、蔭膳をする其時に、お父さんへ供へます。

かつ　でも孝行な心掛け、お父さんに上げるのはわたしが別に上げるから、それはお前が喰べたがよい。

卯之　よいお菓子でござりますから、お父さんに供へてから、それから喰べたうござります。

かつ　それではもつと入れて上げよう。

ト菓子の包を取つて又菓子を入れ、卯之助にやり、

もし旦那、感心な事ぢやござりませぬか。

筑波　內に居る上野なぞは、倍から年が上だけれど、心立は遙に下だ。

かつ　ほんに此間もビールを一本親御の所へ持たしてやつたら、途中でみんな吞んでしまひ。あんな不孝な人はございません。

ト爰へ暖簾口より上野箱入のガラスを持ち出來り、

上野　ハツクシヨン、こりや風でも引いたか知らん。

かつ　今お前を譏つて居たから。

上野　どうでよくは言はれないから、嚔が昂じて來ない內、振出しでも吞みませう。

筑波　どうだ、仕上げが出來たかな。

上野　とんだいゝ繪になりました。

ト出す、筑波手に取り寫眞の蓋を明け、ぢつと見る事あつて、懐より以前の札を出し紙に包み、件の寫眞に添へ、

筑波　もしおぢいさん、今さる方から一ダース(一打)の謝儀に貰つたこの三圓、是に寫眞を添へて上げれば、活計の足しにして下さい。

ト出す故甚兵衛びつくりして、

甚兵　めつさうなことをおつしやりませ、斯うして立派な寫眞をばたゞ寫して下さるさへ、濟まぬことだと思ひまするに、左樣な多くのお金をば何で頂戴出來ませう。それはお返し申しまする。

筑波　はて、わづかなる此の金を、こなたに惠むも人命が、どうぞ救つてやりたい故。

甚兵　えゝ、何とおつしやります。

筑波　もしおぢいさん、隱さつしやるな。

ト合方きつぱりとなり、

奉行の大岡越前殿は、人相を見て善惡を悟つて裁きをしたといふが、今は開化の世の中に易者や相見は當にならぬと、けなす仲間のわたしゆゑ死相を悟る術はないが、斯うして毎日諸人の面を寫すが職の寫眞師に、自然と人の喜怒哀樂一目見れば大抵知れる、それとも目が違ふか知らぬが今寫したる此の寫眞、愁ひを含む面體、是を形見に殘し置き、とざあ、不料簡でも出す時は可愛さうなは此孫だ、附ては又牢内で是迄つらい辛苦をして居る其息子さんの悲しみはどの樣だと思はつしやる。高のしれたる燧石やたはし位を商つては、其日の煙も立てにくからうが、牢内に居る息子さんも御處置が付けば末は懲役、長い事もあるまいから目出度く滿期で出て來るを辛抱をして待つ樣にと、その取續ぎに纔だが此三圓を進ぜるから、是を元手に何なりと其身に慣れた稼業をして、此世に長く居さつしやれ、はて死ぬのは何時でも死なれまするぞ。

かつ　初めておいでのお方故、先生の氣質をば御存じないから、其樣に御遠慮なさるでござりませうが、一旦上げるといつたからは、どうでも上げねば氣の濟まぬ性分でござんす故、辭退をせずと其のお金、そちらへ納めて置かしやんせ。

甚兵　そりや左樣でもござりませうが、是が一分か二分なれば御貰ひ申す事もあれど、三圓といふ此のお金を故なく御貰ひ申しましては、どうも心が濟みませぬ。

上野　おい／＼おぢいさん、どうしたものだ、それは無益の辭退といふもの、此方の師匠は其の金を溜めて仕舞つて置く様な、けちな料簡は少しもない、三圓あらうが五圓あらうが、直に其晩遣つて仕舞ひ、二日と家にはない金だ、お前が米でも買ふ時は二タ月位はあらうから、長く遣へばこつちの家も、おかみさんが氣を揉まず、こりや兩得めといふものだ。

筑波　えゝ、餘計なことは言はぬものだ。

　ト上野を叱る、甚兵衞思入あつて、

甚兵　いやもう、よそながらの御異見は實に的當致しましたが、何をお隱し申しませう。

　と言ひかける。

筑波　いや、それは言はずと此の寫眞の面で僕も推察しました、此の子や息子の歎きを思ひ、どうぞ心を取直し、惡い料簡は止めて下さい。

甚兵　まことにあなたの御教訓にて、危い命を助かりました、左樣なれば此の金子を、拜借致すでござりまする。

筑波　やつた金故返さうなぞと、心配せずに遣はつしやい。

甚兵　いやも有難いことでござりまする。

　ト寫眞と金を押頂き懷へ入れる。

かつ　おゝ氣が付かなんだが、卯之さんとやら隣の眼鏡をお見でないか、わたしが案内せうわいなあ。

卯之　いえお父さんが牢へはひつて、難儀をしてをりますから、眼鏡を見ては濟みませぬ。

かつ　ほんに年端も行かないで、そこへ心の付くといふは、新聞に出た筈でござんす。

　ト此時四時の鐘鳴る故、

甚兵　おゝ、ありや何時でござりますな。

上野　辨天山の四時の鐘さ。

甚兵　左樣なればわたくしは、もうお暇を致しまする。

筑波　日が長いとはいひながら、遠道抱へし子供と老人、

かつ　少しも早く鐵道で、濱へ歸るがようござんす。

甚兵　左樣致すでござりまする。

筑波　又東京へ出て來たら、

かつ　必ず寄つて行きなさんせ。

甚兵　何れ滿期になりますと、是非又お禮に上りまする。

上野　そんなら早く歸んなさい。

甚兵　是にてお暇致しまする。

ト辭儀をなし、卯之助を連れて門口を出て、花道の方へ行く此時卯之助ツカ〳〵と枝折門の所へ來り

卯之　祖父さんをお助け下され、有難うござりまする。

ト兩手を突いて辭儀をする。

かつ　それほどまでに。

ト側へ寄らうとするを、

筑波　あこれ。

ト留めて、

急いで行きな。

卯之　はい。

ト花道へ行く、甚兵衞待つて居て、

甚兵　何ぞ忘れたか。

卯之　いえ、お禮を言ひに。

甚兵　おゝよく氣が付いた。さあ行かう。

ト流行唄、見世物の鳴物にて、甚兵衞卯之助を連れて花道へはひる。

筑波　年は行かぬがあの小僧、樣子で悟つて立戻り、祖父の命が助かりしと禮を言ひしは利口なもの、

かつ　ほんに大人も及ばぬ程、賢い子ではござんせぬか。

上野　又嚔でもせねばならぬか。

筑波　マア何にしろ、一ダースの謝儀に貰つた三圓で。

ト包紙を取上げる。

かつ　死ぬる命を止めしは、

上野　無駄にお金は遣へませんね。

筑波　はて、よい功德を、

ト包紙を下へ置くを木の頭。

してやつたなあ。

ト双盤のせめ、早き合方にて、宜しく、　ひやうし幕

ト道具廻しにて、止の木にて鳴物替り、直引返す。

（朝日山宅の場）――本舞臺三間の間常足の二重、上手一間の障子屋體、二重の正面暖簾口、此上一間の神棚、上の方一間間平戸のはまり中仕切のある戸棚、下手腰張の茶壁、いつもの所門口、其外正面「朝」といふ字の腰障子をはめし一間の勝手口、此の下手黒塀、總て横濱朝日山宅の體。二重の上手におくら着流し母親の打扮にて、行燈の側に眼鏡を掛け、縫物をして居る。丸藏取てきの打扮にて踏臺をして、正面の神棚へ燈明を上げて居る、此の見得角力甚九

の唄にて幕明く、

くら　年寄つてはいかぬもので、少し裁縫をつめてしたら大そうに肩が張つた。これ團子山お燈明を上げてしまうたら、波の市さんを呼んで來てくりや。

丸藏　あの波の市は日が暮れると、高島町へ出掛けますから、もう行つても内には居ませぬ。

くら　そんならふりの按摩でもよいから、聲がしたら呼んでくりや。

丸藏　そんなに肩が張りましたら、わしが揉んで上げませうか。

くら　ほんにこなたは稽古場で、いつでも揉まれて居る故に揉むのは上手であらうわいの。

丸藏　其の癖揉むのは下手だけれど、だいじなくば揉んで上げませう。

ト油さしなど片付け、おくらの後へ來り揉みにかゝる。

くら　あゝこれ、其の樣にきつくやらずと、和々と揉んでくりや。

丸藏　はい／＼、わしも此頃はえらく力が出て來ました。

くら　ほんに昨夜伜から話しに聞いたが、團子山も伊勢では出來がよかつたと、悦んで居ましたぞや。

丸藏　あい、六日目の顔觸に伊勢生れの二見岩といふどえらい大きな奴との立合ひ、わしはこないに小い形故土俵へ上ると見物手合が、是は所詮角力にならぬ、小い方がきつと負ける、やれ團子山引込めの早く土俵へ轉がれのと、囃されたのが癪に障り、ヤッと行司が團扇を引くのを合圖に、こつちが下手に組みみつを取らうとしたところが、腰をぶり／＼ひねりますぢや、え、前袋でやつてこませ。

トおくらの帶をとらへ引立てかゝる、おくらびつくりして、

くら　あゝこれ、何をする／＼。

丸藏　所で左をぐつと拔いて、右から仕掛けて手繰込み。

くら　あゝこれ、痛くつてたまらぬわいの。

ト振もぎらうとする、丸藏はよいしよ／＼とおくらの肩をもむ、此處へ暖簾口より二番目の浦右衛門煙草盆を提げ出て來る、おくら此の後ろへ隱れる故、丸藏夢中になり、浦右衛門に組付くを、

浦右　えゝ野郎、何をするのぢや。

ト丸藏を突く、丸藏二重より見事に轉がり、

丸藏　あいたゝゝゝ。こりやお袋さん、どえらい目に逢は

さつしやれたな。
くら　いや／＼わしではない、朝日山ぢや。
ト是にて丸藏浦右衛門を見てびつくりなし、
丸藏　や、お袋さんだと思つたら、親方さんでごんした
か。
浦右　よい年をしたお袋を捉へ、何を戲謔さらすのぢや。
丸藏　いえ／＼そないな譯ぢやございせぬ、肩が張ると言
はんす故揉んで上げる其内に、角力の話しが初まつて、
つい實が入つて張合ひになり、手荒いことをしましたが、
是も生業に凝つて居る故、どうぞ許して下さりませ。
ト手を突き詫びる。
くら　弟子の中では弱いといふが、何というても角力故、
なか／＼力が強いかして、脊骨が痛んでなりませぬ。
浦右　後先の考へない、こいつにお揉ませなされますな、
どんなことをするか知れませぬ。
くら　いやもう、一度でこり／＼しました。
ト是より謎への唄になり、花道より前藏の半七、思案
をしながら出來り、花道にて、
半七　よく淨瑠璃の文句にも、人の心と飛鳥川替る慣ひと
いひながら、延藏ばかりはあの樣な不實の奴とはしらな
んだが、見下げ果てたる腐つた性根、あいつ故には半七
も明るい體が暗くなり、世間は勿論内々の奉公人へも面
目なく、山手の宅へ押籠められ居るのも心に恥る故、そ
つと拔出し深川へ尋ねて行けど巳之吉も、乳母のおしげ
も内に居ず、信心故に淺草の觀音樣へ參詣なし、計らず
廻つた花屋敷で茶見世の女が持つて居た寫眞は尋ねるお
梅故、無心を言うて貰ひ受け、藝者姿で東京へ歸つて居
るに違ひないと、柳橋から新橋の藝者仲間を尋ねたれど、
何れに居るか在所が知れず、實の母故横濱の家に隱れて
居ようも知れず、是から兄の所へ行き、かまをかけて尋
ねて見よう。
ト右の唄にて舞臺へ來り、門口より内を窺ひ居る、浦
右衛門門口を見て、
浦右　表へ誰か來た樣ぢやが。
くら　おゝさうか。
トこちらへ來り、
どなたぢや、こつちへはひらつしやい。
半七　はい、私でござる。
ト門口を明ける、おくら半七を見て、
くら　や、若旦那樣でございますか。

浦右　なに、若旦那樣がござつたとか。
　ト大きく言ふ故、
半七　あゝこれ、靜にして下さい。
　ト四邊へ思入あつて内へはひり、門口をしめる。
くら　ようまあ、おいで下さりました。
浦右　さゝ、先々こちらへおいで下さりませ。
　ト半七上手へ住ひ、
半七　先達は深川へよう尋ねて來て下された、其後ちよつと來たいにも、家出をなした擧句故、山手の寮へ入れられて片時外へ出られねば、それ故心に任せぬわいの。
浦右　いや私も又忠八殿から話しを聞いて居りますゆゑ、お尋ね申さにやなりませぬが、妹お梅が不始末から御贔屓受けしお店へも敷居が高く上りませねば、つい御無沙汰を致しましたが、ようまあお尋ね下さりました。
くら　いやもう何とお詫を申しませうやら、一方ならぬ若旦那のお世話になつてをりながら、それを見捨て男を拵へ逃げるなぞとは恩知らず、憎い奴めでござります。
　ト半七思入あつて、
半七　そりやもう私への義理立に、憎いと口では言はつしやれど、切つても切れぬ親子の中、隱さずに言うて下され。
くら　なに、隱さずに言へとおつしやりますは。
半七　さあ、わしも番頭忠八の厄介になり、神奈川の山手の寮に居ましたが、どうも心が濟まぬ故一昨日庭から拔出して、直に蒸汽で東京へ行き、知邊の方にて樣子を聞けば、あの延梅は東京で藝者をして居てさる旦那に今は圍はれ氣樂な身分、其の上濱のお袋も尋ねて來たりこちらからも泊り掛けにて行く樣子と、誰に知れて所々方々藝者仲間を尋ねても、言合せでもしてあるか、皆目居所がしれぬ故、晝は人目を憚る身に、日の暮れるのを待つて居て此方の内へ聞きに來ました、なにもあいつに逢つたとて、手荒い事は決してしませぬ、たゞ料簡を聞いた上わしも思案の仕方がある、大事な娘を手籠にされ、ひよつと疵でも付けられては後日の難儀と親の身で、庇ひだてをばさつしやらうが、逢はねばならぬ此の半七、瘦せても枯れても酒店の倅と呼ばれた私なれば、少しは身分のある者故必ず無法な事はせぬ、包み隱さず居所を、どうぞ敎へて貰ひたい。
　ト是にて浦右衞門おくらびつくりして、
浦右　あゝもし〳〵若旦那、そんなら何とおつしやります

る、あの妹めは東京に藝者をして居りますとか。

半七　おゝ藝者をして居る其の證據には、信心故に一昨日も御籤を取り、淺草の觀音樣へ參詣なし、歸りに廻りし花屋敷で茶見世の娘が愛想に見せた寫眞は尋ねるお梅、無心を言うてそれを貰ひ、證據にこれへ持つて來た。

ト懷より寫眞を出し、

藝者姿で此樣に、客と二人椅子にかゝり、寫眞を取りしお梅より證據、何と藝者をして居ようがな。

ト寫眞を出す、浦右衛門見て、

浦右　なるほど是は妹が寫眞、おつしやる通り裝かたちは藝者の樣に見えまするが、並んで居るは何者だか、つひに是迄見掛けぬ顏、いづくの誰でござりますか。

くら　何にもせよ憎いやつぢや、實の親や兄弟故お疑ひは無理ならねど、あなたへ對してわたしどもが何隱し立を致しませうぞ。

浦右　さういふことなら朝日山か、直と明日東京へ行き、藝者仲間を詮議して引捕へるでござりまするか、

くら　さうしてあなたへお教へ申した、知邊の人と申しまするは、何れの誰でござりまする。

半七　えゝ、あのそれは、おゝさうぢや、仙臺堀の巳之吉でござる。

浦右　巳之吉なれば猶のこと、詮議をするによき手寄り。

くら　そなたは無口な生れ故、母も一緒に行くわいの。

ト是にて半七思入あつて、

半七　そんならやつぱりこなた衆も、實の事は知らつしやらぬか。

浦右　いやも、知つて居れば何で又其のまゝ捨て置きませう、御恩になつたあなたをば、袖にした妹故兄が手づから繩をかけ、召連れ訴へ致しまして、お上の御處置を受けまする。

半七　實の所は此の寫眞が、圖らず我手に入つた故、柳橋から新橋かけ東京中の藝者仲間をあちらこちらと搜したけれど、何れに居るか知れぬお梅、姿は藝者に見ゆれども慾に迷つて此の客に圍はれてでも居ることか、斯ういふ心と知らざれば一方ならぬ大恩ある、殊に不孝も厭はず家をば捨てし不料簡、忽ち此身に罰が當り、蓮葉したる女に捨てられ友達中へ出されぬ顏、

ト寫眞を見て、

何の恨みで此の樣に此の半七に恥をかゝせ、是見よがしに二人並んで椅子に掛けた此の顏付、えゝ欺されたのが

口惜しい。

ト寫眞を見て腹の立つ思入、

浦右　あもし、寫眞でござります。

半七　おゝ、寫眞は已も知つて居るが、あまりといへばそでない奴、東京中を捜しても在所の知れぬ上からは、人に面が合されぬ、もう此の土地にはをられぬわえ。

浦右　それは明日わたくしが、巳之吉方へ參りまして、それからそれと聞糺し。

くら　捜したならば直知れる、名を賣る稼業の藝者故。

半七　いや、其の藝者で居ることか、圍ひ者にて居ることか。

浦右　そんならそれも巳之吉が、

くら　はつきりとは申しませぬか。

半七　實は嘘故。

兩人　えゝ。

半七　いや、嘘だと思ひこなた衆を、疑うたのが面目ない。

浦右　はて、それも御無理と思ひませねば、

くら　決して恨みは致しませぬ。

半七　どれ／＼、わしは歸りませう。

浦右　いや折角のおいで故むさくるしくとも今晩は、どうぞお泊り下さりませ。

くら　さうして明日東京の、否やをお聞きなされませ。

半七　あゝ、思へば兄もお袋も、是ほど實意のあるものを。

浦右　なんで一人の妹めは、そんな不實になりをつたか。

くら　それも三筋の世渡りに、浮いた稼業をさせた罰。

半七　氣違ひ水は身に當る、

浦右　裸家業はして居れど、

くら　兄は正直、妹は、

半七　顔に似合はぬ不實もの、

浦右　あすは必ず深川で、

くら　聞糺すのが身の潔白。

半七　どうも爰には。

ト行くを留めて、

くら　はてまあ、二階へおいでなされませ。

ト唄になり、おくら半七を無理に連れて暖簾口へはひる、浦右衛門思入あつて合方になり、

浦右　身に覺えなき疑ひを、受けるといふも妹故、明日は何でも深川へ出掛けて居所を聞糺し、手荒い事もせねばならぬが、それが世間へぱつとして表向にもなる時は、直と表を新聞に讀み歩かれねばならぬ仕儀、それもこつ

ちは不實ものゝ縁につながる親兄弟、恥を晒すも是非もないが、御恩になりし旦那樣の名前を出しては濟まぬ譯、どうか双方浪風なく納まる工夫がありさうなものだ。

トちつと思入、時の鐘ばた／＼になり、花道より前幕の藝者梅吉のお梅(延梅)手拭を吹流しに冠り、跣足にて走り出來り、花道にて跡を見返り思入あつて舞臺へ來り、門口の格子をたゝきながら、

梅吉　もし／＼、どうぞ助けて下さりませ。

ト跡を氣遣ひゐる、浦右衛門是を聞き、

浦右　慥にあれは女の聲だが、惡者にでも出逢つたのか。

トこちらへ來り門口を明け、

これ女中どうしたのだ／＼。

ト梅吉手拭を取り、

梅吉　兄さん、わたしでござんす。

浦右　や、わりやあ妹。

トびつくりして門口をしめる。

梅吉　もし兄さん、どうぞ爰明けて下さんせ。

浦右　やあ見下げ果てた不孝ものめ、兄と言はれる覺えはねえぞ。

梅吉　えゝ、そりや何故でござりまする。

浦右　えゝ何故とは不實者めが。

ト是より訛へ合方になり、

御恩になつたお人を捨て、うぬが勝手に男を拵へ田舍へ逃げて行くなぞとは、義理知らずの畜生めが、おのれゆゑにはお袋も此の浦右衛門も青木町のお店へ對して面目なく、出入りさへもならぬ上、身に覺えなき疑ひ受け、今も今とて姿を見たら此身のめんぱれ引くゝり、突出さうとは思つたが、助けてくれと言はれて見れば、其處が親身の同胞故、内へ入れぬも兄の慈悲、目にかゝらねえ積りにするから、何處へなりとも行つてしまへ。

梅吉　そりやあどういふ譯あつてお腹立かはしらねども、半七さんに別れたも餘儀ない譯があつてのこと、それもとつくと母さんやお前に話して聞かせたい、お腹も立たうがもし兄さん、まあ内へ入れて下さんせ。

浦右　いや／＼内へは入れられねえ、爰を明ければ其の儘におのれを生けちやあ置かれぬ故、酷いことをばするのが厭さ、情を以て入れぬのだ、奥には憚るお人もござれば聲の洩れねえ其の内に早く何處ぞへ行つてくれ。えゝきり／＼何處へか行きやあがれ。

梅吉　えゝ情ない其の詞、半七さんの其の爲に遠い所へ行

つたのを、あの虎藏がどの樣な巧みを後でしたことやら、わたしや口惜しい〳〵わいなあ。

ト愁ひのこなし、此時暖簾口より以前のおくら出來り、

くら　これ〳〵忰、何をして居る、表へ誰ぞ來ましたのか。

ト是にて浦右衞門思入あつて氣を替へ、

浦右　いえ〳〵、誰も參りませぬ。

くら　誰にか口をきいたぢやないか。

浦右　えゝ、

トぎつくりして氣を替へ、

いえなに、口を利きましたは犬が表へ參りましたから、早く何處ぞへ行つてしまへと、追散したのでござりまする。

くら　はゝあ、そんなら表へ犬が來たのか。

浦右　はい、犬も犬、恩しらずの雌犬でござります。

ト是を聞き、梅吉ハアと門口にて泣伏す故、おくら此聲を聞き、

くら　今泣いたのは、どうやら娘の。

ト寄らうとするを、

浦右　はてまあ、お構ひなさいますな、ありや病犬でござりまする。

トぢつと思入、是にておくら扨はといふ思入、門口の梅吉顏を上げ、

梅吉　どういふ譯でわたしをば其の樣に言はしやんすか、日外わたしが深川から僅な內と虎藏の勸めに是非なく上州へ、醫者の勸めに行つたのは半七さんが二月越し、煩ひ中の藥の代や何やかやの入用に、辛い稼もする心、それも十日か二十日の內に迎ひに來るといふ故に、覺えた業を賴みにして、二十圓のお金の替りに向うへ行けば大きな間違ひ、百五十圓といふ證書を張り、三年の年と聞いてびつくり、あの虎藏の惡巧みと知れてはあれど是ぞといふ便りなければ是非もなく、座敷の出先で手紙を書き、郵便でなりと出さうとすれど、張番あつて親許へ文さへ書いて送らせず、どうしたものと思ふ內桑原といふお客に出逢ひ、譯を話してやう〳〵と二百圓といふお金を借り、向うは濟ませて貰へども濟まぬは借の濟し方に、その桑原が妾にして東京へ圍つて置くと、濱町河岸の別宅へ連れて來られし身の當惑、三年たゝぬ其內は男に肌はふれまいと願掛せしと言脫れ、手代替りに家に居る箱屋を賴んで深川へも、此の橫濱へも幾度か手紙を出せど

一度でも、届かぬかして返事も來ず、辛い思ひをした事をお目にかゝつて話さうと思ふ女の一心で、今日暮方に其處を駈出し、車で急がせ鐵道へ乘つてやう／＼ステンショへ上ると後で虎藏が、思ひ掛なく聲を掛け、付けて來た故振切つて危く逃げて來たものを、犬畜生とは情ない、わたしや悲しうござんすわいなあ。

ト泣伏す、浦右衞門門口にて是を聞いて居て、

浦右 そんなら池田の若旦那を、見捨て外に男をこしらへ、旅へ逃げたと聞いたのは、

梅吉 皆虎藏が惡巧み、わたしや口惜しうござんすわいなあ。

トおくらも始終を聞いて居て、

くら おゝ、こりやさうなうてはならぬ筈、よう駈出して來やつたなう。

浦右 いよ／＼それに違ひなくば、まあ／＼内へはひるがいゝ。

ト門口を明ける。

梅吉 何で嘘をばつきませう。

ト内へはひり、手拭にて足を拭きゐる。

くら 幸ひ奥に若旦那が、來てござる故其譯を。

梅吉 えゝ、そんならこつちに半七さんが、

浦右 おゝ、今連れて行つて逢はせてやる。

梅吉 こりやまあ、夢でござんせぬか。

ト嬉しきこなし、爰へ暖簾口より以前の丸藏手紙を持ち出來り、

丸藏 もし親方さん、若旦那が手紙を殘して、裏から何處へか行きました。

浦右 なに、手紙を殘して行つたとな。

くら どれ／＼わしに見せたがよい。

ト件の手紙を取つて開き、口の内にて讀みびつくりなし。

やゝ、こりやお梅に見捨てられこつちの家へも無理を言掛け、面目ないゆゑ大阪へ一先づ行つて來るとの書置。

梅吉 えゝゝ。

ト本意なきこなし、浦右衞門思入あつて、

浦右 遠くは行くまい後追つかけ、連れて戻つておゝさうだ。

ト門口を明け、外へ出ようとする。此の以前下手より虎藏好みの打扮にて出て、門口に窺ひ居て、此の時内へはひり、

虎藏　うぬお梅め、爰に居たか、己と一緒にうしやあがれ。

ト梅吉を引立てに掛るを、浦右衛門留めて、

浦右　誰かと思へばわれは虎藏、妹を捉へて何とするのだ。

虎藏　何ともしねえ、己が女房連れて行つて稼がせるのだ。

浦右　えゝ人もあらうに現在の、兄の所へうせをつて、連れて行くとはづぶとい奴。

虎藏　何で己が太えものか、持物だから連れて行くのだ。

浦右　えゝ、いけふざけた野郎めが。

ト虎藏を捉へぐつと引付け、

こりや虎藏、よくもうぬは己の妹を百五十圓にはめをつて、まだ飽足らず女房だなぞと、此のうちへ來て言ひ掛り、ごたくをついたらゆるさねえぞ。

ト是にて虎藏浦右衛門の手をやつと拂ひ退け、胡坐をかいて下に居て、

虎藏　何で言掛をするものかえ。深川に居た其の時に煩つて居る半七に愛想を盡かし己に乘替へ、夫婦約束した上で、半七野郎をはく爲めに相談づくで高崎へ藝者稼ぎに行つた延梅、根が淸元の師匠だけ、どんな調子で引掛けたか、いつも吾妻へつくばねと寶舟漕ぐ客を連れ、歸つて來たは働きだが、然し亭主も同然な、己に一言斷なく二百圓といふ立金をして旦那の世話になると聞いちやあ、こつちもたゞは通されねえ。手切替りに旅へやり、もう一稼ぎかせがせるから己と一緒に行きやあがれ。

梅吉　えゝもう此身に覺えもない、色だの戀だの女房のと、呆れて物が言はれぬわいなあ。

虎藏　こう〳〵お梅、今となつて喰隱しをしても無駄なことだ、色でなけりやあ何で又、己の判で高崎へ藝者稼ぎに行きやがつた。

梅吉　はて知れたこと、旅へ行つたは半七さんの藥の代や。

トいふを冠せて、

虎藏　これ〳〵お梅、馬鹿を言ふな、今時そんな時代なことをするやつがあるものか。

ト此內浦右衛門心のせく思入にて、虎藏を引付け、

浦右　こりや野郎め、半七樣のお身の上も心にかゝる其處を藪から棒に出やあがつて、世間に人もない樣に大聲上げての言ひがゝり、うぬ、どうするか見やあがれ。

ト虎藏引付けられてゐながら、

虎藏　やい朝日山、己を手籠にしてどうするのだ。

浦右　おゝ、どうするとは知れたこと、召連れ訴へしてやるのだ。

虎藏　おゝ、面白い、さあ突出せ、どうで始終は懲役と覺悟をして居る北向虎藏、己を縛つて突出しやあ、うぬもお褒も抱込んで、連れて行くからさう思へ。

浦右　えゝ言はしておけばよいかと思ひ、あのこゝなごくつぶしめが。

ト虎藏を下手へ投げる虎藏起上り、

虎藏　うぬ、己を投げやがつたな。

浦右　おゝ投げたがどうした、何とした。

虎藏　どうで惡事で遲かれ早かれ喰え込むのは覺悟の前、生甲斐のねえ體だから、殺さば殺せ誰一人泣く者のねえならず者だ、とても死ぬなら行掛けの駄賃にうぬから殺してやるのだ。

ト尻をからげて立掛る、

浦右　うぬ、さうぬかしやあ。

ト立掛る故、梅吉おくら留めて、

梅吉　もし兄さん、腹も立たうが相手が惡い。

くら　まあ〱下に居やいなう。

浦右　お案じなさるな摘み出すのだ。

ト尻を端折り肌脱になる、虎藏浦右衛門の透を窺ひ組付く、

えゝ何をしやがる。

ト突飛す、是にて虎藏たち〱と門口の方へ行き踏止つて双方きつと見得、是より櫓太鼓の入りし誂の合方になり、虎藏浦右衛門へ組付いては脆く投げられ、又組付く面白き立廻り、此の内丸藏團扇を持つて出て浦右衛門を後からあふぐ、トゞ虎藏勞れたる思入にて浦右衛門へ組付くを、浦右衛門襟上を取つて、門口の所へ引立て來て、

えゝ小うるせえ野郎だ。

ト門口から外へ投出し、

をとゝひうせろ。

ト門口をしめる、虎藏體の痛む思入にて起上り、

虎藏　もう此上は。

ト門口の方へ立掛る、此時下手より番太○、△等四人、序幕の兇人源六に繩を掛け引立來り虎藏を見て、

○　虎藏御用だ。

ト十手にて打つてかゝる、虎藏びつくりし、
虎藏　南無三しまつた。
ト突倒して花道の方へ逃げようとするを、折重つて捉へ、
三人　えゝ、神妙にしろ。
ト繩を掛ける、虎藏起上り、
虎藏　えゝいま〱しい喰ひ込んだか。
源六　兄イ、諦めねえ。
ト虎藏源六を見て、
虎藏　や、源六、手めえも御用辨か。
源六　惡事の報いだ、仕方がねえ。
ト此内浦右衛門梅吉おくら門口の方へ聞耳を立て居て此の時門口を明け、
浦右　是で少しはこつちの胸も、
梅吉　晴れて嬉しいあの繩目。
虎藏　どいつもこいつも。
ト後へ歸らうとするを、
香四　えゝ、立たぬかえ。
ト繩を引くゆゑ、虎藏こちらへ來り、
虎藏　覺えて居ろ。
梅吉　とはいへ氣になる。
くら　若旦那の。
浦右　にて、逢はれる時節を。
ト門口をしめるを、木の頭、
待つがいゝわえ。
ト皆々引張り、宜しく合方時の太鼓にて
ひやうし　幕

四幕目　横濱海岸道普請の場

〔役名　―　請作善吉、北向の虎藏、野毛の重右衛門、虎藏弟巳之吉、雲念、竹齋、升七、銀太、源六、卯之助、巳之吉女房おむら、其他。〕

（横濱海岸の場）―本舞臺一面の平舞臺、上の方石造の異人館、硝子窓、此の前鐵の駒寄、下の方樹木の植込み、後ろ海岸異國舟を見たる海の遠見、總て交易場海岸の體、爰に舟人の源六、ごろつき熊藏柿の着附同じく股引、草鞋尻端折、腰から腰へ鎖を附け懲役人の打扮にて鍬を持ち、醫者竹齋坊主雲念

同じ装、鶴嘴を持ち、油賣り升七、百姓五右衛門同じ装、畚をさし荷ひに擔ぎ、七度の銀太、生がれ鐵藏同じ装鶴嘴を持ち立掛りゐる、波の音唐樂めいた唄にて幕明く、

源六　こう今打つたのは野毛の十時だ、みんな一息つかうぢやあねえか。

熊藏　おゝ、つかうとも／＼、十時を打つのを待つて居たのだ。

竹齋　然し一息ついた所が、好な酒は言ふに及ばず、煙草を一服吞むことがならねえ。

雲念　所詮茶などゝ言つた所が、誰も吳れる人はなし、せめて水でも吞みたいものだ。

升七　おつと皆迄言ふべからず、爰に知つてる家があるから、今一手桶貰つて置いた。

ト下手より手桶の上へ盆を蓋になし、是へ茶碗を載せてあるを持つて來る、

五右　やあ是は何より有難い、茶碗も付いて居るからは、ぐる／＼廻しに初めよう。

銀太　これがどうか間違つて、酒であつたらよからうな。

鐵藏　そんな贅澤なことを言ふな、水でもめつたに吞めやしねえ。

ト皆々捨ぜりふにて水を吞み、

竹齋　あゝ甘露々々、醉醒で是を吞んだら、もう一倍旨からう。

源六　愚癡を言つても仕方がねえ、吞みてえものゝ吞めねえのが、其處が懲らしめの懲役だ。

熊藏　なんぼ喉が乾くといつて、いゝ加減に吞まねえか、あんまり吞むと腹が下るぜ。

雲念　それゆゑ愚僧は我慢をして、一杯きりでしまつた。

升七　汚ない話しをする樣だが、昨日此のとつさんが、腹ツくだりで、幾度となく手水場へ供をしたので、懲り懲りした。

銀太　腰に鎖が付いて居るので、手前も一緒に行つたのか。

鐵藏　なるほど、こいつア弱つたらう。

五右　どれ、もう一杯水を吞まうか。

升七　これさとつさん、昨日に懲りたから止してくんねえ、

ト此内皆々下に居て、

源六　ときに隨德寺の和尚さん、お前は見るから勿體らしく、惡い事はしさうもねえが、何で懲役になつたのだ。

雲念　いや問はれて語るも面目ないが、門番の女房にお布施の錢を勸めにやり、大黒替りにしたところ、いつの間にか大黒が布袋の樣な腹になり、亭主に願ひ付けられて、とう〳〵終ひが姦通に落ちて徵役一ヶ年の御處分にあづかつたのだ。

源六　敎導職の身をもつて、さういふことをしなすつちやあ、徵役になつても仕方がねえ。

熊藏　くわゐ天窓のお醫者さんは、色事師とも見えないが、お前は毒でも盛つたのかえ。

竹齋　愚老が徵役になつたのは、此の和尚から起つたことだ。

熊藏　なに、和尚なら起つたことゝは。

竹齋　其の門番の女房の腹のふくれた一件が、檀家へ知れては大變故、おろし藥を呉れと言ふから、禮がよければ盛つて遣らうと、三圓取つて墮胎藥を、やつたばかりに此の徵役。

源六　人を助ける醫者の身で、おろし藥を盛つたとあれば、此艱難をしにやあならねえ。

ト熊藏升七に向ひ、

熊藏　こう、お前は堅氣な人の樣だが、何を惡いことをしたのだ。

升七　わたしは表を擔いで歩く油賣でござりますが、入底をした升を遣ひ、お負をたつぷりした所から大層油が賣れましたが、終には惡事を見出されて、升の底から身上の底をふるつてしまひました。

源六　おい、そつちのをぢさん、お前は何だ。

五右　おらあ百姓だ。

源六　百姓は言はねえでも一目見て知れて居るが、何をおめえは惡事をした。

五右　おらあ、泥坊だ。

銀太　こう、此をぢさんが泥坊だとは、人は見掛けに寄らねえものだ。

鐵藏　どうで田舍の畑荒し、瓜や茄子を盜む玉だ。

五右　そんなに馬鹿にさつしやるな、是でもおらあ大泥坊だ。

源六　いや大泥坊とは大そうだが、

熊藏　何といふ泥坊だ。

五右　名を聞いたらびつくりしべい、おらあ石川五右衞門といふ。

銀太　これさとつさん、常談を言つちやあいけねえ。

鐵藏　石川五右衛門といふがあるものか。
五右　あつてもなくつても、先祖から苗字が石川、名が五右衛門。
雲念　成程世界は濱の眞砂、同氏同名もありませう。
竹齋　世に盗人も盡きないが、さうして何を盗んだのだ。
五右　凡そ價千金にもならうといふ、金の釜を盗んだ。
銀太　大そうな物を盗み込んだが。
鐵藏　何處でそりやあ取つたのだ。
五右　取つたは芝の増上寺の、山門の下の甘酒屋で。
熊藏　人を馬鹿にしたとつさんだ。
升七　それでお前は懲役か。
五右　おゝ、しかも臺の百日だ。
源六　えゝ、惡く洒落るぜ。
皆々　はゝゝゝゝ。
ト波の音になり、花道より巳之吉紺の脚絆尻端折り、草履半合羽を肩に掛け、おむらやつし裝、草履、蝙蝠傘を持ち出來り、花道にて、
巳之　これおむら、向うに大勢柿の着物で道普請をして居るのが、あれが戸部の懲役人だ。
むら　それぢやあ大方あの中に、お前の兄さん虎藏さんが、居なさんすでござんせう。
巳之　あの中に居てくれゝばいゝが、道普請ばかりでなく何手傳にも雇はれて出るといふことだから、あすこへ行つて聞いたらば、何處に居るか知れるだらう。
むら　どうぞ向うに居て下さんすりやよいが。
巳之　何にしろ行つて聞いて見よう。
ト舞臺へ來り、
もし、お前さん方に少し物が承りたうござりまする。
熊藏　あい、聞きたいとは何だね。
巳之　神奈川の者でござりますが、北向の虎藏といふ舟乘りを、御存じではござりませぬか。
熊藏　おゝ虎藏は知つて居るが、お前方は身寄の衆か。
巳之　はい、身寄の者でござりますが、何處に虎藏が居りますか、御存じでござりますなら、ちよつと敎へて下さりませ。
源六　虎藏はわつちらと一緒に地形に出て居るが、お前は慥兄弟だね。
巳之　おつしやる通り虎藏がわたしや弟でござりますが、さうおつしやるお前さんは、何處でかわたしやあ見た樣だ。

むら　おゝ、日外見世へござんした。

源六　萬年橋の茶見世で逢つた、源六といふ判人だ。

むら　思ひ掛けないお前さんも、懲役におなりなさんしたかいな。

源六　いつか虎藏と言合せ、池田の息子が連れて逃げた、お福を騙して高崎へ藝妓に賣つた其の時に、娘の籍でごまかしたが二十圓の證文を百五十圓に書直して、いはゞ衒も同樣な手酷い法を書いたので、忽ち顯れ御用となり、兄貴と一緒に懲役だ。

熊藏　おいらは土地のごろつきだが、其の生馬の目を拔かうと、お前の兄貴や此の男の金を目當に爰に居る、隨徳寺の堂を借り、片側勝負の丁半にとう〳〵三日で耗らしたが、根が惡錢で身に付かず酒と女にみんな入れあげ。

銀太　虻も取らず蜂も取らず、やつぱり元の下馬一枚、所でこんど源六が金の行場のお調べから、

鐵藏　隱した博奕が現れて、先づ胴取の熊藏から又彌次馬のおら達迄、八十日のお相伴だ。

熊藏　愚癡なことをいふやうだが、是といふのもお前の兄貴が、女を騙して賣つたからだ。

巳之　まことに惡い兄貴故、お前さん方へ對しましても、お氣の毒でござりまする。

雲念　お氣の毒とはいひながら、誰しも其身に過失があるから、元懲役はお上にて惡い心を改めさす、此上もないお慈悲の御處置。

竹蒲　以前ならば首のない科も當時は助かつて、假令終身爰に居るとも生きて居るのは有難いから、誰でも改心せねばならぬ。

巳之　家に居ります時分には、親にさへも打つてかゝる無法者で困りましたが、懲役になり目が覺めて少しは心が直りましたか。

源六　所が少しも直りやあしねえ、滿期で出れば又直に相手がいゝからお福の所へ、强請に行くと言つて居る。

巳之　それぢやあ懲役になりましても、やつぱり心は直りませぬか。

むら　困つたことでござんすなあ。

升七　斯う見た所が虎藏さんとは、氣までも違つて居る樣子。

五右　兄弟故に東京から、爰迄逢ひに來なすつたのか。

巳之　へい、差入物を致さうと、東京から參りましたが、道普請にでも出て居るなら、ちよつと逢つて參り度く今

朝から方々搜しましたが、いまだに心が直らぬと聞いて
は逢つても無駄なことだ。

から　そりやさうでもござんせうが、お母さんへの土產故、逢つて歸らにやならぬわいな。

源六　（花道の方を見て、）おゝ噂をすれば影とやら、今向うから虎藏が土を擔いで爰へ來る。

巳之　ほんに向うへ來るのは兄貴。

むら　丁度幸ひ待合せ。

巳之　こゝでちよつと逢つて行かう。

ト又波の音になり、花道より善吉柿の肩附、同じく股引草鞋虎藏同じ打扮、善吉先棒にて畚へ土を入れ、小丸太にてさし荷ひに擔ぎ出來り、花道にて、

虎藏　これ善吉、もつとさッさと步かぬえか。

善吉　お前と逢つて力がない故、棒が肩へめり込む樣で、さう急いでは步けませぬ。

虎藏　巾着切の子供でも、是ばかりな土は擔ぐに、意氣地のねえ野郎だなあ。

善吉　今度はどうぞ、もう少し輕くして下さりませ。

虎藏　どうして〳〵、此の次はもう一ぺい盛上げて手前に血へどを吐かしてやる。

善吉　それぢやアわたしが擔げませぬ。

虎藏　擔げねえのを無理に擔ぎ、難儀をするのが懲役だ。

善吉　そりやさうでもござりませうが。

虎藏　えゝぐづ〳〵せずと步かねえか。

ト擔いで居る棒でこづく故、善吉ひよろ〳〵としながら舞臺へ來る、虎藏強く突く故、善吉ばつたりと前へ轉ぶ、

えゝ意氣地のねえ、轉びやあがつたか。

ト善吉起きようとするを、虎藏鎖を引く故又倒れ、やう〳〵に起上り、

善吉　お前が後から突いた故、それでつい轉びました。

虎藏　何で己が突くものか、よくそんな嘘をつきやあがるな。

ト虎藏善吉を蹴倒す、是を源六留めて、

源六　これ〳〵兄貴、見るから意氣地のねえ野郎、もういい加減に堪忍してやんねえ。

虎藏　こいつが素直にして居りやあ默つて己が使つてやるが、體は弱いが口が達者で、よく口答へをしやあがるので、癪に障つてならねえから、つい己が蹴倒すのだ。

熊藏　これ善吉、何故手前口ごてえをするのだ、何でも兄

貰に隨つて、下から出にやあ手前の損だ。
善吉　いえもう弱い體でござりますから、中々口答へなどは致しませぬ、隨分隨つてをりますが、虎藏さんが氣の早いので。
虎藏　なに、虎藏さんが氣が早い。おゝ、氣が早いからなぐるのだ。
ト善吉の天窓を打つ。
源六　これさ兄貴、相手にするのは大人氣ねえ、明日は組も違ふから、今日一日だ料簡しねえ、これ善吉、手前も是から氣を付けて、逆らはねえ樣にするがいゝ。
雲念　何でも人は腹を立てず、堪忍するが第一だ。
竹齋　早くこなたも詫るがいゝ。
ト是にて善吉手をつき、
善吉　口答へをしましたはわたしが惡うございましたからどうぞ堪忍して下さりませ。
虎藏　惡いといふは己がことだらう、よく當つけをぬかしやあがるな。
ト虎藏立掛るを皆々留め、
升七　腹も立たうがあの通り、兩手を突いて詫るから。
銀太　もういゝ加減に虎藏さん。

鐵藏　堪忍してやつて、
皆々　くんなせえ。
虎藏　なぐりつけにやあ腹が癒ねえが、お前達が口を利くから、今日は免じて堪忍してやらう。
五右　そりやあ大きに、
皆々　有難うござります。
ト此内巳之吉おむらは下手跡へ下つて、困つたものだといふ思入あつて、此時前へ出、
巳之　兄さん、よく達者で居てくんなすつた。
虎藏　おゝ、誰かと思つたら巳之吉におむら、手前は何しに來たんだ。
巳之　お梅さんを貰つたことの御處置が付いて、懲役になつたといふ話しを聞き、見舞も入れたし二つには、道普請でもして居なされば、逢はれることがあらうと思つて、
むら　思ひ立つ日を吉日に、其の身其の儘支度もせず、今日鐵道で參りましたわいな。
虎藏　そりやあよく尋ねて來てくれた。
ト熊藏思入あつて、
熊藏　ときによつぽど休んだから、頭の見廻りに來ねえ中、

早く仕事にかゝらうぢやあねえか。
源六　おゝもう午時からたつたかな、仕事に掛らにやあならねえが、兄貴は家へ尋ねて來た、此の二人に話しがあらう。
升七　其の中此方で骨を折り、
銕太　今日受取つた所だけ、
鐵藏　仕事の穴を埋めておかう。
虎藏　穴を埋めさせちやあ氣の毒だが、ちつとの中助けてくれ。
善吉　皆さん方と御一緒に、わたしは仕事に參りたいが。
雲念　いや、其の心配には決して及ばぬ。
竹齋　善吉どのもゆつくりと。
五右　其處で息をつくがよい。
善吉　有難うござります。
源六　どれ、一仕事。
八人　やつて來ようか。
ト此の言にて、八人は道具を持ち上手へはひろ、跡地ならしの石へ虎藏腰を掛け、此の脇に善吉迷惑さうに下に居る、下手に巳之吉おむら下に居て、
虎藏　こう巳之吉、今日二人連で出て來たからは、おむらは家へ引取つたか。
巳之　此間友達が親父の方へ渡りを付け、表向で月始まりに、わつちが女房に貰ひました。
むら　お前さんも知つての通り、足らぬ生れの私故、どうぞ是から末長く、お目を掛けて下さんせいな。
虎藏　そりやあお前が言はねえでも、巳之が女房になるからは、繋がる縁の妹だから、目を掛けるのは當りめえ、其の替りにやあ兄だから滿期になつて出た時は、小遣くらゐはくれるだらうな。
むら　澤山の事は出來ませんが、わたし相應其の時は、お小遣を上げませうわいな。
虎藏　そいつあ何より有難い、巳之の野郎は血を分けた實の己の弟だが、十錢の働きも出來ねえ奴だ、野郎位世の中に仕様のねえものはねえ、そこへ來ると女のことだ、ちよつと近くて木更津か寒川あたりへお前をやりやあ、五十圓にやあ直になる、それを目當に尋ねて行くぜ。
ト巳之吉おむら顏見合せ思入。
これ、何をそんなをかしな顏をするのだ。
巳之　これ兄貴、まだお前は心が直らねえのか。
虎藏　持つて生れた己が根性、何のつけに直るものだ。

ト善吉呆れし思入にて、虎藏の顏を見る、

えゝ何を面を見やあがる。

ト善吉をくらはす、

善吉　いえなに、わたしやあ見やあしませぬ。

ト頭を押へて蹲る。巳之吉思入あつて、

巳之　尤らしく言はねえでも、お前も知つて居るだらうが、斯うしてお上で懲役になさるは人を懲す爲め、今爰に居る善吉さんを蹴たり踏んだりするのを見ては、なかなか心は直らねえ、惡い心のお前だが不具な子程可愛いと、明暮家でお袋が噂をしねえことはねえ、世間へぱつとは言はれねえが、先達もあの樣に現在親を足蹴にした此上もねえ不孝者、嘸憎からうと思ひの外、愚癡なことを言ふやうだが、毎日稼いで暮しを立てる己よりお前を案じ、もし煩つてゞも居はしねえか、續いて夢見が惡いから行つて樣子を見て來てくれと、實の所はお袋が賴みで今日は出て來たのだ。

むら　今巳之さんの言ふ通り、お母さんは寐ても覺めてもお前の事が忘られず、どうぞ總領のことだから、心が直つて御先祖から家に傳はるお位牌を、早くお前に讓りたいと、常々言うてゞござんすぞえ。

虎藏　面白くもねえ眞ッ黒けへな位牌が何になるものだ、そんなくだらねえことを言はねえで、いゝ加減にお袋も、早く死んでしまやあいゝ。

巳之　えゝ勿體ねえことを言ひなさんな、親父は疾に死んでしまひ、跡に殘つた一人のお袋、假令千圓金を積んでも、買ひてえといつても買へやしねえ。

虎藏　其の替りに又賣らうといつても、一朱にも買手はありやしねえ。

むら　親を賣るものがありますものか。

虎藏　それだから滿期になつたら手前を木更津へ賣つてやるから、己の出るのを待つて居ろ。

巳之　なんぼ知り合つた中だとて、見舞を兼ねて近附に今日連れて來た此のおむら、常談にもせよ賣るなどゝは、亭主の己が面目ねえ。

虎藏　誰も來てくれと言やあしねえ、色で持つた女房を自慢らしく連れて來やがつて、差入物でもすることか見舞を一つ入れやあがらねえで、のんこのしやあとは手前達のことだ、面目なけりやあ早く歸れ。

巳之　お前がさういふ心なら何しに長く居るものか、土地の勝手はしらねえが、産れ故鄕のことだから人を賴んで

懲役場へ、明日は見舞を入れようと金の用意もして來たが、おらあ目下のことだから何と言はれても仕方がねえが、女親でも親は親、機嫌がいゝかと只一言、尋ねもせずに惡く言ひ、こんな不孝なことはねえ、お前に罰が當らにやあ罰の當る人はねえ。

虎藏　何のべらぼうめ、親だつて三文の事をして貰やあせず、汝等が勝手で拵えやあがつて、ろくな育て樣もしやあがらず、まだすつぺがさねえ時分から、鯛を賣つて活計は己が半分付けて居たのだ、恩は此方で着せてあるから、打ちのめさうが踏倒さうが、己に罰が當るものか。

巳之　人を打つたり蹴たりする其の手足を伸さしたのは、誰がお蔭だと思ひなさる、みんな親のお蔭だぜ。

虎藏　十三四からお袋を己がすごして置いたから、差引勘定して見りやあ己の方が餘程上だ。

むら　お前そんなことを言ひなさんすが、おつかさんがどの位苦勞してだか知れやあしません。

虎藏　そりやあうぬが勝手でするのだ。

巳之　汝とは、そりやあ誰がことだ。

虎藏　くたばりそこねえの婆アのことだ。

巳之　えゝ、餘りと云へば。

ト胸倉を取るを振拂ひ、

虎藏　えゝ、何をしやあがる。

ト巳之吉を蹴倒す、善吉其内そでないことゝいふ思入あつて、怺へ兼れて虎藏を留め、

善吉　これはしたり虎藏さん、そりやお前の言ふのが惡い。

虎藏　なに、己が惡いとは。

善吉　假令何であらうとも、大恩のある親のことを、惡く云つては濟みませぬ。

虎藏　濟むも濟まねえもあるものか、親にやあ恩が着せてあるのだ。

ト善吉をなぐる。

巳之　えゝ又しても善吉さんを。

ト云ふを善吉留めて

善吉　これ／＼巳之吉さん、言へば言ふだけお前方が痛いめせねばならぬ故、もう／＼何にも言はつしやるな。

巳之　わたしも兄のことだから、言ひたいこともござりませぬが、餘りと云へば不孝故。

むら　つい、わたし迄共々に。

虎藏　まだぐづ／＼と言やあがるか。

ト立掛るを善吉留める、虎藏振拂つて突倒す。

善吉　これ〳〵早く逃げて下さい、わしが迷惑しますわいの。
虎藏　どれ、息の根を止めてやらうか。
　ト波の音巽國の鳴物になり、丸太を持つて立掛るを善吉留める。
巳之　さあ、打つならおれを打ちなせえ。
むら　巳之さん、默つて居なさんせいな。
　ト巳之吉打てといふを、おむら留める。
虎藏　うぬ打たねえでどうするものだ。
　ト右の鳴物にて打つてかゝる、善吉おむら支へる立廻り、此の内上手より重右衛門懲役人小頭の打扮にて出來り、虎藏を留め、
重右　これ虎藏、何をするのだ。
虎藏　や、親分か。
　トびつくりする。
重右　其の棒を持つて、誰を打つのだ。
虎藏　あいつァわつちの弟だが、兄に手向ひしやアがるから、それでなぐつてやらうと思つて。
重右　いゝ加減に嘘をつけ、さつきから一部始終は後に隱れて聞いて居た。

虎藏　それぢやあ聞いて居なすつたか。
　ト虎藏棒を捨て天窓を押へ下にゐる。
重右　聞いたといやあ此の儘に、手前を捨てちやア置かれねえ。亂暴すりやあ御規則通り、きつとそれだけの罪を增し、長く苦役をすることは、そりやあ手前も知つて居ような。
虎藏　二年のものは三年と、年を增すのを知りながら、つい弟にうつかりと飛んだことを仕出かしました。
　ト虎藏後悔せし思入。
善吉　わたくしなどが兎やかうと申すは出過ぎたことでござりますが、どうか頭のお目こぼしで、ゆるして上げて下さりませぬか。
巳之　年が增すと承はつては、打たれましたも其の儘に聞流しになりませぬは切つてもきれぬ兄弟仲。
むら　緣につながるわたくしども、共々お願ひ。
三人　申し上げます。
　ト誂の合方になり、重右衛門地ならしの石へ手拭を敷き腰を掛け、
重右　此間から出先にて、手前の所業の惡いことを聞いては居るが聞かねえ顏、斯ういふおれを初めとして、懲役

場に居るものにろくな者はありやあしねえ。何百人とある中で誠の人は善吉ばかり、先づ押込みに追落し、明巣を覗ふ小泥坊、又は間男かどはかし、極軽いのが博奕と喧嘩、其の悪行も二度と再びしねえやうにと有難い思召での懲役人、我身の恥を柿染に腰に鎖の猿繋ぎ、面も眞赤に人中へ出るのも初めは面目なく、懲りねばならぬ御仕置も、満期で出れば直に忘れ、二犯三犯度重なり終には終身懲役に再び娑婆へ出る事ならず、其時よせばよかつたと心が付いても後の祭り、鐵棒引のお喋べりが言ッ附口をするけれど、なるたけ聞いても聞かねえ顔、此後亂暴しねえなら今日は大目に見てやらう、年限増すか増さねえかは、虎藏手前の心次第だ、若い者でもねえからはよく考へて返事をしろ。

ト宜しく思入、虎藏ちつと思入あつて、

虎藏　まことに親分済みませぬ、悪黨だつてわつちらはほんの鼻先料簡故、お前の目から見なすつたら取るに足らねえ小野郎と思ひなさるであらうのに、心を長く此間から腹も立たうに小言も言はず、物和かに言はれるのは、大きな聲で叱られるよりよつぽど辛うござります。是から心を入替へますから、どうぞ親分今日の所は、是限りにしておくんなせえ。

重右　手前がさういふ心なら、済んだ事は言やあしねえ。何の役にも立たねえ己が、多くの中で小頭を言付つたは身の名聞、何十人と預る內懲役中に悪事をして、限りの年を増すものが出来るは頭の己が恥、どうぞ、是から心を入替へ、手荒い事をしてくれるな。

虎藏　親分、お前に對してもきつと心を入更へて、悪いことはもうしませぬ。

ト善吉嬉しき思入にて、

善吉　そんならお前は心を入替へ、手荒いことはしなさらぬか。

虎藏　決してこれからしねえから、さつきの事は善吉さん、手を合せるからゆるしてくんねえ。

ト手を合せる。

善吉　お前が心を入替へれば、誰よりわたしがどの位嬉しいことか知れませぬ。

重右　いや、其處に居る虎藏が弟御の巳之吉さんとやら、今お前も聞く通り是から心を入替へて悪い事はしねえといふから、お前方が歸つたら安心する様母さんに、よく言つてやんなせえ。

巳之　これといふのもお前さんの、全くお蔭でござります、まことに有難うござります。

むら　嘸お母さんに話しましたら、悦びますでござりませう。

重右　これから兄貴の虎藏も仕事をしにやあならねえから、お前方は東京へちつとも早く歸りなさい。

巳之　有難うござりますが、元神奈川に居りました故、知つた者がござりますれば、今夜は宿へ泊りまして。

むら　明日早く鐵道で、歸る積りでござりますわいな。

虎藏　それぢやあ明日歸つたら、達者で居るとお袋によく言傳をしてくれろ。

巳之　兄貴がかういふ心になつたも。

むら　まことにあなたのお蔭ゆゑ。

兩人　有難うござります。

重右　何の禮に及ぶものかな。

巳之　そんなら兄貴。

むら　御機嫌宜しう。

虎藏　其内逢ひに來てくれろよ。

ト右の鳴物になり、巳之吉おむら皆々へ辭儀をなし下手へはひる。

重右　もう日差ぢやあ十一時だ、休みの時間がおくれたから、早く仕事にかゝるがいゝ。

虎藏　思はぬ弟が逢ひに來て、大きに暇を費した。

善吉　これから一精出しませう。

重右　どれ、己も持場を廻つて來ようか。

ト重右衞門は上手へはひる、虎藏上手へ向ひ、

虎藏　親分、大きに有難うござります。

ト辭儀をする、時の鐘、床の淨瑠璃になる。

淨るり　〽跡見送りて虎藏は笑みを隱していう／＼と、傍の石に腰をかくれば、見る善吉は氣もせかれ、

ト虎藏後を見送り、騙してやつたといふ思入あつて、土ならしの石へ腰を掛ける、善吉氣のせく思入にて

善吉　さあ虎藏さん、お休みの時間がおくれたれば、ちつとも早く出掛けませう。

虎藏　なに親分が行つてしまやあ、そんなに急ぐにやあ及ばねえ。

善吉　さつきから外の衆は、仕事にかゝつて居なされば、遊んで居ては叱られます。

虎藏　手前なざあ慣れねえが、そんなにびく／＼するには及ばねえ、重右衞門が小言を言ふ時、お前の御無理は御

尤もと訖つてせえ居りやあいゝのだ。

善吉　それぢやあお前はたつた今、心を改めると言つたのは、あれは嘘でござりますか。

虎藏　嘘は初手から知れたこと、おらあ爰で一寢入りするから、重右衞門が來たら知らしてくれろ。

善吉　お前はそれでよからうが、わたしがそれでは濟みませぬ。

虎藏　濟むも濟まねえもあるものかえ。

善吉　それぢやといつて遊んで居ては。

ト善吉行きかけるを、

虎藏　何をまご／＼しやあがるのだ。

〽鎖をぐつと引すゑられ、尻邊にどうと善吉は今更是非も投首なし、溜息吐いて居る折柄、親を慕うて卯之助が懲役人の仕事場を、其處か爰かと見廻して。

ト善吉うろ／＼するを、虎藏鎖を手强く引く、善吉どうと尻邊に居て是非なき思入、波の音をあしらひ花道より卯之助、前幕の裝、小さな風呂敷包を持出來り、花道にて、

卯之　祖父さんが案じて故、お父さんに逢ひたいが何處へ行つても同じ着物で、どれがどれやら分らぬわいの。

〽目もうろ／＼と海岸を、尋ねさまよひ來りしが、それと見るより走り寄り、

ト卯之助四邊を見廻しながら舞臺へ來り、善吉を見て、

や其處においでのは、お父さんか。

トつか／＼側へ來る。

善吉　おゝ、そちは卯之助。

卯之　逢ひたうござりましたわいな。

善吉　おれも手前に逢ひたかつた。

〽縋る手を取り抱きしめれば、虎藏見るよりずつと立ち、

ト卯之助善吉に縋る、善吉抱きしめる、虎藏はずつと立つて。

虎藏　どれ仕事にかゝらうか。

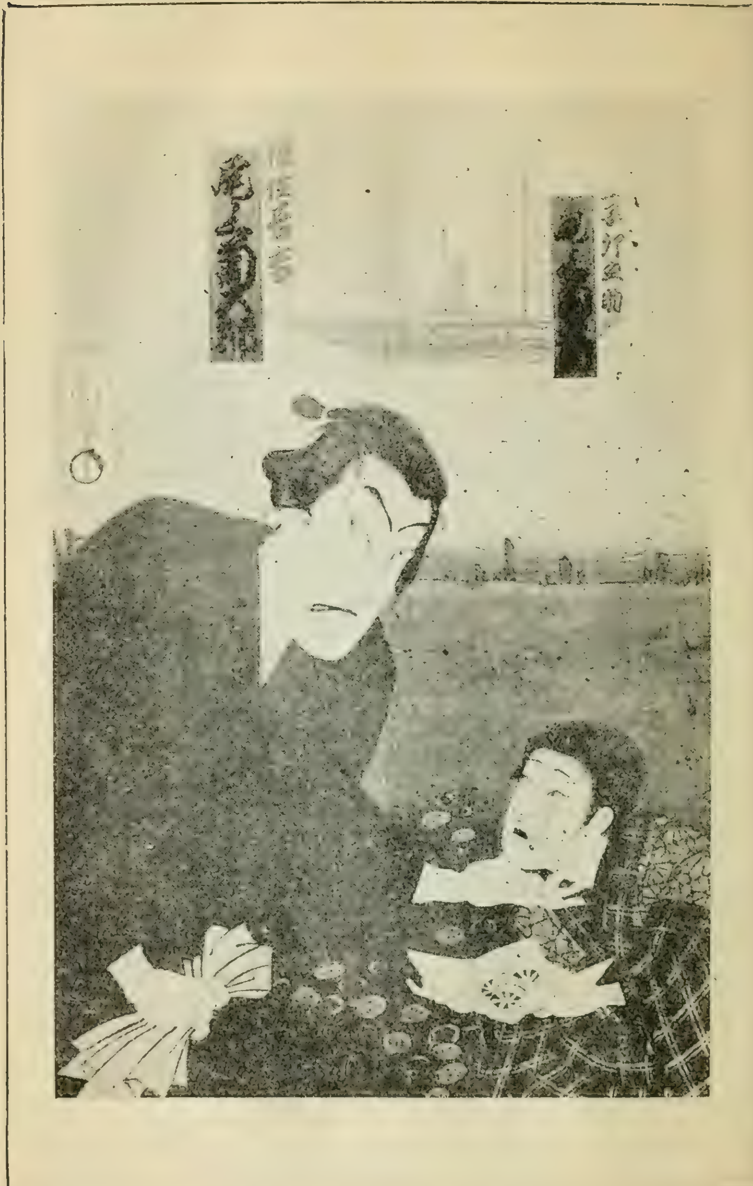
〽情も知らず行きかゝれば、引かるゝ鎖に取付いて、

ト虎藏上手へ行かうとする、善吉鎖に引かれながら、

善吉　あゝこれ虎藏さん、悴が逢ひに來ましたから、少しの内待つて下さりませ。

虎藏　べらぼうめ、待たれるものか、油を賣りやあ又頭に己が小言を聞かにやあならねえ。

善吉　決して長くは留めませぬ、ちよつと様子を聞きますうち。



虎藏　いゝや少しでも待たれねえ、懲役中は身寄の者に逢ふのは上の御法度だ。

善吉　そりやさうでもござりませうが。

虎藏　えゝ、來いといつたら來やがれ。

〽情容赦もあらけなく、引摺り行けば子は縋り、

ト虎藏上手へ行く、善吉鎖に引かれ行く、卯之助縋り、

卯之　お父さん、待つて下さいまし。

善吉　折角來たがおち〱と、話すこともならぬわいの。

ト虎藏斧を擔ぐ棒を取り、

虎藏　さあ善吉、これをかつげ。

善吉　はい、只今擔ぎます。

ト棒を取り、

これ卯之助、祖父さんは達者か。

卯之　いえ煩つておいでなさいます。

善吉　なに、煩つておいでなさるとか。

虎藏　えゝ、さつさと歩かねえか。

ト善吉是非なく棒をかつぎ、

善吉　逢ひたく思つた悴が來た故、少しの内と頼むのに。

虎藏　まだぐづ〱言やあがるか。

ト棒を引たくつて善吉を突く。

卯之　あれ、お父さんを。

ト縋るを、

善吉　卯之助あぶない、そつちへ退きや。

虎藏　どれ、性根の付く樣どやしてやらうか。

〽棒おつ取つて振上げれば、父樣あぶない〱と隔てる卯之助蹴倒して、打たんとなせし後より、

ト虎藏善吉を打たうとする、卯之助留めるを蹴倒し打たうとする後へ、以前の重右衞門出て虎藏を留め、

重右　虎藏、何をするのだ。

虎藏　や、親分か。

〽びつくりはいよう虎藏は、猫に逢つたる鼠の如く、棒投捨て一縮み。

ト虎藏棒を捨て天窓を押へて下に居る。

重右　今手前は此の己に、心を入替へ是からは、亂暴しねえと言つたぢやあねえか。

虎藏　へい。

重右　それに何だ、棒を振上げ、誰をそれでなぐる氣だ。

虎藏　今此の棒を振上げたのは、あれあの通り仲間の者が精を出しに居ります故、遊んで居ては濟まねえから早く行からうとせき立つても、此の善吉が悴が來たから待つて

くれと言ひまして、ぐづ〳〵しまして行きませんから、ちよつと威しに振上げました。

重右　そりやあ言付つた仕事をせず、遊んで居てはよくねえが、外の者とは譯の違ふ親孝行な此の善吉倅が逢ひに來たならば、逢はしてやるがいゝぢやあねえか。

虎藏　それぢやあ逢はしてもようございますか。

重右　長いことはならねえが、半時や一時はおれが承知だ。

虎藏　親分せえ承知なら、己が構つたことはねえ。

善吉　左樣なら少しの內、お許しなされて下さりますか。

重右　おゝ、ゆつくりと逢ふがいゝ。

善吉　それは有難うござりまする。

重右　善吉、こりやあお前の息子か。

善吉　はい、左樣でござりまする。

重右　見た所から利口さうだが、此の子は今年幾歲になる。

善吉　七年何ヶ月と申して、以前の八歲でござります。

重右　八歲にしては、形も大きし、何やかやが分りさうだ。

ト善吉卯之助に向ひ、

善吉　これ卯之助、爰においでの頭には、朝晩厚いお世話になるから、よくお禮を申してくれ。

卯之　親父がお世話になりまして、有難うござります。

ト辭儀をする。

重右　おゝおとなしい〳〵。どうでも以前が以前だけ、折かゝみは感心だ。

善吉　もし頭、つひぞ是迄承はりませぬが、お前さんはお子がござりませぬか。

ト問掛けられて重右衞門、胸に忘れぬ恩愛に、かたへの石へ腰を掛け、

ト合方になり、重右衞門地ならしの石へ腰を掛け、

重右　己も丁度此位な倅を一人殘して來たので、此子を見てから思ひ出し、人の子とは思はれねえ、是に付けてもお前などは纔か八十日の日限だから、今にも滿期で家へ歸れば一つに居られる體だが、それに引替へ己なぞは今更言つても仕方がねえが、性懲りもなく二度三度惡事に惡事を重ねた故、とう〳〵終ひが終身に再び娑婆へ出られぬ體、斯うして居ても親子の情愛、只の一日我子の事を思ひ出さねえことはねえから、大方家でも親や子が思ひ出さねえこともあるめえ、生涯それを語り合ひ目出度い滿期に逢ふことの、出來ねえ己は終身懲役、實に生甲斐

のねえ體だが、萬に一つお目出度か又はお上の御法事で非常の大赦で御免になり、逢はれることもあらうかと、よく講釋師が譬にいふ盲龜の浮木で何日逢はれるか、知れねえことを待つて居るのは、思へば空な話さね。

〽御法犯せし惡黨も親子の愛に一雫、こぼす涙は善心に開く善吉は力を添へ、

ト重右衞門ちよつと涙を拭ふ、虎藏は馬鹿々々しいといふ思入、

善吉　以前と違つて御一新から科人などの御處分は、此上もなくお慈悲の御沙汰、死罪の科も終身の懲役となり助りて、非常の大赦のある時は赦免となりて又元の其の本籍へお返し下さる、冥加にあまる有難い思召でござりますから、やがて目出度い御沙汰にて、親子打寄り今日を昔語りになされまする、必ず時節がござりませう。

重右　何日ある事か知れねえが、其御沙汰をば樂しみに惡い心を改めて、馬鹿にされると知りながら、二度はおろか三度迄惡い事を見脱して、人に情を掛けるのも今日人命惜しみ給ふ、恐れ多いが天子樣の、其の思召を萬分の一施す心で今日迄も己が預る人數の中から、只の一人惡事をして、年限增した者はねえ。

善吉　常からみんな打寄つて其のお噂を致しますが、お前さんの樣にお慈悲深ひお方の下に付く者は實に仕合せでござりまする。

ト此内宜しく思入あつて、

虎藏　もし親分、まだ休んで居てもようござりますかえ。

重右　まだ半時にもならねえから、もう少しはだいじねえ。いや、つまらぬ話しで邪魔をした、さあ〳〵息子に逢ふがいゝ。

善吉　有難うござりまする。

重右　虎藏、手前又邪魔をするな。

虎藏　なに、邪魔なざアしやあしませぬ。

重右　今度すると丁度三度だ。

虎藏　え。

重右　もう見脱しちやあおかねえぞ。

トきつといふ。

虎藏　いえ、決してしやあ致しませぬ。

ト重右衞門氣をかへ和かに、

重右　それぢやあ善吉、ゆつくりと話しをするがいゝ。

〽流石は物の頭とて、善惡分くる重右衞門心殘して行く影を、善吉親子はふし拜み、

ト重右衛門宜しく思入あつて、上手へはひる、後善吉手を合せて拜み、

善吉　お禮は詞に盡されませぬ、あゝ有難うござりまする。

ト虎藏に向ひ、

これ虎藏さん、お氣の毒だが少しの內どうぞ待つて居て下さりませ。

虎藏　親分からの言付だから、仕方がねえ待つてやらう。

善吉　それは有難うござりまする。

ト卯之助を引寄せ、

これ卯之助、よく尋ねて來てくれたな。

卯之　此の間から每日々々、道普請のある所をば、方々捜して步いたけれど、お前の居所が知れなんだわいの。

善吉　おゝ知れぬ筈〳〵、己の體が弱い故、今の頭の情にて、骨の折れぬ病人の藥の世話をして居たので、外へはさつぱり出なんだわいの。

卯之　道理でお目にかゝりませなんだ。

善吉　今聞けば祖父さんが、煩つてござるといつたが、寐てゞもおいでなされるか。

卯之　いえ〳〵、寐てぢやござりませぬ。

善吉　今日祖父さんがそなたと一緒に、逢ひに來て下すつたら、どんなに嬉しいことだらう。

卯之　おぢいさんはお前に逢ふのは面目ない故、今日は行かぬとおつしやつてゞござりました。

善吉　そんなことをおつしやらずと、逢ひに來て下さればよいに。

〽本意なき顏を見て取つて、卯之助はさかしくも、

ト思入あつて、

卯之　其の祖父さんに今爰で、わたしがお逢はせ申しませう。

善吉　や、それでは爰らに來てござるか。

卯之　あい、爰においでなされまする。

善吉　なに、爰においでなさるとは。

〽言ふに此方は懷より、ぢゝが寫眞を取出し、

ト卯之助前幕の寫眞を出し、

卯之　さあ、祖父さんにお逢ひなされませ。

ト善吉取上げ見て、

善吉　おゝ親父樣の寫眞だが、何處で寫して貰つたぞ。

卯之　是は此間祖父さんと淺草の觀音樣へお參りに行つた時、北庭さんといふ家で、寫してお貰ひ申しました。

善吉　其の筑波先生は、今指折の寫眞師故、お禮も多く出たらうに。

卯之　いえ／＼お禮はお取りなさらず、困るであらうと祖父さんへ、お金を三圓下さいました。

善吉　えゝ、只寫して下すつた上三圓金を下すつたとか、流石は名代の先生だけ、全くそれも信心なす觀音樣の皆御利益、あゝ有難いことぢやなあ。此間から明暮に逢ひ度く思つた親父樣、どれ／＼お目にかゝりませう。

〽絶えて久しき我親の俤見ればやつれ果て、迫る涙に善吉が我を忘れて聲を上げ、

おゝ親父樣、お達者でござりましたか、久しくお目にかからぬ内、お目も凹み頬もこけ、大そうおやつれなされましたな、お年の上ではあるけれど、つむりは常より白髮がふえ、お目もうるんで愁ひを含み、御苦勞のあるお顏付き、定めてあなたのお心では、己が盜みをした故に其の罪科でわたくしが斯く徵役になりましたを、濟まぬ事だと思召しての御心配でござりませうが、それは大きに違ひます。つひに是れまで塵ッ葉一本人樣の物斷なく、掠めるなどゝいふことなく、正直正路の親父樣が、

〽ふつと心の迷ひの出たは、此の善吉の稼ぎがうとく、たつた一人の卯之助に、春になつても去年の儘垢によごれし古布子、[illegible]住といふ名には似ず貧に迫りて情なや、着替一枚買ふ事も出來ぬ暮しに身の綻び、綴り兼ねたる身代にそでないことをなされたも、元の起りは我が業、こんな不孝な事はない故毎日お詫びをしてをります、今に滿期になりますれば、少しはお樂になりますやう、御恩送りを致しますから、もし親父樣、僅な所故御苦勞でも、お待ちなされて下さりませ。

〽寫眞に向ひ善吉が、在すが如く手をつかへ、身の詫なせば卯之助も共に音を鳴く時鳥、袖に涙の哀れさも空吹く風に虎藏が、

ト此内善吉寫眞を見て宜しく思入、卯之助も愁ひのこなし、虎藏は腹の立つ思入にてずつと立つて上の方へ行く、善吉鎖にて引かれ、ひよろ／＼となり、

あゝこれ虎藏さん、お前何處へ行きなさるのだ。

虎藏　何處へ行くものか、小便に行くのだ。

〽言ひ捨て彼方へ驅行けば、鎖に引かれ是非なくも、こけつ轉びつ引かれ行く、

ト虎藏無闇に上手へ急ぎ行く故、善吉膝を突きひよろひよろと上手へはひる。

卯之　あゝ情ない、お父さんを酷いことをしなさんすなあ。
〽親を案じて卯之助が、行きつ戻りつうろ〳〵と、氣を揉みあせる其處へ、立戻つたる虎藏が、
ト卯之助上の方へ行つて向うを見て、氣を揉む思入、よき程に虎藏づう〳〵しく出來り、
虎藏　頭の頼みに仕方がねえが、汝等が泣いたり笑つたりする、愚癡な話しを聞くなあ大儀だ、もう一寐入してやらうか。
〽傍にすゑし地ならしの石を寢臺に寐そべれば、是幸と卯之助が、
ト虎藏宜しく石の上へ臂を枕に寢る、卯之助思入あつて、
卯之　お父さんに上げようと、持つて來た此のお菓子、さつぱりと忘れて居た。
〽親子の縁もしつかりと、結ぶ包みの小風呂敷、解いて取出す菓子包み、
お父さん、是をお上りなされませ。
善吉　おゝ、是は見事な菓子だが、何處からぞ貰つたか。
卯之　今も言うた淺草の、北庭さんのお家にてお貰ひ申しましたから、お父さんに上げようと、今日迄しまつて置きました。
善吉　それではそなたは喰べなんだか。
卯之　お初穗を上げぬ内、先へ喰べては濟みませぬから、まだわしはたべませぬ。
善吉　おれに初穗を供へずとも、祖父さんに上げればよいに。
卯之　祖父さんは此頃は、何にもお上りなされませぬ。
善吉　さう聞いては少しも早く、己も喰べるから、そなたも喰べやれ、
卯之　此處においでのをぢさんに、一つお上げなさいましな。
善吉　おゝホンにさうであつた。これ虎藏さん、菓子を上りなさらぬか。
ト包の儘出す。
虎藏　甘えものはおらア嫌えだ。
〽拂ひ退ければばら〳〵と、こぼるゝ菓子を親子は拾ひ、
ト虎藏拂ひのけ、寢返りをして向うを向いて寢る、善吉卯之助はこぼれし菓子を拾ひ紙へ取り、
善吉　をぢさんは厭だとおつしやるから、さあ〳〵そなた澤山喰べやれ。

へ初穂を取つて差出せは、さも嬉し氣に押しいたゞき、
年はいかねど大人にも、勝る心に味ひて、
ト此内善吉菓子を一つ取つて喰ひ、卯之助に跡を遣る、
卯之助も一つ取つていたゞき是を喰ひ思入あつて、
卯之　もしお父さん、こんな旨いお菓子はわたしや初て喰べました。
へ言ふ顏つく〴〵打守り、過し昔であるならばと、返らぬことに胸迫り、いとゞ不便のいや增して、
ト善吉卯之助を見て不便だといふ思入あつて、床の合方になり、
善吉　あゝ世が世であらば神奈川の青木町にて指折の、家藏持ちし米問屋、なに不自由のない身代に、親父樣にはお茶をなされ、諸方の菓子を求めたまへば、我育ちたる其時分は如何なる菓子も口に飽き、さのみ旨いと思はざりしに以前の如く、榮えなば、そちは家督の忰故、今東京で名の高い藤村、野村の菓子なりとも、味を知らざることなきに、我稼ぎかぬ其前より次第に家は衰へて、所有の地所は言ふに及ばず住居の地迄池田へ讓り、藏に滿ちたる古帳を反故屋へ賣りしも昨日今日、飛鳥の川の淵は瀨と替り果てたる成行に、反故屋の世話でやう〳〵と紙屑買になつたれど、仕樣模樣も夏の夜に、蚊帳さへ釣れぬくらしとなり、
へ古證文を繼合せ、紙帳となして蚊は凌げど、破れ勝なる身の果に、
そちへ土產と買つて來る菓子は駄菓子のおいちかねちかね、それも五つか六つ七つ八つになる迄上菓子の味を知らざるそちが不運、我育ちたる時分とは斯迄違ふものなるかと、思へば不便でならぬわい。
へ手拭顏に押當て聲を忍びてむせ返れば、共に淚の卯之助が親の心を察しやり、
ト善吉手拭を顏へ當て泣く、卯之助是を見て思入あつて、
善吉　これお父さん、そんなに苦勞におしでない、今にわたしが大きくなり、お前と二人で紙屑を買つて步いたことならば、よい身上になられませう、さうなる時はどの樣なよいお菓子でも喰べられますから、今喰べたくはござりませぬ。
へ幼けれども利發故、親の苦勞を慰むれば、
善吉　あゝ利口な樣でもまだ子供、賤しい家業の紙屑買も親が今日營めば、惡い家業もよいと心得、大きくならば

二人して稼ぐと言はるゝおれがせつなさ。
〽百萬年稼いだとて、紙屑買で歩いては所詮うだつが上らねば、生涯我子に貧乏させ、
こんな意氣地のない者でも、あまりといへば親甲斐なく、面目なうてならぬわい。
〽いかなる前世の因果にて、斯迄落ぶれ果てしかと、悔み歎けば氣を勵まし、
ト善吉思入、卯之助こなしあつて、
卯之　いえそりやお父さん違ひます、よい所にはお金があり、お乳母を置いて育てれば親に苦勞はござりませぬ、お父さんの樣にお金もなく、困る中にて此の年迄お育てなされて下された、
〽御恩はお金の澤山ある、不自由のない親よりも、はるかにまさりしことなれば、
其日に困る者の子ほど、親に孝行致さねば、人の道にかけますと、
〽子供心に思ふ故、何處から何を貰うても、父さんお前へ蔭膳と一緒に供へぬ其内は、
喰べたことはござりませぬ。
〽わづか七つか八つには足らぬ子なれど學校の、教に物の理も分り、孝行盡す卯之助に嬉し涙を押拭ひ、
善吉　おゝ忝い／＼、育てがひなき親なれば面目ないと思ふのに、不自由のない者よりもまさりし恩とは、忝い其志しが何よりもおれは嬉しく思ふから、是から何を貰ふとも、初穗を除けて置くには及ばぬ、祖父さんと二人して、早く喰べてしまつてくれ、
卯之　祖父さんはおとつさんが、斯うして居るを苦勞になされ、何を上げてもさつぱり上らず、早く死んでしまひたいとおつしやつてゞござります。
善吉　さうして家の暮しや何かは、朝日山からしてくれるか。
卯之　あい、伯父さんの所にもお取込がある故に、お氣の毒だと祖父さんが、北庭さんからお貰ひ申したお金がある故伯父さんから、お貰ひ申しは致しませぬ。
善吉　すりや北庭さんからお貰ひ申した、其の三圓で暮して居たか。
卯之　其の三圓も大家樣米屋薪屋へやりましたら、纔なお錢が殘りし故、此間もお米がなく一日喰べずに居りましたら、力が拔けて其の朝は水を汲むのが汲めませなんだ。

善吉　あゝ己が家に居たならば、假令どんなに困るとも、
饑じい思ひはさせまいに、お年寄られた親父様や、年の
いかないそなたに迄苦勞をさせるは何たることか、心は
矢竹に思つても滿期でなければ歸られず、もしも其内其
の日に迫り、ひよんなことでもあつたらば、
〽今日は明日はと一日づゝ、指折りて待つ八十日、滿期
で出てもせんないこと、
どうぞそれ迄御無事にて、目出度く顏を合すのを樂んで
居る此の善吉、家へ歸らば親父様に、よう其の事をいう
てくりやれ。
〽親の命が取とめ度く、頼む詞も子心に、貧の病の覺束
なく、
卯之　よくお話しを致しませうが、おとつさんは何時お家
へ、お歸りなされまするぞえ。
善吉　やうやく今日で二十日故、まだ六十日日が立たねば
歸ることはならぬわえ。
卯之　もし其内に祖父さんが。
善吉　や。
卯之　死なしやんしたらどうしませう、わたしを不便と思
ふなら、もしお父さん、

ト善吉に縋り、
早くお家へ歸ることは、
〽出來ませぬかと取縋られ、涙に暮れて善吉は、胸を裂
るゝ思ひにて、
善吉　おゝおれも早く歸りたいが、盜みの科にて八十日懲
役になつた體故、其の日限が立たざれば歸ることはなら
ぬわいの。
卯之　そんならどうでも、六十日日數が立たねば歸られま
せぬか。
善吉　七十近き親あれば、心にかゝれど盜みゆゑ。
卯之　其の懲役は八十日。
善吉　入牢してから數ふれば、九十幾日にはや百日。
卯之　たゞ一日も千日の、
善吉　思ひを親子にさせるとは、
卯之　もしお父さん。
ト善吉引寄せ、
善吉　思へばはかない身の上ぢやなあ。
〽手に手をとりて親と子が、わつとばかりに抱きしめ、
涙は波戸場に汐滿ちて、岸に溢るゝ如くなり。
ト此内善吉愁ひの思入あつて、卯之助を抱きしめ泣く。

〽始終を後ろに聞居る虎藏、むつくと起きて吐息をつければ、

ト虎藏起きて平舞臺へ坐り、ホツと思入れ、善吉びつくりなし、

こりや虎藏さんには、どうさつしやつた。

虎藏　寐た裝をしてお前方の今の話しを後で聞き、初めて惡い事を知つた。

善吉　何と言はるゝ。

〽聞咎むれば虎藏は、落つる涙を振拂ひ、

虎藏　餓鬼の時から根性は、つむじと共に曲つた虎藏、盜みはしねえがかどはかし、ゆすり衒りに幾度か惡事千里に捜されても、風を喰つて逃げ歩き親の首へも繩を掛け、不孝なやつと言ひ死に親父が死んだ其跡は、たゞせえ甘えお袋に小言をいやあなぐりつけ、蹴たり踏んだりした事も惡いと心付かざれば耳やかましく聞いて居たが、年に似合ず目から鼻へ拔ける利口なお前の息子が、其の日に困る者の子ほど、親に受けたる恩深く孝行せねばならぬといふ其の一言が肝に徹へ、これ迄盡した親不孝濟まねえことをして來たと、今日といふ今日目が覺めて親父の死んだ其時にも、たゞ一滴の涙せえこぼした事のねえ己が、其の子の勝れた孝行に初めてこぼした此の涙、これが心を改めて、誠の人になつた證據だ。

〽子の孝心が敎となり、惡も忽ち善心に、飜りたる虎藏が涙に誠あらはせば。

ト虎藏宜しく思入あつて、涙を手拭で拭ふ。

善吉　すりや、卯之助が孝心に、感じてお前は改心せしとか。

虎藏　義理人情も辨へぬ、どんな鬼でも此の子の孝心、聞いて直らぬものはねえ。

善吉　それは何よりわたし等も、まことに嬉しく思ひます。

虎藏　さつきお前を踏んだり蹴たり、何處ぞ痛めはしなんだか濟まねえ事と氣が付いたから、お前に顏が向けられねえ。己を蹴るなり踏むなりと、存分にして善吉さん、どうぞ堪忍してくんねえ。

〽怪我はせぬかと撫さすり、詫り入れば善吉が、

ト虎藏善吉の體をさすり、詫る思入。

善吉　お前に蹴たり踏んだりされ、憂目にあふのも身の懲らしめ、決して恨みに思ひはしませぬ、心が直つて下されば、何よりそれが忝い。嘸此の事を聞かれたら、母御や又は弟御が悦ばれるでござりませう。

虎藏　其の悦びはどのやうだか、早く知らしてやりてえものだ。

ヘ言ふ折後へ重右衞門、

ト上手より以前の重右衞門出て、

重右　世にも稀なる其子の孝心、己も涙をこぼしました。

虎藏　そんなら頭、お前も始終を、

善吉　小蔭でお聞きなさいましたか。

重右　善吉殿が孝心に、親の罪をば身に引受け、八十日に懲役になつたと人の話しに聞き、感心をして居た所、其の孝心に輪を掛けた此子は世間の子の鑑、鬼の樣なる虎藏さへ、不孝を知つて發起なし、これ迄泣いたことのねえ鬼せえ涙をこぼすもの、惡い心を改めて今は佛の重右衞門、後生願ひに涙脆く、此の子が切ない話しを聞き、これ此の通り手拭を涙でぐつすり濡らしてしまつた。

虎藏　それぢやあ此の子の話を聞き、親分お前も泣きなすつたか。

重右　これが泣かずに居られるものか。

ヘ折柄後へどや／＼と、

ト幕明の八人泣きながら出て、

源六　わしらもみんな。

八人　泣きました。

重右　おゝ手前達も泣いたのか。

源六　泣いたとも／＼、此の頃登つた綱太夫が、

熊藏　三の切を聞くよりも、

竹齋　世にも稀なる卯之助どのが、

雲念　親孝心に感じ入り、

升七　まことに此身の說教に、

五右　情を知らぬ者共も、

銀太　胸に迫つて一同に、

鐵藏　いまだに涙が、

八人　止まりませぬ。

ヘ止りませぬと聲を出し、すゝり上げてぞ泣きにける、重右衞門は涙を拭ひ、

ト此内八人聲を上げ泣くをかしみ宜しく、重右衞門思入あつて、

重右　さつきも己が言ふ通り、善吉の外一人でも直な心の者はねえ懲役人が涙に暮れ、惡い心を飜し、皆善心に立返つたは善吉親子が孝心故、名僧知識の說教よりはるかにまさつたことなるぞ。

善吉　親孝行といふ程の事でもないを其樣に、頭を初め皆

さんが左様に褒めて下さいますは、親子が身に取りどの位有難いかしれませぬ。これ卯之助、ようお禮を申しやいの。

卯之　皆様、有難うござりまする。

〽親子は大地へ手を突いて、嬉し涙にくれにける、虎藏は點頭きて、

ト善吉卯之助皆々に禮を言ふ思入、虎藏こなしあつて重右衛門に向ひ、

虎藏　もし親分、お前さん、折入つてお願ひがござります。

重右　なに、己に願ひとは、

虎藏　外の事でもござりませぬが、此の善吉が懲役の日數をわつちが身に引受け、是から先へ幾日でも餘計に役を勤めますから、お前さんからお掛りへお願ひなすつて善吉を、一日も早く内へ歸し親父に安心させてえから、御免になつて歸ります樣、どうぞお願ひ下さりませ。

重右　おゝ虎藏よく言つた、然し手前が替りを勤め、此の善吉を許すといふ自由な事は出來ねえが、然し惡い事でねえから、一部始終を申上げたら、親孝心の其廉で非常のお慈悲があつたらば、御免になるまいものでもねえ。

虎藏　どうぞ親分お前さんが、力を盡して善吉さんが、赦免になるやうして下さいまし。

善吉　すりや虎藏さんには懲役の日數を勤めて善吉の、赦免を願つて下さりますか、叶ふ叶はぬは兎も角も、お志しが忝い、必ずあだには思ひませぬ、然しお前を替りにしては。

虎藏　其の遠慮にやあ及ばねえ、せめてお前を助けにやあ、切角心を入替へても、まことの人になられねえ。

重右　箸にも棒にもかゝらねえ亂暴者の虎藏が、さういふ心になつたのも、實に此の子のお蔭だから親孝心な事柄を、よくお掛りへ申上げよう。

源六　虎藏ばかりぢやござりませぬ、わつちを始め皆一同七ツか八ツの子でさへも、人の道をば辨へて。

熊藏　親へ孝行盡すかと思ひまするを面目なく、實に今日迄氣の付かぬは、まことに悔しうござります。

重右　是といふのも近頃は何れいづくの果迄も、學校のない所はなく、六歲からして入校なし日々勉强するゆゑに、昔と違つて智慧早く十にならない子供でも、天地の事から世界の事よく辨へて居る故に、親を大事に孝行する、斯ういふ子供が出來るのだ。

雲念　其の孝心を手本となし、

竹齋　硯の名にし虎藏が、
升七　曲りし墨もまッ直に、
五右　筆の命毛結直し、
銀太　惡い心は水入の、
鐵藏　水に流して我々も、
源六　皆善心に、
八人　なりました。
虎藏　そんならみんなも善心に、己と一緒になつたのか。
重右　晩に歸らば一統へ、今日の事を話して聞かせ皆善心に立返らば、それ〳〵滿期の其後は、二犯を犯す者もなく、さうなる時はどの位お上へ對して忠義だか、善吉親子は言ふに及ばず、虎藏手前も手柄だぞ。
虎藏　生れて丁度三十年、初めて人に褒められて、こんな嬉しいことはねえ。
〽善に返りて虎藏が、悦ぶこなたへ立出る巳之吉、
ト虎藏悦ぶ思入、後ろ異人館の蔭より、巳之吉おむら出來り、
巳之　樣子は聞いた、これ兄貴、よく善心になつてくれた。
むら　おッかさんが聞かしやんしたら、嘸お悦びでござんせう。
虎藏　もう是からは手前達にも、決して苦勞はかけねえぞ。
巳之　是といふのも善吉さん、
むら　又此のお子の孝行故、
巳之　厚くお禮を、
兩人　申しまする。
善吉　いや、其のお禮を受けまするは、此の善吉ではございませぬ。
重右　虎藏初め一統が改心したは此子の手柄、惡を懲らして善を勸むる、
虎藏　まことに今日の、
皆々　教導職。
〽我子を褒められ嬉しさに、善吉寫眞に打向ひ、
ト善吉以前の寫眞を出し、
善吉　もし親父樣、お悦びなされませ、あなたの秘藏な卯之助が大きな手柄を致しました、嘸お嬉しうございませう。
卯之　少しも早う此事を、
善吉　おゝ、祖父樣へお知せ申せ、

卯之　はい。
善吉　あゝ此寫眞は留置いて、朝夕お目にかゝりたいが、懲役の身に斷なく、此儘置いてはお上へ恐れ。
重右　今日の始末を申上げる、次手に願つてやらうから、寫眞は其儘置くがよい。
善吉　すりや、お許し下さりますか、有難うござります。
虎藏　さあ卯之さんは、少しも早う。
卯之　左樣なれば、お父さん。
善吉　親父樣を大事にしてくれ。
卯之　それはお案じなされますな。お頭初め、皆さん方。
〽小腰かゞめてそれ〳〵へ行儀正しく辭儀なせば、
ト重右衛門初め皆々へ辭儀をなし、
巳之　ても感心な。
むら　あのお子さん。
〽褒める詞を身の出汐、泣く〳〵立つて行掛けしが、磯邊離れし水鳥の風にさまよふ風情にて名殘惜しみて行きかぬれば、親子の愛に善吉が跡を慕へば虎藏も、共に引かれて行く鎖、
ト卯之助跡を振返り〳〵花道へ行く、善吉立上り、是を見送り花道の方へ行く、虎藏鎖に引かれ、しをしをと付いて行く、皆々可哀さうだといふ思入。
善吉　そんなら卯之助、もう行くか。
卯之　家へ歸るが遲くなれば。
善吉　あゝ、いつ又逢はれることか。
〽互ひに顏を見合せて、袖に涙の汐曇り、濕りがちなる折柄に、
ト兩人名殘を惜しむ思入、虎藏後ろに泣居る、皆々も愁ひの思入、よき程にどんと大筒の音、是にて善吉眞中へ來り、卯之助舞臺へツカ〳〵と戻る、巳之吉おむらはびつくりなして、
巳之　や、あの大筒は。
むら　ありや何でござります。
重右　今日は異國の祝ひ日に、
虎藏　船中で打つ、
八人　ありや祝砲。
善吉　頓て目出度く、
ト卯之助を引寄せるを木の頭、
歸るを待てよ。
ト善吉につこりと思入、皆々引張り宜しく、海軍の奏

樂へ祝砲の音をあしらひ、

ひやうし　幕

五幕目大切

待合新大和の場
元町善吉内の場
法善寺墓所の場

（淨瑠璃）隣で語る二の口村に　一筆啓上兩面團扇
戀と無常の二道を　（常磐津連中）

（役名——福住善吉、朝日山浦右衛門、甚兵衛、手代忠八、池田伴七、桑原五郎右衛門、倅卯之助。藝者お梅、新大和のお若、お梅母おくら、其他。」

（新大和の場）——本舞臺一面の平舞臺、正面上手一間銀張地袋戸棚、此上に蒔繪の服臺硯箱など置き、續いて一間大襖、此下茶壁、誂の臺へ三尺、鏡を置き、下手に茶簞笥、風爐へ釜を掛けあり、軒口に「待合」といふ掛行燈、いつもの所枝折戸、下の方一間晒し竹の格子、中窓下板羽目、總て待合茶屋の體、爰に五郎右衛門羽織着流しにて煙草盆を控へ、煙草を吞み居る、眞中にお梅藝者の打扮、お若待合の女房の打扮にて、お梅へ煙管を出してゐる、下手にお筆下女の打扮にて急須へ茶を入れて居る、此見得流行唄にて幕明く。

五郎　これお梅、二百圓といふ金を出して三年の年で賣られた手前を、東京へ連れて來てやつた其の大恩も思はずに、お袋の所へ逃げて來て、それで手前濟まうと思ふか。

お若　これはしたり桑原さん、そんなに大きな聲をなさらずと、まあ靜におつしやつて下さいまし。

お筆　大きなお聲でござりますから、表へ人立が致しまして、外聞が惡うござります。

五郎　いや靜にしろといひなさるが、靜にしちやあ居られねえ。そりやあ讀と歌だから己が心に隨へば其の身の出世ばかりぢやあねえ兄にも力業をさせず、何か商法を開いてやる氣だ、それを何處へ行つたか行方もしれねえあの伴七に心が殘つて、己がいふことを聞かねえからは、よく敵役のいふせりふだが、可愛さ餘つて憎さが百倍、手前を屯へ引張つて行つて、此の始末を分けにやあならねえ。

お梅　そりやあ一旦お前さんのお世話になつたことだから、其のお金はどうしてもお返し申す心故、此間兄さんが百圓お返し申しまして、跡の殘りの百圓は四五日待つて下さりませと、あれ程一昨日兄さんが、お賴み申したぢやあござりませぬか。
お若　私も聞いて居りましたが、待つてやらうとあの時に御承知なすつておきながら、それを今日又お梅さんに返せといふのは桑原さん、男らしくないぢやあございませんか。
五郎　いゝやそんなことを言つた覺えはない、それとも四五日待たうといふ罫紙へ書いた證書があるか。
お梅　そんな物はござりませんよ。
五郎　證書がなけりやあ待たれない、何でも殘金百圓を、たつた今己に返せ。
お梅　ほんに、桑原さんもまだお若いと思ひましたが、もう六十でござんすか。
五郎　此桑原を六十とは、何を見てそんな事を言ふのだ。
お梅　一昨日四五日待たうといつて、今日になつてそんな事を言はないなどゝ言ひなさんすから、それでわたしや老耄して、居なさるかと思ひました。

お若　六十といふのはお梅さん、そりや慾目でござりますわたしや七十かと思ひました。
お筆　ほんに桑原さんは、大ゆるみでござりますな。
五郎　女子供を相手にするは、大人氣ねえと我慢をすりやあ、いゝかと思つて付上り、よく人を馬鹿にしやあがあつたな、もう此の上はお梅をば屯へ連れて行かにやあならねえ。さあ、己と一緒にうしやあがれ。
ト引立にかゝる、よき所に浦右衞門着流し角力の打扮、以前の忠八と連立ちて出て、門口にて騷き、忠八は下手へはひろ、浦右衞門内へはひり、や、こりや朝日山か。
お梅　おゝ、よい所へ來て下さんした。
浦右　こりや五郎右衞門さんには、己が妹を何處へ連れて行くのだ。
五郎　おゝ殘り金の百圓を返さぬ上に兎や角と、おれが事を惡くいふから屯へお梅を連れて行くのだ。
浦右　いゝやおれが來るからは、此の妹は渡されねえ。
五郎　渡されねえと立派にいふなら、殘りの金の百圓をたつた今己に返すか。
浦右　一昨日百圓渡す時、後は四五日待つてやると、こな

たおれに言つたぢやあねえか。

五郎　そんなことを言つた覺えはない、たつた今金を返すか、それとも金が返されずば、お梅を己が女房に呉れるか。

浦右　慥に待たうと言つたけれど、言はぬといへば水掛論、今更言つても仕方がねえが、言條通り今爰で、百圓金が出來る上は約束變替へした廉で、只こなたをば返さぬぞ。

五郎　そんな脅しを言つたとて、百圓といふ其の金が、力づくぢやあ出來ねえよ。

浦右　其の力づくで出來ねえ金が、若し又出來たら何とする。

五郎　おゝ出來たらこなたの存分に、此の五郎右衛門をするがいゝ。よもや金は出來まいな。

浦右　ところが百圓爰にある。

五郎　やあ。

　　トびつくりする。

浦右　それ、數改めて請取らんせ。

　　ト懐から十圓札の包を出し、五郎右衛門の前へはふる、五郎右衛門取上げ見て、

五郎　おゝ、こりや十圓札で丁度百圓。

浦右　さあ、請取りを書いてくだんせ。

お若　硯箱は爰にござんす。

五郎　よもやと思つた此の金が。

お梅　ほんに兄さん、どうしてこれを。

浦右　そりやあおれも男だから、百圓金を拵へて來たのだ。

　　ト此内五郎右衛門請取を書き紙入より印紙を出し、請取へ張り、印を押す、始終顫へ居る。

お若　桑原さん、何をそんなに顫へなさんすのだよ。

五郎　よもやと思つた此の金が、出來た故に氣味が惡い。印紙も貼つてありますぞ。

　　トふるへ〳〵出す、浦右衛門見て、

浦右　おゝ、これでよい〳〵。返せといふ金返したからは、今の詞は忘れまいな。

五郎　あゝ忘れました〳〵、さつき四十と言つたは僞り、實の所は六十故、老耄なして忘れてしまつた。

　　トふるへ居る。

浦右　どれ、存分にしてやらうか。

　　ト浦右衛門立上る、五郎右衛門ぶる〳〵顫へながら詫びる、浦右衛門思入あつて、

然し一旦受けた恩もあれば、どうもせぬから早くござ

れ。

ト門口へ突出す。

お若　をとゝひござんせ。

ト五郎右衞門ホツと思入あつて、

五郎　どうでもしろと、此の口で言つたばかり、すんでのこと耳か鼻をもがれる所、無事で助かりお目出度い。

ト此内口鼻耳と指で敎へ、流行唄にて五郎右衞門花道へはひろ。梅吉嬉しき思入。

お梅　桑原さんのお金を返し、今日といふ今日さつぱりと、曇つた空が晴れた樣で。

お若　わたし迄も共々に、こんな嬉しいことはない。

お梅　兄さん、有難うござんすわいな。

浦右　いや、其の禮は己ではない、忠八さんによく言やれ。

お梅　え、何と言はしやんす。

ト合方になり、奥より忠八出て、

忠八　お前方同胞が、五郎右衞門から借りた金で困つて居ると聞いた故、其の難儀をば救はうと、百圓持つて來る途中、丁度折よく此先で朝日關に出逢つた故、金を渡して爰の門へ、來ると内にて五郎右衞門が、催促故にこつそりと、裏から忍んで聞いて居ました。

お梅　そんなら今のは忠八さんが、お貸しなすつて下さいましたか。

忠八　いや、貸したのではない其の金は、大旦那樣が下すつたのだ。

お梅　え、すりや大旦那樣が、あのお金を。

忠八　若い時には道樂をなされたお方に、さばけがよく、此の話しを致しましたら、元の起りは倅から起つたこと故、濟まして遣れとおつしやつて、此の忠八へ内々でお渡しなされて下されたのぢや。

浦右　これといふのも日頃から、御贔屓になされ下さる故。

お梅　何とお禮を申さうやら。

兩人　有難うござりまする。

ト辭儀をする。

浦右　此の間から、お袋も頭痛に病んで居りました故、是から直に家へ參り、早く知らしてやりませう。

お梅　どうぞ兄さん少しも早う、おしらせ申して下さんせいな。

浦右　失禮ながら忠八さん、先へ御免を蒙ります。

忠八　遠慮に及ばずござらつしやい。

お若　左樣なれば、朝日關さん。

浦右　大きにお世話になりました。
　ト流行唄になり、浦右衞門花道へはひろ、跡合方彈流
　、梅吉思入あつて、
お梅　もし忠八さん、お前さんにお目にかゝつたら委しく
　お聞き申したいと、疾から思つてをりましたが、半七さ
　んの行先きは何處へおいでなさんしたか、御存じではご
　ざりませぬか。
忠八　さあ朝日陽の所から、上方へ行くとおつしやつてお
　いでなすつたと聞いた故、跡を追ひ掛けお止め申し、世
　間を憚ることもあれば、幸ひ酒匂の御緣家へお預け申し
　て置きました。
お梅　それでは上方へおいでにならず、酒匂においでなさ
　いますか。
忠八　それも山手の御別莊へ、二三日後にお呼び申せば、
　今においでなされませう。
お梅　そんならこちらへ半七さんが、おいでなされました
　とか。
お若　お梅さん、嘸嬉しうござんせうね。
お梅　こんな嬉しいことはござんせぬ。
忠八　最前使をよげましたから、もうおいでなされたかも
　しれぬ。
お若　人目を憚り裏口から、おいでなさるかも知れませぬ。
　どれ、行つて見て參りませう。
忠八　お話し申すこともあれば、わしも一緒に行きませう。
お梅　それではおいでなさいましたら、
お若　直にお知せ申します。
忠八　そこに待つておいでなさい。
　ト端唄の合方になり、忠八お若奥へはひろ。
お梅　かういふことゝは露しらず、上方へおいでなすつた
　ことゝ、明暮お案じ申しましたが、こちらにおいでなさ
　るなら、なぜ便りをして下さんせぬ、早うお目にかゝり
　たうござんす。
　ト合方きつぱりとなり、奥より半七着流しにて出來り、
半七　お梅、そこに居たか。
お梅　や、半七さんですか。
半七　よく達者で居てくれたな。
　ト下に居る。
お梅　えゝ逢ひたうござんしたわいな。
　ト半七にすがる。
半七　委しい事は忠八から聞いて恨みは晴れたれど、あの

虎藏に誑されて藝者になつたことは知らず、外に深い男があつて捨てられたと聞いた故、腹が立つて／＼怺へられぬのみなるか人に面が合されず、いつその事身を投げて死なうかと思つた。

お梅　其のお恨みは無理ならねど、お前さんの爲といふ故虎藏めに誑されて、知らぬ土地の高崎へ藝者に行つてどの位辛い思ひをしましたか。それもやう／＼こつちへ歸り、直に兄さんの所へ行き、段々との話しをして、此身の明りは立ちましたが、お前さんの行方が知れず、どんなに苦勞をしましたらう、お察しなされて下さいまし。

半七　それは己も同じこと、さういふ心と知らぬ故、腹が立つやら悔しいやら、夜もろく／＼寐なんだわいの。

お梅　思ひがけなくお目にかゝり、何からお話し申さうか、たゞ嬉しいので言ふ事も、急に口へは出ませぬわいな。

半七　そんな事をいふけれど、桑原とかいふ客に前借を濟まして貰ひ歸つて來たと言ふからは、定めて夫婦約束して、どんな起請があることやら。

お梅　たゞ東京へ歸りたいので、前借金を借りたばかり、そんなことのない證據は、守りをお目に掛けるから、改めて御覽なさい。

ト脊負ひ守を出す。

半七　さういふことなら其中を、改めて見ずともよい。

お梅　わたしよりはお前さんこそ、久しく逢はぬ其内に、どんな起請があらうやら。

半七　そりや己とても同じ事、起請などはないけれど、疑ふならば此の守り、中を改めて見たがよい。

ト懐より守りを出す。

お梅　そんならわたしの疑ひばらし、中を見せて下さんせいな。

ト守袋を明け、中より誂への印籠を一重出し、

や、此の印籠は。

半七　それは實の、親の形見だ。

お梅　えゝゝゝ。

トびつくりなし、

此の印籠の片われが、親御の形見でござんすか。

半七　何を隱さう此のおれは、幼き時に道に迷ひ、泣きさまようて居たりしを、ある旅僧が拾ひ取り、池田の家へ連れて來て、養ひくれと頼みしに、丁度其の頃一子なく、まをし子なせし折なれば、是神佛より授かりしと、直に貰ひて育てし由、成人なして其事を養母が我へ竊の話し

守の内に入れありし犬の模様の高蒔繪、此の印籠の一重は産の親の形見なれば、大事にせよと言はれし故、是を證據に後々に、親子兄弟名乘合ふこともやあらんと肌身にそへ、大事にかけし印籠は、いづこの誰か知らねども、日頃尋ぬる親の形見。

お梅 そりや僞りではござんせぬか。

半七 なに僞りをそなたに言はうぞ、年月立てど實の親、明暮戀しく思ふに付け、もし兄弟でもあるならば此印籠を證據として、名乘り合ひたいものぢやわいの。

ト此内お梅思入あつて、

お梅 はあゝ。

ト泣伏す。

半七 これお梅、何を泣くのだ。

お梅 もし半七さん、此の守を見て下さんせいな。

ト以前の守を出す、半七中より同じ印籠の末の一重を出し見て、

半七 や、犬の模様の同じ印籠、しかも末の一重を守へ入れて持つて居るは、もしやそなたは。

お梅 わたしや妹でござんすわいな。

半七 やゝ。

ト びつくりなす。

お梅 同胞同士と知つた上は、お前に顏が合はされぬわいな。

ト下手を向き泣く。半七は印籠を合せ見て、

半七 しつくり合ひし此の印籠、今一重の持主は。

お梅 朝日山の兄さんが、守に入れて居やしやんす。

半七 扨はそなたは眞實の、我が妹であつたるか。神ならぬ身の露知らず、三年此方言交し水も漏らさず契りしは、いかなる過去の因果なるか、己もそなたに面目ない。

お梅 此の印籠で名乘合ふ後の證據に入置いた父さんも聞えませぬ、かうして實の同胞が畜生道へ落ちるのを、草葉の蔭から見て居ながら、何故に留めては下さんせぬ。

半七 親を恨むに及ばぬこと、斯ういふことになり行くも、前生からの約束事、三つに分けし三重の此の印籠の高蒔繪、雪に狂ひし犬の畫は、畜生になるこれ前表。

お梅 過ぎし契りを夢となし、是から二人別れるとも、

半七 隱す事程洩れ易く、世間へ是が知れた時は、

お梅 人に面が合はされねば、死ぬより外はござんせぬ。

半七 死ぬと覺悟を極めたなら、そなたばかり殺しはせぬ。

お梅 そんならお前も、共々に。

半七　せめて一言此譯を、兄と知れたる浦右衛門殿へ。
お梅　わたしも共に母樣へ、不孝のお詫を書送り、
半七　明日は連立つ。
お梅　冥土の旅。
半七　思へばはかない、
兩人　身の上ぢやなあ。
ト手をとりかはし顏見合せ、愁ひの思入、時の鐘しんみりとした端唄にて、道具廻る。

(善吉内の場)――本舞臺二幕目の善吉の内、世話場の道具、爰に佐次郎兵衛の差配人、お鹿、お熊相長屋の女房の打扮にて、立掛りゐる。四ッ竹節にて道具留る。
お鹿　大屋さん、お前さんも嘸お悦びでござりませう、卯之ちやんの親孝行がお上へ知れて、善吉さんの八十日の懲役も、纔な日數で御免になり、
お熊　一つ長屋に斯うして居れば、他人のやうに思はれず、わたしども丶共々に、まことに嬉しうござります。
佐次　長屋中から泥坊や間男などの出ると違つて、親孝行の出るといふのは、實に己の鼻が高い。
お鹿　鼻が高いといへば、今日は表の文字喜代さんのお溫習で、晩には天狗さまが寄合ふさうだ。
お熊　晝の中は子供ばかりだが、後には立派な太夫さんが、出ますさうでござります。
佐次　それは晩には樂しみだわえ。
ト合方になり、奥より以前の甚兵衛卯之助出來り、
甚兵　これは／＼皆さん方へ、大きに失禮を致しました。
ト眞中へ住ひ、
扨、何からお禮を申しませうやら、善吉が懲役中佐次郎兵衛樣を初めとして、お長屋の衆が御親切故どうなりかうなり今日迄命を繫いで居りましたは、皆さん方のお蔭故、まことに有難うござります。
ト甚兵衛卯之助も共に皆々へ禮を言ふ。
佐次　いつも區務所で自慢をするが、己が支配の店子位親切な者の居る所はない。其のくせ殘らず貧乏人、先づ紙屑屋に甘酒屋、羅宇のすげ替へに煮込のおでん、竈直しに下駄の齒入、照降なしの生業で、其内での上等は瓦斯燈を附ける人足に、假名讀新聞の配達人、みんな堅氣な者ばかり、斯ういふ堅氣な店子を持つは、實に差配人の仕合せだから、此の頃に强飯でも長家へ配らうと思つ

て居るのだ。
お鹿　お丶お強飯といへば、今し方隣のお寺へ來た葬式、大そうお強飯が殘つたので、わたしらも貰つたから卯之ちやん一つ上げませう。
ト懷から强飯の皮包を出し、卯之助の前へ出す。
卯之　これは有難うござります。
お熊　是はしたりお鹿さん、今日は善吉さんがお赦になつて、目出度い所へ葬式のお強飯を上げては、緣起が惡い。
お鹿　何の惡いことがあるものかね、どうで一度は死ぬ體、吳れるものならお強飯でも、何でも貰ふが世帶の爲め、何とさうぢやござりませんか。
佐次　お丶、さうだ〳〵、開化の世界にそんな事を氣に掛ける者があるものか、餘計にあるなら役得に己も一つ貰はうか。
お鹿　さあ〳〵一つ上げませう。
ト又懷から出して佐次郎兵衛にやる、合方きつぱりとなり、下手より善吉やつし裝にて出來り、
善吉　親父さま、今歸りました。
ト内へはひる。
甚兵　お丶善吉、歸つたか。

善吉　これは御差配人の佐次郎兵衛樣に、お長屋のおかみさん達、長々お世話になりまして、有難うござりました。只今御銘々の家へ上り、お禮を申しました。
佐次　何の改めて、禮などに家へ來るには及ばぬのに。
善吉　先刻お目にはかゝりましたが、改めてお家へお禮に上らなくては濟みませぬ。
佐次　ときに善吉殿、お前が歸つたら話さうと、思つて歸るを待つて居ました。
善吉　何のお話しでござりまする。
佐次　善吉殿に懲役の難儀をさせた因業者、あの安達屋の喜兵衛めが、時ならぬ鰒を喰つて昨日ころりと死んでしまつた。
善吉　え、すりや、喜兵衛殿は、鰒を喰つて昨日死なれましたとか。
甚兵　それは氣の毒なことをしましたな。
お鹿　何の氣の毒なことがござりませう、親孝行な善吉さんを酷い目に合はしたからは、
お熊　報いがなくてはなりませぬ。
佐次　何でも人は正直に、心を持たねばいけませぬ、今日葬式だといふことだが、不斷憎まれて居るせゐか、さつ

ばり人が出なんださうだ。
お鹿　寺は何處でござりました。
佐次　慥か寺は法善寺だ。
お鹿　それではさつき貰つたのは、あの安達屋の强飯か。
佐次　鬼の所の强飯なら、是はそつちへ返します。
ト皮包を返す。
お熊　おゝ、わたしらも喰べるは厭だ。
お鹿　犬にやつてしまひませう。
ト　お鹿皮包を殘らず門口へ捨る。
佐次　喜兵衞が死んだことを言へば、最早己も用はない。
お鹿　どれ、わたしらも家へ行つて、
お熊　夜食の支度を致しませう。
佐次　長屋の衆が歸るなら、わしも其處迄一緒に行かう。
ト立上る。
善吉　まあ宜しいではござりませぬか。
佐次　又明日話しに來ませう。
ト四ツ竹節にて、佐次郎兵衞先にお鹿お熊下手へはひる、時の鐘になり、
善吉　雨氣のせゐか今の間に、大そう暗くなりました、どれ行燈を點けませうか。

ト下手より破れたる古行燈を出す。
甚兵　あゝ、油がたしか無かつたッけ。
卯之　わたしが買つて來ませうか。
甚兵　おゝ一合買つて來てくりやれ。
ト　懷から、財布を出し、中より小錢を出して算へ、
こりや一合には二十足らぬ、五勺買つて來てくりやれ。
卯之　いえ、わたしが持つてをりますから、二十足しておきませう。
甚兵　それでは二十貸してくりやれ。
ト卯之助千代紙で張つた小箱より巾着を出し、此中より赤い紙の付きし箔置の錢を二文出すを見て、
善吉　其の錢は、何の錢だ。
卯之　こりやお稻荷樣の棟上の時、拾つたお錢でございます。
甚兵　切角そなたがのけて置いたに。
卯之　いえ、遣ふ爲のお錢故、何の構ひがございませう。
甚兵　そんなら貸しておいてくれ。
卯之　どれ、行つて參りませう。
ト四ツ竹節にて卯之助瀬戸物の油差を持ち花道へはひる。善吉門口へ來り、跡を見送り、不便だといふ思入、

・時の鐘跳への合方になり、元の所へ來り、

善吉　扨親。樣、此の樣に早く赦免になりましたも、悴が孝心二つには虎藏殿が善心に立返つたのが廉になり、重右衛門殿の願ひ立てゝ思ひがけなく赦免になつたは、此上もないお上のお慈悲、こんな有難い事はござりませぬ、是から生業精出して少しはお樂をさせます心、懲役中は親父樣へ悴がお世話をお願ひ申し、思はぬ御苦勞掛けました。

甚兵　其の言譯を言はれては、面目なくて我子でも、おりや顏が上げられぬ。其の懲役になつたのも、元はと言へば此の己が不圖した心の迷ひから、小紋小袖を盜みし故、今は裏家の住居なれど、元は家藏所持なせし數代續きし藤住の苗字を穢した其上に、そなたの體へ惡名付け、先祖へ對して濟まぬ故、疾うから死なうと思うて居たれど孫が難儀を思ひやり、惜しからざりし命をば今日迄存命へ居ましたが、赦免になつてそなたが歸れば、明日からは居ても居なくても障りにならぬ私が體、安達屋殿が鰒を喰ひ死んだといふは羨しい、早う私も死にたいわいの。

善吉　親子の中に何の義理、死なうなどゝいふ樣なつまらぬ事をおつしやりますな。先達も申す通り着替一枚着せられぬ働のないわたくし故、孫を不便と思召し、ついあの樣な道ならぬ盜みをあなたがなされたも、此の善吉が皆科故、申譯にはわたくしが先へ死なねばなりませぬが、あなたへ御苦勞掛けますのみか、悴に難儀をさせねばなりませぬ故、辛抱して生存へ居りまする、どうぞあなたも私や孫を不便と思召し、必ず死なうなどゝいふ心をお出し下さりますな。人は七轉八起とやら、今日斯樣に困りましても、明日どんな運が向き如何なる身分になりませうか、人の一生は知れませぬ。其の時千萬悔んでも死んだ跡では仕方がない。惡い後は善いものと、世の諺にも申しますれば、是より惡くなりやうのござりませねば段々と、よくなる小口へ向ひませうから、是から死に身に稼ぎまして、せめて五年のお樂をば、あなたへおさせ申したいから、どうぞ氣長に親父樣、お待ちなされて下さりませ。

甚兵　それを思うて二月越し、生き存へて己も居た、實のことは幾度か夜半に起きてこつそりと梁に繩を掛けたれど、あの卯之助が目ざとくて目を覺す故死ぬことならず、井戸へ身を投げようと思つたこともあつたれど、一方な

らず、世話になる長屋の衆が明る日から水に困るが氣の毒故、つい死におくれて居た替り、目出度くそなたに逢はれたわいの。

善吉　それ御覽じませ、死んでしまへば再びお目にかゝられませぬ、今にも此の身の運が向き、立派な暮しになつた時、あなたにお樂がさせたくても、位牌となつては仕方がない、假令千僧萬僧の供養をなすとも入佛事、くどいやうだが親父樣、お樂をおさせ申す迄生き存へて下さりませ。

甚兵　それ程迄におれがこと思うてくれるそなたの孝行、幾ら死にたく思つても、義理にも止まらにやならぬわい。

善吉　すりや思ひとまつて下さりますか、えゝ有難うござりまする。

ト兩人宜しく思入、合方きつぱりとなり、花道より以前の卯之助、油差を持ち出來り、直に舞臺へ來て内へはひり、

卯之　先の油屋へ行つたので、大きに遲くなりました。

善吉　話に實が入りうつかりと、いつの間にか暗くなつた、どれ灯りを付けませう。

ト行燈の抽斗を明けて、

親父樣附木はござりませぬか。

甚兵　今朝みんな遣つてしまつた。

卯之　いえ、附木は爰にござります。

ト懷から三枚ばかり結へしを出す。

善吉　それではそちが買つて來たか。

卯之　いえ／＼此の先の油屋では附木をお負に呉れますから、其處迄行つて買つて來ました。

善吉　おゝそれは出來した、よく行つて來た。

甚兵　なか／＼大人も及ばぬわい。

卯之　祖父さん、油が二十下りましたから、棟上の此のお錢は、遣はずにしまひました。

ト此内善吉行燈を點ける。

甚兵　大事にそなたが持つて居たを、油の足に遣はすは、可愛さうだと思つて居たが。

善吉　二十下つて其の錢を持つて歸るは幸先よし、是から稼いだことならば、必ず運が向きませう。

甚兵　とはいへ油を買ふにさへ、二十の足しに困る程、

善吉　貧に迫つて卯之助が、貯へ置きし棟上の、

甚兵　遣ふも惜しき箔錢も、

卯之　思はぬ油の直が下り、

善吉　再びかへる運あらば、
甚兵　いつか手に入る繪圖面の、
善吉　家藏立てる時來り、
卯之　此の箔錢を蒔くやうに、
甚兵　棒程願つて針程も、
善吉　叶ふ時節を親父樣。
甚兵　悴。
善吉　お待ちなされて、
ト明けて置いた行燈の蓋をしめるを、道具替りの知せ、下さりませ。
ト時の鐘合方にて、兩人宜しく道具廻る。

（法善寺墓所の場）――本舞臺三間の間前の屋體の後ろ瓦を載せし椛屋根古びたるしたみの板羽目、此前に井戸、後ろに二段の臺に塞手摘を載せ、上の方玉椿の生垣、丸物種々の石塔卒塔婆を宜しく飾り、下の方前の二階家殘り、井戸の脇に柳の立木、霞付の月をおろし、總て寺院墓所の體、時の鐘にて道具留ると下の二階にて、

口上　東西々々此の所梅川忠兵衞道行戀の三度笠、相勤めまする太夫常磐津――三味線――、いよ〳〵二の口村の段初まり左樣。

ト しらせに付き屋體の伊豫簾を捲上げる、爰に常磐津連中羽織袴にて住ひ、直に淨瑠璃になる。

淨るり　〽落人の爲かや今は冬枯れて、芒尾花はなけれども、世を忍ぶ身の後や前人目を包む頰冠り、隱せど色香梅川が馴れぬ旅路を忠兵衞が、いたはる身さへ雪風に、凍える手先懷へ溫められつあたゝめつ、石原道をはかどらぬ。

ト此內本釣鐘を打込み、花道より以前の半七頰冠り尻はしをり、以前のお梅手拭を吹流しに冠りて出來り、後前へ思入宜しくあつて、

半七　知らぬことゝはいひながら、假初ならぬ三歲越し、枕交せし二人が中、實の妹と知つたる上は、最早生きては居られぬゆゑ。
お梅　書置殘し大和屋の裏からそつと拔出し、追手の掛らぬ其內と、心急かるゝ夜の道、たどり〳〵て行く先は。
半七　そなたの菩提所法善寺。
お梅　其の墓原で死ぬならば。
半七　跡をよしなに弔ひくれん。

〽身の繰言は愚癡なれど、大恩受けし養子親。
半右衞門樣へ一日も孝行らしきこともなく、
〽御苦勞掛けし其上に、明日の嘆きの數々は、解くにとかれぬ三度荷の重き不孝の罪科と、かこち涙に目もうるむ。
ト此內半七宜しく振あつて、
〽顏つれ〴〵と打守り、それ其の樣に言はんす程、此の梅川が身の辛さ、
お梅　お前を實の兄さんと、知らざる故に惚れこんで、
〽末は女夫と言交し、今のお前の憂き難儀、堪忍してとばかりにて、跡は涙の村時雨。
ト此內お梅振あつて、
〽裾にやつるゝ小笹原、行きなやみたる足曳の、大和は爰ぞ故鄕の、二の口村にぞ着きにける。
ト半七お梅宜しく振あつて舞臺へ來り、
半八　いかなる過去の因果にや、凡三千五百萬の數ある人の其中にて、
お梅　現在實の同胞が、廻り〳〵て二世をかけ、わりなき契り結びしは、
半七　日頃そなたが信心なす、神佛にも見放され、
お梅　命捨てねばならぬ仕儀、
半七　あの淨瑠璃にもある通り、
お梅　死ぬるとも故鄕の土。
半七　さうして親父の墓といふは。
お梅　此の石塔でござんすわいな。
〽產みの母の墓所へ一緒に埋められ、そなたにも嫁姑と引合せ、
ト半七月あかりに墓の戒名を見る思入、お梅は愁ひの思入にて泣くを、
半七　よしなき事をいふ暇に、
お梅　心は急けど此世の別れ、
半七　せめて名殘の、
兩人　水杯。
〽それは嬉しうござんせう、さりながら、私が父さん母さんは、京の六條の珠數屋町、定めて此間は詮議にあうて居さんせう、母さんは目まひ持、もしもの事はあるまいかと、我身の上より案じられ、また一度京の二親に一目逢うて死にたいと、又も涙に咽び居る。
ト此內半七墓手桶を下げ、井戸端へ行き釣瓶にて本水を汲み、手桶の中を流し、又水を汲む、お梅茶碗を搜

す思入にて、あちこち見廻し上手よりひゞ燒の水向茶碗を持來り、懷紙にて是を拭ひ、兩人宜しく下に居て、半七茶碗を取上げお梅柄杓にて水を汲み、是を呑みお梅へさし、水を汲んでやる、お梅是を呑み咽る、半七介抱なし、文句に拘らず節に合せ、こなし宜しくあつて、

〽忠兵衞遙の野道を見やり、

お梅　もし兄さん、そこに見ゆる其の家はお前や私と從弟同士の善吉さんの家でござんす。

半七　おゝ、其の以前神奈川の我家の所で福住とて、人に知られし米問屋、そなたが從弟とあるからは我にも同じ從弟同士、

お梅　此の世の別れあの窓から、よそながら伯父さんに、暇乞がしたうござんす。

半七　明日は冥土におもむけば、

お梅　今夜が顏の見納め故、

半七　おれも共々、

お梅　餘所ながら、

半七　お梅來やれ。

〽身のしがい暫し隱れ家へ、忍んでこそは、

ト兩人窓の方へ思入、時の鐘、三重、知らせなしに道具廻る。

(元の善吉宅の場)——本舞臺元の世話場の道具、よき所に二枚折の屏風を立て、此内に蒲團を敷き掻卷をかけ、甚兵衞卯之助を抱いて寢て居る、枕頭に行燈、土の火鉢へ土瓶を掛け有り、宜しく三重にて道具留る。

〽大阪の義理と故鄕の恩愛の道は二つにわかれども、血筋ばかりは一筋に、道場參りの歸り足、

ト時の鐘、奧より善吉出來り、

善吉　今日は表のお師匠さんの、四季の溫習で賑やかだ、今語るのは梅川忠兵衞、あの面白い淨瑠璃も苦勞があつては耳へは入らぬ。

〽身を知る雨の小止みなく、野風に送る畑道、

ト善吉屏風の內を見て、

親父樣も卯之助も、是迄長の苦勞にて體の勞れしことなるか、枕に就けば高鼾、

ト此內風の音、行燈をかき立てようと蓋を明ける、風の音烈しく行燈消える。

〽南無三、風であかしを消した、燧打箱は何處にあるか火鉢に火種があればよいが。

〽孫右衞門は老の足歩むとすれどとぼ〳〵と、野口の溝の薄氷辷るを止る高足駄、鼻緒は切れて横ざまにどうと轉べば、忠兵衞是は南無三と跪けども出られぬ身、梅川あわて走り出で抱き起しつ裾絞り、

ト善吉暗がりを探り、足にて捜すこなし、火鉢に躓きばつたりと轉ぶ。此の時屏風の蔭より甚兵衞額を出し是を窺ふ。「梅川あわて走り出で」といふ文句にて善吉起上り膝を摩り、「抱き起しつ裾絞り」といふ文句の内火鉢に殘る火にて付木を點け行燈へともす、是にて甚兵衞屏風の蔭へはひる。

〽のべ取出す其手許、孫右衞門不思議さうに、

ト善吉屏風の内を覗き、うなづきて前へ出で、合方になり、

虎藏殿や重右衞門殿の、厚き情に思はずもいまだ半途にならぬに、お上のお慈悲で御免を蒙り、家へ歸つて親子三人目出度く顔を合せたは、此上もない仕合せながら纔二十の油の足しさへ困る程故明日から、紙屑買ひに出ようにも、元手の錢の當もなし、

〽梅川いとゞ悲しさの、涙は胸にあまれども、

ト善吉情ないといふ思入、

從從同士故朝日山へ話しをしたら派手な稼業、假令貯ないにもせよ人の難儀を見捨てぬ氣性、脇で借りても元手位は、直にも貸してくれようが、親父樣の話に聞けば妹の事で金を遣ひ、表は飾つて居るけれど、都合が惡いといふこと故、其處へ言ふのも心なし、殊には所詮一圓や二圓位の元手では、大した物も買はれねば、儲もやはりすくない故、四五日雨に降られなば、忽ち其の日の米薪となつてしまへば又直に、元手に困り親父樣や、悴を育むことが出來ぬ。

〽お年寄つた舅御樣の伏しなやみの抱かゝへ、孝行は嫁の役、

ト善吉屏風の内へ思入あつて、

さすれば死ぬより外はないが、わしが死んだら親父樣は、直に其の場で死なつしやりませう。

〽父御によう似た親父樣の、形見に殘る卯之助が、便りない身に淵川へ身でも投げて死ぬ時は、數代續きし福住の血筋もつひに絕え果てゝ、御先祖樣へ濟まぬ仕儀。

〽塵紙袖に押包む涙にそれと知られけり。
ト塵鼻紙を出し、涙を拭ひ、鼻をかみ思入あつて、
とはいへ、僅に十圓も金がなければ取續がれず、我家藏を賣りたる池田の家は繁昌なし、巨萬の金があるとやら。
〽世の譬にも言ふ通り、盜みする子は憎らなうて、繩掛ける人が恨めしいとは此の事よ。
ト池田に金のあるを羨む思入あつて、
人の富貴を羨むは、貧する者の常なれど、巨萬の金のある家では、ほんの端金の十圓なれど、二十の錢に困る身は力づくにも智慧づくにも、才覺ならぬといふことは、如何なる此の身の因果にて、斯く迄金に憎まれしか、愚癡に迫れば死ぬよりか、外に思案の仕樣もない。
〽お救ひなされて下されと、拜み願ふは今參る、如來樣御開山佛に嘘がつかれうかと、どうと伏せば梅川も、わつと聲を上げ、忠兵衛は窓の內手先を出して伏し拜み、身を揉み歎くぞ道理なる。
ト此內善吉宜しく思入、「忠兵衛は窓の內」といふ件甚兵衛、卯之助屛風より半身出し、愁ひの思入あつて、文句の切にて前へ出て、
甚兵　これ善吉、樣子は屛風の小蔭にて、寐た裝をして殘らず聞いた。
善吉　すりや親父樣には、一部始終を。
甚兵　かゝる難儀を掛けるのも、役に立たざる此の己や。
卯之　足手纒のわたくしが。
甚兵　生きて居る故苦勞をさせれば、少しは樂になるやうに、孫を殺して己が死ぬ。
ト甚兵衛卯之助を捉へ、出刃庖刀で殺さうとする、善吉留めて、
善吉　是はしたり親父樣、早まつたことなされますな。
甚兵　いや〳〵留めるな、放してくれ、死ぬる覺悟で庖刀借り、そちが今方湯へ行つた後で孫にも言ひ聞せ、
卯之　死ぬのを待つて居りまする、
善吉　えゝ、そち迄そんなことを言つて、己に苦勞をまさせるか。
ときつと言ふ。
〽憎いやつとは思へども、可愛うござると泣沈み、分けたる血筋ぞ哀れなる。
ト甚兵衛死なうとする、善吉庖刀を捉へ、引張の見得にて、知らせなしに道具廻る。

半七　（墓所の場）――本舞臺元の墓原の道具、爰に半七へ
お梅縋り、泣き居る見得にて道具留る。
半七　夜は墓場へ來るものなく、案じることはなけれども、
お梅　ひよつとお寺の男衆が、
半七　爰へ來たらば見咎めん、
お梅　ほんにわたしは此のなりゆゑ。
〽大阪を立退いて、わたしの姿が目に立てば、借り駕籠
に日を送り、奈良の旅籠屋、三輪の茶屋、五日三日夜を
明し、二十日あまりに四十兩遣ひ果して二分殘る、金故
大事の忠兵衛さん科人にしたもわたしから、
ト此内半七早く死なうといふ思入にて、傍にある明輿
の上にある三布の白布を取り、幸ひといふ思入にて、
舞臺へ敷き、樒をとつて地へさす思入にて舞臺へさし、お
懷から匕首を出し、是へ水をかけ、手拭で拭ふ、お
梅は我墓へ茶碗へ水を入れて上げ、樒の葉で水向をな
し、手を合せ拜み、半七も共々拜み、
半七　親とはいへど母樣に、名乘り合はずに先立ちます、
お梅　不孝な者ゆゑわたし等が、嘸かし憎うござんせうが。
〽嘸憎からうお腹もたとが、因果づくぢやと諦めて、お
許しなされて下さりませ。

ト兩人宜しくあつて、
半七　何時迄言つても名殘は盡きぬ、人の目つまにかゝら
ぬ内。
お梅　早う殺して下さんせ、
ト半七お梅の胸を取り、
半七　むゝ、南無阿彌陀佛。
〽たつ梅川を押しとゞめ、
ト半七お梅へ突立てようとする。此の時上手より浦右
衛門走り出で、半七を留め、
浦右　死ぬに及ばぬ二人共、急く所ぢやない、まあ〳〵待
つた。
半七　いや死なねばならぬ其譯は、最前送りし書置に、
お梅　詳しく書いて上げましたが、あれをば讀んで下さん
したか。
浦右　其の書置を見た故に、二人に犬死さすまいと、行方
を方々尋ねたのだ。
半七　合點の行かぬ今の詞。
お梅　二人に犬死させまいとは。
半七　そりやまあ、どういふ、
兩人　譯なるか。

ト此の時母おくら上手へ出て、
くら　譯はわたしが、言ひませう。
半七　思ひがけない、
お梅　お前は母さん、
くら　元我夫は赤坂で、道具屋渡世をして居た時分、兄が生れて宮詣りに連れて行つた氷川の社、鳥居前で思はずも其の印籠を拾ひし故、全く神のお授けと五つの祝ひに提げさせたが、其後二人の子が出來て、三つに分けて一重つゝ其の身の守へ入置いて持たして置いたばつかりに此の間違ひが出來たのぢや。
浦右　我弟は四つの折、勾引されて行方しれず、死んだとばかり思ひましたが、此の印籠があるからは、池田のお家へ拾はれて人となつたる半七どの、證據は二人が持つて居る其の印籠の一重は、即ちわしが持つて居ます。
ト懐より袱紗包みの一重を出して見せる。
お梅　其の印籠の末の重、わたしの守にありながら、實の妹でないといふは。
くら　此の半七が勾引にあうた其の時臨月故、常に替つて產が重く、藁の上にて死んだ故、泣の涙の其の折に、隣の家にも產があつたが、育てかねると聞いたを幸ひ、世間へ知らさず貰ひ受け、我子の積りで育てし故、やはり守へ印籠は入れてあれども隣の娘、同胞にてはあらざるぞ。
浦右　證據は其の折取交せし、年限立ちし養女證文。
ト懐から證文を出し開き見せる。
くら　其の時死んだ實の娘は、此の過去帳に記しある、水草童女がそれぢやわいの。
ト懐から過去帳を出し見せる。
半七　そんならお梅は半七が、實の妹でなかつたか。
浦右　親は隣の伊勢屋惣八、いまだに家は榮えて居ます。
お梅　それではわたし等二人は、
半七　同胞にてはあらざりしか。
兩人　ちえゝ有難い。
ト兩人手を合せて拜む。
浦右　思へば際どい土俵際、二人が命を取留めたは、
半七　最前恨みし神佛の、
お梅　是も偏に御利益故。
浦右　いや、あぶない角力であつたよな。
〽子故の闇の目無鳥、長き親子の別れには、安方ならで安からぬ心殘して、

ト半七お梅立上り、皆々引張り宜しく、三重にて此道具廻ろ。

(善吉宅の場)――本舞臺元の世話場、善吉甚兵衞を留めて居ろ、卯之助側に氣を揉み居ろ、此の見得誂へ早めたる合方にて道具留ろ。

善吉　そんならあなたはどうあつても、命を捨てるとおつしやりますか。

甚兵　所詮生きて居た所が、金がなければ一生涯、人らしき身になられねば、

卯之　わたしも共に祖父さんと、

甚兵　死ぬ覺悟をばしたからは、どうぞ留めずに置いてくれ。

善吉　これほどまでにわたくしが、金は世界の湧物故、時節をお待ち下されと事譯言うてお留め申すになぜ留まつては下さりませぬ。

ト早き合方ばた〳〵にて、下手より忠八「池田」といふ弓張提灯を持ち、後より手代二人白木の箱を細引で結へ、棒を通し、差荷ひに擔ぎ出來り、門口より、

忠八　善吉樣、お家でござりましたか。

善吉　や、お前方は池田の番頭どの、あわたゞしくござつたは何事でござりますな。

ト庖刀を隱す、忠八内へはひり、

忠八　今日藏の地形をなさんと、稻荷の宮のあつた所を、四五尺ばかり掘りましたら、斯樣な箱が出ましたが、主人が他行に歸る迄、其の儘にして置きましたが、只今歸りましたゆゑ、箱を開いて見ましたら、中にあつたは大判で、三千兩ござりました。

甚兵　すりや舊宅の乾にあつた、

善吉　稻荷の社のあつた所より、

忠八　出ました箱はお家のと、改め見れば蓋の裏に「金三千兩福住子孫へ讓る、三代目福住甚兵衞」とかやうに記してござりました。

ト箱の蓋の裏を見せる。

甚兵　すりや、三代目が此金を。

善吉　土中へ埋め置いたるか。

忠八　蓋が證據でござりますから、是をお返し申しまする。

ト兩人の前へ出す、

甚兵　え、すりや、三千兩の此の金を。

善吉　わたくし共へ下さりますとか。

忠八　慶長金故當今の、金に直さば何萬圓、是を資本になされたら、元のお見世になりませう。

ト善吉文庫より二幕目の繪圖を出し、

善吉　思へば此の程買つて來た、此の繪圖面が又再び、世に出る時節になりました。

甚兵　こりやまあ夢ではないかいの。

ト甚兵衞悦ぶ。此の時上手へ浦右衞門、半七、お梅、おくら出て、

浦右　樣子は聞いた、善吉殿。

半七　思ひがけない金を得て、

お梅　嘸お嬉しう。

四人　ござりませう。

善吉　おゝ、悦んで下さりませ。

忠八　まだお悦びば大旦那が、池田の家を二軒になし、半七樣にお梅樣、又わたくしとお嬢樣へ下さりますと仰しやりました。

善吉　ても結構なお捌きだ。

浦右　何から何迄。

皆々　目出度い〳〵。

ト皆々よろしく。頭取出て、

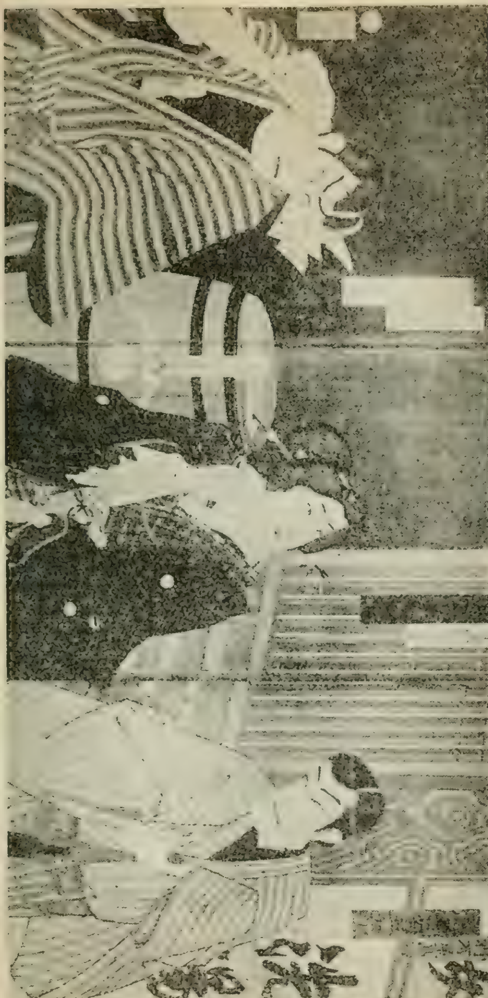
頭取　先づ今日はこれぎり。

ト目出度く打出し

勸善懲惡孝子譽（終り）

若葉の闇に奥山から西と東へ別れたる千太は親の世になきを白川宿で伯父に逢ひ聞て涙に袖濡す辨天お照が母親の無心に困る百圓を惠む替りに貰ひし指輪夫を證據に拔差のならぬ輝へ言掛れど瓦解以前に强談で人に知られし浪士故餘儀なく其場は物別れ扨島藏は霧深き旅路に幾夜明石潟三歳ぶりにて磯右衛門お濱にめぐり大津繪の心の鬼も忽に發起なせしは忰の不具惡の報いは颶風の難船憂事積る牛込に今は堅氣の酒屋店醬油を買ひし小娘から辛き浮世に淸兵衛が難儀を知つて百圓を貢いで歸る我家の門而も九月の約束に違れて來たる松島を連出す九段の招魂社頭身も及ばぬ明石が異見に小蔭に忍ぶ野州德まで改心なして浮雲の空もはれゆく望月が助力に千圓金ととのひ科を自訴なす大切まで夏より冬へつゞき狂言

島鵆月白浪



島衞月白浪

明石の島藏、松島千太――五幕

白川宿旅籠屋の場
同明神峠山越の場

序　幕

役名――士族望月輝、銀行手代濱崎千右衞門 實ハ 松島千太、人力車夫野州德、辻講釋古川辨山。旅藝者辨天お照、旅籠屋の女房おみち、お照の母猝金お市、探索方、道者、旅役者、其他。

白川宿奥州屋の場――本舞臺四間通しの屋體、上手二間常足の二重、揚緣付下手一間落間、正面奥州屋といふ紺の暖簾口、上手間半戸の戸棚、落間の所折廻し板羽目、上の方戸袋しつくひ塗りにて「御泊宿白川宿奥州屋」と記しあり、見附の柱に「御泊宿奥州屋」と書きし行燈を掛け、軒口に一新講の旗を立て下の方冠木門、見越しの松、すべて奥州街道白川宿旅籠屋の體、見世先の床几へ邊丹次は立役鈍四郎は女形の旅役者のこしらへにて、腰を掛け、太助、半次宿屋の若い者着流し駒下駄にて立掛り、二重におしの、おのぶ宿屋下女のこしらへ、燭臺の掃除をして居る、此見得米山甚句にて幕明く。

太助　もし、明神の夜芝居は大層はひるさうでござりますね。

邊丹　仕合せと初日から一ぱいでござります。

半次　こりやあ全く花形の、お前さん方が出るせゐだ。

鈍四　有難いことに、何處へ行つてもはひらないことはない。

邊丹　茲は二人共東京で、たゝき込んだ腕だから、

しの　おや／＼お前さん方は、東京でござりますか。

のぶ　私達は田舍廻りの役者衆かと思ひました。

邊丹　白川は開けた所と豫て話に聞いて居たが、私等を田舍役者と見る樣では開けないね。

鈍四　大方舞臺は見なさるまいが、名を聞いたばかりでも東京役者か田舍役者か知れさうなものだ。

太助　まだ番付を見なかつたが、額が出張つたお前さんは、

何といふ名でござります。
邊丹　たゞお前さんでいゝ事を、額が出張つてゐるだけ餘計なことだ。
太助　つい目に付いたから言ひましたが、お前さんは何といひます。
邊丹　額の出張つた私かえ。
しの　人のことよりお前さんが、出張つたといふくせに。
邊丹　うつかり是は卷込まれたのだ、私は市川左團次の弟子で、市川邊丹次といひます。
太助　成程名は體を顯はすと、へたん次はいゝ名だ。
半次　そちらの色の黒いお方は、
鈍四　私は岩井半四郎の弟子で、岩井鈍四郎といひます、
半次　誰が付けたか是もいゝ名だ、半四郎の弟子だといつては、それぢやあお前は、
鈍四　あい、娘形でござります。
半次　貉形とは珍らしい名だが、ハア顔が貉に似て居るからか。
鈍四　いえ、貉ではない娘形さ。
太助　貉といふのは無理はない、どうでお前方は旅稼ぎで、獸に違ひない。

しの　さうして、毎晩狂言が替るさうでござりますが、
のぶ　今夜は何をなさいます。
邊丹　御贔屓樣からお好みで、忠臣藏の五六七と三幕續けて致します。
鈍四　邊丹次さんが勘平で、私がおかるを致します。
太助　それぢやあ猪が出ますね。
邊丹　はい、五段目へ出ます。
半次　狸も出ますか。
鈍四　狸の出るのは六段目さ。
太助　豚も出ますか。
邊丹　何で豚が出るものか。
太助　さういふお前が東京の、奥山の豚によく顔が似てゐるからさ。
しの　それではお輕勘平は、
のぶ　豚と貉でござりますね。
太助　こりやあ犬のカメ芝居や、猿芝居より優しだらう。
邊丹　あんまり馬鹿にしなさんな。
鈍四　これでも役者一疋だよ。
太助　いや獸といはれたとて、腹を立つことはない、左團次だの半四郎だのと、虎の威をかる狐だもの。

兩人　なに、狐とは、

太助　東京役者といひなさるのは、人を化しなさるからさ

邊丹　こいつあ旅と知られたか。

鈍四　尻尾を出さない其内に。

邊丹　早く行つてシヤギらせよう。

太助　狸囃子をかえ。

鈍四　もういゝ加減にしておくれ、

邊丹　どれ、樂屋へ行くとしようか。

ト米山甚句にて兩人下手へはひる。

太助　彼奴等は旅役者で、下ッ腹に毛のない奴等だ。

半次　然し二人で燻し付け、たうとう尻尾を出さしてやつた。

しの　どんなことをするものだか、晝だと行つて見られるけれど、

のぶ　暮方から忙しいので、夜芝居では行かれない。

太助　今年は春の博覽會から日光參り、伊勢參り、大層田舍が出たではないか。

半次　それといふのも近年は、何處の田舍も豐年で、宿屋も道者が一番多い。

太助　噂をすれば影とやら、道者が一群やつて來た。

ト米山甚句になり、花道より東右衛門老けたる田舍道者の脚絆草鞋、二枚繼の蓙を引掛け、蝙蝠傘を持ち、陸兵衛・奥藏同じこしらへにて出來り花道にて、

東右　作右衛門が博覽會の歸りがけに泊つた時、大層手當がよかつたといふ、奥州屋といふは向うの家だ。

陸兵　旅籠代は世間並二十五錢取るさうだが、食物がよくて、夜具がよく、

奥藏　其上團扇を一本宛土產にくれるといふことだから、外の宿よりよつぽど得だ。

東右　少し泊るにやあ早いけれど、惡い所へ泊るより奥州屋へ泊らう。

陸兵　隨分今日は草臥たから、早泊りがようござらう。

奥藏　綺麗な内に湯へはひり、ゆつくり一ぱいやりませう。

ト甚句で本舞臺へ來る、太助半次立掛り、

太助　あなた方はお泊りでござりますか。

半次　一新講の奥州屋でござりまする。

東右　在所の者の指圖により、お前の所へ泊る積りだ。

兩人　それは有難うござりまする。

半次　さあ、是へお掛けなされませ。

しの　お荷物やお笠は、こちらへお出しなされませ。

ト此内拾ぜりふにて、三人腰を掛け半次すゝぎに盥を
持つて來ろ、おしの、おのぶは荷物、笠を片付けろ。
三人は草鞋を解き足を洗ふ。
のぶ　おかみさん、お泊りがござります。
ト奥にて
みち　あい〳〵。
ト奥よりおみち宿屋女房のこしらへにて出來り、
これは〳〵どなた様もお早いお着でござります。
東右　先達て村の者が、博覽會の歸りがけ、お前の所へ泊
つたところ、丁寧にしてくれられたから少し早くも泊れ
といふので、
陸兵　もう一宿行かれるのを、
與藏　お前のとこへ泊りました。
みち　それは御贔屓になされて下さいまして、有難うござ
りまする。あなた方はどちらでいらつしやいます。
東右　私等は奥州松島在だ。
みち　へい、松島のお方でござりますか、この三月から引
續き博覽會を御見物に、多くのお泊りがございましたが、
作右衛門様の御近所でござりまりますか。
東右　おゝ、其作右衛門の隣りでござります。

みち　左樣でござりましたか。
ト此内足を洗ひ上へ上ろ。
のぶ　お茶をお上りなされませう。
ト三人へ茶を出す、半次は脚袢草鞋を片付けろ。
陸兵　これ若い衆、脚絆の間違はぬ樣にして下さい。
與藏　ついでに草鞋も頼みますぞ。
半次　直に札を付けますから、決して間違ひは致しませぬ。
しの　お湯が宜しうござりますが、直におはひりなされま
すか。
のぶ　御膳を先へ召上りますか。
東右　どうで一杯やりますから、湯へ先に、
三人　はひりませう。
みち　それではお湯へ御案内申しや。
女雨　畏りました。
東右　どれ、草臥を休めようか。
女雨　さあ、入らつしやいまし。
ト米山甚句になり、東右衛門等兩人、おしの荷物を持
ち、おのぶ付いて暖簾口へはひろ。
みち　脚絆へ直に札を付けなよ。
太助　なに札を付けるには及びませぬ、三足共汚ない脚絆

だ。

半次　これよりきたない脚絆はないから、間違へた方が徳用だ。

みち　又そんなことをいふか、堅いが名代でお客様の絶間のない此方の内、假令脚絆一足でも間違ひがあつては家の疵、よく氣を付けて置いてくりや。

兩人　畏りました。

ト右の合方にて、下手より幸助菊藏羽織まち高袴半靴探索方のこしらへにて出來り、

菊藏　おかみさん、此間は。

みち　これは瀬栗さんに鳥方さん、何ぞお調べでござりますか。

幸助　ちつとお前に聞きたいことがある。

みち　旅人のことでござりますか。

ト兩人揚縁へ腰を掛け、

菊藏　十日程お前の所に、天氣のいゝに逗留して、土地の藝者の辨天お照と、

幸助　毎日車へ相乘りで、爰ら近所を遊んで歩く東京の客は何者だ。

みち　あのお方は東京の、銀行の御手代衆だと申すことでござります。

菊藏　宿帳をお見せなさい。

みち　はい、畏りました。

ト宿帳を出して見て、

これに名前がござります。

ト菊藏見て、

菊藏　「東京日本橋區南茅場町五十番地、濱崎千右衛門」

幸助　こりやあお前の所で馴染の客かえ。

みち　いえ、お馴染ではござりませぬ。

太助　あのお客は人力車の、野州徳が連れて參つた、

半助　初めてのお客でござります。

菊藏　いつたい何處へ行く旅人だね。

みち　松島が生れ故郷で、親を尋ねて參るとやら申すことでござります。

菊藏　遊山旅か知らねえが、十日間の長逗留、名所古跡を見るでもなく、

幸助　藝者を連れて遊び歩き荒ッぽい遣ひ振だから、此間から目を付けて居たのだ。

みち　さうおつしやれば銀行のお手代衆には、そぐはぬ物言ひ、漢語交りの其内に、勇みな詞がござります。

太助　めつたなことは言はれないが、
半次　どろ楽かも知れませぬ。
菊藏　何ぞ怪しいことがあつたら、そつと知らしておくんなせえ。
みち　畏まりました。
菊藏　決して迷惑は掛けねえから、隱しだてをしなさんな。
幸助　後で露顯する日には、叱られた上何がしか、罰金を取られるぜ。
みち　決して隱しは、
三人　致しませぬ。
菊藏　それぢやあおかみさん、頼みましたよ。
みち　畏まりました。
幸助　どれ、料理茶屋を、
兩人　探つて來よう。
　　ト右の合方にて下手へはひる。
太助　どうも怪しいと思つたが、探索方の目にとまり、
半次　内々調べになつてゐるとは、誰の目も違はぬものだ。
　　ト花道より千右衞門麥藁のシヤツポ單羽織、袷着流し駒下駄、お照縮緬の着付、宿場藝者のこしらへにて出來り、あとより下總松、半纏半股引き、人力車夫のこしらへ、肩へケツトを掛け、二人乘の車を引出て來り、
千右　車も一日乘續けは却つて腰が痛くなり、歩く方がよツぽど樂だ。
お照　そりやあ私が大きいから、窮屈なせゐでございませう。
松　明日は相乘でなく、一人乘りで一人宛お乘りなさいませ。
千右　程の惡いことをいふぢやあねえか、東京にも二人とない辨天お照と名の高い、白川一の藝者衆と相乘がしたいばかりに、腰の痛えを我慢するのだ。
お照　エ、モ憎らしい、そんなことを言つて。
　　ト右の騷ぎ唄にて三人舞臺へ來る。
太助　これは旦那、お歸りなされませ。
千右　車を下りて歩いたので、思ひの外遲くなつた。
次右　いえ、遲いことはございませぬ。
みち　今日はどちらへおいでなされました。
千右　何處といふ當はなく、松公が案内者で、方々名所を

見て歩き、今夜は溫泉へ一泊しようと思つたが、何處へ泊つてもこつち位泊り心のいゝ内はねえ。

みち　それは有難うござりまする。

松　さつき左樣おつしやりましたが、夜芝居へおいでなされますか。

千右　どんな役者が出て居るか、話の種に行つて見よう。

お照　上手な役者が居るといふから、一幕見たうござりますね。

太助　そりやあおよしなされませ、中々以てあなた方の御覽なさる芝居ぢやござりませぬ。

半次　先刻も見世へ參りましたが、市川邊丹次に岩井鈍四郎、下手らしい役者でござります。

千右　いや生中の役者より、妙な方がをかしくつていゝ。

お照　私も行つて見たいから、松さん晩に來ておくれよ。

松　畏りましてござります、今日は旦那の御贔屓の、德が用事がござりまして、替りにわたくしが上りましたが、嘸お乘りにくうござりましたらう。

千右　少しも乘りにくいことはない。

松　今晩芝居へいらつしやいますには、德がお供を致します。

千右　お前も一緒に來てくんねえ。

松　へい、後押に上りまず。

千右　それ迄行つて一ぺいやんねえ。

ト紙入から小札を出してやる。

松　これは有難うござります。お照さん、旦那へ宜しく。

ト辭儀をする。

太助　松公しつかり呑めるな。

松　いえ、晩の仕事がござりますから、一合やつておきます。

ト下手へ車を引いてはひる。

みち　旦那、お湯をおめしなさいませんか。

千右　今溫泉へはひつて來たから、今夜は湯は止しにしませう。

太助　左樣なれば、

兩人　お二階へ。

千右　いや、爰で一ぷくやりませう。

ト千右衞門お照床几へ腰を掛ける。又元の米山甚句になり、花道よりお市色氣のある婆アのこしらへ、草履がけ、辨山半合羽草履にてカバンを提げ、兩人共蝙蝠

傘を杖に突出來り、花道にて、

辨山　おつかア、奥州屋といふは向うだぜ。

お市　爰の宿屋に逗留して居る、銀行の手代衆に毎日呼ばれて出て居るさうだ。

辨山　何にしろ銀行の手代といやあ、金があらう。

お市　無心といふにやあいゝ幸先だ。

辨山　おつかァお照は向うの床几に居るぜ。

お市　おゝ違えねえ、あれは娘だ。

ト兩人舞臺へ來り、

お照、此間は。

お照　おやおつかさん、よくおいでだね。

お市　あんまりよくも來ねえのさ、五十里ある白川迄、わざわざ來るからは、どうでろくなことではねえ。

辨山　お照さん、久しくお目にかゝりませぬ。

お照　誰かと思つたら辨山さん、お前一緒においでかえ。

辨山　席の都合で此間から遊んでをります所故、座敷でも出來ようかと、おつかさんのお供をしてこちらへ一緒に參りました。

太助　まあ是へお掛けなされませ。

ト床几を出す。

お市　是は有難うござります。

ト捨ぜりふにてお市、辨山床几へ腰を掛ける、千右衛門は脇を向いて煙草をのみゐる。

お照　おつかさん、何の用で出ておいでだえ。

お市　用といふのは外でもねえ、鬱陶しいといふだらうが、又金を借りに來たのだ。

お照　此間郵便で持たして上げた十圓は、お前の方へ屆いたらうね。

お市　そりやあ郵便だから、二三日目に間違ひなく屆いたが、此節諸式が高いので、今の夷の十圓は大黒銀のあつた時分の一兩にかならないから、直になくなつてしまふわな。

お照　さうしてお前内へおいでか。

お市　今泉屋へいつたらば、お客樣で此方の内に、出て居ると聞いたから、

辨山　お前を尋ねて爰へ來たのだ。

みち　もしお照さん、何の御用か知らないが、爰は人が來ますから、二階へおいでなさいましな。

お照　はい、有難うござります。

トお市、辨山思入あつて、

お市　どうで今夜は此宿へ泊らうと思つた所、爰のお家が綺麗だから、爰へ泊るとしようかね。

辨山　私もさう思つて居た所だ。

太助　左樣なら、お泊りなさいますか。

お市　今夜はお世話になりませう。

太助　旦那、あなたもお二階へいらつしやいまし。

千右　暮れると芝居へ出掛けるから、今の內一杯やらうか。

お照　お相手を致しませう。

　ト　お市お照の袖を引き、

お市　お照あなたは。

　ト　思入、

お照　あい、銀行へお勤めなさる、濱崎樣とおつしやるお方で、御贔屓になりますから、ちよつとお禮を申してくれ。

お市　これはお初にお目に掛りますが、不束な娘をば御贔屓になされて下さりまして、有難うござります。

千右　此の子の話に聞いて居た、お母さんはお前かえ、幾つの時の子かしらぬが、大層お前は若いね。

お市　これは私が十八の時に產んだ子でござります。

千右　それぢやあお前のほんの子かえ。

太助　ほんの子ならば、鳶が鷹だ。

お市　何だとえ。

太助　いや、兎も角も旦那を初め、

半次　お二階へいらつしやいまし。

千右　それぢやあお照、

お照　おつかさんも御一緒に。

お市　どれ、御厄介に、

兩人　なりませう。

半次　さあいらつしやいまし。

　ト　宿場騷ぎになり、千右衞門、お照、お市、辨山、半次付いて暖簾口へはひる。太助傘を片附ける。

太助　お上さん今のお袋だといふ人は、一筋繩ではいけませんね。

みち　なか〳〵喰へさうもない婆アさんだが、一緒に來たのは何だらう。

太助　何でも講釋師か噺し家だが、私の鑑定では、あの婆アさんの情人だと思ひます。

みち　なるほど此方のいふ通り、大方そんなことであらうよ。

太助　それはさうと探索方の、頼んでいつた濱崎樣、
みち　どうも樣子がをかしいが、
太助　證據の上らぬ其内に、
みち　早く立つて、
　ト立上るを道具替りの知らせ、
下さればよいが。
　ト宿場騒ぎになり、心にかゝる思入宜しく道具廻る。

（二階の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面上手床の間、下手秋田蕗の襖、上下折廻し障子、下の方階子の上り口、すべて旅籠屋二階の體。爰にお市辨山、下手にお照住ひ、宿場騒ぎの合方にて道具留る。

お市　これお照、今度が無心の言ひじまひだが、百圓都合してくんねえな。
お照　此間郵便でわざ〳〵持たして上げたのを、何にお前しなすつたのだ。
お市　何にもしねえ朝夕の暮しに皆んな遣つたが、子に親が世話になるのは、當り前とはいひながら度々言ふのも氣の毒故、今度上野の山下へ大道講釋の席をこしらへ、辨山さんにたゝかして、おいらが木戸から中賣按摩、三人前も稼ぐ積りだ。
辨山　不圖した事からおつかアと、今では夫婦のやうになり、共稼ぎに稼いで居れど、人の持つて居る場所へ出ては長い錢も取れないが、自前稼ぎに骨ッきり晝夜を掛けて叩いたら、きつと儲かるに違ひない、其處で資本を拵へて、山下もよりへ席を建て、生涯樂にする積りだ。
お市　辨山さんと共稼ぎに稼いで苦勞はかけないから、是を無心の言納めと、思つて百圓貸してくんな。
お照　そりやアあんまり無理ぢやあないか。
お市　なに、無理とは。
　ト合方になり、
お照　これが東京の新橋か、柳橋に出て居たら、頼んで借りるお客もあれど、通り一遍の奥州街道、土地の人でも曖昧なことをしなけりや一圓でも呉れるお客はありやあしない、十圓お前に上げるのも並大抵なことぢやない、お氣の毒だがおつかさん、所詮都合が出來ないから、堪忍しておくんなさい。
お市　いや堪忍することは出來ねえ、忘れもしめえ六歳の時手前の親父にごねられて、跡は女の手一つ故困る中で藝事まで、仕込んで己が育つたのは、斯ういふ御難の其

の時に役に立てよう爲めばかり、藝者で金が出來ねえなら、娼妓になつて一年ばかり、稼いでくれりやあ出來る金だ。

辨山　旅の藝者は曖昧な、皆娼法をする中で、眞面目にするのは大きな損、其曖昧をすると思つて、おつかさんの頼みを聞き、娼妓になつてくんなせえ、それともそれが出來ないなら、お前を贔屓に逗留して居る、あの銀行の旦那殿へ、無心をいつたら出來ように。

お照　お金は持つて居なさるが、わづか十日ばかりのお馴染、そんな事が言はれるものかね。

お市　客へ無心が言はれずば、娼妓になつてこしらへて呉れ、

辨山　お前がウンと言ひなされば、宇都宮の貸座敷に私の懇意の者があれば、其處へ話を向けたらば、直に百圓前借で、右から左へ出來る金。

お市　否でも應でも手前の體で、百圓こせえて貰ひたい。

お照　是が初めてのことならば、丸々出來ずば半分でも、都合して上げようけれど、今度は貸して上げられない、路用位は上げようから、明日歸つて下さんせ。

お市　路用位な端金を、貰つて何で歸るものだ、親の爲めに娼妓になるのは世間に幾らもあることだ、厭と言やアこつちも意地づく、何でもかでも娼妓にして、百圓取らにやあ歸らねえ。

辨山　お前も厭ではあらうけれど、實は負債が多いので、裁判所や勸解へ出訴されて毎日出るが、其處はでもだが席上で、喋り付けてゐる辨山故、舌に任して言譯すれど、借りたものなら返せといふ此一言に限りでも出さうと思ふ大困難、お前が百圓出してくれねば、たつた一人のお袋が路頭に迷はにやならないから、ウンといつて娼妓になり、金を貸してくんなせえ。

ト　お照思入あつて、

お照　折角のお頼みだが、今日ばかりはおつかさん、お斷り申しますよ。

お市　なに、斷るとは。

お照　お前がほんとに身を持つて、席を出すといふことなら、出來ないながらも都合して、上げまいものではないけれど、辨山さんと二人して今日は芝居翌日は凉み、榮耀に遣ふ金の爲め、苦界へ此身を沈めるのは、わたしや厭でござります。

お市　厭とは何のことだ、言はしておけばい丶かと思つて

口幅ツてえことを言やあがるな、辨山さんを亭主に持つたも、手前の仕送りが足りねえからだ、五圓や十圓の端た金で芝居や花見に行かれるものか、よく考へて見やあがれ。

辨山　私だつて十九や二十の若い者といふではなし、互ひに頭の禿げた同士、斯うして夫婦になつたのも、言はゞ茶呑友達だ、なか／＼お前が送つた金で芝居や納涼に行く樣な、そんな浮いた仲ぢやあない。

お市　喰ふに困つて借りに來たが、どうでも金は出來ねえか。

お照　お氣の毒だが今度ばかりは。

辨山　それぢやあ出來ないといひなさるのか。

お照　どうぞ堪忍して下さいまし。

　ト　お市思入あつて、

お市　金が出來にやあ東京へ歸る事の出來ねえ體、身でも投げて死なにやあならねえ、迚も死ぬなら爰で死んで、お照に恥をかゝせてやらう。

　トお市手拭を首へまき、己が手に引張りアツといふ、辨山是を留め、

辨山　これおつかアあぶねえ、何をするのだ。

お市　首を締めて己ア死ぬのだ。

辨山　死ぬのは何時でも死なれるから、短氣なことをしなさんな。

お市　いゝや留めずに放して下せえ。

辨山　之が留めずに居られるものか。

　トお市首をしめようとするを、辨山留めること宜しく、

お照　何でお前は其樣に、早まつたことをしなさんす。

お市　誰しも惜しい命だけれど、死ぬと覺悟を極めたのは、手前が己を殺すのだ。

お照　私がお前を殺すとは。

お市　頼みを聞いてくれねえから、こんな不孝な奴はねえ。

　ト大きな聲をする。

辨山　これさ／＼、大きな聲をしなさんな。

お市　あゝ親殺しだ／＼。

　トわざとどたばた騷ぐ、是を辨山留める、お照も留めて、

お照　これかゝさん、何が恨みで此樣に私に恥をかゝせなさんす。

お市　金を貸してくれねえから、あゝ親殺しだ〳〵。
ト奥よりおみち、太助、半次出て、お市を留め、
みち　あもしお袋様、まあ〳〵お靜になされませ。
太助　親殺し〳〵と、大きな聲をなさいますが、
半次　お巡り樣のお耳へでも、はひつた日には大騷動。
お市　いや〳〵何でもかでもこゝで死ぬのだ、留めて下さるな。
みち　隣近所へ聞えましても、內の外聞になりますから、
太助　お靜になすつて、
三人　下さりませ。
お市　いや〳〵、何でも死ぬのだ〳〵。
みち　そんなに死ぬ〳〵とおつしやいますが、自分で首がしめられますか。
お市　え。
太助　締められるなら、己が手に、
半次　首を締めて御覽じませ。
お市　むゝ。
ト詰る。辨山思入あつて、
辨山　これ〳〵おつかア、自分で死なれぬこともないが、爰の內へ厄介をかけるのが氣の毒だ、死ぬのは止めにしたがよい。
お市　おゝさうだ〳〵、娘に恥はかゝせたいが、お上さんへ濟まないから、爰で死ぬのは止めにして、是から宇都宮へ連れて行つて、娼妓にせう。
辨山　それが何より上策だ。
お市　さあ、己と一緖にあゆびやあがれ。
トお市お照の手を取り引立てる、此時奥より以前の千右衞門出てお市を留め、
千右　樣子は奥で委しく聞いた、立騷がずと靜にしねえ。
お市　貴方がお留めなさるなら、無理にとは申しませぬが、親を蔑にしますから。
千右　定めて腹も立たうけれど、私がどうか揃かうから、まあ不承してくんなせえ。
辨山　折角旦那が立入つて、不承しろとおつしやるから、まアおつかあ靜にしねえ。
お市　靜にもしようけれど、金が出來ねえ其時は。
千右　そりやア心配しなさんな、金は己が出して遣る氣だ。
お市　え、それでは貴方が、
兩人　其の金を。

千右　後共言はず、それ百圓。

ト懷から十圓札で紙に包みし百圓を投出しやる、お市取上げ、

お市　それでは是を下さいますか。

辨山　是で命が助かります。

兩人　えゝ有難うございます。

ト頂く、お照思入あつて、

お照　それを貴方に出させては。

千右　はて、大した金といふぢやあなし、僅百圓ばかりの金、決して心配しなさんな。

お照　そりやさうでもございませうが、未だまあ纔十日ばかり、深いお馴染でもない事故。

千右　假令三日でも懇意になりやあ、己ア百年も馴染んだ氣だ、今此金を出さなけりやあ留めに入つた甲斐がないから、默つて己に出させなせえ。

お照　何とお禮を申さうか、有難うございます。

ト禮を言ふ、おみち不審に思ひ、

みち　田舍と違つて東京の、繁華な土地のお客樣、お馴染淺いお照さんへ百圓お上げなさるとは、

太助　多くのお金を取扱ふ。

半次　銀行勤めのお方故。

お市　何にしろよい旦那に、御贔屓になるはお照の仕合せ、就ては親の私迄、大仕合せでございます。

辨山　若し此金の出來ぬ時は、我持前の張扇で、叩き立てようと思つたが、旦那が綺麗なお捌きで、きざを言はずに歸られます。

千右　お前方も爰の內へ、今夜泊るとあるからは、後にゆつくり話しませう。

お市　何れお禮に改めて、

兩人　上りますでございます。

太助　いや、お二人樣は此間に、

半次　お湯へおはひりなさりませ。

お市　思はぬ汗をかきましたから、

辨山　どれ一ぱいはひりませうか。

太半　さあ、おいでなさいまし。

ト宿場騷ぎになり、お市、辨山、太助、半次、奧へはひる。跡千右衞門、お照おみち殘り、

みち　お照さん、よく旦那へお禮をお言ひよ。

お照　まことに貴方のお蔭故、危い難儀を脫れまして、有難うございます。

千右　なに、其の禮には及ばねえ、旅藝者には人のいゝお前が可愛さうだから、百圓出してやつたのだ。
お照　お馴染薄いお前様に、百圓といふ大金を、お氣の毒でござります。
千右　其日稼ぎの人ならば、百圓は大金だが、銀行などへ勤める者は、何十萬といふ金を取扱ふが生業故、百や二百は端金、決して心配しなさんな。然し氣の毒だと思ふなら、百圓替りにお前から貰ひたいものがある。
お照　え、百圓替りに貰ひたいものとは。
千右　そんなにびつくりしなさんな、望みといふはお前の掛けてる、其の指輪をおれにくんねえ。
お照　こんな粗末な指輪をば。
千右　たゞお前のを貰ひたいのだ。
お照　お望みならば上げませう。
　ト　お照指輪を抜いて千右衛門へ遣る。おみち思入あつて、
みち　是はどうか二番目の、筋になりさうでござりますな。
千右　そんな株は此方にないことだ。
お照　それはさうと三年あと迄、東京にをりましたが、旦那はどちらでござります。
千右　己等の内は茅場町だ。
お照　茅場町は藥師様の御近所でござりますか。
千右　直藥師の裏門前だ。
お照　おや、私もあすこにをりました。
千右　え。
お照　何番地でござります。
千右　慥四十六番地だ。
みち　それでは旦那宿帳と、
千右　なに、違やあしねえ筈だが。
　ト千右衛門困る思入、爰へ下手の障子を明け、以前の東右衛門、陸兵衛、奥藏出來り、座敷を間違へし思入にて、
東右　いや是は御免なさいまし、つい座敷を間違へました。
陸平　とんだ粗相を、
三人　しました。
みち　いえ、同じ間取でござりますから、御尤もでござります。
　ト東右衛門千右衛門を見て、

東右　や、其處に居るのは。
　ト千右衛門を見て、
千右　おゝ、お前は伯父御か。
東右　やれ、千太か、よく達者で居たな。
陸平　なに、千太といふは誰だえ。
東右　箕作の伜の千太よ。
陸平　立派な男になつたから、
與藏　途中で逢つても分らねえ。
お照　それでは旦那は皆さんと、
みち　御懇意でございますか。
千右　おゝ、みんな以前の馴染の衆だ。
みち　お馴染とございますなら、是へおいでなされませ。
　ト是にて三人捨ぜりふにてよき所へ住ひ、
千右　伯父さん初め皆さん方、お替りもございませず、お目出たうございます。
東右　四五年此方便りがないから、死んだかと思つて居た。
千右　在所に居ますお袋へ、久しく便りをしませなんだが、替ることはございませぬか。
東右　それぢやあ手前、何にも知らぬか。

千右　なに、知らぬかとは。
　ト誂への合方になり、
東右　替るとも／＼、大替りに替つたわ。
千右　内を出てから生業用で、九州路から長崎へ長らく行つて居りましたから、さつぱり存じませなんだが、替りましたとおつしやるのは。
東右　此方の親父は正直だつたが、所謂前世の因果とやら便りに思つた一人の此方は家を出てしまひ、爺イ婆アでやう／＼と、その日を送つて居た所、生れ付いての酒好が、病ひの元で中氣になり、口はもどらず體は利かず、田畑の仕事も出來ぬ上、藥の代は段々溜り、煎じ詰つた痩世帶、明日の米にも困る樣になつたを近所で不便に思ひ、米や麥や味噌醬油野菜物迄送つてくれ人の惠みで生きて居たが、定業故か私の所へ禮に來るとて二本杖で出たさうだが、轉びでもしたことか、常願寺の池へ落ち、遂にはかなく死んでしまつた。
千右　親父が死んだといふことは、東京へ出た村の人に立ちながら聞きましたが、そんな死に樣をした事は話さぬ故に知りませなんだ。
陸兵　寺から知らして來た故に村中行つて池から引上げ、

直に家へ連て行つたが、早桶を買ふ錢もなく、

奥藏　せうことなしに味噌樽の古いのへ死骸を入れ、さし擔ひで寺へ持込みお經をざつと上げて貰ひ、

東右　わしが施主で葬むつたが、可哀さうなは手前のお袋、跡に殘つた婆ア殿、中氣病でも亭主故、杖に思つて居た所、非業な死をぼした後は、明けても暮れても泣いてばかり、千太が居たならば居たならばといつても返らぬ旅の空、生死の程も知れざれば食ふに困るとあぢきなき、浮世に倦きたか笘作殿が、百ケ日の晩に裏の井戸へ飛込んで、是もはかない死をしました。

ト涙を拭ひながら言ふ。

千太　すりやお袋も死んだ親父が百ケ日の其晩に、井戸へ身を投げ死にましたか、二人が二人水で死ぬとは、何たる因果なことなるか。

ト愁ひの思入。

陸兵　ほんに爺樣も婆ア樣も村の日待に寄合つても話の末はこなたの噂、親を捨て家出なし、憎い奴だと口には言へど、目には一ぱい涙を持ち、

奥藏　達者で居るなら逢ひたいと、明暮言つて居られたが、到頭逢はずに非業な最期、斯ういふ立派な男になつたを、一目見せてやりたかつた。

ト此内始終千右衞門はお照へ憚り、いゝ加減に言つてくれゝばよいといふこなしの内、親の死んだことを聞き愁ひの思入。

東右　さうして、見れば以前と違ひ立派な装をして居るが、今は何をして居るぞ。

千右　在所に居ては一生涯大した出世も出來ませねば、東京へ出て人にならうと、故郷を後に五年後、傳手を求めて銀行へ奉公にはひりましたが此身に運の向く時節か、重役衆の氣に入りて段々出世します故、爰ぞ人になる所と勉強をした功顯れ今は二等手代となり、商法上で九州路へ久しく行つて居りましたが、今度歸りました故、五週間の暇を貰ひ、親父はなくともお袋へ出世を話して悦ばせようと參つた甲斐も情ない今は世に亡き二人の衆、もう一年早かつたら逢はれましたに殘念な、手當に持つて參つた金も手向の金になりましたか、果敢ないことでございまする。

ト涙を拭ひ宜しく思入。

陸兵　ほんにこなたが立派になつたを、二人の衆が見たならば、どんなに悦ぶことだらうに。

奥藏　一年遲いばつかりに、墓場へ行かねば逢はれぬ兩親、惜しいことをしましたな。

東右　して今聞けば銀行の、二等手代になつたといふが、千太手前が勤めて居る、其の銀行は何といふ銀行だ。

千右　たゞ、銀行でございます。

東右　三井を初め諸所にあるが、さうして所は何處にあるぞ。

千右　茅場町でございます。

東右　して何番の銀行だ。

ト千右衛門ぐつと詰り、

千右　三百三十三番でございます。

ト東右衛門は心得ぬ思入にて、

東右　近頃諸縣に銀行が大層出來たといふことだが、まだ日本全國中に二百番は出來ぬ筈だが。

千右　え。

東右　三百三十三番とは。

トぎつくり思入。

千右　さあ是は近所に山王のお旅所がある故に、山王の猿にかたどり、三百三十三番でございます。

東右　それは珍らしい銀行だな。

陸平　わし等は田舍者だけれど、新聞が大好故、凡東京の小新聞はあらかた買つて讀んで見るが、

奥藏　まだ廣告の其内にも、三百三十三番といふ銀行は、まだない樣だ。

東右　何にしろ出世して、折角親に逢ひに來たに、二人共死んでしまひ、逢ひに來た詮がないな。

千右　いや、思ひがけなく伯父さんに、爰でお目にかゝりますれば、親に逢つたも同じこと、直にこれから歸つてもよい譯でもございますが、爰迄參りましたから、墓參りをして參りませう。

東右　手前が行つて花を上げ、水を手向けてやつたらば、草葉の蔭で悦ぶだらうが、それに附けても二人が死んだ跡が仕樣がなく、手前は出た限り便りはなく、死んだか生きたか分からぬから、此家達とも相談して、一先家を疊んでしまひ、家財を賣つた其の金は永世無縁にならぬやう、みんな寺へ納めてしまつた。

千右　何から何迄伯父さんの、厚いお世話になりまして、有難うございます。

ト此時おのぶ出來り、

のぶ　松島のお客樣、御膳をおあがりなされませ。

陸兵　酒肴も出來ましたかな。
のぶ　はい、お燗も出來てをりまする。
奥藏　それでは一杯やりませうか。
千右　まだ伯父さんに種々と、お聞き申したいこともござりますが。
みち　左樣なればお客樣。
東右　こつちにも言ひたいことがあるが、どうで一つ旅籠屋故、後に又話しませう。
東右　いや、おやかましうござりました。
ト米山甚九になり、東右衞門、陸兵衞、奥藏、おのぶ付いて下手へはひろ。跡見送り千太伸をしようとして心付き、俯き悒ぎ居ろ思入。
お照　今お聞き申しますれば、お前さんの親御さんは、お二人ともお亡なりなされ、嘸本意ないことでござりませうな。
みち　側でお聞き申すさへ、お氣の毒でござりまする。
千右　若い時には親達に、少しは苦勞もかけたから、生涯樂にさせようとわざ／＼金を持つて來た、其甲斐もなく死んだと聞いたら、俄に胸が塞がつて、心持が惡くなつた。

ト悒ぐ思入。
お照　さういふ時には憂さ晴し、一と口どうでござります。
千右　いや、酒もあんまり呑みたくない。
ト此時階子の口よりおしの出來り、
しの　もし旦那樣、夜芝居へおいでなさいましと、車屋の德どんがお迎ひに參りました。
千右　おゝ迎ひに來たか。
ト千太思入あつて、
こりやあ憂さ晴しに、芝居へ行かうか。
みち　それが宜しうござりませう。
千右　お照、お前も一緒に行きな。
お照　あい、お供致しませう。
千右　おかみさん、カバンを出して下さい。
みち　畏りました。
お照　そんなら、旦那。
千右　芝居で憂さを晴らさうか。
ト端唄になり、千太思入あつて、お照おみちの付いて階子の口へはひろ。合方になり、下手より東右衞門、陸兵衞、奥藏出來り、階子の口を覗き思入あつて、

陸奥　東右衛門殿。
東右　二人の衆。
　ト合方きつぱりとなり、
陸兵　千太が立派な装になつたは、
奥藏　どうも合點が行かないな。
東右　おゝ行かぬとも〳〵、第一合點の行かぬのは、三百三十三番といふ銀行は聞いたことがない。
陸兵　多分口から出任せに、
奥藏　嘘をついたと思はるゝ。
東右　子供の折から手癖が悪く、十五の年に懲役に行つてから猶悪くなり、種々異見も加へたが、糠に釘で少しも利かず、再び赤い仕着せを着たが、それから國には居られなく、上州邊から東京へ行つたといふ噂を聞いたが、それ限り便もない事故、大方終身懲役になつたことゝ思つて居たが、思ひがけない今夜の出逢。
陸兵　見れば立派な装をして、宿の内に十日ほど、
奥藏　藝者を上げて逗留するは、
東右　どうで堅氣な金ではあるまい。
陸兵　掛り合にならぬ内、
奥藏　明日早く立ちませう。
東右　翌日はともあれ今宵の内も。
　ト此内上手の障子を明け、以前の辨山窺ひ居て、扨は盗人であつたかといふ思入、東右衛門是を見てびつくりなす、辨山障子をしめる。
成程譬の、
　トうなづくを道具替りの知せ、
壁に耳だ。
　ト三人思入、宿場騒ぎにて此道具廻る。

(明神山の場)

本舞臺上寄に三間高二重の岩組。後同じく當心の岩組にて見切り平舞臺上の方柱迄岩の張物で見切り、下手谷の心にて杉の梢を見せ、よき所に飛込の穴、向う遠山夜るの遠見、日覆より杉の釣枝、總て明神山の體。道具半程より時の鐘山おろしにて道具留る。と合方山颪にて下手より宿屋の若い者弓張提灯を持ち、紺看板の中間手紙を持出来り、舞臺にて、

中間　これ宿屋の若い衆、おらが旦那は暮合から、何處へおいでなされたのだ。
若者　此山向うの大信寺といふ禪寺の和尚様は學問が能く

詩作が能く、分けて書を能く書かつしやるので旦那樣に逢ひたいと、内の主人が檀家故和尙樣に頼まれて、今日お連れ申したのだ。

中間　それでは大方詩や歌の面白くない話だらう、今日のお供を脱れたのは、大仕合をしました。

若者　今又お前が旦那樣に、急に逢ひたいとおつしやるのは、

中間　東京から別配達で郵便が來ましたから、どんな御用か知れぬ故、直にお屆け申したいのだ。

若者　一體お前の旦那樣は、官へお勤めなさるのか。

中間　いや旦那は勤をさつしやれば、よい月給が取れるさうだが、窮屈な事が嫌ひ故、金を貸して氣樂に暮し、今度も松島見物から歸りがけでござります。

若者　然しさうして遊歷をなさるは何より御樂み、結構なことでござります。

中間　是といふのも、内證がよい故。

若者　兎角世界は金のことだ。

ト時の鐘、

中間　や、あの鐘は。

若者　もう十時だから急ぎませう。

ト時の鐘合方山颪にて二重を上り、上手へはひる。平舞臺上手より二人乘の人力車へ以前のお照、千右衞門を乘せ、車夫の德是を引き、以前の松跡押をして出來り、

千右　おい、德公こゝでいゝから下してくんな。

德　芝居へおいでなされませぬか。

千右　芝居はこれからもうわづか、此山道を越すばかり、どうで車は引けないから、爰から下りて歩いて行かう。

お照　何だか氣味の惡い所、爰へ下りずと芝居迄、乘つて行かうぢやありませんか。

千右　なに、此の山を越すばかり、怖いことはありやあしねえ。

德　何ならお供を致しませうか。

千右　いや、送るにやあ及ばねえ。

ト是にて車より千右衞門、お照下りて千右衞門小さなカバンより紙包の札を出し

是で歸つて呑むがいゝ。

ト德取つて、

德　每度有難うござります。これ松や、旦那へお禮を申せ。

松　旦那、有難うござります。
千右　大きに夜道を御苦勞だつた。
　ト德思入あつて、
德　もし旦那、おねだり申しては濟みませんが、もう少し下さいませぬか。
千右　なに、もう少し吳れと、
　ト思入あつて、
わづかな所も夜道故、五十錢遣つたらば、言草を言ふとこはあるめえ。
德　そりやア常のお客なら、結構過ぎた酒手だが、江戸で名高い銀行の旦那にしては少ねえ酒手だ。
　ト不承々々に言ふ。
お照　これ德どん、お前酒にでも醉つたのかえ、毎日旦那にお貰ひ申すに何でそんなきざを言ふのだ。
德　言つてもいゝから言ひますのさ。
　ト松聞兼し思入にて、
松　これさ兄貴、何を言ふのだ、此間から仲間内でも、いい旦那に可愛がられると、皆が羨ましがつて居るのだ。
德　手前達の知つたことぢやあねえ、今に酒手を貰つて遣るから默つてそつちへ引込んで居ろ。

松　何だか己にやアさつぱり讀めねえ。
千右　これ、通り一遍の旅先だが、斯うして毎日乘るからは吝嗇なことをする時は、東京の恥になるから、出る度毎に酒手を遣り、手前達に兎やかうと言はれることは仕ねえ氣だが、己に酒手を增してくれとは、どういふ譯があつて言ふのだ。
　ト是にて德づう／＼しく、
德　おい千兄イ、お前己を忘れたか。
千右　なに、忘れたとは。
　ト少し凄みのある誂へ合方になり、
德　五年後に竊盜で、お前と一緒に佃に居た、野州生れの德次郎だ。
千右　え。
　トぎつくり思入、
德　間もなくおらア滿期で出たから、見忘れたかも知れねえが、外役先でお前と一緒に一つ鎖に繫がれて土を擔いだことがあるぜ。
千右　それぢやあ手前も竊盜で。
德　赤い仕着も二三度着やした。
松　コウ兄貴、あの旦那も五年後懲役になつたのか。

徳　やつぱり己と同じ科で、佃で苦役をしなすつたのだ。

松　見掛に寄らねえものだなあ。

徳　南部の給に博多の帶、無地御召の單羽織に、ゴウルの時計、麥藁シャッポ、何處へ出しても銀行の立派な手代と見えるこしらえ、嘘か事實か灰吹にかけて分析したならば、いゝか惡いか知れやせう。

千右　世間にいくらも似た者が、他人の猿似であるものだ、そりやあ人違ひだぜ。

徳　お前の目からは小僧子と思つてごまかす氣だらうが、假令三日が間でも一つ飯を喰つたからは、人違ひをするものか、是が六十七十なら、耄碌をすることもあるが、まだ二十五にならねえ己だ。何で顔を忘れるものだ、然しお前は忘れたらう、こつちはけちな竊盜に、差入物もろくには來ず、幅の利かねえ無籍者、滿期で出たから故郷へ歸り上州路から奧州かけ、ほそい腕で車を引くのも言はゞ此身のぼく除だ、一里引いてもわづか六錢長い錢の取れねえのも內職にする荒挊ぎで太く短く榮耀をせう爲め、一晩宿場へ友子を連れ兄イと言はれて呑める程、お前も苦役をした體器用に金を吳んなせえ。

トきつと思入、千太悔しき思入あつて、

千右　手前達に脅されて、酒手を遣るもこけな譯だが、ちつとこつちに目的があるから、今夜は言ふなりに、酒手を遣るから早く歸れ。

トカバンから十圓札を出して遣る、徳取つて、

徳　兄貴、十圓かえ。

千右　それで不足を言ふならば、こつちも意地だ一錢でも、餘計な錢は遣らねえぞ。

ト千太きつと言ふ、

徳　只貰ふ金だから不足をいふわけはねえが、もう十圓も貰ひてえのだ。

松　こう／＼徳兄イ、いゝ加減に言はねえか、わづか宿から十町ばかり堅氣の人なら二錢の酒手だ、十圓貰やア五圓づゝ、單衣の一枚も着られるわけだ。

徳　えゝ目先の見えねえ事を言へ、己が腕で取る金だ、誰が山にするものだ。

松　それぢやア半分吳れねえのか。

徳　二十錢か三十錢手前に遣りやア澤山だが、一圓やるから默つて居ろ。

松　たゞの酒手と違ふから、半分吳れざア七分三分、三

圓己にくんねえな。

徳　えゝ餘計な口を利きやあがるな。

松　それだといつて一圓はあんまり酷い相場だから、

徳　手前がぐづ〱ぬかすので、こつちの話の氣が拔けた、もう十圓と言ひてえのだが、仕方がねえ不承をしやせう。

松　長追すりやあぼろよりか、棒が出るから了簡しろ。

ト徳煙草入へ札を入れ、

徳　それぢやあ千太、いや、酒手を貰へば旦那樣、

千右　口數きかずと、早く行け。

徳　お照さん、宜しくお禮を。

トお照へ思入、松車を上げ、

松　今夜は是で切上げて、

徳　宿場で愉快を極込うか。

ト時の鐘合方にて、徳、松車を引いて上手へはひる。

此内お照氣味の惡き思入にて、

お照　さあ旦那、氣味の惡い所故少しも早く參りませう。

千右　そんなに急くには及ばねえ、ちつとお前に話しがあるから、まあゆつくりとするがいゝ。

お照　何のお話しか存じませぬが、こんな所でなさらずと、內でお話しなされませ。

千右　內ぢやあ四邊の人目があるから、言ひてえ事も言はれねえ。

お照　それだといつて氣味の惡い、人通りのない此山中、わたしや怖くてなりません。

千右　其の怖がるのも尤もだ、晝と違つて日が暮れば往來稀な明神越、どんな話しをしようとも狐狸の其外は、聞手のねえが己がやまだ。

お照　さうして私に話しとは、どんなことでございます。

ト千右衞門思入あつて、

千右　長くいふにも及ばねえが、色になつてくんねえな。

お照　えゝ、

トびつくりする。時の鐘、少し淒みの合方になり、

千右　そんなに驚く事はねえ、先刻も聞いて居たらうが、久しく逢はねえ親達に逢はうと思つて東京から松島へ行く一人旅、お前の樣な美しい藝者があるとも白川へおくれて泊つた奧州屋、一人で酒も旨くねえから、相手に口を掛けた時、はい今晩はと座敷へ來たお前の顏を見てびつくり、辨天といふ名を取つた宿一番の女だと聞いた其晩襟元へ、ぞつと染込む夜嵐に、少し風氣を幸ひと、長

逗留をして居たも、實はお前を手に入れたく、無駄な金も遣つたが、旅藝者には珍らしい金で轉ばぬ氣性故さつき貰つた此指環を、お前と一緒に居る心で、のろい奴だが指へはめ、明日は一先松島へ行つて歸りに口說かうと思つて居たも親達が、死んだとあれば行くのは無駄、是から直に東京へ歸る土産に前借を、返して連れて行きてえのだ、定めて厭でもあらうけれど惚れられたのが身の因果、うんと言つてくんなせえ。

お照　見る影もない旅藝者を、それ程思つて下さいますは、有難うござりますが、お前さんのお心に隨はれない譯あれば、どうぞ許して下さいまし。

千右　どんなことか知らねえが、隨はれぬといふ譯は、

お照　さあ、其譯は。

千右　それを聞かにや思ひ切られぬ。

ト　お照思入あつて、

お照　何をお隱し申しませう、わたしや東京に言交した、男がござりまする故。

千右　そりやあ男もあるだらうが、浮氣家業をするからは、そんな野暮を言はねえで、旅の恥はかき捨と、おれがいふ事を聞いてくんねえ。

お照　浮氣家業はして居れど、末は夫婦にならうといふ神へ誓ひを掛けた仲、親の頼みに仕方なく浮世を忍ぶ文字摺りの此の奧州の白川へ、前借をして來た私、旅の藝者は十が八九、お客の座敷で曖昧なことをするのが常なれど、男がある故今日迄も、そんな噂のない藝者、御贔屓にして下さいますなら、色氣なしでお座敷ばかり、御酒の相手に私をば、どうぞ呼んで下さいまし。

千右　大方そんな言譯と、思つて今夜芝居へ行くと云つて連出したは、否應いはさぬ己が狂言、さつき仕馴れぬ立役になつて百圓出したのも、よくある筋だがお前の體へ金で恩を着せる爲、厭でもあらうがお袋に娼妓にされたと諦めて、堅い心を引いて取り夢と思つて濡の場を、一幕見せてくんなせえ。

お照　それほど迄におつしやるなら、幸ひ丁度お袋が參つて居れば相談して、明日御返事致しませう。

千右　もう此の土地に足を留め、明日迄待つちやあ居られねえ、大概己が身の上も人の話しで悟つたらうが、今迄大きな法螺を吹き銀行手代といつたは僞り、實はおらア盗人だ。

お照　えゝ。

ト合方きつぱりとなり、

千右 何もそんなにびつくりして逃げるにやあ及ばねえ、盗人だとて同じ人間、ぎやつと生れた其時から人の物を取物と、盗む心はありやあしねえ、元はみんな堅氣だが多くは酒と女と博奕、詰りからする盗み、初手は明巣のちよつくら持ち、初犯で纔な懲役から二犯三犯段々と功を積んで強盗迄、修行して來た松島千太、どうで始終は天の罰、運も盡で終身懲役、こゝで手前を助けたところが、一等減じるわけでもなけりやあ、かばつてやるにも當らねえから、それで爰へ連出したのだ、網に掛つた鳥同樣、もう羽根たゝきもさせやあしねえ。

お照 そんならどうでも此場にて、

千右 是ほど言つても逃げる氣か。

お照 さあそれは。

千右 さあ。

お照 さあ、

兩人 さあ〳〵〳〵。

千右 こりや手短に縛り上げ、引さらつて行かにやあならねえ。

ト尻を端折りお照を手荒く引据ゑる。

お照 あれ、誰ぞ來て下さいまし〳〵。

千右 えゝやかましい靜にしやあがれ。

ト お照振切つて逃げるを立廻つて引付け手拭で縛らうとする。此時上手へ以前の徳案內して、探索方兩人捕繩を持ち松明いて出來り、囁き合ひツカ〳〵と出て、

菊藏 松島千太。

兩人 御用だぞ。

ト千太見て、

千右 や、こりや探索か。

菊藏 此間から盗賊と、にらんだ眼に違ひなく、

幸七 慥な證據が上つた上は、のがれぬ所だ、

兩人 覺悟なせ。

千右 さう知られたら仕方がねえ、察しの通り強盗で、其名を知られた松島千太、汝等が繩にかゝるものか。

菊藏 明神山へ追込んだ、

幸七 獲物を逃して、

兩人 なるものか。

ト兩人組付くを振解く、此内お照うろ〳〵するを徳捉へ、

徳 お照さんはおい等と一緒に、

松　早く此方へ逃げなせえ。

ト徳、松、お照を引張り上手へはひる。

千右　扨は徳めが、訴人をしたな。

菊幸　知れたことだ。

ト時の鐘、謎への鳴物になり、兩人千太へ繩を掛けようといふ捕物の立廻り宜しくあつて、千太カバンを引さらひ下手谷間の切穴へ飛込む、山颪烈しく、

菊藏　やあ、崖から谷へ飛込んだが、下は巖石鋭き谷間、

幸助　多分は岩で體を打ち、くたばつたに違ひねえ。

菊藏　何にもせよ、谷へ下り、

幸助　彼奴が行方を、

兩人　捜してくれん。

ト山颪ばた／＼にて、兩人逸散に下手へはひる。矢張ばた／＼にて上手よりお照逃げて出來るを、徳、松追掛け來て、お照を引付け、

徳　はて聞譯のねえお照さん、今夜千太が夜芝居へお前を連れて行くといふは、深い巧みのある事と悟つた故に酒手をゆすり、探索方へ密告して、今の難儀を助けたのだ、千太の替りに己達の此處で自由になつてくんねえ。

お照　危い所を助かつて、やれ嬉しやと思つたら、やつぱりお前も同じ事、私を手籠めにしようといふのか。

徳　そりやあお前が辨天と、言はれる顏のすることだ、二目と見られぬ女なら、此方も科を着ることだ、誰が手籠にするものだ。

松　兎やかういふ間に芝居のはね、人通りのねえ其の内に、

徳　ちつとも早く。

松　おゝ合點だ。

ト山颪早き合方にて兩人お照を引倒す、此時本鐵砲の音する。三人びつくりし、お照は俯伏になる、坂の上より望月輝、羽織まち高袴帽子短銃を持出て來り、此内徳は打たれはしないかと體を見ることあつて、ホッとして輝を見付け、

扨は今のは。

兩人　こなたゞな。

輝　理不盡致す人力車夫、警察官へ引立てようか。

徳　そんな脅しをくふものか。

ト輝へ立掛る、輝短銃を差附け、

輝　命はいらぬか。

徳　やあ、こいつは叶はぬ。

松　逃げろ／＼。

ト　ばた／＼にて兩人花道へ逃げてはひろ、お照顏を上げ、

お照　何方樣でございますか、危い所をお助け下され、ええ有難うございまする。

輝　お照、嘸怖かつたらうな。

お照　え、さうおつしやるは、

ト　誂へ灯入の月を下し、お照輝を見て、

お、望月樣。

輝　これ、

ト　押へるを木の頭。

あゝ、いゝ月だな。

ト月を見上げる、お照は手を合せ嬉しき思入、誂への合方、山颪にて、

ひやうし　幕

二　幕　目

明石浦漁師町の場
同播磨灘難風の場

役名——明石の島藏、漁夫磯右衞門、同沖藏、同浪六、島藏妹おはま、伜岩松、其他。

(明石浦漁師町の場)——本舞臺三間の間平舞臺、正面眞中柿木綿の暖簾口、上手押入戸棚、是へ三尺の佛檀、阿彌陀の掛物、佛具宜しく誂への位牌、供物を備へ燈明を付け、此前へ手習机、此上へ香爐線香を載せ、下手鼠壁上の方一間、折廻し障子屋體、いつもの所丸太の門口、竹簀戸下の方粗朶垣、後海の遠見、總て播州明石浦漁夫內の體、上手に西念墨衣齋坊主の打扮、續いて喜太六、藤助着流し漁夫のこしらへ、おくろ同じく女房のこしらへ、四人共膳に向ひ眞中に磯右衞門白髮鬘漁夫の親仁にて住ひ、下手にお濱島田鬘漁夫の娘のこしらへにてお櫃を側へ置き盆を持ち給仕をしてゐる、岩松若衆鬘着流しにて香爐へ線香を上げてゐる、此見得波の音濱唄にて幕明く、

磯右　西念さんは生業だが、皆の衆は忙しいのに、よう念佛に來て下すつた。

藤助　外と違つて不斷から、親仁どんには一方ならず何やかや世話になれば、

喜太　假令生業を休んでも、此方の內の法事故、馳走になりに來ましたのぢや。
お黒　取分け私はおなぎさんと、お心安くした中故、何事置いても來ずには居られぬ。
お濱　おくろさんのお蔭にて、御膳拵へが早く出來、嫂さんも草葉の蔭で悅んでござりませう。
西念　今日の膳部の鹽梅は、妹御がさつしやつたか、まことに旨う出來ました。
お濱　何の旨いことがござりませう、仕慣れぬ私の摑み料理、何も彼も不鹽梅で上りにくうござりましたらう。
藤助　西念さんの言はるゝ通り、なか〳〵旨いことであつた。
甲太　爰ら近所の煮賣屋では、こんな料理は所詮出來ぬ。
磯右　いや爰ら近所にないといふは、ちと褒め過ぎさつしやりませう。
お黒　いや〳〵酢和の胡麻ではなく、いゝ鹽梅でござりました。
西念　ときに膳を引いて下さりませぬか。
お濱　はい、只今引きますでござります。
お黒　どれ、手傳うて上げませう。

ト皆々捨ぜりふにて、お濱お黒膳を片付、岩松前へ出て手をつき、
岩松　今日は何方も母樣へ、御供養を下さいまして、有難うござりまする。
西念　最前から佛前へ絕えず線香上げさつしやつて、殊勝に回向さつしやるのは、ても感心なことではある。
藤助　外の者が千遍の、念佛を唱へるより、
喜太　血の餘りの岩松が、十遍唱へる念佛が、
お黒　おなぎさんはどの位、嬉しいことか知れぬわいな。
磯右　今更いつても返らぬが、此岩松がお袋は生れだち素直にて、知つての通りの性故、無理な小言も言つたれど遂に一度逆らうて喧嘩をしたこともなければ、假令にもいふ小舅のお濱を邪魔にしたこともなく、眞身の如く可愛がり、取分けわしを大事にして痒い所へ手が屆くほど、よう世話をしてくれた申分のない嫁を、惜しいことをしましたわいの。
ト淚を拭ふ。
藤助　そりやこなたばかりぢやない。あかの他人の私らさへ、
喜太　廻りも早い三年忌の、明日が忌日に當る故。

お黒　達者な時の噂して、貰ひ泣してをりまする。
西念　然しおなぎ殿が亡なつても、實の娘のお濱どのがまだ緣付かずにござつたのが、磯右衛門殿の仕合せぢや。
磯右　そりや西念さんの言はるゝ通り、兄の不孝に引替へて妹が勝れた親孝行、それに孫がやさしいので此二人を樂しみに、毎日矢張漁に出て、まだ殺生を致します。
西念　して、島藏どのは三年跡國を出て行かれたが、今では何處に居さつしやる。
磯右　いゝも惡いもお前方が知つての通り三年跡、筋の惡いことをして、八十日の懲役に行つたを嫁が苦勞になしそれを氣病に煩ひ付き、遂に滿期にならぬ內養生叶はず果敢ない最期、丁度三十五日の日に日數も立つて歸つて來たが、少しは面目ないかして此ほとぼりのさめる內、東京へ行つて雇にはひり人となつて歸る迄、此岩松の養育を賴むといつて內を出た限り、頓とそれから音信不通、どうしたことゝ思つた所、博覽會を見に行つた國の者が東京で逢つたといへば死にもせず、達者で居ると見えまする。
　ト岩松思入あつて、
岩松　手が書けぬなら仕方がないが、おとつさんはよく書くのに、何故便りをなさらぬか、おつかさんには死に別れ便り少ない私をば、可愛くお思ひなされぬのか、居所が知れたら此方から恨みを言つて上げねばならぬ。
お濱　そなたが恨むも尤もだが、內を出る時兄さんが人に成らねば歸らぬから、母に替つて岩松の世話を賴むとくれぐれも、私へ言つて行かしやんしたが、便りのないは思はしいことがないのであらうわいの。
磯右　どうで親に苦勞をかける不孝者の島藏故、天道樣の御罰でも人に成らるゝことはない、病ひが直ればよいけれど、直らぬ時は終ひには、生涯土を擔いでも生きてゐたらばお目出度で、赦免になるまいものでもない、どうぞ切られてくれねばよいが。
西念　いや〳〵そんなことはあるまい、根が利口な島藏殿、そでないことをさつしやつたも、附合ふ友が惡いゆゑ、
藤助　明けても暮れても賭事に、終には所々へ借が出來、
喜太　所謂貧の盜みにて、金が欲しさの出來心。
お黒　まさか命にかゝはることを、馬鹿でないからなさるまい。
藤助　必ず案じ、
三人　さつしやるな。

西念　何にしろ親孝行な、よい妹御のあるのが仕合せ。

磯右　どうで忰は當にならねば、此妹へ聟を取り位牌所を立てさす積り、目に叶つた者があつたら、一人世話をして下され。

西念　よいのがあつたら世話をしませう。

藤助　然しうつかり其話しは、世間へぱつとせぬがよい、皆の衆も知つて居る。

喜太　ならず者の沖藏が、お濱殿に惚込んで女房にしたいと言つて居れば、

お黑　此話しを聞いたらば、押掛聟に來ようも知れぬ、彼奴には匂ひも、

三人　かゞされぬ。

西念　時に皆の衆、跡へ客もござらうから、こちらはお暇せうではないか。

藤助　おゝ歸りませうとも〳〵、是から皆で寺へ行き、

喜太　墓を綺麗に掃除して、

お黑　お花を手向けて上げませう。

お濱　それは有難うござります。

岩松　皆さんがおいでなら、私もお參り致しませう。

磯右　どうで明日參詣すれど、そちは母のことなれば、お參り申して來たがよい。

岩松　そんなら行つて參ります。

喜太　もう岩松も歩けるか。

岩松　お寺位は參られます。

お黑　よく早く癒つたな。

西念　左樣なれば磯右衞門殿。

磯右　皆の衆。

藤助　又明日、

四人　逢ひませう。

ト波の音濱唄になり、西念、藤助、喜太六、お黑、岩松樫の杖に縋り跛を引き花道へはひる。

磯右　おゝお濱大儀であつた、たつた一人で膳拵へ、嘸草臥れたことであらう。

お濱　いえ〳〵草臥れは致しませぬ、今日の料理が曲りなり出來るもみんな姉さんが、不斷教へて下さんした故、御恩返しにどの樣にも、私がせねばならぬわいな。

磯右　是に付けても島藏め、連添ふ女房の年忌もしらず、何處に居ることぢややら、眞人間になつたらば手紙位はよこす筈、やつぱりごろつき居ると見える。

お濱　遊んでならばよいけれど、惡い病ひがある故に、案

じられてならぬわいな。

ト案じる思入、波の音濱唄になり、花道より沖藏着流し三尺帶、皮草履をはき出來り花道にて、

沖藏　今日島藏の女房が三年忌の逮夜にて、漁夫仲間を呼んださうだが、今西念坊に聞いたれば皆歸つたといふこと故、直談じに談じこんで、お濱を女房に貰はにやおかぬ。

ト舞臺へ來り、

磯右衛門殿、内でござるか。

磯右　おゝ、沖藏殿か。

お濱　おゝ來ずともよいに。

沖藏　え、

お濱　ようござんしたなあ。

トツンとする。

沖藏　今日おなぎ殿の三年忌、よく法事をさつしやつたな。

磯右　あれが里も死に絶えて、跡を立てる者もなく、こつちでせねば仕方がない。

トお濱思入あつて、

お濱　父さん、わたしや臺所を片付けて來ますぞえ。

磯右　殘りの者が晩に來れば、支度をして置いてくれ。

お濱　どれ、支度して置きませう。

ト合方にてお濱膳部を持ち奥へはひる。

磯右　ときに何ぞ用でもあつてか。

沖藏　今日はこなたに頼みがあるから、何でもうんと聞いてくれ。

磯右　身に叶つたことならば、頼みを聞くまいものでもない。

沖藏　それは何より忝い。

磯右　して其の頼みと言はつしやるは。

沖藏　外でもない此方の娘を、己が女房に貰ひたいと、仲間の者から言込んだが、おなぎ殿の三回忌法事前は取込んで返事がならぬと言はつしやるので、仕方なしに待つて居たが、今日は和尚直勸化にお濱殿を貰ひに來た、私が頼みを聞いて下さい。

磯右　外ならぬこなた故頼みを聞いて進ぜたいが、知つての通り島藏が國を出てから便りはなし、孫とてもまだ年がゆかねば跡を繼がせる譯にも行かず、據なくお濱めに聟を取つて掛らねば、よい年をして何時迄も己が漁夫をせねばならぬ、此譯故に氣の毒ながらお濱はこなたに遣

られぬわい。

沖藏　なるほどこなたの言ふのも尤も、そんなら嫁には貰ふまい、わしを聟にして下さい、さうしたならば隱居さま、こなたに漁はさせませぬぞ。

磯右　それは何より忝いが、然し夫婦の緣ばかりは親の自由にならぬもの、篤と娘に話した上で、否やの返事は後からしませう。

沖藏　いや自身に頼みに來たからは、何でもかでも否やの返事を、今日聞かして貰ひたい、私がお濱殿に惚れて居ることは、漁夫仲間で誰一人それを知らぬ者はない、夫婦になれぬ上からは、明石の濱にも居られぬ譯、何處へか影を隱さにやならぬ。

磯右　それは甚迷惑な、緣談ばかりは當人の心に濟まねば極められぬ。

沖藏　何でもかでもお濱殿と、夫婦にならねば男が立たぬ。

磯右　そんな無理なことはない、今返事の出來ぬといふは、十が九つ話しをしたら、こなたはお濱の氣に入るまい。

沖藏　なに、此沖藏が氣にいらぬとは。

　ト沖藏むつとする、磯右衞門思入あつて、

磯右　わしが聟にする氣がなければ、娘も亭主に持つ氣はあるまい。

沖藏　むゝ、さう嫌はれゝばもう頼まぬ、私も明石の此濱で少しは人に知られた沖藏、外聞惡く爰にも居られぬ、是から伊豆か相模の漁場へ巢を替へて行かねばならぬ、其時どんな置土產を置いて行くかも知れねえぞ。

磯右　それは氣味の惡いことだが、呉れるとあらば置土產を、貰はずにも置かれまい。

沖藏　娘を一人失ふも、親の心一つだぞ。

磯右　そんな脅しを恐れる樣な、磯右衞門だと思つて居るか、年は取つても漁に出たら若い者に負けぬ腕、いらぬ無駄口たゝかずとも、己が厭で貰はぬ聟、さあきり〳〵と歸らつせえ。

沖藏　おゝ、歸らねえでどうするものだ。

　ト沖藏門口へ出る。

磯右　えゝ、げぢ〳〵野郎め、一昨日うせろ。

　ト門口をしめる。

沖藏　今に意趣を返すから、親父め覺えてうしやアがれ。

　ト波の音濱唄にて沖藏花道へはひる、奥よりお濱出來り

お濱　もし父さん、よい加減になさんすりやよいに、あん

な馬鹿な男故、どんな事をしようも知れぬわいな。
磯右　どんな事をするものか、口ばかりの意氣地なし、
お濱　ほんに皆に言ふ通り、
磯右　惣身へ智慧の廻り兼ねる、
お濱　無駄に大きな、
磯右　野郎だなあ。
ト波の音ばた〳〵になり、花道より以前の藤助走り出來り、
藤助　これ親仁殿、悦ばつしやい〳〵。
磯右　なに、悦べとは、何の事だ。
藤助　さつき便りがないといつた、島藏殿が歸つて來た。
磯右　え、倅が歸つて來ましたか。
お濱　そりやほんまのことでござんすか。
藤助　今九郎兵衛殿の所へ寄つて、話しをして居らるゝ故、先へ私が知らせに來ました。
磯右　そりやよく知らして下されました。
藤助　どれ、仲間の者へも知らしてやらう。
トばた〳〵にて下手へはひる。
磯右　島藏が歸るといへば、其處等を綺麗に片付けておけ。
お濱　あい〳〵、こんな嬉しいことはない。

磯右　おゝ嬉しからう〳〵。
ト兩人嬉しき思入にて四邊を片付ける、お濱門口から花道の方を見て、
お濱　もし〳〵父さん、向うへ兄さんが見えるわいな。
磯右　おゝ見えるか〳〵。
ト兩人悦ぶ、是より床の淨瑠璃になる。
上るり　〽過ぎし日は昨日か今日と思へども早くも三歳たつ霧に暫し隱れし島藏が、旅寐に幾夜明石潟馴れし故郷へ立歸り、
ト是へ波の音を冠せ、花道より島藏好みの着附、達磨合羽脚絆尻端折り、大きなカバンを提げ、蝙蝠傘を杖に突き出來り、花道にて、
島藏　わづか二年たゝぬ内に、往來幅が廣くなり、穢い橋が綺麗になつて、以前に勝る立派な學校、こんな所にも石造や煉瓦造りの見えるのは、世界は益々開けて來たな。
〽歸るを松の片庇、親は迎ひに立出て、
ト島藏舞臺へ來る、磯右衛門門口へ出て、
磯右　おゝ島藏歸つたか〳〵。
島藏　や、親父樣、先づお替りのないお顔を見て、まことに嬉しうございます。

お濱　兄さん、よう歸つて下さんしたな。

島藏　おゝ妹、そちも達者でよかつたな。

磯右　まあ〳〵足を洗つて、早く上れ。

島藏　いえ、足は汚れはしませぬから、洗ふには及びませぬ。

磯右　そんなら早く上るがよい。

お濱　兄さん、爰へござんせいな。

ヘ妹は心の花莚を敷いて兄をばもてなせば、島藏設けの座に付いて、

トお濱花莚を出して眞中へ敷く、此の上へ磯右衛門島藏住ひ、

島藏　岩松が見えませぬが、何處ぞへ參りましたか。

磯右　明日はお袋の三年忌故、墓へ花を上げながら逮夜參りに行きをつた。

お濱　もう行つてから餘程の間、今に歸つて來ませうわいな。

島藏　此の世にある内おなぎにも、餘計な苦勞を掛けたから、此三年忌に間に合ふ樣旅中を急いで參りました。

磯右　よく歸つて來てくれた、是で明日の施主が出來た。

お濱　草葉の蔭で姉さんも、嘸お悦びなさんせう。

ト島藏思入あつて、

島藏　なには扨置親父樣へ、お詫を先へせねばならぬ。

ト誂の合方になり、

三年跡に不埒から八十日の御處刑受け滿期になつて歸つたれど、所に居るのも外聞惡く、其のほとぼりのさめる内東京へ出て雇ひにでも入つて人に成らうと存じ、出は出ましたが思はしからず、なまじ便りをしたならば又もや餘計に御苦勞掛け、不孝に不孝を重ねます故、是迄便りを致しませぬはお許しなされて下さりませ。

磯右　假令苦勞をしようとも、何故知らしてはくれなんだ、やうやく此春東京に居る事を聞いたれど、それ迄とんと居所が知れねば、村の者に聞かれても、ならず者は居所の知れぬ方が結句よいと、口では言へど心では血を分けた我子だもの、何處にどうしてゐることか、懲役にでもなりはせぬかと、たゞの一晩其方が事を、胸に忘れたことはない。

お濱　此間も父さんが、夜中に大きな聲をして、島藏達者で歸つたかと言はしやんすので私も目が覺め何うしたことゝ聞いたれば、今島藏が歸つて來た夢を見たと言はしやんして、是程親が思ふのに何故便りをしてくれぬかと、

父さん／＼が泣かしやんすので、私も甥の岩松も貰ひ泣きに泣きましたわいな。

ヘ嬉しいに付け悲しいにつけ涙脆きは女子の常、聞く島藏も歎息なし、

トお濱泣く、島藏思入あつて、

島藏　子供の折から惡戯で、お世話をやかした其の果が道に背いたことをして、終に繩目の恥をかき、それを氣病に女房が懲役中にはかなく死に、不便なことゝ思ふに付け過ぎた月日を考へれば、唯の一日孝行せず濟まないことゝ氣が付けば、所に居るのも面目なく、繁華な土地の東京で雇ひ奉公してなりと、人となつて故鄕へ錦を飾つて歸らうと、思ひ立つて出ましたが、是ぞと申すことがない故、遂に御無沙汰を致しました、やう／＼出世に取付きましたは、伊太利國の異人の所へ、ボーイに這入りました所、身の仕合せに主人の氣に入り、半年ばかり勤める內、番頭に取立てられ、生絲の仕入を任せられ、何萬といふ金高に歩合の禮も大した金、やう／＼人に成りましたので、主人も親に逢つて來いと、親切に言はれますので、三週間の暇を貰ひ、至急に出立なしましたれば、土產物さへ買ふ間なく、何も持つて參りませぬ。

磯右　無事な顏を見せてくれるが、何よりの土產なれば、品物などは決して入らぬ。

島藏　長年御苦勞掛けた上、懲役中の差入物から死んだ女房が取片附け、まだ其上に忰の養育、種々御厄介をかけましたれば、せめてもの御恩送りに樂をおさせ申し度くそれのみ心掛けましたが、思ひがけなく天の惠みで、はからず金を得ました故、取る物も取り敢ず參りましてござります。

磯右　親が我子の世話するは、こりや世間の當前、禮も何もいるものか、惡い心が直りさへすりや、何よりそれが恩返し。

お濱　父さんの言はしやんす通り、お前が身を持つて下さんすりや、私迄も共々に、まことに嬉しうござります。

磯右　誰より彼より死んだおなぎが、嘸悅ぶことであらう。

ヘ言ふ尾に付いて妹が飾る位牌を取出し、

トお濱佛檀より位牌を出し、机の上に載せ、

お濱　これ姉さん、お前も聞いて居なさんしたらう、兄さんが出世して今日歸つてござんした、嬉しいことでござんせうな。

ト島藏も位牌へ向ひ、

島藏　あゝ長年手前に苦勞を掛けたが、やう／＼己も人になつて、今日親父樣へ御恩送りをする樣な身になつたから、草葉の蔭で悦んでくれ、今更言つても返らぬが、今日迄達者で居たならば、少しは樂をさせようものを、

〽流石夫婦の情合に、落つる涙を押隱し、

ト島藏ホロリと思入あつて、

いや、心ばかりでござりますが、親父樣への御恩送り、是をお受け下さりませ。

トカバンの中より金を出し、磯右衛門の前へ出す、

磯右　志しは忝いがこんな心配には及ばぬものを、

ト島藏又金包を出し、

島藏　妹、是はそちへ土產、好な物でも買つたがいゝ。

トお濱にやる。

お濱　私に迄お土產を、有難うござりまする。

〽頂くこなたは磯右衛門、包みを取上げ不審顏、

ト磯右衛門金包を取上げ思入あつて、

磯右　や、是は餘程の金包、島藏中にはいくらあるぞ。

島藏　はい、三百圓ござります。

磯右　え、三百圓あるとか。

島藏　左樣でござりまする。

お濱　大したお金でござりますなあ。

磯右　はあゝ。

〽はつとばかりに包みを投出し、聲を上げて泣伏せば、

ト磯右衛門包を投出し泣伏す、

お濱　父さん、何を泣かしやんす。

磯右　是が泣かずに居られるものか。

お濱　そりや何故でござりまする。

磯右　伜の心が直らぬ故、

島藏　何とおつしやります。

磯右　今日持つて來た此の金は、

ト四邊へ思入あつて、

盜んだ金であらうがな。

島藏　え、

トぎつくり思入合方きつぱりとなり、

以前が以前の島藏故、お疑ひもござりませうが、左樣な金ではござりませぬ、今も申し上げます通り、外國人の贔屓になり、買物方を引受けて一切致してをりますが、日本人と事替り外國人は腹が大きく、まだ新參の私へ、千圓金を貸して下され、そちも商法するがよいと、許しを受けて先達て生絲を千圓買ひましたが、間もなく非常

に直が上り、わづかな内に三百圓思はぬ利益を得ました故、是は天より賜物と存じまして御恩送りに、持つて參つた三百圓、不正な金ではござりませぬ。

磯右　いや／＼それは呑込めぬ、外國人がどの位腹が大きなものだとて、昨日抱へた奉公人に今日千圓の大金を、よもや貸しは致すまい、何故さういふ身分になつたら、やうやく人に成りましたと、早く知らしてよこさぬぞ。

島藏　さあ、それは。

磯右　昔と違つて郵便で、手紙を出せば四日か五日で、便りの出來る世の中に、なぜ知らしてはよこさぬぞ。

島藏　さあ。

磯右　外國館へボーイにはひり、主人の氣に入り番頭に取立てられて斯う／＼と、最初からの手續を知らしてよこした上ならば、嘘でもまことゝ思ふ故、志しの此金を貰ふまいものでもないが、今日出し投に歸つて來て、土産にくれた三百圓、まことのことでも嘘だと思ふ、貧乏暮しはして居れど、人樣の物は箸片々盜んだことのない磯右衛門、不正の金は望みでない早く持つて歸りをれ。

へ包を取つて投返せば、

ト金包を島藏の前へ投付ける、

島藏　すりや此金を親父樣には、不正の金とおつしやりますか。

磯右　しかと其方の手に入つた不正であらぬ證據が無ければ、此の三百圓は受けられぬ。

島藏　折角此の身の御恩返しと、思つた金も水の泡、はて是非もないことだなあ。

ト當惑の思入。

磯右　これ娘、そちが貰うた其の金も、兄へ返してしまふがよい。

お濱　父さんのお詞故、折角下さいましたけれど、餘儀なくお返し申します。惡う思うて下さんすな。

ト島藏の前へ包を出す。

島藏　正路の金に相違なけれど、差當つて是れといふ證據がなければ仕方がない、一度歸つて確とした證據を持つて出直さう。

お濱　わざ／＼おいでなさんしたに、父さんの機嫌が惡く、お氣の毒でござりまする。

ト島藏ちつと思入あつて、

島藏　是に付けても人間は、正路に心を持たねばいけぬ。一旦惡事をしたばかり、見繼ぎの爲めに持つて來た、札

も今では反故同然、是皆我身がなした科、人を恨むところはない。

〽先非を悔いて島蔵が手を拱いて黙然と、暫し詞は荒磯の、濱邊傳ひに岩松が杖に縋りて立歸り、

ト此内島蔵腕組をなし、ぢつと思入、花道より以前の岩松杖に縋り、びつこを引きながら出來り、

岩松　おぢいさん、今歸りました。

磯右　おゝ、岩松歸つたか。

お濱　これ、父さんがござんしたぞ。

岩松　えゝ、おとつさんがおいでだと。

〽聞く嬉しさに躓いて、はつとばかりに打轉べば、

ト岩松嬉しき思入にて、ツカ／＼と内へはひり、躓きてばつたり轉ぶをお濱介抱して、

お濱　あゝ足の悪いに、あぶないわいの。

ト岩松這ひ寄り、

岩松　おとつさん、よくお歸りでござりまする。

島蔵　おゝ岩松か、爰へ來い、見違へる程大きくなつたな。

岩松　お前樣もお變りなく、お嬉しうござりまする。

島蔵　三年逢はぬ其内に、大層行儀がよくなつた。

お濱　此一二年は學校でも、試驗の度毎及第して、何時も甲の御褒美を貰ひ、今は二級になつておやわいな。

島蔵　それといふのも一方ならぬ、親父樣の御丹誠、有難うござります。

お濱　おとつさんに其方の書いたお清書をお目に掛けや。

岩松　はい。

〽はいとばかりに岩松が、足を引いて立上れば、

ト岩松びつこを引いて立上るを、島蔵見て、

島蔵　や、そちは足を何うしたぞ。

岩松　さあ、是れは。

磯右　島蔵そちから預かつた、此の岩松を不具にして、まことに己が面目ない。

島蔵　どうして悴は此樣な、びつこにはなりましたぞ。

〽問はれて親父は吐息をつき、

ト磯右衛門思入あつて、

磯右　しかも先月のことであつたが、研ぎ上げた出刃庖刀を、下へ置くのもあぶないと、ちよつと棚へ上げたのを、取紛れて忘れてしまひ、其の晩猫が鼠を追掛け、棚から落した庖刀が、下に寐て居た岩松の足へ當つて思はぬ大疵、筋を一本切つたので、たうとうびつこにしてしまつた。

岩松　もう痛くはござりませぬが、まだ結へてをりまする。
ト左の足を白布で結びあるを見せる、
島藏　それはとんだ怪我をしたが、幾日のことでござりました。
磯右　幾日の晩であつたけな。
お濱　あい、二十日の晩でござりました。
島藏　すりや先月の二十日の晩、
ト島藏思入あつて、
〽時に當つて[illegible]島藏が、
して刻限は、何時であつた。
お濱　十二時前でござりました。
島藏　すりや先月二十日の晩、十二時前であつたとか。
〽扨は其夜に福島屋の主人へ疵を負はせたる酬いなるかと後悔なし、
ト島藏宜しく思入あつて、
あゝ、惡いことは出來ぬなあ。
磯右　なに、惡いことが出來ぬとは。
島藏　俺が思はぬ其の怪我は、わしがさしたのでござりまする。
磯右　合點の行かぬ其の詞。
お濱　兄さん、お前がしたことゝは、
岩松　どういふ譯でござりまする。
〽言ふに島藏門口の外を窺ひ座をしめて、
ト島藏門口より外を見て、元の所へ住ひ、
島藏　此身の懺悔一通り、親父樣も妹も篤と聞いて下され。
ト誂への合方になり、
人に成らうと東京へ參りましたが知邊はなく、曖昧宿の口入や安泊へ泊り込み浮々月日を送る內、二枚の着物は一枚賣り着と共にわた拔の袷も光る身の垢に、どうで穢れた體故夜盜を初めた所、間もなく取られて八十日苦役の內に兄弟の緣を結んだ喰詰もの、奧州無宿の鰐島千太と滿期で出てから言合せ、大きな仕事をしたらば止さうと、二十日の晩に淺草で質屋の內へ忍び込み、刃物で主人を脅し付け引攫つたる金包みを、明けて二人がびつくりしたは、十圓札でしかも千圓、思ひがけねえ大仕事、爰らが盜みの止め所と、五百圓宛二つに分け、千太は奧州私は播州右と左へ別れたが、故鄕へ飾る身裝を拵へ、再び盜みは止めようと心を淸めて伊勢へ參り、京大阪から明石へ來て久し振にて親父に逢ひ、不孝の詫に持つて

來た、三百圓を盜み物と見透されたでぎつくりと、轟く胸へ又候や此岩松が足の怪我、千圓盜んだ其時に支へる主人が向う脛、引拂つて逃げましたが、時日も違はぬ先月の、しかも二十日の十二時前。

磯右　え。

島藏　親の惡事が忽に、我子に報ふ悴が怪我、惡いことは出來ませぬ。

〽先非を悔いて島藏が、懺悔をなせば聞く親は、身の行末をかこち泣き、

灘右　扨こそ己が持つて來た金は盜みし金なるか、其の根性が止まざれば生涯柿の仕着を着て、土を擔がにゃならぬぞよ。

ト磯右衞門額へ手拭を當てゝ泣く、岩松思入あつて、

岩松　これお父さん、子として親を恥しめるは、天の道に缺けますが、

〽お前は學問せぬ故に、親に孝行することを御存じなければ是迄に、おぢい樣に御苦勞をお掛けなさるを子心にも、

濟まぬ事となり替り、孝行しようと思へども、

〽生れも付かぬ此の不具、お年取られたおぢい樣や年端も行かぬわたしをば、不便と思召すならば、盜を止めて下さりませ。

〽縋り歎けば恩愛に、情を知らぬ强盜も、胸に迫りて涙に咽せ、

ト岩松宜しくこなし、島藏せつなき思入あつて、

島藏　おゝ其の恨は尤もだ、今も手前が言ふ通り、己が育つ時分には、學校などゝいふものは話しに聞いたこともなく、漁夫の餓鬼が手習は無駄なことだといふ中で、親のお蔭で寺小屋へ行き、先づ商賣往來迄やつとのことで上げたれど、童子敎さへ習はねば、五常の道を知らねえから親が勝手で拵へた子だ、孝行するにやア及ばねえと己が勝手に理窟を付け、親を親とも思はずに、寶に己は不孝をした、手前などは開明の此の結構な世に生れ、物の道理の分かるのは、何れの果も學校で子供が敎を受ける故、こんな有難い事はねえ、誰に異見をされるより手前に言はるゝ此異見は、

〽棒鎖の責にあふよりも、胸にこたへる身の苦しさ。

ト島藏思入あつて、

向後盜みを止めるから、己に替つて親父樣へ長く孝行してくりやれ。

〽手を取交し親と子が、暫し涙にくれにける。

岩松　そんなら是からふッつりと、盗を止めて下さりますか。

島蔵　むゝ、やめなくッてどうするものだ。

お濱　おゝ岩松、よく言つた、其方の異見で兄さんが、盗みを止めると言はしやんすれば、こんな手柄なことはない。

磯右　まことに止めることならば、盗みし金を先へ返し、其身の罪を名乘つて出ろ。

島蔵　故郷へ飾る身装を拵へ百圓足らず遣ひましたが、持つて來た二百圓にまだ百圓ござりますから、もう百圓足しますれば、五百圓になりますから、是から直に東京へ歸りまして死に身に稼ぎ、不足の金が調つたら先方へ返して警察署へ、強盗せしを自首なして、上の仕置を受けませう、

〽親子嘸く門口より内の様子を立聞く沖蔵、妹はびつくり立掛れば、見付けられじと逃行けり。

ト此以前下手より以前の沖蔵忍び足にて出來り、門口より窺ふ、お濱是を見てびつくりなし、門口へ行く、沖蔵下手へ足早にはひる。

お濱　もし兄さん、靜にしなさんせ、今門口から沖蔵が様子を聞いて居りました。

島蔵　なに沖蔵が聞いて居た、して其處いらにまだゐるか。

お濱　私が門を覗いたので、びつくりなして蘆原の蔭へ逃げて行きました。

磯右　それは大變彼奴めは、こつちの内に遺恨があればそちが惡事を警察署へきつと知らすに違ひない。

島蔵　訴へられては五百圓の、金を返すに都合が惡い、少しも早く逃げませう。

お濱　それはお名殘惜しけれど、

島蔵　長居をすれば身の破滅、

お濱　まだ種々のお話あれど、

島蔵　眉に火の付く此急場、是でお暇致しまする。

磯右　所詮陸では追手の者に、捕へられるに違ひない、濱邊へ行つて漁船雇ひ、神戸迄乘付けろ。

島蔵　承知しました。

岩松　すりや父さんは是から直に、

島蔵　長く居られぬ己が體、

岩松　本意ないことでござりますな。

ト岩松島蔵に縋り泣く、

磯右　おゝ、そちよりか此親が、どの位本意ないか、知れぬけれども是非がない。
お濱　せめて今宵一ト夜さと、
灘右　留めたい所をせり立つて、歸すも其身を思ふ故、
島藏　左樣なれば親父樣、お達者で居て下さりませ。
灘右　そちも無事で居てくりやれ。
島藏　はッ。
ト島藏立掛る、
岩松　もし、とゝ樣。
〽縋り付かれて島藏が、見合す顏が親と子の是が別れとなる鐘に、心せかれて振拂ひ、
ト島藏岩松宜しく愁ひの思入あつて、時の鐘、島藏振拂ひ、
島藏　怪我をするなよ。
〽跡をも見ずに氣強くも、濱邊をさして急ぎ行く。
ト波の音ばた／＼にて島藏カバンと蝙蝠傘を持ち逸散に花道へ入る。岩松泣伏す、お濱は門口より見送る、
磯右衞門は岩松を介抱しながら、
磯右　お濱、もう行つたか。
お濱　一もくさんに行かしやんしたわいな。

岩松　もう父さんには逢はれませぬか。
磯右　いや、逢はれぬことはないけれど、どうで親父は是から懲役、十年立たずば逢はれまい。
岩松　悲しいことでござりますなあ。
〽今更何と岩松が、涙に暮れる門口へ、立歸つたる沖藏が
ト波の音になり、下手より以前の沖藏出來り、
沖藏　親父どん、又來ました。
磯右　おゝ沖藏殿、何しに來た。
沖藏　己の來たのは外でもない、くどい樣だが娘をくれぬか。
磯右　先刻も其方に言ふ通り、聟を取らねばならぬお濱、人の女房にや遣られぬぞ。
沖藏　女房に與れずば此己を、お濱の聟にしてくれぬか。
磯右　舅の己が氣に入らねば、嫁にも遣らぬ聟にも取らぬ。
沖藏　さういふからは島藏に、繩を掛けるが合點か。
磯右　なに、忰に繩を掛けるとは。
沖藏　今門口へ來かゝつて、殘らず聞いた忰が惡事。
磯右　や。
沖藏　それを是から訴人せうか。

磯右　さあそれは、
沖藏　それとも己に娘をくれるか。
磯右　さあ、
沖藏　許人をせうか。
磯右　さあ、
沖藏　さあ、
兩人　さあ〱〱。
沖藏　親子返事は、どゝどうだ。
　ト磯右衛門思入あつて、
磯右　其返事は明日の朝迄、どうか待つてくれまいか。
沖藏　いや〱、明日のことは扨置き、一時の間も待つことならぬ。
磯右　其處をどうぞ、明日の朝迄。
沖藏　えゝしつこい、待たれぬといふに。
　ト留めるを振拂ひ、行かうとするをお濱縋り留め、
お濱　さう言はずと沖藏さん、明日迄待つて下さんせいな。
　トちつと留め沖藏ぐつたりとなる。
岩松　此間に早う漁船で。
沖藏　や。
磯右　もう大丈夫、落ちたであらう。

沖藏　いや、落ちたと聞いては斯うしちや居られぬ。
　ト行かうとするをお濱抱き留め、
お濱　はてまあ、待つて下さんせいなあ。
　ト波の音烈しく、疾風の來た思入。
沖藏　やゝ、俄に吹來る此疾風。
お濱　海が荒れるか、
岩松　あの波音。
磯右　こりや島藏が乘出しても、
沖藏　沖で難船するは必定。
磯右　いや、案じられる、
　ト沖藏行かうとするを、引すゑるを道具替りの知らせ、事ぢやなあ。
　ト花道の方へ思入、お濱岩松案じるこなし、波の音烈しく、此道具廻る。
本舞臺一面に浪布を張り、後屏おとし、日覆より村雲の張物を下し、浪の音にて道具留る。と雨落より波の張物を出し、上の方へ岩組を出し、總て播州明石浦難風の體、宜しく道具納まる、と床の淨瑠璃になり、
〽實に船中は板一枚下は地獄と諺に、もれぬ疾風の村

雲に忽ち暴風吹起り逆浪高き明石浦、沖に漂ふ漁船も秋の木の葉の散るごとく、見る間に影も荒波に浮きつ沈みつ島藏が船も危く一生懸命、矢聲を掛けて漕來り、

ト此内波の音誂への鳴物にて、上手より誂へ丸物の漁船、是に以前の島藏肌脱尻端折りにて、櫂にて波を切り、波六鉢卷筒ッぽ脚絆にて櫓を押し出來り、文句の内舟動き難儀のこなし宜しくあつて、

島藏　今迄晴れし晴天も、俄に空がかき曇り、思ひがけねえ此疾風、是おやあ神戸へ乘切れねえ。

波六　神戸どころか此の濱へ乘付けようと思つても、烈しい風に寄付かれず、今日の天氣は見そこなつた。

島藏　少し風がなげるかと思つて居るに少しもなげず、段段強くなつて來るが、さつきは沖を三菱の蒸汽船が通つたが、今なら助けて貰はうもの。

波六　こいつあ親方地方迄、此の鹽梅おやあ乘付けられねえ。

島藏　なに、乘付けられねえことにはねえ、力ッぺえやッ付けろ。

波六　合點だ。

ト波の音誂への鳴物烈しく波六櫓を押切る、仕掛にて船動き乘切れる思入、波六櫓の早緒が切れ櫓を持つたまゝ波幕の中へ落ちろ、波の花ぱつと立ち、島藏びつくりして、

島藏　やゝ、早緒が切れて落ちたか。

ト此時鳴物烈しく、舟動き島藏舟の中へどうとなり呆れし思入、

是迄積る身の惡事、爰で舟が覆へり、鮫や鯨の餌食になるとも自業自得、仕方はねえが腹に付けたる四百圓、いつぞや盜んだ福島屋へ返すこともならぬのみか、天下の寶を流すのが如何にしても勿體ねえ、神や佛を願つたところが善人ならぬ惡黨故、助けて下さる氣遣ひねえ、生業づくとは言ひながら、思はぬ疾風で波六が命を捨てたは不便なことだ、何にしろ櫓を流せば、是から先は風次第、流れるより外仕樣がねえ。

ト又波を切り、

是も惡事の報いなるか。

ト風の音鳴物烈しく島藏凌ぎ兼ね、たぢ／＼として舟より波布の切穴へ落ちろ、波の花ぱつと立つ、よき程に島藏ずつぷり濡れて浮上り、舟の小縁へ手を掛けるを木の頭、本水を吹くをキザミ、右の鳴物にて宜し

く、

ひやうし幕

三幕目

神樂坂辨天湯の場
望月輝町住居の場

（淨瑠璃）隣で語る淨瑠璃に　色增栬夕映
過し其夜を思ひ出　（清元連中）

役名｜望月輝、松島千太、明石の島藏、辻講師古川辨山、小道具屋藤助、木拾ひ八兵衛、輝の妻お照、お照母猝金お市、おせい、お常、およく等。

（辨天湯の場）｜本舞臺五間湯の前側、眞中三尺格子窓、下猿らこ板羽目、上の方四尺の潜り付き障子、是へ男湯と記し、此上格子窓下猿らこ板羽目、下の方同じ障子、女湯と記し、此の下上手と同じ本庇、眞中に鐵の針金で釣りし瓦斯燈、上より二階手摺付の前側を下し、下の方九尺庇付一間の口、雇人宿百足屋と記しある腰障子、此下三尺戸袋、總て神樂坂邊湯屋の體、下手に長床几を置き、是へお常結び髮齊流し前垂掛、女髮結のこしらへ櫛を包みし小風呂敷を持ち、お欲天窓禿げし結び髮、半纒がけ、口入女房のこしらへにて兩人腰を掛け煙草をのみ居る、傍に八兵衛穢き半纒三尺帶木拾ひのこしらへ、明籠の天秤棒へ腰を掛居る、道樂寺の合方木魚の音にて幕明く。

お欲　これお常さん、まあ爰へ掛けて一服おあがりな。

お常　今日は朝から忙しくッて歩き續け立續けでがつかりしましたから、一服呑んで行かうかね。

ト床几へ腰を掛け、

もしをばさん、お前は元淺草の廣小路においでだつたが、あれから直此地へおいでか。

お欲　いえ、去年の六月時分迄車坂に居りました。

お常　さういへば新富町で霜夜の鐘をした時に、猿十郎がお前をしたね。

お欲　安泊りに泊つて居る浪人の子を世話をしたが、それを芝居でしたさうだ。

ト此内八兵衛お常を見て、

八兵　もし髮結さん、お前さんは淺草においでなさりやあしませぬか。

お常　あい、お察しの通り五月迄、東仲町の福島屋といふ

質屋の内に居りましたよ。
八兵　半四郎娘と評判の、いゝ娘のあつた家だね。
お常　よくお前知つておいでだね。
八兵　此間迄大風呂に木拾ひをして居りました。
お歓　ほんに私も廣小路の蓬莱屋に居た時分、よく女中衆を連れて行つたが、彼處の内も潰れたさうだね。
お常　お前も噂にお聞きだらうが、疾からお内が左り前で、無據竹の塚から千圓金を借りた晩に、泥坊が這入つてそれを盗まれ、剰へ内の旦那の左の足を切つて逃げ、やうやう疵所が癒つてから、約束をした聟さんを貰ふ其晩杯前に、おそのさんが内を抜出し、言交した六三さんの内へ駈込み、大騒動になつた時、私はそれを執持つた科によつて暇になり、以前髪結をしたことがあつたを幸ひ爰へ來て、此生業を初めたので、どうなりかうなりして居ますが、お内はたうとう潰れてしまひ、今御難儀をなさいますから、御恩送りに朝夕の、お世話を私がしますのさ。
お欲　それは聞くのもお氣の毒だが、何にしろお常さんお前はまことに仕合せだ、凡女のする仕事で、髪結位なものはない、私などの生業も田舍行の曖昧女か、官員さんの後妻か、さういふ口に有付くと、いゝ金が取れるけれど、一季半季の雇ぢやあ纔一圓で五錢宛だから五圓や七圓の給金ぢやあ高の知れた端た錢、それも毎日ありやあいゝが、たまさか取つて日に割ると、たつた二十錢か三十錢宿でも遠いと見に行くのに、下駄の代にも足りやあしない。
ト女湯の内にて、
お清　御新造さま、おあぶなうございます。
ト誂への端唄になり、女湯の口よりお照着流し、御新造のこしらへにて出て來る、後よりお清下女のこしらへにて浴衣を包みし風呂敷包を抱へ出て來る。
お照　糠袋を持つて來たか。
お清　はい、手拭と一緒に持つて參りました。
お常　是は御新造様、只今お湯でございますか。
お照　おゝお常さんか、朝から待つて居たけれど、お前の來やうが遅いから、お湯へ先へ來ましたよ。
お常　ついお晝前立込みまして、お氣の毒樣でございます。明日早く上りませうか。
お照　いえ、今日是から來ておくれな。
お常　畏りましてございます。明日何方へぞいらつしやい

ますか。
お清　明日は新富町へいらつしやいます。
お常　それはお樂しみでござりますな、お前お供でござりますか。
お清　連れて行つてやるとおつしやつたので、今ッから樂みで、今夜大方寐られますまい。
お常　まことにお羨しいことでござります。
お照　どうで棧敷は二間物だから、都合がよくば一緒においでな。
お常　それは有難うござります。
　ト　お欲前へ出て、
お欲　御新造様、此間は。
お照　おゝ口入のをばさんか。
お欲　此間上げました此子は、如何でござります。
お照　まことに氣輕でいゝ上に、器量がよいから給仕をさせるに、綺麗でよいと私より、大層旦那のお氣に入つたよ。
お常　それは御油斷はなりませんせ。
お照　そりやお前のいふ通り、なか／＼油斷はならぬわいな。
お清　御新造様迄同じ様に、私をおいぢめなさいますか。
お欲　旦那様のお手が付いて、お妾にでもお前がなれば、請宿は大仕合せ、お禮が餘計取れるのに、
お清　えゝ、慾張つたことばかり、
お欲　そりやお前知れたこと、慾ばかりで生きて居るのだ。
お照　それではお常さん、きつと來ておくれよ。
お常　只今直あがります。
お照　清や、行かうかの。
お清　さあ、いらつしやいまし。
　ト　端唄にてお照、お清付いて花道へはひる。
お常　あの中代地の大工の娘は、お前が世話をしなすつたのか。
お欲　あい、中働きに住はしたのさ。
お常　あの子などこそ旦那を取れば、いゝ金が取れるのに。
お欲　内は世話場の様だけれど、お袋が堅いので、そんなことはさせねえさうだ。
八兵　今時綺麗な娘を持つて堅い奉公は珍らしい。今の立派な御新造は、髮結さんの勸めて居た、半四郎娘によく似て居るね。
お常　ほんにお前のいふ通り、お園さんに生寫しさ。

お欲　お閑さんはどうなすつたね。

お常　六三さんに添はれなければ、死ぬといふので仕方なく、不釣合の大工の所へ、たうとうお遣りなすつたのさ。

お欲　それぢやあ立派な内を捨て、叩き大工の女房に、今ぢやあなつて居なさるとか。

八兵　いや、蓼喰ふ蟲も好き好きだね。

お常　ほんに馬鹿げた話さね。

八兵　どれ一廻り廻つて來ようか。

ト八兵衞荷を擔ぎ下手へはひる。男湯の内にて、

千太　なに釣にやあ及ばねえ。

ト前の合方にて男の口より、千太斉流し三尺帶駒下駄にて出て來り、手拭を絞りながら、

もし、今女湯から出た御新造は、めつぽふいゝ女だが、ありやあ何處の御新造だね。

お常　あれは此河岸通りで、官員だか士族だか、望月輝といふお方の御新造さ。

千太　元は藝者ぢやあなかつたか。

お欲　旅藝者だといふことだが、何にしろ別嬪だから、何處へ行つても賣れるね。

お常　御新造樣といへば、今直に來てくれとおつしやつたを、ついしやべつて居て遲くなつた、どれ早く行きませう。

お欲　又歸りにお寄りよ。

お常　はい、おやかましうござりました。

ト右の合方にて、お常早足に花道へ行き掛り、千太を見て、日外來た泥坊に似てゐるといふ思入。

お欲　お常さん何ぞお忘れか。

お常　いえ、何も忘れは致しませんよ。

ト合方にて足早に花道へはひる。

千太　今の女は、何處でか己が見たことのある女だが。

ト思入。

お欲　あれは元淺草の東仲町の、福島屋といふ質屋の内に居た女さ。

ト千太思入あつて、

千太　むゝ、福島屋の内に居た女か、何だかちろ／＼見て行つたが、こいつアうつかり出來ねえわえ。

トお欲思入あつて、

お欲　さつき仕はした子守の宿を、帳面へ付けなんだ、どれ忘れぬ内に付けて置かう。

トお欲下手の腰障子を明けてはひる。千太四邊を見廻

し思入あつて、

千太　犬も歩けば棒に當ると、何ぞ仕事を仕ようと思つて爰の湯へ入つたばつかり、思ひがけねえ白川で百圓出して馬鹿を見た、お照の居所がやうやく知れた、あの折德が知らしたので探索掛りに取卷れ崖から谷へ飛込んだが、運よく何處も怪我をせず、たうとう夜通し逃げおほせ、歸り道は日光から筑波を廻つて潮來へ行き、遊びてえ程遊んだが、何處へ行つても東京位金になる所がねえから、先月此地へ歸つて來て安泊りとけいづ屋を下宿に仕馴れた稼ぎを初め、今日は千住明日は廓と、所を替へて毎晩遊ぶが、お照位の女がねえから、あれが行方を捜して居たに思ひ掛なく出合つたは、金を拾つた樣なものだ、是に付けても淺草の山で別れた明石の島藏、こつちに居る内二人で泊つた安泊りやけいづ屋へ立廻つて來ねえからは、まだ東京へ出て來ねえか、何をするにも相手はなく、生中肚胸の惡い奴とうつかり組むとばれの元、早く兄貴に逢ひてえものだ。

ト懷へ手を入れ思入あつて、

おゝ二階の戸棚へ守を忘れた、どれ上つて取つて來ようか。

ト端唄になり、千太男湯の口へはひろと、花道より島藏、着流し羽織駒下駄商人のこしらへ、跡より藤助羽織着流し、低き駒下駄、風呂敷包の短刀を持ち出來り花道にて、

藤助　もし、其處へおいでなさいますは、明石屋さんではございませぬか。

島藏　おゝ、お前は田町の刀屋さん、何處へおいでなさいます。

藤助　今お宅へ上りましたら、たつた今神樂坂へおいでなすつたとおつしやるから、お跡を追掛けて參りました。

島藏　急なことでございますか。

藤助　ちよつとお話がございます。

島藏　何の御用か知らないが、向うへ行つて聞きませう。

ト兩人舞臺へ來り、藤助床几を前へ出し、

藤助　まあ是へお掛けなされませ。

島藏　爰へ掛けてもようございますか。

藤助　是は私が心易い請宿の床几だから、掛けても宜しうございます。

島藏　それでは御免下さりませ。

ト兩人床几へ掛け合方にて、

して私へ御用とは。

藤助　いえ、外のことではござりませぬが、お前さんから拵をお頼みなされた、此の脇差、

ト風呂敷を明け中より拵へ付の脇差を出し、

是は勝れた業物でござりますが、御存じでござりますか。

島藏　實はそれは此の血、いや、親類の士族から買つてくれと頼まれて、無據買つた脇差、よいか惡いか存じませぬ。

藤助　銘はござりませぬけれど、餘り勝れし金色故、何でも是は名作と鑑定をしましたから、さる目利に見せましたら、無銘ながら正眞の五郎入道正宗だと申しますので私も、びつくりなして歸りがけ此河岸通においでなさる、望月輝様といふ古物好のお得意へちよつとお見せ申しますと、假令無銘でも正宗なら求めたいから先方へ話して見てくれとお頼み故に、失禮ながらお話を致しますが、昔と違つて平民では、今は差されぬ此脇差、何と直をよく先方へ、お賣りなすつては如何でございます。

島藏　おつしやる通り平民が今差す事はない脇差、元よりそんな名作とも知らずに買つたものなれば、隨分賣つてもよいけれど、銘はなくとも正宗と聞いては何だか賣惜しい。

藤助　いや、御尤もでござりますが、銘があれば正宗なれど何ぼ出來が優れても、無銘の物は證據にならず、向うが惚れて居りますから、賣つた方がようござりますぜ。

島藏　して先方では何の位に、あれをお買ひなさる氣だ。

藤助　百圓ならば買ひたいと申されましてござりますが、極くほしい様子故、もう二三十圓は出しましても引取りますでござりませう。

ト島藏思入あつて、

島藏　何れ篤と考へて、後からお返事を致しませうから、内へ持つて行つて下さいまし。

藤助　よく考へて御覽じませだが、大概ならば思ひ切つてお讓りがようござりませう。

島藏　何れお返事を致しませう。

藤助　是れが出來ればわたくしも、お禮にあり付きまするから、何分お頼み申します。

ト右の合方にて、藤助上手へはひる。島藏四邊へ思入あつて、

島藏　あれはいつか廣小路の天道干にあつたのを、二圓半で買つた脇差、世にも稀なる正宗とは、ほんに夢にも知

らなんだが、あれが百圓に賣れるなら、こんなに苦勞をしねえものを、やつとのことで百圓、やう／＼金が出來たれば、假令千圓揃はずとも、早く返してしまひたいものだ。いや其晩更けて淺草の、山で別れた松島千太、再び出逢ふ約束の九月も最早末になつたが、まだ東京へ出て來ねえか、己と違つて酒と女で身を持つことが出來ねえから、所詮彼奴は止めやあしめえ、旅を稼いで道中で、若し御用にでもなりやあしねえか。

ト思入。男湯にて、

千太　姐さん、又明日來るよ。

ト合方にて男湯の口より以前の千太出來り、

あんまり娘の世辭のいゝので、又二十錢損をした。

ト行きかけるを島藏見て、

島藏　や、千太ぢやあねえか。

千太　おゝ、兄貴か。

島藏　それぢやあ手前も東京へ、

千太　約束通り出かけて來た。

島藏　よく間違へずに出て來たな。

千太　何にしろお前も達者で、

島藏　手前も無事で、目出度かつた。

千太　兄貴、爰へ掛けねえ。

ト合方きつぱりとなり、兩人床几へ掛け思入あつて、

島藏　さうしてあれから松島の、親の所へ出掛けたか。

千太　久し振で行くことだから、すつかり身装をこしらへて、先づ銀行の手代と化け、白川迄行つた所少し風邪氣で十日ばかり逗留して居る其内に、伯父御と村の者に逢ひ、様子を聞くと去年の秋親父も老母も死んで仕舞ひ、跡に身寄も何にもねえから、内を疊んで其金を寺へ納めて仕舞つたと聞いて見りやあ行くのも無駄故、明日は直に引かへさうと思ふ其晩持が知れ、すんでにくれえ込むところ、首尾よく其場を逃延びて、歸り掛けに日光から筑波へ廻り鹿島香取潮來迄彼方此方を遊び歩き、約束をした九月故此間こつちへ歸つた來たが、兄貴お前はどうしなすつた。

島藏　己もあれから身装をこしらへ直に故郷の明石へ行き、敷居の高い親父の内へ、不幸の詫に三百圓金を持つて行つた所、親父がそれを請けねえのに大きな聲ぢやあ言えねえが、己が惡事を知つた奴が、訴人をすると聞いたから仕方なく／＼妹や倅に別れて漁場から、舟で神戸へ乘切る途中明石浦で疾風に逢ひ、賴みに思ふ船頭が

艪を持つた儘落ちて流され、一人殘つた此己も鮫の餌食になる所運があつてか三菱の蒸汽船に助けられ、危い所を恙なく、此の東京へ歸つたから、爰らが人の氣の付く所と生れ替つた心になり、今は堅氣の小商人、若い者と小僧を使ひ、小賣酒屋の見世を出した。

千太　それぢやアあれきり挊ぎはしねえか。

島藏　さつぱりと止めてしまつた。

千太　小商ひをするからは、定めて女房を持つたらうな。

島藏　まだ女房は持たねえが、堅氣になつて酒見世を出したことを郵便で親父へ知らしてやつた所、丁度幸ひ妹が內に居られぬことがあつて、忰を連れて明石からわざわざ此方へ出て來たから、女房替りに飯を炊かして、水入らずでやつてゐるのだ。

千太　そりやあ何にしろ仕合せだが、いゝ商法に當るかね。

島藏　大した儲はないけれど、倦きずにやるのが商ひだから、辛抱してやつて居ます。

千太　人に勝れたいゝ腕を持つて居ながら小賣位な、商法するのは馬鹿げて居るぜ。

島藏　其替り一生涯、土を擔ぐには及ばねえ。

千太　して、何處へ見世を出したのだ。

島藏　神樂坂下の左側だ、明石屋といふ紺暖簾のかゝつてゐるが目印だ。

千太　何れ改めて尋ねて行かう。

島藏　內へ來るなら妹が、己と違つて堅氣だから、挊ぎの話しはしてくれるな。

千太　そりやあ己も承知してゐる。

島藏　それぢやあ千太。

千太　近い內に尋ねて行かう。

ト端唄になり、千太思入あつて花道へはひる、島藏後を見送り思入あつて、

島藏　懲役中に懇意になり、血汐を吞んで兄弟の緣を結んだあの千太、逢つたらとつくり異見を言つて止めさせようと思つたが、所詮止めることぢやアあるめえ。身裝も惡い風體で度々內へ來る日には、遂には世間の目に留り、いつか暴れるは知れたこと、どうか福島屋の行方を尋ね、金を返してしまふ迄、御用の聲を聞きたくねえ。あゝ以前は二となき友達だつたが、今となつては我身の害、飛んだ者と兄弟の緣を結んだ、

ト島藏立上る、此時湯屋の內にて、チヨン／＼木を打つ、

ことだなあ。

トヾつと思入、誂の端唄にて道具廻る。

（望月宅の場）━━本舞臺四間通し常足の二重柿葺の本庇本緣付、正面上手一間床の間好みの掛物、花入宜しく、眞中太鼓張りの襖出這入りあり、跡腰張根岸土の茶壁、上の方、九尺隣の三階家伊豫簾を下し、隣の境四ツ目垣、下の方丸太の柱上を丸くせし西洋門、跡建仁寺垣見越の松、門の柱、より舞臺前迄四ツ目垣にて見切り、總て望月宅の體。二重へ誂への鏡臺を直し、お照之へ向ひ櫛で鬢をかきゐる、お常は紙で手を拭ひ髮を結び上げし心、お淸くせ直しの金盥櫛など片付け居る、此見得端唄にて道具留る。

お淸　御新造樣、大層今日はよく出來ました。

お照　髱の恰好がいつもよりよく出來た樣だね。

お常　お內と違つてお芝居へいらつしやいますのだから、念入りに致しました。

お淸　念入りは念入りだけ、まことに綺麗でござります。

お常　明日は何時から新富町へいらつしやいます。

お照　初まりが九時だから、八時を打つと出掛けますよ。

お常　それでは今夜湯へはひつて、おつくりをして置きませう。

お照　もう今日はおしまひかえ。

お常　いえ、まだ、もう一二軒參りませねばなりませぬ。

お淸　一二軒なら止しになさいな。

お常　そりやなぜでござります。

お淸　今日お隣の松本樣へ、濱町の家元が來て、今に淨瑠璃が初まります。

お常　それは承りたうござりますが、ワキは誰でござります。

お淸　家元の獨吟で、三味線は久し振の順三郎が彈きますとさ。

お常　家元さんの獨吟とは、聞事でござりますね。

お照　もう今に初まるだらうから、お茶でも呑んで遊んでおいでな。

お常　さういふ事と承つては、仕事はどうでもようござります。

お照　淸の親父も今日來ると、淨瑠璃が聞かれたのに。

お淸　明日お供のお召物が、間に合はぬといけませぬ故、急いて使をやりましたから、昨日持つて參りました。

お常　お父さんはお達者かえ。
お清　まことに達者でござります。
お常　いつか代地の六三さんの所で、お目に掛つたことがあつたが、なか／＼おとつさんは氣が若く、二階番でも張る氣があるね。
お清　御存じの通り目尻が下つて、看板に僞なしでござります。
お照　飛んだ氣轉でよいけれど、旦那樣の前などでそんな事を言ひなさんなよ。
お清　是から丁寧に申しますから、御免なされて下さりませ。
お常　つい大工さんが出てなりませんね。
　ト奥より下女出來り手を突いて、
下女　御新造樣、只今お里の御隱居樣が、裏口からいらつしやいました。
お照　なに、おつかさんがおいでだえ。お里といふのも面目ないね。
下女　直にお通し申しませうか。
お照　あゝ、是へお通し申しな。
下女　畏まりました。
お照　辨山さんもいつしよか。
下女　左樣でござります。
　ト下女奥へはひる。
お照　ほんに私のおつかさんも、清が親父と同じ樣に。
お清　お目尻がお下りでござりますか。
お照　それにおの字がいるものかな。
お常　是に似ましたお話がござります、私共の隣の内でゆもじを洗つて干しますと、急に雨が降つて參つて一つ長屋におの字を付けるお上さんがござりまして、折角おゆもじをお洗ひなすつたに、俄のおふりでお困りなさいませう。
お清　又お常さんの噓ばかり。
お常　いえ／＼噓ぢやあござりませぬが、ゆもじの洗濯におふりはよいぢやあござりませぬか。
お照　ほゝゝゝ。
　ト笑ふ、合方きつぱりとなり、奥より序幕のお市紋付の羽織、辨山も羽織にて出來り、
お市　お照、久しく逢はなんだな。
お照　おや、おつかさんに辨山さん、よくおいでなさいました。

辨山　あんまり御無沙汰を致しましたから、御伺ひに上りました。
お清　こちらへお通りなさりませ。
お市　それぢやお邪魔にならない所へ、御神輿を据ゑませう。
　トお市、辨山上手へ住ふ、お常見て、
お常　おや、お前さんはよく見世へ出物においでなすつた、辨山さんぢやあござりませぬか。
辨山　おや、お前は福島屋のお常どんか、いつ髪結を初めなすつた。
お常　彼處の内を出ましてから、初めましてござります。
辨山　いゝ生業を初めなすつたが、定めて御亭主を持ちなすつたらうね。
お常　いえ、まだ一人でござります。
辨山　まだ一人とは氣が悪いが、さうしてお前の内は何處だ。
お常　つい神樂町一丁目でござります。
辨山　一丁目は何番地だ。
　トお市悋氣の思入にて、
お市　そんなに委しく聞かなくつてもいゝに。
辨山　聞いたつていゝぢやあないか。
お市　お前が只の人ならいゝが、女と見ると目がないからさ。
お清　おや、それではあなたも親父同様、女がお好でございますか。
辨山　それは言はずと知れたこと、貴顯紳士を初めとして下等社會の我輩迄、世界に好かざる者はなしだ。
お常　ほんに女流行でござりますね、ほゝゝ。
お照　今日は何ぞ辨山さん、面白いものを一くさり、讀んでお聞かせなさいましな。
辨山　どうして／＼、此方樣で辻講釋の私が、何を辨じられませう、只おつかさんの後に付いて女のお話でもして、ちよつとお座を持つばかり、講釋などは出來ませぬ。
お市　それはさうと、旦那はお内か。
お照　はい、お内でござりますが、何ぞ旦那に御用かえ。
お市　ちつとお願ひがあつて來たのだ。
お照　なに、お願ひとは。
お市　外でもない、小遣がなくなつたから、貰ひ度いのだ。

お照　此間おいでの時、來月分の小遣を貸してくれとお言ひだから、二月ぶり上げたのに、もうあれが無いのかえ。

お市　もう無いかといつたつて、何も無駄遣ひに遣やアしねえ、家主に店賃が五月溜つて居る上、一圓宛置買の米が三度に酒屋に新屋、こざ／＼借りを殘らず返し、質に入れて置いた袷を二枚出したので、十錢札も殘りはしねえ。

お照　それでは又もう一月も、貸してくれとお言ひのか。

お市　一月位借りたとて、芝居の一度も見に行けば直に無くなつてしまふから、又借りに來にやあならねえ、そつちも聞くのが厭だらうが、こつちも言ひに來るのが厭だ、年跨ぎになるけれど、來年の二月迄、三十圓貸してくんな。

お照　此間のが濟んだらば、お願ひ申して上げようけれど、まだそれが濟まぬ内は。

辨山　なるほど度々のことなれば、おつしやり憎うござりませうが、今度は月の切れる迄決して跡は上りませぬ、保證人に私が一緒に上りましたから、何卒旦那へ今一度お願ひなすつて下さりませ。

お照　何ぼ氣のいゝ旦那でも、先達から度々故、今日はお願ひ申されない。

お市　なに言はれねえことがあるものだ、手前を遣る時十圓宛、月々送る約束は、證書を取つて極めたのだ、三月や四月前貸に貸したつていゝ譯だ、おらア手前のお袋だぞ、二等親でも權妻なら召仕のことだから、言はずと旦那は主人故、達てとも言はれねえが、結納貰つてやつた娘、假令身分は違ふともおらア輝殿の親だぞ、親が今日喰ふに困り路頭に迷ふを子の身として、餘所に見ちやあ濟むめえぜ、手前の口から言はれにやあ己が直に旦那に逢つて、金を借りて行かにやあならねえ。

ト大きな聲をするを、辨山留めて、

辨山　これさおつかア、靜にしねえ、他人も側に聞いて居るに、大きな聲をしなさんな。

お市　大きな聲をしたくもねえが、切ねえ中で諸藝迄仕込んで手前を育つたは、此方が年を取つた時世話にならう其の爲めだ、親を親と大切に敬ひせえすりやあ言やあしねえ、つッ慳貪に物を言ふから、つい大きな聲をするのだ。

辨山　まあ己に任して靜にしねえ。

ト　お照に向ひ、
もしお照さん、嘸御迷惑でござりませうが、もう此後來年迄御無理は申しませぬから、旦那へお願ひ下さいまし。

お照　お前さんがさうお言ひなら、お話し申して見ませうが、今お書物をなすつてだから、後迄待つて下さいまし。

辨山　おゝ待ちますとも／＼、何時迄でもお待ち申します。

お市　しかしまじ／＼待つて居るも、退屈でいかねえから、其内一本付けて貰はう。

辨山　なるほどそれはいゝお捌き、ゆつくり一杯頂戴致さう。

お市　お照、何ぞないか。

お照　晝間のお肴がありますから、清に出させて上げませう。

お清　車海老の鬼から燒と、こちの煮たのがござります、あれをお上げ申しませう。

お市　肴も何も、りやアしねえ、ちよつと香々があればいいのだ。

辨山　實はさつきから咽ぐびだから、早く付けて下さいまし。

お清　畏りました。

辨山　然しさしでは旨くない、お常さんお前もおいでな。

お常　酒外れはしないものだから、お相でも致しませう。

お市　それぢやあおてる、

お照　ゆつくりとおあがりなさい。

お市　どれ、跡の見られぬ酒を呑まうか。

ト　端唄になり、お市、辨山、お常、お清付いて奥へはひる。跡合方彈流し、お照思入あつて、

お照　悪い人でも實の親、長い年月育てられた恩がある故仕方もないが、何ぼ仕送る約束でも、十日にあげず無心に來て、氣隨氣儘に言ひたいがい、何の小言もおつしやらぬが旦那へ對して氣の毒で、實に此身を切らるゝ思ひ、末始終はおつかさん〻私が愛想を盡されて若しも離緣になつたらば、又もや元の旅藝者、彈く三味線の棹よりも心細い私が身の上、絃は切れても切ることのならぬ義理ある親子の緣、苦勞の絶えぬことぢやわいな。

ト　お照ちつと思入、知らせに付き上手隣りの二階の簾を卷上げる。爰に清元連中羽織袴にて居並び、前彈な

しに一中模様獨吟の淨瑠璃になる。

上るり〽雁金を結びし蚊帳も昨日今日、殘る暑さも忘れてし肌に冷たき風立ちて、晝も音を啼く蟋蟀に哀れを添うる秋の末、

ト お照煙草をのみながら是を聞きて、

隣のお内へ濱町の家元が來て、淨瑠璃があると聞いたが、もう初まつたか、常ならどんなに面白くよい樂しみをする所、折も折とて母さんが無心に來たので氣が揉めて、聞くことさへもならぬわいな。

〽我身一ツにあらねども憂にわけなきことにさへ、露の涙の飜れ萩、曇り勝ちなる空癖に、夕日の影の薄紅葉、梅も櫻も色替へる中に常磐の松の色。

ト 此内お照思案に餘る思入にて、涙を拭ひ宜しくこなし、よき程に奥より序幕の望月着流し好みのこしらへにて出來り、ちよつと淨瑠璃を聞く思入あつて、

輝　隣の主人が贔屓だから、お葉かと思つたら、今日は太夫の淨瑠璃だな。

お照　おや、旦那にはいつの間に、爰へおいでなさいました。

輝　橋場から頼まれた大幅を書いたので、暫し勞れを休めようと、筆と煙管を取替へた所へ淨瑠璃が聞えた故、幸ひ鬱氣を散ぜん爲め、爰へ一段聞きに來たのだ。

お照　丁度宜しうございました。今初まつたばかりでございますが、いつもながら家元はいゝ聲でございますな。

輝　當時獨吟で語るのは、延壽太夫に限る樣だ。

お照　夕立なども獨吟で、語つたのでございますね。

輝　あの淨瑠璃は短くて、だれる所がなくていゝ。

お照　ほんに夕立と申しますれば、あの文句にもございますが、わたしや貴方に白川で危い難儀を助けられ、其の晩お宿へ一緒に參り、御酒のお相手した後で、貴方に手をば取られし時「紅潮うつる顏の色」で、どんなに嬉しうございましたらう。

輝　あの前一度金花樓へ呼んだことがあつたれど、側の人目にしげ〳〵とそなたの顏を見なんだが、助けた晩に差向ひ初めてとつくり見てびつくり、手に持つ煙管をうつかり落し、こんな女が世にあるものかと、馬鹿なことだがぞつとするほど、其艶色に惚込んで酒に醉つたる體にもてなし、手を取る迄の心配は、實に胸がどき〳〵した。

お照　そりや貴方より私こそ。

ト望月を見て恥しき思入クドキ模樣になり、
〽まだ其時は卯の花の夏の初めに白川の關はなけれど人目をば、厭ふ隔ての旅の宿飛かふ蝶に燈火の消えて若葉の木下闇、思はぬ首尾にしつぽりと結びし夢も短夜に覺めて恨みの明の鐘、
トお照クドキ模樣の振宜しくあつて、
丁度幸ひ持さんが來て居た故に前借を、返して直に東京へ貴方と二人相乘の、車で歸るわたしの嬉しさ。
輝　浮いた家業に珍らしい堅い心の其方ゆゑ、表向妻となせしが、朋友共の受もよく、先づ持當てしと思ひしに玉に疵なはお袋だ。
お照　それ故まことに貴方へ對し、お氣の毒でなりませぬ。
輝　何の氣の毒なことがあるものか、斯うして緣を結ぶからは己が爲にも姑は親、決して遠慮するには及ばぬ、聞けば今し方來られたさうだが、大方今日も無心だらうな。
お照　おつしやる通り今日も又無心に參りました故、どうも貴方へ濟みませぬ。
輝　濟むも濟まぬもあるものか、無心といふも十圓か高が二十圓のことだらう、機嫌よく貸してやるがいゝ。
お照　そんならお貸し下さりますか、えゝ有難うございます。
ト端唄模樣になり、
〽空ほの暗き東雲に木の間隱れの時鳥、鬢のほつれを掻上げる櫛の雫か雫か雨か、濡れて嬉しき朝の雨、
ト此内兩人淨瑠璃を聞く思入、
あのまあ端唄の意氣なこと、どうしてあゝいふ聲が出るか、嘸女が惚れませうね。
輝　割には情人が出來ないさうだ。
〽早夏秋もいつしかに、過ぎて時雨の冬近く散るや木の葉のはら／＼と、風に亂るゝ荻芒、
ト此内花道より、以前の千太出來り、花道にて向うだといふ思入あつて、舞臺下手へ來り、
千太　さつき神樂坂の湯屋の前で、聞いたは慥に爰の內、なるほどこりやア立派なものだ、こつちも一番懇意に、案內をしてやらう。
ト門の傍へ來て、
賴まう／＼。
輝　おゝ表へ誰か案內がある。

お照　清を呼んで取次がせませう。
ト煙草盆の引出より驛路の鈴を出し鳴らす、直に奥より以前のお清出來り、
お清　はい、御用でござりますか。
お照　表へ誰方かおいでなすつた。
お清　はッ、左樣でござりますか、お取次を致しませう。
ト下手へ來り門を明け、
何方からおいでなされました。
千太　奥州の白川から、千太と申す者が參りましたと、御新造樣へおつしやつて下さりませ。
お清　畏まりました。
トこちらへ來る、
お照　お使は何處からだ。
お清　はい、奥州の白川から千太といふ者が參りましたと、御新造樣へ申上げてくれと、申しましてござりまする。
お照　え、
トぎつくり思入あつて、
それでは爰へ尋ねて來たのか。
輝　お照、知つた者か。

お照　はい。
ト俯向く。
ヘ草の主人は誰ぞとも、名を白菊の咲出て、匂ふ此家ぞ。
ト此内千太門の内へはひる、お照顏見合せびつくり思入あつて俯向く。三重にて清元連中を消す。
千太　まつぴら御免下さりませ。
お照　千太さんか。
千太　お照さん、久し振りで逢ひましたね。
ト誂への合方になり、千太下手へ住ふ、お照思入あつて
お照　お前は達者で居なさんしたか。
千太　あの折谷へ飛込んで助かる迄も大怪我と、思ひの外に疵もなく、あぶねえ命を拾つた故、日光山から筑波を掛け土地に名代の雷と共に諸方をごろ付き歩き、やうやう先月此方へ出たが、さうしてお前は白川から、何時此地へ出て來たのだ。
お照　わたしもあの折旣のこと命を捨てる所であつたが、危い所へ此旦那が、お通りなされてお助け下され、まだ其上に前借も綺麗に濟まして東京へ、旦那と一緒に歸り

ました。
千太　それぢやあ危い難儀をば助けられたが縁となり、御新造様になつたのか、なるほど女は氏なくて玉の輿の立身出世、何にしろ目出てえことだ。
輝　何れの人か存ぜぬが、お照が懇意とあるからは、茶でも早く進ぜぬか。
お清　畏りました。
千太　いえ其のお茶には及びませぬ、お火を一つ貸して下さいまし。
お清　さあ一ぷくお上りなされませ。
ト千太の前へ煙草盆を出す、千太思入あつて、
千太　お照さん、お前の煙管を貸してくんねえ。
お照　いえ、此の煙管は。
ト煙管を脇へやる。
千太　何も身装が悪いといつて、穢ながるには及ばねえ、旦那の前では言憎いが白川に居た時分には、一つ物を半分宛喫つたことがあるぢやあねえか。
トき・にいふ、お照思入あつて、
お照　成程私が白川に、藝者をして居た其時に、お前に呼ばれて十日程座敷へ出たことはあるが、口廣いことだが、遂に一度私しや曖昧なことをした覺えはありませぬ。
千太　そりやあ今更知らねえと、しらを切られても證據はなし、其晩並べた枕より外に知つて居る者はねえから、知らねえと言はれても仕方がねえが、お前の母が東京から金の無心に來た時に、出來ずば旅の娼妓にすると退引ならねえ場合を見兼ね、百圓出してやつたのは、よもや忘れはしめえね。
お照　むゝ、
トおてるぎつくり思入あつて、
其時お前がおつかさんへ、百圓渡しなすつたは忘れはしない、覺えてをります。
千太　通り一遍の旅藝者に、たゞ百圓といふ金を遣ります者がありませうか、枕を並べて寐た上で、末は夫婦にならうといふ堅い約束しましたから、百圓金をやつたのだ、それを知らねえと言はれては默つて聞いて居られねえ。もし旦那、わつちが虚言を言はねえ證據は、是でお察し下さりませ。
ト輝思入あつて、
輝　いかにもこなたのいふ通り東京ならば知らぬこと、

只一通りで呼んだ藝者に、百圓遣らう譯がない、して又旅で此照と、言交したと言はるゝには、何ぞ證據があつてのことか。

千太　其の證據はお照から、指輪を貰つて置きました。

お照　え。

ト悄りする、千太左の薬指へはめし、誂への指輪を見て、

千太　しかも銀臺金鍍金で、丁子車に照といふ名前を彫つてあるのが證據。

お照　それはお前が其折に達てほしいと言はしやんす故、無據上げた指輪、それが證據になりますものか。

千太　是が證據にならねえとは、よくそんなことが言はれたことだ、言交した其時に後日の證據に取交した、ダイヤモンドのはひつてゐる、金の指輪を持つて居ねえか。

お照　わたしやお前に指輪などを、貰つたことはありませぬ。

千太　貰はねえとは情ねえ、かういふ旦那が出來たから大方己が遣つた指輪は、小間物屋へでも賣つてしまひ、今知らねえといふのだらう。えゝ騙されたか口惜しい。

ト千太わざと口惜しき思入、お照も口惜しき思入にて、

お照　口惜しいのはお前より、私がどんなに口惜しいか、身に覺えもないことを、指輪をやつたと言掛けられ、旦那の前へ言譯がない。

千太　なに、言譯のねえことはねえ、以前言交した男だと言つてしまへば濟むことだ。

お照　まだ〱そんなことを言つて。

トお照立掛るを輝留めて、

輝　これお照、靜にしやれ、覺えがないといつたとて、言はゞ互ひに水掛論、證據になつてならぬ譯だ。

千太　そつちは證據があるめえが、此方は貰つた此の指輪、是が何より確な證據だ。

ト此時奥より以前のお市、辨山、お常出來り、

お市　さつきからがや〱と、騷々しいから出て來たが、お前は銀行の曲せ者。

辨山　何で此方のお内へ來たのだ。

千太　白川以來尋ねて居た、お照が此方に居る事を、知つて態々尋ねて來たのだ。

お常　お前はさつき湯屋の前で、御新造樣を聞いた人だね。

千太　おゝ内を聞いたはお前だつたか、おらア此方の御新

造の、斯ら見えても昔の情人だ。

お市　何をお前は愚圖々々と、そんなきざな事を言つて娘に難儀を掛けるのだ、なるほど己が白川で娼妓にすると脅した時、百圓出したに違えねえが、何もあの時娘が賴んで、出して貰つた金ぢやあねえ、言はゞお前が醉狂で己に百圓渡したのだ、其時無理に娘から貰つた指輪を種にして、言交した證據などゝ、爰へゆすりに來たのだな。

千太　己アゆすりに來やあしねえ、一旦末は夫婦にならうといふ約束をして置いて、爰の御新造になつたから、當り前なら出刃庖刀でも持つて振込む所だが、どうで立派な旦那衆と競べものにならねえこちと等、見替られるは當り前、然し言交した女をば人に取られて其儘に默つて見ても居られねえから、祝儀がてら今日來たは、是からお照と兄弟の縁を結んで兄となり、旦那のお世話になりてえのだ。

辨山　これ〳〵千太さん、お前のいふのも尤もだが、そんな事を言はねえで、男は當つて碎けろと、早い話にしなさい、お前が百圓出したことは、私も側で知つて居るから、幾らか貰つて上げようから、そんなきざを言はないで、うんと言つて靜にしねえ。

お常　口を出しては濟みませんが、新聞屋にでも聞かれると、直に明日の續き物、ぱつと世間へしますから、爰はこつそりと辨山さんに任してお金を貰ふ方が、上分別でござりますぜ。

辨山　不承でもあらうけれど、私が辯をふるふから、どうか任してくんなせえ。

千太　御親切に有難いが、二十や三十貰つたとて、夏の氷で見てゐる間に、直に消えてしまふから、金をお貰ひ申す氣はねえ、生涯お世話になりてえのだ。

辨山　さう強情を言ひなさりやあ、無據派出所へ次第を申上げにやあならねえ、つまらぬことで拘引され、調を請けて古疵が起るまいものでもねえ、さうした日には藪をつッ突いて、蛇を出す樣なものだぜ。

千太　そりやあお前が言はねえでも、どうで暗え體だから、拘引されて調べられたら脱れられねえ兇状持ち、長く佃へ行かにやあならねえ、お前達も己が金を貰つたからは其時は、一緒に誘つて連れて行くから、馴れてもつらい懲役の味を覺えて汐風に吹かれて、惡事の黑人になんねえ。

　ト此内お常お清に騒いて。

お清　それでは何時かお園さんの、お内へはひつた押込か
　え。

　ト千太ぎつくりして、

千太　何だと。

お照　いえ、お前の體が泥坊に、よく似て居るといつたの
　さ。

千太　なに、此の千太が泥坊だと、何を證據に己が體へ、
　汝等は惡名を付けやあがるのだ。

辨山　これ〳〵千太さん、高が女の言つた事、相手にする
　の大人げねえ。

千太　斯ういふ噂をされた日にやあ、探索方の耳に入り、
　今に繩の掛る體、其時こそは引合に呼出し狀を付けるか
　ら、何奴も此奴も待つてゐろ。

　トきつといふ、お市前へ出て、

お市　これ、お前も上部は氣の利いたいゝ遊び人の樣に見
　えるが、おいらが若い時分に流行た脅しのゆすり文句、
　それをお生で今言ふは箍の緩んだ年でもねえが、あんま
　り時代おくれだぜ、それも堅氣の商人なら恐れもせうが
　餓鬼の折から、見世物小屋で駄菓子を賣り渾名を取つた
　ねぢがねお市、賭博の鋪が初まりで、幾度行つたか知れ
　ねえ私、佃の味も知つて居るから、お前の脅しは喰ひた
　くねえ。

辨山　扨差替つて身の恥を辯じたくもないけれど、飯より
　好な袁彥道で、私も土をば擔いだが辻講釋で叩き込んだ
　國定忠次の話をするので、若い者に可愛がられ、思はぬ
　樂をして來た辨山、私も苦役をして來た體だ。

お市　まん更素人でねえ二人、お前がいくら怖がらしても
　びつくりともしねえから、野暮を言はずと辨山に任して
　幾らか旦那から、貰つて早く歸んなせえ。

　ト千太思入あつて、

千太　黑人がつた事を言つても、まだ素人のお前方、佃の
　味も知つて居ようが高が賭博で八十日の處刑で苦役をし
　た二人、自慢話をする樣だが、十五の年に奧州で八十日
　の苦役が初犯でそれから二犯三犯と、行く度每に等級が
　段段登る泥坊學問、今ぢやあ教師になる程の此科ならば
　何年と、體が暗くなるに付け刑事の律が明るくなり、憚
　りながら今行つても生涯出られぬ終身の、古い手合に立
　てられて凌げぬ夏の暑い夜は、いたはる親仁に夜通しあ
　ふがせ、又冬の夜の寒さにはすりの小僧を辻番替り、日

には幾度數知れぬ差入物の初穗を貰ひ、湯は穢れねえ其内に入る程の松島千太だ、同じ赤い仕着は着ても、筋の違つた己に向つて、手前達が惡黨がつた、知つたか振りは聞くのが大儀だ。

ト宜しく思入にて言ふ。

お市　何だ、御大層な事を言つて、手前よりやアおら達が知つたか振りを聞くのが大儀だ、いゝ男がつた事を言つても己が目からは小僧ッ子の、手前達が脅しを喰つて、引込む樣な己おやあねえぞ、まだ肩上のある時から、四六屋臺の宿場へ賣られ、旅から旅を鞍替へに擔いで歩いた枕探し、評判はしかも舊幕の、墨を直した久利加羅お市、腕を見て物を言へ。

ト片肌脫いでくりからの彫物を見せる。

辨山　今は堅氣になつたけれど、一旦ひゞの入つた體に、相見互ひと中へ立入り、金を貰つて遣らうと言ふのだ。

お市　有難いことゝ三拜して、それを貰つて歸りやあよし、否だと言やあ分署へ訴へ、手前の體へ、繩を掛けるぞ。

千太　それをこつちア待つて居るのだ、さあ爰の内から突出してくれ。

お常　テモふて〴〵しいあの言草。

お清　お巡りさんへ申しませうか。

お照　お知らせ申せば表向、旦那のお恥になる事故、まあ内分にしたがよい。

常清　それだと申して。

お照　はてまあ、靜にしやといふに。

ト お照兩人を留める。

千太　さあ、愚圖々々せずと早く突出せ。

お市　おゝ、突出さねえで、

市辨　どうするものだ。

ト兩人立掛るを輝留めて、

輝　兩人共先づ待ちやれ、隣家が至つて近ければ洩聞えなど我恥辱、さう高聲に申さずに、まあ靜にしたがよい。

お市　邊り近所を憚るから、大きな聲をしたくもねえが、高が知れたごろつきが御大層なことをいふから、默つて聞いちやあゐられませぬ。

輝　それは世上の譬にいふ夫の賣言葉に買言葉、角目立ちしも事丸く己が納める所存故、こなた衆は次の間へ暫く退座してくりやれ。

お市　そりやあ立てとおつしやるなら、お次へ參りませう

けれど、

辨山　私共が居りませなんだら、どんな事をしようも知れねば、

輝　いや、斯う見た所が善悪の分からぬ人とも見えざれば、決して氣遣ひするには及ばぬ。

お市　でも、亂暴な。

兩人　者だから。

輝　はて、兎も角も任して置きやれ。

お照　かうして旦那がお留めなさるは、何か深い思召の、あつてのことでござりませう。

お常　爰は仰せに從つて、お二人さんは一先づ切上げ、

お清　奥へおいでなされませ。

お市　行けとおつしやることだから、行きもしようが相手はごろつき。

辨山　お心好しの旦那様の、所詮手際に行きますまい。

輝　手際に行かぬ其時は、又お前方を頼まうから、先づ構はずと行つて下せえ。

お市　さうおつしやるなら仕方がねえ。

辨山　奥へ行つて今の殘りを、

お照　御馳走になりませうか。

お照　あゝ、ゆつくりとお上りよ。

お市　そんなら、旦那、

辨山　若しお手にあまつたら、

輝　えゝ、口數利かずと、

お清　さあ、おいでなされませ。

ト端唄にてお市、辨山、お常、お清皆々千太へ思入あつて奥へはひる、跡輝思入あつて、

輝　これ、千太殿とやら、最前から此場の樣子、側で親しく聞いた故、どうか無事に扱ひたいが、手前に任してくれまいか。

千太　外ならねえお前さんが、扱つて下さることなら、宜しくお任せ申しませう。

輝　それは千萬忝い、お照、手箱を此處へ。

お照　はい。

ト合方きつぱりとなり、奥へはひり、直誂への手箱を持つて來て、輝の側へ置く、中より金包を出し、

輝　如何なる深き譯あるか、以前の事は存ぜぬが、お照が爲めに白川で、こなたが出した百圓を、今日の土産に進ぜるから、是を持つて歸られよ。

ト輝千太の前へ金包を出す、

千太　有難うはござりますが、此お扱ひでは歸られませぬ。

輝　此の扱で歸られぬとは。

千太　思召しではござりますが、百圓ばかりの金を貰つて、お禮を言つて歸られませぬ。

お照　さうしてお前は何の位、金が欲しいと言ひなさるのだ。

千太　一旦己が白川で夫婦約束したお照、默つて女房にしなさりやあ、言はずと知れた間男だ、昔ならば七兩二分だが、諸式と共に間男も百層倍に値が上り、先七百五十圓だが、其處を一番大負に元直限りに五百圓、手切に金を貰ひてえのだ。

お照　手切などゝは何の事、わたしやお前と其樣な、約束した覺えはない。

千太　今更覺えがあるのないのと、そんなことを言つたとて、こつちは證據のあることだ。

輝　如何なる證據があるかは知らねど、身共は母のお市から、結納遣つて貰つたお照、送籍迄も濟んだ上は、天下晴れての輝が妻、藝者勤の其内に、夫婦約束したとあらば、其節送籍なしたるか。

千太　や。

輝　送籍なければ妻にあらず、表向に公裁を仰がば證據は立たざるぞ。

千太　證據が立つか立たねえは、己が口にあることだ、此頃流行演説の論は上手か知らねえが、罪に落すと落さねえ惡事に馴れた言取りは、是りやア旦那の知らねえこと、出る所へ出て此千太が、恐れながらと言ひ上げたら、毒が變じて藥指、拔差しならねえ指輪の證據、嘘かまことは附石で下地の銀が出ようとも何處が何處迄言交したと、言張る日には私通に落ち、示談にしろと下るは必定、其時こそはお照に遣つた、ダイヤモンドの入つてゐる無垢の指輪に手切を突込み臟品買に踏ましても、三百圓なら買ふ代物、紙屑買なら知らぬこと立派な旦那が百圓とは、あんまり酷い見倒し樣、此相場ぢやあ賣られねえから、出る所へ出て恥をかきねえ。

ト思入あつて言ふ。

輝　いかにもそなたの言ふとほり、罪に落すと落さゞる惡事に馴れた言取は、身共は存ぜぬことなれど、お照が覺えもないことを指輪を證據に言張つて、罪に落すと申すのか。

千太　そりやあわつちが出る所へ、出て喋つたら二人共、罪に落すは造作もねえ。

お照　それでは私が知らぬ事を、指輪を證據に言交したと、いくらお前が言張つても其善惡を分けるのが、それがお上のお役故、言張つたとて通りはしまい。

千太　通らぬ事を言張つて、通すが惡事に馴れた言取り、出る所へ出て腕を見ねえ。

ト輝何と云ふかといふ思入あつて、

輝　いや、腕も臑もあるものか、高の知れた錢貰ひ、素直に出れば百圓を色を付けて二百圓に、直してやるまいものでもないが、そんな脅しを言ふからは、一圓たりとも餘計は遣らぬ、一旦出した金ゆゑに、此の百圓でよくば遣らう、厭なら指輪を證據にして出る所へ出て言つて見ろ、御大層な事は言ふが、己が目からはすりか竊盜、兇器を持つた強盜のまだ大舞臺は踏みはしめえ、田舍を稼ぐ旅役者、鬘の名に呼ぶ千日か五十日の苦役をして、惡黨めいた長臺詞、つじつま合はぬ聲色を聞いて居るのは傍痛い。

ト輝せゝら笑ふ。千太思入あつて、

千太　豪氣に筋なことを言ふが、お前は以前囚獄の、小役人でもして居たのか。

輝　手前も見掛に似合ねえ、目先の見えねえ奴だなあ。

ト輝胡坐をかく。

千太　何と。

トきつとなる。

輝　己を只の金貸と、思つて爰へゆすりに來たか。

千太　え。

トびつくり思入。

輝　こんな事も十四五年維新此方言はなんだが、久し振で浚はうか、元は幕府の昵近で千石取りの何某だが、弘化の頃より德川の威勢が衰へ世の中は所謂強い者勝に徒黨を組んで白晝から、軍用金を名義として、豪家へ押入り强談にて、多分の金を出金させ、遊里へ立入り遣ひ捨て、後には所々へ强盜に入つて巨萬の金を盜み、榮耀榮華をした果が遂には惡事が露顯なし、金瓶樓に遊んで居た其夜座敷へ踏込まれ、無刀に是非なく捕縛され、町奉行の詮議に逢つたが、只借りたとのみ言張つて更に伏罪なさゞるゆゑ、數度牢問に掛けられて手前達が痛さを知らねえ石を抱いたこともある、白狀なしても斬罪の處刑を受ける大罪に、迚も死ぬなら無罪で死なんと、覺悟

を極めし其折柄、上野に於て戰爭起り、五月半ばに雨降つて途に世界の地かたまり、王政復古の代となりて假令重罪の者たりとも一同赦免の令出て、晴天白日の身となりしは、是天朝の御仁政、爰ぞ改心なす時と縁家に預けし金圓を資本となして金を貸したが、元より惡運強き身に、する事なす事大利を得、一度は暗き囚獄に居りしも今は望月輝、刑事に掛けたら百般とも法律心得居る身共、手前達が口先で罪に取つて落さうなどゝは、夫の蟷螂が斧を以て龍車に向ふに等しければ、及ばぬことだ、止しにしやれ。

ト宜しく思入にて言ふ。千太是を聞きびつくりせし思入あつて、

千太　さういふ豪氣なお方とも知らずに爰へゆすりに來たは、わつちの目先が見えねえのだ、つまらぬことを言つたのは、癪にも障りましたらうが、堪忍しておくんなせえ。

輝　堪忍するもしねえもない、惡い事と氣が付いたら、是から手前も改心なし、此の百圓を資本として、商法開いて良民とならば生涯其身の徳だ。

ト千太思入あつて、

千太　いえ、思召しは有難いが、今お前さんの素性を聞き一旦返した百圓を恐れて貰つて歸つたと、後日に人に言はれては、何ぼけちな野郎でも、あんまり意氣地のねえ譯だ、こりやあお貰ひ申しますめえ。

輝　これ、そんな野暮は言はねえで、此の百圓を持つて行け。

千太　お市婆アを甘く見りやあ、又今お前に甘く見られ、なるほど世界は一文上り、是からわつちも功を積み、お貰ひ申す時節が來たら、此の百圓をお貰ひ申さう、先づそれ迄は輝さん、お預け申して置きませう。

ト奥よりお市、辨山出て、

お市　これ、樣子は奥で聞いて居たが、そんな瘦我慢を言はねえで、折角旦那が下さる百圓、

辨山　有難いと三拜して、貰つて行くがいゝぢやあねえか。

千太　そりやあおれも錢がねえから、きざを言つて貰ひに來たが、今日は何と言はうとも此の百圓は貰えねえ。

輝　厭だと言ふならよしにしろ、達て遣らうとは言はねえわ。

ト千太思入あつて、

千太　大きにおやかましうござりました。
　トずッと立上るをお市金包を取つて、
お市　そんならどうでも此金を、貰はずこなたは歸る氣か。
千太　是が堅氣の商人なら、千圓元をおろさにやあ、百圓の金は儲からねえから飛付いても貰はうが、しみッたれな野郎でも百や二百の端た金は、今夜の内にも手に入る體、恥をかいちやあ貰えねえ。
輝　それではよして早く歸れ。
千太　おゝ歸らねえでどうするものだ。
　ト千太思入あつて、門口へ出る。
お市　みす／＼取れる百圓を、
辨山　取らぬは慾を知らねえことだ。
千太　今日其金を取らねえでも、事によつたら命迄。
輝　や、
千太　いや、時節が來たら貰ひに來やせう。
　ト唄になり、千太今に見ろといふ思入あつて、花道へはひる。お市跡を見送り、
お市　いや馬鹿な奴もあるものだ。
　ト輝思入あつて、

輝　相手にするも大人げないから、蟲を怺へて聞いて居たが、あんまり癪に障るから、言はないでもいゝことを言つて、みんなの手前も面目ない。
お照　ほんに旦那が其以前、さういふお方と言ふことは、今日迄存じませなんだ。
お市　何處が何處迄以前から、
辨山　立派な旦那と思ひました。
輝　お照は日頃内氣だから、今の話を聞いたらば、己が厭になつたらうな。
お照　いゝえ、さういふお方なら、わたしや嬉しうござります。
輝　なに、嬉しいとは。
お市　お照も一度懲役に、なつたことがござります。
輝　そりや又何で。
お市　旦那、レコでござります。
　ト指をかぎにして見せる。
お照　あれおつかさん、そんなことを。
輝　そりやあさつぱり知らなんだ。
辨山　眞逆湯屋でもありますまいね。
お市　今は堅氣な御新造だが、以前は宿場の枕搜しさ。

お照　あれ恥かしい、そんなことを。

ト　お照袖で顔を隠す。

輝　辨天といふ渾名を取つた此美しい顔を持つて、

お市　枕さがしを、

辨山　したといふのは。

輝　蛇喰ふと聞けば恐ろし雉子の聲。

お照　え。

輝　人は見掛けに、

ト　お照の顔を見るを木の頭。

よらないものだ。

ト　につこり笑ふ、お照は恥しきこなし、此模様宜しく端唄にて、　ひやうし　幕

四幕目

神樂坂明石屋の場
宮比町裏長屋の場

役名――明石屋島藏、松島千太、明石屋の若い者徳藏實は野州徳、磯右衛門、人力車夫げんこの半太、古道具屋眼七、島藏伜岩松、島藏妹お濱、女髮結お常、丁稚三太、其他。

（明石屋の場）――本舞臺四間通しの屋體、下手一間土間上手二間常足の二重、本庇本縁付き、此の上一間の間平戸の戸棚、此の下鼠壁諸帳面を掛け上手一間障子附屋體、下落間、向う二段に呑み口付本物の酒樽を並べ、此前に升、漏斗を入れし桶よき所に味噌樽、鹽笊を置き下の方一間物置き、内に醬油樽の書割、此前に駒寄内に大半切、一升樽五六本あり、軒口に明石屋といふ紺暖簾を掛け、舞臺に長床几を二脚並べ總て牛込神樂町酒見世の體、二重にお濱二幕目の娘前垂掛にて帳を付居る、平舞臺に序幕の徳藏柿素の着付同じく前垂、若い者のこしらへにて立掛り、門口に車夫半太花色の筒ッぽ、同じく半股引人力車夫のこしらへ、ガラス徳利を持ち、土捏作藏紺の印半纏三尺帶同じく徳利を持ち、立掛りゐる、合方飴屋の唐人笛にて幕明く。

徳藏　お前さんは何を上げます。

半太　いゝのを二合ついでくんねえ。

ト　徳利を出す、徳藏受取り、

徳藏　いゝのは一合二錢でござりますが、宜しうござりますか。
半太　一里四かにやあ六錢の錢の取れねえ人力車が、二合呑んぢやあ合はねえが、僅なことで二錢五厘は水ッぽくて呑まれねえ。
徳藏　いえ、私共の內の二錢五厘は、水ッぽいことはござりませぬ、外の內の三錢と同じことでござります。
半太　同じことなら五厘でも、安い方にしようかね。
お濱　まあお口に合ふか合ひませぬか、ちよつと上つて御覽じませ。
ト此內徳藏利き酒を茶碗へついで出す、車夫呑んで、
半太　なるほど是はいゝ酒だ、是を二合ついでくんねえ。
徳藏　はい〳〵、畏りました。
お濱　お負け申して上げなよ。
徳藏　はい〳〵。
ト酒をつぐ。
作藏　お前の所は新見世だが、賣り物がいゝに、量りがいいから、客の絕えることがないね。
お濱　引札替り當分は、品のよいのを元直限り、お安く上げますでござります。
半太　何でも今の世の中は、よくッて安く賣らなけりやア、大きな商ひはありやあしねえ。
作藏　然し元直のある商賣、泥坊ならば知らぬこと、さう安くは賣られまい。
トお濱ぎつくり思入、徳藏は徳利を出し、
徳藏　たつぷりお負け申しました。
半太　そりやあ何より有難い。
徳藏　お前さんに何を上げます。
作藏　おいらは醬油を二合くんねえ。
徳藏　醬油は並が二錢五厘、よいのが三錢でござります。
作藏　お前の所は物がいゝから、二錢五厘にして置かう。
徳藏　はい〳〵畏りました。
作藏　わたしやあ左官の土こねだが、此頃下町へ仕事に行くので、辨當の菜を辛く煮るので、醬油が澤山入つていけない。若い衆、氣をつけてついでくんねえ。
徳藏　おつしやいませずと五勺ほど、お負け申してござります。
ト徳利を出す、
作藏　それぢやあ天保が六枚に、青が一文。
半太　おいらは銅貨で五枚あるよ。

德藏　ト兩人錢を出す。是は有難うござります、はい代濟。
ト錢をくすねて錢箱へ打込む。
半太　どれ、内へ行つて一ぱいやらうか。
作藏　今日はしつかりになつたと見えるね。
ト兩人捨ぜりふにて花道へ行き、
今の酒屋の若い者が、ちよろり錢をくすねたが、爲めにならねえ奉公人だ。
半太　彼奴は野州德といふ奥州海道の人力だが、どうして此方へ來て居るか。
作藏　油斷のならねえ奴だねえ。
ト兩人思入あつて、右の鳴物にて花道へはひる。
お濱　岩松が招魂社へ行つたぎりで歸らぬ故、跡から三太を迎ひにやつたが、木乃伊とりが木乃伊になると譬の通り、同じ樣に遊んで居ると見えるわいな。
德藏　おつしやる通り三太どんも、遊んで居ると見えますが、私が行つて見て參りませう。
お濱　跡が私一人では、お客が來た時困るゆゑ迎ひに行くには及ばぬが、達者の體でない岩松、早く歸つて來ればよいに。

ト拵つた合方になり、花道より前幕の島藏羽織雪踏にて出來り、花道に留り、
島藏　己が持つて居る短刀を、望月といふ金貸がどういふ望みがあつてのことか、昨日百圓に直を付けたに賣らぬ故に段々付上げ、今も道具屋へ寄つたらば、二百圓迄買ふといふ由、思ひ掛ない此金の我手に入るも福島屋へ返す時節が來つたか、是に付けても仲町から何れへ今は行かれたか、早く在所を知りたいものだ。
ト本舞臺へ來り、
お濱　今歸つた。
お濱　おゝ兄さん、お歸りなさんしたか。
島藏　川岸から歸りに一二軒、寄道をしたので遲くなつた。
德藏　旦那樣お歸りなされませ、相場は如何でござりました。
島藏　引續いての入津で、灘物が二割下り、小賣見世は賣りよくなつた。
德藏　それは宜しうござりますな。
島藏　今日は見世は如何だつたな。
德藏　今少し途切れましたが、朝から立續けで、二時を打

つてお晝をば食べるくらゐでござります。
島藏　そりやあ大きに御苦勞だつた。
お濱　三太が役に立たぬから、見世のことから持出し迄、皆徳藏が一人でする故、大抵なことおやござんせぬ。
島藏　小賣店はうつとしいから、よく働いてくれさへすれば、此方も骨は盗まない、芝居でも見せてやるから、それを樂しみに働いてくれ。
徳藏　私の樣な不調法者を遣つて下さりますれば、決して骨は惜しみませぬ。どうぞ旦那末長く、お目を掛けて下さいまし。
島藏　こなたさへ辛抱すれば、此方は何時迄も遣ふ氣だ。つい忙しいので聞かなんだが、是迄何處に奉公してゐた。
徳藏　いえ、奉公は此方が初めて、年は取つてをりますが、初奉公でござります。
お濱　さうして徳藏、そなたの生れは。
徳藏　へい、私は野州の佐野でござります。
島藏　酒屋は外の生業と違ひ、歩くのが元手だが、足は丈夫であらうな。
徳藏　實は是迄奥州で人力を曳いて居りましたから、歩きますのは何里でも、大丈夫でござります。
島藏　それは何より望むところだ。
ト徳藏思入あつて、
徳藏　いや、旦那がお歸りなすつたら、裏の炭を今の内積込んでおきませう。
島藏　おゝ今夜はどうか降りさうだ、御苦勞だが積んでくれ。
徳藏　畏りましてござります。
ト合方にて徳藏下手へはひる、島藏跡を見送り、
島藏　お濱、あの男はどうだな。
お濱　大層よく働きまして、氣が利いてをります。
島藏　然し男の奉公人は、間抜はいゝが氣が利いて居るのは、えて油斷がならねえから、手前よく氣を付けてくれろ。
お濱　そりやもう氣をつけて居りますわいな。
ト合方唐人笛になり、花道より岩松着流し、草履下駄、樫の杖を突き丁稚三太付いて出來り、
三太　岩松さん、あぶないから靜においでなさいまし。
岩松　大きに遲くなつたから、少しも早く歸りたい。
三太　轉んで怪我でもなすつては、私が濟みません。

岩松　なに、杖があれば大丈夫だ。

ト杖を突き跛の思入にて舞臺へ來り、

伯母さん大きに遲くなりました。

お濱　おゝ、岩松歸つたか、平生より遲いから、三太を迎ひに遣つたわいの。

岩松　有難うござります。

三太　丁度噴水の所で、お目にかゝり、直にお連れ申しました。

ト岩松前へ出て、

岩松　おとツつアんお歸りなさいましたか。

島藏　招魂社へ行くならば、一人で行かずに三太をば一緒に連れて行くがよい。

岩松　今度から左樣致しませう、今日も一人で參つた故、いぢめられましてござります。

島思　なに、いぢめられたとは。

ト誂への合方になり、

岩松　何時もわたしをいぢめます惡童子が大勢で、酒屋の跛々とはやし立てゝいぢめた上、杖を持つて行きましたを、丁度其處へ來合せて叱つてくれたお人があつたが、是もわたしと同じ事、やつぱりびつこでござります故、惡童子が馬鹿にして言ふ事を聞かぬ所へ、お巡り樣がおいでなされお叱りなされましたので、杖を置いて一もくさんにみんな逃げて行きました。

島藏　それはあぶないことであつた、今も己がいふ通り、此後一人で行かぬがよい。

お濱　さうしてお前と同じ樣な、片足惡い其お人は。

岩松　まことに見るから親切な、よいお人でござりますが、不思議なことにはわたくしと同じ左の足の怪我、話を聞けば月日も替らず同じ四月二十日の晩、切られた時刻は十二時前。

島藏　え。

ト思入あつて、

すりや四月二十日の晩、十二時前に切られしとか。

お濱　若しやいつぞや兄さんが、お話しなされし其人なるか。

島藏　して、其人の年恰好は、

岩松　年は五十位にて、鼻は高く目は大きく、よい恰幅でござります。

三太　わたしも側で見て居ましたが、役者で言へば高島屋に、よく似てゐるかと思ひました。

ト島藏思入あつて、

島藏　扨はいよ〳〵其人なるか。

お濱　そんなら、お前が。

島藏　これ、

ト抑へて、

三太手前は裏へ行つて、炭を積む手傳をしろ。

三太　畏りました。

ト三太下手へはひる、島藏思入あつて、

島藏　正しくそれと思はるゝが、して其人の内は何處だ。

岩松　三太が急ぎまするので、つい聞かずにしまひました。

島藏　内が知れたら早速に、是から尋ねて行かうもの。

岩松　粗相なことを致しました。

島藏　はて殘念なことだなあ。

ト殘念な思入。

お濱　これ岩松、臺所が不用心故、奥へ行つて見て居てくれ。

岩松　はい、張番をして居りませう。

ト合方にて岩松びつこを引き奥へはひる。島藏思入あつて、

島藏　豫てそちにも言ふ通り、少しも早く返し度く、此間も仲町へ行つて樣子を聞いたれど、借金故に行先が口留めがしてあることやら、何處で聞いても曖昧にて浦和在へ逼塞せしと、差配人さへまことを言はねば詮方なさに諸々方々、草を分けて尋ねる折柄、悴が逢つたは正しく其人、所を聞いてくれたなら、かゝる苦勞はせまいもの。

お濱　それほど世話になつたらば、所を聞けばよかつたに、利口な樣でもまだ子供、何故聞いては來なんだか。

島藏　今更言つても返らぬことだ。

ト合方きつぱりとなり、花道よりお仲島田髷、落ぶれし世話娘のこしらへにて出來り、

お仲　此五月迄淺草で、何不自由なく居たものが、不仕合せ故是非なく〳〵、生れし所を立退いて今は幽な裏家住居、常が御膳は炊いてくれゝど髮を結に出た留守は、馴れぬ買物せねばならぬ、思へばつらいことぢやわいな。

ト本舞臺へ來り、門口を行つたり來たりする、此内島藏思案の思入、不圖お仲を見て、

島藏　これお濱、あの娘御はさつきから行つたり來たりして居るが、何を尋ねるのだか聞いて見やれ。

お濱　はい、聞いて見ませうわいな。
　ト門口へ出て、
　もしお姉えさん、何ぞお尋ねなされますのか。
　トお仲間の惡さうな思入にて、
お仲　こちらは酒屋でござりますな。
お濱　はい、左樣でござります。
お仲　どうぞお醬油を二合持つて來て下さいまし。
お濱　畏まりましてござりまする、どちら樣でござりま
す。
お仲　宮比町の米屋の裏でござります。
お濱　只今持つて上りますが、お名前は何とおつしやりま
す。
お仲　福島屋と申します。
お濱　醬油はよいのに致しますか、並のに致しますか。
お仲　よいのが宜しうござりまする。
お濱　畏まりましてござりまする。
　ト合方にてお仲恥しさうに花道へはひる。跡を見送
り、
島藏　お濱、人柄のいゝ娘御だな。
お濱　醬油を小買にする樣な、御身分ではござりますま
い。
島藏　何でも以前は立派な内の、御孃樣に違ひない、家名
は何とか言つたな。
お濱　福島屋とおつしやいました。
　ト島藏思ひ出せしこなしにて、
島藏　むゝ、福島屋といふからは、若しや淺草仲町の、
お濱　そんならお前が尋ねなさんす、
島藏　今の娘の樣子では、己が尋ねる人かもしれぬ。
お濱　少しも早く德藏に、今の醬油を持たしてやり、内の
樣子を見させませう。
島藏　いや、德藏より己が行き、尋ねる人か人でないか、
素知らぬ振りで見て來よう。
　ト島藏德利へ醬油をつぐ、此内花道より二幕目の磯右
衞門脚絆草鞋、竹笠雨除の莚を引掛け出來り、
磯右　先達て來た郵便に、所書から番地迄委しく書いてあ
つたので、倅の内が直に知れた、昔と違つて番地のある
ので、まことに便利のいゝことだ。
　ト舞臺へ來り、門口の表札を見て、
お、此處だ〳〵。
島藏　や、あの聲は。

ト お濱出て、
お濱　おゝお前は父さん。
磯右　娘達者か。
ト島藏見て、
島藏　これは親父樣、よく出掛けておいでなされました。
ト奥より岩松出來り、
岩松　おぢいさん、御機嫌宜しうござりましたか。
磯右　おゝ岩松、其方も達者か。
お濱　まあ、何はともあれ足を洗つて、此方へお上りなされませ。
ト磯右衛門椽へ腰を掛ける。お濱盥へ水を汲み、磯右衛門の足を洗つてやる、皆々捨臺詞あつて、
磯右　漁夫はすれど舟よりも陸を歩く方がいゝから、足に任して出て來たが、三人達者な顏を見て草臥れたのもさつぱり忘れただ。
島藏　疾にも是が知れたらば、品川迄も私が今日お迎ひに出ますもの、何故郵便を下さりませぬ。
磯右　先達て己が言つた、意趣を爰で返されたが知つての通り書けぬ故、人頼みをするも面倒、それ故手紙を出さなんだ。

お濱　さあ〳〵足は宜しうござります。
岩松　お祖父さん、是へおいでなされませ。
磯右　おい〳〵、爰らが居所によからう。
トよき所に住ひ、
今日は旅の憂さを忘れ、内へ歸つた樣ぢやわい。
島藏　先づ御機嫌のよいお顏を見て、私初め三人とも、
お濱　まことに嬉しう、
三人　ござりまする。
磯右　己も替ることのない、三人の顏を見て、こんな嬉しいことはない。
島藏　して今度お出掛けなされたは、何ぞ火急な用事でもあつてのことでござりますか。
磯右　別に何も用事はないが、沖藏めがお濱をば是非とも呉れろと迫る故、手前が内を持つたを幸ひ、岩松諸共よこしたが其後度々替りのないことを手紙で知らしてくれたが、今もいふ手が書けねば内證の事をあからさまに人に言はねばならぬ故、それらこれらで東京へわざ〳〵出て來て其實は、孫の顏が見たいからだ。
お濱　嘸さうでござりませう、然し明石にをつたより、水が合つてか岩松もまことに達者でござりますから、澤山

顏を御覽なされませ。

ト岩松を前へ出す、

岩松　私も祖父さんの顏が見たうござります。

磯右　おゝ、まツ黑なちいが顏、とつくりと見てくりやれ。

ト岩松を引寄せ嬉しき思入、

お濱　さうして内は誰ぞに賴み、此方へおいでなされましたか。

磯右　なにもない氣散じは、隣の小母御に留守を賴み、其身其儘出て來たのだ。

島藏　よく尋ねて來て下さいました、まあゆつくりと逗留して、所々を見物なされませ。

磯右　今日神奈川から鐵道で、新橋とやらへ來た時に、こりやアメリカへでも來はせぬかと、煉瓦造りにびつくりした。

島藏　まだ〱あんなことではない、諸官省から三井の銀行、見る所は澤山あります、先づ何よりか爰から近い招魂社へ、明日にもお參りなすつて御覽なさい。

磯右　博覽會を見に來たものが、歸つてからの話しに聞いたが、大層立派だといふことだ。

島藏　是から毎日私が、案內者になりますから、ゆつくりと御見物なされませ。

磯右　國へ土產に殘る所なく、見物をして行きませう、いや土產といへば悅ばすいゝ土產の話がある。

島藏　そりやどんな話でござりまする。

磯右　手前を載せて明石浦で難船をした波六が、助舟に引上げられ、危い命を助かつたぞ。

お濱　父さんそれは此間の、手紙に書いてござんしたぞえ。

磯右　おゝ、手紙に書いてよこしたか、年を取ると同じ事を幾度も言つてならぬ。

島藏　此間のお手紙に、其事がござりまして、まことに安心致しました。

お濱　まあ、何は兎もあれ父さんも、嘸お勞れでござりませうから、奧へおいでなされませ。

岩松　久し振で私が、足を摩つて上げませう。

磯右　それは何より忝い、詞に從ひ奧へ行き、

島藏　悴を相手に何やかや、

お濱　お話しなさるもお樂み、

磯右　どれ、ゆつくりと話さうか。

ト　お濱岩松礒右衞門を伴ひ、奥へはひろ。島藏思入あつて、

島藏　福島屋へ返す金もやう〳〵昨今五百圓、金の員數が揃つた故、そつくり返して身の科を直に自首なし御處刑受け、まことの人に歸るのは、もう遠からずと思つたも、寸善尺魔は兄弟分の千太に昨日出逢つたが、尋ねて來るに違ひないが、願ひが成就せぬ内に事の破れに成らねばよいが、包む惡事が露顯なし、若し捕れでもした時は、今日わざ〳〵尋ねて來た親父に苦勞を掛けねばならぬ、どうぞ國へ歸る迄此身を無事にしたいものだ。

ト　島藏腕を組み思案の思入。奥より以前のお濱出て、

お濱　もし兄さん。

ト　大きく言ふ。

島藏　え、、びつくりした。

お濱　なに、忘れたことがござんすぞえ。

島藏　忘れたこと、は。

お濱　さつきおいでの娘御が、頼んで行つた醬油をば。

島藏　お、親父が來たので遲くなつた、一走り行つて來ようか。

ト　德利を取上げる。

お濱　お前が行かずと德藏にでも。

島藏　いや、行つて樣子を見て來よう。

お濱　それなら兄さん。

島藏　親父の世話を賴んだぞ。

ト　時の鐘合方にて島藏德利を提げ、花道へはひろ。お濱跡を見送り、右の合方にて道具廻ろ。

（福島屋の場）本舞臺三間の間常足の二重、正面一間押入戸棚下手鼠壁、此前に簞笥、上に厨子入の阿彌陀佛位牌三ツ具足を並べ、上の方一間跡へ下げて臺所、内に一ツ竈置流し、水桶臺所道具宜しく、いつもの所門口、下の方九尺一間腰障子三尺戸袋總て宮比町裏長屋の體。二重上手に清兵衞やつし裝にて住ひ下手眼七羽織着流しにて煙草をのみ居る。跡へ下りてお仲火鉢へ鐵瓶を掛け、破れ團扇であふぎ居る。道具半程より稽古唄にて道具留ろ、と合方彈流し、

清兵　眼七殿、よく尋ねて來て下すつた。

眼七　疾から上らうと存じましたが、扨貧乏暇なしで御無沙汰を致しました。

清兵　世にある時は朝夕に來ずともよい者迄が、ちやほやといつてよく來れど、斯う落ぶれては誰一人尋ねてくれる者はない。

お仲　わざ〳〵尋ねて下さんしたは、私が踊を稽古した、西川の御師匠さんばかり、

眼七　巳異造さんは新場にもいつか出ました親孝行、不斷あなたの噂をよく申して居りました、いや親孝行と申しますれば、鬼灯屋の息子をば御存じでござりませうな。

清兵　よく淺草居廻りを、毎日賣つて歩いた小僧か。

眼七　あれが親父は本所の三笠町に居りました、七郎助といふ紙屑屋、元は槍を持たした身分で、石取でござりましたが、瓦解此方零落なし、ひどい難儀を致しましたが、先頃領地の百姓がわざ〳〵國へ呼迎へ、田地を分けてくれたので、今は樂な身分になり百姓をして居りますさうだが、何でも人は正直でなければ惠みはござりませぬ。

清兵　それは何にしろ仕合せなことだ、人のことでも喜ばしい。

眼七　旦那も常からお慈悲深く、正直なお生れ故、今によいことがござりませう。

清兵　其の紙屑屋が仕合せも鬼灯賣が孝行故、それに引替へ娘のお園、娘心の後先見ずに親を捨てし不孝者。

眼七　お園さんをお貰ひ申した、六三どのは參りますか。

清兵　以前なれば勘當をする所なれど當節故、是非なくお園はやつたれど、出入は留めて音信不通。

眼七　それは疾より私も承はつてをりましたが、夜るでも內證でこつそりと上ることかと存じましたが、それではまことにお出入なく、音信不通でござりますか。

お仲　せめて私の所迄、お姉えさんからお文でも參りさうなものなれど、何の便りもござりませぬ。

眼七　其のお便はござりますまい。

お仲　そりや何故に。

眼七　御存じなくば私がお話しを致しますが、六三殿が瘧を煩ひ久しく仕事に出ぬ所へ、かてゝ加へてお園さんが同じ病ひで此頃は、二人共日震ひで枕を並べて寢て居れば、實の事は其日に困り、私方へ此間いらぬお道具を五圓ほど賣つた位でござります。

清兵　親を捨てゝ出たからは、天の罰でも其位な報いはなくてならぬ筈だ。

お仲　すりや六三さんも姉さんも煩うてござんすとか、ちよつと見舞に行きたいにも、表向では行かれぬ身の上、

心柄とはいひながら、おいとしいことでござりますな。

眼七　お二人共に旦那樣の、罰で斯ういふ憂目を見ると、いつそ悔んでゝござります。

清兵　親の許さぬ色戀をすれば必ず其通り二人共瘧を煩ひ、其日に困る難儀をするも、世間の娘のよい戒め、親はさのみに思はねど、天がお許しなさらねば、憂目を見るは當りまへぢや。

ト床の淨瑠璃になり、

上るり〽口には言へど恩愛に不孝な子程不便が增し、塞がる胸の門口を明けて入來る仙次郎、

ト清兵衞お仲ぢつと思入、此内花道より仙次郎羽織着流しにて出來り、門口に窺ひ居て、

仙次　清兵衞殿、内でござるか。

清兵　や、竹の塚の仙次郎殿、よく此處が知れましたな。

仙次　こなたが爰に居ることは、慥に聞いて今日來たのだ。

眼七　まあ此方へお通りなされませ。

仙次　お前は廣小路の道具屋さん、貸金でもあつてござつたのか。

眼七　いえ左樣ではござりませぬ。

ト仙次郎眞中へ住ひ、お仲盆へ茶碗を載せ、

お仲　はい、お茶をお上りなされませ。

仙次　おゝお仲坊、ちつと見ぬ間に大きくなつた、是ではお嫁に行つてもよいな。

お仲　そんな事は存じませぬわいな。

清兵　手前が爰に居りますのを、何處でお聞きなされました。

仙次　どんな所へ逃げようとも、昔と違つて區役所で籍を質せば直に知れる、外國へでも行つたら知らず、内國中に隱れて居れば知れぬといふことはない。

清兵　まことに以てお前樣には、申譯もないことながら、もう少し待つて下さりませ。

仙次　いや待つことはなりませぬ、愛敬もなく斷るのも、金を借りた其晚に其方も金を盜まれゝば、此方も證書を盜まれて、其趣は双方から分署へお屆けなしたれば、貸した借りたは判然すれど、惚れたお園の聟にすると蟒めが口車にうつかり乘つて抵當の地面を外へ賣られてしまひ、半金返して半金は持參金にしてくれとの賴を聞いたも聟になりたさ、本書の出る迄假證取り、いで婚禮といふ晚に白無垢の儘お園に逃げられ、馬鹿にされた仙次

郎、是ではどんな色事師でも敵役にならねばならぬ、詰りが持參の五百圓を、百圓宛五ケ年賦に取つてくれとの達ての頼みに、當金百圓入れたらば待つてやらうと大負に、負けてやつたに其金を、今日の明日のと言延し、とどの仕舞が隨徳寺、あんまり酷い仕方だから、今日は是非共約束の、金を取らねば歸らぬぞ。

清兵　御尤もでござりますが、先達も申す如く親類共へ頼母子を擬て頼んで置きましたれば、初會を振る迄暫しの內、どうぞ待つて下さりませ。

仙次　いや／＼、今日は待たれぬ／＼、其の頼母子の言譯も是迄幾度聞いたか知れぬ、何でもかでも今日は百圓金を取らねば歸らぬのだ、達て金が出來ぬなら百圓替りに此妹を、私が女房に下さるか。

清兵　思召しは有難いが、餘り年が違ふのに、唯今是が居りませぬと、實に朝夕困りますから、其儀は御免下さりませ。

仙次　そんなら百圓渡さつしやるか。

清兵　さあ、それは。

仙次　妹を替りに下さるか。

清兵　さあ。

仙次　さあ。

兩人　さあ／＼／＼。

仙次　二つに一つの返事をさつしやれ。

〽のツ引ならぬ此場の切羽、眼七見兼ねて中へ入り、

ト仙次郎きつとなる、眼七見兼れて、

眼七　さうおつしやるのは無理ではないが、今清兵衛さんの言はるゝ通り、百圓取の頼母子が、きつと今月出來る約束、此の眼七が世話人故請合人に立ちますから、それ迄お待ち下さりませ。

仙次　いや／＼それ迄待つことならぬ、金が出來ず妹を呉れずば、召連れ訴へをせねばならぬ、さあ己と一緒に來さつせえ。

〽胸ぐら取つて引立つるを、

ト仙次郎清兵衛の胸ぐらを取り引立てるを、眼七止めて、

眼七　まあ／＼お待ちなされませ、是が亂暴人といふではなし、借貸の一件ではお取上げはござりませぬ。

仙次　あつてもなくても連れて行くのだ。

眼七　そんな野暮をおつしやらずと、私にお任せなされませ。

仙次　いや〳〵、任すことはならぬ〳〵。
眼七　お仲さんがお望みなら、私がお世話を致しませうから、どうぞ任して下さりませ。
仙次　まこと世話をすることなら、任してやるまいものでもない。
眼七　きつとお世話致しますから、一緒においで下さりませ。
仙次　外へ行かずと、つい爰で、
眼七　爰では話が出來ませぬ。
仙次　それだといつて、
眼七　はてまあ、おいでなされませ。
〽氣轉きかして眼七が、無理に引出し耳に口、旨い話に乘せられて、打連立ちて出て行く、
ト眼七無理に仙次郎を門口へ連出し囁く、仙次郎うなづき兩人下手へはひる。
〽跡に清兵衞茫然と、
清兵　仙次郎殿が尋ねて來て、催促するも無理ではない、是迄世間へ隱して居たが、二千圓からかさみし借財、無據地所を放し、衣類道具も賣拂ひ、今は纔一圓の金にも困る身となれば、親類中で賴母子講が出來るといふも僞にて、ほんの一囘脫れの言譯、まだしも其晚抵當の、證書を盜み取られたが、今では此方の仕合せなるか。
お仲　今日は折よく眼七さんが、連れて行てくれたれど、
清兵　明日又來たらば言譯も、
お仲　泣の涙に袖濡れる、
清兵　時雨降る夜の冬近く、
お仲　哀れ身にしむ秋の暮、
清兵　思へば果敢ない、
兩人　身の上ぢやなあ。
〽親子手に手を取交し、涙に咽ぶ折柄に、德利携へ島藏が確に爰とうなづきて、門へ立寄り小腰を屈め、
ト此内清兵衞お仲宜しく思入、よき程に花道より以前の島藏德利を提げ出來り、花道で向うだといふ思入あつて舞臺へ來り、門口から内を窺ひ、
島藏　へい、御免下さりませ、福島屋樣はこちらでござりますか。
ト兩人門を見て
清兵　はい、手前でござります。
島藏　先刻お醬油をさうおつしやいましたが、あいにく男が居りませず、大きに遲なはりましてござりまする。

お仲　持つて來て下さいましたか。
島藏　是へ持つて參りました。
清兵　代はいかほどでござります。
島藏　二合六錢でござります。
清兵　あひにく買つた錢がなく、こりや一錢足りぬわい。
島藏　代は何時でも宜しうござります。
清兵　それでは一錢貸して下され。
お仲　はい、五錢ござります。
ト錢を出す。
島藏　有難うござります。
ト錢をとり、
旦那樣は淺草でお見掛け申したと思ひますが、以前は彼方でござりますかい。
ト清兵衛ぎつくり思入あつて、
清兵　いや、それは大方人違ひ、私は以前は芝の者、淺草に居たことはない。
島藏　左樣でござりましたか。
お仲　さういふお前は淺草に、居なさんしたのでござりますか。
島藏　いえ、私も淺草に居つた者ではござりませぬ。

清兵　大きにお世話でござりました。
島藏　左樣なら又何ぞ、御用をお願ひ申します。
〽二足三足行き掛けしが、
正しく今のは福島屋、以前の住居を隱すのは。
〽何か仔細の有樣と、深き樣子を探らんと暫し小蔭に身を忍ぶ、
ト島藏思入あつて下手へ入る、
〽内には斯と知らざれば、娘は親に打向ひ、
ト床の合方になり、お仲思入あつて、
お仲　もしお父さん、お願ひがござりますが、お聞きなされて下さりますか。
清兵　改つて此の親に、そちが願ひがあるといふは。
お仲　外のことではござりませぬが、私をどうぞ吉原へ、勤めにやつて下さりませ。
清兵　そりや何故に。
お仲　昨夜貴方が夜長故、お目が覺めての一人言に、
〽千圓借りし大事の金、其夜忍びし白浪に盗み取られて疵を受け、片足きかぬ身となれど、杖と賴まん人もなく、
仙次郎殿へ返す金が、

〽出來ねば死ぬより外はないと、さめ〴〵泣いておつしやるを、馴た振をして聞く悲しさ、それ故苦界へ身を沈め、お金を借りてお命を、お助け申したい故に。

〽お許しなされて下されと、言ふに父親面目なく、

ト此内お仲さはりの振宜しく、清兵衞思入あつて、

清兵　扨は昨夜の我愚痴を、それは目が覺め聞いて居つたか。あゝ面目ないことではある、是に付けても親を捨て、婚禮の夜に家出せし、不孝な姉に引替へて、其身を苦界へ沈めても親の難儀を助けたいとは、世にも稀なるそちが孝行、志しは忝いが、今手放す其時は跡に殘つた片輪の己が、仕樣模樣もあらざれば、娼妓にならうといふ事は思ひ止つてくりやいの。

お仲　其の後々はお常が引受け御不自由の、ない樣に致させますから、私の願ひをお叶へ下さりませ、實は最前お常に話し、口入をなすその人に、賴んで貰ひましたわいな。

清兵　すりやお常にも打明けて、此事を賴みしとか。

お仲　お常も初手は止めましたが、どうでも此身を沈めねば家の立たぬ入譯を委しう話して聞せし故、さういふ事なら兎も角も、口入へ行つて其道の樣子を聞いて參りませうと、さつき參りましたわいな。

清兵　年は今年十六なれど、年弱故に十五年何ヶ月といふそちが身で、娼妓にならうと覺悟せし其心根が不便でならぬ、以前の身ならお孃樣で、何不自由なく致させんに斯零落なしたるも、元はといへば我越度、年端も行かぬ其方に迄、斯樣な苦勞をさせるといふは、思へば廣い世の中に助ける神も佛もないか、あゝ情ないことぢやなあ。

〽我身を悔み清兵衞が、世に捨てられし果敢なさをかこち涙に暮れにける、門に窺ふ口入の老婆が鼻を打ちかめば、お常は怺えずわつと泣込み、

ト清兵衞宜しく思入、此以前下手より前幕のお常、お欲出て、門口に窺ひ兩人宜しく愁ひの思入あつて、此内お常わつと泣きながら内へはひる。

お常　旦那樣、御尤もでござります。

清兵　おゝ、お常か。

お常　樣子は門で承りましたが、お慈悲深いお前樣が、こんな御難儀なされまするは、おつしやる通り世の中に、神も佛もござりませぬ。

ト聲を上げて泣く、お欲介抱しながら、

お欲　お、お常さん尤もだが、只さへ悲しいお二人さん、お前がそんなに泣出しては、猶々涙の止度がない。

お常　それでも小さい時からして、お育て申したお孃樣があんなことをおつしやるかと、思ふとわたしや悲しうて、とても泣かずに居られませぬ。

トお常又泣く、お欲手拭で顔を拭いて遣り、

お欲　さあ／＼い、加減に泣止みなせえ。

ト拭きながら、

何處が顔だか知れやアしない、成程妙にへこんだ顔だ。

お常　顔はへこんで居るけれど、人にへこまされたことはない、餘計なことをお言ひでない。

清兵　こりやお常、其方へ娘が身の上を頼んだと申す事だがいよ／＼それに相違ないか。

お常　はい、お仲樣が達てのお頼み、餘儀なく近所に居りまするお婆さんに譯を話しましたれば、さういふことなら娼妓より、藝者の方がよからうと申しましてござりまする。

トお欲前へ出て、

お欲　これは旦那樣、御免下さりませ、私は此町内に居りまする口入婆でござります、お常さんとは日頃から御懇意に致します故、お内の事は疾からして承はつて居りますれば、お氣の毒でござりますから、藝者をお勸め申しましたが、娼妓と違つて客を取り身を穢さずに濟みますから、先づ其方になすつた方が、宜しからうと存じます。

お常　丁常幸ひ長唄をよくお唄ひなさる上、踊も多く御存じなれば、打つてつけかと存じます。

お欲　先づ當分百圓借り、向うで座敷の取廻し座附や端唄を仕込む内、何ぞよいことがあつて、お金がお手に入りましたら、話合で金利を出し、取戻して上げませう。

お仲　女郎と違つて藝者なら、猶更嬉しうござります。

お常　こりやお仲さんのお願ひを、お聞きなされて金を借り、難儀をお脱れなされたが、宜しいかと存じます。

清兵　成程其方が申す通り、一時の難儀を助かつたがよいとは思へど仲町と、緣隔てし吉原で、藝者をさせるは家の恥。

お常　そりや左樣でもござりませうが、以前の立派なお內と違ひ、今は斯樣なお住居故。

お欲　お孃樣のお願ひ通り先づ藝者になさいまし、お美し

いから大鯰が必ず掛るに疑ひなし、さうなる時は恥所か、却つて見得になりまする。

清兵　成程お前の言ふ通り、身を捨てこそ浮む瀬もあり、詞に從ひ吉原へ、娘を藝者にやりませう。

お仲　そんなら私が願ひを叶へ、

お常　お聞き濟み下さりまするか。

まことに是非なきこと故に、

〽跡言ひさして淸兵衞が、又も我身をかこち泣く門に始終を立聞く島藏、親子にかゝる苦をさすも我なす業と後悔なし、共に淚を拭ひける、

ト此以前下手より島藏出て、門口にて宜しく思入、お欲こなしあつて。

お欲　御得心なら先方へ、少しも早く話しませう。

〽言ふ折門に窺ふ島藏、小腰屈めて內に入り、

ト島藏門口を明け內へはひる。

島藏　憚ながら其お話を、暫くお待ち下さりませ。

清兵　や、さういふこなたは。

島藏　只今醬油を持つて參つた、酒屋でござります。

お欲　おゝ、お前さんは此間若い衆を上げました、明石屋さんでござりますか。

島藏　はい、神樂町の小賣酒屋、明石屋島藏でござりまする。

お常　まあこちらへおいでなさいまし。

ト島藏下に居て、

島藏　今日初めて上りましたが、以前はよしあるお方と存じ、如何なることで此樣に御難儀をなされますかと、實は門で最前からお宅の樣子を承はり、貰ひ淚をこぼしました。甚だ失敬ではござりますが、其百圓は私が御用立て申しますから、どうか是なるお孃樣を藝者になされまするのを、お見合せ下さりませ。

〽思ひ掛なき一言に、人々顏を見合せて、

ト皆々びつくり思入あつて、

清兵　すりや見ず知らずのお前樣が、百圓といふ金を貸し、娘をお助け下さりまするか。

島藏　世にも稀なる御孝行の、お志しを感じ入り、失敬を顧みずお貸し申しますのでござりまする。

清兵　扨はいよ〳〵此娘が、親を思ふ孝心を、

お仲　不便に思召しまして、

お常　何の御緣もないお方が、

お欲　百圓お貸しなされますとか。

清兵　まことに以つて夢かと思ふ、お慈悲深いお志し、

お仲　何とお禮を申しませうやら、

清兵　えゝ有難う、

兩人　ございまする。

島藏　幸ひ今日新川へ、酒を買ひに參りましたが、都合によつて買はずに歸り、まだ其儘に懷中に所持致して居りましたは、お二人樣の御難儀を救ふ知せでござりましたか、お心置なく何時迄も、お遣ひなされて下さりませ。

〽貢ぐ仔細も白紙に包む心の十圓札、主人の前へ差出せば、手に取上げて押頂き、

ト島藏宜しく思入あつて、清兵衞の前へ出す、取上げ頂いて紙に包みし百圓を出し、

清兵　我身の愚痴に最前も、此廣い世の中に神も佛もないことかと、恨みましたは勿體ない、思ひがけなく百圓をお貸しなされて下さりましたは、親子の者には神佛

お仲　手を合して拜みます。

〽神や佛と手を合せ親子の者が伏拜む金は日外盜みし金に、心苦しく島藏は額の汗を押拭ひ、

ト兩人手を合せ島藏を伏拜む、島藏せつなき思入にて、額の汗を拭ひ、

島藏　其樣にお二人して厚く禮をおつしやつては、まことに痛み入りまして、額に汗が覺えまする、元はといへば此金は。

清兵　えゝ。

島藏　いやさ、元より遊んで居る金故、假令二年が三年でも此方はお貸し申す心、いや御都合のよい其時迄、お返しなさるにや及びませぬ。

お常　ほんにお前さんの樣に、お慈悲深いやさしい心の者はない、假令盜んだ金にても。

島藏　や。

お常　いやさ、斯う綺麗には貸されぬもの、實に感心致しました。

お欲　いや、感心せぬは此口入、望む所の百圓が出來れば最早破ればなし。

お常　ほんにお前に氣の毒だが、かういふ事になつたからは、私が五合買はうから、それで不承して下さんせ。

お欲　金が出來れば仕方がない、其替りお常さん、權の字にでも出る女があつたら、直に知らして下さいよ。

お常　心當りがありますから、いゝのをお世話致しませう。

お欲　何分お頼み申します。
島藏　飛んだわたしが邪魔をして、
清兵　まことにお前に氣の毒だつた。
島藏　是は少しばかりだが。
　ト島藏小札を紙に包み、お欲に遣る。
お欲　是をお貰ひ申しましては。
お常　お婆さん、無駄足でもなかつたね。
お欲　いゝ商法でござります。
〽口入婆はいそ〳〵と、目に汐寄せて歸りける。
　トお欲早足に花道へはひる。
〽跡に清兵衛手をつかへ、
　ト清兵衛思入あつて、
清兵　縁も由縁もないお方に、百圓といふ大金を唯お借り申しますのは、濟まぬことゝは存じますが、無くてならぬ切羽故、お借り申しますでござりまする。
島藏　いえ、假令御縁はないにもせよ、其身を賣つても親御樣の御難儀を救ふといふお娘御の御孝行、承はつて此儘にどう見捨て歸られませう、以前は立派なお暮しをなさいましたお前樣が、今此苦勞をなされますも、
〽我なす業と胸迫り、浮む涙を呑込みて、
　ト島藏せつなき思入あつて、
諸式の高い時節故、よくいふことの暮し負け、お氣の毒でござります。
〽親切面に顯れゝば、こなたも隱す身の上を、包み兼て座を進め、
　ト清兵衛思入あつて、
清兵　斯く御親切なるお心に、ほだされまして身の上を包まずお話し申しまするが、元私は淺草東仲町に居りまして、質渡世を致しました、福島屋清兵衛と申します者でござります、運惡くして不幸續き遂に見世も衰微なし不都合に成りし故、奥野仙次郎といふ人より千圓金を借受けし、其夜庭より強盜が入り金を盜まれました上、左の足を深く斬られ、それから跛になりましたが、其足よりも身の上が歩み兼ねて地所も賣り、一時は片を付けましたれど、追々内も左前に、衣類は元より道具迄賣代なして故郷を立退き、かゝる裏家に幽な住居、お恥かしうござります。
島藏　お聞き申すも涙の種、以前のお内を故あつてよく存じて居りますれば、おいたはしく存じます。
清兵　只今斯樣な難儀をなすも、其夜入つた強盜故、上で

も嚴しく御詮議なされど、未だにお手に入らぬ樣子、憎しと思ふ親子の者が、何故に思ひが屆きませぬか。
お仲　たゞの一日半日でも、思ひ出さぬことはなく、
清兵　今にも盜んだ強盜が、
お仲　知れたことなら喰ひ付いても、
清兵　日頃の恨みを晴らさうと、
お仲　思へど今に知れませぬは、
清兵　實に悔しう、
兩人　ござりまする。
〽現在傍に盜人が居るとも知らず親と子が、悔し涙にかき口說くを、聞く島藏は五體をば刺るゝ思ひの身の苦しさ、いつそ打明け言はうかと口へ出づれど千圓の金調へし其上で、名乘らんものと唾を吞込み、
ト此內清兵衛お仲悔しき思入、島藏は是を聞きせつなきこなし宜しく、
島藏　御尤もでござります、嘸口惜しうござりませう、さ程迄にお二人が憎しと思ふ其一念、必ず賊の身に報い、お上のお手に掛るは必定、又さもなくば煩うて目が潰れるか腰が拔けるか、天の御罰を蒙りて、憂目を見るでござりませう。
清兵　いや、天も當にはなりませぬ、親子の者が此位難儀をするを見てござるは、聞えぬことでござります。
お仲　いえ、さうばかりも言はれませぬ、今日酒屋樣が百圓のお金を貸して下さいましたは、天のお惠みでござります。
お常　お仲さんのおつしやる通り、思ひがけなくお慈悲深い島藏さんのお情で、お仲さんも吉原へおいでなさらず濟みましたは、惡く言はれぬ天のお助け、
清兵　成程言へばそんなもの、天を惡くも言はれぬな。
〽和らぐ詞を立ちしほに、
ト島藏思入あつて、
島藏　又お尋ね申しますが、此後共に今日の樣なお困りなさる事があつたら、ちよつと左樣おつしやりませ、及ばずながら私が、お力になるでござります。
清兵　遠くの親類近くの他人と、見ず知らずのお前樣が御親切に言つて下さりますは、有難涙がこぼれます。
ト涙を拭いて禮を云ふ、島藏じゆつなき思入にて、
島藏　最早近い其內に天の罰を蒙りて、尋ぬる賊が捕へられ、金も返りませうからお氣を長く時の來るを、お待ちなされてござりませ。

ト立掛るを、

お常　もうお歸りでござりますか。

お仲　何れ、お禮に私が。

島藏　決してそれには及びませぬ。

清兵　左樣ならば、島藏樣。

島藏　其内お目にかゝります。

〽暇乞して門へ出で、ほつと一息つく／＼と思へば濟まぬ身の科に、心殘して立歸る。

ト島藏花道へ行き、宜しく思入あつて、花道へはひる。

清兵　あゝ忝ない／＼、此の百圓を仙次郎殿へ渡せば當分氣も樂に、枕を高く夜るも寐られる、斯零落はしたけれど、島藏殿に助けられしは、まだ運命が盡きぬと見える。

お常　是といふのも日頃から、まことを守るあなた故、天の惠みでござります、それに付けても島藏さんは、何といふ情深いよいお方でござりませう、人の物を貝取つて難儀を掛ける泥坊とは、何といふ違ひでござりませう。

お仲　其の泥坊で思ひ出したは、顏を包んで見えなんだが、今のお方の裝かたち、日外入つた泥坊に、似て居る樣に思はれます。

お常　えゝめつたなことをおつしやりますな、人に情を掛ける者が、何で盜みを致しませう。

お仲　きつとさうとは思はねど、たゞ恰好が似てゐる故。

清兵　いや、假にも左樣なことはいふな、かゝる情のある人を。

お常　盜人などゝ疑がうては、

清兵　天道樣へ濟まぬわえ。

〽善か惡かは白浪の、果は後にぞ、

ト時の鐘、清兵衞金を頂き、三重にて道具廻る。

(元の島藏内の場)——本舞臺元の酒屋の道具、以前のお濱帳を控へ、三太一升樽を並べ、引合せ居る、合方題目太鼓にて道具留る。

お濱　今日は毘沙門樣の御縁日で、お題目があると見える。

三太　さつきからどん／＼と、太鼓を叩いて居ります。

お濱　先づ帳合も濟んだから、今の内奧へ行つて、お夜食を喰べてしまひな。

三太　徳どんが歸りませぬか、先へ食べてしまひませう。
お濱　戸棚に香々が出て居るよ。
三太　有難うございます。
ト小僧奥へはひる、お濱向うへ思入あつて、
お濱　この兄さんはどうなさんしたか、宮比町は纔一町、何處へお廻りなさんしたか、もうお歸りなされさうなものだ。
ト合方題目太皷にて花道より島藏出來り、花道にて、
島藏　さつき悴が招魂社で、世話になつたといふ人は、正しく今の淸兵衞樣、先達からお行方を尋ねて居たが計らずも、今日お目にかゝつた上は、早く金をお返し申し、此身の科を自首なして、御處刑受けて天下晴れまことの人になりたいが、折も折とて播州から遙々尋ねて來た親父、嘸嘸かつしやることであらう。あゝ親に不幸なことだなあ。
ト本舞臺へ來り、
今歸つた。
お濱　だいぶ遲うございんしたな。
島藏　餘儀ないことで遲うなつた。
お濱　さうしてお前の尋ねなさんす、福島屋さんでございますか。
島藏　おゝ、如何にも己が尋ねて居た、淺草の福島屋だ。
お濱　それでは先頃千圓の、
島藏　これ、
ト押へて邊りへ思入あつて、
人に知れゝば身の大事、必ず大きな聲をするな。して、德藏は内に居るか。
お濱　今どん〳〵の橋本さんへ、酒を持つて行きました。
島藏　人の耳へ入つた時は、己が身の大事だから、めつたなことを言つてくれるな。
お濱　是から氣を付けませうわいな。
ト合方になり、奥より以前の磯右衞門、岩松出來り、
磯右　おゝ、悴歸つたか。
島藏　只今歸りましたが、お湯へでもおいでなされましたか。
磯右　明日ゆつくりはひらうと、今夜は湯をばよしました。
ト磯右衞門眞中へ住ふ。
それはさうと今爰に誰も憚る者はないが、島藏そちは惡い病ひを、よく思ひ切つてくれたな。

島蔵　さあ、同日同夜同刻に、此岩松が同じ怪我、悪い報いといふことを初めて存じましたら、すつぱり思ひ切りました。

磯右　實は止めたといふ手紙が、届いたけれど酒好が、禁酒すると同じことで、どうも思切られぬ事故、實は様子を見に來たのだ。今其方が留守の内、娘に委しく話を聞いたが、只の一晩夜泊りを、したことがないと聞き、私も安心しましたわいの。

島蔵　折角思切りまして、御安心をさせましたが、又もやあなたへ御苦勞を掛けませねばなりませぬ。

磯右　そりや何故に。

島蔵　一度犯した罪あれば、明日にも悪事が露顯すれば、輕くて十年重ければ生涯出られぬ終身の、苦役をせねばなりませぬ。

お濱　え、それでは兄さんお前は止めても、一旦なせし科あれば、

岩松　脱れる譯には行きませぬか。

島蔵　刃物を持つて押込みに、はひつたからは以前なら、五ケ所の札所を引廻され獄門になる兇状だが、今は命が助かつて身は終身の懲役でも、其内お上にお目出度いお祝ひ事があつたらば、再び娑婆へ出られる體、思ふ金さへ整へば直に分署へ自首なして、上の御處刑受ける所存。

岩松　お老爺さんのお顔を見て、悦ぶ甲斐も情ない、さうなる時はお父さんは、佃へおいでなされまするか。

島蔵　此身に恥を柿染の、仕着を着ねばなりませぬ。

お濱　さうなつたらばどうしませう。

磯右　あゝ、なした罪故是非がない。

ト皆々ぢつと思入、時の鐘、

島蔵　秋の日の釣瓶落し、今の間に暗くなつた、お濱灯を付けな。

お濱　あい／＼。

ト時の鐘謡への合方になり、お濱ランプへ灯を付け、よき所へ掛ける、此内花道より、前菜の千太帯を締め、着流し、駒下駄にて出來り、

千太　神樂坂の左側で、明石屋といふ小賣酒屋、慥に向うに違えねえ。

ト思入あつて舞臺へ來り、門から内を覗き、

はい、御免なさいまし。

トお濱立つて來て、

お濱　いらつしやいまし、何を上げます。
千太　いえ、なにも買物ぢやあござりませぬが、明石屋の島藏さんといふは、此方でござりますか。
お濱　はい、手前でござります。
千太　それぢやア御免なさいまし。
ト千太ずつと内へはひる、島藏見て、
島藏　や、松島か。
千太　おゝ兄貴、よく内に居なすつた。
島藏　昨夜來るかと思つて居た。
千太　實は來ようと思つたが脱れられねえ用が出來て、それで昨夜來なかつた。
ト言ひながらよき所へ住ふ、磯右衛門お濱顏を見合せ思入。
磯右　悴、彼方は何處のお方だ。
島藏　此お方は私が、兄弟同樣懇意に致す友達でござります。
磯右　それではこなたのお友達か。
島藏　はい、左樣にござります。
千太　兄貴、其のお方は。
島藏　是は今度播州から出て來た、私が實の親だ。
千太　おゝそれぢやあ不斷話に聞いた、播州に居るお前の親父か。
島藏　あゝこれ。
ト目で押へる。
千太　いや、ちやんとして來ればよかつたが、こんなちやんが、いや、こんなお客があらうとも知らずに不斷の裝で來て、お目に掛るも面目ねえ。
ト磯右衛門思入あつて、
磯右　是は初めてお目にかゝりますが、私は島藏が親磯右衛門と申す者。
お濱　又私は妹の濱、是に居るのは兄の悴
岩松　岩松と申しまする。
磯右　してお前樣のお名は、
千太　えゝ、わつちが名かえ。
島藏　あゝこれ、此方は、松島千右衛門殿と言はれます。
磯右　千右衛門とおつしやりますか。
ト千太ちやんとなつて、
千太　如何にも、松島千右衛門と申します。
磯右　悴が御懇意とあるからは、
お濱　どうぞ是から、お心易く。

岩松　お願ひ申し、
三人　上げまする。
千太　わつちも時折參りますから、是から兄弟同樣に、心易くしておくんなせえ。
島藏　これ。
千太　いや、下さりませ。
ト袖を引く、千太眞面目に、
磯右　して、お前樣の御生業は。
千太　わつちの生業は、どろさ。
磯右　へえ、どろとおつしやいますは。
千太　さあ、どろは。
ト島藏引とり、
島藏　どろといふのは橫濱で、諸國の銀貨を取扱ふ、どろ屋のことでござります
千太　いかにも、わつちやア、其のどろ屋さ。
お濱　よい御生業でござりますな。
磯右　定めてどろ屋は大金を、お取扱ひなされませうな。
千太　出來のいゝ其晩は、何百圓といふ金を、持つて歸ることもあります。
磯右　そりやどういふ譯でござります。

千太　其譯かね。
ト言はうとするを島藏引取り、
島藏　それは、どろの相場があつて荒高下の其時は、何百圓といふ金を儲かることもありますが、纔な高下の其時は端た金を取りますのさ。
磯右　それでは矢張米相場と、同じ樣なものでござるか。
島藏　同じ樣なものでござります。
千太　何にしろ此世の中に、元手入らずの商法だから。
お濱　元手いらずで出來ますとは。
島藏　さあ、元手入らずと今言つたは、空米相場と同じ事で、其處へ金を積まずとも何萬圓でも生業の出來るが今いふ元手いらず。
千太　只取る樣な商法さ。
磯右　大した金をたゞ取るとは。
お濱　どうやらそれでは。
ト此時ばた／＼にて德藏逃げて來り、舞臺にて思入あつて下手へはひる。跡より○△□の三人尻端折にて追掛け出て、お濱の臺詞の留りへ、
三人　泥坊々々々々。
ト四邊を搜す、千太此聲にびつくりして立上るを、島

藏抑へて、

島藏　何をそんなに驚くのだ、掏摸が簪でも拔いたのだらう。

千太　おらア又さうとは知らず、疵持つ足にびつくりした。

ト門口の三人思入あつて、

○　今の掏摸は何處へ行つたか。

△　爰らで影が見えなくなつた。

□　裏へ入つて搜して見よう。

ト三人下手へはひる。

島藏　して、千右衞門殿には、今夜何ぞ用でもあつて來なすつたのか。

千太　ちつと內證の話があるが、少し何處ぞへやつてくんねえ。

島藏　承知しました。これお濱、千右衞門殿が內證の話があると言はるゝから、幸ひ今日は寅の日故、神樂坂の毘沙門樣へ、親父樣と三人連れで、お參り申して來るがよい。

お濱　御緣日にはかゝさずにきつとお參り申す故、一緒にお連れ申しませう。

磯右　それではおれも一緒に行くのか。

岩松　植木屋が出て賑やか故、歸りに御覽なされませ。

磯右　おゝ、國へ土產に見物せうか。

ト奧より三太ぶら提灯を持出て、

三太　毘沙門樣ならお供しませう。

島藏　手前も一緒に行くがいゝ。

お濱　そんなら行つて參ります。あなた、御ゆるりと。

千太　ゆつくり跡で話します。

ト皆々門へ出て、

岩松　さあ、おぢいさん、參りませう。

磯右　おゝ、案內をしてくれ。

ト唄になり、花道へ行き、磯右衞門お濱と顏見合せ、思入あつて跡へ歸り、下手へはひる。島藏門口を明け表へ思入あつて、

島藏　これ千太、あれ程己が言つて置くに、以前の事をべらべら喋り、おら、びつしより汗になつた。

千太　おれもあんな父さんが來て居ようとは思はねえから、何と言つていゝか知らねえから、實におらあどじついた。

島藏　手前まだ止めねえのか。

千太　酒と女がふッつりと、嫌ひになつたら知らねえこと、一杯やると一晩でも、遊びに行かにやあ寐られねえから、死ぬ迄おらア止められねえ。

島藏　いゝ加減に見切りを付けて、手前も足を洗へばいい。

千太　さうして兄貴、お前は止めたか。

島藏　己はふッつり止めてしまつた。

千太　何で止めてしまつたのだ。

ト誂への合方になり、島藏思入あつて、

島藏　何でもして惡いことだと、自分で思つた其日には、氣後れがして掏摸も出來ねえ、是には色々譯があつて、ふッつり止める氣になつたのも、一ツでも二ツでも餘計に年を取つて居る上、親兄弟に子迄あるから、老込みやうも早いのだ、何時がいつ迄苦勞を掛けるも本意でねえと心が付き、足を洗つて堅氣になり、纔な儲の小賣酒屋、一合二合の商ひで一生樂に暮す氣だ。

千太　さういふことゝは知らねえから、以前の積りで出て來たが、實は今夜仕事があつて、お前の手をば借りに來たのだ。

島藏　いゝことならば兄弟の緣を結んだ中だから、どんなことでも手を貸さうが、惡い事ならお斷りだ。

千太　向うの相手が士族だから、肚胸の惡い奴等をば、連れて行つた其時は、思ふ仕事が出來ねえ上、喰え込むめえものでもねえから、お前を今夜頼みに來たのだ、兄弟分の誼をもつて、今夜一緒に行つてくんねえ。

島藏　折角手前の頼みだが、金毘羅樣へ願ひを立て、すつぱり止めてしまつたから、そればかりは堪忍してくれ。

ト此時下手より磯右衞門お濱岩松出て、門口に窺ひ居る。

千太　そりやアさうでもあらうけれど、明日が日己が手當になり、送りになつた其時に、どんな問を掛けられても言はねえ氣だが、どういふ事で見知り人が、向うにあつて睨れられず、罪に落ちたら千圓盗んだ舊惡で、お前も一緒に行かざアなるめえ。

島藏　むゝ。

トぎつくり思入。

千太　いくらお前が堅氣になつても、どうで一度は兇状を着にやあ綺麗になられぬ體、今夜己と一緒に行つて一働きしてくれても、別に罪の重くなる譯もなけりやあこれ兄貴、どうぞ一緒に行つてくんねえ。

ト島藏是非なき思入にて、

島藏　其事に付いて手前にも話してえことがあるが、何をいふにも爰は町中、隣近所へ憚れば大きな聲で言へねえ身の上、兎も角も此四月、九月末に逢はうと言つて、西と東の生れ故郷へ羽がひを伸て別れた二人、運よく天の網を脱れ約束通り九月の末に、目出度く逢つた今宵の出會、逢ての賴みを斷るも、あんまり色氣のねえことだから、一緒に行かうが今は行けねえ、親父や妹が歸つて來て用を拵へ後から行くから、暮れては人の通りも少ねえ、招魂社の鳥居前で、己が行くのを待つて居ろ。

千太　それぢやあ俺が賴みを聞いて、今夜一緒に行つてくれるか、それは何より有難い、是でこそ兄弟分だ、お前が行つてくれせえすりやあ、心丈夫に働ける、どうで向うへ忍び込むのは十二時過ぎのことだから、是から何處ぞで一ぺい飲み、十時過ぎに招魂社の鳥居前に待つてゐるから、きつと來てくんなせえ。

島藏　八幡の十時を合圖に出掛けて行くから、待つて居てくれ。

ト千太思入あつて、

千太　いつか廣小路の天道干で、脅しに買つた脇差を、お前いまだに持つて居るか。

島藏　今はいらねえものだけれど、思ひの外に勝れた業物。

千太　え。

島藏　いや、筋の悪い代物だから、うつかり賣るのも氣味が悪く、そつと隱して持つて居る。

千太　内にあるこそ丁度幸ひ、あれを持つて來てくんねえ。

島藏　それは言はずと己も承知だ。

ト此内門口の三人人の來る思入にて、下手へはひる。

引違へて下手より以前の德藏出て、

德藏　小遣ひ取に引こ抜いた、財布の中は端た錢、小札が一枚ありやあしねえ。

ト財布を懷へ入れ、門口を明け、

はい、大きに遅くなりました。

島藏　おゝ、德藏か。

德藏　橋本樣へ參りましたら、お遣ひ物になりますので、お供をして築土迄參りましたので、遅くなりました。

島藏　春と違つて秋の日暮は、暮れかゝると瞬く間だ。

德藏　途中で日が暮れてしまひました。

千太　や、お前は。
千太　む〻、徳次郎か。
　ト千太びつくりこなし、
徳藏　どうして爰へ來なすつた。
島藏　こりや、あの新參の奉公人だが、手前は知つて居るのか。
千太　奧州の白河に、己が遊んで居た時分車を曳かした若い者、野州徳と肩書のある旅を稼ぐ人力車だ。
徳藏　まことに親分お前さんに、爰で逢つては面目ない。
　ト天窓を押へ蹲る。
島藏　それぢやあ是もひゞのある、旅稼ぎの人力車か。
千太　己が佃に居た時に、一緒に土を擔いだ奴で、以前を知つて居る所から、足元を見てゆすつた上、己が惡事を探索へ、言ッ付口をしやあがつた。
徳藏　實はあの折錢に困り、濟まねえことをしましたが、堪忍しておくんなせえ、其後長く煩らつて難儀をしたのでさつぱり目が覺め、堅氣になる氣で足を洗ひ、こつちのお内へ雇にはひり、樽拾ひになりました、腹が立つならわつちをば存分にしてあの折の、科を許しておくんなせえ。

　ト手をつき、天窓を擂付けて詫びる、千太思入あつて、
千太　外で逢やあ遺恨があるから、たゞ此儘ぢやあ置かねえが、以前と違つてこつちの内の奉公人とあるからは、己が存分にする日には、兄貴に難儀を掛けにやあならねえ、其處を思つて何にも言はず、此の儘手前は許してやらう。
徳藏　それは有難うございます。是といふのもお慈悲深い、こちらに奉公したお蔭、旦那樣、有難うございます。
島藏　目見得に來た其時から、痒い所へ手の届く心の利いた奉公人、油斷のならねえ男だと、思つて居たが案の定、手前も惡事のある體か。
徳藏　大したことも致しませぬが、三度懲役に行きました。
千太　言ひてえことも言はねえ替り、手前も己に逢つたことを、決して人に言つてくれるな。
徳藏　何しに人に言ひますものか。
　ト時の鐘、島藏思入あつて、
島藏　毘沙門樣へ參りに行つた、もう父さんや妹が、歸つて來る時分だから、歸らぬうちに出掛けてくれ。

千太　こつちも逢ふのは面倒だ、歸らぬ内に出掛けよう。

　ト下手へ來り、

　それぢやア兄貴、必ず今夜。

島藏　きつと行くから待つて居ろ。

　ト千太門口へ出、

千太　どれ、軍鷄で一ぺいやつて行かうか。

　ト時の鐘合方にて、千太花道へはひろ、德藏思入あつて、

德藏　旦那樣、どうしてあなたはあのお人を、御存じでございます。

島藏　あれは以前の友達だ。

德藏　兄貴々々とお心易く、兄弟の樣に言はれるのは、若しや旦那も。

島藏　え。

德藏　旦那も定めて私の、以前を聞いて油斷がならぬと思召すでございませうが、御用奉公する位、心を改めましたから、油斷がならぬと思召さず、お使ひなされて下さりませ。

島藏　人は一旦惡いことをして、改心をした者が堅氣なものより役に立つ故、決してこつちは疑はねえから、己が內に辛抱してくれ。

德藏　さうおつしやつて下さりますれば、まことに有難うございます。

島藏　まだ飯前だらう、奥へ行つて夜食を喰つてしまふがいゝ。

德藏　それでは頂戴致しませう。

　ト德藏立上る時、懷より財布を落す、島藏取上げ、

島藏　や、此財布は。

德藏　いえ、私のでござります。

　ト取つて懷へ入れ、合方になり、德藏奥へはひろ、

　島藏跡を見送り、

島藏　初手から油斷のならねえ奴と、思つて居たが役に立つ故、一年極めで雇つたが、彼奴も旅の稼と聞いては、使つて居るも氣がねえが、今暇を遣つたらば仇を返すに違えねえが、己が望みの叶ふ迄は、先手なづけて置くのが專一、こんなことを親父の耳へどうぞ入れ度くねえものだ。

　ト時の鐘、床の淨瑠璃になり、

上るり〽跡には何と島藏が思案にくるゝ秋の末、冬を隣に窺ひし袖に時雨の三人が、門の戸明けて入りければ、

ト此内島蔵ぢつと思案の思入、下手より以前の三人出て、門口を明け、ずつと内へはひろ、島蔵びつくりなし、

もうお歸りでござりましたか、大層お早うござりましたな。

磯右　お丶早い筈だ、毘沙門様へは參らなんだ。

島蔵　毘沙門様へ參らずに、何所へおいでなされました。

磯右　何處へも行かずに門口で、

お濱　最前からの様子をば、

岩松　殘らず聞いて居りました。

島蔵　え。

トぎつくりなし、

それでは千太と二人の話を、

〽南無三大事を聞かれしかと、驚く悴の前へ坐し、

ト島蔵びつくり思入、磯右衛門傍へ寄り、

磯右　島蔵、まだ心が直らぬな。

島蔵　なに、直らぬとは。

ト誂への合方になり、

磯右　招魂社の鳥居前で、千太とやらが待合すは、盗みに行くのであらうがな。

島蔵　あこれ、めつたことをおつしやいますな。

磯右　隠してある脇差を、今夜持つて行かうといふは、強盗をなす所存だな。

島蔵　さういふ譯ではござりませぬが、今此内で斷るともなか〳〵心の曲つた奴故、容易なことでは得心しませぬ、四邊に遠慮のない所で、とつくり千太に言聞せ、思ひ切らす所存故、必ずお案じなされますな。

磯右　いや〳〵、それは噓ぢや〳〵、やつぱり內々是迄も、盗みをしたに違ひない。

〽濱邊育ちに磯右衛門が、大聲上げるを憚りて、

ト磯右衛門大きな聲をするを留めて、

島蔵　これ親父様、明石と違つて家込みに軒を並べる市中の住居、大きな聲をなされますな、隣りとは云へ壁一重、今此事が洩聞え、召捕になる其時は、改心なした甲斐もなく、一旦盗んだ金を返し、お上の御處刑受けた上、まことの人にならうと思ふ。此の島蔵が望みも叶はず、自首せぬ時は强盗に、生涯出られぬ終身の苦役をせねばなりませぬ。

磯右　それも己が心から、人の知つたことではない。

お濱　折角はる〳〵父さんが、國から尋ねてござんした

に、よい耳はお聞せ申さず、又もや御苦勞掛けるのは、
兄さん不孝でござりますぞえ。

岩松　おぢい樣のお心休め、今夜は何處へもおいでなさらず、内に居て下さりませ。

〽今更何と岩松に、縋り留められ是非もなく、

ト岩松に縋り留められ、島藏思入あつて、

島藏　妹が知つて居る通り、改心なして只一夜暮れては外へ出ぬ島藏、ましてや國から親父樣が、おいでなされたことなれば、常なら今宵は内に居て、御酒でも上げて終夜過越方のお話を致しますでござりますが、千太と約束なしたれば、行かずに居れば又内へ再び彼が參ります故、纔半時か一時の内、どうぞ遣つて下さりませ。

〽言ふをも聞かぬ老の一徹、

磯右　おゝ行くなら勝手に行くがよい、國へ歸つて島藏もさつぱり惡い心が直り、眞人間になりましたと、土產話にしようと思ひ、それを樂みに來た所、やつぱり心が直らずに、夜働を致しますと人に話が出來ようぞ、再び國へ歸られねば、身でも投げて死なねばならぬ。

お濱　父さんが死なさんすりや、私も生きては居りませぬ、とも〴〵冥土へ行きまする、それも定まる約束と思へば悲しいこともないが、人並ならぬ岩松を、一人跡へ殘して行くが、わたしや悲しうござりまする。

岩松　さうなる時はわたしも一人何で生きて居りませう、お祖父樣や伯母樣と、一緒にわたしも死にまする。

お濱　そんならそちも一緒に死ぬか。

岩松　人並ならぬ不具なわたし、跡に殘つて憂目を見るより、死ぬのがましでござります。

お濱　お前故に死なしやんしたおなぎさんの忘れ形見、たつた一人の岩松が死ぬのが可愛うござんせぬか。

〽さりとはつれない心やと、悔み嘆けば岩松も、

岩松　わたしがかういふ不具になつたも、親の因果が子に報ふ譬の通り、怪我からして跛者になりし此の岩松。

〽それが智識でさつぱりと、盜みを止めて下さんしたは、

不具になつても私の孝行、嬉しう思うてをりましたに。

〽情ない父樣と、縋り嘆くぞいぢらしき。

ト岩松宜しくあつて、

お濱　はる〴〵遠い明石から、お前の心の直つたを樂しみにしてござんした、

岩松　お年寄られしお祖父樣を、

お濱　殺すも生かすも兄さんの、心一つでござりまする。

岩松　どうぞ行かずに下さりませ。

〽右と左に妹と悴に縋りかき口說かれ、聞くもせつなき島藏が、歎息なして二人を留め、

トお濱岩松島藏に縋り付いて嘆く、島藏せつなき思入にて、

島藏　今岩松が言ふ通り、親の因果が子に報ふ道理を悟り目が覺めて、心を改めふッつりと盜みを思ひ切つた島藏、以前遊んで居た時分兄弟分の緣を結んだ、千太が尋ねて來たのが災難、內では世間を憚る故、向うで賴むを幸ひに人通りなき招魂社の鳥居前でとつくりと、異見をなして賊を止めさせ、まことの人になす所存、所謂常が常ならばと、是迄惡い行ひにまことの事と思召さず、親父樣が死ぬとあらば、死出の魁け島藏が、命を捨て潔白を立てるは易いことなれど、

〽只の一日孝行せず、不孝に不孝を重ぬる道理、

それ故死なねばならぬのを、恥を忍んで生ながらへ、金を調へ福島屋へ返した上で自首なして、一度上の御法通り苦役を勤め滿期の後、世間も明るき身となつて、子供の折から御苦勞掛けた御恩送りに一日でも、孝行をして島藏が不孝のお詫をする心、噓僞は申しませねば、暫時の間親父樣、どうぞお暇下りませ。

〽どうぞ許して下されと、事を分けたる島藏が、詞にまこと顯れて、磯右衛門も打ちうなづき、

ト島藏宜しく思入、磯右衛門こなしあつて、

磯右　むゝ僞でないことならば、やるまいものでもないけれど、若し又心が直らねば直におれは身を投げて、生きて再びそちには逢はぬぞ。

島藏　親の命に拘る事、決して背きは致しませぬ。

お濱　明日の朝迄父さんは、私がお留め申しますから、必ず惡い心を出さず、

岩松　お祖父樣のお土産になります樣に、もし父さん、どうぞお願ひ申しまする。

島藏　手前達にも苦勞は掛けぬ、案じるには及ばぬぞ。

磯右　其の詞に僞なくば、許してやるから行つて來い。

島藏　すりや、お許し下さりますとか、えゝ有難うござりまする。

〽親の許しに嬉しやと、安堵なしたる門口へ、立歸つたる丁稚の三太、

ト島藏ほつと思入、ばた〳〵にて下手より三太提灯を

　持ち出來り、
三太　毘沙門樣で遊んで來いと、お濱さんのお許しで、ゆ
　つくり遊んで來た。
　ト門口を明け、
ハイ、只今歸りました。
　ト內へはひり、
お濱　おゝ、三太歸つたか。
三太　今德藏どんに逢ひましたが、何處へお使に參りまし
た。
お濱　いや、何處へも使ひにやりはせぬが、
三太　包みを背負つて坂下へ、大層急いで行きました。
島藏　南無三、彼奴に持逃げされたか。
〽聞くより島藏一大事と、奥の一と間へ駈入つたり、
　ト島藏つか〱と奥へはひろ、皆々立掛り、
お濱　油斷がならぬと思つたが、着物でも盜み出せしか。
磯右　跡を追掛け行かうにも、己は所の勝手がしれず、
岩松　勝手を知つた私は、行くことならぬ此の跛者。
お濱　困つたことが出來ましたな。
　トばた〱にて奥より島藏出て來る。
何ぞ持つて行きましたか。

島藏　簞笥の着類が四五枚見えぬが、それは纔なものなれ
ど、二百圓に買手のある、あの脇差を持つて行つた。
お濱　すりや、脇差を、えゝゝ。
　トびつくりなす。
島藏　惡い奴と知りながら、奥へ一人置いたが過り、
磯右　少しも早く跡追掛け、
お濱　取押へて下さんせいな。
島藏　いや、追掛けて行くに及ばぬ。
お濱　そりや又何故。
島藏　今德藏が跡追掛け引とらへて差出さば、必ず惡事を
言立つて、己を抱込むに違ひない、さすれば日頃の望み
も叶はず、終身娑婆へ出られぬ徵役。
　ト本釣鐘を打込む。
やゝ、ありや八幡の十時の鐘。
磯右　千太とやらに招魂社にて、
岩松　父さん、お前が、
お濱　出逢ふ刻限。
　ト島藏岩松の杖をとり、
島藏　道の用心、此の杖を、犬脅しに持つて行かう。
お濱　そんなら、お前は、

岩松　招魂社へ。
島蔵　おゝ、約束なれば行かねばならぬ。
　ト島蔵腹守の胴巻を出し、
　親父様、是を預つて下さりませ。
　ト磯右衛門の前へ投げる、磯右衛門取上げ、
磯右　や、此の包みは、
島蔵　そりや福島屋へ返す金、
磯右　おゝ、慥に己が預つた。
お濱　そんなら、兄さん。
岩松　少しも早う。
島蔵　留守をしつかり。
　ト外へ出て門口をしめるを木の頭。
　頼んだぞ。
　ト尻を端折り、きつとなり、本釣鐘の寺鐘早き合方にて、宜しく、
　ト時の鐘、水の音にてつなぎ、直に引返す。　ひやうし幕

五幕目　　招魂社鳥居前の場

役名――明石の島蔵、松島千太、望月輝、野州徳
　夜蕎麥賣り、堀の内參り等。

（招魂社の場）――本舞臺上寄りに石の大鳥居、左右石垣の草土手、此上に小松上下松の大樹、日覆より同じく松の釣枝、後銅燈籠一對、石燈籠數多く、本社を見たる夜の遠見、總て招魂社鳥居前の體、爰に夜蕎麥賣荷を下し、側に尻端折脚絆草履の堀の内參り○△の二人蕎麥を喰つて居る、此見得時の鐘、四つ竹節にて幕明く。

○　お蕎麥屋さん、もう一ぺい替りをくんねえ。
蕎麥　はい／＼。
△　次手に己も替りを貰はう。
蕎麥　はい／＼。
　ト蕎麥屋そばを拵へる。
○　以前と違つて夜鷹蕎麥は、賣手が今ぢやあ少ねえ樣だね。
蕎麥　おつしやる通り山の手ばかり、下町にはございませ

ぬ。

△　其替り鍋焼饂飩が、一年増しに多くなつた。

蕎麥　へい、お替りが出來ました。

ト出す、兩人捨臺詞にて喰ひながら、

○　夜鷹蕎麥には珍らしいな。

△　さうよ、めつぽふにいゝ鹽梅だ。

蕎麥　此邊には蕎麥屋が少く、ちよつと不自由でございますから、大概私の參りますを、お待ちなすつて下さいます故、蕎麥もしたじも氣を付けますので、此居廻りから三丁目行を、一廻り廻りますと、あらかた賣れてしまひます。

○　そりやあ必ず賣れる筈だ、したじ鹽梅のいゝことは、居見世の蕎麥屋も同じことだ。

△　是では誰でも待つて居る筈だ。

蕎麥　有難うございます、お前さん方は、脚絆がけで、何處へおいでなさいました。

○　今日晝過から堀の内へお參りに出掛けたが、秋の日の短いのに、しがらきで御神輿を据ゑ、

△　草臥休めにゆつくりと呑んで、鍋屋横丁を暮れて出たから、大分遲くなりました。

蕎麥　そりやあ嘸お草臥なさいましたらう。

△　コウ吉公、此の招魂社といふのは何を祀つたものだな。

○　こりやあ近い頃戰爭で死んだ人を祀つたのだが、身分は輕い兵隊でも、お上の爲めに死んだのだから、こんなに立派に出來たのだ。

△　おらあ何時でも外を通つて、中を見たことがないが、斯う見たところが綺麗さうだな。

蕎麥　晝間はひつて御覽じまし、泉水の中に噴水があつて、庭の樹木は大したもので、四季に花が絶えませず、隨分わざ〳〵遠方からおいでなすつてもようございます。

○　あい、蕎麥屋さん錢を取んねえ。

蕎麥　へい、有難うございます。

ト錢を取る。

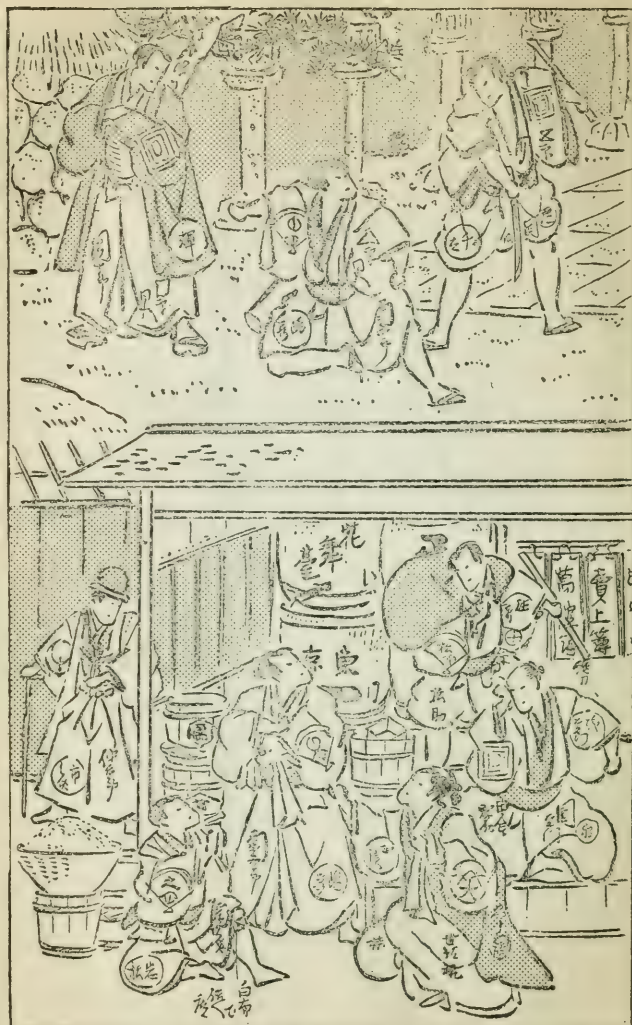
△　さあ〳〵急いで切り出さう。

○　蕎麥屋さん、何時だね。

蕎麥　今十時を打ちました。

△　よく芝居でもすることだが、蕎麥屋さんといふと、時を聞くね。

蕎麥　こりやあ紋切形でございます。


花舞臺
東京
賣上簿

○　時を聞いたらちつとも早く、

蕎麥　私も是から一廻り、

△　それぢやあ蕎麥屋さん、

蕎麥　お別れ申します。

○　蕎麥イ〳〵。

ト右の合方にて、蕎麥屋は上手へ、兩人は花道へはひる。時の鐘、床の淨瑠璃になる。

上るり〽秋の夜のならひか空に風ありて、雲行早く星影もところ〴〵に二つ三つ四つ辻過ぎて來る人を、松島千太が小蔭に佇み、

ト時の鐘風の音にて、上手より前幕の千太頰冠にて出來り、邊りへ思入あつて、

千太　今打つたのは十時だが、まだ島藏が出て來ねえは、見世をしまつて來る積りか、一旦約束をしたからは、まさか來ねえことはあるめえ、何にしろ高臺の風當りが強いから、涼しいどころか寒いので、宵の酒がさめてしまつた、十一時にならねえ内、早く來てくれりやあいゝが。

〽西邊見廻し捨石を、是幸ひと腰を掛け、待つ間程なく向うより息せき來たる島藏が、星の光に透し見て、

ト時の鐘、花道より前幕の島藏出來り、花道に留り向うを見て、

島藏　鳥居の側に人影の見えるは慥に松島千太、十時を打つて出て來たから、己の來るのを待つて居たらう、どれ早く行つて逢つてやらう。

〽暗き夜道も馴れし身に、鳥居の前へ歩み來て、

ト島藏本舞臺へ來り、

其處に居るのは、千太か。

千太　おゝ兄貴か、よく出て來てくんなすつた。

島藏　内で十時を聞いたから、三十分もおくれたらう、よつぽど爰で待つて居たか。

千太　己も軍鷄屋で二本飲んで、今し方爰へ來たから、何もそんなに待ちやあしねえ。まあ兄貴、爰へ掛けねえ。

島藏　丁度いゝ石があつたな。

ト新内の合方になり、手拭で石の上を拂ひ、兩人捨臺詞にて腰を掛け、

千太　こゝらを新内が流して歩いて、語らせる者があるかなア。

島藏　あるからあゝして歩くのだ、門付や道樂寺は山の手が得意ださうだ。

千太　なるほどこりやア其土地へ、住つて見にやあ知れねえな。

島藏　そりやあさうと手前が今夜、己に一緒に行つてくれといふ、其先きは何者だ。

千太　其先きといふは神樂坂下で、表がゝりはちよつと見ると、官員かと思ふ樣な拵だが、元舊幕の直參で、今書家だとかいつて居るが、腹の中の知れねえ獸、瓦解前に强談で既に首になる所、御一新後に天朝から非常の大赦で放免され、盜んだ金か知られねえが、それから世間へ金を貸し、今望月輝といつて、金に困らぬ樂な身の上、其處へ今夜忍び込み、夫婦を殺して有金を、殘らず浚つて上方へ高飛をする了簡だ。

島藏　むゝ、其の望月輝といふのは、仔細あつて知つて居るが、金はあるに違へねえから、たゞ脅して取つたらいいに、何で夫婦を殺すのだ。

千太　是にも譯のあることさ。

島藏　して、其殺す譯といふは。

千太　今其輝が表向女房にして居る女といふは、此の四月迄白川で辨天お照と名の高い、枕藝者の旅稼ぎ、そいつに惚れてうか／＼と十日ばかり白川に、長逗留をして居る內、金びらきつて口說いたが、なか／＼向うの目が高く、己が言ふことを聞かねえから、手籠にしようと思つた時、探索方に取卷かれ、危く其場を逃去つて、諸所を經廻り此方へ來て、はからずお照の居所が知れ、昨日ゆすりに行つた所、以前は浪士で强談をして來た果の輝故、向うが一枚役者がよく脅し文句を何とも思はず、己がお照に白川で百圓やつた其金を、返して遣るから是を持つて早く歸れとあべこべに、向うの凄みな臺詞を聞き金を取つて歸るのもあんまり役が惡いから、素手ですごすご歸つて來たは、其の二番目の仕返しに、今夜お前と一緒に行き、夫婦をばらして遺恨を晴し、盜んだ金を二つに分け、又半年も上方へ下り役者で乘込む積りだ、賴みといふは此一件、厭でもあらうがこれ兄貴、一役助けてくんねえな。

ト島藏思入あつて、

島藏　そりやあ折角の賴みだが、どうも己は聞かれねえ。

千太　聞かれねえとは、そりや何で。

島藏　さつきも手前に言ふ通り、己はすつかり心を改め、盜みは思ひ切つてしまつた。

千太　同じ事を繰返して、くどく言ふにも及ばねえが、い

くらお前が思ひ切つても、明日が日己が手當になつたら、言はずとお前は同類で、輕くて十年重けりやあ、生涯出られぬ終身徽役。

島藏　そりやあ手前が言はずとも己も承知はして居るから、御用の聲の掛るのは、覺悟の前で斯うして居るも、少し望みのあることだ、惡い心を入替へて、盜みを止めたも譯のあること、まあ一通り聞いてくれ。

〽見廻す四邊も更ける夜に、行交ふ人の影もなく、千草に蟲の聲ばかり、

ト誂への合方蟲笛になり、島藏四邊へ思入あつて、

日外手前に淺草で別れてあれから生れ故郷の明石へ尋ねて行つた所、親兄弟に替りはねえが、親父に己が預けておいた一人の倅が跛になり、生れも付ねえ不具になつた譯を聞いて驚いたは、出刃庖刀を親父が研ぎ、棚へ上げて置いたのを、夜更けて猫が鼠を取るはずみに棚からそれを落し下に寐て居た倅の足へ、當つて深い疵を受け、それから遂に跛となり、歩くも自由にならねえ不具奴に不思議は疵を受けた其夜は四月二十日の夜で、しかも時刻は十二時前、己が手前と福島屋へ入つた晩も同じ二十日で、時刻も同じ十二時前、切つたも同じ左の足、

〽親の因果が子に報ふと、世の譬にも言ふけれど、斯う覿面に報ふものかと、

心が付いて見る時は、凡そ盜みをした者は、人間一生五十年の坂を越した者はなく、先づ二十五の曉迄に天の罰を蒙つて、長く生きて居られねえのは、みんな惡事をした報い、こいつあ心を改めにやあならねえこと丶氣が付いてすつぱりと止めてしまひ、其時丁度四百圓金が殘つてあつた故、五百圓に是をまとめ、福島屋へ返した上自首して上の御處刑受け、まことの人になる積りで再び歸つて神樂坂へ、小賣酒屋の見世を出し、今は堅氣な明石屋島藏、此譯故に折角の手前の賴みが聞かれねえ。

〽惡の報いを言諭せど、千太は馬の耳に風、

千太　それぢやアお前は福島屋の、亭主の足を切つた日と同じ二十日の其晩に、息子が怪我をした所から臆病風に誘はれて、弱い心になつたのか。

島藏　如何にも手前の言ふ通り、惡事の報いを知つたから、弱い心になつたのだ、只氣の毒なは福島屋、千圓盜んだ其金から、遂に地面を賣つてしまひ、内を疊んで逼塞なし今は行方もしれぬ故、諸所方々を尋ねる内、今日計らずも見世へ來た、人柄のいゝ小娘が醤油を二合持つ

て來てくれろといふので名を聞けば、福島屋といふ事を聞いて若しやと醬油を持ち、尋ねて行つて見たところ、案に違はず其人にて、宮比町の裏長家に住み親子二人が幽かな暮し、日も當てられねえ有樣に、丁度幸ひ百圓の金に困つて居る所ゆゑ、それと言はずに金を惠み、十分一の報いをなし、殘りの金の四百圓を返して直に自首したさも、折の惡さは明石から、堅氣になつたと悦んで、はるばる親父が來た故に、無據期を伸ばした所へ今夜思ひがけなく、手前が來ての餘儀ない賴み、內で兎やかういふ時は、親父や妹の手前もあり、殊に隣は壁一重、事が洩れゝば互ひの身の上、それで爰へ出て來たが、賴み甲斐のねえ者と思ふであらうが此譯故、一緒に行くのは許してくれ。

千太　隨分お前も是迄は情をしらねえ人だつたが、何でそんな氣になつたか、凡夫盛んに神祟りなしと惡事をなした其報いで、お前にそれだけ罰が當りやあ、己にも當らにやあならねえ譯だ、誰にも報いがあることなら、金を取られた福島屋も生業柄にいゝかものでも、拵えて賣つた報いだらう、內が潰れて裏店で貧乏ぐらしをして居るも其身も懲らす天の罰、其處へ盜んだ金を返すはこんな馬鹿げたことはねえ、先づあの時から半年餘り、斯うして樂に暮して居るは、天の罰を當てる程の體に罪がねえからだ、そんな氣の弱いことを言はずに、今夜一緒に行つてくんねえ。

島藏　いくら行つてくれと言つても、己はふッつり止めたから、此賴みは聞かれねえ、一人で行けずば幸ひだ、手前も今夜止めにしろ。

ト千太むつとせし思入にて、

千太　今更言つても仕方がねえが、佃に居た時貝殼のこはれで互ひに腕を切り、血汐を飲んで兄弟の義を結んだ其時に、是から先は生き死にを一緒にしようと言つたのを、よもやそれを忘れやあしめえ、それに賴みを聞かねえのは、あんまり誼がねえぢやあねえか。

島藏　いや、誼があるから留めるのだ。

千太　何だと。

ト合方きつぱりとなり、

島藏　どんな遺恨があることか、委しいことは知らねえが、今夜手前が切り込んで、向うの二人を殺した上、金を浚つて逃げた所が、昨日ゆすりに行つたからは直に上の目串が付き、それからそれへ電信で知せが廻れば脫れられ

ねえ、三日と立たず捕へられ、送りになつたら賊と違つて人を殺せば斬罪の處刑は言はずと知れたこと、假令今夜千圓の金を盜んで行つた所が、三日の內に捕へられたら遣つた金は五十か一本、纔な金で命を捨てるは、あんまり馬鹿げた事ぢやあねえか。手前も己が意見に付いて、爰らが足の洗ひ所、堅氣になるなら何處が何處迄、兄弟分の誼を思ひ、己が世話をして遣らう、惡いことは言はねえから、二つに分けた五百圓丸で出來ずばいくらでも金を拵えて福島屋へ返した上で己と一緒に、立派に罪を名乘つて出ろ。

千太　お前も四十にならねえが、豪氣に燒が廻つたな、おらあ八方取卷かれても逃げられるだけ逃げる氣だ、是から自首をしたところが、一等減じて十年の苦役を佃でしにやあならねえ、己がことを馬鹿だといふが、お前も隨分馬鹿げて居らあ。

島藏　十年苦役をするといふは、そりやあ手前が小さな了簡、盜んだ金を先へ返し改心なして自首すれば、上にも格別御慈悲があつて、一等減じて十年の物なら乃至七年か五年になつたら懲役中、身を愼んで大事に勤め、初犯か二犯の若い者が滿期で出たら强盜をしようなどと後先見ずの竊盜に惡事をすれば天の罰で必ず報いのある證據は、己の忰が斯う〳〵と諭して心を和らげさせ、萬に一人改心なす者があつたらお上へ忠節、役人方の目に止らば五年も減じて三年となるは其身の行ひ次第、又三年が二年となり滿期で出たら是迄の、惡事は佃の海へ流し、數年の罪は泡と消え、まことに靑天白日の世間晴れた身となつたら、其時一生懸命に、晝夜稼いだことならば、

〽一度は罰を當てた天の、再び惠を受けるは必定。

さつきも己が言ふ通り舊幕時分の十圓から死罪にされる時ならば、とても死ぬなら行掛の駄賃といふもあるけれど、今はお上の御處刑替り、千圓盜んだ强盜でも一命助かり終身懲役、此の有難い世の中に人を殺して命を捨てるは、あんまり手前は開けねえ、親から貰つた大事な躰を粗末にせずと心を入替へ、己と一緒に堅氣になれ。

〽事を分けたる島藏が、直な詞も横に聞き心ゆがみし松島千太、

千太　お前は親父や妹に可愛い忰があることだから心を改め堅氣になり、素人になる氣になつたらうが、おらあ親も無けりや兄弟もなし、今更堅氣になつたとて、誰も悦ぶ者はねえから、一生涯盜みをして、してえ三昧なこ

とをしたら、斬られて死んでも本望だ。

島蔵 そりやあ手前あんまり愚だ、假令此世に居ねえとて、草葉の蔭で親達が、どんなに案じて居るか知れねえ、死んでしまへば空へ歸り、跡形もねえものならば朝廷初め皇族方先祖の祭りはなさりはしめえ、必ず跡のあるもんだから、心を入替へ盜みをやめ、冥土の親に悦ばせろ。

千太 なに悦ばせるに及ぶものか、親だといつてうぬが勝手に、己を捨へたことだから、恩もなけりやあ義理もねえ、勝手に苦勞をするがいゝ。

島蔵 〽腹立紛れの憎て口、聞く島蔵は呆れ果て、手前はそれ程分らねえ木偶の坊とは思はなんだ、今日から口は利かねえから、どうともそつちの勝手にしろ。

千太 おゝ、しなくつてどうするものか、兄弟分になる時に、どんなことでも生死を一緒にしようと約束した、其甲斐もなく此のおれが、頼みを聞いてくれねえけりやあ、兄でもなけりやあ弟でもねえ、緣を切りやあ今日から他人だ、今夜是から切込んで喰へ込んだら其時に、お前を呼びによこすから、支度をして待つて居ねえ。

島蔵 それぢやア是程譯を言つても、己が言ふことを聞かねえか。

千太 兄弟分なら兄だから、聞くめえものでもねえけれど、他人となれば五分と五分、誰が言ふことを聞くものか。

島蔵 聞かざあ聞くな、こつちも亦他人となりやあ是から自首して、手前に繩を掛けるから卑怯未練に逃げるなよ。

千太 卑怯未練に逃げねえから、何時でも己を迎ひに來い、今夜輝へ切込めば、どうでこつちあ命掛け、二人殺すも三人殺すも取られる首はたつた一つ、惡く留立てしやあがると、島藏汝の命はねえぞ。

〽片肌脫いで懷に隱せし短刀拔放し、目先へ突出す白刄の光、島藏じろりと打見やり、

ト千太きつとなつて立上り、片肌脫ぎ、懷に隱せし短刀を拔き、島藏の前へ突き出す、島藏尻目に掛けてせせら笑ひ、尻をまくつて傳法なるこなしになり、

島蔵 これ、そりやあ素人にいふ臺詞だ、己にいふのは釋迦に說法、こんな無駄なことはねえ、忘れもしめえ佃に居た時、熱氣の世話になつたが緣で、兄弟分の義を結び、滿期の後に娑婆へ出て、強盜をする脅し文句は己が教え

てやつたのだ、鼠小僧は闇の夜に向うが見えたといふことだが、同じ盗みをして居ながら、あんまり向うが見えねえ奴だ、卽善信士の墓へ參り、樒の水でも飮んで置け、何だ脅しに短刀を拔いて、それで手前は切る心か、石碑の角はかけようが、己の天窓はかけねえぞ。さあ、切れるなら切つて見ろ。

〽恐れげもなく身を差付くれば、千太も引くに引かれねば、

ト島藏體を突付ける、千太思入あつて、

千太　おゝ、切らねえでどうするものだ。

〽言ふより早く切付くれば、飛鳥の如く身を開き、出沒自在の霧隱れ拔けつ潛りつ挑み合ふ。

ト千太切つてかゝる、島藏身をかはし、杖にて烈しき立廻り、島藏小手を打つ、千太短刀を落す、是を取らうとするを、島藏留めて兩人きつと見得、是より笛の入りし誂への鳴物になり、兩人摑み合の立廻り宜しくあつて、

〽島藏千太を捻ぢ倒し、落散る短刀取上げて、

ト島藏千太を引倒し、短刀を取上げ胸元へ差付け、

島藏　さあ千太、今手前を殺すのは有無を言はせず一突だぞ、命を捨てても改心しねえか。

ト突放す。

千太　誰が改心するものか、殺すといふなら早く殺せ、己を殺せば手前は下手人、一人は死なねえ殺してくれ。

島藏　惡い奴でも人一人、手前を殺せば其替り、己も死ぬのは覺悟のめえだ。

千太　覺悟なら早く殺せ、さあ殺せ〳〵、早く己を殺してくれ。

〽身を摺付れば島藏が、怺へ兼ねて引倒し、

ト千太憎く島藏に體を摺付ける、島藏胸ぐらを取り引倒し、

島藏　おゝ、殺せとあるなら、殺してやらう。

〽短刀逆手に島藏が、突かんとせしがためらひて、惡人ながらも今日迄は、兄よ弟といひし故、不便に思ひ氣を取直し、

ト島藏宜しく思入あつて、

賣詞に買詞で、殺せといふなら今殺すが、己も一旦兄弟の緣を結んだことだから、殺してえことはねえ、惡いことだと氣が付いて、盜みを止めることならば、何處が何處迄引受けて生涯世話をしてやる氣だ、手前に分けた五

百圓も心さへ改めたら、どうか己が算段して、福島屋へ返した上自首したことなら今もいふ、十年ならば七年か五年になるはお上のお慈悲、それを頼みに思ひ切れ、見得にもならねえことだけれど、金を返して自首するは流石は立派な強盗だと、盗人仲間の噂になり、性は善なる人の身に悪いことだと心付き、盗みを止める者が出來たら、聊か上への御奉公、人に褒められて生延びるか、悪く言はれて命を捨てるか、爰が生死の境だから、よく了簡を付けて見ろ。

〽流石は兄になるだけの、堪忍強き島蔵が、異見も秋の小夜風と、ともに身に沁み悪黨の千太は夢の覺めたる如く、善に返りて兩手を突き、

ト島蔵宜しくあつて言ふ、此内千太段々に俯向き、後悔せし思入にて、顔を上げず、よき程に顔を上げ、涙を拭ひ兩手を突き、

千太　これ兄貴、堪忍してくんねえ、お前の異見ですつぱりと、己あ今日から改心した。

島蔵　すりや、千太には改心したか。

千太　おゝ、是がせずに居られるものか、五年此方兄弟の縁を結んだ中だとて、己が様な人でなしを、愛憎も盡かさず幾度となく、眞身の者も及ばぬ異見、今日といふ今日肝にこたへて、己あすつぱり改心した、嘘偽りでない證據は、

〽側に有合ふ短刀を、取るより早く胸元を突かんとなすを取押へ、

ト千太改心せし思入あつて、短刀を取り胸元へ突立てんとするを島蔵留めて、

島蔵　これ千太、何をするのだ、手前の命が助けてえから、口を酢くして異見もするのだ、今殺す位なら誰が異見をするものだ、改心したといふ側から、何故不了簡なことをするのだ。

ト短刀をもぎ取る。

千太　お前と違つて改心しても、何の役にも立たねえ千太、死ぬのが世界の爲と思つて、命を捨てる氣になつたのだ。

島蔵　そんな詰らぬことをせずと、命を大事に堅氣になり、見世でも出して稼いだら、草葉の蔭の親達が嘸悦ぶであらうから、再び悪い心を出すな。

千太　今日から盗みはふッつり止め、是迄長年苦勞を掛けた親の忌日が來たならば、水でも手向けてやりませう。

島藏　さうしたことならどの位、安心するか知れやあしねえ、とてものことの安心ついで、今夜手前望月へ、切込むことも思ひきつたか。
千太　すつぱり思ひきりました。
島藏　それでおれも安心した。
千太　早く改心したならば、お前に苦勞をかけめえもの。兄貴、堪忍してくんねえ。
〽頭を地へつき詫びる折、樹木の蔭より德藏が、包みを抱へ立出でゝ、
ト千太詫びろ、下手の土手の後より前幕の德藏、紺木綿の風呂敷包を抱へ出て來る。
德藏　旦那樣、御免なされて下さりませ。
島藏　や、德藏か。
ト德藏下に居て、
德藏　千太さんが來たばかり、今日迄隱した素性が知れ、最早長居が出來ないと、思つて路用に簞笥から着類を出した其時に、底にあつた一腰を是幸ひと盜み出し、爰の樹木の蔭へ隱し、夜明になつたら持出さうと、藪蚊に喰はれて居たばかり、最前からの話を聞き、成程今夜盜んだ品をばらして榮耀をした所が、纔五日か十日にて、また一年の懲役の苦患をせねばなりませぬから、今日限り私も、惡い心を改めますから、どうぞ許して下さりませ。
〽盜みし品に短刀を、添へてひれ伏し詫びければ、
ト德藏風呂敷包の上へ短刀を載せて出し、手を突いて詫びる。
島藏　過つて改るに憚ることなしとやら、惡い心を入替へて、手前もまことの人になるなら、盜んだ科は許してやらう。
德藏　すりやお許し下さりますか、有難うございます。
千太　今も兄貴がいふ通り早速爰で野州德が、改心したはこつちの規模、斯うなる上はあの折分けた、五百圓の金を揃へ、兄貴と一緒に返したいが、五百圓は扨おいて五圓の金もねえ千太、差當つて望月から百圓取るより當はねえ。
島藏　其望月が懇望故、此短刀を二百圓に賣ればそれにて三百圓、まだ二百圓たりないが。
千太　盜みを止めては一圓でも、金の出來よう當はねえ。
〽金の員數を算うる折柄、
ト上手鳥居の內にて、

輝　いや、其の二百圓進上申さう。
〽小蔭を出る望月輝。
ト鳥居の内より三幕目の望月羽織着流し、駒下駄にて出て來るを見て、
島藏　や、さうおつしやるは、
千太　望月殿。
輝　島藏殿には初めてなれど、千太殿には計らずも昨日面會なしたる輝、今宵所用で麹町より歸る途中の招魂社、ひそ〳〵話すは何事なるかと、聞くともなしに小蔭にて一部始終を聞きし故、二百圓を進上申す。
島藏　千太は兎もあれ私は、お近付でもない貴方が、
千太　小金ならぬ二百圓、下さりますとおつしやるは。
輝　島藏殿へ寸志の謝禮。
島藏　とは又何故。
輝　遺恨によつて千太殿が、今宵邸宅へ切込めば、不意の事故討たるゝか、運よく命助かるとも、如何なる深手を負はうも知れず、危き災難脱れしは、島藏殿が止めし故、恩義に報ふ二百圓。
千太　すりや其金を私へ、お惠みなされて下さりますか。
千太　かゝるお慈悲な心も知らず、今夜己が切込んだら、しまひは首を切られるところ。
島藏　成程惡いことは出來ない、よいことすれば忽に、思ひ掛けなく出來る金。
輝　噂に聞いたかしらねども、僕も以前は脱れぬ仲間、今兩人が改心せし志を悦びて二百圓を進上致す。
千太　お慈悲深えお心にあまへて又もお願ひは、昨日手切に下さいますと、おつしやいました百圓をどうぞ千太に下さいまし。
島藏　手前も道具屋藤助よりお話し申せし此短刀、高いものだが二百圓に、お求めなすつて下さいまし。
輝　いかにも一旦渡さうと、申せし手切の百圓は、千太殿へ遣はさん、又短刀は懇望故、約束通り二百圓島藏へ渡し申さん。
德藏　すりや、最前の短刀は二百圓でござりましたか、お返し申してよかつたは、此德藏が持つて居たら纔な金で賣るところ、
島藏　正宗なりと申せども、銘もあらざる短刀を、
千太　二百圓でお買ひなさるは。
輝　元短刀は先祖より家に傳はる無銘の正宗、重器も瓦

解の其折柄、一度人手に渡りしも、計らず我手へ戻りし故、高價を厭はず求めし短刀。

島藏　それをお求め下されば、千太が分の五百圓、調ひますれば福島屋へ、先刻惠みし百圓に殘りは宅に四百圓。親父に預けておいたれば、是れにて員數も丁度千圓。

千太　思ひがけなく此の金が、今夜こゝへ集りしは。

德藏　改心なせし天の惠み。

島藏　難儀に迫る福島屋を、庇つて今日まで所持したる、日外手に入る千圓の證書を添へて返せし上、

千太　直に兩人警察署へ、罪の次第を自首なさば、

輝　官に於ても特別の、必ず輕き御處刑あらん。

德藏　此の事柄が新聞へ、出たらば賊のよい教。

島藏　これといふのも外ならぬ、望月様の皆お蔭。

輝　助力いたすはその以前、此の身も同じ白浪に、

千太　こゝに打寄る人々は、

德藏　濱の眞砂の竊盜より、

島藏　沖を越したる強盜の、

千太　氣の荒浪も引汐に、

輝　忽ち善に返る浪。

〽善に返りて打悦ぶ、折柄四時の朝淨め、

ト鈴の入りし大拍子、鷄笛になり、皆々思入あつて、

あの大拍子は、招魂社の、

島藏　毎朝四時の朝淨め、

千太　不淨を拂ふ鷄の、

德藏　聲勇ましき夜明前。

輝　空も晴れ行く。

ト空を見上げるを木の頭。

東雲ぢやなあ。

ト皆々引張りよろしく、早き大拍子へ鈴の音を冠せ、

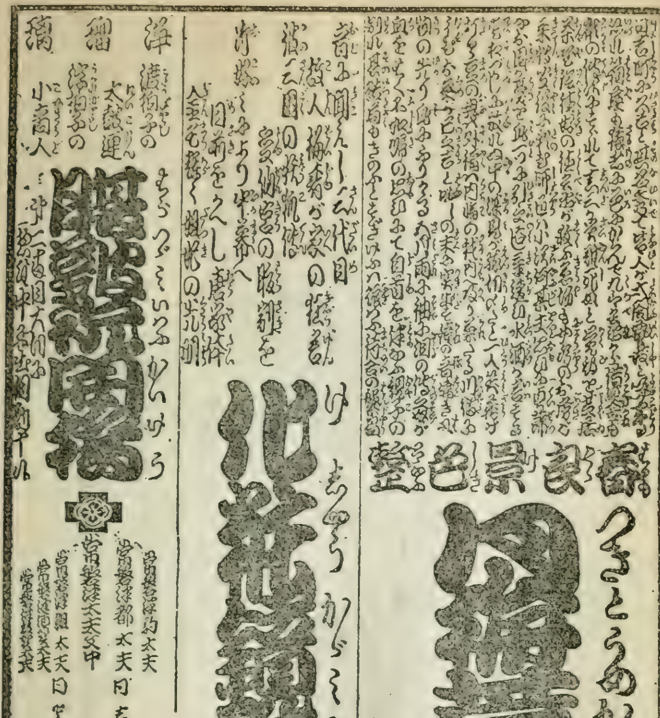
ひやうし　幕

島衛月白浪（終り）

日吉町に久吉と其名秀て皆人が太閤藝妓と呼子鳥何れ箱屋も猿者に色にからんで九郎兵衞から借込む金も獺の傳次にすられて眞三が災難死ぬと覺悟を芝居茶屋陰徳好の德兵衞が救ふ急場も女房のお房が機轉閑役に賴む師匠は小澤何某夫思ひに貞節なお園が憂を身一つに引受呑みし氣違ひ水酒が言はする愛想盡しに放れぬ中の深見が緣切〆たと一人笑藏が打たるゝ豆の鬼は外福は內輪の我內へ歸り兼たる川端に彳むお粂が巳之吉と話しの末に突出す鐘の音凄き刄物の光り身に降りかゝる五月雨に袖に淚の傳之助が血をはく不如歸の思ひにて自首に伴ふ親子の別れ其の結局も昨日と過ぎ今日は賑ふ待合の繁昌

春　良　景　色　整

月梅薫朧夜



紋番附の大名題

月梅薫朧夜（花井お梅――七幕）

新橋宇田川屋の場
久保町裏長家の場
比丘尼橋川岸の場

序幕

役名――代言人大河逸藏、芝居茶屋の亭主德兵衛、箱廻し巳之吉、金貸赤鬼九郎兵衞、吳服屋の手代眞三郎、巾着切川うそ傳次、同野鼠勘藏、同小淵金太、飴賣卽席妙八、納豆賣幸次、飴賣聲色篠吉。洗濯屋の養女お縫、同母おきぬ、宇田川屋の雇婆お虎、飴賣竹すのおとり、宇田川屋の半玉おたま等。

（新橋宇田川屋の場）――本舞臺上手三尺中敷居、上神棚、下二枚引の戸棚、下手腰張の茶壁、此次一間丁字引の襖、上手一間附屋體、中窓裾通りやはり腰張りの茶壁、下手の褄三尺西洋窓掛の暖簾口、正面板羽目、下駄箱、いつもの所一間二枚の格子門口、屋號を記せし御神燈、下手二等煉化の張物、鐵のポートの窓、此内簾を掛け、大臣柱の際隣の塗家の見切、總て新橋日吉町藝者屋の體、下手に半玉おたま唐人髷の蔓着流し、下締の拵へにて、天窓へ手拭を載せ、烟草盆を拭いて居る、雇婆おとらこましほ鬘、着流し前垂にて門口の格子を拭いて居る。下手に納豆賣り幸次、荷の内より丼へ納豆をとつて居る。此見得下方の道入りし稽古唄にて幕明く。

幸次　けふは餘程お負け申しました。毎度有難うございます。

お虎　昨日の朝のはこまか過ぎたから、けふは荒いのをおくれ。

幸次　けふは味噌豆でも納豆でも、一粒選りでございますから、小言を言はれる氣遣ひはございませぬ。

ト丼を出す。お虎受取りながら、

お虎　おたまさん、三錢とお小皿を取つておくんなさい。

たま　あい〳〵。

ト戸棚へ丼をしまひ、小皿と錢を出す。お虎受取り、
お虎　芥子は別に、是れへおくれ。
幸次　へい〳〵。
お虎　納豆屋さんは本郷かえ。
幸次　いえ私は麻布でございますが、夜の引明に本郷へ買出しに行きまして、それからずつと新橋へ來て、御近邊を商ひますが、橋の向う前で大てい賣切つてしまひます。
たま　此間見晴しへお座敷の時に、日蔭町で見掛けたね。
幸次　仙臺屋敷迄參りますが、谷齋先生の所などは、いつの朝でも買はないことはござりませぬ。
ト件の小皿を出す。お虎受取り、
お虎　谷齋さんは坊さんだから、それで納豆が好きなのだらう。
たま　そんな惡口を言ふと、先生に言付けるよ。
幸次　言付けられてお得意が減ると、納豆屋が困りますからだまつて居て下さりませ。
お虎　なあに天窓の廻り丸いから、あの人はおこりはしませぬ。
幸次　何にしろさう惡くいつて、掛り合ひになると困る。

又明朝參ります。
ト荷をかつぎ、
毎度有難うござりまする。
トやはり太鼓入り稽古唄にて、花道へ行く。此内向うより巾着切り川うそ傳次、着流し兵兒帶、駒下駄、野鼠掛繖、小狸金太、同じく着流し三尺にて出來り、花道にて傳次、幸次に態と突當り。
傳次　やい、氣をつけて歩きやあがれ。
幸次　お前さんの方から、突當つたくせに。
傳次　なに、おれの方から突當るものか。
勘金　納豆屋をなぐつてしまへ。
傳次　よく突當つて言掛りを言やがつたな。
ト天秤棒の先を持つて突く。是にて幸次ひよろ〳〵と舞臺へ戻りながら、
幸次　是れはお前さん方が、無理でござりまする。
三人　何を言やあがるのだ。
ト傳次荷を引たくり、兩人打ちに掛る。お虎格子を拭いて居て、見兼ねて中へはひり、
お虎　あゝもし〳〵、可愛さうに、どうぞ勘辨してやつて下さいまし。

傳次　ト是にて勘藏傳次の袖を引く、傳次うなづき、
いや、折角お前の頼みだが、こいつあ言掛りをしやあがるから。
お虎　さ、それはさうでもござりませうが、毎朝爰へ來る商人、あやまつて居りますから、堪忍してやつておくんなさいな。
金太　をばさんがあんなに言ふから、堪辨してやんねえな。
傳次　それぢやあなぐるのは、まけてやらう。
幸次　そんなら堪辨して下さりますか、へい／＼有難うござります。
　ト お虎思入あつて、
すんでのことに賣溜め迄。いえなに、お蔭樣で助かりました。大きに有難うござりました。
お虎　もういゝから、早くおいでよ。
幸次　へえ、有難うござりまする。
　ト下手へ行き、三人を見てぞつとなし、
苞入り納豆、味噌豆。
　ト氣味の惡き思入にて足早に向うへ這入る。三人は門口の提灯を見てうなづき、

傳次　をばさん、眞平御免なせえよ。
　ト三人内へ這入る。お玉びつくりして上手へ逃げる。お虎不審の思入にて、雜巾を持ちしまゝ内へはひり。
お虎　はい／＼、何御用でござりますえ。
傳次　爰に待つて居るから、挨拶を聞かしておくんなせへ。
お虎　何の御挨拶でござりますな。
傳次　とぼけなさんな、今の仲人のことをよ。
お虎　仲人とは何の事でござりますえ。
勘藏　此婆は、耄碌をして居やあがらあ、今手前が拔つて納豆屋を歸したぢやあねえか。
金太　其の仲人の挨拶を聞くのだ、いつ迄待たしておきやあがるのだ。
傳次　早く、挨拶を、
三人　しねえかえ。
　ト是にてお虎氣味の惡きこなしにて、
お虎　あゝもし／＼お前さん方、何をおつしやる。あの納豆屋は毎朝來るので知つて居るから、口を聞きましたが、別に御挨拶をする譯はありませぬ。
傳次　お前ぢやあ分からねえ、久吉さんに逢つて行かう。

おい姉さん、ちよつと爰へ呼んでくんねえ。

ト是にてお玉もぢ〱して居るを。

お虎　あゝもし〱、姉さんはお參りにいつて、內にはおいでなさいませんよ。

傳次　留守なら歸る迄待つて居よう。

勘藏　おい、煙管と煙草を貸してくんねえ。

お玉　はい、煙管とたばこ。

ト三人下手に住ひ、お玉氣味の惡きこなしにて、

ト二品を置いて上手へ行き、奧へ心遣ひの思入。

お虎　もし〱、女ばかりとあなどつて、途方もない言掛り、どうぞ歸つて下さんせ、朝ツぱらから緣起が惡い。

金太　手前達は朝寐をするから、まだ朝だと思つて居ようが、もう朝ツぱらどころか、今に晝ツぱらだ、主人に逢はねえうちは歸らねえぞ。

お虎　それではお巡りさんを、呼んで來ますよ。

傳次　呼ぶなら呼んで來い、其留守に此がきを、おらッち三人で、

傳勘　さらつて行くぞ。

お玉　えゝ。

お虎　え、、さらはれてたまるものか、ちよつとおたまさん、車屋へ行つて、若い衆を呼んで來ておくんなさい。

お玉　あい〱。

ト立ちかゝるを、

傳次　えゝ車屋などを呼んで來ると、二人ながらたゞは置かねえぞ。

お虎　えゝまあ、にくていなことばツかり。

ト當惑のこなし、流行唄になり花道より、箱廻し巳之吉、散髮かづら、半纒着流し駒下駄にて、房楊枝を耳に挾み、濡れ手拭を持ち、足早に出來り、直內へはひりながら、

巳之　をばさん、嘸心配しなすつたらうが、わたしが歸つたから、案じないがいゝ。

お虎　おゝ、いゝとこへ歸つておくんなすつた、お前此人達はね。

巳之　なあに委細を聞くには及ばねえ、今湯屋の門口で、納豆屋に詳しく聞き、急いで內へ歸つて來たのだ。

お虎　おやさうかえ、それでは始末は御承知の通りさ。

ト久吉は留守を遣つたといふこなし、巳之吉呑込み上手へ住ひ、

巳之　是は皆さんお出なさいまし、わたしは內の者でござ

りますが、譯は今聞いて來ました、かうして揃つてお出でなさるのは、何の御用でございますね。

傳次　お前さんは番頭さんですかえ、是はお初にお目に掛りましたが、今姉さんの歸つて來るのを、待つて居るのは外でもねえが、此お婆さんの顏を立つて、いも／＼のある納豆屋を、だまつて返してやつたのだが、それッきり何一つ挨拶がありませぬから、それで主人の歸るのを、二人で待つて居ますのさ。

巳之　それはお待遠でございましたが、主人といつても御存じの藝者のこと故、こんなことは私が取計つて御挨拶をいたしますが、いつたいどうすればようございますな。

傳次　さう改まられるとわつち共も、大きに閉口をしますが、實はね、こいつら二人は二三日跡、市ケ谷から滿期になつて歸つた奴等、薩摩屋へ頼んで水まきにでもさせりやあ、造作もねえことではあるが、そいつもあんまり智慧がねえから、新聞でよくいふ正業に取りつかせてえと思ひますから、そこでお頼み申しますが、どうか二人へ五圓ばかり、元手を貸してやつておくんなせえ。

巳之　あゝさうでございますか、それはお目出度うございましたが、誠にお氣の毒ではございますが、是はお斷り申しまする。

傳次　へえ、何で斷りなさるね。

巳之　さ、そりやあね、隨分事と品によれば、かういふ生業をして居ますから、お祭り又は花會などの義理は始終出して居ますが、つひに一度逢つたこともねえ、どこの人だか知らねえお方に、元手などは貸されませぬよ。

傳次　へえゝ、それでは何ですかえ、わつち共には貸せねえとお言ひなさるのかえ。

巳之　えゝ、此新橋で久吉といつては、そんなに引けも取りませぬが、まだ大姉えといふほどな、立派な顏でありませんから、知らねえお方の元手などは、百も出來る譯がございませぬ。

傳次　さ、それはさうでもあらうけれど、先新橋は南北切つて誰知らねえ者もねえ、飛鳥落す久吉さん、大閤さまぢやあねえけれど、當時日の出の關白職、いはゞこんな雜兵の、一人や二人を貢がれねえと、卑下をするにも及ばねえ。

勸藏　戰場と見た客の座敷で、智謀計略用ひりやあ、金が芽を吹き千成瓢箪二圓下の祝儀はあるめえ。

金太 其上英語の附帳と來て、オウライといつた日にやあ、十圓より少なからず、御緣があつて仲人に這入つたこちとら三人が、兜を脫いで此たのみ。

傳次 どうか取計らつて今朝の所は。

勘藏 貸してやつて

三人 おくんなせえな。

ト三人よろしく思入、此内お虎は門口へ出て、向うと下手を見やり、巡査を待つ思入、巳之吉思入あつて、

巳之 久吉といふ名前から、大閤さまに準へた世事で、貸してくれろとお言ひなさるが、どうも是は出せませぬ。

傳次 それでは、どうしても貸されませぬかえ。

巳之 一人前二錢として六錢になるのを、もう四錢たして十錢なら上げませうが、その上はまあお斷りだ。

傳次 十錢ばかりのはした錢、誰が貰ひに來るものかえ。

トきつと言つて氣を替へ、

とさあ威張つていふのは昔の事、お婆さんが門口で、見張つて居てはうつかりと、大きな聲も出來ねえ仕儀。

勘藏 實はこちらは、場末の者で、こりやあ顏は知んなさるめえが、そんな事を言はねえで。

金太 いくらでもいゝから貸しておくんねえな。

巳之 さ、それだから十錢なら、今立替えてやらうといふのだ。

傳次 それぢやあどうでもそれきりかえ。

巳之 まあ、其上は、お斷りだね。

傳次 そんなら借りねえ、百も借りるめえよ。

勘藏 おい、それでは、こつちの懷が。

ト袖を引くを振拂ひ、

傳次 しみツたれなことを言ふない、一圓や二圓なら、こつちでやらあ。

勘金 それだつてお前、つまらねえぢやあねえか。

傳次 まあ、だまつて居ろといふに。

ト巳之吉に向ひ立上りながら、

貸さゞあ借りねえぶんのこツた。

巳之 そいつあ豪氣だ、全體てんきに借りたがらにやあいに。

傳次 口のへらねえ事を言やあがるない。

ト是にて三人門口へ出る。お虎氣味惡ろ〳〵内へはひる。

やい覺えて居ろ。

ト足にて格子を締める。是を端唄になり、勘藏金太附

いて三人下手へはひろ、お虎は奥より鹽壺を持つて來り、門口へふりながら、

お虎　もう少し大きな聲をしたら、直呼んで來ようと、手ぐすね引いて待つて居たら、たうとうとらずに歸つてしまつた。

巳之　向うもこはいのは知つて居るから、大きな聲を出しやあしないが、時々あんな者があつて、かういふ場所は困り切るのさ。

お虎　昔は緡賣や見附者が、金春あたりへ來たものだが、あゝいふ者がお廢しで、屋敷近くは大仕合せさ。

たま　姉さんがお留守の積りで、もし奥へでも行かれたらわたしやどう仕ようと思つて居たよ。

巳之　なに、どんな事がし得えるものか、高が知れてゐるさあ。

ト　やはり稽古の流行唄になり、花道より、吳服屋の手代眞三郎、散髪着流し、股引尻はしをり草履、若い者にて吳服の風呂敷包みを脊負ひ出來り、直舞臺へ來て門口を開けながら、

眞三　へい、御免下さりませ。

巳之　おゝ常陸屋さんかえ、さあ、こつちへお這入りなさい。

眞三　さやうなら、眞平御免なされませ。

ト下手へ通りお玉を見て、

大分お働らきでござりますね。

お虎　お玉さんは、起きたばかりで、直煙草盆の掃除に掛つて、まだ二つ出來上りませぬよ。

たま　をばさん止しておくれ、今あんな人が來たので、手を明けて居たわあね。

ト此内お虎敷紙を出して、ランプの掃除を始める。

眞三　お玉さんに申譯がござりませぬが、此間の小紋はもうちつとお待ちなすつて下さりませ。

たま　程のいゝ事ばかり言つて、常陸屋さんは餘程ずるいよ。

ト此内巳之吉茶を汲んで出し、

巳之　ずるいといへば此間の、双子の代が遲くなりましたが、もう少しどうぞ、待つておくんなさい。

眞三　えゝよろしうござりますとも、いつでも御都合でよろしうござります。

ト奥へ思入あつて、

姉さんはお留守でござりますか。

巳之　いえ、内に居ますが、昨夜番町さんへお座敷で、丁度歸りが四時になりましたから、まだ夜半でござります。

眞三　それではお目覺を待ちませうかしらぬ。

巳之　何ぞ註文でもありますかね。

眞三　いえ註文ではござりませぬが、お前さんも氣を揉んで下さる勘定の引殘りが、去年の大晦日から丁度先月の晦日迄で、百三十圓餘になりましたので、一昨日お願ひ申して、今日迄といふお約束で上りましてござりますが、どうしたものでござりませう。

巳之　勘定の事は姉さんも、心配しては居ますが、少し目的にするお客が來ないので、ひどく弱つて居ますのさ。

眞三　いつも物前は世間並より早く下さる、こちらさまが引殘りになつて居るので、何だかこちらから、受取つて遣ひ込みでもしたやうに、やかましく言はれますので、無據願つて置きましたが、お目覺迄お待ちしてをりませうか。

巳之　そのお前さんの困難も、姉さんから聞きまして、ともども氣をもんで居ますが、今日はどうにかなりませうから、歸りに寄つて見て下さい。

眞三　それでは新橋向うを、二三軒廻りまして、お晝過にお目に掛りませう。

巳之　それではさうしておくんなさい、御迷惑の廉はよく話しておきます。

眞三　何分お願ひ申します。

ト立上り下手へ行くを、

お虎　お晝過にお出でなさるなら、それ迄新富町へでもお出でなさればいゝに。

眞三　どうして、芝居所ではござりませぬ。

ト門口へ出て、

左樣なら、よろしくおつしやつて下さりませ。

ト流行唄にて眞三郎花道へ這入る。

お虎　常陸屋さんは内氣な人故、惡催促をしなさらないからあんまり勘定が長くなると、お氣の毒でなりませぬ。

巳之　若いに似合はぬ利口者、去年の大晦日から内金もはひらないから無理もない、どうか姉さんに話をして、今日は金を遣りたいものだ。

たま　お拂ひが行かないと、わたしのものまで急に來まいね。

お虎　そりやあ姉さんの事だから、總見物の時迄には、き

つと間に合ふに違ひありますまい。
たま　をばさん、わたしからは言憎いから、お前忘れずに頼むよ。
お虎　私が請合ふから何か、お奢りなさいよ。
たま　あい、此頃に天金を奢りますよ。
巳之　おたまさん、掃除が出來たら姉さんの、枕元へ上げておくんなさい。
たま　あい／＼。
ト流行唄にてお玉煙草盆を持ち奥へはひる。此内花道より赤鬼九郎兵衞、羽織着流し駒下駄、高利貸の拵へにて出來り門口へ來て、
九郎　はい今日は。
巳之　お出でなさいまし。
ト門口を見やり、
おゝ旦那、さあこちらへ。
九郎　御免なせえ。
ト上手へ通り、
久吉さんはお内かえ。
巳之　へい内でござりますが、昨晩遅い座敷で、夜明けになりましたので、まだ臥つてをりまする。

ト此内巳之吉茶をついで出し。
九郎　そりやあ忙がしくッて結構だが、さうしておめえに貸した十圓は、約定通り出來て居るのか。
巳之　へい、それがどうも、今月は納り兼ますから、もう一と月お待なすつて下さりませ。
九郎　そりやあ相談次第で待たない事もないけれど、書替へなければいかんの。
巳之　書替へろとおつしやるなら、書替へてもようござりまするが、をどりはまけて下さいませうね。
九郎　馬鹿な事を言ひなさんな、書替へてをどりを負けるそんな無慾なやつが、何處の國にあるものか。
巳之　あなたも年中藝者屋を、廻つて歩く金貸だからさう四角張つた事をいはずと、書替杯はお負なさいな。
九郎　所が相手が藝者屋だから、猶の事因業をいふのだ。女を相手に少しでも白い歯を見せる時は手前勝手な事をいつて、つまり元金迄玉なしだ。
巳之　それはさうでもござりませうが、さう金溜主義でなく、ちつとはお遣ひなすつても、へるやうな事はありますまい。
九郎　それは俺だつても、木のまたから産れたといふ譯で

はなし、是でも新橋は誰だとか、葭町ならあれだとか、不斷目串は附いて居るのよ。

巳之　どこでも土地はお好み次第で、目串が附いて居ますなら、お取持をいたしませうか。

ト是にて九郎兵衞思入あつて、

九郎　それでは物は相談だがれきはどうだらうの。

ト奥へ思入あつて親指を出す。

巳之　成程それですかえ、なにそりやあ、まとまらないとも限りませぬ。

お虎　おやまあ、不斷の閻魔顏が、直に極樂の地藏顏、ほんに、あきれたものだねえ。

九郎　婆や、まあ、靜かにいつてくれ。

ト巳之吉考へ居る故、九郎兵衞進みいで、

どうだえ、君の手心に行かうか。

巳之　さ、こいつア餘ッ程むづかしい請負仕事でございます。

九郎　なぜ〳〵。

ト前へ出る、是にて火鉢を押す故。

巳之　もし〳〵火鉢を押すと鐵瓶が、ひつくり返ります る。

九郎　是はひつくり返つてもいゝが、其の話しはどうだらう。

お虎　なに、ひつくり返つていゝものか、跡の掃除が厄介だ。

巳之　まあ、もう少し後へお下りなさい。

ト九郎兵衞を少し後へ下げ、

旦那、どう考へて見ても、やつぱり是でございますね。

ト指で輪をこしらへる。

九郎　そりやあ一圓や二圓の事は、直當人にやる積りだ。

巳之　常談をいつてはいけません、金でいふ事をきくやうな、そんな藝者は新橋中に、藥にしたくもありはしませぬ。

九郎　それだつて今、こんな手をしたではないか。

巳之　そりやあしましたが、其一件で義理詰めにするより考へはございませぬ。

九郎　一圓か二圓位で話を附けて貰ひたいが、それで行かずば、五圓も出さうか。

巳之　成程是は御奮發だ、それは有難うございますが、ちつとそれでは出來兼ねませう。

九郎　はゝあ、まだ奮發が足りないかな。

ト合方きつぱりとなる。

巳之　オウライといふ肩書のある藝者ならば知らぬ事、腕を磨いて世を渡る、一本生の藝者故、そんな事では此話は思ひ切るとなさいまし。そこで是は別なお話、此頃ちよつと爲になる、田舍のお客が來なさらないので、差支へが生じましたが、それに付いて今日夕方迄に一本是非やる所があつて、實はもう延ばせない口で、共々よわつて居ますが、是はお貰ひ申すのではありませぬ。貸附けるのでござりますが、こゝを救つて下されば、其義理詰でかつぎ出し、向島あたりでしつぽりときつと話は纒めますが、何と旦那、其金を間に合はしては下さいますまいか。

九郎　鰒は喰ひたし命は惜しゝで、出さぬこともないけれど、是まで通り五兩一に一圓五十錢の禮金の割でよいかな。

巳之　五兩一では百圓で五圓の利息になる上に、五臺で一圓五十錢の禮金では、百圓なら是が十五圓、都合で二十圓天引では、百圓借りて八十圓の手取、それは餘りひど過ぎませう。

九郎　それでも抵當なしだから、餘程こつちの割は惡いが、まあ女の體が抵當替りと思つて、あぶねえ橋を渡らう。

巳之　成程狡猾極まつた、いえ何極つた、直ぐ貸はれませうか。

九郎　どうして〳〵、さうおいそれとは貸されない、本人に逢つて、表向證書をとつて渡さねばならぬ。

巳之　それではお話がまとまつても、やつぱり證書が入りますかね。

九郎　それはそれ、是はこれ、錢金はあかの他人だ。

巳之　それで旨く出來ればいゝが。

九郎　えゝ。

巳之　なに、出來ればいゝがと思つた金が、不意に百兩湧き出せば、義理にもお話は纒まりませう。

九郎　それでは是から晝食を喰ひ、苅込をして風呂へ這入り、器量を上げて來ようから、よく當人に話をして、證書をこさへて置いてくれ。

巳之　へえ、よく話を致しまして、お出でをお待ち申しまする。

お虎　旦那、糠をお遣ひなさいましよ。

九郎　えゝ、煽つてくれるな。

ト九郎兵衞立上り、下手へ行きながら、

然し、きつとよからうの。
巳之 丸印の一件があつては、間違へやうがございませぬ。
九郎 君には、骨折を出すよ。
巳之 それは有難うございます。
ト下手へ行く、お虎着物を直す。爰へ奥よりお玉火入を持ち出來り、九郎兵衛を見遣り、
お玉 おやまあ、嫌ひな人が。
ト言掛けるを、巳之吉「これ」と思入。
九郎 何だと。
巳之 いえ、傳九郎の事を言ひましたのさ。
九郎 ハックション、むゝさうか。
ト門口へ出る。
巳之 旦那、きつとお待ち申して居りますぜ。
九郎 かた〴〵も、きつと當にして居るよ。どれ、雁首を磨いて來ようか。
ト流行唄にて九郎兵衛花道へはひる。巳之吉跡を見送り、お玉は火入へ火をいける。
巳之 高利を取らうばつかりに、堅氣な所へ貸さない金貸、なか〳〵狡猾極まつて居るが、色には誰も乘り易くから請合つて歸つたからは、持つて來るに違ひはあるまい。
お虎 巳之どん、あんなに請合つて、姉さんを說附ける氣かえ。
巳之 話はするがまあむづかしからう、百圓を受取つたら常陸屋さんの拂ひへ入れ、九郎兵衛さんへちやらッぽこで、四五日ばかりおよいでおけば、其内幸手の親指がお出でなさるに違えねえ。さうしたら譯を言つて、旦那から出して貰ひ、それで返せば、いはくはねえ。
ト此内お玉は火入へ火を入れ奥へはひる。お虎は油掃除をしまひ、ホヤを棒にて磨き居て、
お虎 さう行けば常陸屋さんもよし、又姉さんもお仕合せで、お前は主人へ大忠義、大層善人におなりだねえ。
巳之 どういふ譯だか世間の人が、私を惡黨の樣にいふが、こんなつまらない事はない、常陸屋さんなどはもう言譯に盡きて、穴へでもはひりたい次第からだ。
お虎 そりやさうだよ、あんな內端な若い人は、爰へ來てもめつたに催促をした事もなく、內へ歸ると小言を言はれ、終に身でも投げるたちさ。
巳之 さうだとも、此間の新聞にも、どこかの吳服屋の若

い衆が、ある藝者に貸込んで、たうとう取れないところから元柳橋へ行つて身を投げたと、出て居た事があつたから、主人持ちのおとなしいのは、實は借りるにも心配だ。

お虎　かう心配するを見ると、元からお前は善人だつたね。

ト此以前九郎兵衞のはひりし跡へ、入替つて下手より幕明の傳次出來り、門口に立聞をして居る、巳之吉はお虎の拭いて居るホヤを見やり、

巳之　手もなくお前が磨いて居る、ランプのホヤと同じ道理さ。

お虎　なに、此ホヤと同じとは。

巳之　世間で言はれた惡名も、磨いて見れば、

ト指さしするを、道具替りのしらせ。

其通りきれいになるのだ。

ト此時傳次はそつと下手へはひる。此模樣よろしく、下方入りの稽古唄にて道具廻る。

（久保町裏長家の場）――本舞臺一面の平舞臺、上手一間中敷居のある押入戸棚、此下鼠壁上半窓、雨戸を立て、上手一間附屋臺、三尺障子の出這入り、跡鼠壁、下手一間折廻し板羽目、一つ竈上流し、いつもの所門口、是に「洗濯御仕立物」と記せし板札、下手隣り家の下見を見たる張物、總て櫻田久保町裏長屋の體。爰に洗濯屋の母おきぬ、ごましほ鬘やつし裝にて、針箱の傍にて裁縫をなし、下手に、娘お縫、銀杏髷着流し前垂にて、同じく針仕事をなし、針箱の上に菓子袋を載せあり、此模樣さんげ／＼の合方へ、調練のラッパの音を冠せし鳴物にて道具留る。

お絹　今そなたが取つて來た、パンを佛樣へ上げたがよい。

お縫　あい、かしこまりました。

お絹　春になつても休みなしに、から仕事が立込んでは、そなたも少しも休みがないが、何をするのも勉强故、手の上るを樂しみに、辛抱したがよいわいの。

お縫　どんなに私や忙しうても、遊びたいとは思ひませぬから、澤山仕事をさせて下さい。

お絹　其替り今年の冬は、上方から大隅と團平が上るといふから、鶴仙へでもかゝつたら一日連れて行きませう。

お縫　越路はお隣りのをばさんと茅場町で聞きましたが、あの人の御師匠さんが、團平といふ三絃彈と、話に聞いて居りました。

お絹　定めし來たならば大入りだらうが、あれもやつぱり其身の勉強、道に違ひはないわいの。

ト此內佛檀の供物臺を取り針箱の上にてパンを盛り、

お縫　そんなら是を上げまする。

ト佛檀へ供へる、やはりさんげ〳〵ラッパの音になり、花道より以前の手代眞三郎出來り、

眞三　烏森で手間取つたので、時刻がちつと遲くなつたが、ちよつとお寄り申して行かう。

ト門口へ來り、

おつかさま、お內でござりますか。

ト明ける、兩人見て、

お絹　おゝ眞三郎か、さあ〳〵、こちらへ這入りやいの。

眞三　眞平、御免下さりませ。

ト合方になり、眞三郎下手へ通り、

お縫　兄さん、ようお出でなさいました。

眞三　ちよつと上りたうござりましたが、見世が此節無人の所へ、午から諸方のお得意を廻りますので、日いつぱいに歸りますから、こちらへも存じながら、來られませぬ。

お絹　こなたの袷も遲くなつたが、今これが縫つて居りまする。

眞三　それは大きにお世話さまでござりました。

ト此內荷の內より小切のかたまりを出し、

是は見世の出切だから、お前の所へ土產に持つて來ました。

お縫　それは有難うござりまする。

トひろげ見て、

かゝ様天窓掛もあり、襟になるもござりまする。

お絹　おゝそれは調法なものぢや、お前もお愛想に、今のパンを出したがよい。

お縫　はい〳〵。

ト件のパンを丼へ入れる。

お絹　新橋へ毎度來ると、ちよつと噂に聞きましたが、ようこつちへ廻つて來やつた。

眞三　今春へは始終參りまするが、其內にも日吉町の宇田川屋さんが一得意で、三日目位づゝには必ずまゐります。

ト此内パンを盛りし丼と茶を添へて出し、

お縫　兄さん、一つ上つて下さいまし。

眞三　是は御馳走だね。

お絹　今日は必ず來るであらうと、心待に待つて居ました。

眞三　へえ今日上るのを、どうして御存じでございました。

お絹　實は昨日御主人が、内へお出でなすつたわいの。

眞三　へえ旦那さまがお出でなさいました、して何の御用でござりましたな。

ト合方きつぱりとなり、

お絹　さ、用といふのは外でもないが、旦那樣がおつしやるには親父が死んで十の時、小僧に來たる眞三郎年が明いたら見世を出させ、行末世話して遣らうと思ふ矢先へ此頃は、新橋邊の掛先が一向に歸らぬのはもしやどこぞへ馴染が出來、掛先の金をその方へ遣ふのではあるまいか、夜るでも聞いて見度いと思へど、外の奉公人の手前もあれば、うちで言はれぬ其砌り、そちよりとつくり異見をして、心得違ひを直さしてくれと、有難い御主人の仰せ、二三日の内葉書にて、ちよつとそなたのお暇を願ひ、とつくり異見を仕ようと思ふ所へ折よく來るのは、丁度幸ひ其譯故、さういふ事のないやうに、御主人へ忠義を盡してくりや。

眞三　成程旦那がさう思召すのは御尤もでござりますが、お話し申さねば分りませぬが、實は今申した宇田川屋さんは、私の廻る一の得意場、物前の締高は百圓を缺かしたことなく、其の上上端の五厘迄ちやんとつけて下さる御内證が、去年の大晦日は御都合の悪い御樣子、それから段々延々になりました故、旦那樣がさう思召すのでござりませうが、是は先方を糺しても分る事でござります、尤も今朝ほど寄りました時、此夕方迄に都合をするから、歸りに寄つてくれとの仰せに、一二軒得意を廻つてから、時刻を計つて參る積り、決して私におきましては、引負などはいたしませぬから、御心配なすつて下さりますな。

お絹　むゝ、そんなら引負したといふ、悪い事はないのだやな。

眞三　今日是から宇田川屋さんで、お拂ひきりにならずとも、内金を下さる約束、さうすれば私の遣ひ込みとの疑ひもすつぱり晴れると申すもの。

さう思召して下さりませ。

お絹　さういふ事なら是から行き、受取りやつたら少しも早く、旦那様へ納めた上、其の事譯を申し上げ、わしにも安心させてくりや。

眞三　納めましたら上りますか、又郵便でよこしますか、必ず御返事を致しますから、くよ／＼思つて下さりますな。

お絹　實は昨日から其事で、胸が痛んでならなんだが、それを聞いたので落着きました。

ト安堵せし思入、此内お縫眞三郎の左りの袂へ心附き、

お縫　兄さん、ほころびが切れてをります。

眞三　あゝ、是れは今此路地で引かけたと思つたが、其時ほころびを切りましたか。

お絹　ちよつと縫つてやつたがよい。

眞三　それではちよつと附けて下さい。

お縫　あい。

ト嬉しきこなし、合方キッパリとなり、眞三郎腕を上げ袂を出す、お縫針をとつてほころびを縫ふ、お絹此様子を見やり、

お絹　かうして二人が一緒に居るを、見るに附けても一日も早う夫婦にしたいものぢや。

眞三　是は又御常談ばツかり、妹が恥かしがります。

お絹　お縫はわしが妹の娘、かうして内へ引取つたも、始終は夫婦にする積り、二人とも得心か。

眞三　いえもう、お止しなさりませ、そんな事をおつしやると、さつぱり綻びが縫へませぬ。

お縫　あれ兄さん、縫つて居りますよ。

眞三　それでもさつぱり、縫はないではないか。

お絹　縫はずば、ぬつてやりませうか。

お縫　いえ／＼、縫つて居りますよ。

ト言ひながら眞三郎の膝をつねる。

眞三　あいたゝゝ。

お絹　どうしたのぢや。

眞三　いえ／＼、つい妹が、針を膝へさしました。

お絹　えゝ、そゝツかしい、氣を附けぬのか。

ト此内縫ひじまひ、

お縫　兄さん、覺えて居なさんせ。

ト嬉しさを隱すこなし。

眞三　もう宇田川屋さんへ參ります刻限も、よくなりまし

たれば、日の暮れぬ内私は、お暇をいたしまする。

お絹　歸るなら今言うた事、くれ〴〵も頼みますぞ。

眞三　必ずお案じなされますな、是から參つて受取れば、遣ひ込まぬ事はわかります。

ト包みを脊負ひながら、

左樣なればまた其内。

お絹　尋ねて來て下されい。

眞三　かしこまりましてござりまする、お前もよく氣を附けてお上げよ。

お縫　あい〳〵。

ト稽古唄になり、眞三郎花道へはひる、お絹は門口より向うを見送り居る。

お絹　宇田川屋さんとやらの掛の事を聞いて、胸も落着いたが、あれの事故障もあるまい。袷が出來たら是を持つて、樣子を聞きに御主人へ上つてお話しするとしよう。娘、丈は五分延ばしたらうの。

ト言へども、お縫は向うを見てちつと思入。

丈はよいかの、これ五分延ばしかえ。

ト是でも返事せぬ故、お絹心附き思入あつて

あゝ莟の花も。

トきつと言ふ。是にてお縫心附き、

お縫　え。

ト下に居るを、道具替りのしらせ、

お絹　時節ぢやなあ。

トお縫下に居た儘、やはり門口へ思入、お絹扨はといふこなし、稽古唄にて此道具廻る。

(比丘尼橋川岸の場)――本舞臺上手橋の袂、手摺、續いて柳の立木、共同揚場と記せし榜示杭、下手莫大のロレツ砂利を入れたる桝などを置き、正面一面の石垣、上草土手、松の立木の中遠見、堀通り御濠の水布を張り、此前川端、石垣の見切、總て京橋比丘尼橋、南詰夜の體、鳴物入り竹に雀の唄にて道具留る。と花道より飴賣聲色衒吉、着附尻はしをり頭巾にて、提灯を附けし飴屋の屋體を引き、卽席妙八同じく飴屋にて天窓へ切の島田を附け、後より屋體の内の太鼓をたゝき、ずつと後より女房おとり、結び髮やつし裝にて、三味線を彈き出來り花道にて、

妙八　ちやん、めつぽふ寒くなつたなう。

衒吉　御濠ツぷちは川風で寒いの。

とり　向うの角で賣つたら、流してぶら〳〵歸るとしよう。
妙八　今日が暮れたばかりだ、そんな因循ぢやあいけねえよ。
紈吉　え丶、旨く言やがる、一番手前が遊びたがるくせに。
トやはり太鼓をたゝきながら、舞臺へ來り、よき所へ荷を置き、鳴物を打つて居る、此内花道より、以前の傳次、勘藏出來り、
傳次　めつぽう寒くなつて來たが、いつぺえ引ッかけなくちやあかなはねえ。
勘藏　鍛冶橋へ行つて、おいをやらうか。
傳次　それもいゝが、金太が來る迄存みにはひる譯にも行かねえ。
ト兩人舞臺へ來ながら、
勘藏　わるい所に飴屋が居るの。
傳次　買つてやりやあ、いつてしまふだらう。
ト下手にて向うを見込み居る。
紈吉　晝間は此角は賣れる所だが、灯りが附いてはかたなしだ。

妙八　比丘尼橋を渡ると賑やかだが、こつち川岸はからいけねえ。
女房　もう少し辛抱して、音をさして居ようではないか。
ト是にて傳次兩人が邪魔になるといふ思入あつて、
傳次　おい〳〵、二百ばかり買つてやらう。
妙八　へい〳〵、有難うございます。
ト紈吉飴を紙に包み、傳次に渡す。此内女房調子を合せ、妙八前へ出る。
紈吉「吉田通ればチヨイト〳〵、二階から招くチヨイト〳〵、然も鹿の子のチヨイト〳〵。」
ト妙八島田臺にて踊りかけるを、
傳次　おい〳〵、踊らなくつてもいゝから、早う向う川岸へ行くがいゝぜ。
妙八　有難うございます。
二人　又お願ひ申します。
トやはり右の鳴物にて三人荷を引き、囃しながら上手へはひる。
傳次　いけさう〴〵しい野郎だな、それはさうと、いつ迄待たして置くのだらう。
勘藏　もう來さうなものだが。

ト兩人飴を喰つて居る。やはり右の鳴物、ばた／＼にて、向うより以前の金太財布へ手を入れながら走り出來り、

金太　いや、大きに待遠だつたの。

ト兩人財布を見て、

傳次　何かやり合つて來たのか。

金太　なに、そこ迄車へ乘つて來て、今錢をやつたのだ。

傳次　さうして、代物はいゝのか。

金太　おめえの跡で又宇田川屋へいつて、すつかり種は上げて來た。おい、耳をかしねえ。

ト兩人に囁く。替つた合方になり、三人是にて下手砂利の桝の影へ、下に居る。此内花道より以前の眞三郎出來り、

眞三　數寄屋川岸迄賑やかだつたが、爰へ來たら急に淋しい、是なら少し廻り道でも、鐵道馬車に乘ればよかつた。

ト舞臺へ來ながら、

然し鍛冶橋外から又賑やかぢやな。

ト上手へ行かうとする。此時下手より傳次窺ひ出て、ずつと上手へ廻り、眞三郎に突當る。是にて眞三郎不意をうたれ、風呂敷包を脊負ひしまゝ尻餅をつく、此間に傳次眞三郎の懷中より財布を拔き、紐を切り、勘藏に渡す。勘藏下手へ拋るを、金太出て拾ひとり、下手へ逃げてはひる。

傳次　やい、氣を附けろ。

ト此内眞三郎風呂敷をとき、起上り、懷中へ思入あつて、

眞三　や、こりや、こなたは。

ト傳次へすがり附くを振拂ひ、

傳次　突當りやあがつて、何をしやあがる。

眞三　其の突當つたのが、そつちの仕事、さ、此襟へ掛けた財布を出しなさい。

ト首へ掛けし財布の紐の切れたるを出し、きつとなる。

傳次　途方もねえ事をいやあがるな、それではおれが切つたといふのだな。さ、切つたと思ふなら、何處でも改めて見ろ。

ト眞三郎の前へ懷を廣げる、眞三郎やつきとなり所々を搜し、無き故あたりを搜す。此内勘藏は下手にて上手を見渡し、巡行を氣を附けるこなし。

眞三　や、慥にこなたと思つたが。

傳次　どうだあるめえ、やい、よくも盜人の惡名を附けたな。

ト眞三郎を引附け合方になり、

これ、何を見て盜人といつた、人込みでもあることか、暮れては往來も少ねえ通り、昔と違つて巡行のお巡りさんのはげしい時節、土地もあらうに京橋區の眞中といふ比丘尼橋、日の暮れたばッかりで追落しの出やう譯がねえ、大方どこぞで切られて來て、突當つたおれと間違へ、一途に狹い了簡から、取つたと思ふか知らねえが、今見る通りどこにもあるめえ。

眞三　さあ、それは。

傳次　それでも搜す所があるか。

眞三　さあ。

傳次　よくも盜人と言やあがつたな。

ト蹴返し

さあ、明らかな體だから、どこへでも一緒に行かう。爰から近い鍛冶橋外の派出所へ行つて調べて貰はう。さあ、おれと一緒に來やアがれ。

ト眞三郎の手を取り、引立てに掛る。爰へ下手より勘藏、金太出來り、

勘藏　もし〳〵、どうしたのでございます。

ト傍へ來る。傳次そしらぬ振にて、

傳次　もし、あなた方聞いておくんなさい。今此橋の袂で此人に突當つたら、わしを盜人だと言掛り、よんどころなく潔白の爲に、體中を見さした所、それでもぐづ〳〵言ひますから、派出所へ出て、お調べを願ふと言つてをります所、こんな無理はござりますまい。

勘藏　體中を改めて、それでお前ををかしく思ふのは、こいつは言掛りに違ひねえ。

金太　そんなやつこそ派出所へ、しよびいて行つて、調べて貰ひねえ。

勘藏　それがい〻〳〵。

眞三　はい、行けといふなら參りませうとも。

ト三人一緒になり、眞三郎の兩手をとり、引立てろこなしにて引たふし、一人は足蹴にする。眞三郎びつくりなし。

あ〻もし、お巡りさま、お出でなすつて、助けて下さい。

三人　え〻、ぐづ〳〵言やあがるな。

トさん〴〵に打擲なし、下手へ逃げてはひる。眞三郎起上り、跡を追ひ駈け行かうとして荷物に躓きどうとなり、體の痛むこなしにて、ほつと思入、時の鐘合方になり、

眞三　通りへ廻ればよかつたに、わづかな道を悲しんで、日の暮れたばかり故、よもやと思つて川岸通りを、通つたばかりに此の災難、小遣ひ位ならよけれども、宇田川屋から受取つた百圓の金がなくては、猶々主人へ歸られず、とあつて相手の行方は知れず。

ト思入あつて、

こりや死んで言譯するより外に、よい思案はあらぬわえ。

ト上手の川をすかし見て、

幸ひ今は上げ潮で、此お濠が潮でいつぱい、身の言譯にム、さうだ。

トツカ〳〵と後ろの石垣より身を投げようとして、ひよろ〳〵として後へさがり、ほつと思入あつて、

命を捨て、言譯なし、身の潔白は立つけれど、主人へ金の戻らう樣なし、こりやいつそのこと、此荷物を品物配達所より見世へ屆け、事の仔細を郵便で、旦那樣へ申上げ、明日にも蒸汽で遠國へ行つた上で取引先の、世話になつて稼いだ上、百圓の金を拵へ、再び御詫をした方が、金も返るし命も捨てず、主と親への言譯立てば、こりやあ死ぬるのは止めにして、奮發するのが當世だわえ。

ト風呂敷包を脊負はうとして、

いや〳〵遠國へいつた所が、着かぬ内に屆けられたら、直に電信で新聞に出されるに違ひない、こりやあどうしたらよからうか。

ト上手の柳を見て、

首をくゝるもよくない、もうこりややつぱり身を投げて死ぬと覺悟しようわい。

ト有合ふ砂利を袂へ入れ、死支度をする、流行唄、水の音になり、花道より一人乘りの手車へ大河逸藏好みの洋服代言人の打扮にて乘り、紺半纏の車夫曳いて出來り、直に舞臺へ來る。此内眞三郎は見附けられまいと上手の川へ飛込まうとするを、大河すかし見て車より飛下り、つか〳〵と行つて抱留める。

あゝもし、どうぞ御勘辨なされて下さりませ。

大河　何も詫びるには及ばん、暫く待て。

眞三　いえよんどころない譯がござりますから、どうぞお見脱し下さりませ。

大河　いかなる事故があるかは知らぬが、死ぬは惡い了簡ぢや。

眞三　さあ、生きて居られぬわけあれば。

大河　はて、止まれと申したら、止まらぬか。

ト きつといふ、是にて眞三郎是非なく扣へる。

これ、車をこつちへ寄せてくれ。

車夫　へい。

ト車夫車を能き所へ曳いて來る、是へ大河腰を掛ける。此内車夫眞三郎の前へ提灯を置く。是にて眞三郎顏をそむける。大河あたりを見やり、

大河　見れば荷物があるやうぢやが、いつたい是れはどうしたのぢや。

ト合方になり。

眞三　お尋ね故申しまするが、實は今日掛先から、金を受取つて參りました所、只今是にて掏摸に出逢ひ、殘らず取られてしまひましたが、今晩それを持つて歸らねば、主人へ言譯がござりませぬから、よんどころなく死にますのでござります。

大河　むゝ、さうして金はいくらの高ぢやな。

眞三　百圓でござりまする。

大河　百圓位で死なうといふのは、それは昔の事だらうぜ。

眞三　さあ、そりやあ御尤もでござります。それ故死なずと都合をしませうと、種々勘考いたしましたが、何分只今急に金が整ひませぬ故、死ぬと覺悟を致しました。

大河　そりやあ、惡い了簡だ、今爰を通り合して斯う止めるのも何ぞの緣ぢや、事によつたら死なずとも相談のしやうがあらう、がいつたいお前は何處の人ぢや。

眞三　へい、私は。

ト言ひ兼れる。此内大河始終眞三郎の顏を見て考へ居る。

大河　何處でか顏を見た樣だが、お前わしを知つて居なさるか。

眞三　へい存じて居ります。唯今爰へ灯りの來た時、大河樣と氣が附きまして、實はそれ故私の名は申上げませぬ。

大河　そりやあ、つまらんこツた、敢て名が言はれんこともあるまい、隱す事はない、何處の人だか明らかに言うたがよい。

ト是にて眞三郎もぢ／＼して、

眞三　左樣なら申しますが、私は石町の常陸屋と申す吳服屋の、眞三郎と申します若い者でござりますが、昨年鹿沼の取引先の裁判を、仰ぎました時にあなた樣へ、出ました事がござりました。

ト是にて大河思ひ出し、

大河　おゝ成程、常陸屋の若い衆だつたか、それならば猶の事、助けてやらねばならぬわえ。

眞三　へい、そりやあ又なぜでござります。

大河　よく聞きなさいよ、死刑に處する罪人でさへ、其情狀を酌量して等を減ずるのが今日の趣意ぢや、まして況やお前なぞは、僅百圓の金高ぢや、それで一命失うては、あまりに馬鹿々々しいではないか。知らぬ先なら止むを得んが、僕も大河逸藏ぢや、目に掛つたら何處迄も、お前に添心仕ようから、死なうなどゝいふ事は、速かに斷念しなさい。

ト是にて眞三郎ぢつと思入あつて、

眞三　誠に恐れ入りました、實に死ぬのは愚な事と、知つて居ながら差詰り、實に面目ござりませぬ、左樣ならばお詞に隨ひ、思ひ止まりますから、お力をそへて下さりませ。

大河　おゝよいとも〳〵、盡力致せば主人方へ、直是から行つて上げたいが、宅に待つて居る者があるから、まあわしの所迄一緒に來なさるがよい。

眞三　有難うござりまする。今朝出ましたきり戻りませねば、もう掛先へ迎ひの者が出ました時分、ならう事なら少しも早く。

大河　おゝ左樣か、然し宅に人が待たしてあれば、それを打捨てゝ置かれもせず、あゝ困つたものぢやな。

ト思案の思入、此時上手橋の袂駒寄の蔭より、德兵衞羽織着流し駒下駄、芝居茶屋亭主の打扮にて出來り。

德兵　もし旦那さま、私で宜しくばお使ひを致します。

大河　おゝ鳥越の高砂屋か、旨い所で逢つたの。

德兵　只今、芝居の附込の事で、大根川岸の客先から數寄屋川岸へ廻らうと、通り掛つた比丘尼橋、聞いた樣なお聲だと見れば大河の旦那樣が、此お方へお話しに、罪人でさへ次第によつて、なりたけ罪を減じて遣るやう、有難いお上のお慈悲と、事譯いうて御親切に、人をお助けなさるとは、天保時代の者と違ひ、明治の人は違つたものだと、實はうれし泣きに泣きました、是を聞いては私も、是から一奮發なし、大河樣を見習つて、かういふ時

には身を粉に砕き、人の世話をする心、先づ今晩を手初めに、此お使ひを私に、おさせなされて下さりませ。

大河　それはちやうど願ふ所だ、がわしは内を急ぐから、それでは石町の常陸屋へ寄つて、今夜は大河が預かると斷つて來て、此人を内へ連れて來て下さい。

德兵　いえ、あなたのお使を勤めた上は、鳥越の宅へ連れて參りますから、知惠だけお貸し下さいまし。

ト大河眞三郎に向ひ、

大河　今お前も聞いて居る通り、御主人へ行届く樣、よく話をして上げるから、今夜は此人の所へ行きなさるがよい。

眞三　何から何迄、厚い思召し、宜しくお願ひ申上げまする。

大河　それでは、親方頼んだよ。

德兵　宜しうござります。さ、何處迄もお使ひを致しまする。

大河　いや、それは御苦勞ぢや。

ト立上り、

市、さ行かう。

車夫　へい。

ト轅棒を直す。大河車に乘る。

德兵　左樣なれば、

兩人　旦那樣。

大河　又明日の朝逢ひませう。

ト流行唄、水の音にて上手へ車を曳いてはひる。

眞三　よい所へ大河樣、あなたがお出で下さりましたは、助かる瑞祥でござりまする。

德兵　大河樣のお頼み故、是からわしが引受けて、お店へお詫をしてあげます。

眞三　左樣なら、數寄屋川岸とやらの御用をお達しなされた上、御一緒に參りまして、話をなされて下さりますか。

德兵　あゝもう斯うなれば、客先の穴はどうにか割るとして、御一緒に行きませうが、なんにしろ百圓といふ金、外の奉公人衆の前もあれば、一先鳥越迄お出でなすつて、それから話しをするとしませう。

眞三　どうかそこはよい樣に、お取計らひを願ひます。

德兵　ようございます。芝居なら幡隨長兵衞、何處が何處迄引受けます。

眞三　左樣ならば、御一緒に。

ト包みを脊負ふ。

徳兵　橋を越したら。

ト是を木のかしら。

車に乘りませう。

ト此もやう飴屋の竹に雀の鳴物にてよろしく。

ひやうし　幕

二　幕　目

芝居茶屋店先の場
同二階表座敷の場
中村座樂屋口の場

役名――藝者宇田川屋久吉、高砂屋德兵衞、深見丹次郎、箱廻し巳之吉、金貸赤鬼九郎兵衞、周旋人春山笑藏、呉服屋手代眞三郎、巾着切川うそ傳次、周旋人駒野勇助、巾着切野鼠勘藏、同小狸金太、探偵掛り俗尾丹作、同今野桂次、同平野順三。小澤おたへ、高砂屋女房お房、藝者政吉、お絹の養女お縫、洗濯屋お絹、高砂屋の下女おかな等。

（芝居茶屋店先の場）＝本舞臺四間塗家造、上手三間常足の二重六枚飾り、下手一間落間の入口、大戸を開きある心、此正面煙草盆を大分に並べし二段の棚、此下草履を入れし笊を積み重ねあり、二重の上手幅廣の階子の上り口、正面向きにかけ、此脇へ帳場格子、うしろ一面に畫ビラを張り、此上眞中に神棚の飾り附よろしく、下手入口に高砂屋と記せし額形の板看板、其他軒先き一面に花暖簾、役者の紋ちらしの提灯をかけ、日覆より二階屋の張物をおろし、左右壁の張物にて見切り、總て芝居茶屋見世先の體。上手の緣先に客の履物を大分入れし箱を並べ、帳場格子の内にお房、茶屋女房好みの打扮にて帳を扣へ居る、此脇におなか、おむらの下女二人、椀、燒の膳を三人前並べ、膳拵らへをして居る平舞臺に茶屋の若い者、煙草盆と敷物を持ち立ちかゝり、芝居見物の仕出し○△□◉四人、福草履をはき立ちかゝり、此見得唐樂の鳴物にて幕明く。

若者　丁度よい幕が明いてをりますから、お早くお出で下さいまし。

○　あの鳴物の樣子では、唐土の場が明いて居る樣だ。

△ 筋書を見ても面白いから、又今度も當るだらう。

□ 三國妖婦傳と來た日にやあ、寺島の專賣特許だ。

○ 今度の狐の飛去りは、新發明の仕掛ださうだ。

若者 御場所がふさがるといけません、お早く中へいらつしやい。

ト皆々上手へはひる。

お房 槍屋町のお三人さまは、つまみと鉢で御酒が出るよ。

なか はい／＼、よろしうございます。

お房 宇田川屋の久吉さんの方へも、おさしみで御酒が出るよ。

むら 通つてをりますから、もう參りませう。

お房 來るのを待つては居られないから、お前行つて取つて來な。

むら それでは、おなかどん跡を賴むよ。

なか 爰はよいから行つておいで。

むら どれ、待つて居て取つて來よう。

トおむら下手へはひる。

お房 それではお前は今の內、お銚子をつけておきな。

なか はい／＼、畏まりました。

トおなかは奥へはひる、右鳴物にて花道より前幕の眞三郎、羽織着流しにて母親お絹、妹娘お縫、やつし裝、駒下駄にて連立ち出來り、花道にて、

眞三 なんとおつかさん、中村座も立派な普請でございませうね。

お絹 猿若町にあつた時分に、見物をした事があつたが、昔と違つて立派な普請、金の麾が附いて居るのは、此中村座に限るのであらう。

お縫 さうして兄さん、お禮に行くお茶屋はどこでございます。

眞三 向ふの軒に高砂屋といふ、暖簾がかゝつた立派なお茶屋だ。

お絹 大そう芝居がはひると見え、何處のお茶屋も履物が澤山に見えまする。

眞三 菊五郎が出ますので、景氣がよいと申す事、まあ兎も角も參りませう。

ト右鳴物にて舞臺へ來り、下手の落間へはひり、

へい、御免下さいまし。

ト爰へ奥よりおなか出て、

なか いらつしやいまし、丁度只今明いてをります。

眞三 いえ私は、見物にまゐつたのではございませぬ。

ト　お房、眞三郎を見て前へ出て、

お房　あれ、お前もそゝつかしい、此間の晩内へお出での、呉服屋の眞三さんだわね。

なか　ほんに私としたことが、ついお見それ申しました。

眞三　母が御禮に上りたいと申します故、お邪魔ながら、又出ましてござります。

お房　それはわざ〳〵御遠方を、よくまあお出でなさいました。さあ〳〵、こちらへ上つて下さい。

お絹　これはおかみさまですか、お初にお目にかゝります。

眞三　それでは御免を蒙つて、お見世の隅へ上ると仕よう。

お房　おまへ親方にさういつておいで。

なか　はい〳〵。

ト　奥へはひる、此内眞三郎、お絹、お縫二重へ上りよろしく住ふ。

お房　そこは板の間だから、ずつとこちらへ通つて下さい。

お絹　いえ〳〵、これでよろしうござりまする。

ト　おづ〳〵して居る。奥より徳兵衞茶屋の亭主好みのこしらへにて出來り、

徳兵　おや眞三さん、よくお出でだ。これ、板の間だ、蒲團をあげろ。

お房　はい。

ト　客蒲團を持つて出て、

さあ〳〵これをお敷きなさい。

眞三　どう致しまして、その樣なお蒲團なぞは恐れ入ります。さて親方樣。先達ては厚い御恩に相成りまして、何ともお禮の申し樣もござりませぬ、疾にも母を連れましてお禮に出ねばすみませぬが、店が出難うござりまして、つい〳〵延引致しました。

徳兵　なんの〳〵御主人持では出にくいのは御尤も、遠い所をわざ〳〵とお出でには及ばないのに、それではお前が眞三さんの、おつかさんでござりますか。

お絹　眞三の母でござりまする。先達て眞三郎が使ひ先きにて賊難に逢ひ、御主人への申譯に、比丘尼橋から身を投げて、死にます所を折よくも、大河樣に止められ、危い命を助かりしところへあなたがお出でなされ、跡を引受けお世話の上、御主人方へお詫び下され、無難に店へ歸られまして、何とお禮を申しませうか、有難いことでござりまする。

徳兵　いえ丁度あの晩數寄屋川岸迄、用があつて參る途中、大河樣にお目に掛り、お頼み故に石町のお店へ一緒に送

つて行き、惡難に逢つた一部始終を、話して共々詫びた所、流石大家の旦那の事故お年若でも分りがよく、早速御承知下すつたが、番頭さんが丁番だけに、昔氣質で頑固を言ひ張り、不平をならして居ましたが、あれから跡のお店の首尾は、どうであるかと存じて居ました、それではあれから別段に、居にくい事もありませんか。

眞三　有難い事におかげ樣で、以前にすこしもかはりなく、主人は目をかけてくれますが、おつしやる通り番頭が、昔氣質でございます故、頑固を申して困ります。

德兵　さういふわたしも天保度へは、近い方の生れだが、なんでも當時は年若な、明治に近い人でなければ舊弊があつて話せません。

お絹　私なぞも昔し者故、當時の事が一向暗く、呪なぞを信じますので、いつでも忰に笑はれます。

德兵　こりや、お母さんの居る前で、程の惡るい事をいひました。

お絹　いえ〳〵、どうぞ此上共にお心安く願ひまする。これこれそなたも御夫婦樣へ、ようお禮を申すがよい。

お縫　お蔭樣で兄さんが、あやふい命を助かりまして有難うござりまする。

ト辭儀をなす。

お房　おとなしやかなよい姉さん、そのお子さんは眞三さんの、お妹御でござりますか。

お絹　いえ、これは私の妹の娘で、兩親に亡くなられ親なし子になりました故、私方に引取りまして娘に致して育てますが、ゆく〳〵は眞三郎と。

ト言ひかけるを、お縫恥かしきこなしにて、お絹の袂を引く、お絹心付いて、

いえ、ゆく〳〵はいづれへか、緣附けませねばなりませぬ。

德兵　いや、さういふ譯のお子ならば、折角丹誠をしなすつて、他人の所へやるよりも、眞三郎さんとは從弟同士、丁度いゝ釣合だから、妻せた方がよささうだ。

お房　ほんに、もう一二年立ちましたら、よい御夫婦でござんせう。

眞三　どう致しまして、私では當人が納まりません。

お縫　あれ、あの樣な憎らしい。

お絹　はて、いくらわしが言はずにゐても、御夫婦樣は、お目高故に、よい釣合ぢやと、おつしやるわいなう。

お房　それでは末は御夫婦と、きまつてをるのでござりま

すか。
兩人　いえ、左樣では。
ト恥かしきこなし。
德兵　いや、隱すには及ばない、誰が見てもいゝ夫婦だ。
ト　よろしく笑ふ、又鳴物きつぱりとなり、下手より以前のおむら、誂への肴を待つて出來り、
むら　やう〳〵待つて居て持つて參りました。
ト奧よりおなか德利を二本持つて出て、
なか　それでは中へ御酒をつけて、直に出して參りませう。
お房　丁度よいから、此衆に一幕見せてあげたいものだ。
德兵　明いて居るから眞三さん、一幕覗いておいでなさい。
眞三　いえ有難うはござりますが、店へ對してすみませねば、直ぐにお暇致しまする。
お房　それではそのお子とお母さんに、見せてあげるとなさいまし。
お絹　いえ私も今日は、外に少々用事もあれば。
お縫　又その內に上りまして、お願ひ申すでござりませう。
なか　それでは中へ參りますが、
むら　何も御用は、ござりませんか。

お房　彌助が居たら芝居を見ずに、早く歸れといつておくれ。
なむ　はい、畏まりました。
ト二人出物を持ち上手へはひる。
德兵　いや、新參の男を使ふと、見てばかり居て、用が足りない。
眞三　お見世のお邪魔にならぬ內、
お絹　こちらも早く、お暇しませう。
お房　まあ、よいではござんせぬか。
眞三　いえ、またその內に上りまする。
ト三人辭儀をして平舞臺へ下りろ、此時うしろにてツヽケの音して幕切の木頭聞える。
德兵　これは早い、もう幕だ。
お房　それでは皆さん、御免なさい。
トそこらを片附ける、眞三郎お絹お縫は下手へはひる、此模樣キザミの拍子木、幕の鳴物にて道具廻る。
(同二階表座敷の場)——本舞臺一面の平舞臺、正面二階の手摺嵌め込みの格子、此向うへ中村座の表がかり書看板の書割を見せ、上の方折廻し襖の出這入り、下の方畫心に床の間、つゞいて地袋違ひ棚、好みの掛

物、花活などよろしく、正面の欄間へ書家の額をかけ、ずつと下の方腰張りの茶壁にて見切り、此前よき所へ階子の上り口、出這入りあり、舞臺一面本疊と見える薄縁を敷詰め、總て芝居茶屋表二階の體、所々に座蒲團煙草盆などならべ、幕切の留めの木にて道具留る。

と、跡シャギリの鳴物になり、下手の階子口より、金貸し赤鬼九郎兵衞散髮髷、羽織着流しにて、幕明きの若い者附いて出來り、

若者　丁度御時分でございますが、お辨當はいかゞ致しませう。

九郎　さつき誂へた椀燒で、酒を出して貰ひたい。

若者　これはめづらしい、いえなに、よろしうございます。

ト下手のはしご口へ下りる。

九郎　高い酒を呑んでやるのに、よくつてどうするものか。

春山　扨、會計はそちら持で、僕等二人を取卷に、芝居見物といふ仕組は、どういふ筋か一向わからぬ。

駒野　何か金圓の取立てに、御依頼の筋でもあつて、先きへ御散財の後、盡力といふ御饗應にでも預かるのかな。

九郎　いや、今日ばかりは浮れ筋で、金圓取立などゝいふ慾情は、更に廢すとすれば、その氣でゆつくり呑んで下さい。

春山　いや、お浮れ筋と伺つては、馳走にならずんばあるべからず。

駒野　どういふ筋の御散財か、伺ひながら呑むと仕よう。

ト爰へ階子口より、以前の下女二人と若い者にて椀燒の膳と、杯洗德利などを持ち、上り來て三人の前へよろしくならべる。

九郎　ときに、若い衆、こつちの內から東の棧敷へ這入つて居る、久吉の客は何者だ。

若者　どちらのお客か、只今もつてまだおいでにはなりません。

笑藏　さてはあの連中、內に目的のある事と見える。

勇助　一緒に來てゐる中年增と、若い藝者の別品揃ひ、

笑藏　どれを取つても損はないが、あれもやつぱり新橋かな。

若者　あれは新橋日吉町の小澤おたえさんといふお師匠さんと、政吉さんといふ藝者衆でございます。

勇助　それぢやアあれが評判の、一中節の師匠と政吉か。

なか　お燗がおぬるくはございませんか、召上つてみて下さいまし。

ト酌をする。九郎兵衛呑んで、
九郎　いや、ぬるくはない、丁度いゝ。酌は勝手にこちらでするから、呼ぶまで遠慮をして下せえ。
なか　それではどうか御用の節は、
むら　お手を鳴らして下さりませ。
若者　どうせ渡りが出ないから、いえなに、わたしも下へ行かう。
ト行きかけるを留めて、
九郎　かう〳〵若い衆、下へ行くなら久吉の供の巳之吉といふ男に、ちよいと來るやうにさう言つて下ツし。
若者　へい〳〵畏りました。
ト三人は下へおりる。
笑藏　こりや久吉の芝居行きを、跡から覘つて同じ茶屋から見物といふ寸法に、僕の鑑定違ひなしだ。
勇助　さういふ筋なら我輩は、裏階子から幕を切る周旋人の役廻り、打ち合はせをしておかねばならぬ。
九郎　それは勿論君達に、依賴をせねばならぬ筋だが、なんにしろ巳之吉に言ひつけておいた事もあれば、早速これへ來さうなものだ。
ト三人酒を呑みゐる。爰へ上手の襖をあけ、巳之吉箱屋好みのこしらへにて出て、下手へ來り下にゐて、
巳之　これは旦那いらつしやいまし、よく似た方だと存じまして、下へ參つて聞きましたら、やつぱりあなたでござりますから、裏階子から上りまして、お座敷を捜してをりました。よく今日は御見物でござります。
九郎　菊五郎の御家物だけ、滅法姐妃の評判がいゝから、腹は割かぬが自腹をいため、此衆達と見に來たが、丁度こつちへ久吉が來て居ようとは思はなんだ。
巳之　久吉さんも思ひがけなく、お客に誘はれ來てをりますから、いづれ後程御挨拶に上りますでござりませう。それでは旦那、御免下さい。
ト立たうとするを留めて、
九郎　あゝこれ、ちよツと待つてくれ。
巳之　へい、何ぞ御用でござりますか。
九郎　お前に賴んだ一件は、あれぎり何の沙汰もねえが、まだ話しはわからねえか。
巳之　へい、あの一件でござりますか、如在なく私も骨を折つてはをりますが、まだからといふしつかりした御挨拶迄に行きませんので、段々のび〳〵になりましたが、是非私が折を見て、よい御挨拶をさせますから、もう

少々お氣を長く、お待ちなすつて下さいまし。

九郎　氣を長く待てと言ふが、百圓貸してやりせえすりやあ、直にも返事をさせるといふ、お前が慥な請合ひに、利子は勿論禮金も引かずに貸した百圓も、それなりけりで無沙汰にして、菓子でも買ひに行きやあしめえし、折を見てぢやあ濟むめえぢやあねえか。

巳之　いえ私も借用した十圓の金が消えた上に、御褒美になる一件ゆゑ、決して如在はござりませんが、よく芝居でも申す通り、木折で行かぬがあの道で、兎角に埒が明きませんで、誠にどうもお氣の毒さまで。

九郎　何にしろ久吉に爰へ來る樣にさう言つてくんねえ。

巳之　お客で參つてをりませんと、直にも連れて參りますが、誠にどうもお氣の毒さまで。

九郎　それぢやあ爰へ來られねえのか。

巳之　いえ、さういふ譯ではござりませんが、折々見まして私が。

九郎　よく折々と言ふ男だ。

巳之　そこが木折で行かぬ道で。

九郎　これさ、一つ事を言ひなさんな。

巳之　誠にどうも濟みません。

ト巳之吉そこ／＼に上手の襖の内へ這入る。

九郎　いや、あいつの樣に取留まらぬ、空なやつもねえものだ。

ト此内笑藏、勇助酒を呑みながら聞いてゐて、

笑藏　いや、失敬ながら君に似合はず、大失策をやられたやうだ。

九郎　なんで僕が失策だな。

笑藏　當今金貸社會の内では、鬼といふ程目先きの見えた狡猾專門の君なれど、色情ばかりは特別か、失策と言ふの外なしだ。

九郎　はてその心得なきにしもあらず、無證書といふ譯ではなし、判然とした證書を取り、金圓を貸し久吉を手に入れようといふ策は、目途が違へば貸金を悉皆返濟させるばかり、失策なりとも思はれぬ。

笑藏　いやそれが大きなお目途違ひだ、藝者もあらうに日吉町で、太閤藝者の評判のある、えら物の久吉に、利子禮金を引かずして百圓貸すは危いもの、周旋人もあらうのに、べんちやら事務の箱屋なぞを、頼んでことが纒まると、思はれるのがよろしくない。

勇助　こりや笑藏氏のお說の通りだ。百圓金を僕等の手へ、

そつくり廻して下されば、直に五分の禮金と多分の利子もさし出すが、人魚喰ひの藝者社會で、浮名の立つた久吉を金圓づくで持ちものになさるといふはむづかしい。
笑藏　よしんば金で說きつけられ、一度位はお前さんの自由になるかも知れないが、後の保證は出來ませぬ。
勇助　百圓あれば青樓で、どんなすこぶる別嬪の娼妓を買つて遊んでも、十分愉快を盡せた上へ、淸算立てれば餘程殘る。
九郎　いや娼妓なぞは金圓づくで、自由になると極つたもの、手ごはい所を金圓で自由にするといふ所が、又特別の賞翫もの、どんな策だか君達も、手際の程を見てゐなさい。
笑藏　旨く參ればよろしいが。
勇助　そのお手際が覺束ない。
九郎　はて、君達もわるい幇間だ。
ト此時上手の襖の内にて、
久吉　巳之吉どんはどこへ行つたか、獨りでうろ〳〵してゐるよ。
ト此聲を聞き三人顏見合せて思入、誂への合方になり、上手の襖を明け、藝者久吉好みのこしらへにて出て、

九郎兵衞を見てびつくりして、
おやどなたかと存じましたら、九郎兵衞さんでござりましたか。こちらへ來ていらつしやるのを、少しも知らずにをりました。
ト會釋をする。
九郎　おゝ久吉さん、丁度いゝ所だ、お前にちつと話がある、まあ爰へ來て一杯お呑み。
久吉　お客で來てをりますから、さういたしてはをられませんが、お酌でもいたしませう。
トよろしく住ふ。
笑藏　久吉さん御免なさい。僕等はほんの取卷で、見物に來た連のもの。
勇助　決して遠慮なものではないから、そのつもりで話して下さい。
久吉　おや、そちらから御挨拶では、何と申してよろしいか、どうぞ御贔屓に願ひます。
九郎　早速ながら持合せたから、久吉さん一つ獻じよう。
久吉　折角でござりますから、お猪口だけ頂きます。
ト猪口を取る。笑藏德利を持ち、
勇助　大酒と噂の久吉さんだから、なみ〳〵とお酌をしよ

う。

久吉　あれ、誰がそんな噂をしますか、おつぎなすつてはいけません。

　ト　よろしくこなし。

勇助　失敬だが此肴は、手がつかぬからお前に讓らう。

　ト　燒肴に箸をつけて出す。

久吉　これは、思召し恐れ入ります。

　ト　酒を呑むまねをして猪口を下へおき。

どこへ這入つていらつしたか、少しも知らずにをりました。

九郎　今日は急に思ひ立つて、遲く來たので場所がなく、西高の末に見てゐるので、こつちはお前を知つてゐたが氣のつかぬは尤もだ。

久吉　おや、遲くお出でござりましたか。

　ト　猪口を杯洗ですまし、

お客が待つてをりますから、御返杯をして又上ります。

　ト　九郎兵衞へ猪口をさし立たうとするを、

九郎　いや、定めて客も待つてゐようが、お前に逢つたを幸ひに、ちつと聞きたい事もあれば、手間は取らせぬ暫時の間、爰にゐて貰ひたい。

久吉　どんなお話しか存じませんが、伺つておきませう。

　ト　これにて笑藏勇助顏見合せ思入あつて、

笑藏　ときに勇助氏、君にちつと内談があるから、僕と一緒に下へ來たまへ。

勇助　成程々々、僕もそれを贊成で、いやさ、早速に下へ行かう。

　ト　兩人立ちかゝるゆゑ、久吉氣味わろきこなしにて、

久吉　いえ、お邪魔ならわたしが御遠慮をしますから、どうぞお席にいらしつて。

笑藏　いえさ、爰では内談がちつとしにくい事もあれば。

勇助　さあ〳〵、早く來たまへ〳〵。

　ト　兩人あわてゝ上手の襖の內へはひる。

久吉　あれ、わたしをお嫌ひなすつて。

　ト　是をしほに立つて行かうとするを、

九郎　これさ久吉さん、一緒になつて逃げるにやあ及ばねえ、下にゐて聞いて下せえ。

　ト　久吉是非なく下にゐて、

久吉　さうしてどんなお話しか、おつしやつて下さいまし。

　ト　九郎兵衞思入あつて、

九郎　さう改つて聞かれると、言ひ出しにくい話しだが、

委細は定めて巳之吉から、聞いてゐようと思ふ一件、長くさうして氣を揉ませずとも、いゝ加減に返事をして、安心をさせてもいゝではないか、

久吉　巳之吉から聞いてゐようとはどんなお話しか存じませんが、わたしや少しも巳之吉から、聞いた事はござりません。

九郎　それぢやあア巳之吉が、まだ中溜でお前には、頼んだ事を言はなんだか。

久吉　さうして何をあの人に、あなたはお頼みなさいました。

九郎　はて、生娘かなんぞのやうに、つまり今の口振でも、知れ切つてゐる事ぢやないか。

ト久吉合點の行かぬこなし、

久吉　いえ、おつしやつて下さらねば、さつぱり譯が分りません。

九郎　分らなければ直談に思ひ切つて言ひもしようが、久さんお前聞いた後で恥をかゝせてはくれまいね。

ト手を取つて引寄せる。久吉びつくりせしこなしにて、

久吉　あれ、人が來るといけません。

ト立たうとするをぢつと留める。是より椿つた合方になり、

九郎　金でせかせて言ふ事を、聞いてくれろと頼むのは、芝居でよくする敵役の紋切形の臺詞ゆゑ、あれを恩にはきせぬ氣だが、百圓といふ金を貸し、利子も取らずに巳之吉に持たせてやつたその時に、こつちの心の内幕を疾うから頼んでおいたのも、あのべんちやらな人間に、何を言つても感じがなく、あんまり埒が明かぬから、物は當つて碎けろと、ひらぶッつけな此頼み、聞いてくれゝば是れから先は、どうとも世話をしようから。人魚喰ひと評判の、お前の口には合ふめえが、始〻の爲めを思ふなら、藝妓を止めて世話になり、樂をする氣になつてはどうだ。

トよろしく思入、久吉びつくりせしこなしにて、

久吉　あなたにお借りのある事は、少しも知らずにをりましたが、何か是れには都合があつて、巳之吉があなたからお借り申したかも知れませねば、樣子をとつくり聞きまして、何れその内巳之吉からお返事いたすでござりませうから、今日はお客のお座敷先、氣がせきますから御免下さい。

ト立たうとするをよろしく留め、

九郎　いや、巳之吉からその返事を、聞く位なら直談に、こゝで打ちあけ頼みはせぬ。座敷先ゆゑ察しもなく、長く留めておかぬから、否か應かの挨拶を、きつぱり聞かせて行くがいゝ。
久吉　いえ外の事と違ひまして、かういふ事のお返事は、親兄弟にもとつくりと相談をしませんでは、御挨拶が出來ません。
九郎　夫婦にでもなるのなら、直に返事の出來ぬといふ、野暮な理窟もあるだらうが、藝妓を引いて世話になる、その相談を親達が、不平をならす筈もなし、自分も恥になるといふ理窟は少しもなからうに、爰で返事が出來ぬといふには、情人でもあつてその男に、相談せねば濟まぬのか。
久吉　いえ、さういふ譯ではありませんが。
九郎　さうでなければ返事をして、早く安心さしてくれても、今抱いて寢る譯ぢやあなし、別に仔細のないことだ。
久吉　それでもよく／＼考へて、お返事せねばなりません。
九郎　考へなければならぬといふは、矢張り頼みが聞かれぬのか。

久吉　いえ、さうではござりませんが。
九郎　なけりやあうんといふがいゝ。
久吉　さあ、それは。
九郎　これさ半玉で出た駈け出しの、赤襟猫ぢやアあるめえし、浮氣もさんざしてゐながら、氣を揉ませるにも程があらあな。
ト脊中を叩く、久吉はさし俯いてぢつとこなし、爰へ上手の襖をあけ、以前の笑藏、勇助出來り、
笑藏　これはなか／＼相談が、手重いやうでござりますな。
トよろしく住ふ。九郎兵衞は間の惡きこなしにて、
九郎　そちらの話しが先へ濟み、こちらの大事を聞かれてしまつた。
勇助　はて、木折で行かぬが此道ぢやよなあ。
トわざと氣取つて言ふ、久吉は嬉しきこなしにて、
久吉　それでは皆さん、御免下さい。
ト立つて行かうとするを、
笑藏　いや久吉さん、ちよつと待つておくれ。はてさ、必ず手間は取らせぬ。ちよつと待つてくんなせえ。
ト久吉是非なく下にゐる。笑藏思入あつて、
金と違つて色事には、關係のない周旋人が、口を出すの

も異なものだが、用談が濟んで襖越しに測らず傍聽してみれば、結構過ぎた御示談だ、此好機會をはづしては藝者少利に盡きようと、僕等に於ては思はれるが、それともノーノーヽ言はれても、飽迄異論を通す氣かな。

勇助　失敬ながら新橋で、一、二と言はれる藝者でも、その強情はよろしくない、如何となれば當今の、開明の世に至つては、藝者や娼妓をするものは、皆正業にあらざれば、一名たりとも廢業して、減じる樣に政府でも、親なるものや雇ひ主へ毎度御說諭あると聞く、さすれば親や兄弟が、假令不服を言ふとても、その納め方はどうでもなる筈。

笑藏　まづ兎も角、うんと言つて、藝者社會の苦を脱れ、早く氣樂な身分となり、權妻然たるこしらへで、物見遊山や芝居行きと、贅澤三昧した方が、今當世と思はれるが、それを嫌つて新開で狐や猫と叩かれても、やつぱり藝者をしてゐたいか、金が欲しさに外國へ、出稼ぎに行く者さへあるに、さりとは理合のわからぬ事だ。

ト是れにて久吉むつとせしこなしにて顏をあげ、

久吉　はい、わたしや娼妓や淫賣を、稼ぐ女でござりませんから、お金で自由にやなりません。

笑藏　それぢやあ疾から不服なのを、今迄言はずに釣つてゐたのか。

ト合方きつばりとなり、

久吉　いえ、釣る譯ではありませんが、御贔屓受けるお客樣の、座敷へ出ては御機嫌を、取らねばならぬ身の勤め、それも娼妓のつとめなら身を切られる程つらくとも廢業するが嬉しさに、悲しい枕も交しませうが、同じ賤しいつとめでも三味線持つてお座敷で、御機嫌を取る藝者では、お金を山程積まれても心に濟まねばお賴みに、應ずる譯にはなりません。それを最初のお座附から、言ふのも知つてをりますが、見得の御場所で折角のお心意氣の御座興を、さまして本音を出しましては、三の絲より段切の話しが先へ切れませうと、今迄つないでをりました。申し憎いが御一座の、此お聲では東京の藝妓は浮氣になりますまい。お金で自由になさるなら、藝者買ひより吉原で、花魁でも買ひ御愉快を、なさつてお氣を晴らすのがよろしからうと思ひます。

トずつけり言ふ、是れにて三人呆れしこなしにて、

笑藏　いや、これだから御失策と、僕等が鑑定いたしたのだ。

勇助　これではもはや御断念を、なされるの外はござりますまい。

九郎　いや、それ程に嫌はれるを、無理にかうとは言やあしねえ。然し戀慕の色情は、斷念しても用達てた貸しは斷念出來ぬから、右から左り取らねばならぬ。

笑藏　それは勿論知れたこと、百圓といふ大金を利子も取らずに貸すといふは、僕等の社會にない事だ。

勇助　娼妓を買へといふ程では、恥をかゝせたそのかはりに、借財位は耳を揃へ返辨するに違ひない。

九郎　當時新橋日吉町で太閤藝者と言はれるほど、名うてのあねえが借位を返せぬといふ事もあるめえ、さしあたつて今貸した金を、元利揃へて返してくれ。

久吉　いえ、あなたから巳之吉が、お借り申したか知りませんが、わたしに覺えはありません。

九郎　何だ、百圓貸したのを、知らねえなどゝはとんだ事だ。これ笑藏氏、巳之吉をこゝへ呼んで下さい。

笑藏　いやはや、これは呆れたことだ。

ト立ちかゝる、爰へ上手の襖をあけ、以前の巳之吉出來り、

巳之　あゝもし、その百圓は呉服屋の拂ひに困り私が、お借り申した金なれば、久吉さんになりかはり、どうにか都合をいたしますから、歸りますまで兎も角も、お待ちなすつて下さいまし。

九郎　いや、べんちやらの貴樣などに、何んで金が返せるもんか、口入れをしたのはそちらだが、貸した相手は此久吉、さあたつた今返してくれ。

久吉　巳之どん、お前九郎兵衞さんから高利のお金を借りるなら、なぜ斷つてくれないのだ、やせても枯れても日吉町の、藝者の數にもなつたわたし、百圓位のお金を借りずとも、どうにか都合をしたものを。

巳之　所があなたのお耳へ入れるもお氣の毒と思ひまして、ちよつと私が中溜めで、いやさ、どちらのためにもよい樣にと、お借り申して呉服屋へ、綺麗に拂つてやりました。

九郎　何であらうとこつちでは、貸した相手は久吉だ。さあ、たつた今返してくれ。

久吉　内へ歸れば百圓位は、どうにか都合をいたしますから、それ迄待つて下さいまし。

九郎　いや、かうなつたら慾一方、もう半時間も待たれねえ。さあ、たつた今返してくれ。

巳之　それはあなたの御無理といふもの。
九郎　何が無理だ。さういふ手前も十圓の、金を無利子で借りてゐながら、口出しせずにだまつてゐろ。
笑藏　金が出來ずば身ぐるみから、つむりのもの迄そつくりと、抵當物にお取りなさい。
九郎　所詮着がへと兩方でも百圓ならば抵當には、不足であらうが取らぬは損だ。
笑藏　どれ、身の皮をはいでやらうか。
ト三人立ちかゝる。久吉は當惑のこなし、爰へ上手の襖をあけ以前の高砂屋德兵衞出て、
德兵　あゝもし皆さん、暫らくお待ち下さいまし。
トよろしく留める、皆々見て、
九郎　誰かと思へば德兵衞さん。
笑藏　お前が爰へ出なすつても、
勇助　此扱ひはむづかしい。
德兵　いえ、何事のお話しかと二階へまゐつて襖越しに、思はず樣子をお聞き申せば、旦那が百圓久吉さんへお貸しなさつた御催促、こりや御當人の言ふ通り十か廿のお金なら、お持合せがあるかも知れぬが、百圓以上の金圓を、なんぼ御盛んの久吉さんでも、お座敷先の要害に持つておいでの筈もなし、今返せずば抵當につむりのものから衣類迄、抵當に取るとは色氣のない、御催促かと思ひますから、どういふもつれの間違ひかと、お詫に出ましてござりまする。
九郎　いや、それはお前の言ふ迄もなく、茶屋の二階で色氣のない、こんな催促はしたくもないが、これにはちつと譯があつて、色氣を捨てた意氣張づく、こつちに恥をかゝせりやあ向うに恥もかゝせにやならぬ。
德兵　そのいざこざはわたくしも、どういふ次第か存じませんが、恥を搔いたとおつしやつて、御無理な事をなさる時は、人に知られぬ事迄を、却つて世間へぱつとさせ、よろしくないと思はれます。
九郎　いや、ぱつとしようがわるからうが、大きにお世話だ。默つてゐなせえ。
笑藏　から親方、此久吉にどれ程の恩になつたか知らないが、おつう藝妓の肩を持ち、失敬な事を言はつしやるな。仲裁ならば仲裁の樣に、幾分かの金を竝べ、筋道立てゝ扱かはつしやい。失敬ながら芝居が當り、こなたの內が繁昌でも、百圓といふ金圓が、よもや遊んでゐやあしまい。今はどうだかその昔は、消しに困つて客人から、預

り物を與物して集めの者に棧敷代を、拂つた茶屋もあつたさうだ。

勇助　併し烏や日歩を借りる、茶屋と違つてこつちなどは、工面がいゝとの噂だから、遊んだ金がないともいへぬ。

笑義　あるなら爰へ出しなせえだが、十か二十の金なら知らず、百圓からのまとまつた金は遊んでゐやあしめえ。

ト合方きつぱりとなり、

德兵　おつしやる通り芝居茶屋で遊んだ金のある内はまあない方が多い中で、仕合せなのは此德兵衞、近頃爰へ見世を出し、お馴染さへもなかつたを、弱きを救ふ東京の御氣性ゆゑか追々に、御贔屓下さるお客もふえ、どうやらかうやら高砂屋と知られる樣になりましたも、おなじみ多い藝者衆の久吉さんが肩をいれ、お客を引きつけ下さるゆゑ、その恩人の恥になる、樣子を聞いては一本や二本の工面をして、立換へませねば不斷から、御世話になつた甲斐がない、百圓位は立てかへませう。

ト是にて金貸三人びつりして、

九郎　それぢやあ貴公が久吉の、借を立てかへ返すとか。

德兵　新米茶屋の高砂屋、どうせ遊んでゐるやうな金はなけれど客先から、貰つた金の此の百圓、まあ久吉さん、お遣ひなさい。

ト懷より百圓の札包みを出し、久吉に渡す。

久吉　それではこれを親方さん、わたしに貸して下さいますか。

德兵　思ひがけなくお客先から、開業祝ひに貰つた金、當分遊んでをりますから、御心配なくお遣ひなさい。

巳之　いや大阪から來なすつても、氣性がいゝと聞いてゐたが、此切れ方には驚いた。

德兵　さうぢやさかいの辭として、出過ぎた奴と皆さんに、叱られるかも知れませんが、なまつた口にもべらんめえの臺詞が言ひたいばつかりに、東京へ來た御厄介者、どうか追々水道の水に染つて大阪の、いやななまりのぬける樣に、評判のいゝ巳之どんを、實は信仰してゐます。

巳之　さう言はれてはわたしも又、イヨ高砂屋と褒めたくなります。

久吉　親方なんにも申しません。御遠慮なしに遣ひます。

ト札包みを取つておし頂き、

さあ九郎兵衞さん、百圓のお借りをお返し申しますから、慥に請取つて下さいまし。

ト九郎兵衞の前へ出す。

九郎　いや、百圓は元金だ、引かずに貸した禮金と、利子がつかにやあ請取れぬ。
久吉　さうして利子と禮金は、いくらになるでござりますえ。
九郎　禮金利子を突くるみ、二割取るのがこつちの規則、もう二十圓つけて出せ。
巳之　それは規則でござりませうが、負けて下さるつもりゆゑ。
德兵　いや、から物事がもつれては、所詮負けては下さるまい、利子と禮金二十圓、綺麗につけてお返しなさい。
　ト札を出して久吉に渡す。
久吉　それではこれも親方の、お立てかへになりますのか。
德兵　まだ四五十はありますから、御心配なくお遣ひなさい。
久吉　此の御恩は忘れません。
　トよろしく取つて、
おつしやる通り禮金と、利子も綺麗に上げますから、證書をどうぞ返して下さい。
　ト九郎兵衞の前へ出す。
九郎　二十圓ぢやあ安いものだが、規則通りで負けてやるのだ。
　ト札を請取り紙入より、證書を出し、
請取がはりだ、大事にしろ。
　ト久吉に渡す。
巳之　いや、これでやう／＼安心した。
九郎　いや、安心はまだ出來めえ、貴樣に貸した十圓も、直に返して貰ひたい。
巳之　いえ、あの方は此頃にきつとお返し申します。
九郎　これ、此頃に返すで濟むか、づぶとく出りやあ勸解へ、願つて出るからさう思へ。
巳之　借りたに違ひはありませんから、どこへでもお願ひなさい。勸解なぞを恐れるやうな、此巳之吉ぢやあござえません。
九郎　うぬ、そんなふて勝手を。
　トきつとなるを留めて、
笑藏　いや御立腹は御尤もだが、取るにも足らぬ箱屋などを、相手になさるも大人氣ない。
勇助　まづ兎も角も二十圓、餘分な金が取れた祝ひに、どこぞで緣起を直すとなさい。
九郎　小積にさはる此内に、長くゐるのも氣が利かぬ。生

稻へでも繰込んで、陽氣に騷いで呑みなほさう。
笑藏　それぞ僕等も大賛成。
勇助　さあ〳〵、早く出かけませう。
九郎　亭主勘定はいくらになる。
德兵　どうか帳場へお出なすつて、家内にお聞き下さいまし。
九郎　いや、そんぶりの惡い茶屋だ。
ト誂へのはやり唄になり、九郎兵衛先に笑藏勇助ついて下手の階子口へはひる。跡見送りて、
久吉　ても憎らしいあの三人、勝手な所へ行くがよい。
巳之　二割の禮迄取りやあがつて、誰が十圓返すものか。
久吉　それにつけても親方さん、なんとお禮を申しませうか。
巳之　今の急場のお達引は、實に恐れ入りました。
ト禮を言ふ、德兵衛思入あつて、
德兵　いえ、さうお禮を言はれては、面目次第もござりません。
久吉　いえ〳〵、今のあの御恩は、あだおろそかには思ひません。
德兵　いえ私が出したのなら、其お禮も受けますが、實はほんのお前立で、本尊様が外にあります。
巳之　本尊様が外にあるとは、どなたの事でござります。
ト爰へ上手の襖をあけ、深見丹次郎、散髪羽織着流しのいきな拵へ、師匠おたえ、藝者政吉いづれも好みの打扮にて出で、
丹次　その本尊はわたしだから、久吉さん心配しなさんな。
久吉　おや丹次郎さん、いつの間にお出でになつてをりました。
ト是より浮いた合方になり、皆々よろしく住ひ、
丹次　久しくお前に逢はぬから、師匠の内まで出て行つたら、客のつもりで誘ひあひ、氣儘遊びの芝居と知れ、荷物にされると知りながら、跡から追かけ來てゐたので、
巳之　それでは今のあのお金は、丹さんが立てかへて下さつたのでござりましたか。
丹次　わたしが出ると面倒だから、此親方に頼んだが、あの様子では客をしくじらせたのでお氣の毒だ。
德兵　いえ、しくじつて丁度幸ひ、今日はどうした氣まぐれか、三人連れでデモ膳で、一ぱい呑むと言つてました

が、いつもカブスのお定まりで渡りも出さぬ締り見世、その上端錢の勘定はついでと言つて借倒す風のよくないお客ゆゑ、斷りたくつてならぬ所、新米茶屋の高砂屋も、おかげさまにて幅を利かせ、東京魂になられました。

久吉　さうとは知らず親方に百圓からのお金を出させ、濟まない事と思ひましたが、丹さんのお蔭にて、見得の場所での困難も、恥をかゝずにしまひました。

たえ　ほんにわたしも裏階子から、そつと上つて樣子を聞き、悔しくッてならぬけれど、百圓からのお金がなければ、此扱ひに出られもせず、どうしたものと思ふ內。

政吉　思ひがけなく丹さんが、お出でなすつたと聞く嬉しさ、どうか仕樣はありませんかと、お話したら早速にお金を出して下すつたので、大安心をいたしました。

丹次　まあ何にしろ目出たいから、ちよつと一杯出して下さい。

德兵　いえ、お誂へは晩程迄、お預かりといたしませう。

ト手を叩く、爰へ下手の階子の口より、以前の女房お房ちよつとした酒肴を持ち、出來り、

お房　お待ち遠でござりました。お幕間ゆゑ有合で、どうぞ御勘辨下さいまし。

ト酌をする。丹次郎酒を吞む事よろしく、此時後ろにて廻りの拍子木の音聞える。

政吉　おやもう、明くと見えますよ。

たえ　木が廻つたら政吉と、わたしは中へ行きませう。

丹次　いや拍子木は廻つても、まだ滅多には明きはしまい。

久吉　音羽屋の幕の長いには、わたしやいつでも飽々しますよ。

巳之　お前さんがお座敷へ出るのと、長いのはよく似てゐます。

德兵　いえ、その癖樂屋へ行つて見ますと、お客に待たせては濟まないと、せつせと拵へをしてゐますが、あんまり念が入り過ぎて、思はず長くなると見えます。

お房　それでも此節は勉强して、餘程早くなりました。

丹次　何でも當時は勉强ばやり、うつかりしては居られない。

久吉　わたしも是からお客さまに、待たせぬ樣に氣をつけよう。

巳之　いよ大賛成、ヒヤ〳〵。

ト手を叩く。

たえ　何にしろ、爰に居ては話のお邪魔に、

久吉　えゝ。

たえ　いえなに、話しに實が入つて、見損なふといけないから、お先へ中へ行つてみませう。

政吉　わたしもお母さんと一緒に行きます。

德兵　こつちも帳場を明けておいては、勉強所か不勉強だ。

お房　巳之どん、お後でお銚子を、よろしくお賴み申します。

巳之　いえ、わたしも幕の明かぬ內から、幕を切つてお手水だ

丹次　これさ、皆な人聞きの惡い。

久吉　跡はよいから下へお出で。

巳之　それ御覽なさい、此通りだ。

たえ　そんなら丹さん、御免下さい。

巳之　姉さん、お先へ。

德兵　どれ、生業に身を入れよう。

トはやり唄になり、皆々連れ立ち、わや〳〵と階子の口へ下りる。跡に久吉、丹次郎殘り、是よりなまめいた合方になり、

丹次　いや、爰の內の親方位、樣子のいゝ人はない。

久吉　あれ、そんなに氣が多かつたら、わたしや氣がもめてなりやあしない。

丹次　男が男に惚れたつて、なんで氣をもむ事があるものか。

久吉　いえ男ならよいけれど、政吉さんと出來て居ると、慥なところを聞いたから、氣がもめてなりやあしない。

丹次　つまらぬ事を言つたものだ。子供の樣な政吉に、なんでおいらが構ふものか。

ト久吉あたりへこなしあつて、

久吉　それはさうと九郎兵衛に返してやつたあのお金は、どういふお金かその譯を、どうぞ早く聞かして下さい。

丹次　いや案じるには及ばない、あの金は親仁の金で、脇へ貸しておいた所、今日計らず二百圓、返つた金があつたので、とんだ梅川忠兵衛の封印切りでその內から、百二十圓亭主へ渡し、おめえの急場をすくつたのだ。

久吉　それではお前のお父さんへ、今日持つて行くあのお金、どうにか都合を到しますから、內へ歸る迄待つて下さい。

丹次　いや昔なら大金だが、今の大きな世界では、百や二百ははした金、親のものは子のものだ、都合がをるくば

一月位は、延びても決して構ひはねえのだ。

久吉　さういふ譯ならよいけれど、もしお前さんの落度になつては、おかみさんへ濟みません。

丹次　まあ、そんな事は思はないで、久しぶりだ一ばいやらう。

久吉　お前さんにも、かうして逢ふのが、久し振りだと思はれますか。

丹次　さうさ、半月逢はないから、おいらだつて久しぶりだ。

久吉　おかみさんばかり大事にして、それでよいのでございますか。

丹次　なに女房にはかまはないが、丁度店の勘定前で、體がすこしも拔けられず、片時外へ出られぬのでそれでついつい無沙汰になつた。

久吉　思ふお方は女房持と、よく自分でも唄ひますが、三日とお出がありませんと、もしあの晩に言つた事がお氣にさはりはしないかと、何をするのも手に附かず、いくらお詫がしたくつても、手紙一本お內迄、とゞけることも出來ないから、ぢれッたくッてなりません。

丹次　いや女房があつたとて、店がなければ大ビラで毎晩逢ひにも出られるが、藝者のつとめも店向きのつとめも氣兼ねは同じ事、不品行だといはれゝば、直にしくじり活計を、立つて行かれぬ主人持ち。

久吉　その御主人の名代に、然もこの春井生村の、集會へ來ておいでの時、

丹次　隣り座敷は新橋の、藝者をつれた一座とも、知らずに出逢ふ緣のはし、

久吉　どこのお方か樣子のよい、お方もあればとそれなりに、

丹次　別れた跡で名を覺え、呼びたく思つた使ひ先き、

久吉　念が屆いて伊勢源から、口がかゝつて出て見れば、

丹次　寸法通りのさし向ひ、音〆を聞いていゝ中に、

久吉　成りはなつても二代目の、丹さんといふ浮氣もの。

丹次　いや、きれい首の喰廻しをする、藝者とは知らなんだ。

久吉　あれ、その口のにくらしい。

　ト此內兩人段々傍へ寄つて來て、久吉丹次郎をつめる。

丹次　あゝいたい、何をするのだ。

　ト飛退く拍子に有合ふ燗德利を打返す。

久吉　あれお銚子がこぼれました。

丹次　下迄たれては大變だ。

ト手拭を出し酒を拭いて居ろ、此時うしろにて幕明きの直しの拍子木聞えて、管絃の鳴物になり、階子の口より以前の若い衆上り來て、

若者　もう明きましたから、いらつしやいまし。

久吉　おや、大そう早く明いたね。

丹次　いや、音羽屋も大勉强だ。

若者　隨分お長うございました。

久吉　待たない時には、

ト丹次郎と顏見合せ、帶上を締直しながら、

長うなかつた。

ト兩人支度をする、此の模樣幕明きの木の音、管絃にて道具廻る。

（中村座樂屋口の場）——本舞臺一面の平舞臺、うしろ跡へ下げて塗屋造り中村座の三階を見たる樂屋口左右に部屋々々の窓を見せ、樂屋の上下土塀にて見切り、前の鳴物にて道具留まる。と鳴物かはつて、賑かな唐人ばやしになり、花道より、以前の眞三郎、お絹お縫連立ち出來り、花道にて、

眞三　もしお母さん、向うがさつき御覽なすつた芝居の樂屋でございますから、三階から役者達が、顏を出すのでも見て行きませう。

お絹　御恩になつたお茶屋さまの、お世話になつてはすまぬ故、用事があるとお暇申し爰まで來たを幸ひに、溝店のお祖師樣へ、お參りをして又歸りに、芝居のうしろを通るとは、爰が道順と見えまする。

お縫　いえ／＼さうではござんせぬが、兄さん中村座の、樂屋を見せるとおつしやつて、こちらの方へ來ましたのぢや。

眞三　樂屋の外から三階の樣子でも御覽なすつて、お茶屋の繁昌しますのを悦んでお歸りなされませ。

お絹　陰德あれば陽報と、芝居の景氣がよくさへあれば、お茶屋も繁昌しませうから、こんな嬉しい事はない。

お縫　あれ／＼、向うの三階から役者が顏を出しました。

眞三　これ、そんなにいふと田舍者が、東京見物に來たやうでみつともないから、靜かにした。

お絹　お茶屋さまの衆達に逢ひでもすると間がわるい、知れない樣に見て行きませう。

お縫　兄さん、どうぞ三階の樣子を敎へて下さいまし。

眞三　わしも知らぬが帳元の、中條さんといふ方から、聞

いて居るだけ數へてやります。

ト右鳴物にて三人は舞臺へ來る。此時上手より前幕の傳次、勘藏いづれも縞物の半纏、着流し綺麗なこしらへにて出來り、

勘藏　こう兄貴、これからが肝腎、腹裂きの幕が明くといふのに、なぜあわてゝ出て來たのだ。

金太　どうせ呼び物の幕だから、二錢のおしも三錢と、高く取るのは一と幕見は、向ふの附目で仕方がねえ

傳次　なに、おし位ゐはどうでもいゝが、今猿屋町の探偵が、三人連れで這入つて來て、きよろ／＼見廻す樣子だから疵持つ足で、跡の幕を、見るのもなんだか氣がねえから、おしをやらずに出て來たのだ。

勘藏　探偵方が居た事を、おらあちつとも知らずに居たが、そいつあ兄貴よく氣がついた。

金太　なんにしろ探偵が爰らをねらつてあるく樣ぢやあ、佐竹の原もぶらつけねえ。

傳次　埋地へ行つて日を暮らし、今夜は廓へくり込んで、きやつの所へでも、押し上がらう。

勘藏　妲妃の芝居を見た跡で、狐を抱くとは面黒狸だ。

金太　狸といへば芳延の、空也豆腐の狸汁が、めつぱふ旨えと評判だ。

傳次　池の上の四疊半が、靜かでいゝからあすこにしよう。

勘藏　狸なら四疊半より、八疊敷にしたらよからう。

金太　狹い座敷であひ客のねえのが、却つて氣がおけねえ。

傳次　それぢやあ車の通らねえ、拔道傳ひに早く行かう。

金太　それがいゝ／＼。

ト三人花道の方へ行きかける、此内眞三郎お絹お縫は下手にて、三人を見て囁き合ひ居て、此時眞三郎前へ出て、

眞三　おゝさうだ、おのれは此間比丘尼橋で、金を盜んだどろばうだな。

トこれにて三人びつくりして、氣をかへ、

傳次　えゝ、途方もねえ事言やあがるな。

勘藏　何を證據におらッちを。

金太　盜人呼はりしやあがるのだ。

眞三　おゝ、證據は顏に見覺えの、あるのが何より目印だ。

傳次　扨は手前は氣違えだな。

勘藏　人間違えをしやあがつて。

金太　めつたな事を言やあがるな。

眞三　いや／＼、なんで違ふものか。さあ、交番へ一緒に

來い。
ト傳次をとらへる。
傳次　えゝ、みつともねえ放しやがれ。
清與　交番も何も入るものか。
金太　かまふ事はねえ、叩きなぐれ。
ト三人にて打ちすゑる。眞三郎一心に傳次をとらへ、
眞三　お袋、早くお巡りを、呼んで來ておくんなさい。
三人　えゝ、やかましい、放しやあがれ。
ト三人は振切つて逃げようとする、眞三郎は一心に三人をとらへて居る、お絹お縫は捨ぜりふにて、どろばうどろばうと聲を立て居る、此内始終うしろの樂屋の内にて、立廻りのつけの音聞える事、ト、樂屋の窓の内にて。
大勢　どろばうだ〳〵。
ト聲してばた〳〵になり、上手より探偵俗尾丹作、今野桂次、平野顚三羽織袴シヤッポを冠り、靴ばきにて出來り、此體を見て、
俗尾　おゝ、三人とも爰にゐたか。
今野　捜してゐたのだ。
三人　神妙にしろ。
傳次　こいつアたまらぬ。
ト逃げにかゝるを、探偵三人にて捕へ、腰より繩を出し手首へ掛ける。これにて巾着切り三人逃げられぬこなし。
眞三　おゝ、よい所へお三人さま、比丘尼橋にて此間、百圓取つた竊盜は、此三人でござります。
お絹　どうぞお上のお調べにて、取られた金が戻りますやう。
お縫　御詮議なされて下さりませ。
傳次　いえ、わつち共は、堅氣な職人、
勘藏　金を取つたの、竊盜のと、
金太　そんなものぢやござえません。
俗尾　いや、さつきから手前達の、跡をさがしてをつたのだ。
今野　未練な事を言はねえで、
平野　神妙にして、分署へ參れ。
眞三　私共も御分署へ、
お絹　一緒にお連れ、
三人　下さりませ。
傳次　それぢやたうとう、

三人　喰ひ込んだか。

ト此内三人へ繩をかけ、樂屋口より芝居のもの、上下より往來のもの、大勢出て見る。

俗尾　さあ、神妙にして、

三人　歩みをらぬか。

ト引つ立てる。巾着切三人うんざりせしこなし、此の時後ろの窓のうちにて、

大勢　いや、いゝ氣味だ。あはゝゝゝ。

ト笑ふ。

眞三　惡事の報いは、

ト　お絹の手を引くを、木の頭

早いものだ。

ト皆々引張りよろしく、唐樂のやうな太鼓にて、

ひやうし　幕

三　幕　目

唐土杜元銑邸の場
同受仙宮腹裂の場

役名——紂王の愛妾妲妃、杜元銑の妻柳條、西伯侯姫昌、殷の紂王、柳條の父白毛達、佞臣費仲官、西伯の臣雷震、佞臣師絹官、良臣直言、同眞正、杜元銑の僕老鈍。冀國侯娘香讓、杜元銑娘柳眉、同二女玉瑞、同三女翠子、其他。

（杜元銑屋敷の場）——本舞臺三間の常足の二重、後ろへ平緣の附物、正面上手一間佛檀二枚開き、彫物の扉、此下唐木の戸、下手二間腰高、畫模様の障子上の方同じ障子屋體、下の方跡へ下げて窓のある白壁の塀、此前棕梠の植込み、いつもの所冠木門、唐めいた開き戸二枚開き、總て杜元銑屋敷の體、爰に良臣直言、同眞正、筒袖唐裝束、劍を帶し士官の打扮、杜元銑の僕老鈍白髮鬘、筒袖唐裝束家來のこしらへ、よき所へ誂への煙草盆を出し、兩人煙草を呑み居る。此見得唐樂にて幕明く。

老鈍　御内證様には、毛中を毎度お尋ね下さりまして、有難うござりまする。

直言　當家の御主人杜元銑殿は、臣下の内の賢者にて、天下の亂れにならぬ樣、君の大事を思召され、强ひて御諫言なされし所、以つての外の逆鱗にて、其場に於いて御手討、良薬口に苦しのたとへ、是非もなき事でござる。

眞正　是皆君の御愛妾、妲妃の方がなす事にて、既に此程刑法も新に設けて非道の計らひ、鐵管に火をおこし、是を抱かせ總身を燒き、又は丈餘の穴を掘り此中へ蛇蜥蜴毒蟲を多く入れ、裸になして穴へ入れ。

直言　中にもわけて無慚なるは、孕める女の腹を裂き、宿せし小兒の男女をさし、これを酒宴の興となす。

眞正　種々惡逆の增長なすも、お傍にへつらふ佞人讒者費仲師絹が勸むるゆゑ。

直言　昔より今に帝王の、淫酒に耽りたまふのは、則ち國家の亂れなり。

眞正　最早近きに殷の世も、亡ぶる時の至るべし。

老鈍　承はれば壽羊さまは、冀國侯の御屋敷においでなされしその頃は、誠に柔和のお產れにて、下を憐れみ慈悲深く、容顏美麗ばかりでなく、お志しが美しいとお噂さなして褒めましたに、如何なる事で、そのやうな心にならせたまふ事か。

直言　是について不思議なるは終南山に世を避けし天文博士の雲中子が、殷の都に妖氣立ちしは心得難しと言はれしよし、察する所壽羊の身に、妖魔が入りし事なるか。

眞正　その雲中子が所持なせる、照魔鏡と唱へる名鏡、これへ寫し見る時は、妖魔の本體顯はれて、忽ち俗性知れると聞く。

老鈍　その照魔鏡に姿をうつし、退散さし度うござります、

直言　多くの人命失ふことゆゑ、西伯侯が苦心され、雲中子へ賴まれたれば、

眞正　日あらず妖魔は退散なし、泰平の世になるであらう。

トこれより床の淨瑠璃になる。

〽折から奧の騷がしく、こは何事と兩人が、怪しむ所へ一間より、杜元銑が妻柳條、留むる妹を突き退けて、姉の柳眉を打ちすゑれば、

ト此内ばた〳〵と音する、眞正、直言何事なるかと思ふ。老鈍は又初まりしといふ思入、奧より杜元銑の娘柳眉、唐裝束娘のこしらへにて逃げて出て來る。跡より杜元銑妻柳條、好みの鬘唐裝束にて追ひかけ出て來る。杜銑銑二女玉瑞、三女翠子、筒袖、唐裝束小娘のこしらへにて留めながら出來り、柳條兩人を突退け、柳眉を引きつけ煙管で打つ。

柳眉　母上樣、おゆるし下さりませ。

柳條　いや〳〵、今日は許さぬ〳〵。

玉瑞　母さま、どうぞ姉さまを。

翠子　堪忍して上げて、
兩人　下さりませ。
柳條　入らぬ留め立て、邪魔しやるな。
ヘすがる妹を拂ひのけ、又も柳眉をつゞけ打ち、二人は見兼ねて押止め、
ト柳條、柳眉を又打つ、直言眞正是を留め、
直言　何を粗相いたされしか、其樣に打擲して、疵でもついてはなりませぬ。
眞正　腹も立たうが柳條殿、拙者共がお詫びをいたせば、許して上げて下さりませ。
老鈍　お二人樣が此樣に、お詫をなされば奧樣にも、御了簡なされませ。
ト柳條兩人に向ひ、
柳條　これは〳〵お二人樣へ、我子の事に取紛れ、御挨拶もいたしませず、御免なされて下さりませ。
直言　そのお詫には及びませぬが、いつたい是はどういふ譯で、御折檻をなされまするか。
眞正　譯をお聞かせ下さりませ、
柳條　折檻いたす其譯を、お聞きなされて下さりませ。
ト謠への合方になり、
御存じの通り御主君さまが、深く淫酒に溺れ給ひ、御政事向も御愛妾の妲妃の方のお取計ひ、これでは天下の亂の基、打捨て置かれぬ一大事と御諫言を申上げしに、御取用ひのなきのみか、以つての外の御腹立ちにて、其場で直に夫はお手討、口惜しくは思ひますが、主と家來に是非なく〳〵、遺骸を引取りまして、形の如くに葬むりましたが、これと申すも妲妃の方へ、阿り諂ふ佞人が御側につき添ひ勸むるゆゑ、嘸夫にも殘念な事であらうと明暮に、弔ひ居りまするに、なさぬ仲とはいひながら、娘柳眉は私をないがしろにいたしまして、申す事も聞きませず、今日は夫の靈前へ、靈供を拵へ供へよと、申しつけしに餘所見なし、其膳部をそこへ落し、器具はこはし靈供は散し、供へる事が出來ませぬ。亡き我父を粗末になす、言はう樣なき不孝者、それゆゑ折檻いたしますれば、どうぞ留めずに下さりませ。
ヘ言ふに娘は泣く眼を拭ひ、
ト柳眉淚を拭ひ、
柳眉　申し母上さま、私が惡うござりました。是から心をつけますれば、御免なされて下さりませ。
柳條　外の事なら了簡しようが、夫へ供へる靈膳を粗末に

なせし上からは、今日ばかりは了簡ならぬ。

直言　さう申されるは御尤も、定めてお腹も立ちませうが、幸ひこれに參り合はせし、二人がお詫をいたしますれば、

眞正　今日の所は此儘に、御了簡下されて御面倒でも今一度、靈供を拵へお供へ下され。

老鈍　お二人樣があのやうに、お詫びなされて下さりますれば、お二人さまにお免じなされ、御勘辨下さりませ。

柳條　折角お詫び下さります、お二人さまのお詞を、もどきましては濟みませぬが、度重なりし事なれば、今日ばかりは許されませぬ。そちが母の實の兄、伯父の所へ出て行きをれ。

柳眉　これから粗相をいたさぬやう、氣をつけますれば母上樣、どうぞお許し下さりませ。

柳條　その言譯も聞き倦きた、叱る夫が世にないとて、年もゆかぬそなたなどに、疎まれるのが口惜しい。そでない事をしやるから、しつけの爲めに折檻すれど、繼子いぢめと人に言はれ、後指をさゝれるが悔しうてならぬゆゑ、もう／＼爰には置かぬわいの。

ト柳眉泣きゐる。

直言　人にまさりてしとやかな、柳眉殿が如何して、父樣靈の佛前へ供へる靈供を落されしぞ。

眞正　大方母御の言附を、餘所に聞かれてうつかりし、落された事であらう。

ト玉瑞是を聞き思入あつて、

〽姉が越度と言ふを聞き、妹は側に忍び兼ね。

玉瑞　申し母樣、是から私がお供へ申しまするから、今日の所は姉樣を、

翠子　堪忍して上げて、

兩人　下さりませ。

柳條　えゝ、そち達がいらぬ口出し、默つてそちらへ引込んでゐよ。

トきつと言ふ。玉瑞思入あつて、

玉瑞　いえ、引込んでをりませぬ。

柳條　そち達迄が姉を眞似、口答へをしやるのか、何故引込んでをられぬのぢや。

玉瑞　引込んでゐられませぬは今姉樣が、御靈供を、お落しなされましたのは、母樣お前が裾を踏へ、轉ぶ拍子にお膳部を。

ト言ふを冠せて、

柳眉　あゝこれ、そなたは何を言ふのぢや、わたしが閾へ

躓いて、思はず靈供を落したのぢや。
玉瑞　いえ〳〵さうではござりませぬ。母様が裾を踏へて、それでお落しなされたのぢや。
翠子　それは私も見てゐました。
ト言ふを柳眉押へて、
柳眉　これ、そなた迄が同じ様に、お慈悲深い母上様が、なんで裾をお踏みなされう。私が粗相で落したのぢや。
ト柳眉妹達へ思入あつて、何にも言はずにゐてくりやいの。
玉瑞　はあゝ。
ト兩人泣く。
柳條　そなたが爰にゐればこそ、我子に迄も疎まれる。さあ伯父の所へ出て行きやれ。えゝ、きり〳〵と出て行かぬか。
〽又も煙管で打ち据ゑれば、柳眉はその手に縋り付き。
ト柳條柳眉を煙管で打つ、その手に縋りて、
柳眉　假令何とおつしやつても、伯父の所へは參りませぬ。
柳條　なに、行かぬとは。
柳眉　さあ、我身を産んだ母様は、五つの年に亡くなりて、それより今の母様の、

〽教へを受けて人となり、絲竹の道、裁縫の業の出來るも誰が蔭。
皆母様のお蔭故、御介抱をいたしますが、
〽萬分の一の御恩送り、定めてお氣には入りますまいが御堪忍下さりまして、お側に置いて下さりませ。
〽涙乍に掻き口說けば、聞く人々は感心なし。
ト此内柳眉宜しく思入れ、柳條も切なきこなし、
直言　年は行かぬが感心な柳眉殿の志し、是迄受けし恩返しが、いたしたいと言はるゝ故、
眞正　お腹も立たうが拙者共が、お詫びをいたせば此儘に、了簡をして下さりませ。
柳條　いえ今日ばかりでござりますれば、お二人様のお詫び故、堪忍をいたしますが、夫がみまかりましてより、ないがしろにいたしますれど、繼子いぢめと世間の人に言はれますのが口惜しく、今日迄怺へてをりましたが、もう了簡がなりませぬから、お留めなされて下さりますな。
直言　すりや、斯程迄お詫びをなしても、
柳條　はい、了簡をいたしませぬから、捨てゝおいて下さりませ。

直言　纈子いぢめと言はるゝが、口惜しいと言はれるか、
眞正　此娘御を追出したら、纈子いぢめと言はれませうぞ。
柳條　おつしやる通り纈子いぢめ、是が憎うてなりませぬから、追出すのでござります。
ト きつと言ふ。兩人思ひ入あつて、
直言　それ程迄に言はるゝなら、最早お詫びはいたしませぬ。
眞正　柳眉殿も爰にをつたら、又もや憂き目に逢ふであらう。
老鈍　お二人樣と御一緒に、伯父上樣のお屋敷へ早うお出でなされませ。
〽勸めに柳眉は是非なく〳〵、
柳眉　それではどうでも伯父樣の、所へ行かねばなりませぬか。
柳條　えゝ、きり〳〵と出て行かぬか。
〽詞も荒く門口へ、柳眉を突出すその所へ、始終を窺ふ白毛達、
ト 此以前よき程に下手より白毛達、白髮鬘筒袖の唐裝束、劍を差しつゝ出來り、門口に窺ひゐて門を明けて、
白毛　いや、柳眉には行くに及ばぬ。
柳眉　やゝ伯父樣か。
直言　いや、よい所へ白毛達殿。
眞正　疾く〳〵是れへお通りなさい。
白毛　御免下され。
〽いざ先づ御免と座について、
ト 白毛達内へはひり、よき所へ住ひ合方になり、
最前から爰へ來合はせ、門で樣子は聞きました。
直言　すりや門口で、
兩人　聞かれしとか。
白毛　よしない事でお二人に、いかい御苦勞掛けました跡でとつくり私が異見をいたしますから、先づお二人はこの儘に、お歸りなされて下さりませ。
直言　實は我々兩人も、見捨て歸る譯にも行かず、如何はせんと存ぜし所、
眞正　折よく貴殿がお出で故、是にてお暇いたすでござる。
白毛　左樣なされて下さりませ。
柳眉　お二人樣に御苦勞かけ、有難う存じまする。
ト 辭儀をする。
直言　さやうなれば、
兩人　白毛達どの。

白毛　御兩所。
直言　これにてお別れ申しまする。
〽一禮なして柳條が、邪險をいふかり兩人は、心殘して立歸る。
ト兩人宜しく思入あつて、花道へはひる。柳條白毛達へ向ひ、
柳條　父樣、ようお出でなされました。
白毛　餘りようも參らぬのぢや。
ト思入あつて腰を探り、
いや年寄りの心せはしく、こりや煙草入れを忘れて來た。
老鈍　ちよつと取りに參りませう。
白毛　おゝ、大儀ながら行つてくりやれ。
老鈍　畏りましてござりまする。外に御用はござりませぬか。
白毛　外に用は何もない。
老鈍　左樣なれば、行つて參ります。
〽父御の來たに安堵なし、とつかは宿所へ急ぎ行く。
ト老鈍思入あつて下手へはひる。
〽跡見送りて柳條が襟上取つて引倒し、あり合ふ煙管おッ取つて、つゞけ打ちに打ち据ゆれば、
ト白毛達跡を見送り、柳條を引倒し、以前の煙管で打据ゑる。
柳條　こりや父樣には、何んとなされます。
白毛　何んとするとは知れた事、おのれが曲つた根性を、親が叩き直すのだ。
〽又も手酷く打据ゑるを、孫は左右に取縋り、
柳眉　これ申しお爺樣、何の落度がござりまして、
玉瑞　母樣を、お打ちなされますか。
柳眉　どうぞ堪忍して、
三人　下さりませ。
ト三人縋り留める。
白毛　折檻せねば腹が癒ぬ。そち達は退いてゐよ。
柳眉　いえ／＼妾は退きませぬ、打たでならぬ事ならば、母樣の其代りに、
玉瑞　私共をお打ちなすつて、
柳眉　母樣助けて、
三人　下さりませ。
〽子より可愛い三人の、孫に留められ拳も鈍り、
ト白毛達思入あつて、
白毛　母に打つべき科あつて、此爺が折檻するのぢや、何

科もないそち達を、何でおれが打たれよう。
柳條　母に打つべき科あるとは、何の科でござりまする。
ト詫への合方になり、白毛逢思入あつて、
白毛　おのれは惡魔に魅入られたか、以前に變る邪險な振舞、杜元銑が死んでから柳條は氣が荒く、繼子を酷くいぢめるは、流石は以前が隱しいものゝ娘と人に言はれるのが、おりや口惜しい悔しい故、異見をしようと來かゝりし、門にて開けば無理非道、何科もない此孫を折檻なして出て行けとは、それが女子の道なるか、狹い心に一途に迫り、身でも投げて死んだらば、そちは恥とも思ふまいが、あゝいふ邪險な事をするも、親がしつけが惡い故と、世間の人に言はるゝのが、面目ない故共々におれも命を捨てねばならぬ。義理ある娘や親を殺し、それでよいとおのれは思ふか、こんな曲つた根性に育てはせぬが情けない、思へば憎いやつだなあ。
〽老の一徹ねぢ伏せて、悔し涙に打ち据ゑる、其手に柳眉は縋り附き、
ト白毛逢悔しき思入にて柳條を打つ、柳眉縋り留めて、
柳眉　これと申すも私が、不束故に母樣に、お叱りを受けまする。これからきつと愼みますから、今日の所はお爺樣、御免なされて下さりませ。
玉瑞　私共も共々に、お願ひ申し、
玉翠　あげまする。
白毛　母の惡い事を言はず、その身が惡いやうに言ふ、世にも稀なる孝行娘、是を憎むは鬼か蛇か、見下げ果てた奴ぢやなあ。
〽見下げ果てしと突放せば、わつとばかりに泣伏せしが、やう／＼にして涙を拭ひ、
ト白毛逢悔しき思入にて、柳條を突放す。柳條ハツと泣き伏し、起上り思入あつて、
柳條　現在實の父樣に、鬼か蛇かと言はれるやうに、娘に辛く當りまするも、あれが命を助けたさ。
白毛　何と言やる。
ト床の合方になり。
柳條　今改めて申さずとも、よい事なれど私は、元御奉公に出でし者、先奥樣が御病氣にて、末期の際にお呼びなされ、此の柳眉を他人の手にかくるが黄泉の障りゆゑ、育てくれよとくれ／＼も、御遺言にて跡目となり、それより二人の子を設け、何不自由なき身の上も、夫が不慮の死を遂げて、賴みに思ふ義理ある娘に、つらく當るは

外ならず、佞人共の讒言に杜元銑が妻子をば、死刑になすといふ噂、豫て妲妃が計らひにて、罪ある者は炮烙死刑、又は毒蟲群がり居る穴へ落して苦しませ、孕める女の腹を裂き、一命斷つて樂しむよし、我が身も夫の忘れ形見を宿しをれば何時なん時、縲目にあふか知れませぬ。
〽今にも沙汰のある時は、二人の子供をさし殺し、我身も共に死ぬ覺悟、
御恩になりし奥様の御胤を殺すは勿體なけれど、我家にあらば共々に、必ず死ぬるに疑ひなし、それ故わざと邪險になしたは、我を疎まば共々に死する心はあらざるべし、娘が伯父の高貴昇は、妲妃が親の蘇護が親族、これへ逃げ行く其時は、命に別條あるまじと、思ひしゆゑに斯くなせしが。
〽女子の狭い心にて、もしも娘が身でも投げ、世間へ濟まぬと父様に命を捨てさせ申しては、此上もない不孝故。死ぬ迄人に言ふまじと、心に誓ひし事なれど、打明けお詫び申しまする。父様母様お二人に、厚き敎へを受けたれば、まこと繼子をいぢめるやうな、邪險な事はいたしませぬ。疑ひ晴らして下さりませ。
〽涙ながらに柳條が義理を立てぬく眞實の心を打明け物語れば、父親はじめ三人の子供も母の慈悲心を、感じて涙にくれにける。

ト此内柳條よろしく思入にて言ふ、白毛達、柳眉、玉瑞、翠子とも〴〵に泣く、白毛達涙を拭ひ、

白毛　扨はさういふ心であつたか、斯くと知らねば眞實の繼子憎みと思うた故、今の樣に打擲なしたは、おれが心に見切れぬ故、愚な親と思ふであらうが、堪忍してくれ許してくれ。

柳眉　繼子を憎むは世の習ひ、それを是程私を思召して下さります母上樣のお志し、嬉し涙が止まりませぬ。

ト泣く。

玉瑞　それではほんまに姉樣が、憎いのではござりませぬか、さうとは知らず母樣が、何であの樣に姉樣を、打ち擲きなさるかと、

翠子　年のいかない私さへ、そでない事をなされますと、お恨み申してをりましたが、

柳眉　誠に嬉しく。

兩人　ござります。

ト玉瑞翠子嬉しき思入。

柳條　隔てし仲も睦じく、姉を慕へば妹を哀れみ、實の

姉妹同樣に思ふ故に此母を、恨むは誠の志し、わしも嬉しう思ふわいの。

白毛　血を分けた實の子ゆゑ、そちが心は知つてゐれど、義理ある娘を手酷くなすは、やはり女の淺薄に繼子いぢめをしをるかと、見下げ果て今日來たが、よく本心を明かしてくれた。それでわしも安心した。

柳眉　此後もしも母上樣が、命をお捨てなされるなら、どうぞわたしも共々に、一緒に殺して下さりませ。

柳條　から打ちあかす上からは、もしもの時は親子四人、一緒に冥土へ行かうわいの。

柳眉　どうぞさうして、

三人　下さりませ。

ト白毛逢思入あつて、

白毛　昨日は誰が連れて行かれた、今日は誰が捕はれたと、娘を持つてゐるものは、實に薄氷を踏む如く安き心のあらざるも、これみな妲妃が色に迷ひ、非道の政事をなす故にて、殷の御代も遠からず、

柳條　あこれ、壁に耳ある憂き世の中、誰が聞くまいものでもない。

ト此以前下手より、老鈍煙草入を持ち出て、門口に裏向きにて窺ひゐて、

老鈍　いや、お氣遣ひなされますな、最前から私が、張番をしてをりました。

ト内へはひる。

白毛　それではそちも、聞いてをつたか。

老鈍　袖をぐつすり濡らしました。

柳條　門に窺ひをつたのが、老鈍なればこそよけれ。

白毛　もし佞人に聞かれなば、

柳條　此子供らも諸共に、

白毛　如何なる刑に逢はうも知れぬ。

柳條　滅多な事をおつしやりますな。

ト柳條白毛逢あたりへ思入、時の鐘三重にて、よろしく此道具廻る。

(殷の紂王別殿受仙宮の場)――本舞臺四間通し高足の二重、本庇、本椽附き、朱塗りの柱、同じく勾欄金鍍金かなもの附き、腰通り唐花の模樣、向ふ大瓦燈口、錦の緞帳、左右金張附け極彩色の畫、欄間に受仙宮といふ額をかけ、屋體の左右朱塗りの渡殿、廊下雨棲、腰高畫模樣もじばり障子、前側一面の緞

帳を下し、平舞臺上下岩組、紅白の牡丹を取りつけ、總て殷の紂王別殿受仙宮の體、唐樂の打ちおろしにて道具留る。と床の淨瑠璃になる。

〽親子あたりを見廻して、ほつと一息つく鐘の、音も哀れに、

〽抑々殷の湯王より廿八世の聖代も亡ぶる時の來れるや、惡逆無道の紂王が、愛妾妲妃の香に迷ひ、日夜遊戯の受仙宮、佞臣費仲官が立ち出て、

ト唐樂になり、上手より佞臣費仲官、師絹官筒袖の唐裝束、劍を帶し出て來る。此時花道の揚幕にて、

呼び　御入り。

ト呼ぶ。

費仲　最早我君、

兩人　御入りとな。

〽國家を亂す艷麗の女色に溺るゝ紂王が、比翼連理のかたらひなす、愛妾妲妃と諸共に前栽近く歩み來て、

トこれへ唐樂の入りし出の鳴物を冠せ、花道より殷の紂王唐冠り唐裝束の沓の拵へ、紂王の愛妾妲妃、好みの鬘、花簪、唐裝束、沓にて、下官絹張り飾り附きの長柄の傘をさし掛け、子役の唐子二人、一人は誂への煙草盆を持ち、一人は模樣のある袱紗包みの小箱を持ち、次に侍女四人、いづれも唐裝束にて隨ひ出來り、花道に留る。

紂王　實にや牡丹は百花に勝り、盛り久しき富貴草、誰しも深く愛翫なせど、是なる妲妃に比ぶれば、遙かに劣りし花の色。

妲妃　今を盛りと咲きみちし、牡丹の花の色香には、所詮及ばぬ此の妲妃、左樣な事を御意遊ばすと、あの紅が面にうつり、お恥しう存じます。

紂王　いや、そもじが何んと申さうとも、牡丹に勝る色香に愛、三千人の寵愛も、只一人に止めしぞ。

唐子　花は櫻と申しますれど、

唐子　遙かに見事な牡丹の花。

侍一　今を盛りと咲揃ふ、お圍ひ内の廿日草、

侍二　その花よりも色々に、色どる羅綾の御粧ひ、

侍三　あかぬ詠めの御姿は、

侍四　櫻恥らふ花の王、

費仲　これは〳〵我君樣には、妲妃の方樣御同道にて、只今お入りにござりまするか。

師絹　先刻より我々兩人、酒池肉林の設けをなし、お待ち

申して、
兩人　ござりまする。
紂王　心利いたる費仲師涓、萬端よきに計ひ置け、
兩人　委細畏まつてござりまする。
妲妃　何は兎もあれ我君樣には、
侍四　設けのお席へ、
侍五　皆も一緒に、
皆々　先づ入らせられませう。
へいざと妲妃がひるがへす羽翼の袖に炷籠めし、蘭麝の
薫り高樓へしづ〳〵と座したまひ、
ト　右の鳴物を冠せ、費仲官、師涓官、平伏なす、紂王
妲妃皆々舞臺へ來り、眞中へ兩人、誂への椅子へかけ、
腰元後ろへ竝ぶ、唐樂になり、紂王思入あつて、
紂王　最前より妲妃には、何時にない浮かぬ顏、氣合でも
惡いのか。
侍一　妲妃樣には御病氣なるか、
侍二　只今これへお入りの折から、
侍三　御顏の色も常ならず、
侍四　御不例の御樣子に、
四人　ござりまする。

紂王　雨を帶びたる海棠の、なやめる姿は又一入、酒池肉
林の宴を開き、妲妃が心を慰さめい。
皆々　はあゝ。
妲妃　その御宴には及ばぬわいの。
費仲　でも我君の仰せなれば、庖丁なしたる山海の、珍味
をこれへ持參なし、
師費　扨御酒宴の餘興には、我等が得手の踊りにて、お笑
ひ顏の出ますやう、
費仲　御機嫌とらねば、
兩人　なりませぬ。
侍一　そりや面白う、
四人　ござりませう。
紂王　さあ〳〵、早く初めい〳〵。
兩人　畏つてござりまする。
ト　立ちかゝるを、
妲妃　あこれ、二人共まあ〳〵待ちや。わらはが氣分の惡
いのは只ならぬ病ひゆゑ、打捨ておいてたもいの。
紂王　只ならぬとは心掛り、して〳〵如何なる病なるぞ。
妲妃　さあ病の元と申しまするは、數ならぬ身を我君の御
寵愛が深きゆゑ、人の妬みを受けまして、呪ふ者がござ

りますれば、遂にはわらはの命にもかゝはりますればさもない内、父冀國侯蘇護方へ參りたうござりまする。

ト紂王思入あつて、

紂王　すりや、そちを恨みて呪ふ者があるゆゑ、暇をくれと申すのか。

妲妃　お名殘り惜しうはござりますが、わらはにお暇下さりませ。

ト物思ひのこなしにて言ふ。

紂王　いや〳〵暇は遣はさぬ。それが心にかゝるなら、四百餘州の政事さへそちにまかす此紂王、誰彼の容赦はない、呪ふ者をば死刑にいたせ。

費仲　只今君の仰せの如く、調伏たいすものあらば、誰れ彼れの容赦なく、

師絹　搦めとつて詮議なし、重き刑に行ひくれん。

費仲　して其者は、

兩人　何者でござりまする。

妲妃　此程君へ過言を申し、お手討になりましたる杜元銑の妻柳條、夫の命を失ひしを、わらはが指圖いたせしとて、深く恨みて人形へ、あまたの釘を打ちしゆゑ、その祟りにて此病、長くお側にゐるならば、猶々もつて恨みは晴れず、遂には命を失はん、それゆゑお暇下さりて、宿へお歸し下さりませ。

〽思ひ入つて言ひければ、紂王忽ち怒りを發し、

ト妲妃愁ひの思入にて言ふ、紂王きつとなり、

紂王　すりや我へ過言を申せしゆゑ、手討ちになせし杜元銑の、妻が調伏なすとは言語道斷憎い奴、きつと成敗いたしくれう。

費仲　かゝる事のある上は、妻は元より子供等も、

師絹　最早助けおかれませぬ。

紂王　妻子を召捕り連れ參れ。

費師　畏まつてござります。

紂王　疾く〳〵急げ。

兩人　はツ。

〽はツとばかりに兩人が、勢ひ込んでかけり行く。

ト早めたる唐樂ばた〳〵にて、兩人花道へ急ぎはひる、と奧より腰元一人出來り、

腰一　はツ申上げます、妲妃さまの御姉君、香讓様が此の御殿へ、只今お出でにござりますが、これへお通し申しませうや、如何計らひませう。

妲妃　姉上のお出でなるとか。

紂王　苦しうない、これへ通せ。

腰一　はッ、畏つてござりまする。

ト腰元奥へはひる。

〽程もあらせず妲妃の姉、冀國侯の娘香讓、しづ〳〵こなたへ打ち通り。

トかすめて唐樂を冠せ、奥より香讓、唐裝束にて以前の腰元附添ひ出來り、下手へ住ふ、腰元皆々辭儀をなす。香讓手をつかへ、

香讓　我君樣には御機嫌よろしう、麗はしき御尊顏を拜しまして、如何ばかりかお悦び申上げます。

紂王　香讓にはよく參りたり、父冀國侯には變りはなきか。

香讓　老人の事ゆゑに、兎角歩行がなり兼ねます故、父に代りて私が、御機嫌伺ひに參上いたしてござりまする。

妲妃　姉上には遠き道をば、よくこそお出でなされしぞ、そこは端近、まづ〳〵これへ。

香讓　我君樣の御前近く、畏れ多うござりまする。

妲妃　左樣なれば仰せに從ひ、

紂王　とく〳〵これへ。

香讓　御免なされて下さりませ。

〽膝を進めるその折から、

ト香讓前へ出る。此時花道の揚幕にて、

費師　キリ〳〵歩め。

ト説經がゝりになる。

〽憐れなるかな柳條は、夫に別れ明暮に、袖に涙の乾く間も、あらしと共に搦められ、千筋の繩に親と子が、階下間近く引かれ來て、

ト時の太鼓のやうな唐樂になり、花道より以前の柳條、柳眉、玉瑞、翠子、いづれも腰繩にかゝり、下官繩をとり、費仲官、師絹官附添ひ出來り、舞臺下手へ來り、

下官　下にをらう。

ト鳴物打上げ、

費仲　はッ、仰せにまかせ杜元銑の、妻子の者に繩打つて、

師絹　召連れまして、

皆々　ござりまする。

紂王　おゝ大儀々々、よくぞ召捕り來りしぞ。

〽それと見るより香讓が、

ト香讓は柳條を見て思入あつて、

香讓　それへ引かれて參りしは、杜元銑の妻子の者、何科あつての事なるぞ。
柳條　さうおつしやるは香讓樣、親子が繩目に逢ひましたは。
費仲　汝を搦め取つたのは、妲妃樣を、
兩人　調伏せしゆゑ。
〽聞くに柳條打ちおどろき、
柳條　えゝ、あの私が妲妃さまを、調伏なせしとおつしやりますか。
妲妃　夫の敵とわらはを恨み、呪詛調伏をいたしながら、あのしら〴〵しい顏わいの。
柳條　此身に夢さら覺えのないこと、何を證據におつしやりますぞ。
妲妃　慥な證據があつてのことぢや。これ、その箱これへ。
唐子　はあゝ。
〽はッと答へて攜へし、袱紗包みを差し出せば、
ト唐子袱紗包みの箱を出す。
妲妃　これ、その箱の內にある、人形を見せてくりやれ、
費仲　はい。
〽包みし袱紗取りのくれば、內には何か白木の箱、中に入れたる人形の急所々々に打つたる釘、
ト費仲官袱紗を取る、內に白木の箱あり、蓋を取ると中に裸人形へ、巳の年の女と記し、惣身へあまた釘打附けあり、
やゝ、箱の中には此樣な、釘を打つたる怪しき人形。
ト費仲官箱の中より人形を出す。翠子これを見て、
翠子　や、その人形は。
ト妲妃前へ出て、
妲妃　これはそなたのであらうがな。
翠子　あい、それはわたしが爺樣に、いつぞや貰うた大事の人形。
柳眉　あこれ〳〵、そなたは何を言やるのぢや。それはいくらもある人形。お爺樣に貰ふたのは、もつと大きい人形なるぞ。
玉瑞　覺え違ひであらうわいの。
費仲　えゝやかましい、だまつてゐろ。これ此人形はそちが人形か。
翠子　はい、わたしの人形でござりまする。
妲妃　その人形に「巳の年の女」と肌に記しあるは、わら

はが巳の年の産れゆゑ、夫を討たれて無念に思ひ、此妲妃を呪ひしか。
柳條　思ひもよらぬそのお尋ね、一向覺えはございませぬ。
妲妃　いや、覺えないと申せども、此人形はこれなる小兒が、手遊びなりしと申すぞよ。
柳條　いえ／＼、それは何れのやら、世間にまゝあるその人形、娘が所持ではございませぬ。
妲妃　しかと覺えがないと申すか。
柳條　その人形は存じませぬ。
妲妃　あのこゝな、僞りものめが。
ト きつと言ひ、
此人形に着せありし、衣服はそれなる小兒の衣服と、模樣も違はぬ同じきれ、これでも覺えがないと申すか。
〽箱の内より人形の、衣服を取出し差しつくれば、はツとばかり驚きて、
ト 妲妃箱の中より誂への人形の衣服を出し見せる。柳條はツと思入、柳眉もこれはと思入。
費仲　かゝる慥な證據があつても、
師涓　そち等は覺えがないと申すか。
ト きつと言ふ、柳條是非なき思入。
柳條　その人形を存じませぬと、申しましたは覺えもなき、呪ひの罪がかゝりますゆゑ、僞はりましてござりまする。
妲妃　此人形を所持ならば、呪ひし科は脱れぬぞ。
柳條　今更失ひしと申すのは、申譯に似たれども、其人形は四五日あとより、見えぬは娘がいづれへか、置き忘れしと思ひしが、扨は此身に科をきせん、企み事であつたるか。
妲妃　まざ／＼しいその言譯、誰が誠と致さうぞ、鬼門鎭護に造營ありし、星辰殿の丑寅に、埋めありしと祠官の訴へ、何物の仕業なるかと竊に占ひ見たる所、杜元銑が妻の仕業と、神の御告に知れたる故、只今これへ呼出し見れば、人形に着せたる衣服は小兒が衣服と同じ切、扨はわらはを呪ひしは、いよ／＼おのれと知つたるぞ。
紂王　妲妃を呪ふは憎きやつ、それにて兩人白狀させい。
費師　畏まつてござりまする。
〽畏まつたと兩人が、非道を守る棒たづさへ、
費仲　やい、汝が夫杜元銑が、君の御手討になつたのは、主從の禮を失ひ、諫言を申上げし故。

師絹　その場で一命捨てたるは、主を主と思はざる故、申さば自業自得なり、人をうらむところはない。
費仲　何故あつて妲妃さまの。
師絹　一命斷たんとなしたるぞ。
柳條　妲妃さまを呪ひしなどゝは、此身に覺えござりませぬ、又我君へ杜元銑が御諫言申上げしは、國家の爲めを思ふ故、假令お手討になりますとも、臣下の役にござりますれば、何お恨みに存じませう。
費仲　口がしこく言ひ解くとも、釘を打つたる人形が末の娘の手遊びの、人形なれば遁れはない。
師絹　呪ひましたと速に、白狀せぬと兩人が、打つて／＼うちすゑて、憂目を見せて白狀させるぞ。
柳條　たとへいかなる憂目に逢ふとも、此身に覺えのない事を、何で白狀致しませうぞ。
妲妃　かゝる慥な證據があつても、覺えがないといひ張るは、顏に似合はぬ性根の女、所詮たゞではいひますまい。
紂王　猶豫いたさず兩人を、拷問なして白狀させい。
費師　畏まつてござりまする。
〽情容赦もあらけなく、棒おツとりて左右より、息もつかせずつゞけ打ち、これなう待つてと二人が寄らんとなせど縛り繩、引かれて跡へたぢ／＼、これでも白狀致さぬかと手ひどく打てど柳條は、死すとも無實に落ちいらじと、怺へる苦痛を見るに忍びず。
ト柳條を眞中へ引出し、下官繩を取り、費仲師絹白狀しろと左右より打つ。柳眉、玉瑞、翠子これを見て傍へ駈寄らうとする、下官繩を引いて引倒す。兩人は柳條を打ち、三人行かうとして行かれぬ思入。妲妃は紂王に寄りそひ、これを見て嬉しき思入、香讓腰元はうつむき情ないといふ思入。
柳眉　あれお二人さま、その人形を埋めしは、母上ではござりませぬ、私でござります。
玉瑞　いえ／＼姉さまではござりませぬ、私でござります。
柳眉　いえ／＼、妹ではござりませぬ。
兩人　私でござりまする。
費仲　えゝかしましい餓鬼共めら、わいら二人を、そば杖に。
師絹　打つたら母が白狀しをらう。
〽二人が襟上引立て、邪險のしもとに打据ゑれば母は堪

らず左右を留め、
ト費仲は柳眉師絹は玉瑞を打すゑる。兩人痛さを怺へる思入、柳條見兼れて左右を留め、

柳條　まあ〳〵、お待ち下さりませ、二人の者が埋めたと申しまするは、此母をかばひまする僞はり事、今まで包み隱しましたが、誠其箱を埋めましたは、此柳條にござりまする。

費仲　すりや、その方が、

兩人　埋めしとか。

柳眉　いえ〳〵、母さまではござりませぬ。

柳玉　私にござりまする。

柳條　まだ〳〵言ふか、口出し致すな。

〽目顏で知す母親の、詞に是非なく控へる兩人、妲妃はわざと打ちしをれ、物思ひげなるおももちにて、

ト柳條兩人も泣く、妲妃思入あつて、

妲妃　今柳條があの箱を、埋めしと申すれば、わらはを恨みて呪ひしならん、これ皆君の御寵愛をそねみましてなす事なれば、お名殘り惜しうはござりまするが、わらはにお暇下さりませ。

紂王　假令何と申さうとも、そなたに暇は遣はさぬぞ、過言せし故杜元銑を、手討にせしを遺恨に思ひ、呪詛調伏致すとは、思へば憎き其女、いかなる刑に行ひくれん。

費仲　先づ第一が炮烙死刑、又は毒蟲を入れ置きし穴へ落して喰殺させるか。

師絹　かれは懷姙いたし居れば、腹さきの刑に行ふのが適當かと存じまする。

紂王　これ妲妃、いかなる刑に行なはうな。

妲妃　わらはを呪ひし憎き柳條、腹裂きがようござりませう。

費仲　又子供等は、穴へ打込み、

師絹　蛇や蜥蜴に喰はしてくれう。

〽聞くに親子は打おどろき、

柳條　えゝすりや私が腹をさき、子供は穴へ打ちこんで蛇や蜥蜴に喰はすとか。

柳眉　えゝ、情ないことで、

三人　ござりまする。

ト柳條にすがり泣く。香讓思入あつて、

香讓　柳條事は科なれば、是非もなき事ながら、此三人の子供等は、お慈悲を以て一命を、お助けなされて下さりませ。

腰一 数なりませぬ私どもゝ、

腰二 一同お願ひ。

四人 申し上げまする。

妲妃 男子なれば助けられぬが、三人共に女子なれば、姉上の詞に免じ、命を助けて遣はさん。

香譲 すりや三人とも女子故に、お助けなされて下さりますとか。

腰四 有難う存じまする。

香譲 さすれば只今柳條が、懐姙なせし腹の子は、男子か女子か知れざれば、出産なす迄母子共に、御猶豫お願ひ申しまする。

紂王 妲妃が詞にもとづいて、女子なれば助けくれん、懐姙なせしは男子か女子か、妲妃うらなつて見やれ。

妲妃 占ひまする迄もなく、今柳條が宿せしは、正しく男子に相違なし。

費官 男子とあらば、

費師 助けおかれぬ。

香譲 男子なれば是非なけれど、又女子なるも計られず、月滿ちて出産いたす迄、母子ともお助け下さりませ。

妲妃 いえ／＼それは叶ひませぬ、元より罪ある柳條に、懐姙なせしが男子ゆゑ、此場で成敗いたさにやならぬ。

柳條 すりや、どうあつても私を。

妲妃 罪に落さにやあ腹が癒えぬ。

香譲 是非なき事でござりまする。

ト本意なき思入、紂王思入あつて、

紂王 かれが詮議で酒宴の延引、腰元ども用意いたせ。

三人 畏りました。

ト唐樂にて奥へはひる。妲妃思入あつて、

紂王 それなる柳眉は年に似合はず、和琴の調べがよいと聞く、幸ひ酒宴のお肴に、何ぞ一曲彈じて聞かせよ。

柳眉 妲妃様の仰せなれど、元より拙き調べといひ、今母上の此世の別れ、何とて琴が彈かれませう。

費仲 御意に背かば、生けてはおかぬ。

師絹 共に此場で命を取るぞ。

柳眉 母上と諸共に、どうぞ殺して下さりませ。

香譲 これ／＼柳眉、母と一緒に死にたいと、そちが思ふは尤もなれど、仰せに随ひ琴を調べよ。世の譬にも言ふ如く、善は急げ惡は延びろ、時刻の延びるその内には、そちが母の一命も、さあ、兎にも角にもお望みゆゑ、疾く／＼これにて琴を調べよ。

〽ものやはらかに言諭せば、是非もなく／＼顏を上げ、
ト香讓、柳眉に呑み込ませる。
柳眉　畏りましてござります。
香讓　二人の子供は母親と、一つにゐるも僅かな內、よう暇乞ひをしやいの。
玉翠　有難うござります。
紂王　我はこれにて酒宴を開かん。
〽仰せに侍女が奧の間より、手に／＼運ぶ金銀の美々しき酒肴の器物、御前間近く取並べ、柳眉が前へ十三の和琴の調度据ゑおけば、
ト此內奧より腰元五人、見事なる臺に酒の器物を載せこれを持ち出てよき所へ並べ、一人誂への琴の爪袋を添へ、柳眉の前へ置く。
費仲　さあ疾く／＼と。
兩人　琴を彈ぜぬか。
柳眉　はあゝ。
ト是非なき思入。
柳條　そちが調べも今日限り、これが此世の聞納め、思へば果敢ない事ぢやなあ。
トこれにて柳眉琴を彈き、誂への獨吟になる。

〽憂き事の晴れぬ彌生の花曇り、昨日に變る肌寒く、雨持つ空の東風かぜに。
ト此內紂王コップを取上げる。妲妃德利を取り酌をなし、なまめきしこなし、柳條は二人の子供を引きよせ、名殘を惜しむ愁ひの思入、唄一とくさりあつて、
紂王　やあ／＼者共、腹裂きの用意いたせ。
下官　はあゝ。
トこれをきつかけに二の句になり、
〽岸の柳の結ぼれて、解けぬ思ひの深緣、
ト此內下手より下官四人、大俎板と木綿繩を持ち來り、平舞臺眞中に据ゑる。柳眉これを見て、
柳眉　こりや、どうあつても母樣を、
費仲　此場において腹をさくのだ。
柳眉　はあゝ。
ト泣伏す。
師涓　きり／＼彈かぬか。
ト棒で打つ。
柳眉　はゝい。
ト是非なく彈く。
〽えにし淺瀨に親と子の、羽袖ぬらせし水鳥の、鳴く音

哀れにひゞく鐘の音、
ト琴唄の切れ、柳條思入あつて、
柳條　夫は非道の刃にかゝり、今又我も腹を裂かれ、宿せし子迄日の目も見ず、闇から闇へやる悲しさ。かゝる非道をなし給はゞ、君を恨む者多く、從ふ者のあらざれば、殷の御代も風前の燈火同様危いのが嘆はしう存じまする。これ皆君が女色に溺れ、政事を亂し給ふゆゑ。
妲妃　ても憎き女が一言、わらはが手づから腹をさき、世の見せしめにいたしくれん。
〽懷劍とつてけしきをかへ、階下へ下りんとなす折から、
ト妲妃きつとなり、懷劍を持ち、三段へ一足おろす、此時花道の揚幕にて、
西伯　その御成敗暫らくお待ち下さりませう。
妲妃　なんと。
〽ためらふ所へ中門より、御前へ馳せ來る西伯侯、
ト唐樂ばた／＼にて、花道より西伯侯唐裝束、劍を下げ、沓にて出來り、花道下にゐて辭儀をなす。
紂王　やあ、誰かと思へば西伯侯姫昌。
妲妃　何故成敗止めしぞ。
西伯　申し上げ度き事あつて、路上において思はぬ高聲、失敬の段幾重にも、御免下さりませ。
妲妃　如何なる事にて止めしか、これへ參つて疾く／＼申せ。
費仲　君のお許し、
費師　急いでこれへ。
西伯　眞平御免下さりませ。
〽禮儀正しく頭を下げ、階下間近く座につけば、
ト西伯侯辭儀をなし、舞臺へ來り下手へ住ふ。靜な唐樂になる。
妲妃　わらはを呪ひし大罪ある、杜元銑が妻柳條、今腹をさく時に臨み、成敗待てと止めしは。
ト唐樂の入りし合方になる。
西伯　先達て杜元銑が御諫言申し上げしは、國家の爲めを思ふゆゑ、三度諫めて身退くはこれ誠の忠臣ならず、一命かけてその座を去らず、御諫言を申し上げしは、天晴勝れし忠臣なり、杜元銑が功績を君も思召されなば、寬典の御處置あるべきに、其妻女の腹を裂くとは、近頃君にあるまじき、御所業ゆゑに西伯が、お止め申してござりまする。

〽道を立つての諫言も、心亂れて耳にもかけず、

紂王　我愛妾の一命を、調伏なして斷たんとせし、大罪人の成敗を、何故其方止むるのだ。

西伯　忠死なしたる杜元銑が妻女ゆゑ、格別のお慈悲をもつて、柳條が助命を願ひ上げまする。

〽命乞ひなす西伯を、忽ち罪に落さんと、妲妃は計略めぐらして、

ト妲妃思入あつて、

妲妃　いえ、西伯侯が止めまするは、深き仔細のあつての事。

紂王　いかなる仔細があつての事だ。

妲妃　此柳條はかねてより、西伯侯と密通なし、深き仲ゆゑ成敗を、止めましたでござりませう。

〽思ひがけなき一言に。

西伯　柳條殿と密通せしとは、思ひもよらぬ御疑ひ。

柳條　何を證據に、又もや、左樣な言ひかけをなされまするぞ。

西伯　西伯毛頭覺えはござらぬ。

妲妃　覺えないと言はれても、柳條が腹に宿せしは、杜元銑の胤ならず、汝が胤といふ事は我占方で知つてゐるぞ。

西伯　それは如何なる奇術なるか、密會もせぬ西伯が胤を宿さう謂れなし、證據があつての事なるか。

妲妃　汝が胤といふ證據は、懷姙なせしは男子にて、西伯といふ文字に似たる、然もその身に黑き痣あり、疑はしくば柳條が、腹を裂いて改め見よ。

西伯　さあそれは。

妲妃　かゝる慥な證據があれば、覺えないとは言はれまい。

西伯　證據と言ふは胎内へ、宿せし胤とあるからは、見る事ならぬその證據。

〽是も妲妃が惡計と知れてはをれど紂王が、國家にかへぬ愛妾ゆゑ、手出しもならず控ふれば、

ト西伯ちつと思入。

紂王　妲妃が詞に服せずして、密通なせし覺えがないと、陳ずるならば西伯を、拷問なして白狀させい。

費師　はツ。

〽はツと答へて立ちかゝれば、

妲妃　皆の者、待ちや。

費仲　なぜお止め、

費師　なされまする。
妲妃　拷問なすより西伯に申し附ける役目がある。密通なせし柳條が、腹に宿せしその小兒に、西伯といふ文字に似たる、痣ある事迄指したれど、此妲妃を疑ふ故、慥な證據を見せたらば、よもや知らぬとは申すまい。又俗說にも言ふ如く、胞衣にも必ず證あらん。不義の相手の西伯が、契りを結びし柳條の、腹を裂かすが打つよりも、遙かにまさりし拷問なるぞ。
紂王　流石は妲妃よき工夫、西伯汝に腹裂きの、役目を申しつくるぞよ。
ト西伯に命令する。
西伯　はッ。
ト當惑の思入。
柳眉　それでは、最早、
三人　母様を。
立掛るな、
費仲　邪魔な子供は、縛つておけ。
四人　はッ。
ト左右の立木へ縛る。
西伯　すりや、どうあつても柳條殿の、

妲妃　腹を裂かすが拷問替り
紂王　それ、俎板へくゝり附けい。
四人　はッ。
〽はッとばかりに荒繩にて、泣き入る柳條が兩手をとり、見るもいふせき俎板へ、八重十文字に縛るを見て、
ト費仲、師絹、下官四人にて柳條を俎板の上へ寢かし、荒繩にて俎板へしばり附ける。香讓これを見て、
香讓　かねて話に聞きたれど、側にをらねば知らざりしが、その身も女でありながら、懷姙なせし腹を裂くとは、如何なる天魔の所爲なるか、かゝる惡逆募らせ給はゞ、つひには亂の基とならん、これといふのも妲妃ゆゑ。
紂王　やあ、我に對して無禮の一言、假令妲妃が姉にもせよ、我には臣下の蘇護が娘、目通り叶はぬ、下りをらう。
トきつと言ふ。
香讓　妹憎しと思ふのあまり、君へ對して無禮の過言、恐れ入つてござりまする。
費仲　君の御不興蒙むる上は、
師絹　疾く〳〵此場を、
兩人　立ちませい。

香讓　退散いたすでござりまする。
〽是非も涙に御前を立ち、お次へこそは入りにける。
ト香讓しを／＼と奥へはひる。
紂王　やあ西伯には不義の證據、柳條が腹を裂け。
西伯　君の御諚に候へども、此儀は御免下さりませ。
妲妃　辭退いたすは柳條と、不義せしゆゑに命を惜しむか。
西伯　全くもつて。
妲妃　さなくば裂くか。
西伯　さあ、それは。
妲妃　よもや違背はなるまいが。
トきつと言ふ。
〽有無を言はさぬ主命に。
西伯　委細畏つてござりまする。
柳眉　すりや西伯さまには、
三人　母様を。
西伯　西百餘州の主人たる君の御諚は背かれぬ。
柳條　人でなしの手にかゝり、死するとも是非なければ、
忠義に厚き西伯殿の手にかゝるは、いまはの仕合せ。
柳眉　とは言へ無實の罪ゆゑに、
玉瑞　お命捨てる、
三人　母上さま。
柳條　これも定まる身の厄難、
西伯　覺悟がよくば、
柳條　早う殺して下さりませ。
〽死ぬるを急ぐ柳條が、嘆きを餘所に紂王が、
紂王　これを肴に一獻酌まん。
妲妃　どれ、お酌いたしませう。
ト紂王コツプをとる。妲妃瓶子をとり、酌をする。
費仲　猶豫いたさず、
兩人　疾く／＼裂かぬか。
西伯　是非に及ばぬ。
〽鋭き刃抜きはなし、既にかうよと見えたる所へ、宙をかけッて馳せ來る雷震、
ト西伯劍を抜き、柳條の後ろへ廻り、向うへ思入、此時ばた／＼、唐樂の打ちおろしになり、花道より西伯侯の臣雷震、筒袖の唐裝束、斧をかい込み走り出來り、直ぐ舞臺下手へ來り、
雷震　御主君、これにござりましたか。
西伯　おゝ雷震か、待ちかねたり。して雲中子へ頼みたる、

邪正を照す照魔鏡は。
雷震　持参いたしてござります。
妲妃　えゝ。
　ト妲妃おどろく。
雷震　いざ、お受取り下さりませ。
〽さし出す御鏡押し頂き、
　ト雷震錦の袋入の鏡を出す、西伯受取り頂きて、
西伯　ゑゝ忝い。殷の都に妖気たつは、まさしく年経る妖狐の障碍、此の照魔鏡にて照らし見よと、雲中子より授かる御鏡。
〽開くに妲妃はきつ相かへ、
妲妃　むゝ、すりやそれが照魔鏡とな。
西伯　いかにも、只今御覧に入れん。
〽袋の紐をとく／＼と、取出す鏡の光り鋭く、本体顕はす九尾の狐。
　ト西伯袋の中より誂への鏡を出す、妲妃袖にて顔を隠す、西伯鏡をさし付ける。薄ドロ／＼にて妲妃半面の狐になる。
扨こそ鏡に、うつるはまさしく、
雷震　怪しき姿。

妲妃　あれえ。
〽顔を覆うて打伏せば、
　ト妲妃袖にて顔をかくし、うつ伏せになる、腰元皆々側へ寄り、
腰四　こりや妲妃さまには、
妲妃　俄の急病。
雷震　それぞ正しく。
　雷震斧を持ち上げ、段へ踏みかけるを、紂王立身にて、
紂王　無礼者めが。
　トきつと言ふ。
雷震　はッ。
　ト雷震控へる。
〽妲妃が不興に紂王は、帳台深く、
　ト紂王妲妃の手を取りきつと見得、妲妃は袖のかげより窺ひゐる。腰元左右に居並び、此見得、唐楽を冠せ屋体へ緞帳を下し、此人数を隠す、是と一緒に費仲官、師絹官四人上手へ這入る。
西伯　それ、羅目を解け。
雷震　はッ。

ト柳條柳眉玉瑞翠子の繩をきり、介抱なす。上手より以前の香讓出て、

香讓　おゝ、柳條殿には無事なりしか。

柳條　危い命を助かりしも、西伯殿の皆お蔭。

柳眉　御禮は詞に盡くされず、

三人　有難うござりまする。

西伯　雲子中より贈りたる、照魔鏡が手にあれば、妖狐を見出すは瞬く内、必ずお案じなさるゝな。跡氣遣はずと各には、一先づ爰を立退かれよ。

香讓　言ふにや及ぶ、柳條殿の子供も共に、我父の屋敷へ、これより同道なさん。

西伯　倭人多き館の内、かう言ふうちも氣遣はし。

香讓　片時も早く父の屋敷へ、

柳條　お連れなされて下さりませ。

西伯　我はこれより雷震もろとも、

雷震　奥へふん込み妲妃が本體。

西伯　見出すはこれなる照魔鏡。

柳條　左樣なれば、

皆々　西伯侯。

西伯　かた〳〵。

〽さらば〳〵と、東西へ立別れてぞ、

ト三重唐樂になり、西伯雷震上手へはひる、柳條、柳眉、玉瑞、翠子、花道へはひる。時の鐘きびしくドロドロになり、是を打ち上げ、大薩摩模樣の淨瑠璃になり、

〽實にや暴風雷震は、計り知られぬ天變にて、俄に一天かきくもり、目ざすも知れぬ闇夜となり、虚空に響く震動にいと物凄き奥殿より、立出る妲妃は相形變り、眦上り口は裂け、妖狐の姿顯はして、あたりを照す身の光り、

ト此以前雨窓をおろし舞臺を暗くなし、ドロ〳〵誂へ凄き鳴物になり、よき程に緞帳を捲上げる。内に以前の妲妃凄き顏の拵へにて立身、電氣にて妲妃の後ろより光明さし、

妲妃　あら殘念や、口惜しや。

トきつと見得、これにて雨窓を程よく明ける、

〽我天竺より此土へ渡り、冀國侯蘇護が娘、壽羊が體へ乘遷り、殷の紂王が妾となり、

〽淫酒を進めて政事を亂し、あらゆる人民失ひて魔界になさんと思ひしも、

終南山の道士たる雲中子が我を悟り、邪正を照す照魔鏡を、西伯侯へ贈りしゆゑ、

〽最前鏡にうつし見て、我正體を知つたればゝ、最早唐土もけふ限り、

〽これより日本へ押渡り、女色をもつて人を害し、やがて魔界になしくれん。

〽はつたと睨みし有樣は、身の毛もよだつばかりなり。

ト妲妃きつと思入、此時下官六人、筒袖の唐裝束、鉾を持ち上下より出て、妲妃を取り卷き、

下一　さてこそ怪しき、妲妃が振舞、

下二　冀國侯が姫と言ひしは、

下三　天竺國より渡りたる、

下四　年經る妖狐でありしよな。

下五　斯く八方を取圍めば、

下六　最早脫れぬ。

六人　覺悟なせ。

妲妃　やあ小ざかしき覺悟呼はり、雲中子が照魔鏡に姿を顯はす我こそは、數千年の劫を經て、通力自在に飛行なす、金毛九尾白面の妖狐、汝等如きの手に合はんぞ。

下一　何を小癪な。

下二　それ、討ちとれ。

トドン／＼のやうな唐樂の鳴物になり、六人鉾で突いてかゝる。ちよつと立上り、きつと見得。これより雷序の入りし鳴物になり、妲妃狐の狂ひのやうな、誂への立廻りよろしくあつて、上手より以前の西伯鏡を持ち、下官四人附添ひ、下手へ雷震斧を持ち、幕明きの忠臣直言、眞正、弓矢を持出で妲妃を取卷き、

西伯　やあ／＼、金毛九尾白面の狐妖、雲中子より贈られし照魔鏡の奇特にて、汝が俗性知れたる上は、

雷震　此の唐土を立去るか。

直言　さなくば我々兩人が、

眞正　蟇目にかけて射落さん。

西伯　疾く／＼此土を、

皆々　立ち去るべし。

妲妃　言ふにや及ぶ、これよりして、日本國へ飛去らん。

トドロ／＼誂へ、はげしき鳴物になり、ちよつと立廻り、此内狐の半面をくはへ、鬘へ耳出で、くるくると廻る、これにて皆々毒氣に恐れる思入、西伯鏡をさし附け、大ドロ　はげしき鳴物にて、妲妃斜に上手へ飛去る仕掛、皆々引張りの見得、右の鳴物にて、

ひやうし　幕

大川端水月樓の場
日吉町小澤內の場

四　幕　目

役名——水月のお粂、金井傳之助、深見丹次郞、水月の雇人巳之吉、同喜介、箱屋千八、人力車夫三次。小澤おたえ、藝者政吉、水月の雇婆お虎、小澤の下女おこま、水月の女中おせん、同おはま、丹次郞女房おその等。

（大川端水月樓の場）——本舞臺一面の平舞臺、跡へ下げて上手腰羽目のある土藏の横手を見せ、つゞいて三尺の板塀、此つゞき正面九尺屋根に常燈のランプのある風雅の門、軒口に御待合水月と記せし額をかけ、此下手一面の板塀、內より樹木の梢、二階家の張出を見せ總て大川端水月樓表掛りの體、爰にお虎雜巾にて門口を拭いて居る。水月の雇人喜介、紺半纏若い者のこしらへ、番手桶を持ち水を撒いてゐる。女中おせんおはま立掛りゐる。此見得、川蒸汽の笛、端唄にて幕明く。

せん　今日は日曜で、柴又へ大層人が出ると見え、通運の川蒸汽は、大入芝居を見たやうだ。

はま　そのくせ庚申ではないさうだが、五月といふので、たゞ申でも人が餘計に出ると見える。

お虎　お前方は二人して、朝ッぱらから何處へお出でだか、今親方さんがお尋ねなすつた。揃つて出るのはよくないよ。

せん　今日のお客樣は、午からのお約束故、ちよつとお詣りに行つて來ました。

はま　それも自身の事ではない、早く姉さんがお歸りなさるやう、淸正公樣へお願ひ申したのさ。

お虎　さういふ事ならよいけれど、ふりのお客がお出での時、お前方が內にゐないと、わたしがどんなに困るかしれない。

千八　內へお出でのお客樣は、みんな姉さんのお馴染だが昨夜お寄り合ひでお出でなすつた、傳馬町の御連中は、御酒も隨分お上りなさるが、揃ひも揃つて機嫌上戸で、惡ふざけなどは少しもなく、あゝいふお座敷だと藝者衆も、どんなに勤めいゝか知れやあしない。

せん　それに引替へ昨日の夕方、三人連れで來たお客は、官員ぶつてゐたけれど、日蔭町の古着屋で、仕入れの服でも貰つたと見え、だぶ〳〵とした洋服ごしらへ。

はま　わたし達さへ聞覺えてゐる、英語で話しをするはよいが、とんちんかんでをかしかつたは、くはせものに違ひはない。

お虎　お粂が內にゐなければ、茶代を置くのは不贊成だと、茶を呑倒して歸つたのは、どうせ碌なお客では　あるまい。

せん　あんなお客はこつちでも。

はま　をとゝひ來いと言ひたい樣だ。

ト爰へ跡の門の內より、巳之吉着流し駒下駄にて出來り。

巳之　こうお前達は寄合つて、何を愚痴をこぼして居るのだ、水を撒いたら庭へ行つて、鉢前でも洗ひなせえ。

お虎　そりやあお前の言ふ迄もない、上り口から外廻り、殘らずわたしが一人で拭いた。

喜介　おいらは庭の掃除をして、坪を洗つて水を打ち、お客の來るのを待つばかりだ。

せん　わたし達も掃除をしまひ清正公樣へ參つて來て、是から着換るばかりだが、お約束のお客ばかり、隨分忙しいと思つてゐるが。

はま　今日はそれに日曜だから、ふりのお客があつた日には、肝腎のねえさんがおいでゝないからわたし達が、二人前働かにやならない。

巳之　何にしろ本尊樣が、四日も五日も家を明けては、お馴染のお客樣の受けの惡くなるのはあたり前、まだしもおれが頑張つて家にゐるから、どうやらかうやら、胡麻化してはゐるけれど、おとつさんが帳場に來て、坐つてゐても仕馴れぬ家業、勘定位は出來るけれど、客あしらひは出來やあしねえ。

喜介　此四五日は巳之どんも、一倍心配をすると見えて、いとゞ窪んだお前の眼が、又奧の方へ窪んだやうだ。

巳之　めづらしくもねえ止してくれ、おれの此眼が窪んでゐるのは、性來の育ちがいゝから、眼迄が自然に奧床しいのだ。

お虎　ほんに巳之どんは子供の時に、坊さんになる所であつたと、さる人から聞きました。

巳之　誰がそんな事を言つた。

お虎　お前の伯母さんが此間來て、その話しをして歸りま

した、

巳之　えゝ言はねえでもいゝ事を、伯母のお喋りにも困つたものだ。

お虎　巳之どんが坊主になつたら、どんな顔になるだらう。

巳之　先づおれが坊主になれば、尾上菊五郎の清玄は、あんなであらうと思ふやうだ。

せん　成程庵室で殺されて、お化になつた所だけなら、

はま　目が窪んでゐて凄いから、音羽屋よりも怖からう。

巳之　えゝやかましい、わるいたいこだ。

お虎　こつちは清水の水奴で、もう一と手桶汲んで來よう。

せん　どうせお姫さまといかないから、

はま　わたし達は腰元役、

お虎　いざ先づ奥へ、いらせられませう。

巳之　どうとも勝手にするがいゝ。

ト浪の音合方きつぱりとなり、三人は後ろの門の内へはいる。跡に巳之吉思入あつて、

何にしろお粂さんが歸らなければ、巳之もうめえ祝儀にありつけず、こんなつまらぬ事はねえが、どうかして内を外にさせねえ工夫はねえか知らん。

ト腕組をして考へゐる。爰へ下手より金井傳之助老けたる鬘羽織着流し、駒下駄にて濡手拭を持ち、湯歸りの心にて出來り、巳之吉を見て、

傳之　巳之吉、何を考へてゐるのだ。

ト巳之吉びつくりして、

巳之　親方お歸りなさいまし、髪結床が込んでをりましたか、大分お手間がとれました。

傳之　別に込んでもゐなかつたが、髭を剃つたそのついでに、湯へ一風呂這入つて來た。

巳之　それはよろしうござりました、丁度今ごろは湯が綺麗で、中がすいてをりますから、同じ湯錢なら午前にはひる事でござります。

傳之　男の方はすいてゐたが、女の方が込んでゐたので、汗を流しに行つた湯で、よけいな汗をかいて來た。

巳之　女湯が込んでゐたので、餘計な汗をおかきなすつたとは、どういふわけでござります。

傳之　誰だか顔は知れなんだが、羽目を隔てた女湯で、しきりと話すお粂の噂、あの水月のお粂位、慾を知らぬものはない、あゝいふ立派な待合迄はじめる樣になつたのに、内に少しも尻が据わらず、諸々方々と泊り歩き、氣

儘遊びも程がある。それといふのも丹次郎といふ色に血道をあげて居ると蔭の噂を聞く辛さ、幸ひ誰も男湯に懇意な者がゐなんだから、面皮をかゝずにしまつたが、番臺にゐた湯屋の女房に、顔をあはすも面目なく、汗の出たまゝ着物を引かけ、湯屋を飛出し歸つて來たが、汗を流しに行つた湯で、餘計な汗を掻いて來た。

巳之　それはとんだおさしあひで嘸お弱りなすつたらう。然し誰だか知らないが、世間で言ふのがみんな尤も、その蔭言を聞くにつけても、もうゆるがせにはなりませんから、今度歸つてお出でなすつたら、そこは親御の御威光で、しんみり御異見をなさいまし。

傳之　言ふ迄もなく親甲斐に、とつくり異見をする氣だが、どこを遊んで歩いてゐるか、家を外とは呆れたやつだ。

巳之　なんでも惡い油蟲を、綺麗に拂つてしまひますれば、お糸さんのお心も、自然に直るでございませう。

傳之　どうか金井の名目を、よごさぬやうにしたいものだ。

巳之　まあ、なんにしろお家へはひり、歸りをお待ちなさいまし。

傳之　口の酸くなる異見でも、あれの性根は直るまいわえ。

ト浪の音合方にて、金井傳之助、巳之吉うしろの門の内へはひる。跡下座の端唄になり、

端唄〽むつとして歸れば門の青柳に、曇りし胸の春雨も、

ト此内花道より水月のお糸、好みの拵にて人力車に乘り、是を三次の車夫、筒ッぽ股引装にて引いて出て舞臺へ來る。

お糸　そこでよいからおろしておくれ。

三次　門の内迄引込みませう。

お糸　いえ／＼、それには及ばない。

ト車よりおりる。

三次　左様なら私は、これで歸つてもようございますか。

お糸　ちよつと待つておくれ。

ト帯の間より小紙幣を出し、

少しだが、水でもお呑み。

三次　是は毎度有難うございます。

ト頂いて懐へ入れ、

なんぞお言づけはございませんか。

お糸　別に言づけはないけれど、師匠によろしく言つてお

くれ。

三次　へい〳〵、左様申します。それでは姉さん、御機嫌よう。

お粂　大きに御苦勞よ。

三次　私も有難うござります。

端唄〽又晴れて行く月の影。

ト車を引いて花道へはひる。お粂うしろの門の内を窺ひ思入あつて、

お粂　お午前から隣りの内で、端唄をさらつてゐるやうだが、又晴れて行く月の影と、晴れて出たならいゝけれど、默つて出て今日で五日、つい面白さに遊び過ぎ、自分の内でも閾が高く、素目では内へ這入れぬから、一と口やつて歸つて來たが奉公人の手前と違ひ、親の前だけ極りが悪い、こんな事なら暮方の、火灯し頃がよかつたに、晝日中とはちつと恐れる。

端唄〽ならばおぼろにしてほしや。

ト此模様知せなしに道具廻る。

(水月帳場の場)――本舞臺五間常足の二重上手畫心に座敷口の心にて、葭戸を五枚立てきり、正面下の方一間、中仕切のある鏡戸の戸棚、此前に帳場格子、つゞいて下の方大阪格子の出這入り、ずつと下手畫心に玄關へ行く心にて、腰高の障子の出這入り、總て水月帳場の體、上手帳場の内に、以前の金井傳之助住ひ、下手に雇人巳之吉通ひ帳を見てゐる、お虎おせんおはま住ひ、合方にて道具とまる。

傳之　昨日なども半どんで、傳馬町の御連中を始め、五組あつたお客様が、お粂はどうした〳〵とお尋ねなさる言譯に、遊び歩いてをりますと、まさか言はれもしないから、餘計な嘘を言はねばならぬ。

巳之　姉さんさへおいでなされば、ます〳〵内は繁昌するに、客あしらひはそつちのけで、浮かれておいでなさるから、圓介茶代を置く客も、半分に減じますから、これでは商法になりませぬ。

傳之　さるお客様のお勸めに待合茶屋をはじめたが、その當人がするのがいやで、内に居ずば仕方がない。おれも仕馴れぬ事だから、あれが心の定まる迄、しばらく見世へ札を出し、休業するより外はない。

巳之　なる程あなたのおつしやる通り、札でも出して休業を、なさいましたら姉さんも、目が覺めますでござりま

せう。
お虎　そのお話しを聞きますと、私どもゝいつ何時、お暇が出るかしれぬ身體。
せん　心細いやうでござりますが、姉さんがおいでなさいませんでも、
はま　かうして繁昌いたしますのに、惜しい事でござりますが。
傳次　いや假令お粂のことにつき、どんな事があらうとも、貴樣達に暇は出さぬ。それは案じずにゐるがよい。
巳之　いつそ妾らは船着きゆゑ、海水浴の温泉を、お始めなさるときつといゝ。
せん　灘湯は當時の流行物。
はま　かならず繁昌いたしませう。
お虎　然し巳之どんが番頭さんでは、女湯ばかり見てゐませう。
傳之　えゝ、混ッかへさずと、默つてゐなえ。
ト此時下手の障子をあけ、以前のお粂出る。下女二人下手を見て、
せん　おや姉さんには、いつの間に、
はま　お歸りなさいましたか。
お粂　やう／＼のことで今歸つた。水を一口呑ませておくれ。
お虎　はい／＼、畏りました。
ト水さし藥罐の水を、茶碗へついで出す。お粂これを呑む。
傳之　もう今にお約束のお客樣がお出でだから、奥へ敷物を敷いておいてくれ。
せん　直に敷いて、
せは　おきませう。
トおせんおはまは奥へはひる。お虎そこらを片附けゐる。お粂酒に醉ひし思入にて下手へ住ふ。傳之助巳之吉は顔を見合せ、思入あつて巳之吉、お粂の傍へ來たり、
巳之　これは姉さんお歸んなさい、見れば大分御機嫌でお歸りの樣子だが、今日で五日のその間、出先の穴が知れませんので、福田屋は言ふに及ばず、日吉町の師匠の内や木挽町の長谷川へ、幾度人を出しましたか、捜しにやつたか知れませんが、どこにおいでゝござりました。
お粂　なんだね巳之どん、仰山らしい、二日や三日居ないとて、そんなに騒がずともいゝ事を、なんぼ私が醉ひど

れでも、五つ六つの子供の様に、まさか迷兒にはなりやあしない。

巳之　いや二日や三日とお言ひなさるが、今日で五日になりますから、人を出さずにゐられません。

お粂　五日にならうが十日にならうが、家を忘れずにかうやつて、歸つて來ればよいではないか。

　トこれにて傳之助前へ出て、

傳之　いやいゝ事は少しもない、おれが言ひつけて人を出したのだ。

お粂　それはおとつさん御苦勞樣、出先でお客に引留められ、大きに歸りが遲くなりました。

　ト此内おはま水呑へ水を入れて持つて出る。お粂これを呑みゐる、合方きつぱりとなり、

傳之　その引留めた客といふのも、大概それとわかつてゐるが、どこにゐようと郵便の葉書を一枚出しさへすれば、居處の知れる便利な世界、それを今日迄沙汰なしに、五日といふもの家を明け、今頃のつそり歸つて來て、それでいゝでは濟まされぬ。表向きにて言ふ時は、自儘に家を飛出して、三日居處が知れなければ、逃亡屆を出すのが法だ。

お粂　おとつさん靜かになさい、それは堅氣の家業なら、娘が五日も內を明けては、屆をせずばなりますまいが、かういふ家業をしてゐれば、お客樣に連れられて先から先まで引留められ、餘儀なく泊つて歸ることもお客家業はいはゞありうち、何もそんなに喧しく、おつしやる事はありません。

傳之　いや喧しく言はねばならぬ。どこへ今日迄行つてゐたか、有體に言つてしまへ。

お粂　陽氣の加減か筋が引つり、レウマチにでもなつてはならぬと、根岸の磯部の温泉へ、身の養生に行きましたら、知つたお客にお目にかゝり、湯治をするなら泊りがけに今度初めた王子の海老屋の温泉へ行き、保養をしろと御親切におつしやるのを、振切つても歸れませんから、直にその晩歸る氣で、王子へ湯治に行きましたが、體に相當したかして思ひの外に利きますから、つい一と晩二た晩と、長逗留に日を暮し、大きに遲くなりました。

傳之　それはかういふ家業をして、客に誘はれ行つたとあれば、一と晩位の事なれば家業づくとも思はうが、五日と家を明けられて、それでいゝわと捨てておいては、後日の爲めにならぬから、嚴しく異見をした上で、向後他出

をせぬ樣に、きつと法をば立てねばならぬ。

お粂　おやまあ、大層嚴しい御布告、門から外へは出さぬといふ昔は掟の女郎でも、芝居の外は遊山にも出られるとやら聞きましたが、何んで他出が出來ませんえ。

傳之　手前は心が浮いてゐれば、その理窟はわかるまいが道理を解いて聞かせるから、くだ／＼しいが聞いておけ、

ト合方きつぱりとなり、

仔細あつて幼い時養女にやつて年頃より、浮いた家業をさせた娘に、道理を解くのも無理なれど、何家業でも開業して、店に仕ようといふ迄は、なか／＼容易の事ではない。それを是迄おなじみの、お客樣が御贔屓下さるから、よいわと言つて家をあけ、遊び歩いて我が家の衰微になるを思はぬとは、如何に道理の分らねえ女子供と言ひながら、よい年をして此親が附いてゐるだけ世間へ濟まぬ。此せち辛い世の中を、よい氣になつて遊び歩き、それでは手前は濟むまいがた。

ト思入にて言ふ。此内お粂うつむきゐて顏をあげ、

お粂　さあ、それだから初めから、わたしはかういふ氣儘ものゆゑ、勝手に外へ出られない、待合茶屋になることは氣が乘らないと言ひましたを、お前が無理に開業させ水月と云ふ待合を開業したのぢやありませんか、わたしや初手から面倒な、こんな家業はしたくない、それで悪くばおとつさん、元の通りに藝者に出し、稼がせておいておくんなさい。

傳之　いや手前の樣にさういふと、おれ一人が醉狂で、始めた樣に聞えるが、是もみんな手前のためだ。これよく考へて見るがいゝ、今年手前は幾歳になる。人間僅か五十年、最早や峠の二十日だ、下り坂にならぬうちと、思ふ所へあるお人が、大川端によい所があると敎へてくだすつたから、座敷を引かせ赤飯を、配つて目出度く開業させ、待合茶屋を勸めたのも、手前へ氣儘をさせまいため、末を案じる親心、有難いとは思はぬか。

お粂　それ程思つて下さるなら、わたしに帳場の締めくゝりを、任せてさせてもよからうに、お前が帳場の括りをして、進退をしてお出だから、わたしはほんのお前立ち、なんぼ藝者をした果でも、猫の尻尾も同樣に、あつてもなくても間に合ふから、出先でお客に誘はれゝば、泊り歩きもしますのさ。

傳之　それほど手前が此帳場を、任されぬのを不平に思

ひ、泊り歩きをするといふなら、今からでも任せてやる、浮いた家業をした擧句に、帳をつかんで苦勞をするは、嘸困らうと思ふから、おれがわざ／＼出張つて來て、帳を引請けてやつたのだが、さう思はれてはおれが合はぬ。任せてやるからやつて見ろ。

お粂　今更わたしに任せられても、面白くもなんともない。

傳之　假令面白くなからうが、やりてえといふからやるがいゝ。

お粂　初手からなら知らぬこと、お前がやつた其跡を、誰が引請けるものか。

傳之　いや／＼、何でもやつて見ろ。

お粂　しつこい事をお言ひでない。

傳之　うぬどう言へばかう言ふと、氣隨もたいがいに言つておけ。

お粂　氣隨は私の生れ附き、藝者稼ぎをさせながら、そんなに親風をお吹かせなさるな。

傳之　それだから廢業させ、樂にさせたがわからぬか。

お粂　わたしや却つて面倒くさい、こんな家業は氣に入らない。

傳之　氣に入らなければ始めから、なんで厭だと言はぬのだ。

お粂　親の威光で押しつけられ、いや／＼返事をしましたのさ。

傳之　うぬ、そんな氣まづい事をぬかして。

お粂　はい、どうせ氣まづうございますよ。

傳之　えゝ、どうしたら腹が癒ようぞ。

お粂　所詮手出しは出來ないから、打つならたんと打つがいゝ。

傳之　おゝ打たねえでどうするものか。

ト立上る、お粂體を差付ける、巳之吉見兼ねて此中へ割つてはひり、

巳之　まあ／＼お靜になさいまし、お腹も立たうが親方さん、まづ／＼下においで下さい。

ト傳之助をよろしくなだめ、お粂に向ひ、

もし姉さん、どうしたものでございます。この巳之吉も深い御緣で家箱となり、日吉町から引きつゞいての番頭役で、一方ならぬ御恩になり、かうしてお内に居ますから、大概ならお前さんの、肩を持たねばなりませんが、けふは重々理窟が惡い。四日も五日も家を明けそれで歸

つておいでなすつて、おとつさんへ口返答はよくないことでござります。

ト是にてお条むつとして、

お条　なんでわたしが悪いものか、さう言ふお前は吉原の消炭同様どつちへでも、直に燃えつくこつぱのくせに、生利な事を言ひなさんな。

巳之　いえ、言はずにはゐられません、今親方のおつしやる通り、おなじみ多いお客様を、目的で始めた待合も、お前さんが居ない日には、おいでなすつたお客様が必ずお聞きなさいませう、いゝ加減に誤魔化しますが、その言譯に困ります。第一世間へ聞えも悪く、腕を鳴らしたお前さんの恥ぢやございませんか。胡麻もなんにも摺りませんが、柳橋でも新橋でも、人に勝れた流行ッ子と、そねまれる程口がかゝり、料理茶屋は言ふに及ばず、爰の待合あすこの船宿、今日は遠出のお約束と、三日も前から貰れてゐて、二時より早く一と晩でも、来たことのないお前さん、お蔭で箱屋の私もあぶくの様な祝儀を貰ひ、長らくお世話になりましたが、切上げ時が肝腎で、藝者家業をいつがいつ迄させたくないと廢業を、目出度くおさせなすつたは、末を案じる親御の了簡、不足を言つては濟みませんから、帳場を引請けなさりたくば、今からでも引請けて、是から家業いつさんまいに、一と骨折つて御覧なさい。毎日お客が立込んで、座敷に困る様になつたら、世間の人にも褒められて、親御も安心なさいませう。まあ兎も角も奥へ行つて、酔をお醒しなさいまし。

お条　出過ぎた事をお言ひでない。お前がべら〳〵喋べらないでも、その位な事は知つてゐるが、初手から厭なこの家業、今更帳場を譲られても、面白いとは思はぬから、骨を折る氣はありやあしない。

お虎　もし姉さん、わたくしなどが場知らずに、口を出す所ではござりませぬが、こりやあ巳之どんの言ふ通り、お前さんがお留守でさへ、お客の絶間のないお家、所を家にいらしつてお客あしらひをなさいますれば、鬼に金棒大丈夫、おとつさんにお氣を揉ませぬやうに、お家においでなさりませ。

お条　えゝお前までが同じ様に、餘計な事をお言ひでない、悪いを承知でする事だよ。

お虎　悪いを承知とおつしやれば、致し方がござりませぬ。

傳之　それでは手前は此見世が、行き立たねえでも構はぬとか。

ト傳之助思入あつて、

お粂　お前が好んで出した見世、廢業仕ようがつぶれようが、わたしが知つた事ではない。どうぞ勝手にして下さい。

傳之　おゝよく言つた、それでいゝ。さういふ曲つた根性なら、手前を當にしねえから、何處へなりとも勝手に出て行け、もう親子とは思はねえ。

お粂　そのお許しが出ましたら、勝手に遊びに出ますから、跡はどうともして下さい。はい、左様なら。

ト立上るを留めて、

巳之　もしそれがよくない事だ。よもや正氣でそんな氣に、おなりなさりもしますまい。御酒の上での買言葉、さめての上の御分別と、奥で一と寐入りなさいまし。

お粂　何かと言ふと、酒々とわたしや正氣だ酒などを、呑んででれ／＼ちやあゐやあしないよ。

巳之　おでれなさらざあ猶の事、親に逆らつちやあ濟みますまい。

お粂　濟むもすまぬも此河岸で、水道の水を賣りやあしまいし、餘計な世話をおやきでない。

傳之　巳之吉、そんなあくたれは、留めずにさつさと出してやれ。

巳之　いえ／＼、外へは出されませぬ。

お虎　お内においでなさりませ。

お粂　わたしの足で、勝手に出るのだ。

ト引留める巳之吉お虎を突き倒し、下手の障子を明けて出る。おせんおはま奥より駈け出て、

せん　まあ／＼、姉さん、お待ちなさい。

はま　こりや正氣とは思はれません。

ト追かけて下手へはひる。巳之吉起上つて、

巳之　どうして／＼醉はぬどころか、餘つぽどきたつてゐるやうだ。

ト追つかけて行かうとするを止めて、

傳之　いや留めるにやあ及ばねえ、まあ／＼貴様は内にゐろ。

巳之　それでも留めずに置きましては。

傳之　それと言ふのも娘お粂を、氣儘育ちにしたが誤り、今更言つても仕方がない。

お虎　さうお諦めなさいますれば、御勘辨もなりませう

が、ひよつと途中に間違ひでも。

巳之　あの勢ひではないとも言はれぬ。こりや打捨てはおかれませぬ。

ト爰へ下手より下女二人歸り來て、

せん　いくらお留め申しましても、お聞きなされず振切つて、

はま　こんな家には居られないと、行つておしまひなさいました。

巳之　それぢやあ矢張り色男の、所へでも行きなすつたか、扨々困つたものだなあ。

傳之　あいつにかまけて仕掛けた帳合もめちや／＼だ。婆やは勝手へ行つて、飯の支度をするがいゝ。

お虎　ほんに御膳のお支度が、大きに遲くなりました。

せん　どれ、わたしらも奧へ行つて、

はま　お膳立でも致しませう。

ト兩人奧へはひる。傳之助は元の帳場の所へ行く。巳之吉前へ出て

巳吉　氣違ひ水とは言ひながら、不斷に引きかへ一と口でも酒を上ると調子が狂ひ、心にもない不理窟を、お言ひなさるのが一つの癖、これが病の蟲ならば頑癇病のたむしでも、森下へ行き小田さんの療治をうければ根だやしだが、醫者にもなほらぬ惡い蟲。

傳之　その蟲よりもわるいのは、さつき湯屋でも話のあつた、丹次郎といふお粂の虫、尤も勝れた好男子に藝者殺しと言はれる程、女にすかれる男とやら、その丹次郎にあいつめが引かゝたのが身のあやまり、ついには親のおれに迄、面皮をかゝせる仕儀となり、家出をする氣になつたからは、折角初めた待合も、心がなければしてゐられぬ、休業すれば世間へ對し、外聞の惡いその上に、御贔屓にして下すつた、お客様へ對して濟まぬわけ。

巳之　いえこつちでは姉さんが、血道をあげておいでゞも、向うは名うての藝者あらし、梅暦から釣りを取る女殺しの丹次郎、然も其名はゆかりある烏森の米八どんと、いゝ仲だといふ噂、是を姉さんが知つたらば、今に苦情がおこりまして、段切れ話しになりませう。

傳之　今更言ふも愚痴なれど、丹次郎といふ魔がさゝずば。

巳之　いつそ是から丹次郎の居所を突留め手を切らせて、惡魔を拂ふと致しませう。

傳之　いやそれとても幼い時に、娘を人にやつたゆゑ、今

更恨むは愚の至りだ。

巳之　でも此儘にしますのはあんまり齒がゆうござります る。

傳之　はて、是とても因縁づくだ。

ト此時下手より、暮明きの若い者出來り、

若者　巳之どん、お前も知つてゐる丹次郎とか言ふ人が、門をはひつて庭口から、内を覗いてゐた樣子、私に聲を掛けられて、びつくりして逃げて行つたが、なんぞ譯でもありますか。

巳之　それではあの丹次郎が、今の話しを聞いてゐたか。

傳之　今の話しを丹次郎が、聞いてゐたとは知らなんだ。

若者　それでは譯がござりましたか。

傳之　さつきは湯屋で噂を聞き、

巳之　今度はこつちが聞かれるとは、

傳之　うつかり噂も、

出來ぬものだ。

ト帳箱へもたれるを、道具替りの知せ、

ト ちゞとこなし此模樣端唄の合方、川蒸汽の笛の音にて、居並びよろしくこの道具廻る。

(日吉町稽古所の場)——本舞臺一面の平舞臺、上の方奥の間の心にて折廻しの葭戸、正面上手三尺の延喜棚、此下二枚引の袋戸棚、續いて下の方腰張りの茶壁、なげしへ三味線掛、これに三味線を二挺程かけあり、此外正面一間の格子戸、三尺の戸袋、軒口に小澤松吉と記せし御神燈の提灯をつるしあり、柱に小澤たえといふ表札あり、門口の下手三尺の路地に續いて、下の方板塀、舞臺前門口と座敷のへだてへ竹格子の肘掛窓にて見切り、總て日吉町稽古所の體。上手に小澤おたえ、一中節の師匠好みのこしらへにて住ひ、下手に下女おこま住ひ、稽古唄にて道具廻る。

たえ　花月へ出てゐる政吉が、事によるとお客のお供で遠出になるかも、知れないから、ちよつと行つて千どんに樣子を聞いて來ておくれ。

こま　畏りましてござります。外になんぞそのついでに、お使ひはございませんか。

たえ　そのついでに車屋へ寄つて、お糸さんを送りの車は、まだ歸らぬかと聞いておくれ。

ト門口へ出て花道へかゝる。是と一緒に花道より丹次

郎女房おその、着流し駒下駄にて蝙蝠傘を持ち出來り花道にておこまと摺違ひ思入あつて、

その　もし／＼お女中さん、憚りながらお見かけ申して、物が承りたうございまする。

こま　はい、何御用でございまする。

その　此御近所で、一中節の御指南をなさいます、小澤おたえさんとおつしやるお方のお宅は、御存じございませんか。

こま　それは私がつとめてゐる、主人の家でございます。

その　それは／＼丁度よいお女中さんに、お目にかゝりました、さうしてどちらでございます。

こま　あれ、向うの軒下に御神燈が出てをります。格子戸の家でございまする。

その　ほんに早速分かりまして、有難うございまする。

こま　どなた樣かは存じませんが、只今直にわたくしも、內へ歸るでございますから、御ゆつくりお話しなさいまし。

その　よい所でお女中さんに、お目にかゝつてこちらの仕合せ、それではお早くお前さんも、お內へお歸りなさいまし。

こま　只今直に歸りまする。

ト　おこまは花道へはひる。おそのは門口へ來り、

その　ごめん下さいまし。

ト　格子を明ける。おたえこちらへ出來り、

たえ　どなた樣でございまする。

その　私は京橋の常磐町に居りまする、深見丹次郎と申すもの〻連合でございますが、小澤おたえさんとおつしやりまするお師匠さまは、あなたでございまするか。

たえ　はい、わたくしでございまするが、左樣ならお前樣が丹次郎さまの御家內さまで。

その　お初にお目にかゝりまするが、そのと申す不束者、どうぞ見知り下さりませ。

たえ　それは／＼、ようこそお尋ね、御覽の通り手狹ながら、まづ／＼お通り下さりませ。

その　左樣ならお師匠さま、眞平御免下さりませ。

ト　おその內へはひりよろしく住ふ。おたえもよろしく住ひ。双方辭儀をなし、

たえ　時分がらとは申しながら、此二三日はめつきりとお暑くなつてございまする。よくまあおいで下さいました。

その　毎度丹次郎が上りまして、御厄介になると申すこと、不器用ものでござりますれば、さぞ御迷惑でござりませうが、好きな道とてお稽古を、お願ひ申してお前さまに、御迷惑をかけまする。

たえ　いえ、手前でこそ丹次郎さまに、厚い御贔屓になりまして、有難い事でござりまする。

その　承はればこちらさまには、よいお娘御があるとの事、お樂しみでござりまする。

たえ　いえもう、まだねんねえで世話ばかり燒けてなりませんが、有難い事には忙しく、まだ一月から一日でも、座敷へ出ぬ日はござりませぬ。

その　それは何よりお仕合せな、それといふのもお仕込みがよろしいからでござりまする。

たえ　いえもう、とんと藝なしでお恥しうござりまする。

トおその懐中より切手の包みを出し、

その　これはお粗末でござりますが、ほんの參つたお土産の印を、お納めなされて下さりませ。

たえ　そのやうな御心配は、御無用になさいませんで、これでは恐れ入りますが、折角の思しめし故、頂戴いたすでござりまする。

ト手に取上げ頂いてゐる。花道より以前のおこま歸り來て、

こま　行つて參りましてござりますが、遠出のお供は御沙汰止みになりさうだと申しました。

たえ　それで千どんが遠出になり、差替を取りに來たんだか、さうして、車屋は歸つてきたかえ。

こま　ほかへ廻つたと見えまして、まだ歸らぬと申しました。

たえ　それではもしや常磐町へ、

その　えゝ。

たえ　いえなに、久しく丹次郎様がお稽古においでがござりませぬゆゑ、お鹽梅でも惡くはないかと、お案じ申してをりました。

その　それは／＼御親切に、有難うござりまする。

こま　左様なら丹次郎様の、御家内様でござりましたか。

その　只今は途中にて、大きにお世話になりました。

こま　知らぬ事とて私も、大きに失禮いたしました。

ト此内おたえあり合ふ急須へ茶をいれ、菓子を添へて出し、

たえ　お粗末ではござりますが、お一つお上り下さいま

し。

その　御用多でござりませうに、どうぞお構ひ下さりますな。

たえ　いえ、今日は朝の内に、稽古はみんなしまひまして、日曜休みでござりますから、御ゆるりお話し下さりませ。さうしてわざ〳〵わたくし方へ、お尋ねなすつて下さいましたは、何ぞ御用でもござりまするか。

ト是にておその思入あつて、

その　ちと内々でお師匠さんに、願ひたい事がござりまして上りましてござります。

たえ　何御用か存じませぬが、承はるでござりませう。

トおこまへこなしあつて、

これおこまや、裏口が物騒だから、お前臺所へ行つておいで。

こま　はい〳〵、畏りました。

トおこま下手の障子の内へはひる。おたえ思入あつて、

たえ　さあ御遠慮なものはをりませねば、どの樣なお頼みか、おつしやつて下さりませ。

ト是より替つた合方になり、

その　外の事でもござりませぬが、夫丹次郎が身の上につきましての事でござりまする。御存じの通り主人持ち、どこの店でも年毎に人べらしのあるその中にて、月給を上げ御主人がお使ひ下さる有難さ、御恩送りにつとめ向きを、大事にせねばなりませぬに、元此土地の藝者でありし久吉さんといふお子に、いつか夫がなじみになり、三日にあげず内を明け、夜泊り致すも奉公の勞れ休めと悋氣もせず、その儘にしておきましたが、果はつとめも怠り勝ち、噂さが高くなりますので、いつか主人の耳へ入り、上役衆が内々で御異見なすつて下されど、當座ばかりの糠に釘、きかぬ身持にあれではと、呆れておいでと申す事、此上大事な御主人の見限りうけて暇でも、出ました時は家内中、路頭に迷はにゃなりませぬ。願ひといふは爰の事、日頃お稽古願ひまするお師匠さんのお計らひで三日のものは二日になりますやうに、なんどりと夫へ御異見下さらば、すこしは身持も直らうかと、思ひあまりてお世話になる、お禮を兼ねて參りました。願ひといふは、お師匠さん、此一條でござりまする。

ト此内よきほどに下手より以前のお粂出て、下手の窓より内を覗き、思入あつて路地口へはひる。おたえも

思入あつて。

たえ　定めて左様でございませうと、實はとうからわたくしも心配でなりませぬゆゑ、折にふれては丹次郎様へ御異見も致しましたが、酸いも甘いも御存じの御苦勞人ゆゑその時は、成程お前が異見につき、是れから足を遠くしようと稽古にさへもお出でなさらず、御辛抱かと思ひますと、わたくし共へはお出ではなけれど、久吉さんとは人知れず毎夜のやうに逢つておいでと、聞く度毎にわたくしも、心を痛めてをりましたが、今にもこちらへ丹次郎様が、お出でになつたことなれば、及ばずながら私が、とつくり御異見申しまして、お勤め大事になさるやう、取り計らふでございませう。

その　早速の御承知を承つて、私も少しは安心いたしました。元より足らはぬわたくし故、決して悋氣は致しませぬが、連添ふ夫の不身持は、女房の仕向けが惡いゆゑと、姑に思はれまするのが、何より辛うございます。

たえ　御尤もなる御心配、又丹次郎さんばかりでなく、相手の妓の久吉さんにも、異見をいたして進引をつゝしむ様にさせませう。

その　必ず悋氣でやかましく申す譯ではございませねば、どうぞよろしくあなたから、御異見なされて下さりませ。

たえ　そのお頼みはわたくしが、身に引請けるでございますから、御用がなくば今日は、御ゆるりお話し下さりませ。

その　有難うはございますが、近所へ參るつもりにて、姑の前を出ました故、少しも早く私はお暇致すでございませう。

たえ　それでは車を申しつけ、御近所まで送らせますから、少々お待ち下さいまし。

その　いえその車は此先きの、角へ待たせておきましたれば、御心配には及びません。

たえ　車が待つてをりましたら、呼んでお茶でも呑ませませうに、氣の付かぬことをいたしました。

その　左様なれば自由ながら、これにてお暇いたしまする。

たえ　お急ぎゆゑに碌々に、お茶さへも上げませず、濟まないことでございまする。

その　いえわたくしこそ初めて上り、勝手ばかりを申しまして、濟まないことでございます。

たえ　又御無用になさいませんで、御丁寧なるお土産を。

その　いえもうほんの手土產ゆゑ、お禮で痛み入りまする。

たえ　いづれその內わたくしも、伺ひますでござりませう。

その　どうぞあちらへお出での節は、お立寄り下さりませ。

ト稽古唄きつぱりとなり、おそのよろしく花道へはひろ。跡を見送りおたえ件の包をあけて見て、

たえ　御酒の切手としてあれど、中はどうやら目錄包み、こんな心配をなさんすとは、てもお氣の毒なことではある。

こま　水月の姉さんが、お出でになつてをりまする。

たえ　おや、いつの間にお出でだか、わたしやちつとも知らなんだ。

こま　裏口からおはひりなすつて、樣子をお聞きでござりまする。

たえ　それはまあお氣の毒な、もうさし合ひのお人はないから、こつちへお出でと言つておくれ。

ト爰へ下手の障子を明けてお糸出て、

お糸　お師匠さん、又來ました。

たえ　お前のお出でを少しも知らず、嘸窮屈であつたらう。

お糸　すでにうつかりはひる所を、格子の外で樣子を聞き、丹さんのお上さんと、知つてわたしも極りが惡く、裏へ廻つて臺所で、樣子を聞いてゐましたが、事を分けてあのお賴み、わたしやお氣の毒でなりません。

たえ　それでは今の一部始終を、お前も聞いておいでゝあつたか。

ト合方きつぱりとなり、

お糸　悋氣はせねど女房の、仕向けが惡いと親御さんに思はれるのが何より辛いと、物やはらかにおかみさんが、お前に異見を賴むのを、聞いてわたしも濟まないことゝつく〴〵思ひ當りました。あの事わけを聞きましては、どんなに戀しい丹さんでも、遠ざからずばなりますまい。

たえ　さすがは男も及ばない氣性の勝つたお前故、義理の分つたその詞、誰しも悋氣は持前に、あちらがつよいおかみさんで、大事な亭主を寢取つたなぞと、大ちん〴〵を起されては、こちらも女の意氣張りで跡へ引かれぬことあれども、恨みを言はずおとなしく、あゝ泣きついて賴まれては留めるところも引きとめず、遠ざからずばなるまいぞえ。

お糸　それについてお師匠さん、わたしやちつと內々で御相談がありますから、內へ歸るを止めにして又こちらへ

來ましたよ。
たえ　どういふ事の相談か、わたしに遠慮は入らないから、まあ一口やりながら、ゆつくりと話してお聞かせ。
お糸　それもこつそりかけ離れた、所へ行つて話したいから、御迷惑でも池上の温泉へ行つて下さいな。
たえ　そんなに遠くへ行かないでも、いくらも近所でこつそりと、話す所があるではないか。
お糸　いえ近所ではゆつくりと、御相談が出來ないから、御迷惑でもあけぼのへ、附合つて下さいな。
たえ　それはお前のお賴みなら、どこ迄も附合ひますが、二時三十分の汽車へ乘るには、急いで支度をせねばならぬ。
お糸　わたしも一筆丹さんへ、手紙を書いて置きますから、その內支度をして下さい。
たえ　それではおこまやお糸さんへ、硯箱を貸してお上げな。
こま　はい／＼、畏りました。
たえ　どれ、ちよつと着かへて來ようか。
トおたえは上手の屋體へはひる。是より下座にて書送りの端唄になり、おこま後ろの延喜棚の下の戸棚より、引出し付きの硯箱を出し、お糸の前へおく、お糸引出しより卷紙を出し、文を書いてゐる。おこま臺所へはひり、手鹽皿へ糊の入りしを持つて出て、
こま　姉さん、糊はこゝへおきます。
お糸　はい、有難う、氣が利いてゐるねえ。
ト文を封じて居る。
こま　お師匠さんのお支度を、手傳つて參りますから、姉さん御免下さいまし。
トおこま上手へはひる、お糸文の上書をしてゐる。よき程に端唄變つて花道より、藝者政吉好みのこしらへにて出る。跡より千八箱屋のこしらへにて三味線の包みを持ち供をして出て、すぐに舞臺へ來り、先きへ驅拔け格子を明け、
千八　お歸りでござります。
ト是にてお糸政吉を見て、
お糸　政ちやんお歸りか、けふはどこのお座敷だえ。
政吉　おや姉さんお出でなさい。今日は華族樣の御連中が、紅葉館でお催しの御會議があるとやらで、花月での御集會に、口がかゝつて出てゐました。
お糸　それはまあよかつたねえ。華族樣の御連中では、定

めて今日のお取持は松民さんが一座であつたらう。
政吉　姉さん、おついでに、手の筋と言ひたいやうに當りました。
お条　紅葉館のお能の時は、いつもかゝさず松民さんが、華族のお取持にお出でのことを知つてゐるから。
政吉　ほんに、あんな疊ざはりのよいお方はありません。
お条　よければお前に取持つて上げようか。
千八　なあにこちらの政ちやんは、松民さんよりまだ外に、當て込んでゐる者があります。
お条　それは誰だか、聞かせておくれ。
千八　中村座で名題になつた、市川新藏に岡惚れで。
政吉　あれ、千どん程のわるい、そんなすつぱぬきをお言ひでない。
お条　どうして／＼政ちやんは、役者なぞよりあつい／＼の、色があるのを聞いてゐます。
政吉　姉さんまで同じ樣に、浮名まうけはいやですよ。
千八　どうか、さういふ儲け筋なら、是非聞込みたうござります。
お条　お前にまだ知られないとは、政ちやんも凄い寸法、藝者殺しの丹さんと疾うから筋になつてゐるよ。
政吉　あれ姉さん厭ですよ、常談いつちやあいけません。
お条　常談ぢやない、ほんたうだから。
千八　いえそればかりは探訪の、蟲種とも思はれぬは、あの丹さんとお前さんとは離れぬ仲といふ事は、此新橋から柳橋かけ、誰知らぬものもござりませんから、よもやこちらの政ちやんと、そんな筋はありますまい。
お条　それが大きな思ひ違ひで、あの丹さんはわたしのやうな、もう古物には飽きが來て、疾うから心がかはつてゐれば、世間へぱつと知れない內に、綺麗に政ちやんへのしをつけて、讓るつもりでゐますのさ。
　トこれにて政吉やつきとなりしこなしにて、
政吉　姉さん外の常談なら、どうでもようござりますが、そんな浮名の濡衣は、うそにも言つて下さいますな、わたしや丹さんを讓られても、少しも嬉しくはありません。
　トつんとする。
お条　そんなに腹をお立ちでない。嬉しくなければ丹さんを讓つて上げない迄の事さ。
千八　かういふ葛藤はうつかりと、仲裁も出來ませんから、どれ／＼お暇いたします。

政吉　千どんお前は今の事を、本當だと思つてゐるかえ。

千八　うそか誠か丹さんが、稽古にしけ込むこつちの家、どつちがどうとも言へません。

政吉　あれ、お前までが憎らしい。

千八　お跡で胸に、聞いてお見なさい。

ト稽古唄になり、下手へはひる。此時上手屋體よりおたえ着物を着換へ、おこまついて出來り、

たえ　お粂さん、お待ち遠さま、丁度政吉が歸つたから、少しも早く出かけませう。

お粂　それでは時間のおくれぬ內、御迷惑でも御一緒に。

政吉　おつかさん、何處へ行くの。

たえ　お粂さんと池上の溫泉へ行くのだから、もし遲くなつて泊つたら、裏のいつもの伯母さんを、呼んで泊つて貰ふがよい。

政吉　伯母さんでも泊らないと、もし今夜にも丹さんが、お出でになると姉さんに、又疑ひを受けますから。

こま　そりやまあ、何故でござります。

お粂　今政ちやんに丹さんを、私が讓ると言つたらば、大おこりにおこられたのさ。

たえ　そんな事ならどうでもよいに、おこらずともの事だわね。

お粂　それでは政ちやん、丹さんがもし今夜にも來ましたら、これをどうぞ渡して下さい。

ト以前の文を出す。

政吉　そんな取次ぎはいやですよ。

トやはりつんとしてゐる。

こま　左樣なら私が慥にお屆け申します。

お粂　それではお前に、賴んでおかう。

トおこまに文を渡す、此時花道揚幕の內にて、汽車の着いた笛の音聞える。

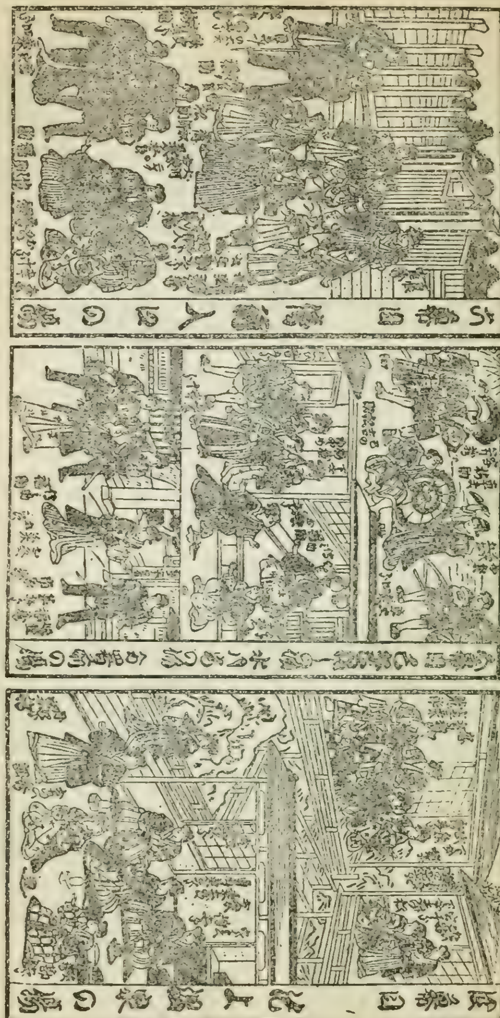
たえ　おや、もう汽車が着いたと見える。

お粂　それはせはしい。さあ急ぎませう。

ト稽古唄にて、お粂、おたえ連立ち足早に花道へはひる。此內政吉は着物を着換へるを、おこまこれを手傳ひ、着物をしまひ前へ出て、

こま　それでは裏の伯母さんを、早く呼んで來ますから、もしその間に丹次郎さんが、お見えになつたら此お文を、お屆けなすつて下さいまし。

政吉　外の事なら賴まれるが、その文ばかりはわたしの手から屆ける譯にはいかないから、お前の手から渡してお



くれ。
こま　そんなら行つて來ます間に、もしやお出でになりましたら、待たせておいて下さいまし。
政吉　いゝから早く行つておいで。
こま　どれ、ちよつと頼んで來ませう。
　ト　おこま下手の路地口へ這入る。跡に政吉思入あつて、
政吉　今姉さんが丹さんを、わたしに讓ると言つたのは、もしや色ではあるまいかと氣を引いて見る心であつたか、それともわたしを嬲る氣か、心付かずに言つたのか。あの姉さんの口車にうつかり乘つて頼むとでも、言つたらそれこそ大騒ぎ、どうして〳〵丹さんを、人に讓るの切れるのと、こんな嘘はありやあしない。
　ト　此時誂への稽古唄になり、花道より深見丹次郎、羽織着流し、駒下駄にて蝙蝠傘を持ち出來り花道にて、
丹次　お粂に話す事があつて、濱町河岸の水月へ、今日は戻つてゐる筈に、さつき様子を見に行つて門からはひり庭口から、内の様子を窺へば、お粂はゐずに巳之吉と親父がしきりと閑談話し、丹次郎といふ蠧蟲が附いてゐるゆゑ待合の稼業もよそに内を外、所詮これでは張切れねば廢業をして日頃から、贔屓の客へ言譯に、切腹をして死ぬとの覺悟、此身も主人の縁家から貰つた女房のあのおその、離縁の出來ぬ義理合ひに、所詮お粂と添ひとげる譯にならねば今のうち、別れ話しにしたいものだが、内へ歸つてゐぬからは、多分向うの師匠の内に、ゐるかゐまいか行つて見よう。
　ト　右の唄にて舞臺へ來り内を窺ひ、
政吉さん、お前一人か。
　ト　格子を明けて内へはひる。
政吉　おや、どなたかと思ひましたら、丹次郎さんでございましたか。こちらへおはひんなさいまし。
　ト　丹次郎よろしく住ひ、
丹次　さうして誰もゐないやうだが、師匠はどこぞへ出かけましたか。
政吉　お粂姉さんと御一緒に、今池上の温泉へ行くと、二人づれで出かけました。
丹次　なに、お粂と池上へ、それではさつき内へ行つても、お粂が行つてゐない筈だ。
政吉　それについてお前さんに、お文を屆けてくれる樣にと、おいておいでゝございましたが、おこまが持つてをりますから、歸りますまで待つて下さい。

丹次　さうしておこまどんは、何處へ行きました。
政吉　今裏の伯母さんの所へ、留守を頼みに行きました。
丹次　どんな文だかおこまどんが、早く歸つてくればよいが。
ト氣の揉めるこなし、爰へ下手の路地口よりおこま出來り内へはひり、
こま　丹次郎さま、いらつしやいまし。
丹次　おこまどん待つてゐた。早く文を見せて下さい。
こま　確にお渡し申しまする、
ト以前の文を出す、丹次郎手に取り、開封して口の内にて讀む事よろしく、是より段々早くなる合方になり、丹次郎思入あつて、
丹次　政吉さん、何時だえ。
政吉　今方汽車が着きましたから、三十分に間はありますまい。
丹次　それぢやあ今から行つた所で、二時の汽車には乘られぬか。
こま　急いでお出でなさいましたら、乘られぬこともござりますまい。
丹次　近所の事ゆゑ行つて見よう。
ト立上る。此時花道の揚幕にて、汽車の出る笛の音聞える。
政吉　あれ、もう汽車が出ましたよ。
丹次　それぢや四時迄、
ト下にゐる木の頭、
待たねばならぬか。
トちつとこなし、此模樣早き合方、風の音にて、
ひやうし　幕
ト幕引附けると浪の音、ラッパにてつなぎ直ぐに引返す。

四幕目　池上溫泉緣切の場

〔役名――深見丹次郎、金貸赤鬼九郎兵衞、周旋人春山笑藏、同駒野勇助、野だいこ野太八。湯客市兵衞、同仁助、同三藏、水月のお粂、小澤おたえ、溫泉の小女お豆、同女中おやま、同おふで、同おたみ等。〕
（池上溫泉朝日樓の場）――本舞臺一面の平舞臺、正

面三間の間、一間床の間、二間小形の襖、上の方折廻し障子屋體、下の方廊下口、牛窓板羽目、向ふ揚幕、入口の心、障子開閉、出入りあり、總て池上温泉朝日樓の體。爰に湯客市兵衛、仁助、三藏着流しにて立掛りゐる、温泉の女中おふで、おたみ前垂掛の女中にて、茶盆へ急須茶碗を載せ、浴衣を抱へ立掛りゐる。此見得流行唄にて幕明く。

市兵　こう姉さん、大そう今日は賑かだね。

ふで　藝者衆をお連れなすつた、お客樣がいらつしやいますので、お賑かでござります。

仁助　あの騒ぎを聞きながら、一杯やるのは德用だね。

三藏　どこか、見晴しのいゝ座敷を賴むぜ。

たみ　お生憎樣でござりますが、只今ふさがつてをりますから、少しお待ちなすつて下さりませ。

三藏　奧の家はいつ來ても、いゝ座敷はふさがつてゐるな。

ふで　お附込みのお客樣で、お貸切りになりますから、お氣の毒でござります。

市兵　今度は早く附込んで置いて、いゝ座敷で一日遊ばう。

たみ　お附込みなら二三日前に、左樣おつしやつて下さりませ。

仁助　當り芝居と同じ事だな。

市兵　それぢやあ今日はどこでもいゝから、湯へはひつてゐるその内に、肴をこせえさせて置いてくんねえ。

ふで　畏りましてござりまする。お肴は、何に致しませう。

仁助　さしみがあるなら先づさしみに、それから椀と鹽燒だ。

三藏　飯の時は濱川の、あなごを燒いて貰ひたい。

ふで　折角お望みでござりますが、あなごは賣り切れになりました。

三藏　賣切れたらば車海老と、鯒を芝煮にして貰はう。

ふで　畏りましてござりまする。

市兵　どこの温泉も繁昌だが、此の池上の朝日樓は遠いところへよく來るねえ。

たみ　池上の御會式や月々廿一日の大師樣には、方がへしのなりませぬ程、お客樣がいらつしやいます。

市兵　なんにしろ、いゝことだ。

仁助　ときに、少しも早く湯へはひつて、ゆつくり一杯やらうぢやねえか。

三藏　それをおれも待つて居るのだが、ちよつと暇にゐる座敷はどこだ。

ふで　こちらへお出で下さりませ。

ト流行唄にてみな〳〵上手へはひると、下手より女中おやま、前垂がけにて茶盆へ急須と茶碗を持ち先に立ち後より、金貸赤鬼九郎兵衞着流し、カバンを提げて出て來る。周旋人春山笑藏着流し、九郎兵衞と自分の羽織梅びしほの曲ものを持ち出來り、

やま　お氣の毒樣でございますが、生憎今日は込合ひますゆゑ、お二階の明きます迄、これにおいで下さりませ。

九郎　座敷がなければ仕方がない、一杯やつて湯へはひるから、二階が明いたら知らしてくんねえ。

やま　直にお知せ申します。

ト座蒲團をしきながら、

お三人樣でござりますか。

九郎　もう一人連が來ます。

ト座蒲團の上へ住ふ。おやま茶を出す。

笑樣　疾うから噂に聞いてゐたが、遠方ゆゑに來なんだが、座敷のないほど客のあるのは、大そう繁昌だ。

やま　有難い事に皆樣が、御贔屓になすつて下さいますので、こんな邊鄙でございますが、まことに繁昌致します。

笑藏　是が歩いて來るのでは、なか〳〵容易に來られないが、汽車を降りれば人力車、一町の道も歩かずに、來られるから流行るのだ。

九郎　まあ兎も角も一杯呑みたい、何でもいゝから出してくんねえ。

やま　畏りました。只今直に差し上げます。

ト下手へはひる。

九郎　近頃しきりに衞生の論が盛んに溫泉流行、箱根熱海は言ふに及ばず、伊香保磯邊の繁昌も、今言ふ汽車の便利から、しかし遠くへ行かずとも、爰の家に泊つてゐると、箱根にゐるも同じ事だ。七湯廻りをするよりも、東京内の溫泉を方々歩くが氣散じだ。

笑藏　おつしやる通り駒込の、草津を始め根岸に二軒、團子坂、妻戀坂、王子の海老屋も洒落てゐるし、又氣を替へて芝浦の汐湯も海を見晴らして、ぴん〳〵刎ねる夕川岸で、一猪口やるのは何より愉快だ。

九郎　何にしろ早く呑みたい、ちよつと女中を呼んで下さい。

笑藏　此の繁昌ぢやあ、つかへてゐませう。

ト笑藏手を叩く、おやま「はい」と返事して、廣蓋へ椀盛、洗ひの鉢、大海燗徳利、杯洗を載せ是を持ち出來り、

やま　大きに遲なはりましてござりまする。

九郎　おゝ待つてゐた〳〵。

やま　お急ぎとござりますゆゑ、外へ參るお肴を、こちらへ持つて上りました。

トよき所へ出す。

九郎　そりやあ何より有難い、鯉の洗ひに車の椀盛、酒呑の腹ゑぐりだ。

ト言ひながら猪口を取る。

やま　お酌をいたしませう。

ト酌をする、九郎兵衛呑んで、

九郎　春山先生、獻じませう。

笑藏　頂戴仕りませう。

ト猪口を取る。

やま　婆やのお酌で、お氣の毒でござります。

笑藏　泥ツくさい新造ツ子より、大年增の方がいゝね。

やま　そんな裏をおつしやらずと、も一つお重ねなされませ。

笑藏　あゝ重ねるとも〳〵、三杯迄はつゞけ呑みだ。

ト酒を呑む。

やま　今日は、大師さまへいらつしやいましたか。

九郎　廿一日は込合ふから、今日參詣に來ましたのさ。

やま　だいぶお土產をお買ひなさいましたね。

笑藏　大師土產は昔から、山本の梅びしほを、やらなければならないやうだ。

九郎　それに外で買ふ梅びしほと違つて、一種特別味が違ふ。

やま　どう致しても年來だけ、山本のは違ひます。

笑藏　梅びしほの大年增かね。

やま　又おいぢめなさいます。

ト始終流行唄の合方、下手より周旋人駒野勇助、着流しにて出來り、

勇助　やつとのことで座敷が知れた。

笑藏　勇助さん、何處へいつたのだ。

勇助　知己の人が來てゐたから、ちよつとそこへ挨拶をして茲へ來る廊下口で、こんな簪を拾つたが、湯入の客が落したのだらう。

ト懐から珊瑚珠のさし込み、金足の簪を出し見せる。

笑藏 笑藏見て、

古渡りの六分玉に、色よしの金足、こりやあ豪氣な簪だ。

ト九郎兵衛も見て、

九郎 はて、見たやうな簪だが、おゝ待合を出した水月のお粂がさしてゐたやうだ。

やま ほんにその粂さんが、今し方お出でなさいましたがお落しなすつたのではありますまいか。

九郎 お粂もこつちの内へ來るかえ。

やま 開業からのお馴染で、此間もお客さまと二三日お泊りなさいました。

九郎 その泊り込みの客といふのは、丹次郎に違ひない。

勇助 今日も一緒に來てゐますか。

やま いえ、今日はおたえさんといふ宇治のお師匠さんと、お二人でござります。

笑藏 大方跡から丹次郎が來て、泊り込みになるのだらう。小胸の悪い話だな。

ト下手よりおふで出て、

ふで おやまどん、ちよつと。

やま 何だえ。

ふで 水月のお粂さんが、玉のさし込みの簪を、廊下へお落しなすつたから、氣を附けておくんなさいよ。

やま その簪なら此旦那が、今お拾ひなさいました。

ふで それは有難うございます、早速お知せ申しませう。

九郎 お粂さんに上げるから、爰へ取りにお出でなさいと、早く行つてさう言ひなせえ。

ふで 畏りました。

ト下手へはひる。

九郎 何處の御客が拵へてやつたか、安金ぢやあ出來ねえ簪、てつきりこりやあ小間物屋の、吉兵衛へ誂へたのだらう。七十圓が物はあるな。

勇助 同じ簪でも、吉兵衛が拵へた物は違ひます。何でも當時小間物屋は、吉兵衛でなけりやならねえやうだ。

笑藏 又染物は竺仙だ、此東京は言ふに及ばず、京大阪から長崎迄、金屋謹製といふ反物に印がなけりやあ賣れねえさうだ。小さな形だが大きな商ひ、三井大丸も實にはだしだ。

勇助 所で金屋が下駄を穿いて、脊丈較べが出來るかね。

笑藏 そんなに小さくはありやしねえ。

ト此内酒を呑みながら、よろしくあつて端唄になり、下手よりおやま先にお粂前幕の拵へにて出來り、

お粂　貰ひに行くのは、極りが惡いね。

ふで　ちよつと御禮をおつしやればようございます。

ト下手へ來り、

おやまどん、お連れ申しました。

やま　さあ、こちらへおはひりなされませ。

お粂　御免なされませ。

トお粂間の惡き思入にて、うつむきながらはひりて下に居る。

九郎　お粂さん、此簪はお前のかえ。

お粂　え。

ト顏を上げ、九郎兵衞を見て、

おや、九郎兵衞さんでございますか。

笑藏　近所の噂を憚つて、此池上の温泉で、

勇助　丹次郎さんと人知れず、氣儘遊びをしなさるのか。

お粂　どなたかと存じましたら、笑藏さんに勇助さん、お察しの通りと申したいが、そんな機嫌ぢやァありませんよ。

笑藏　どうだか知れたものぢやあねえ。

お粂　さうしてお前さん方は、何處へお出でなさいました。

九郎　今日は大師へ參詣して、大森のステンショから、此溫泉にはひりに來たのだ。

笑藏　惡い所を見られたかね。

お粂　なんで惡い所でございませう。

九郎　ときにお粂さん、今お前が落したといふは、此金足の簪かえ。

ト件の簪を見せる。

お粂　はい、左樣でございます。ちつと氣に掛ることがあつて、うつかりそれを落しましたが、よいお方に拾はれて、大仕合せをいたしました。

九郎　これをお前に返すから、拾つた禮に三絃を、爰で彈いて貰ひたい。

お粂　それではお禮に三絃を、わたしに彈けとおつしやいますか。

九郎　何處の藝者か知らないが、二三軒先の座敷で、隣知らずに騷ぐのが、癪にさはつてならねえから、お前に腕をふるはせて、驚かしてやりたいのだ。

笑藏　藝者氣どりに座附から彈く按排を鑑定すると、ちよ

つと端唄と清元の出來る所から惜しげもなく、客を勸め
るもぐりだらう。
勇助　但しは宿場のあいまい茶屋へ、藝者と娼妓を兼帶で、
田舍大盡を引きかける、あばずれ者かも知れねえぜ。
九郎　何にしろお粂さんが、端唄の一つもやつたらば、向
うがしよげて止めるだらう。
勇助　ちよつと一挺三絃を、家から借りて貰ひたい。
やま　はい、稽古三絃でよろしくば、只今持つて參りませ
う。
ト立ちかゝる、
お粂　いえ、取りに行くには及ばないよ。
九郎　なに、及ばないとは。
ト合方になり、
お粂　折角のお頼みなれど、藝者を廢業いたしまして、今
は素人の金井お粂、三絃を彈きますのは、御免なすつて
下さいまし。
笑藏　そんな野暮を言はないで、なんぞ爰で彈きなさい。
これが東京の内ぢやあなし、市中を離れた朝日樓、何處
へ憚る所もない。
お粂　多くの人の參る溫泉、知つた人に見られた時は、あ
の久吉は廢業して、もぐりに座敷を勤めるかと、言はれ
ますれば此身の恥、こればかりはお前さんが、どんなに
お頼みなさいましても、お斷り申します。
トすつぱり言ふ。九郎兵衞思入あつて、
九郎　成程廢業したからは、此溫泉で三絃が彈けぬといふ
も尤もだ。それぢやあ三絃のその替り、酒の相手をして
貰ひたい。
お粂　それは元より好きな酒、相手をしろとおつしやるな
ら、不斷なら致しますが、今日は氣分が惡いので、保養
がてらに參つた溫泉、お氣の毒でござりますが、それも
御免下さりませ。
笑藏　そりやアあんまり色氣がねえ、廢業をして三絃が彈
かれない事ならば、爰で酒の相手位は、默つてしてもい
いぢやあねえか、恩に掛けるのぢやあねえけれど、惡い
者に拾はれたら、六七十圓の損だらう。
勇助　それを僕が拾つたから、損もせずに返る筈、假令氣
分が惡くとも、呑める口のお粂さん、旦那の相手をしな
せえな。
トお粂思入あつて、
お粂　つい氣分が惡い所から、お斷り申したのは私が惡う

ござりました。爰で一つ頂戴しませう。
九郎　それぢやあ相手をしてくんなさるか。
お粂　はい、お相手をいたしませう。
九郎　大酒と噂のお粂さん、小さいものでは面倒だらう。
これで吞んで貰ひたい。
ト廣蓋の上にある大海の蓋をとつて出す。
お粂　なんぼわたしが大酒でも、五合入りとも言ひさうな、大きな物では吞まれませぬ。
笑藏　吞めぬと言はずと吞みなせえ、六七十圓もする簪、無事にお前の手に入るのだ。
勇助　拾つた禮になみ〳〵と、一杯うけて吞みなさい。
お粂　それぢやあ是で一杯吞まねば、其簪は下さいませぬか。
笑藏　さういふ譯では、
兩人　ないけれど。
お粂　今も申します通り、氣分が惡くて參つた温泉、見るから野暮な大海の蓋で一杯吞まねば、わたしが落した簪を下さらないとおつしやるなら、吞まずにおもらひ申しますまい。
トお粂つんとする。

笑藏　さうお前が言ひなさると、丸い器に角がたつ、元より落した簪を、返すは至當の話しだから返さないとは誰も言はない。蓋で吞むのは拾つた禮、一杯吞めずば半分でも、吞んで貰つて行きなせえな。
ト笑藏思入にて言ふ。お粂も氣を替へ、
お粂　お前さんが仲裁に、お這入りなすつたことだから、すなほに一杯吞みませう。
九郎　それぢやあ一杯、
三人　吞んでくれるか。
お粂　もしおやまさん、四五本德利を持つて來ておくれ。
やま　はい〳〵、畏りました。
ト下手へはひる。
お粂　此お杯は九郎兵衛さん、吞んでおさしなさいませうね。
ト蓋を出す。
九郎　どうしておれに吞めるものだ。
お粂　堅い事を申すやうだが、主人が吞んでさすのが法、お前さんが上らずば私もいやでござります。
九郎　それぢやあおれが、吞んだら吞むか。
お粂　お前さんがお吞みなされば、倒れる迄も吞みます。

ト爰におやま、おふで燗徳利を六本持つて來り、

やま　少しおぬるうございますが。

ふで　御不承なすつて下さいまし。

ト蓋を取上げる。

笑藏　向うが呑み手の大關なら、爰は角力の三人掛り、

勇助　二人で半分助けませう。

ト是より好みの合方になり、九郎兵衞蓋を出す。おやま、おふで兩方からつぐ。

九郎　これ、一杯つぐには及ばぬぞ。

お条　未練なことをおつしやいますな。

トお条徳利を取つて一杯つぐ。

九郎　あゝこぼれる／＼。

ト九郎兵衞呑んで、

なか／＼一人では呑まれない。

笑藏　それぢや二人が、

兩人　助けませう。

ト三人にてやつと呑みほし、

九郎　さあ、呑んだから受けて下せえ。

ト蓋をさす。

お条　それでは落した簪を、お拾ひなすつて下すつた、これが御禮でございますよ。

ト蓋をとり上げる。

やま　旦那の方もお二人さまが、お助けなさいましたから、

ふで　及ばずながらわたくし共が、少しお助け申しませう。

ト言ひながら兩人酒をつぐ。

お条　何此盃に一杯位、助けるも何もいりませぬ。

ト合方きつぱりとなり、お条息もつかずに呑み干すを、みな／＼びつくりする。

笑勇　よう／＼見事々々。

笑藏　敵ながらも天晴だ。

お条　左樣なら簪を、これでお貰ひ申します。

九郎　おゝ勝手に持つて行きなせえ。

トお条簪をとつて、

お条　どなたも、有難うございます。

ト端唄になりお条簪をとり、少し醉ひし思入にて下手へはひる。おふで跡よりはひる。三人酒に醉ひし思入にて、

笑藏　かねて強いといふ事は、人の話しに聞いてゐたが、

勇助　息もつかずに一息に、五合ばかり呑んだのは。
九郎　さて〳〵驚いた大酒だ。
やま　今に醉が出ましたら、お連れがお困りなさいませう。
九郎　酒の上は悪いかな。
やま　醉つた時には不斷と替り、音羽屋がした肴屋の、宗五郎のやうでござります。
九郎　醉つた所を見たいものだ。
笑藏　醉つた所を見るどころか、二人共醉が出て、
勇助　目がちらくらと見えませぬ。
九郎　おれもふら〳〵して來たわえ。
ト下手より女中おたけ出て、
たけ　おやまどん、お二階が明きましたよ。
やま　あい有難う。旦那様、お二階へ行らつしやいまし。
九郎　二階が明いたら、行かう〳〵。
笑藏　行くはいゝが腰がきれない。
勇助　㒵いことを言ひなさんな。
九郎　一番陽氣に。
三人　よい〳〵〳〵。
ト手を打ち角力甚句になり、三人立上りひよろ〳〵するる。おやまおたけ手を打つて囃す。三人ひよろひよろと生醉のこなしよろしくあつて、尻もちをつくを、道具替りの知せ。
ありや〳〵。
ト坐りながら踊る。此模様よろしく右の鳴物にて道具廻る。

（朝日樓座敷の場）――本舞臺一面の平舞臺、向ふ三間欄形の欄間、上の方折廻し障子屋體、下の方中窓のある鼠壁、正面打抜き八景坂を見たる遠見、總て朝日樓座敷の體、廣蓋へ洗ひ皿、燒肴の皿、椀盛、杯洗、燗德利を載せ、小澤おたえ、紋附き宇治の師匠の拵へ、下手に野だいこ野太八羽織着流し、温泉小女お豆田舍の小女にて酌をなして酒を呑み居る。此見得端唄にて道具留まる。
たえ　野太八さん、大師川原へお出でかえ。
野太　昨夜お客と品川の相模屋へ行きましたが、今朝床離れの悪いとこから居續けとの命令に、是非なく附いてゐましたが、遊びは夜に限ります。晝の内はしよざいがなく、大だれにだれますから、此温泉を勸めこんで、今し

方參りました。

たえ　お客が待つておいでだらうに、遊んでゐてもいゝのかえ。

野太　ゐなくつて大よしさ、其旦那が茶屋の娘に、心ありまで溫泉へ、一緒に連れて來なすつたから、わたしが側にゐない方が、向うも愉快、こつちも愉快、爰らが目先の見える所さ。

たえ　さういふ事ならゆつくりと、爰に遊んで呑んでおいでな。

野太　呑むなと言つても呑みますが、お粂さんはどうなさいました。

たえ　今し方廊下口で、簪を落しなすつたが、それを拾つた人があつて、そこへ貰ひに行きなすつたのさ。

野太　あの六分玉の金足かな、そりやあ拾つた人があつていゝ事をなさいました。

たえ　まあ一つお上りな。

ト猪口を差す。

お豆　どれ、お酌しますべいか。

ト徳利をとつてつぐ、野太ハ見て、

野太　こりやあ滅法いゝ子だが、姉えおめえは、何處だ。

お豆　おらかえ、おらあ二子だ。

野太　あゝお前二子か、もう一人は內にゐるか。

お豆　えゝ此人はわからねえ、おらあ長女で一人子、家にやあ父とお母あばかりだ。

たえ　此子が二子と言つたのは、それ、龜屋のある二子だらう。

お豆　あゝさうだ〳〵、おらが內は武州橘樹郡二子村、

野太　今はどんな田舍でも、學校がありますから、言ふ事がたしかだね。

たえ　さうしてお前は、爰の內へいつ奉公に來たのだえ。

お豆　此春子守に來ましたが、今日はえらく忙しいから、お給仕に出ましたのだ。

野太　十六七になつたらば、いゝ新造になるだらう。

お豆　をぢさん、お前はべら〳〵とよく喋べる人だが何だえ。

野太　おらあ幇間だ。

お豆　はうかんなら衣を着さうなものだに。

野太　衣を着るのは坊さんだ。幇間といふのはたいこもちの事だ。

お豆　ハアたいこもちの事かえ、此春二子の龜屋の內へ、

鶴の丸といふ大神樂が舞ひに來た事があつたが、その時太鼓を持つた人は、赤い手拭を引冠つて、丁度お前を見た様な、馬鹿げた顔の人だツけ。

野太　あんまり手離しすぎますね。

たえ　然し田舎の者は正直だね。

野太　そんなに馬鹿げてゐるのか知らぬ。

お豆　誰が見ても馬鹿げてゐるよ。

野太　さうをどられてはたまらねえ。

ト右の合方にて、下手よりお粂酒に醉ひし思入にて出來り、よき所へどつさり坐り、

お粂　あゝ、苦しい。

たえ　お粂さん、どうおしだ。

お粂　大きいもので呑んだので、急に醉が發したから、今迄風に吹かれてゐたのさ。

野太　先刻お目にかゝりましたから、ちよつと御無沙汰の申譯に。

お粂　野太八さん、ようお出でだね。

野太　お客と一緒に參りましたが、だいぶ御酩酊でござりますな。

たえ　何處でそんなに呑んでお出でだ。

お粂　今わたしが廊下へ落した此簪を、金貸の赤鬼と一緒に來た、勇助といふ周旋人が拾つて返してくれたのは、日頃に似合はぬ重忠だと、思つてゐたらやつぱり岩永、拾つた禮に赤鬼が阿古屋もどきで三絃を弾けと言ふから廢業して、弾かぬと言つて斷つたゆゑ、大方水でもくらはせろと言ふかと思つてゐたところ、そこにあつた大海の蓋でいつぱい酒を呑めと、言はれて腹はたつけれど、拾つてくれた恩を思つて、琴の調子の狂ふのも、胡弓のすなほに一杯呑んだが、少しは醉つたかふらふらと竹田人形見たやうだ。

ト生醉の思入。

たえ　どんな大海か知らないが、蓋でも五合位ははひらう。

野太　それをいつぱい上つては、それではお醉ひなさる筈だ。

お粂　五合位に醉やあしないが、二三日前から溜飲で、胸に水が溜つてゐるから、苦しくツてならないのさ。

たえ　呉服町の太田で賣る胃散を呑むのが一番よいが、爰らに取次ぎがあるか知らぬ。

野太　先づ手短かに效のあるのは、はじけ豆の蠶豆さ、あ

れをたべると水を引き、直に胸が開きます。
お豆　はじけ豆なら爰にあるから、おらがのを上げようか
え。
ト袂から蠶豆を七粒ばかり出す。
野太　そればかりぢやあ仕方がない、其上お前の袂くそと
一座の豆はたべられない。
お豆　いやなら止さつしやい。おらが喰べる。
お粂　蠶豆がいゝならば、早く買ひにやつておくれな。
野太　直に買ひにやりませう。
ト手を叩く、下手よりおふで出来り、
ふで　御用でござりますか。
野太　はじけ豆の蠶豆を、買ひにやつておくんなさいな。
お豆　はじけ豆は大好きだ、おらが行つて買つて来べい。
ふで　どうしてお前に行かれるものか。
野太　此子には行かれないのかえ。
ふで　品川迄参らなければ、はじけ豆はござりません。あ
したでよくば品川へ、参る者がござりますから、取りよ
せて上げませう。
トお粂癇にさはりし思入にて、
お粂　それぢやあ今は、買はれないのかえ。

ふで　へい、遠方でござりますから。
お粂　池上から品川迄、五里も十里もありやあしまい、宿
迄一里あるかなし、車屋がゐようから頼んで買ひにやつ
ておくれ。
ふで　車屋を頼みましたら、豆の代より使賃が、よつぽど
高くなりませう。
お粂　えゝ、いくらでも構はないから、一升ばかり買つて
おくれ。
ト紙入より五十錢札を出してやる。
お豆　え、はじけ豆を一升買ふえ、えらい大盡だなあ。
トおふで札をとつて、
ふで　それでは一升買ひますか。
たえ　何でもいゝから車屋を、早く頼んでやつておくれ。
ふで　一升は多うござりませう。
野太　えゝ、餘計な口を利きなさんな。
ト野太八おふでに早く行けといふ思入。
ふで　はい／＼、畏りました。
トおふでお豆附いて下手へはひろ。
お粂　品川迄やつたつて、いくら賃錢を取るものか、あん
な事を言はれると、癇にさはつてなりやあしない。これ

へ一杯ついでおくれ。

たえ　だいぶ醉つておいでだから、大きなものは止しにして、これで一つお上りな。

ト猪口を出す。

お粂　なに、あればかりのはした酒で、わたしやあ醉ひはしないから、野太八さん、ついでおくれ。

野太　ちひさいものになされればよいに。

ト言ひながら少しつぐ、

お粂　なみ〳〵と、いつぱいおつぎよ。

野太　いえ、半分でようござりませう。

お粂　えゝ、しみッたれなことをおしでないよ。

ト生醉の思入にて、水呑の酒を野太八にぶつかける。

野太　こりやあ何をなさいます。

お粂　お前が酒をつがないから、腹が立つてぶつかけたが、堪忍しておくんなさいよ。

たえ　早く、そこを拭いたらよからう。

野太　酒はすぐに染になるから、洗張をしにやいけません。

お粂　お氣の毒な事をした。これで洗張をしておくれ。

ト紙入より五圓札を出してやる。

野太　不斷お世話になりますのに、こんな御心配を受けましては。

ト札を返す。

お粂　わたしが上げた此札を、なんでお前は受けないのだ。

ト生醉の思入。

野太　お氣の毒でござりますから。

お粂　どうしたとえ。

トきつとなるを、おたえ留めて、

たえ　何にも言はずに、貰つてお置きなよ。

野太　お氣に障つては濟まないから、それぢやあお貰ひ申します。

ト紙入の中へ入れる、爰へおたみ出來り、野太八の袖を引いて、

たみ　もしあなた、お連れさまがお歸りでござります。

野太　只今直に參りますと、さう申しておくんなせえ。

たみ　畏りました。

ト下手へはひる。

野太　お粂さん濟みませんがお客が歸ると申しますから、御免なすつて下さいまし。

お粂　わたしに構はず早くおいで。

野太　おたえさん、松ちやんへよろしく。

ト端唄の合方にて野太八下手へはひる。お粂思入あつて、

お粂　おたえさん、留めずにいつぱい呑ましておくれ。

ト合方になりお粂水のみを出す。おたえ是非なくつぐ、お粂ぐつと呑んで、

けふのやうに、いま／＼しく腹の立つことはない。

たえ　何がそんなに腹が立つのか、わたしの内へお出での時から、顔の色が悪かつたよ。

お粂　わたしが腹のたつ譯を、おたえさん聞いておくれ。

ト一中節の合方になり、

二三日跡にお客に誘はれ、根岸の磯部へ行つた所、つい呑過ぎて泊つてしまひ、朝湯へはひつてそのお客と、汽車で王子の海老屋へ行き、又呑みつぶれて二晩泊り、今日内へ歸つたれば、お株で親仁が大おこり、内へお出での御客様はみんな手前の馴染のお方、來る度毎に留守の日には、どなたもお出でなさりはしない。遂には見世も衰微して、折角はじめた待合茶屋も、よんどころなくしまはにやあならぬ、さうなる時は御贔屓のお客へ對して濟まぬから、是から外へ遊びに出ず、内を大事にしてくれと、知れきつた小言ゆゑ、聞くもうるさく飛び出して、お前を誘つて氣を抜きに、此温泉へ遊びに來たのさ。なぜ年寄りといふものは、知れきつた事を言ふだらうね。

トお粂思入にて言ふ。おたえぢつと聞いて、

たえ　そりやあおとつさんの言ふのが尤も、開業をした水月の、はやるはやらないはお粂さん、お前の腕にあることだ、折角わざ／＼お馴染のお客さまがお出でなすつても、當にして來たお前が留守では面白くないからそこそこに、お歸りなさるに違ひない。それが二三度續いたら、誰も遊びに來てがなく、衰微するに違ひない。こればかりはおとつさんの、言ふのがわたしは賛成だ。ちつと内に辛抱して、お客を大事にしなさんせ。

お粂　よくお前は私をへこまし、親仁の贔屓をしなすつたね。

たえ　贔屓はしないがお父さんの言ふのは實に尤もだから癇に障るか知らないが、かうして同胞同様に心易くするからは、決して座なりは言ひませぬ。悪い事は遠慮なく、悪いと言ふからお粂さん、腹を立てておくれでないよ。

トお粂思入あつて、

お粂　常からお前を姉さんと、わたしも力に思つてゐるから、異見を聞かぬ事はないが、是ばかりはおたえさん、

お前の異見を聞かないから、悪く思つておくれでない。

たえ 惡く思ひはしないけれど、お父さんに逆らふのは、お前が我儘過ぎるから、今夜爰へ泊つたら、あした早く内へお歸り、一人で歸り憎いなら、私が一緒に行つて上げよう。

お粂 他人の私をそれ程迄、眞身に思つておくれのは、おたえさんに限るゆゑ、義理にも聞かねばならないが。

ト思入あつて、

氣儘遊びをしつけたら、内に居るのがいやでならない。これでは濟むも濟まないのも、義理を思ふと此胸が。

トちつと思入あつて、又生酔になり、

胸を晴らすは酒ばかり、片時呑まずにゐられません。

たえ 其辛抱の出來ぬのを、辛抱だから、ちつと酒をおつつしみよ。

お粂 なる堪忍は誰もするかね。

ト言ひながら水呑の酒を呑み、むせる。此時花道よりおふで案内して、跡より丹次郎羽織着流しにて出來り、直に舞臺へ來て、

ふで はいこちらでござります。

丹次 こりやあ大きにお世話だつた。

たえ おや丹次郎樣、よくお出でなさいました。内へお寄りなさいました事。

丹次 お前の所へ行つたらば、朝日樓へ行つたと聞き、置いて行つた文を見て、直にステンショへかけ付けたが、今出たといふ後で一足違ひで新橋に、一時間待つてゐたので、大きに來るのが遲くなつた。

たえ まあ爰へお出でなさいまし。

ト丹次郎眞中へ住ふ。

ふで 何ぞ御用はござりませんか。

お粂 お燗を附けて來ておくれ。

ふで 畏りました。

トおふで下手へはひる。

お粂 丹次郎さん、一つ上げませう。

ト水のみをさす。

丹次 おいらは、大きなものぢやあいけない。

お粂 わたしが差したのはいやなのかえ。

丹次 いやぢやあないが、大きいから。

お粂 いやなものを上げようとは言ひませんよ。

トつんとして、手酌で呑む。丹次郎見て、

丹次 お前は大層酔つてゐるの。

お粂　わたしやあ醉つちやあゐませんよ。いつ酒を呑ましたえ。
丹次　わざ〳〵汽車で新橋から、此池上まで來たものを、來い〳〵早々ぶつかけるのは、醉つてゐるに違ひない。
お粂　とんだ三段目の師直だが。
　ト師直の思入にて、
酒は呑んでも呑まいでも、勤める所はきつと勤める武藏守。
たえ　大きいものは止しにして、これで丹さんにお上げなさいよ。
　ト猪口を出すを、
お粂　猪口なぞでは面倒だ。
　ト水呑へ酒をつぎ、
わたしが半分助けるから、いやと言はずに、呑んでおくれ。
　ト水呑を出す。
丹次　ほんに仲間の附合酒、呑めねえ事を知つてゐながら。
お粂　それぢやあ呑んでくんなさらねえか。
丹次　そりやあ御免を蒙むりたい。
お粂　呑めずば呑んで貰はねえ。
　トお粂ぐつと呑んで、殘つた酒を丹次郎へぶつかける。
丹次　えゝ、何をするのだ。
たえ　又お株が初まつたね。
　ト言ひながら、ハンケチで着物を拭いてやる。丹次郎思入あつて、
丹次　醉つてゐるとは言ひながら、なんで酒をぶつかけたのだ。
お粂　あい、わたしや腹が立つてならない。
丹次　何がそんなに腹がたつのだ。
お粂　お前の來やうが遲いからさ。
丹次　そりやあ今も言ふ通り、一足違ひで乘りおくれ、ステンショに一時間、待つてゐたので遲くなつた。
お粂　そんなちやらを言ひなすつても、わたしやほんとにしませんよ。
丹次　なに、ちやらを言ふものか。
お粂　此頃始終烏森の、米八さんの所へ行つて、三度に一度と言ひたいが、わたしの方へは幾日にも、來なすつたことはありやあしない。
丹次　誰がそんな事を言つて、水をさしたか知らないが、四五日お前に逢はないのは、店の用が多いからだ。

お粂　お店の御用とお言ひだが、夜迄御用はありやあしまい。
丹次　用が重なり遅くなれば、十二時迄も掛るのさ。
たえ　そりやあ丹次郎さんだつて、主人持の身體ゆゑ、さう自由にはいかないから、遠ざかる事もありませうが、お前に逢はうと池上迄、わざ／＼出掛けてお出でだから、機嫌を直してにつこりと、笑ひ顔でもお見せなねえ。
お粂　いゝえ機嫌は直しませぬ、けふ丹次郎さんを呼んだのは、悔しいけれど米八さんに、見返られた上からは、愚痴を言つても仕方がないから、きれいに別れてしまふ積りだ。
丹次　むゝ、そりやあ此間貴顕の方の、御供で一日濱の家で休んだ時に米八さんが、仇吉さんやその吉さんと、一緒に座敷へ出てゐたから、それを大方聞いたのだらう。
お粂　あい、それを聞いたのさ。
丹次　つまらねえ、そんな事で腹を立つ事があるものか。
お粂　いえ、腹を立たずにはゐられませんよ。
丹次　なに、腹を立てずにゐられないとは。
　ト誂への合方になり、兩人思入あつて、
お粂　そのあくる晩、米八さんの家へ泊りなすつたらう。
丹次　そんな事は夢にも知らない、
お粂　何でもいゝからいやになつたら、綺麗に切れてしまつておくれ、そんな水臭い心の人は、わたしの方でもいやになつたよ。
たえ　誰がそんな事を言つたか、丹次郎さんに限つては、お前を退けて餘所外で、そんな事をしなさるものか。
　トおたえ留める、お粂腹の立つ思入にて、
お粂　しらばつくれてていゝかくしに、そんな事を言ひなさるが、米八さんと色にしたのは、大方お前が取持ちだらう。
　トおたえむつとして、
たえ　これお粂さん、外の事なら醉つての上と、わたしや何にも言はないが、米八さんを取持つたと言はれては聞いてゐられぬ。誰がそんな事を言つたか。さあ、言つた者を言ひなさい。
お粂　言つたら、爰にゐられまい。それをわたしが言はないのは、不斷お世話になるからだ。
たえ　何でゐられない事があらう。さあ、言つた者を言ひなさい／＼。
　トおたえ詰寄るを丹次郎留めて、

丹次　これおたえさん、腹のたつのは尤もだが、知つての通り酒に醉ふと、心の狂ふが持ちまへだ。醉が覺めたらわかるから、何にも言はずにゐてくんなせえ。

たえ　いえ醉つて心の狂ふのは、知つてゐるから言はないが、こんな事を言はれると、實にわたしが詰らないから。

丹次　腹も立たうが何事も、わたしに免じて許してくんなせえ。

トおたえなだめ、

これお粂さん、如何に酒に醉へばとて、不斷兄弟同樣によしあしともに相談するおたえさんへ愛想づかし、醉がさめたら面目なからう。もういゝ加減に寐るがいゝ。

お粂　寐ようと寐まいとわたしの勝手、醉ふと心が狂ふといふが、譬にもいふ本性違はず、少しも狂やあしませぬよ。憎まれ口をお前にきくも、烏森へ色をこしらへ、わたしに恥をかゝせるやうな不實な男はいやだ、綺麗に委で別れてしまへば、おたえさんも今日限り、もう附合ひをしない氣さ。

たえ　もうわたしと附合はないとは、呆れきつたものだねえ。

ト丹次郎思入あつて、

丹次　それぢやあどうでも、切れると言ふのか。

お粂　切れたらそつちも勝手だらう。こつちも切れるが勝手だから、色になる時おたえさんに取持つて貰つたから、又切れる時おたえさんに、立合つて貰ふのだ。意氣地はないがお前も男、綺麗に切れてしまひなせえ。

トきつと言ふ、丹次郎思入あつて、

丹次　むゝ、それ程手前がいやになつたら、こつちも未練な事は言はねえ。のろけた事を言ふ樣だが、新橋きつて柳橋迄、人に知られた二人が仲、さう寐返りを打たれては、おれも東京で生れた軀、指を銜へて引込まねえが、今文明の世の中に少しは本も見たものだから、假令手前に突出され、友達中に恥をかくとも、切るのはるのと刃物三昧、野蠻な事はしやあしねえ、望みの通り緣を切るから、明日が日外で逢はうとも、再び物は言はねえぞ。

お粂　切れてしまへばあかの他人、誰がものを言ふものか。

ト又酒を呑む。おたえ思入あつて、

たえ　醉つての上と思つたが、それぢやあ深見丹次郎さんと、お前は緣を切る心か。

お粂　それが互の身のためゆゑ。

ト思入。

一つも年の若い内、水臭くない眞實な、わたしも堅氣な亭主を持つから、お前も内のおかみさんを、大事にするとも又去るとも、そこらは勝手にやらしやんせ。

ト手をたゝき生醉の思入。

丹次　かういふ心と知らねえで、浮々手管の罠に掛り、律義な女房に苦勞をかけ、重役衆に餘所ながら、異見をされた事もあつたが、今日といふ今日目が覺めた、かうして別れてしまふからは、いらざる事だが手前も取る年、つまらねえ者にひつかゝり、内を外に遊ばねえで、身の爲めになる亭主を持ち、親に苦勞をさせねえがいゝ。

ト丹次郎思入にて言ふ。お糸も思入あつて、

お糸　親に苦勞をさせまいため、お前と緣を切つたのだ。よけいな事をお言ひでないよ。

ト此時上手より以前の九郎兵衞笑藏勇助出來り、上手へ住ひ。

九郎　樣子は後ろで聞いてゐたが、深い馴染の色男と、切れしてまつた上からは、身のためになる九郎兵衞の、女房になつてくれないか。

笑藏　男は少しさがつても、一町内で二とは下らぬ、高利貸しの金滿家。

勇助　きつとお前のためになるから、周旋人が口入れだが、此の相談に乘んなさらぬか。

トお糸思入あつて、

お糸　おゝ、よい所へ九郎兵衞さん、きつと私のためになるなら、お前の女房にならうかね。

トお糸九郎兵衞の膝へ手をかける。九郎兵衞ぞく〳〵嬉しき思入にて、

九郎　おれが女房になつてくれる、それがまことの事ならば、ためになるとも〳〵。抵當流れに取つた家作が凡百軒餘りもある。是をおぬしの名前に書替へ、月々取れる上り高を、そつくり小遣ひにやるつもりだ。

笑藏　先づ一軒一圓づゝと、極安く積つても、月々差配が持つて來る、其上り高は百圓餘り。

勇助　それを小遣ひに下さるとは、こんなうまい話しはない。

お糸　それぢやあこんな呑んだくれだが、お前女房に持つておくれか。

九郎　おゝ持たないでどうするものか。いつぞや百圓貸したのも、その下心で貸したのだ。かういふ事になるのが知れたら、ひど催促をしないものを。

笑蔵　何にしろお粂さんが、女房にならうと言ひなさるも、旦那にしつかり金があるゆゑ。

勇助　金がなければ突出され、しまひは馬鹿を見にやあならねえ。

ト丹次郎思入あつて、

丹次　むう、それぢやあかういふ當があつて、おれと縁を切つたのだな。

ト此時ぽん／＼時計の六時打つ。

おゝ、あの時計はもう六時だ、暮れない内に早く歸らう。

ト立上る。

たえ　腹も立たうが丹次郎さん、今日は歸つて下さいまし。

丹次　妓女に戀なし、寳を以つて戀となすと、源五兵衛なら言ふ所だ。

ト世話に、

おたえさん、お世話になりました。

ト花道の方へ行きかけるを。

お粂　丹次郎さん、待つておくれ。

丹次　切れた女に、用はねえ。

お粂　お前になくとも、わたしにあるから、ちよつと待つて下さんせ。

ト誂への合方になり、

たえ　何の用か知らないが、待つて上げて下さいまし。

トおたえ留める丹次郎下にゐて、

丹次　して、呼留めたは何の用だ。

お粂　いつか芝居で赤鬼へ。

ト九郎兵衛を見て、

これは失敬御免なさい。爰にゐる九郎兵衛さんへ返す金の百二十圓、借りたぎりになつてゐたが、切れてしまへば心掛り、今そつくりと返したいが、金がなければそのかたに。

ト以前の簪と金の指輪をとつて、

此簪と此指輪を、お前の方へ上げるから、是で不承して貰ひたい。

丹次　成程貸したものだから、金を取るのは當り前だが、切れたと言つて金のかたに、女の飾の簪や指輪を持つて行つたなどゝ、世間の人に言はれると、若い身空でおれの恥、質に置くともして金で返して貰ひたい。

お粂　成程お前の言ふのも尤も、これが新橋近所なら、どうにかして返すけれど、此池上では仕方がない。そこを察して丹次郎さん、持つて行つておくんなさい。

丹次　貸した金のかたに、これを取つてはおれの恥、何と言つても受けとらねえ。
九郎　いや、其二品はおれが預かり、百二十圓を返して遣らう。
笑藏　是から旦那の細君に、なさるお粂の君だから、こりやお出しなさるがいゝ。
勇助　それで此場も風波なく、先づ穏かに濟みませう。
お粂　いゝえ外から出されては、わたしの心が濟まないから、何でもこれを渡さにやならぬ。
丹次　こつちも男の意地づくだ。どうでもこれは受取らねえ。
お粂　何で是を、受取らないのだ。
　ト お粂生醉のこなしにて、立ちかゝる、おたえ留めて、
たえ　お前の言ふのも尤もなら、丹次郎さんの言ふのも尤も、どちらをどうとも言はれないから、爭ふものは中よりと、此の二品をあした迄、わたしに預けて下さいまし、離れぬ中の金足を、裂くのはいつでも裂けるから、指輪も元へはひるやう　此のさし込みの玉ではないが、丸くしたいがわたしの願ひどうぞ、預けて下さいまし。
丹次　酸いも甘いも知り拔いた、おたえさんのその捌き、お前に預けて歸ります。
たえ　いづれ醉の覺めた所で、わたしがとつくり聞きますから、お氣の毒だが丹次郎さん、此儘歸つて下さいまし。
丹次　あゝ歸りますとも／＼、かうして縁を切つたからは、あれが顏を見るのもいやだ。
お粂　そつちも厭なら、こつちも厭だ。
　ト 生醉の思入、丹次郎立上り思入あつて、
丹次　おれは思ふ所があつて、何にも言はずにかうして歸るが、是が氣の早い者ならば、此儘默つて歸りやあしねえ。これから酒を愼んで、明日にも内へ歸つたら、親を大事にするがいゝ。
お粂　切れたわたしへ入らぬ異見、人の事よりお前こそ、おかみさんを大事におしよ。
丹次　えゝ、手前に指圖を受けるものかえ。
　ト きつと思入、唄になり、丹次郎思入あつて花道へはひる。お粂あとを見送り思入あつて、
お粂　鼻ッたらし、やアい。
　ト 大きな聲する。
たえ　そんな事をお言ひでないよ。
　ト おたえお粂を留める。九郎兵衞は嬉しき思入にて、

九郎　いや〳〵、大出來〳〵、貧乏神の丹次郎を突出したのはお前の仕合せ、是れからさきは福神の此の九郎兵衞が女房だ。
笑藏　幸ひ今夜は爰へ泊り、三々九度の杯替り、座敷をかへて飲みあかし。
勇助　跡は二人が媒人だ、爰でしつぽりお床入り。
お粂　いや面白い〳〵、さあ〳〵、これから暴れ吞みだ。
　ト燗徳利を持つて、ひよろ〳〵と立上る。
たえ　これさ、危ないから、下においでよ。
お粂　えゝ何だか腹が立つてならぬ、誰でも構はぬ、なぐり倒すぞ。
　トひよろ〳〵と燗徳利を振廻す。
九郎　成程酔ふと神經が狂ふといふが、悪い酒だ。
笑藏　これは險難、逃げるにしかず。
　ト八人藝のやうな鳴物になり、お粂三人に打つてかゝる。おたえ捨ぜりふにて留める。三人は逃げ廻ることよろしく、トゞ三人は上手へ逃げてはひる。
お粂　女に負ける意氣地なし、やアい。
　トひよろ〳〵としてばつたり倒れ、其儘寝る。おたえ着物の裾を直しながら、

たえ　ほんに困つた、酒だねえ。
　ト端唄の合方になり、下手よりお豆はじけ豆の袋と釣錢を持ち出て、
お豆　さつき品川へ買ひにやつた、はじけ豆が來ました。車屋へ使賃をやつて、これが釣錢でございます。
　ト豆の袋と釣錢を出す。
たえ　あい〳〵御苦勞々々。
　ト受取り、
此お釣錢はお前に上げるよ。
　ト錢を出す。
お豆　おらあ錢は入らねえから、はじけ豆を貰ひてえ。
たえ　田舎の者は慾氣がない。はじけ豆が喰べ度くば、お前にちつと上げように。
お豆　ちつとと言はずたんと下せえ。
たえ　一升あるからたんと上げるが、入物があるかえ。
お豆　はい、爰へ入れて下さりませ。
　ト袂を出す、おたえ袋の口をあけ、一と掴豆を袂へ入れてやる。
　これは有難うございます。
たえ　見世へ行くなら掻巻と、枕を持つて來るやうに、女

中条にさう言つておくれ。
お豆　あい〳〵、おらが持つて來てやるべい。
　ト お豆は袂を押へ下手へはひる。おたえお条を見て、
たえ　酒に醉ふとこんなにも、不斷と所業の違ふものか、あした醉の醒めた所で、とつくり異見を言はねばならぬ。
　ト 爰へ下手よりお豆、小搔卷と枕を持つて來り、
お豆　あい、搔卷と枕を持つて來たよ。
　ト そこへ投り出す。
たえ　あ、これ、埃が立つていかないのに。
お豆　こりや、惡かつた、御免なせえ。
　ト 手をついて詫びて、
どれ、はじけ豆でも食ふべいか。
　ト 下手へはひる。おたえお条に枕をさせ搔卷をかける。此内花道よりおやま出來り、
やま　もし、只今お歸りなさいましたお客樣が、お前樣にちよつとお目にかゝりたいと、帳場にお出でなさいますから、いらつしつて下さいまし。
たえ　それぢや一緒に行きませう。
やま　おやお条さんは、お休みなさいましたね。
たえ　大へゞれけで困りますよ。

　ト 端唄の合方にておたえおやま捨ぜりふにて話しながら花道へはひる。よき程に本釣鐘を打込み、誂への合方になり、お条顏を上げ、あたりを見廻しそつと起上り、亂れし鬢の毛を手で搔き上げながら、向うへちつと思入あつて、
お条　酒に醉つたを幸ひに、心にない愛想づかし、嘸腹が立つたでありませうが、お前と無理に緣をきつたは、おかみさんがおいとしいゆゑ、どうぞ堪忍して下さいまし。
　ト 手を合して拜みながら泣き伏す。爰へ上手より、九郎兵衞、笑藏拔足にて出來り、そつと傍へ寄り、
九郎　さあ、女房になると言つたからは、奧へ行つて一緒に寢よう。
　ト お条の手を取るを振り拂ひ、
お条　ふざけた事をお言ひでない。誰がお前と寢るものか。
九郎　それぢやあ、さつき言つたは嘘か。
お条　醉つて言つたは西の海へ、さらりと流してしまひよ。
九郎　そんな事を言はないで。
　ト お条にうしろから抱きつくを振拂つて突く、九郎兵衞どうと下にゐる。此拍子に袋の口から豆出るをお条取

巳つて
お粂　これで惡魔を。
ト九郎兵衞立ちかゝるを、豆を打附けるを木の頭。
鬼は外〳〵。
ト又生醉の思入にて、兩人へ豆を打附ける、賑かな鳴物にてよろしく。
ひやうし　幕

五　幕　目

大川端箱屋殺の場
同水月樓帳場の場
久松町親子別の場

〔役名〕＝水月のお粂、金井傳之助、水月の雇人巳之吉、人力車夫千助、水月雇人喜助、人力車夫萬吉、店の手代三木藏、水月の雇婆お虎、同女中おせん、同おはま、巡査四海靜、同天下平、同市中繁。

〔濱町川岸の場〕＝本舞臺一面の平舞臺、上の方黑塀、樹木の植込み、下の方渡船場の小屋、正面石垣の小口を見せし低き地がすりの張物、後ろ大川御船藏前の川岸を見たる夜の遠見、總て濱町川岸の體、爰に人力車夫千助、同萬吉、車夫の拵へにて人力車へ腰を掛け、長提灯を灯し、マッチで煙草を呑み居る。此見得端唄へかすめて浪の音を冠せ、幕明く。

千助　こう五月雨布子とよく言ふが、此間からの暴風續きで、時候が狂つてめつぱふ寒い、それに爰が吹き曝しだから半纏ばかりぢやあ居られねえ。
トケットを引掛ける。
萬吉　天氣になつて嬉しいと、思つてたつた一日だ。晝から上げに吹込んだ南風が東風に替つたからは、今夜も今に水晴れだ、降らねえ内に歸へでも、持込み仕事があればいゝが。
千助　八時過ぎから往來の、人の少ねえ濱町川岸、惡くすると蠟燭損で、あぶれて歸らにやあならねえぜ。
萬吉　昨夜水月のお客を載せて、十錢酒手を貰つたから、今夜も爰へ出て來たが、早くお客に有りつきてえ。
千助　その水月のお粂さんといふ、藝者上りの中年增は、ぞつとする程いゝ女だな。
萬吉　柳橋でも新橋でも、流行つたゞけお客が多く、よく

遊んで歩くさうだ。

千助　さつきも若い衆の話しだが、五日後に家を出て、先から先を泊り歩き、未だに内へ歸らねえさうだ。

萬吉　それと言ふのも贔屓が多く、たいした金になる所から、氣儘遊びに遊ぶのだらう。

千助　それに引きかへこちとらは、朝から晩迄藻掻いても、五十錢といふ錢を取るにやあ容易な事ぢやあねえ。

萬吉　何でも今の世の中は、女でなけりやあいけねえな。

ト右の鳴物にて、下手より酒屋の手代三木藏、羽織着流し、前垂、駒下駄、新川の若い衆の拵へにて出來る。

千助　もし旦那、御都合迄參りませう。

三木　廓へ行くのだが、いくらで行く。

千助　二十錢下さいましな。

三木　爰から一里ない丁場、二十錢は餘り高い、まあ廣小路迄歩いて行かう。

千助　どうで言ひ値でお乘りなさるお客樣はござりませぬから、いくら下さいますか、お附けなすつて下さりませ。

三木　いつも十五錢で乘るから、それでよけりやあ乘つて行かう。

千助　もう二錢下さいまし。

三木　二錢ばかりどうでもいゝから、大藻掻きでやつてくんねえ。

千助　畏りました、骨を折つて參ります。ちよつとお待ちなすつて下さりませ。

ト渡の小屋から、藁を二本持つて來る。

三木　なんだ、鬮引きか。

千助　さあ、長い方だぞ。

萬吉　どうか貰つて行きてえものが。

ト藁を引く、千助我が藁を見て、

千助　えゝ、いめえましい、短い方だ。

萬吉　それぢやあおれが當つたか、氣の毒だがおれにくんねえ。さあ旦那、お召しなさいまし。

ト一人乘の車を前へ出す。三木藏乘る。萬吉轅棒を上げ、

三木　中米へやつてくんねえ。

萬吉　畏りました。

ト右の鳴物にて萬吉車を曳き、下手へはひる。千助跡を見送り、

千助　どういふものだか籤を引いて、遂に勝つたことがねえ。此の運勢ぢやあお客もあるめえ。宵から一挺つぎけえたが、此蠟燭の立たねえ內、空を引張つて歸るとせう。

　ト雨車になり、

たうとうぼら／＼降つて來た。是が泣きッ面に蜂といふのだ。

　ト千助笠を冠り、車を曳出さうとする、右の端唄にて上手より、前幕のお粂蛇の目の傘をさし、下駄がけにて出て來る。千助見て、

もし、御都合迄參りませう。

お粂　わたしは此處の者だから、車には乘らないが、ちよつと使に賴まれておくれな。

千助　こりやあ水月の姉さんでございますか、どうであぶれて歸る車、何處へでも參りますが、してお使に參る先は。

お粂　お前わたしを知つておいでか。

千助　每日川岸に居りますから、お顏は存じて居ります。

お粂　知つておいでなら家へ行つて、巳之吉さんがおいでなら、お目に掛りたいといふ人があるから、ちよつと爰迄來てくれと、わたしと言はずに呼出しておくれ。

千助　畏りましてござります。

　ト千助提灯を置いて下手へはひる。お粂思入あつて、

お粂　お父さんと言ひ爭つて、內を出てから今日で五日、あんまり遊び過ぎたので、なんの中でも閾が高く、只はひるのもはひり憎いから、巳之吉を呼出して、家の樣子を聞いた上お父さんが眞以つて、腹を立つておいでなら、わたしも思案しにやあならない。

　ト下手より千助出來り、

千助　お見世へ參つてさう申したら、女中衆が取次いで、巳之吉樣といふお方が、帳場から出て來なさいまして、今參りますとおつしやいました。

お粂　そりやあ內にゐてよかつた。こりやあ今のお禮だよ。

　ト鼻紙の間に十錢札を出してやる。千助取つて、

千助　こんなには入りませぬ、二錢もお貰ひ申しませう。

お粂　おあしがないから、取つてお置き。

千助　そりやあ有難うござります。今夜は仕事の鬮に負け、空を曳いて歸る所、思ひがけない十錢札、これでしまつて歸ります。

お粂　たんと降らない内がよいよ。
千助　然しお前さんお一人でお淋しうございませう。巳之吉樣とやらが來なさる迄、お待ち申してをりませう。
お粂　なにそれにや及ばないから、わたしに構はず早くお出で。
千助　左樣なら、御免なさいまし。
　ト右の鳴物にて千助車を曳いて下手へはひる。時の鐘誂への合方になり、お粂思入あつて、
お粂　浮世の義理にからまれて、別れともない丹次郎さんに、愛想づかしを言ひかけて、綺麗に別れてしまつたから、御苦勞掛けたおかみさんへ、言譯は立つたけれど、今となつてはつまらぬ身の上、内へ歸るも歸りにくゝ、池上を出て又根岸の、溫泉へ來て泊つてゐたが、夜の目もろく／＼寐られぬ苦勞、どうした物と考へれば、いゝ智慧は少しも出ず、心柄とはいひながら、親兄弟にうとまれて、命を掛けて言交した男に別れてしまつたからは生甲斐のない體だから、いつそのことに身を投げて、死なうと思ひ詰めたれど、また考へれば是迄に、氣隨氣儘を言ひ通し、親に苦勞をかけたわたし、また其上に命を捨て、嘆きをかけるは不孝の上塗り、身の詫びをして歸らうかと、門迄來たがはひりにくゝ、内の樣子を巳之吉に、聞いての上と呼びにやつたが、もう今夜も十時過ぎ、早く出て來てくれゝばよいが。
　トお粂あたりを見廻し、早く來ればよいといふ思入、右の合方にて上手より、巳之吉着流し、下駄を履き、番傘をさし出來り、
巳之　今降つてゐたと思つたが、雲切れで止んだわえ。
　ト傘をすぼめ、
此巳之吉に用があると、呼びにおよこしなすつたは、どなたでござります。
　トお粂傘をすぼめて、
お粂　巳之どんわたしだよ。
巳之　誰かと思つたら、姉さんか。
お粂　あゝ、わたしが呼びにやつたのだよ。
　ト誂への合方、かすめて浪の音になり、
巳之　此間親方と言爭つた其果が、いつもの傳で内を出て、それきりなしのつぶてもなく、今日で五日になりますが、何處へ行つてお出でなさいました。
お粂　知つての通り肺病下地で、兎角ふさいでならないから、惡いと知りつゝ御酒を吞み、氣を晴らすのが毒とな

り、段々重るばかり故、身の養生に池上の、朝日樓へ行つてゐたのさ。

巳之　さういふ事なら郵便で、内へお知らせなさればよいに、さうとは知らず所々方々どんなに尋ねたか知れませぬ。

お粂　そりやあ氣の毒なことだつたね。こんなに長く逗留をする氣でもなかつたから、郵便を出さなんだが、つい浮々と日がたつて、のろりと歸りにくいから、お前を爰へ呼出したのは、内の樣子を聞きたいから。お父さんはおこつてゐるかねえ。

巳之　お察しの通り大おこり、それといふのも外ではない、あれから今日迄引續き、お客樣が立込んで、忙しいので手は廻らず、お粂が内にゐたならば、こんなに困りもしめえのに、仕馴れぬおれに手をつかせ、あんな憎いやつはない、誰が詫をしようとも、今度は内へ入れないと、おこつておいでなさいます。

ト　お粂むつとせし思入にて、

お粂　何もそんなにお父さんがおこりなさるにやあ及ばない、待合茶屋をはじめたも、初手からわたしは氣が乘らぬを、無理に勸めて出した見世、三日や五日明けたとて内へ入れるの入れないのと、そんなに言はなくつてもよいぢやあないか。

巳之　そりやあお前さんが初めから、氣がのらなくもござえませうが、折角出した此の待合、その心棒が内にゐず、來る度毎に留守な日には、遂にはお客のお出でも少なく、さうなる時には御贔屓のお客に對して濟みませず、立派に飾つて開業した見世の瑕になりますぜ。それだから親方が、お前さんが明けるをやかましくおつしやるのだ。

お粂　そんな事を言はれるのが、初手からわたしや厭だから、待合などは仕度くないと、お父さんに言つたのを、何でもかでも廢業して待合茶屋を初めろと、兄貴と親父に勸められ、せう事なしに初めたのだ。わたしだつて子供でないから、内をあけて惡い事も知つてゐれどお馴染の、ついお客に引張られ、二日が三日になつたのだ。わたしが居なくて困るなら、やかましい事を言はないで、内へ入れたがいゝぢやあないか。

巳之　内へ入れぬとおつしやるのも、お前さんを思ふから。惡く聞いちやあいけませぬ。

お粂　それぢやあ親父はほんとにおこつて、わたしを内へ

入れないか。

巳之　今も言ふお前さんが、内にお出でなさらねば、お客が少なくなる事だから、お歸しなさるに違ひはないが、内を明けての夜泊りも、一度や二度ぢやあござりませんから、何か一つ詫をする誓をお立てなされませ。

お粂　なに、わたしに誓を立てろとは。

巳之　お前さんの浮かれ遊びも、元の起りは酒ゆゑだから、氣運び水に縁のある、水天宮樣へ誓ひを立つて酒をお斷ちなさいまし、さうしたことなら私が、それを規模に親方へ、お詫をいたして上げませう。

ト　お粂癪に障り、思入にて、

お粂　まだ半玉の時分から、呑まずにゐられぬ好きな酒、それを止める位なら死んでしまふ方がいゝ、是が老朽ちた身ではなし、恥を捨てゝ再勤すれば、此東京は言ふに及ばず、遊山半分湯場あるき、暑さ凌ぎに函館の果へ行つても藝の德、三絃とつて座敷へ出れば、氣儘に浮世の渡れる驅、御贔屓になるお客方を捨て行つては濟まないから、心の合はない親仁の内へ、詫びをして歸るのだ、只此儘に歸れるなら、無沙汰に五日内を明けた、詫はしようが好きな酒を、斷つのはわたしや眞平だ、就いちやあ箱屋のお前なぞに、詫びをして貰つたら、生涯人に言はれ草、此身の榮譽にかゝはるから決して詫は頼まないよ。

ト　巳之吉思入あつて、

巳之　いえ、そりやあお頼みなさらずば、强ひてしようとは言ひませぬ。噂を聞けば池上の朝日樓で酒に醉ひ、愛想づかしを言募り、丹次郎さんと切れたとやら、向ふもこゝらがよい潮と、切れたは餘程目が高い、一緒に行つたおたえさんも體よく其場を逃げてしまひ、後に殘つてつまらなく、木挽町の長谷川や米澤町の福田屋へ行つても泊れと言はれないので、根岸へ行つて温泉に泊り込んでゐなすつたさうだが、長くもゐられず仕方なく、内へ歸つて來なすつたのだらう。お前はいゝ氣でゐなすつても、何處の内でも鼻つまみ、口程心に惡はないが、あんまり目先が見えない話しだ。

ト　お粂きつとなつて、

お粂　これ、手前はおれをなんだと思ふ。奉公人と主人だぞ。日吉町にゐた時分、新富町を追出され、行く所がなく困ると言ふから、内箱にして置いてやり、着類は元より持物まで、出來たは誰が蔭だと思ふ。その大恩を忘れ

てしまひ、主人に向つて失敬だよ。人の事より手前こそ、如何に引込んでゐればとて、あんまり目先が見えねえぜ。
巳之　そんな強い事を言つても、もう今夜も十時過ぎ、これから泊る所があるまい。何處へ行つて寐なさる氣だ。
お粂　むゝ。
　トぎつくり思入。
巳之　なんぼお前があばずれでも、一人のこ〳〵旅籠屋へ泊ることは出來ますまい。
お粂　なに、泊られないことがあるものか。
巳之　爰ら近所で評判の、水月樓のお粂さん、寐所に困つて旅籠屋へ、泊るはあんまり智慧がない。こつそりしたいゝ所へ、今夜泊めて上げますから、わたしと一緒にお出でなさい。
　ト手を取るを振拂ひ、
お粂　誰が一緒に行くものか、親父が内へ歸さなけりやあ、何處へでも行つて泊るから、よけいな世話を燒きなさんな。
巳之　餘計な世話を燒き度いも、お前さんのためを思ふからだ。
お粂　えゝ爲を思ふもないものだ、聞けば此頃親父に竝んであんなものはゐねえはうがいゝと、手前が惡く言ふさうだが、以前の事を考へたら、言はれた義理ぢやアあるまいに、見下げ果てた恩知らずだ。
　ト傘を持つてずつと立つ、巳之吉傘をとらへ、合方替つて、
巳之　もし姉さん、何で惡く言ひませう。そりやあ親方が腹を立ち、おこつておいでなさる時は、座なりに惡くも言ひますはしづめる爲めでござります。内へお出でのお客樣はみんなお前さんを贔屓のお方、なんでゐない方がようございませう。惡く言ふのもよく言ふのも、御恩になつたお前さんを大事に思ひますからだ。
お粂　えゝ、いゝ加減な事を言ふな。親父が内へ入れねえのも、手前が邪魔をするからだ、みんな人に聞いてゐるぞ。
巳之　誰がなんと言ひましたか、言つた人をお言ひなせえ。
お粂　手前に言ふにやあ及ばねえ。
巳之　いゝえ、聞かにやあなりませぬ。
　ト巳之吉傍へ詰寄るを、

お粂　えゝ、うるさいやつだ。
ト巳之吉の顔をぴつしやり打ち、
巳之　あゝ痛い、何で面をぶつのだ。
トお粂の肩を突く、これにてたぢ〳〵としてどうと下にゐる。此時帯の間より庖刀を落す。巳之吉目早く取上げ見て、
やあ、こりや出刃庖刀だね。
トお粂此上り庖刀を引取り、きつと思入。
なんで庖刀を持つてゐなさるのだ。
お粂　入用だから持つてゐるのだ。
巳之　お前さんは酒に醉ふと、神經が狂ひ出して、刃物三昧をするのが癖、此庖刀を帯の間へ隠して持つてゐなすつたは、人の噂を誠と思つて、わたしを恨んで切んなさる氣か。
お粂　え。
トお粂ぎつくり思入。
巳之　見りやあ新しいその庖刀、何處で買つたか知らねえが、切る氣で買つて來なすつたらう。
お粂　むゝ。
巳之　人を殺すと命がねえ、馬鹿げたことをしなさんな。

ト巳之吉きつと言ふ、お粂思入あつて、
お粂　この庖刀を持つてゐるのは、人を切るためぢやあない、言交してゐた丹次郎さんと、浮世の義理で別れて、しまひ、樂しみのない體ゆゑ、お父さんに餘所ながら、暇乞ひをした上で、死なうと思つて買つた庖刀、誰が人を切るものか。
巳之　いや、さう言ひなさるは、そりやあ嘘だ。なんでも切る氣に違えねえ。
お粂　今はかういふ身になつたが、わたしも産れは士族の娘、首をくゝつたり身を投げたり、形の惡い死にやうがし度くないから庖刀で、立派に自害をして死ぬ氣だ。
トこれを聞き、巳之吉思入あつて、
巳之　いや〳〵それはてれかくし、慥に切る氣で庖刀を、持つてゐたに違えねえが、人を殺しやあ命がねえ、わるい心を出さないで、その庖刀を渡しなせえ。
お粂　此の庖刀を持つてゐるのは、まさかの時の用心だ。なんでこれを渡すものか。
トハンケチへ包み、帯の間へ挟む。
巳之　渡さねえと言ひなすつても、譬にも言ふ氣違ひに、刃物は持たして置かれねえ。

お粂　これ、氣違えとは、誰のことだ。
巳之　誰でもねえ、お前のことだ。
お粂　えゝ、ふざけたことを言やあがるな。
　トきつと言ふ。
巳之　もう此上は、腕づくで。
　ト浪の音になり、巳之吉庖刀を取りにかゝる。お粂巳之吉を突く、これにてたぢ／＼となり、お粂帶をきつとしめる。巳之吉尻を端折り、双方きつと見得、是より浪の音を打込み、船唄の心にて音頭模樣の唄になり、巳之吉又立掛るを傘をとつて拂ひのけ、又庖刀を落す。是を取らうと庖刀をかせに立廻りあつて、お粂、巳之吉を突く、巳之吉どうと下に居る。此間お粂庖刀を取つて、巳之吉を寄せまいと振廻す、巳之吉これを取らうとする立廻りに、巳之吉の脇腹を突く、巳之吉あつと言つてどうとなり。
　こりやあ、おれを突きやあがつたな。
お粂　えゝ。
　トびつくりする。巳之吉起上り、糊紅になり、ひよろひよろと上手へ逃げてはひる。お粂息が切れ、口の利けぬ思入、庖刀の先の血を見てびつくりするを道具替りの知せ、ぶる／＼顫へる。この模樣蒸汽船の汽笛、浪の音にて此道具廻る。

（水月内入口の場）——本舞臺四間常足の二重、向う一間中仕切りのある戸棚、この脇酒樽二つ積み重ね、續いて燗德利、酒道具を載せし棚、上手障子出這入り、上の方後へ下げて奥へ行く廊下口、下の方平舞臺一間腰障子の後ろを見せ、明立て出這入りあり、總て水月入口内の體、爰に三幕目の金井傳之助帳場で帳を調べてゐる。此前へ誂らへのランプを提げ、下手におせんおはまの女中、お虎の婆、燭臺煙草盆を片附けゐる。時の鐘、端唄の合方にて道具留る。

傳之　清水樣はいつにない、大層お醉ひなすつたやうだ。何もお忘れ物はなかつたかの。
せん　卷煙草入とハンカチを、お忘れなさいましたから、戸棚へしまつておきました。
傳之　あした又お出でなさるから、忘れぬやうにお上げ申せ。
せん　きつとお渡し申します。
はま　巳之どんは、何處へか參りましたか。

傳之　今しがた車屋が、呼びに來たが、何か用があるのだらう。

はま　もう十一時でござりますから、表をしめませうか。

傳之　何處へ行くとも言はなんだが、もう今に歸るだらうから、表は明けておいてやれ。

お虎　巳之どんも此頃は、色でも出來たと見えまして、いつも浮れてをりますから、呼出しにでも來ましたのだらう。

傳之　諸事萬事に拔目なく、小氣轉の利いた男だが、女に思ひ附かれるのは、ちつとむづかしい方だな。

お虎　いえ／＼さうは言へませぬ。おはまどんに、首ッたけでござります。

はま　又をばさんがそんな事を、自分が惚れて ゐるくせに。

傳之　此おはまが首ッたけになるのは、たゞの据風呂ぢやあむづかしいな。

お虎　濁り酒屋の造り樽がようござります。

はま　そんなに脊丈が高くはありませんよ。

せん　胴から二つに切つたらば、人並でござりませう。

はま　お前迄が同じやうに。

ト脊中を打つ。

傳之　いや、無駄を言はずと奧の間の、掃除を早くしてくれろ。

はま　畏りました。

せん　どれ、掃除をしてしまひませう。

ト兩人上手へはひる。

傳之　お前は奧の火の元を、よく見廻つてくんねえよ。

お虎　そりやあ年寄の役でござりますから、よくわたしが見廻ります。

傳之　昨夜も寐たのが二時だから、おせんやおはまは掃除をしたら早く寐かしてやるがいゝ。

お虎　睡がり切つてをりますから、大悅びでござりませう。どれ、早く知らしてやりませう。

ト お虎奧へ這入る。傳之助思入あつて、

傳之　十一時はさつき打つたが、巳之吉はどこへ行つたか酒を呑まねえ男だから、長くゐる譯はないが、是につけても五日跡、出たぎり內へ歸らねえ、お粂は何處に遊んでゐるか、親に苦勞をかけるのも、一つは酒のする業だ、昨夜の夢見が惡いにつけ、案じられるは親子の情、もし間違ひでもありはせぬかと、兎やかう思ふ其のせい

か、さつきから胸騒ぎ、早く歸つてくれゝばよいに。
ト時の鐘、床の淨瑠璃になる。
〽五月雨に軒の玉水ほと〳〵と、庇へあたる音さへも、もしや娘が歸りしかと、案じわづらう門口を、明けて駈込む血みどりの、お粂をそれと知らざれば、
ト傳之助案じる思入、ばた〳〵にて下手の障子をあげ、以前のお粂駈込み、障子をしめほつと思入。
巳之吉か。
〽言へど答へのあらざれば、合點行かずと立ち出でゝ、
トお粂默つてゐるゆゑ、傳之助帳場より出て、お粂を見て、
や、お粂ぢやあないか。
お粂　あい。
ト床の合方になり、お粂おど〳〵と二重へ上り、肩で息をしてゐて。
おとつさん、とんだ事をしました。
傳之　とんだ事をしたとは、何をしたのだ。
ト言ひながら、庖刀を見て、
や、出刃庖刀を持つてゐるが。
トあたりを見て、
人でも切つたか。
お粂　あい。
〽言はんとなせど、おど〳〵と、息切れなして言へざれば、庖刀とつて突込みし、仕方をなすに父親が、
トお粂口のきけぬ思入にて庖刀をとり、突込みし仕方をする。傳之助思入あつて、
傳之　それでは人でも、殺したか。
お粂　あい。
傳之　えゝゝゝ。
〽びつくりなして思はずも、尻邊にどうと鳴る鐘の、臆に時打つ思ひにて、あわてゝ門の雨戸を〆め、泣きゐるお粂を引起し、
ト傳之助びつくりしてどうとなり、思入あつて下手入口の戸をしめ、さるをおろし又奥口を見て、泣伏しゐるお粂を引きおこし、床の合方にて、
さうして、誰を殺したのだ。
お粂　巳之吉を殺しました。
傳之　何で又殺したのだ。
〽問へどせわしき息切れに、あり合ふ水を呑ますれば、やう〳〵に息をつき、

トお粂口のきけぬ思入、傳之助藥鑵の水を茶碗へ汲み吞ませる。お粂思入あつて、

お粂　内の樣子を聞かうと思つて、今巳之吉を表へ呼出し、一つ二つ話す内、憎まれ口を利くゆゑに、つい聲高に言募り、假にも主人へ惡口するのは、憎いやつだと思ふ折、わたしが買つて持つてゐた、此庖刀が互ひの災難、女心に目もくらみ、爭ふはずみに脇腹へ、

〽突込みましたと泣きふせば、聞く父親は途方にくれ、

ト傳之助情ないといふ思入にて、

傳之　そりやあ飛んだことをしたな。酒に醉ふと神經が狂つて刃物三昧をするのが常から癖だつたが、今更小言を言つたとて、殺した上は仕方がない、さうして是からどうする氣だ。

お粂　人を殺した上からは、脱れることは出來ませぬから、自首する心でござります。

傳之　むゝそりやあいゝ了簡だ、人殺しの犯罪は、自首の效がないとはいふが、萬に一つお慈悲をもつて助かるまいものでもない、少しも早く行くがいゝ。

〽自首を勸むる父親の、心の内を察しやり、

お粂　これ迄長年御苦勞かけ、知りつゝ不幸をした果が、又もやかゝる御苦勞かけ、濟まぬことをいたしました、今といふ今目が覺めて、後悔をいたしますが、もうかうなつては是迄の、御恩送りが出來ませぬ、これも因果と諦めて、どうぞ堪忍して下さりませ。

〽涙にくれて詫びければ、

傳之　かうして立派な待合を出したもみんな手前の働き、それゆゑ酒に醉つての上の、氣隨氣儘をそのままにして置いたのが害となり、たうとうこんな事を仕出かし、多くもあらぬ兄弟の、賴みに思ふ手前をば、殺してしまふおれが悔しさ、じだんだ踏んでも仕方がない。

〽拳を握り咳入りて、悔み嘆けばすがりつき、

ト傳之助悔し泣きに泣く、お粂すがり附き、

お粂　此御苦勞を掛けまいと、直に屯へ駈込んで、自首しようと思ひましたが、此世の別れにたゞ一と目お目にかかつて行き度いゆゑ、御苦勞かけに參りました。

〽又も涙にふし沈む、折から門の雨戸をば、あわたゞしく打ちたゝき、

ト下手入口の戸を外よりたゝき、

車夫　お賴み申します、車屋の彌一から參りましたが、今お内の巳之吉さんが脇腹を突かれて、私共へ駈込んで來

なさいましたが、助かりさうござりませぬから、ちよつとお知せ申しまする。

ト此内傳之助お粂を帳場のうしろの戸棚の内へ隠し、戸をしめながら、

傳之　そりやあとんだことであつた、今こつちから行きますから、醫者にかけて下さいまし。

車夫　はい〳〵、畏りました。

〽言ひ捨て車夫は駈けて行く、ところへ立ち出る若い者、

トばた〳〵にて車夫歸りし心、奥より三幕目の雇人喜介出で、

喜介　もし親方、巳之どんが切られましたか。

傳之　今おれが後から行くから、横町の車屋へ一足先へ行つてくれ。

喜介　どんな様子か、見て參りませう。

傳之　行くなら頼む用がある。

ト囁く。

喜介　むゝ、承知しました。

〽尻はしをつて戸口を明け、一目散に駈けて行く、後にお粂は立出でゝ、

ト喜介は下手の戸を明け出て行く、傳之助しまりをすろ。お粂戸棚の内より前へ出て、

お粂　今車屋の知せでは、死にきらないと見えますね。

傳之　何しろ巡査方が爰へお出でのない内に、警察署へ自首して出ろ。

お粂　少しも早く行きませう。

傳之　行つたら事實の違はぬやう、有體に申上げろ。

お粂　あい。

〽あいとばかりに立上りしが、顫へる足に歩みかね、

トお粂立上り歩けぬ思入にて、

ゑゝ女の甲斐ない心から、足が顫へて歩けませぬ。

傳之　おゝ尤もだ、歩けまい。おれが連れて行つてやらう。

お粂　どうぞさうして下さいまし。

傳之　さあ一緒に來い。

〽小脇へ手を入れ引立てゝ門へ出かゝるその所へ、

ト傳之助お粂の小脇へ手を入れ引立てる、奥よりお虎出て、

お虎　おや姉さん、お歸りなさいましたか。さうして何處へお出でなさいます。

傳之　ちよつとそこ迄行つて來るから、後をよく氣をつけろ。

お虎　はい、畏りました。
傳之　火の用心が、
　ト　お粂を引立て、
第一だぞ。
〽これが此家の見納めと、見かへるお粂を引立てゝ、分署をさして、
　トお粂見返りよろしくあるを、傳之助留める。時の鐘三重浪の音を冠せ、此道具廻る。

(警察署の場)＝本舞臺一面の平舞臺、正面誂への門、ランプをつけ、扉左右へ開き、左右草土手鐡の矢來、樹木の植込み、後へ下げて煉瓦造り、白壁警察署の體、門の外に巡査の天下平、市中榮吉の二人、白の夏服、サアベル角燈を持ち、立掛りゐる。合方時廻りの木の音にて道具留ると、合方にて、下手より巡査四海靜同じ拵へにて出來り、

四海　こりや御兩氏にはいづれへでござる。
天下　只今大川端の渡船場で、同所の待合水月の雇人巳之吉と申す者が、脇腹を突かれしと訴へによつて出張いたす。
市中　重傷であるさうだが、未だ絶命なさゞるよし、何者の仕業なるか、息あるうち問ひ糺さん。
四海　それは御苦勞千萬でござる。
天下　是よりかしこへ出張いたせば、
市中　後を宜しくお頼み申す。
四海　承知いたした。
天市　いざ參らう。
　ト右の合方にて上手へはひる。
四海　何者の仕業なるか、待合茶屋水月の雇人とあるからは、物取りとも思はれぬ、何か意趣でもあつてのことか、今兩氏が參られたれば、やがて確報があるであらう。
　ト署の内へはひる。床の淨瑠璃になり、
〽宵に降つたる雨ゆゑか、往來のなきを幸ひと、雲間の星の川水に、映る影さへ薄き緣、娘お粂を父親が、やうやう川岸へ伴ひ來て、
　ト此内本釣鐘を打込み、よき程に上手より以前の傳之助お粂を、小脇へ手を入れ引立て出來り上手にて、
傳之　よい鹽梅に往來もなく、誰にも見附けられなんだ。
お粂　もう爰でようござりまする。
傳之　此期に及んで其樣に、遠慮するには及ばない。

お粂　それでもお氣の毒でございますもの。
傳之　おれに氣の毒だなどゝいふのは、そりやあ不斷言ふ事だ。そんなつまらぬことを言はずと、さつきもおれが言つた通り、自首したら有體に言へ。
　トお粂、署へ指さし、
お粂　あそこへ行つて、言ひますのか。
傳之　よく氣を落着けて最初から、順序の前後しないやうに、ありていに言ふがいゝ。もし巳之吉が死んだらば、人殺しの犯罪ゆゑ、助かるか助からぬか知れぬ體、人の難儀にならぬやう、心をつけて申し上げろ。
お粂　あい、それは承知してをります。
傳之　巡査方に見られぬ内、おれは早く内へ歸らう。
お粂　どうぞさうして下さりませ。
〽言へど名殘の惜しまれて、離れともなき恩愛の、きづなに引かれ父親も、
　ト兩人名殘を惜しむ思入よろしくありて、
傳之　かうして再び話が出來るか、出來ぬか知れぬ、親子の仲、
お粂　所詮脫れぬ罪科ゆゑ、
傳之　多分は此世の別れとなれば、

お粂　これがお顏の、
兩人　見納めなるか。
〽思へば果敢ない身の上と、親子手に手を取交し、空に知られぬ五月雨の、涙の雨に樋竹の水もあふるゝ如くなり。
　ト兩人手を取交し愁ひの思入よろしくあつて、
〽お粂は心はげまして、
お粂　いつ迄泣いても名殘は盡きぬ、却つて未練が起るから、早う歸つて下さりませ。
傳之　自首するのを見屆けたいが、さういふ事なら直に歸らう。
〽思ひ切つても愛情に、後へ心の引かされゝば、お粂も同じ思ひにてふりかへり見る顏と顏、鳴き殘してか一聲の死出の田長ともろともに、血を吐く思ひ駈入りて、
　ト此内傳之助上手へ行く、お粂は門の方へ行き、兩人ふりかへり、顏を見合せ泣く、此時日覆で時鳥笛になり、お粂きつと思入あつて、つか〱と門の内へはひり、
お粂　はい、申上げます。
　ト此聲を聞き、傳之助ぎつくり立留る。
自首いたす者でござりまする。

〽言ふを名殘に、
ト傳之助ほつと思入、署の内より四海靜出る。三重時鳥笛にて、
ひやうし幕

六幕目

上等裁判所表門の場

〔役名──金井お粂、代言人須野田金平、金井傳之助、僞官員高山登寶は百姓新屋の太郎作、深見丹次郎、支那人寶藥橋、講釋師百圓、書生大森道景、同池上保明、吳服屋手代貝三郎、三間堀の船頭千太、水月の若い者喜介、浪花節の太夫出子丸、百姓金町の田五平、傍聽人大勢、小澤おたえ等。〕

（永樂町上等裁判所の場）──本舞臺眞中九尺白ペンキ塗り西洋形の表門、柱に東京重罪裁判所と記したる板札、上手ペンキの柵矢來、下手表門へ附いて四尺程の門一枚開き、此内門番所の横手、下手一面やはり白ペンキの柵矢來、裾通り溝の見切り、正面西洋館、樹木植込の中遠見平舞臺の上手九尺屋根附きの揭示場、裾通り駒寄せ、總て永樂町上等裁判所の體、廻りの木直ると、十二時の本鐵砲を打ち、後鎭臺のラッパの音にて、わや〳〵と聲して幕明く。

と正面門にて、わや〳〵言ふ、此時うしろにて、

官吏 さあ〳〵無札の者は出んか〳〵。

大勢 やあ〳〵〳〵。

ト騷ぐ、是れにて下手の門の扉を明ける。内より三階中二階惣出の仕出し、思ひ〳〵の拵へにて捨ぜりふにてつぶやきながら押出され、又はひらうとして、戻され、わや〳〵と上下へはひる。此内浪花節の太夫出子丸長い散髮鬘、廣袖のれんれこ半纏、書生大森道景、同池上明保書生襟卷書生羽織、朴齒の下駄ステッキを突き、三十間堀の船頭千太、長半纏の上へ羽織を着、支那人寶藥橋卷物の風呂敷包みを抱へ跡より僞官員高山登、高帽子洋服にて出來り、皆々汗を拭きながらホッと思入、飴賣のちよいと〳〵の合方になり、

大森 君、もう一遍傍聽を請求いたさう。あまり馬鹿々々しくて物が言へん。

池上 おゝ僕贊成ぢや、同伴いたさう。

出子 一旦はひつたものを押し出されたのだから、あなた

方がおはひりなされば、わたくしどももはひられませ
ぬ。

千八　まだよつぽど中にゐるのに、おらッちばかり出すと
いふはねえ。

實葉　書生さん、もう一遍頼むよろしい。

大森　おい各活潑にやれ。

池上　よろしい。

出皆　さあ、行きませう〳〵。

ト下手の門へ行かうとするを、高山止めて、

高山　暫くお待ちなさい。さう罵詈して暴行をやつてはい
かん。是は其の手續をもつて、順序に事をなさば、騒が
ずともよろしい。わしが願つて見よう。

ト言ひにくさうに漢語を遣ふ。

實葉　あなた聞いて下さいますか、それは澤山御苦勞さま。

出子　それではお手數でも、お願ひなすつて下さりませ。

高山　なに、造作もないこつちや、どだい門内へ無暗に入
るから悪いのぢや、安心さつしやい〳〵。

皆々　それは有難うござります。

ト高山登は鼻の下の髭を撫でながら、落着いてゐる。
ラッパの音になり、花道より代言人須野田金平、羽織
袴靴の拵へにて出來る。後より水月の若い者喜介、羽
織着流し草履此後より車夫手車を曳き出來り、直に舞
臺へ來り、

喜介　もし須野田の旦那様、失禮ではござりますが、ちよ
つと承りたうござります。

金平　なんぢやな。

喜介　わたくしは水月の若い者でござりますが、今日傍聽
に出ましたが、何處の御門からはひりますか、お聞き申
したうござります。

金平　傍聽なら左の方の、小さな門からはひつてよろしい。

ト此内舞臺の下手へ來る。

大森　いや、本日の辯護をする、有名の須野田氏が來られ
たな。

池上　藝妓の處刑は何ぢやらうか、ちよつと聞いて見よう
ぢやないか。

大森　それがよい〳〵。

池上　是は先生、只今御出頭でござるかな。さて本日の被
告の處刑、如何なるお見込みでござらうな。

金平　それはどうなり行くか、宣告にならねば分りませ
ぬ。

大森　然し先生のお見込みはどうでござらうな。
金平　今申す通り宣告までは分りませぬ。
喜介　旦那様、御苦勞さまでござります。
金平　おゝ、貴樣も傍聽に來たかな。
喜介　へい、上手へ行く仕事を斷り、御役所へ聞きに來ましたが、手形が出切つて斷られ、茲にゐる人達は、皆出されましてござります。
賓葉　もしあなたと一緒にはひられませんか。
出子　どうか旦那、願はれますなら、
皆々　お入れなされては下さりませぬか。
金平　到底切符がなうては無駄ぢや、それはわしの力に行かん。
喜介　わたくしは切符がござりますが、此御門から這入ればよろしうござりますか。
金平　おゝ、そこから這入つてよい。
　ト車の上のカバンを取り、
後に迎ひに來いよ。
車夫　へい。
　ト是にてラッパの音になり、金平に喜介附いて門の内へはひる。舞臺の皆々見送り、

高山　今先生の言はるゝ通り、到底切符がなうては及ばんか、あゝ是非もないことぢや。
千八　箱屋殺しの辯護をする、あの須野田さんと、さつきはひつた大河逸藏さんの二人は、當時腕ッこきの代言人だ。
出子　來たくはないが、もし來たら、大河須野田のお二人へ辯護を頼みたいな。
大森　何にしろ先生が、傍聽切符を請求する手續を御承知なら、
池上　どうか急速お願ひ下さい。
高山　いや、さうせいてはいかん、只今僕が歎願いたす。
池上　歎願いたすとはちと其意を得んな、何も久吉の親屬ではなし、歎願する筋はない。若し先生ちと意が違ひませう。
　ト是れにて高山登はッと思入あつて、
高山　いやなに、再願と申したのぢや、たゞ申し違ひであつた。
出子　もうどんを打ちましたから、先が短い、傍聽を仕損なふと、晩の間に合ひませんから、どうかお早くお願ひなさつて下さりませ。

千八　晩の間に合はないとは、お前さん何生業ですね。

出子　わたくしは田舍を歩く、浪花節の太夫でございます。

千八　それでは巳之吉殺しといふ外題で、錢儲けをしなさるのだね。さうして願つて下さる旦那は、どちらへお勤めなさいます。

高山　わしはどこと申して極らぬが、諸官省へ勤める身分ゆゑ、此上等裁判所などは、いくらも知人があるから、たやすく願はるゝよ。

ト矢張り落着いてゐる。

寶業　旦那さん、早く願つて下さい。

高山　それぢやから願つてやるが、今日の間には合はんぞ。

出子　え、さうしていつでござりますえ。

高山　明日の傍聽を願ふと言ふのぢや。

千八　何だ人を馬鹿にしてゐやあがる。

大池　のう〳〵極つたもんぢや。

ト此時門の内わや〳〵して、開きの内より百姓金町の田五平、百姓髷の鬘、羽織着流し、生意氣なる田舍者にて押出されて、ほつと思入あつて、

田五　あゝ無駄ぢや〳〵、骨折損の草臥儲け、所詮いけましねえ。

出子　あゝ、お前さんも押出されたか、見れば遠方のお方のやうだね。

田五　はいわしやあ葛飾郡の金町の者だが、今朝夜明けまで仕事をして、寐ねえで爰へやつて來たが、まだ門が開かねえで、開くのを待つてはひりましたが、切手がなくてはなんねえと、はふり出されてしまひました。

出子　段々お連れがふえていゝ。

ト此内高山態と上手を向き、田五平に顏を見せぬを、田五平覗き込み、

田五　や、太郎作ぢやねえか。

太郎　おゝ、田五平か。

ト餘儀なく聲をかけ、面目なきこなしにて、ハンカチにて汗を拭ふ。

池上　官員ぢやと思うたら、どうやら今の名前の樣子は。

太郎　かう化の皮があらはれては、所詮おツつきましねえから、何もかもぶちまけるが、實は此の田五平が同村の百姓でござるが、漢語を少し覺えた所から、古洋服で東京中をぶら〳〵歩く田舍のなまけもの、證據は未だ切符

ねて、髷がこゝに殘つてをりましッけえ。
ト高帽子を取る、鬘に大たぶさの髷ある。
大森　傍聽願を歎願と言つたが、ちと其意を得ざると思うたが、いよ〳〵本性を顯はしたな。
ト此時又門の內わや〳〵して、
官吏　さあ出んか〳〵、無禮はならんぞ〳〵。
ト矢張りラッパの音にて、門の內より講釋師百圓、散髮羽織袴、靴の拵にて押し出され、跡びつしやりしめる、皆々びつくりなす。百圓しどけなき裝にて、ハンケチで汗を拭きながらほつと思入。
實業　あなたもやつばり鑑札ありませんか。
百圓　いや大分表にお連があるが、僕は一枚持つてゐたのを、押されてどこへか落してしまひました。
太郎　持つてゐたものを落すとは、東京のお方にも似合はない。
百圓　いや、御門內は御存じの通り一と足も踏み込めぬほど、大雜沓をきはめてをりますから、足もろく〳〵運べぬ位、懷中物だけ握つてゐたが、つい札を落しました。
ト此內實業橘、百圓の裾を見やり、
實業　あなた足運べませぬ、袴の穴へ足二タアーッ出てをります。
ト是にて百圓心附き、
百圓　あゝ道理こそ、運べぬ筈だ、內を出る時急いだので、一つ穴へ二本足を入れた。
トあわてゝ袴を直す。
田五　お前さま、どこかで見たお方ぢやの。
百圓　お見覺えがござりませうとも、わたしは松林亭伯圓の弟子で、百圓と申す講釋師でござります。
池上　いやあ、業體熱心と見えて、傍聽に來られたのぢやな。
百圓　今日は朝ッから師匠伯圓などは夫婦連れで參りまして、其外桃林、一山、伯知、燕林、右圓、燕尾それに噺家も居りまして、先づよい顏はたいてい總出でございますのに、婦人の傍聽の內に、藝妓の西洋服などもあり、實に雜沓を極めました。
千八　札がなくて出されたのは、こりやあ諦めもいゝけれど、落したと聞いては、寐ざめが惡いね。
百圓　それに聞いて下さい、師匠が席を拔く時は、わたしが穴を埋めて御機嫌を伺ふので片腕になる百圓、法廷にをりませぬので、師匠が困つてをりませう。

大森　はゝあ、そんなに君は有名な講釋師かな。
百圓　上等社會と突合ひますので、始終貴顯紳士の座敷で、席へ出る間がない位、それゆゑ下等連にはあんまり顏は知られませぬ。
千八　こりやあ御挨拶だ、それでは餘程立派な講釋師だな、おらあ講釋は大好きで、中橋の松川、三十間堀は壽亭、瀬戸物町のも筋違の白梅でも、講釋場はかゝさねえが、あんまり聞いたことがないと思つたら、道理で知らねえ筈だつた。
ト少しむつとする、百圓圖に乘り、
百圓　いゝ所へ出つけると、人力で掛持などは、面倒で出來なくなります。
田五　上等の人の贔屓があつては、今日なぞも知つたお方が澤山中にありましツけえな。
百圓　いやありますとも〳〵、今も代言人の控所へ行つて、金井お粂が辯護をする、大河須野田の兩名に逢つたが、既にさつきあの二人が、裁判長の前に起立して曰く、サ、本日の雜沓に暴行をなすと言へども、其實傍聽をしたいといふ熱心よりいでし事ゆゑ、人民の無禮をせし事は、特別の御宥免を願ふと建言をいたされたが、實にあれらはヒヤ〳〵さね。
ト是を出子丸聞きゐて、
出子　成程一々物知りだが、百圓先生、お前わたしを見忘れたかね。
百圓　え。
トよく〳〵出子丸を見て、
君は何處のお方であつたか、とんと失念しました。
出子　わたしは浪花節になる前に、麻布の方にゐましたが、近所の席へ百圓といふ一枚看板が上つたから、こりやあ伯圓先生の大方弟子に違ひない、定めて上手であらうと思ひ、聞きに行つたら大違ひ、田舍廻りの先生ゆゑ、何ぼ所が麻布でも、こんな者を掛けるのは、席亭の氣が知れねえと、定連は大こぼしだつた。
百圓　えゝ。
トぎつくり思入。
出子　あの時分から評判の、下手な講釋師の百圓さん、少しは上手になつたかね。
百圓　むゝ。
ト汗を拭ふ。
出子　下等連のお客には、顏を知られねえと言ひなさるが、

それは江戸向きの席へ出ねえから、知られねえのだらうぜ。

ト當附けて言ふ。百圓あたりへ面目なきこなしにて、

百圓　いやうつかり法螺は吹かれないものだ。實は身裝の出來た所から、當時講釋師で一と言はるゝ伯圓先生の弟子とごまかし、中へはひると勝手がわからず、まご〳〵する内押出されて、傍聽切手も落してしまひ、いつその事表へ出たら、大風呂敷を廣げようと、思つたことも以前を知つたこなたが爰に居たばつかり、たうとう種を見出されてしまひました。

千八　道理で見ねえ顔だと思つた。それではお前は人寄せに、張扇の音をさせて、いつも修羅場を讀んでる人か。

百圓　實は場末の眞打で、裝は立派だが、講釋は下手でございます。

ト面目なき思入、此時後ろにて、

呼ビ　須野田金平、大河逸藏。

大森　あゝ、午後の調べが初まるな。茲にゐて這入れぬとは、實に遺憾極まるなあ。

池上　遺憾極まるとも暴行はでけん、最初の書生の樣に、拘引されては破廉恥ぢやぞ、僕はもう思ひ切つて、呉服町へ行つて、牛を喰はう。君、行きたまへな。

大森　是までゐたもんぢや、歸りを待ちよる。

池上　そんなら僕一人で行つて喰はう。失敬。

トやはりラッパの音にて池上保明は下手へはひる。此時又後にてわや〳〵言ふ。太郎作百圓の羽織の紐へ思入あつて、

太郎　おい講釋師さん、お前の羽織の紐についてゐるのはなんだえ。

百圓　いや。

ト思はず下りし札を見て、

えゝ、これは傍聽札だ、そんなら胸に下げてゐたのだ。

出子　若い癖に、燒が廻つてゐるぜ。

百圓　いや、是は有難い、是は皆さん失敬しました。

ト挨拶なしてついとはひる。

太郎　札が出たら直ぐはひつたが、えらい薄情な人だなう。

千八　講釋師見て來たやうな嘘をつくと、今の法螺吹き、百圓も餘程あぶねえ代物だ。

ト實樂橋は此内烟草を吞みゐて、此時風呂敷を抱へ前

へ出て、
實菜　皆様、久吉はん歸るまで、此の絹紬を買つて下さい。外に珊瑚珠も、澤山あります。
田五　此間に商法をやらうとは、南京さんは抜目がないな。
大森　是は支那の國風で、なか／＼生菜にはげしいものぢやが、量罪裁判所の前は新發明ぢや。
實菜　もしあなた、娘に買つておやんなさいまし。
　ト太郎作の前へ行き、珊瑚珠の箱入を出す。
太郎　わしらア娘のうち出てゐるから、赤玉は入りましねえ。
　ト帽子を手に持ちしまゝ、思入。
實菜　わたくし久吉さん內へ、度々行きました。唐繻子、絹紬、珊瑚珠根がけ、澤山買つて貰ひました。今日は大勢ゐて、誰も買ふ人ない、いけません。
　ト風呂敷へしまふ。
出子　見物しながら賣らうたつて、誰がそれを買ふものか、狡猾極まつてゐらあ。
田五　おい太郎作、どうせおらあ晝用ねえから、歸りを見たら招魂社へでも行つて見べえか。
太郎　そりやよかんべえが、もうどん過ぎたから、食事して來ますべえ。
田五　おゝ、おぬし終ひまでゐねえのか。
太郎　見てえ事は見てえが、おらが事を太郎作と言はつしやるから、そんな連があつては、此装でも官員に見えましねえ。
田五　えゝ、官員様の眞似したつて無駄だ、止せえ。
實菜　わたし、官員様と一緒に行きませう。
太郎　南京さんなら連れがえい、どれ西洋料理へ行きましツけえ。
實菜　皆さんさよなら。
太郎　これは失敬に及びました。
　ト池上の眞似をして帽子をとり、髷を眞直に直し、挨拶して實菜橋附いてすまして上手へはひる。
出子　田舎官員が日蔭町の古洋服の出來合で、怪しき漢語を遣つたのは、先づ今日のお景物だ。
千八　帽子をとつて大たぶさの、髷の出たのは何の事はねえ、蛤のがら／＼を明けたやうだ。
田五　不斷から村の者が、止せい／＼と申しますが、兎角装ばかり氣イ揉んで、官員様の眞似を初めてから、たゞ

出來るのは借金ばかりだ。

大森　今日は傍聽に來た内にも、只今のやうな人民が、いくらもある事ぢやらう。

ト合方ラッパの音になり、上手より一人乘りの人力へ、小澤おたえ肩掛をかけ、車に乘り是を車夫曳いて出來り、上手にて直ぐ車より降り、

たえ　爰でよいから直ぐ歸つておくれ。

車夫　へい／＼、お迎ひに參りませうか。

たえ　時間がわからないから、來ずともよいよ。

車夫　へい。

ト行きかけるを、

たえ　ちよつとお待ち。

ト札挾みより二十錢札を一枚出し、

是を持つておいで。

車夫　是は有難うござります。

ト禮を言つて貰ひ、車を曳いて上手へはひる、おたえ眞中へ來り、千八を見て、

たえ　おや千さんおいでかえ、未だ姉さんは、御門から出ませぬかえ。

千八　まだ中で調べ最中でございます。

たえ　今日は宣告になりさうかえ。

千八　わつちは押出されたから、そこの所は知りませぬ。

大森　僕はドンまで中にをつたが、法廷へははひらぬが、また調べが午後へ殘つたから、多分宣告にはなるまいて。

田五　お前樣は、お身内でござらつしやりますか。

たえ　いえ久吉さんと仲をよくしました、同じ新橋の者でございますが、見るのもお氣の毒だが、案じられるから、蔭ながら樣子を聞きに參りました。

田五　わしらも始終東京へ、仕事に出てをりますから、見ねえと言つては村へ歸り、みんなに口が利けましねえから、昨夜ッからおッ通して、寢ずに今朝爰へ來ました。

千八　さつき中で船頭と言つたが、おれも三十間堀の船頭だが、夜通し仕事のある船頭とは、いつてえお前は何船の船頭だ。

田五　えゝ、やつぱり女ゆゑの船頭さ。

大森　はゝあ、女ゆゑと申すのは何ぢや。

田五　戀ゆゑ夜も寢ずにゐる、葛西金町の船人でござります。

出子　あゝ成程、こ、えで一生暮してしまふか、いやこいつア

とんだお茶番だ。
ト皆々氣味合にさとる、合方きつぱりとなり、下手より呉服屋手代眞三郎出來り、
眞三　お丶お師匠さん、姉さんはどうなりましたな。
たえ　まだ言渡しにならぬといふから、案じられてなりませぬ。
眞三　わたしも晝前來たいと思ひ、色々見世を差繰りましたが、無人にたうとう出られませず、ドンが鳴つてしまひましたが、お世話になつた姉さんゆゑ、ばつを聞きたいと出てまゐりました。
たえ　御尤もでござりますとも、案じた所が仕方もないが、どういふ心持でおいでだか、それに今日呼出された裝はどんな裝で來たか、見ともなくはあるまいかと、それも一つは案じられます。
眞三　それはお案じなさいますな。そつくり內で出來ましたが、急のお誂へで、夜業をかけて仕立てました。
大森　お丶君の所で出來たのか、今朝はひる所を見たが、いや、殊の外見事であつたぞ。
出子　結び髮に白襟で、黑の着物に二枚下着、色着ざめて引かれて來たのは、丸で芝居でございます。

ト此時うしろにて、
呼ビ　辨當屋――。
ト田五平びつくりして、
田五　辨護人を呼んだやうぢや。
大森　なに、あれは辨當屋を呼んだのぢや。
田五　あ丶、辨當屋か、わしやあ又辨護人だと思つた。
トばた〳〵にて、門の內より若い者喜介、着流し靴にて出來り、
喜介　お丶師匠、來ておいでなすつたか、もう今に出て來ますよ。
たえ　え、お前傍聽おしかえ。
喜介　今迄中にをりました。
ト飴賣のちよいと〳〵の合方になり、門の內より傍聽人の仕出、總出にて、わや〳〵出來り、
一　あ丶、表へ出たら、せい〳〵した。
二　芝居の立見より餘程苦しい。
三　大層な傍聽だつた。
ト皆々ぞろ〳〵と話しながら出る。大森仕出に向ひ、
大森　もう四人は歸りますかな。
一　え丶もう直そこへ來ます。

ト合方ばた／＼になり、花道より金井傳之助羽織着附、尻端折り草履にて、後より深見丹次郎羽織着流し、駒下駄にて走り出來り、舞臺下手へ來るを、おたえ、眞三郎、千八、喜介見つけて出迎へ、

たえ　おゝお父さんに丹次郎さん、よく來て下さいました。

眞千　どうも申上げやうがございませぬ。

傳之　來られた譯ではございませぬが、つい氣になりますから、遠くから様子を見ようと參りましたが、どうも皆様へ顏向けが出來ませぬ。

丹次　今道々お父さんへ話しながら來ましたが、開業してから內を明け、客の爲めにならぬと聞き、師匠さんが知つての通り、池上の溫泉で、綺麗さつぱり切れたのは、かういふ事にしまいため。

たえ　其時醉つておいでゆゑ、醒むるを待つてとつくりと、異見をしましたら、酒に醉つたを幸ひに、丹次郎さんと切れたのは、おかみさんへ濟まぬゆゑ、是から心を入替へて、親にも苦勞をかけないから、わたしに案じてくれるなと、言つて間もなくかういふ事とは、實に夢のやうでございます。

傳之　所謂是れが通り惡魔、死刑と覺悟はしてゐますが、此上のお慈悲と、辯護人の大河様と須野田様がお骨折りで、もしひよつと無期徒刑にもならうかと、思ふは慾の親心。

喜介　もし親方、今まで傍聽いたしたが、いよ／＼宣告になりまして、無期徒刑と極りました。

傳之　え、無期徒刑に極つたとか。

トびつくりして持ちたる手拭を落し、丹次郎手拭を拾ひ、

丹次　もし、手拭がお落ちました。

傳之　へい。

トぢつと考へるこなし。呆然としてゐて心附き、

是は有難うございます。

百圓　おゝ、向うから來ますぜ。

仕出　や、來た／＼。

トわや／＼言ふ。傳之助、丹次郎、おたえ、眞三郎、千八、喜介上手跡へ下る。傍聽人は前へ出ようとして上下へ別れる。風の音ラッパになり下手門の內よりお条結び髮、黑の着附、白の半襟、白足袋、竹の皮草履にて染繩にかゝり、是を獄吏一人繩をとり、一人は證據物

の風呂敷包みと、片手に竹の子笠を持ち、巡査兩人附添ひ出て來る。是と一緒に、舞臺半廻しになり、表門上手へ行き、下手やはり白ペンキ塗りの柵矢來、此内囚人控所の屋根より、司法省の屋根を見たる中遠見になり、傍聽人わや／＼言ふ。傳之助、丹次郎、おたえは上手より脊延びをなし、お粂を蔭ながら見ようとして思はず双方顏見合せ、はッと思入。お粂立止り、ぢつとうつむき、愁ひの思入あつて、

お粂　どうぞお笠を願ひます。

ト是れにて獄吏持ちたる竹の子笠を冠せる。傳之助二人是を見やり、情ないといふ思入。お粂上手を見て顏を背けるを木の頭。傳之助皆々愁ひの思入。傍聽人はがや／＼いふ。此模樣ラッパ、風の音にて、お粂官吏を幕外へ殘して、

ひやうし　幕

ト幕引きつけると、下座の送り三重にて、お粂しを／＼と官吏ついて花道へはひる。

月梅薫朧夜（終り）

道具所々に柳の立木あり爰にお門の内より(惣出)の仕出し傍聽人にてわや〳〵いつて出るを跡より(相中)の巡査數名出て之を宜しく制す傍聽の皆〳〵やそりわや〳〵捨せりふをいつて上下へ別れても入る此内に(傳五郎)濱花館の太夫出子丸どてら半天の拵へ(菊五郎、新蔵)書生好の拵へにて洋杖をつき(幸蔵)船頭いさみな形(家橘)支那人にて大な包を持立懸り居る下手に(福助)黒の洋服靴シヤツポ田舍大盡の息子にて立懸居て(菊五郎)君最一遍傍聽を請求致さふ(新、僕大賛成同作いた



浅草の
公園地に
意浮立
かつぽれ節

初霞空住吉


初霞空住吉
常磐津連中

初霞空住吉（かつぽれ）

常磐津連中

淺草仁王門の場

役名――かつぽれ升坊主、同島藏、同海老八、同高吉、同鶴松、同小奴丸吉、甘井官藏、船頭熊藏、箱屋宗吉。船宿の女房お調、藝者小むら、かつぽれ女房おれん、同おきつ等。

（仁王門の場）――本舞臺上の方板塀、見越の梅の木、下の方淨瑠璃臺、霞幕を張、正面煉瓦造床見世の片遠見、日覆より梅の釣枝、眞中に長床几二脚置き、總て荒澤不動前の體。右の鳴物にて幕明くと、知らせに付霞幕を切つて落す、爰に常磐津連中裃にて居並び、直淨瑠璃になる。

〽觀音の御山も今日は春めきて、まだ冬ながら淺草の淺緑立つ初霞、引もきらざる仲見世の往來も繁き仁王門、ト合方通り神樂にて、花道より官藏散髪鬘、黑のシャツポ書生羽織、少し酒に醉ひしこなし、小むら藝者の拵へ駒下駄、お調船宿女房の拵へ、駒下駄、宗吉羽織着流し、駒下駄箱屋の拵へにて笹折を提げ出來り、花道へ通る。

〽顏に日影の茜さす酒の機嫌を取楫は、遊船宿か待合の妻の氣轉に客人の、調子を合す柳橋、流石藝妓と夕べ氣に張る奇功紙も色氣ある目許に延ばす鼻の下、浮れ〳〵て來りける。

ト皆々宜しく振あつて舞臺へ來る。

お調　先づ旦那是へお掛けなされませ。

官藏　爰へ掛けてもよいかね。

箱屋　萬梅の床几でござりますから、御遠慮には及びませぬ。

むら　もし旦那、向うを御覽なさいまし、仲見世の兩側が煉瓦造りになりまして、大層綺麗ぢやござりませぬか。

官藏　爰から並木を見込んだ所は、京橋へでもいつた樣で、淺草とは思はれぬ。

箱屋　四邊がないので仁王門が、格別大きく見えまする。

官藏　僕が裸で立つたらば、あの仁王樣の樣であらうか。

箱屋　御酒を上つて赤い所は、運慶の作と見えまする。

むら　此お相手はお相役の、久保田樣がようござります。

お調　ほんに旦那と久保田樣では、よい一對でござります。

官藏　併し寺の門番は氣がないな。

箱屋　其替り朝から晩迄、女の見倦でござります。

官藏　女といへば萬梅で、隣座敷に居た藝妓は、なか〳〵勝れた別嬪だ。

箱屋　あれは廓の藝妓でござります。

お調　器量もよければ聲もよく、意氣な端唄を唄ひましたね。

むら　あれは種員さんが拵へて、大層此頃流行ますよ。

官藏　あの端唄で踊つたのは、何處の役者だな。

お調　いえ役者ではございません、吉原の男藝者善孝でございます。

官藏　とんだ面白い踊であつた。

お調　小むらさんは踊があるから、振は大概お覺えだらうね。

むら　あらかた筋は覺えましたよ。

官藏　覺えて居るなら今爰で、あの踊を踊つて見せてやれ。

むら　覺えては居ますけれど、此賑やかな往來中で。

お調　そりやさうでもござんすが、短い端唄の踊だから。

むら　それだといつて、

官藏　僕が頼みを、おぬしは聞かぬか。

お調　切角旦那のお頼みだから。

箱屋　それ、御機嫌をそこねぬやう。

ト呑込ませる。

むら　それぢやあちよつと踊りませう。

ト是にて端唄になる。

〽人目忍んで廓から、廻る田圃の枝道に、香は憎からぬ梅咲きて、覗く軒端の賤が家、けふも柳の朝東風に昨夕の儘の亂れ髮、そつと素顏の富士の雪。

ト小むら振あつて此内官藏見とれる思入にて手眞似をする事あつて、

官藏　ヨウ〳〵旨いものだ〳〵。

お調　大層お氣に入りましたが、踊はお好きでございますな。

官藏　いや鋤の鍬のと、國許で農業をする時分から、所謂踊り氣違ひで先づ小娘の踊から婆あのお助け踊り迄、お

そらく踊と名の付くものは何でもかでも僕は好きだ。

むら　そんなにお好きでござりますか。

官藏　あまり好き故、踊に感じて目を廻す事が、度々ある。

お調　それではあなたは目に感じて、目をお廻しなさいますか。

むら　其時あがる何ぞよい、合藥はござりませぬか。

官藏　おゝあるとも〳〵、よい合藥がある、もし僕が踊りに感じ目を廻したら此藥を、早く水で呑ましてくりやれ。

ト紙入より藥包を出す。

お調　畏りましてござりまする、私がお藥をお預り申して置きませう。

ト藥包を取つて帶の間へ挾む、ばた〳〵になり花道より紺半纏着付尻端折りの船頭、草履にて出て直に舞臺へ來る。

箱屋　おゝ、熊さんお歸りか。

お調　かつぽれはどうしたえ。

船頭　今廣小路に居ましたから、直に爰へ參る樣に、さう申して參りました。

官藏　それではかつぽれが是へ參るか、古めかしいやうなれど、なま中な踊りよりをかしくつてよつぽどよい。

船頭　それに踊の手先が揃ひ、なか〳〵役者は叶ひませぬ。

箱屋　早くかつぽれを見たいものだ。

むら　あれ〳〵向うから參りますよ。

〽浮たつ空にかつぽれの、傘も目に立つ一群が、

ト双盤入出の鳴物になり、花道より升坊主、赤い手拭を襟に卷き、島藏、高吉ざん切鬘、六彌太格子に牡丹の形の揃ひの着付、白のシヤツ、千種の股引白足袋麻裏履にて出て來る、鶴松野郎鬘、同じ拵へ二蓋笠を持ち、海老八野郎鬘同じ拵へ三味線を持ち、おれんおきつ結び髮同じ裝、年增の拵へ駒下駄にておれんは摺鉦、おきつは三絃を持ち、丸吉奴同じ拵へにて太鼓を擔ぎ出來り花道へ留る。

山〽遊山半分奥山から、丁度時刻も吉原へ流しに行くも居續けの、お客を當の格子先、持越す酒の頭痛なら、そこらは鹽茶でかつぽれと、趣向も甘茶な可笑みに、お釋迦に似たる坊主連、浮れ興じて來りける。

ト皆々宜しく振あつて舞臺へ來る。

官藏　おゝかつぽれ來たか、待つて居た〳〵。

升坊　毎度御贔屓に預りまして、連中一同有難い仕合に、

皆々　ござりまする。

ト皆々辭儀をして、
島藏　扨今日はお禮かた〴〵、お年玉に新作の淨瑠璃盡し
のをかしみを、是にて御覽に入れまする。
むら　それは面白い事でありませう。
お調　早く見たうござりますね。
高吉　併し急稽古で口づきませぬから、つじつまの合ぬ所
は、
海老　袖や袂へお隱しあつて、御見物を願ひます。
鶴松　どうで私共の致す事故、耳を取つて鼻へ付け、口
から出任せ出放題。
丸吉　只皆さま方のお臍をよらせ、をかしい事を專一に。
れん　笑ふ門には福來ると、申しますからお目出度く、
きつ　惠方に向つて御機嫌を、酉の年から戌のとし、
升坊　先づ新年のお笑ひ初めに、ありふれましたをかしみ
を、是より御覽に入れまする。
ト太鼓一調の片シヤギリになり、此内升坊主島藏高吉
鶴松尻を端折り、支度をなし、
島藏　扨かつぽれの三番叟、住吉踊を御覽に入れます。
〽伊勢はなア津でもつ、津は伊勢でもつ、ヨイ〳〵、尾張
名古屋はヤンレ城でもつ、ヤアトコセヨイヤナア、アリ
ヤリヤコレハノサ、コノナンデモセ。
ト四人住吉踊りの振あつて尻をおろし、
〽姉さん本所かえ。
ト天窓へ手拭を乘せ、いやらしき女のこなしあつて、
島藏　お升さん、ちよいと〳〵。
升坊　あい、何だえ。
ト女のこなし。
島藏　追羽子をするからお遊びな。
升坊　お前と遊ぶとおつかさんが叱るからいや。
島藏　なぜえ。
升坊　手癖が惡いもの。
島藏　誰が手くせが惡いものか。
ト升坊主の天窓を打つ、升坊主すまして下手へ來る。
しやア〳〵として居る。
升坊　おたかさん、ちよいと〳〵。
高吉　あい、何だえ。
升坊　双六をするからお遊びな。
高吉　お前と遊ぶと、おつかさんに叱られるからいや。
升坊　なぜえ。
高吉　拾ひ喰をするものを。

升坊　誰が拾ひ喰をするものだ。
ト高吉の天窓を打つ、
しやア／＼として居る。
高吉　おつるさん、ちよいと／＼。
鶴松　あい、何だえ。
高吉　お彈きをするからお遊びな。
鶴松　お前と遊ぶとおつかさんに叱られるからいや。
高吉　なぜえ。
鶴松　助平だもの。
高吉　誰が助平なものか。
ト鶴松の天窓を打つ、
しやア／＼として居る。
ト鶴松跡を見て誰も居ぬゆゑ丸吉を招く、丸吉下手へ來る。
鶴松　お丸ちやん／＼。
丸吉　あい、なんだえ。
鶴松　お茶坊主をするからお遊びな。
丸吉　あゝ遊ばう／＼。
鶴松　遊ばうと言つてはいけねえ、厭だと言ふのだ。
丸吉　厭ちやあない遊びたいもの。

鶴松　幾ら遊びたくつても、お前とはいや。
丸吉　なぜえ。
鶴松　寐小便をするものを。
丸吉　誰が寐小便をするものか。
ト鶴松を打つ。
鶴松　しやア／＼とたれるくせに。
皆々　はゝゝゝ。
〽黄檗にさつても塗つたるうどんの粉、
ト皆々顏を塗るこなしあつて、
升坊　お島さん、ちよつと見ておくれ、今日の白粉はさつぱり付かない。
ト顏を出すのを島藏見て、
島藏　おや／＼、お前は黄だん病かえ。
升坊　なぜえ。
島藏　それでも顏が黄色いもの。
ト升坊主間違へし思入あつて、
升坊　おやどうせう、白粉とおつかさんがゆもじを染めるうこんの粉と間違へた。おゝ恥かし。
ト顏を隱す。
〽土手の川風芝の露、勤めはつらいな、いつも歸りは高

ばしをり嘸寒からう。
兩人　さうとも〳〵。
　ト皆々談あつて納まる、是より人寄の鳴物になり、高吉前へ出て、
高吉　ときに鶴松さん、ちよつとお目に掛りたい。
鶴松　あい、何だえ。
　ト傍へ來る。
高吉　ちよつと密でお前と私が何かをかしい事をして、御機嫌をとるのだが、お前お飯をお上りか。
鶴松　まだお晝はたべない。
高吉　たべずば何ぞ私が奢らう。
鶴松　そいつは何より有難いが、一膳飯には借があるぜ。
高吉　そんな所へ行くものか、今日はぐつと大手を廣げて、公園の萬梅だ。
鶴松　あゝ指の藥を賣る内か。
高吉　そりやあ萬兵衛さんだ。
鶴松　大手を廣げると言つたから、指でも怪我をしたかと思つた。
高吉　それとも角の尾張屋へ行かうか、あすこの内のおかみさん位世辭のいゝ人はない。

鶴松　むゝ、あの布袋様のやうに太つたおかみさんか。
高吉　そんな惡口は利かねえものだ。
鶴松　なに、あすこの内の食物は旨くつて、布袋られねえと言ふおかみさんが看板だ。
高吉　看板と言へば、辨天山へ新築の岡田の惣菜はどうだ。
鶴松　ひじきに油揚は食ひたくねえ。
高吉　惣菜といふは卑下した名で、料理は上等豪氣なものだ、金の鯛を見たらうな。
鶴松　齒の性はいゝけれど、金の鯛はかぢれねえ。
高吉　あれをかぢるものがあるものか。それぢやあずつと横町へ曲つて、金田の軍鷄はどうだ。
鶴松　軍鷄は結構、けつこう〳〵とつけつから。
　ト鷄の眞似をして、
かしはがいゝね。
高吉　但しは田川の三階で、富士を見ながら一杯どうだえ。
鶴松　何でもいゝから早く食ひたい。
高吉　腹をすかして食ふが藥だ、運動がてら公園をぐるりと廻つて魚十か、一直か又は北村の汁粉か、萬盛庵の蕎麥はどうだえ。
鶴松　實は朝飯をたべないから、腹がぺこ〳〵していかね

え、何所か近くにしてくんねえ。
高吉　それぢやあちよつと耳を貸しねえ。
鶴松　〽言ふに鶴松さし寄れば、
　ト淨瑠璃を語る。
高吉　〽あたり見廻し耳に口、
　ト同じく淨瑠璃を語り、時代の思入にて囁き、
合點が入つたか。
鶴松　すりや、廣小路へ。
高吉　これ。
　ト抑へる、おれん前へ出て、
れん　ぼうん。
　トおきつ忍び三重を彈く、鶴松時代に四邊を窺ひ、世
話に氣を替へ、
鶴松　先づ廣小路では、古い隅屋か又新見世の松田の内か、
但しは天斧伊勢虎か。
高吉　其所はお客が一ぱいだから、いつも二人が馴染で行
く。
鶴松　むゝ、牛の煮込で丼飯か。
　ト大きく言ふ、
高吉　何故大きな聲で言ふのだ。

　ト又天窓を打つ、
鶴松　何にも食はせず天窓をなぐり、もう是からは角突合
だ。
高吉　うしやあ野暮に腹を立つぜ。
　ト又天窓を打つ、此時おれん前へ出て、
れん　なんで私の亭主をば、そんなにお前は打ちなさるの
だ。
高吉　こりやあ狂言だから、仕方がねえ。
れん　狂言であらうが何であらうが、打つなら打つやうに
して打ちねえ。
　ト是を聞いておきつ出て、
きつ　これ散蓮花のおれんさん、亭主の贔屓をする樣だが、
萬歳でいへば太夫と才藏、おまへの亭主の打たれたのは、
才藏だから當りまへだ、打つならぶつやうにして打てと
は。
れん　貸した物を返して打ちねえ。
きつ　何もおまへに借りた覺えはない。
れん　何だ相の子め、小僧ッ子のくせに耄碌したか、此間
手前のお袋が稻毛在から出て來た時、蕎麥を買つて食せ
たいが、錢がないからおれんさん四錢貸してくれといふ

から、晩にお米を買ふ錢だけど、友達中の突合に貸して
遣つたを忘れたか。
きつ　さあ、それは。
れん　ぶつなら貸を返してぶて。
ト升坊主島藏海老八出て、
升坊　これ〱、樂屋裏の內證事を家業先へ擔ぎ出して、
爰で喧嘩をしちやあいかねえ。
れん　それだと言つてあいつらに、ぽか〱亭主をなぐら
れちやあ、私の顏がへこみます。
海老　お前の顏のへこんで居るは、こりやあ生れ付だから
仕方がねえ。
れん　お前方も留めるなら、私の顏を立てゝ下さい。
升坊　へこんだ顏を立てるのは、こりやあちつとむづかし
い。
島藏　額と腮を削つた方が、中が高くなるだらう。
れん　お前方に迄馬鹿にされ、猶々私の顏が立たない。
きつ　立たずば私をどうともしなせえ。
升坊　これさ〱靜にしねえか。
ト三人で留める、官藏思入あつて、
官藏　いや、此爭ひは狂言かと思つて居たら誠の事か、
祝儀をやるから是で靜めろ。
ト札を紙に包み出す、箱屋とつて、
箱屋　旦那樣からお前方へ、御祝儀を下すつたから、
船頭　是で晩に一ぱい飲み、仲直りをしてくんねえ。
ト札包を島藏に渡す。
島藏　これは〱有難うございまする。旦那樣から一同へ、
御祝儀を下すつたから、是で二人も笑ふがいゝ。
高吉　元が纔な貸借ゆゑ、
鶴松　御祝儀を頂戴致せば、
れん　是で低い顏も立ち、
きつ　誠に有難うございます。
升坊　さあ、目出度一つしめてくんねえ。
皆々　ヨイ〱〱。
ト皆々手を打ち、
有難うございまする。
ト官藏へ皆々禮を言ふ。
官藏　中直りに二人して、何ぞ爰で踊つて見せやれ。
高吉　へい〱、畏りました。
島藏　旦那樣へのお禮代りに、吉原通ひをちよつとやんね
え。

高吉　おい、下座を頼むよ。
　ト高吉鶴松二人前へ出て、
〽車いそがせ吉原通ひ、上る階子もアレハイサノサ、いそいそと、
〽客の心はうはの空、飛んで行きたやコレハノサぬしの傍。
　ト兩人振あつて、
升坊　跡は紀州和歌の浦、吉例のかつぽれ。
　ト是より鳴物入り、かつぽれの合方になり、升坊主、島藏、高吉、鶴松、赤襷を掛け、四人居並び、
四人　ヤツトナ。
〽沖の暗いのに白帆が見える、あれは紀の國ヤレコレ蜜柑舟、〽森のくらいのにあかりが見える、あれは狐火ヤレコレ信田妻。
　ト皆々かつぽれの振宜しく、此内官藏段々浮れ出し、頻りに首を振り、トゞウンと倒れる皆々びつくりして
島藏　や、こりや旦那様が、
皆々　どうかなすつた。
　ト皆々わや〳〵と言ふ。
箱屋　こりや踊りに感じて、目をお廻しなすつたのだ。

船頭　何ぞお藥はございませぬか。
むら　お藥はおてうさん、お前預つておいでだつう。
お調　先刻爰へ入れて置きました。
　ト帶の間から藥包を出す。
升坊　早くそれをお上げなさいまし。
お調　是を上げたらようございませう。
　ト藥包を明ける、此時風の音して藥を吹散せし思入あつて、
島藏　今の風でお藥が、旦那の體へ掛りました。
　假令體へかゝるとも、毒でないからお藥の、必ず利目がございませう。
皆々　旦那さま〳〵。
　ト皆々捨臺詞にて介抱なし、
官藏　ウン――。
　ト息を吹返す。
高吉　さあ〳〵、もう大丈夫だ〳〵。
　ト官藏目を明きひよろ〳〵と立上り、
官藏　あれは紀の國ヤレコレ蜜柑舟、
　トぐた〳〵してばつたり倒れる。
むら　旦那、もう宜しうございますか。

官藏　氣は付いたが、ぐた〳〵と體に少しもたわいがない。

箱屋　こりやどうなすつたのでござりませう。

ト　お調藥包を見て驚き、

お調　是は飛んだ粗相をしました。觀音樣で頂いたお土砂を私が間違へました。

升坊　それおやあ旦那のぐたつくのは、

島藏　お土砂の利目でござりましたか。

高吉　飛んだ事をなさいましたな。

ト　お調ぐたつく官藏をとらへ、

升調　これ旦那樣、あなたが是限り治らずば、

ト　是より口說になる。

クドキ　〽御新造樣へ言譯が、奈良の大佛見たやうな大きな旦那がぐたつくも、土砂を掛けたる身の粗相、是が越度でお出入を上げられたらば揚初の、船の御用もなく涙、どうせうぞいのとかきくどけば、

ト　お調官藏をとらへ口說の振、官藏ぐたつく故、是を留めに小むら這入る、三人にて宜しく納まる、升坊主思入あつて、

升坊　もしおかみさん、お案じなさいますが、今旦那樣をしやつきりと、私が致しまする。

お調　何程でもお禮をするから、どうぞ治して下さいまし。

海老　安請合に請合つて、旦那樣が元の樣に、

鶴松　しやつきりと治るかえ。

升坊　其處は升坊主の方寸にありさ。

ト　思入あつて、

やあ大變々々、別品を乘せた車屋が、仰向に引くり返つて、赤い所が出た〳〵。

官藏　なに、赤い所が出た。

ト　立上り四邊を見て、

車屋が何處で引くり返つた。

坊官　車が引くり返つたのは、廣小路でござります。

官藏　あゝ廣小路か。

ト　ぐた〳〵となる。

むら　旦那しつかりとなさいましよ。

ト　小むら手をとつて引立てる、官藏嬉しき思入にて、

官藏　もう案じるな、大丈夫だ〳〵。

お調　どんなに私は氣を揉みましたらう。

官藏　踊を見ると感じるから、何ぞしやべる事をしやれ。

島藏　へい〳〵、畏りましてござりまする、不辯ながらしやべりまして、御機嫌を取りますでござりまする。

ト又人寄の鳴物になる、
おい樂屋の衆や、誰ぞ一人來て下さい。
升坊 あい〳〵。
ト升坊主ド手へ出て來る。
島藏 誰かと思つたら升さんか。
升坊 あい、升さんだ。
島藏 何ださんを付けて。
升坊 丁寧に云ふのだ。
島藏 ときに、お前と私がお笑ひを取るのだが、何がよか
らうね。
升坊 さうさ、何がよからうか。
島藏 あれに仕樣か、是に仕やうか。
升坊 いつそよしにしたがよからう。
島藏 何を言ふのだ。
ト扇で升坊主の天窓を打つ、
先づ世の中に、お女中樣のお好といふは芝居だな。
升坊 芝居位いゝものはない。
島藏 お前はどうか知らないが、私は芝居は大好だ。
升坊 はて、燒いた事もあるものだ。
島藏 燒いた事といふがあるものか、似た事といふのだら
う。
升坊 燒いたのを煮る方が、生臭くなくていゝ。
島藏 おめえの所でさつぱを買ふやうだ。
升坊 それぢやあお前も芝居は好かえ。
島藏 三度の飯を二度食つても、芝居は見たい。
升坊 おいらも又三度の飯を四度くつても、芝居は見たい。
島藏 餘計に食ふものがあるものか。
ト又天窓を打つ。
升坊 又天窓を打つのか。
島藏 ぶたれる樣な事を言ふからだ。
升坊 今にぶち返すから待つて居ろ。
島藏 ときに爰でお笑ひ草に、芝居を一幕仕樣と思ふが、
お前相手は出來るかえ。
升坊 出來るかとは失敬千萬、見くびつた事を言ひなさん
な、是でも以前はおらア役者だ。
島藏 なに以前は役者だ、そいつはなか〳〵話せるわえ、
師匠は何といふ役者だ。
升坊 憚りながら元祿より當明治の聖代迄九代連綿と家名
の續いた、市川團十郎の弟子だ。
島藏 そいつは豪氣な師匠だな、本名は堀越秀、權大講義

升坊　の教導職、さうしてお前の名は何といふ名だ。
島藏　むゝ團十郎の弟子で、
升坊　已は市川雛十郎といふ。
島藏　雛十郎といふのか。
升坊　年中貧窮で難澁するから、其所で師匠が付けたのだ。
島藏　おいらも以前はやつぱり役者だ。
升坊　お前も役者か、誰の弟子だ。
島藏　市川左團次の弟子だ。
升坊　そいつはいゝ師匠を取つた、本名は高橋榮三、新富座の後見だ、さうして何といふ名を貰つた。
島藏　おいらは市川左團次の弟子で、
升坊　むゝ、左團次の弟子で、
島藏　市川多鈍次といふ名だ。
升坊　色が黒いから多鈍次か。
　ト島藏の天窓を打つ、
島藏　何故だしぬけにおれを打つのだ。
升坊　たどん次だから天窓をはつた。
島藏　成程、たどんは白灰が溜ると、天窓をはるから、それで天窓をはつたのか、こいつは一番已がへこんだ。

　ト升坊主有合ふ竹切を取り島藏の耳を吹く、
これ、何をするのだ。
升坊　へこんだといふから、ふくらまして遣るのだ。
島藏　張子の達磨ぢやアあるめえし。
升坊　お前の顔は達磨に似て居るぜ。
島藏　なに、おれが達磨に似て居ると。
　ト島藏赤のケットを冠り、達磨の思入、海老八三絃を彈き、升坊主唄を唄ふ。
升坊　あまり辛氣くさゝに、棚の達磨さんをちよいとおろし、鉢巻をさせたり轉がして見たり。
　ト升坊主島藏を達磨にして宜しくこなし。
島藏　えゝ、いゝ加減に馬鹿にしろ。
　ト升坊主を打つ。
升坊　そんなにぽか／＼打たねえで、早く芝居を仕ようぢやあねえか。
島藏　まあ、そんなに急きなさんな、新狂言が流行だから、已が一番書くつもりだ。
升坊　おめえ狂言が書けるかえ。
島藏　書けなくつてどうするものだ、芝居で言へば立作り三世河竹同樣で、當時作者の賣出しだ。

升坊　賣出しならば景物が出るだらう。
島藏　引けた事をいひなさんな。
升坊　さうして狂言は何をするのだ。
島藏　初芝居の吉例に、古風だが曾我はどうだ。
升坊　蕎麥は結構、卷かあられか天麩羅か、寒いから鴨南蠻がいゝ。
島藏　えゝ、蕎麥ぢやあねえ、曾我といふのだ。
升坊　おいらは又蕎麥かと思つたゝ
島藏　お前は瘡が脊へかゝらんで少し耳が遠いから、聞違へるのは無理ぢやあないが、鴨南蠻がいゝなどと食つた事もねえくせに。
升坊　なに、食はねえ事があるものか、昨夜も内で二はい食つた。
島藏　そいつは豪氣に奢つたな、鴨南蠻の丼には、何が中にはひつて居た。
升坊　言はずと知れた相手は葱さ。
島藏　鴨は幾つはひつて居た。
升坊　三角に切つたのがたつた一つ。
島藏　そりやア油揚の葱南ばんだ。
升坊　鴨南蠻とは違ふかえ。
島藏　恥をかくから默つて居ねえ。
升坊　もし皆さん、鴨南蠻は三角ぢやあござりません。
ト見物へ向つて言ふ。
島藏　お客樣方は御存じだわ。
升坊　さうして曾我は何處をするのだ。
島藏　狂言を見せる所は、鬼王の貧家だが、しんみりとして淋しいから、大詰の對面だ。
升坊　對面はうまからう。
島藏　旨いかまづいか、しねえ内に分るものか。
升坊　にうめんより上手だらう。
島藏　又食物の事を言ふか、さりとは意地のきたない奴だ、先づ爰でする曾我の大詰にい、うめい、んの役割は。
升坊　えゝ、にうめんとは何の事だ。
ト島藏の天窓を打つ、
島藏　うつかり手前に引込まれた。先づにい、うめい、んの役割は。
升坊　又にい、うめい、んか。
ト天窓を打つ。
島藏　えゝ、いめえましい、もう言へといつても言やあしねえ、先づ對面の役割は、あれに居らつしやる旦那樣を工藤左衞門祐經に見立て、虎少將は美くしいお二人さん

がうつて付、所でお前が五郎で己が十郎だ。

ト升坊主むつとせし思入。

升坊　おらあ五郎はお斷りだ。

ト立つて行く故島藏引留め、

島藏　お前の大きな目玉ぢやあ、五郎はうつて付けだのに、何故此役を厭だといふのだ。

升坊　少し位の違ひなら、上と下だから料簡するが、半分から違つちやおらあ厭だ。

ト此時高吉鶴松海老八出て、

海老　だいぶ役もめがするやうだが、

高吉　及ばずながら扱ふが、

鶴松　どういふ譯で厭だといふのだ。

升坊　向うが十兩でこつちが五兩、あんまり割を喰せるから。

高吉　そりやあ五兩と十兩の金なら、すくねえ方が損だ。

海老　こりやあ狂言の役名だから、

鶴松　多くても少くてもいゝぢやあねえか。

升坊　役名でもおらあ厭だ。

高吉　どうすればお前はいゝのだ。

升坊　二つ割にするならいゝ。

海老　それぢやあ五郎十郎を一つにすれば、十五郎。

高吉　是を二つに割る時は、金なら七兩二分宛だが、

鶴松　役名だから七郎二、是でおめえは料簡するかえ。

升坊　あゝ七郎二なら、料簡します。

高吉　やうやく坊主を納めたから、七郎二でやんなせえ。

島藏　折角のお扱ひだが、兄も七郎二弟も七郎二、是ぢやあ兄弟になりませぬ。

升坊　なに、ならねえ事があるものか、針箱の古いのでも、鏡臺にすれば鏡臺になる。

島藏　所詮是では無駄だから、狂言はおくらにしませう。

升坊　それでおいらも安堵した、何ぞ外の物にしねえ。

島藏　いつそ氣を替へて淨瑠璃にしようか。

升坊　むゝ、淨瑠璃は面白いね。

島藏　お前淨瑠璃はいけるかえ。

升坊　あい、五はい位はいけます。

高吉　何だかをかした返事だが、

鶴松　食ふものだと思つて居るのか。

升坊　どぜう汁ぢやアありませんか。

海老　大方そんな事だらうと思つた。

島藏　先づ淨瑠璃は色々あるが、私の得手は豐後節、お前

升坊　檜物町はどうだ。
島藏　えゝ干物ぢやあねえ、檜物町だ。
升坊　町と云ふは何だえ、
島藏　常磐津の家元だ。
升坊　あゝ差配人かえ。
島藏　そりやあ家主だ。
高吉　成程世話のやけた男だ。
鶴松　此調子ぢやあ淨瑠璃は、
海老　なんにも知つて居やあしめえ。
升坊　所が何でも知つて居るから、一くさり文句を言へば、直に私が跡を附けます。
島藏　只語るのも風情がないから、緣取り淨瑠璃といふをやらう。
升坊　緣取り淨るりといふは。
島藏　俳諧の付合同樣、ちよつと緣を取つて後を付けるのだ。
升坊　からぜた事を言ふな。
島藏　先づ常磐津の名代物、關の戸から初めます。
上〽かゝる山路の關の戸に、さしも妙なる爪音を聞くに付けても身の上を、思ひ出せば錦の戸張、玉の臺に人となり。
上〽今はそれには引替て、草の衣に袖狹き、姿を隱す簑笠や、杖を力にたど／＼と。
ト島藏語る思入、升坊主は細き竹の杖にて小町の振。
上〽道は闇路に迷はねど、子故の闇に突く杖も、直なる心堅親仁、一筋道の後ろから、
上〽おゝい／＼と聲掛られ、
ト升坊主與一兵衞の親仁のこなし宜しくあつて
上〽駒の頭を立直し、波の打際二打三打、いでや組まんと太刀投捨て、馬上ながらもむんずと組み、
ト島藏細き竹にて升坊主と立廻り組打になり、
升坊　なに熊谷に負けるものか。
ト角力太鼓になり、兩人をかしみあつて島藏を組伏せる。
上〽雨馬が間へどうと落ち、上帶とつて引起し、見れば我子の年ばいに、
ト島藏升坊主を引起し顏を見て思入。
上〽苅萱心にうなづきて、
島藏　いかに小兒なればとて、頑是ない其詞、毎日入來る

諸發心、昨日すつたも今同心。

上へ一昨日剃つたも今同心、今同心では知れ難し。

升坊　それぢやあ交番へ行つて聞きませう。

島藏　又むだを言ふか。

ト天窓を打つ、

その同心のお顔でも。

ト島藏刈萱のこなし、升坊主石童丸子役の思入にて、

升坊　二つの年に別れし故、其お顔は知りませぬ。

島藏　して其國所は。

升坊　國は九州筑紫の松浦、

島藏　扨は筑紫の松浦より、

升坊　父を訪ねて高野へ登る。

皆々　ヤアトコセ、ヨイヤナ。

ト踊る。

島藏　これ〳〵、母御も一緒に參られしか。

升坊　あい、母樣も父上のお跡を慕ひ、跡の宿迄お越しなれど、持病の癪に歩みもならず。

上へ煎藥と練藥と針と按摩でやう〳〵と、命つないでたまさかに、逢うてお前にあまえうと。

ト升坊主夕霧のこなしあつて島藏に取付き、

稻荷鮨を買つておくれな。

島藏　なぜそんな事をいふのだ。

升坊　逢うてお前にあまえうと。

島藏　えゝ、ふざけなさんな。

ト天窓を打つ。

上へ叩いて腹がいるかいな、これ死にかゝつて居る夕霧に、笑ひ顏見せて下さんせ。

ト升坊主夕霧のこなし。

さあ、笑ひ顏を見せてやらう、はゝゝゝ。

トをかしな顏をする。

升坊　そんなにまぜつかへしては、おらあ厭だ。

島藏　これ、お前と己とは氣も合つて。

上へよい相肩の戻り駕籠、なぜ野暮に腹を立つのだ。

上へ氣野暮うすどん情なし手なしのくせとして、惡洒落いうたり大通仕打はあるまいか、どういふ理窟か氣が知れぬ。

ト島藏振あつて、

上へそりやほんの事ぢやいな、私しやお前に打ちこんで、身をつくし潟浪花潟、

ト升坊主振あつて。

上〽大阪を離れてより、かり駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、二十日餘りに四十兩遣ひ果して二分殘る。

ト升坊主梅川の振あつて、

上〽殘る恨みに俊寛が、せめて向うの岸迄と、纜綱に取付いて、

ト升坊主俊寛のこなしあつて、

上〽引けや〳〵よい聲かけて、エンヤラヨウ。

トきやり屋臺囃子になり、

上〽日吉祭の山王の、櫻の木にお猿が三千三百三十三疋さがつた。

ト升坊主島藏兩人振あつて、

升坊　キヤツ〳〵。

ト猿のこなし。

上〽これ〳〵立たしやませ、のほよほ〳〵あろかいな、ついでに日和を見てたもれ、よほよほ〳〵さんな又あろかいな。

ト島藏細き竹を持ち猿廻しになり、升坊主猿にて宜しくあつて、

上〽ヤアトコセ、ヨイヤナ、アリヤ〳〵コレハイサノサ、コノナンデモセ。

ト兩人振あつて納まり、

官藏　よう〳〵、面白かつた〳〵。

島藏　さあ〳〵、是から御祝儀に、豐年踊の始まり〳〵。

ト鳴物になり、皆々襷尻端折にて、

皆々　豐年ぢやあ萬作ぢやあ。

上〽あすは旦那の稻苅で、小束に丸めてちよいと投げた、投げた枕にや〳〵科はない、おせゝのコレハイサノ、おべらに穗が咲いた、面白や。

ト皆々振あつて、

上〽國土安穩お目出たや。

ト目出度く打出し

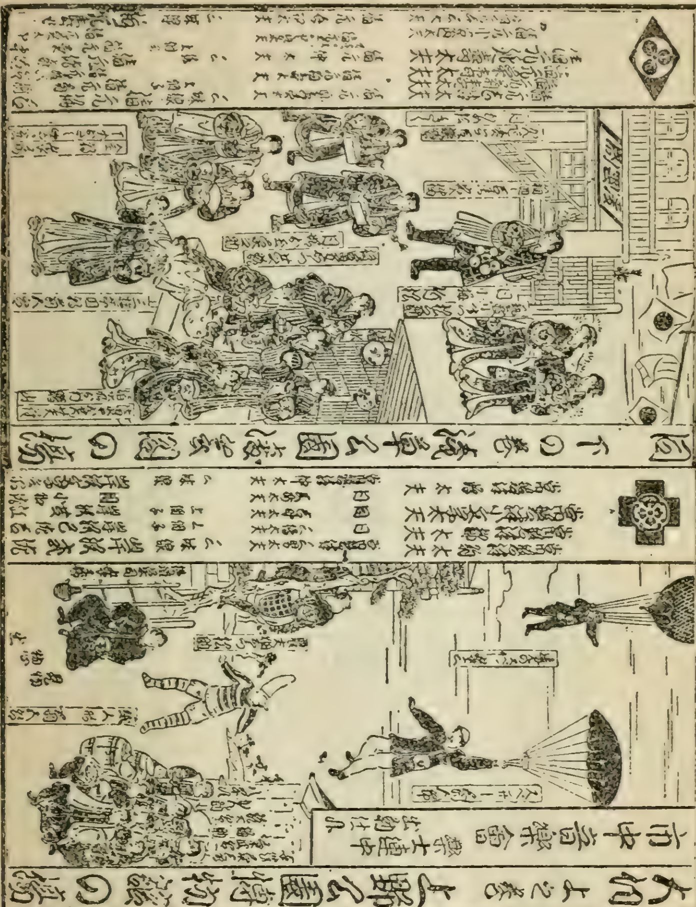
初霞空住吉（終）



有て前へ出て（喜知）何でわたしの亭主をそんなに業なさる（海老）コリヤア狂言だから仕方がねへ（喜知）狂言で有らふが何であらふが擲おら擲様にして打なせへト是と撥次開てむッとなし（撥次）コレ散蓮花のおれんさん亭主の擲負獻をする様だが万歳で云ぺ太夫と才蔵は前の亭主の擲れたのは才蔵だから仕方がない擲なら打様はしろとは何の事だへ（喜知）貸した物と返してぶちな（撥）何もかりた覚えはない（喜知）ない事がある物か此間手めへのお袋が稲毛在から出て来た時誂へ蕎麦を買て喰せたいが錢がないからお連さん四錢かしておくれといふから友達づくの突合にかして遣つたを忘れたか（撥）サア夫れト此件宜敷トヤ両人掴み合の立廻りに成を皆々中へは入り宜敷止るだん右衛門見て（だん）イヤ此争ひは狂言かと思つて居たら誠の事か祝儀を遣から是で静にしやれト祝儀と遣左團次祝儀をなし（左）是は有難ふムり升ト皆々へ向ひ、旦那なから御祝儀と戴いた是で二人も笑ふがよいト皆々せりふ有て手拍をする（だん）中直りに何だ踊ッて見せろ（左）旦那御へお稲代に吉原通ひと一寸やんねへ（小團）オイ下座を頼

上之巻は
上野の博物館
下之巻は
浅草の凌雲閣

風船乗評判高楼



風船乘評判高樓（スペンサー）

上の巻　上野博物館前の場
下の巻　淺草公園奥山の場

常磐津連中
清元連中

役名――風船乘スペンサー、三遊亭圓朝、箱根吉藏、百姓畑右衞門、三遊亭梅朝、通辯横垣榮司、三遊亭金朝、簪賣り熊吉、同龜松、福富萬右衞門、藝妓小松、福富の娘お玉、茶屋女房お仙、福妓小梅、福富の下女お民、茶屋娘おひら、遠見のスペンサー等。

（上野公園博物館前の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う上野博物館の書割中遠見、上の方八角の屋體、此内に洋樂師椅子へ腰掛け居る、正面白茶色の布に白の網を掛けし輕氣球を飾り、下手に瓦斯の樽を誂へ通り並べ、此樽より輕氣球へ瓦斯の通ふ布の樋あり、傍に備前燒の壺、白燒の口と手の附きし徳利あり、下の方淨瑠璃臺樹木の張物打返し、總て上野公園博物館前の體。爰に紺半纏腹掛股引草鞋の一、二、三、四、五、六の人足六人、瓦斯の樽へ壺の藥を徳利にて注ぎ居る、此見得洋樂にて幕明く。

一　時に一服やつちやあどうだえ。
二　やらうとも／＼、ならば一杯やりてえのだ。
三　何とどこから何處までぎつしりと、大層な人ぢやあねえか。
四　もう十一月の廿日過ぎだが、とんと霜枯のやうぢやあねえ。
五　先づ上等が一圓に、中等が五十錢。
六　芝居でいやあ立見の所が、下等の場所で二十錢だ。
一　今日一日の上り高は、なか／＼容易い金ぢやねえ。
二　何しろ、輕氣球で空へ昇るは一人だが、
三　何千人といふ人を、呼ぶのは豪氣な事だ。
四　曲馬だの輕業だのと、種々西洋ものを見たが、
五　海へでも落ちりやあ命掛け、こんなけんのんな事は

六　ねえ。それを思ふと一圓でも、なか〳〵高いものぢやあね
え。

ト、やはり洋樂にて、下手より百姓畑右衛門、ぼつと鬘
木綿の羽織、花色の股引、尻端折り竹の皮草履、田舎
者のこしらへ、煙管を持ち煙草を吞みながら出來り。

畑右　もし、わしは田舎者で、何にも知りましねえが、風
船乘りをする人は、何といふ人でござりますな。

一　是れは英國の產れの人で、スペンサーといふ人だが、

二　輕氣球へ乘るのが上手で、ドイツ、フランス、合衆
國、

三　所々萬國を打廻し、今度日本へ始めて來たのだ。

畑右　それは珍らしい事でござりますが、あの袋が空へ上
りますのか。

四　さあ、あれに瓦斯を中へ入れ、其氣で上へあがるの
だ。

五　此袋が上へあがると、丁度お月さま位に見えます。

六　實に不思議なものだから、上つた所をよく見なせえ。

畑右　先づ長生きをしたお蔭には、大地震から大暴風雨、
畫ばかりでなく本物の、戰を現に見ましたが異國からさ
もいろ〳〵な珍らしいものが來ましたが、象や虎は目古
くなり、今度風船乘りを見ますのは、今の世界の有難さ、
田舎へ土產になりまする。

ト畑右衛門煙草を吞む、

一　若し、此瓦斯樽の側で、煙草は無用。

二　ひよつと火氣が瓦斯へうつると、大事が出來ます。

畑右　はあ、どんな事が出來ますな。

三　瓦斯の樽へ火氣が移れば、直に破裂して怪我をしま
す。

四　お前、煙草をあがるなら、そつちへ行つてあがんな
さい。

畑右　さういふ事なら止しますべい。

ト腰提げの煙草入へ煙管をしまひ、

何しろ二十錢の木戸は高いやうだが、まだ日本で初めて
の、風船を見るは有難い。

ト是れを聞き皆々思入あつて、

五　もし、お前さんは二十錢で這入りなすつたか。

畑右　はい、二十錢で這入りました證據は、切手の端があ
ります。

ト煙草入から下等の切符の切を出す、

五　それぢやあ外へ出て見なせえ。
畑右　爰で見ては惡いかね。
一　惡いとも〳〵、爰は上等の場所で、一人前一圓だ。
畑右　いや、一人前一圓とは、それははや魂げた事だ、實は鬮ひの外に居ましたが、人の天窓で見えましねえから、鬮ひの破れから潛り込みました。
二　鬮ひを破して這入るなどゝは、そりやあ飛んだ事だけれど、
三　見りやあ田舍の人だから、大目に見るから早く行きねえ。
畑右　そんな事を言はねえで、隅の方へ置いてくれさつせえ。
四　そりやあ幾ら頼みなさつても、値段が違ふから置かれねえ。
五　それとも一圓出しなさるか。
畑右　どうして〳〵一圓あれば着物を着ます、外へ出れば人の天窓で上る所が見られないが、むゝよしよし、あの松の木へ登つて見よう。
六　さあ〳〵早く行きなさい。
畑右　えゝ喧しい、今行きますわい。

一　ト洋樂にて畑右衞門、不承々々に下手へ這入る。
　とんだ交つけえしだ。
ト洋樂を打上げ、知せに附き、下手樹木の張物を打返し、爰に常磐津連中居並び、直に淨瑠璃になる。
〽外國に其名も高き輕氣球、昇る雲井の叡覽に、君の御感を蒙りて、榮譽を得たる英國のスペンサー氏の離れ業。
ト此内人足六人上下へ控へる、洋樂になり上手より通辯横垣榮司、黑の洋服、靴にて、手に黑のしやつぽを持ち出來り、
〽けふぞ再び上野にて、催す知せの報告に、人波打ちし大入は、數千里隔つ海外より、渡り來りし身の冥加、深き惠みを謝しにける。
ト榮司しやつぽを持つてよろしく振あつて、見物へ向ひ辭儀をなし、懷中時計を見て。
榮司　先刻より餘程の間、嘸諸君方には御退屈、スペンサー氏が昇降までは少々間がござりますれば、お慰みに瓦斯の氣で、一萬尺昇りまする理合を御覽に入れまする。これ、人形をこゝへ。
二　はつ。
ト下手へ這入り、直に紙細工の人形を持つて出來る。

榮司取つて、

榮司　此紙細工の人形へ、瓦斯の氣を入れますと、空中へ昇り自在に働きます。

トやはり洋樂にて、榮司一二の人足、瓦斯樽の口を拔き、人形の足より瓦斯を入れる、人形しやつきりとなり、ふは〳〵と飛上る。榮司足に附きし絲を引く、これにて人形下へ下りる、足の絲を取つて放すと、日覆へふは〳〵と上る、又小さなボンチ畫のやうな人形へ瓦斯を入れ、土間の方へ放すふは〳〵と見物の方へ飛行き、落ちた所へ遣る。

今度は、大人形を御覽に入れます。

〽言ふに心得傍なる、小屋より運ぶ大人形。

ト下手へ二三人這入り、紙細工人形のこしらへの菊五郎を手舁きにして持つて來る、菊五郎ぐつたりと紙細工のこなし、榮司菊五郎の片足を捉へ、瓦斯樽の口へ當てる。

〽足の先より瓦斯の氣を、入る日まばゆく散る紅葉、そよ吹く風に膨みて、木蔭に宿る鳥ならで、ぱつと飛行く足の絲、引戻されてしやんと立つ。

ト此内菊五郎紙人形の如く、段々に手足を動し斯瓦の氣一杯に這入りし思入にて立上り、ふはふはと上手へ行くを、榮司足の絲を引く、引かれて戻る思入にて跡へ返りしやんとなる。

〽きのふ野掛の遊獵に、出掛けた途中で日が暮れて、月をよすがに薄原、たん〳〵狸が打ち寄りて、居るは思はぬ獲物ぞと、見れば親子が鼓の稽古、腹膨らしてタ、ポ、〳〵タツポツポ、〽こいつは面黑狸だと、共に浮れてタ、ポツポ、負けず劣らず拍子事。

ト此内菊五郎ふら〳〵と人形の動くやうな振あつて、負けず劣らずと、洋樂と岸澤打合せの拍子よろしくあつて菊五郎ぐにや〳〵と倒れる。

一　や、こりやどうしたのでござりませう。

榮司　何處にかぽッつり穴が明き、それから瓦斯が漏れたのだ。

ト二紙人形を見て、

二　爰に少さな穴があります。

榮司　それならそこを結へて置かう。

ト引裂き紙で結ぶ思入、一は人形の足を捉へ、瓦斯を入れる、これにてしやんとなり。

〽又も双方打寄りて、たん〳〵タ、ポ、スツタツタ。

三　ト菊五郎拍子を踏み、ぐた〱にて倒れる。
四　又穴が明きましたか。
三　今度は繼手がはなれたのだ。
榮司　それでは飛ばす事も出來ぬ、早く小屋へ持つて行け。
五　畏りました。
〽大人形を引抱へ、小屋の内へぞ入りにける。
ト五六兩人菊五郎の人形を抱き、下手へ這入る。又洋樂になり、以前の畑右衞門出來り。
畑右　やあ面白かつた〱、紙の人形の踊つたのは、とんと生きてる人のやうだ。
一　や、お前はさつきの田舍のお人、
二　又邪魔に出なすつたのか。
畑右　あんまり今のが面白かつたから、あの踊りを覺えこんで、國へ土產にしたいから、憚りだがおらが足へ、其瓦斯を入れてくれさつせえ。
畑右衞門足を出す。
榮司　いえ、紙細工の人形だから瓦斯の氣で今のやうに、生きてるやうに踊りますが、人間へ瓦斯は入れられませぬ。
畑右　そりやさうでもあらうけれど、股引の間へ入れたら、瓦斯でむく〱と、今の踊りが踊られよう、國へ土產にしますから、どうぞ入れてくれさつせえ。
榮司　達てお前がさう言ひなされば、入れて上げまいものでもないが、股引の間へ瓦斯を入れたら、お前の體が空へ昇り、何處へ落ちるか知れませぬぜ。
畑右　瓦斯の氣で空へ昇り、何處へ落ちるか知れぬとは、それは何よりけんのんだ、辨天さまの池へでもおつこちたら大變だ、何しろ今の踊りの、タ、ポ、〱タツポツポ、こいつは面黑狸だと、共に浮れてタ、ポツポ、
ト畑右衞門思入あつて、
あすこの所を覺えたい。
ト榮司時計を見て、
榮司　もう時刻でございますから、輕氣球が始まります、元の所へおいでなさい。
畑右　風船乘りが始まるなら、松へ登つて見物しませう。
○四　さあ〱、早うお出でなさい〱。
畑右　今の踊りを忘れぬやうに、タ、ポ、〱タツポツポ。
ト畑右衞門踊りながら下手へ這入る　。人足等皆々出來り、綱に附けし重りを取る。
〽早や日も西へをちこちに、むら立つ雲も晴れ渡り、小

春日和の麗に、そよ吹く風も中空へやがて昇る輕氣球、萬國に名も聞えたるスペンサー氏は滿場の、諸見物に一禮なし、氣球の許へ立寄りて、呼吸をはかり一聲の、合圖の聲に押へたる、綱を放てば忽ちに、虚空はるかに。

ト此内人足は重りを取り綱を押へ居る。洋樂になり榮司袋の脇へスペンサーの乘る臺を取附ける、よき程に下手よりスペンサー、黑のしやつぽ鼠の洋服にて出來り、見物へしやつぽを取り辭儀をなし、鼠の小さなしやつぽを冠り、臺の上へ乘る、榮司始終後見をなし、スペンサー合圖の聲を掛ける、是にて押へし綱を放す、誂への鳴物にて、輕氣球と共にスペンサー宙乘りにて廣告を撒きながら日覆へ上る。此時大勢拍手する、知せに附き、向う博物館の鳴物を打返し、向う奥深に空の遠見よろしく、道具納る。

〽遙に高き空中にて、見る目もぞつとスペンサー氏は氣球を放れ危くも、開きし傘に風を切り次第々々に。

ト此内誂への鳴物、遠見の輕氣球、これへ子役同じ拵へ、遠見によき所まで上り、仕掛にて氣球を放れ傘を開き、ふは／＼と下へ降りる氣球は下手へ引いて取り、向うの遠見淺草の凌雲閣の小さく見ゆる書割よろしく道具納る。

〽下降の途中さま／＼な放れし業は大空を、翔る鳥にも彌勝り、目を驚す技藝の妙、〽折柄さつと一吹きの風に追はれて、

ト此内スペンサー傘を持ち、日覆より降りて來る、途中にて大の字など好みの藝をなし、段々降る心にて、左右へ樹木の梢を段々に上へあげる。よき程に風の音になり、スペンサー風に追はるゝこなしにて傘を遣ひよろしくあつて、トヾ下手へ降りながら奈落へ這入る。洋樂になり、知せに附き、博物館の元の道具へ戻る、爰へ見物の仕出し大勢捻ぜりふにて、わや／＼と褒める事あつて。

榮司　只今風が出ましたから、根岸の邊へ落ちましたと思はれますが、車で直に歸りまして、演說をいたしますから、暫くお待ち下さりませ。

ト是れにて仕出し左右へ這入る。ばた／＼にて、下手より人足六人畑右衛門を擔ぎ出來り。

六人　大變だ／＼。

榮司　大變とは、何が大變だ。

一　つさき來た田舍者が、松の木の上へあがり、

二　見物をして居りましたが、輕氣球の上つた時、
三　よせばいゝに人並に手を打たうとして、松からおつ
　こち、
四　打ち所でも惡かつたか、目を廻して、
皆々　居りました。
榮司　それは實に大變だ、池の水を汲んで來い。
◎　水は爰にありますから、
×　顏へ吹つかけて遣りませう。
　ト合方にて畑右衞門を介抱し、番手桶の水を額へかけ
る、
皆々　田舍の人ッ。
　ト呼び生ける、是にて畑右衞門ウンと氣が附く、
榮司　氣が附きましたか。
畑右　あゝ、氣が附きました、體が痛い。
　ト洋樂になり畑右衞門紙人形の思入にて、手足を段々
動かし、トゞしやんと立つ、畑右衞門唄ふ心にて。
〽たん〳〵狸が打寄りて、居るは思はぬ獲物ぞと、見れ
ば親子が鼓の稽古、でつかい腹を膨らして、タ、ポタ、
ボタツポツポ。
　ト畑右衞門人形の思入にて、不器用なる振よろしくあ
つて、ばつたり倒れる。
榮司　や、又目を廻しなされたのか。
畑右　いや、穴があいて瓦斯が拔けたのだ。
皆々　惡く洒落れるぜ。
〽折柄綱曳後押の、車で馳せ來るスペンサー。
　ト洋樂になり、花道より以前のスペンサー人力車に乘
り、後押綱曳にて、直ぐに舞臺へ來る、此内手を打つ
音してスペンサー、しやつぽを取り見物へ辭儀をする、
此内人足瓦斯の樽を後へ並べる、スペンサー此上へ上
り英語にていふ、榮司これを聞き通辯にて。
榮司　只今スペンサーが申しましたるは、輕氣球が空中へ
三千五百尺程上昇いたしましてござりますが、降りの
砌り折惡く少々風が出ましたので、根岸へ落ちましたと
申しましたのでござります。
仕大　よう〳〵。
　ト手を叩く、スペンサー下へおりる、
榮司　時事新報の廣告や、平尾の齒磨の廣告が、まだ殘つ
て居りますから、是れを撒いて下さいまし。
　トスペンサーうなづく、榮司廣告を渡す。皆々も手傳
ひ、おびたゞしく廣告をぱつと撒く。

打おろしの洋樂になり、知せに附き道具幕を振落し、双盤にてつなぐ。

此の道具幕、奥山から凌雲閣を見たる遠見の道具幕双盤にて納る。とやはり双盤にて羽織着流しにて、小さな熊手、唐の芋など持ちし仕出四人出來り、

○もし喜助さん、お前さんも凌雲閣で風船を御覽なすつたのか。

△上野へ行かうと思ひましたが、酉の市へ參りましたから、十二階で見物しました。

□側で近く見るよりも、上つた所は遠くの方が、風情があつてようございます。

◎それに二十錢出すよりも、爰で八錢で見た方が第一懐が違ひます。

○何にしろ二の酉へ行つた人が入つたから、十二階は一杯だ。

△實に押されて困つたが、いゝ女と同じ所に、並んで居たのが儲けであつた。

□いゝ女といへば、成駒屋の福助に似たお孃さんは、びつくりする程いゝ女だ。

◎十二階の上に居た、源之助と榮之助に似て居た藝者も別嬪だつた。

○いゝ女を見た所から、是れから北廓へ繰込んで、全盛遊びでござりませうな。

△所が今日は二の酉で、滅法人が出ましたから、廻しを喰ふのも氣がないから、

□北廓へ行かずに萬梅で、公園猫を呼上げて、わつさり騒いでお歸りかね。

◎そんな景氣ぢやあござりませぬ、金田のしやもで一杯やり、直に家へ歸ります。

○それは何より上分別、お上さんがお仕合せだ。

△時にお二人にも、久し振りだが、金田へお附合なさらないか。

□どうで何所へか行く積り、お邪魔でなくば御一緒に、

◎そりやあ何より有難い、是れから直に火鉢を取巻き、

○好きな芝居の話でも、

△仕ながら一杯、

四人　遣りませう。

ト　やはり双盤にて四人上手へ這入る、道具見計らひにて道具幕を切つて落す。

（淺草公園の場）——本舞臺上の方九尺庇附の茶見世、軒口に好みの團子提灯、上手正觀世音菩薩と書きし朱塗の長提灯を掛け、下手臺の上に赤銅の總銅壺、茶釜、眞鍮の藥罐を掛け其外茶道具よろしく飾り、正面常足の二重、障子立てあり、門の柱に梅屋といふ掛行燈、下の方淨瑠璃臺、眞中建仁寺垣、山茶花扇骨木などあしらひ、此後へ煉瓦造りの凌雲閣を見せ、總て淺草公園の體、爰に簪賣りの兩人對の裝、三尺、おしよぼからげ、白足袋草履、赤い紐の附きし文庫へ熊手の簪を入れ、これを首へ掛けろ、手にも熊手の簪を持ち、茶屋女銀杏返しの鬘前垂、盆を持ち立ち掛り居る、淨瑠璃臺に淸元連中居並び、双盤打ち上げ、道具幕切つて落す。と流行唄模樣の淨瑠璃になる。

〽けふは日和も吉原かけて、人の山なす奧山續き、田甫込合ふ二の酉詣、客を搔き込む熊手の手事、ちよつと格子で吸附けられし、延ばし鼻毛の長羅宇煙管、ほんに馬鹿げた阿房草。

ト双盤入りにて三人振あつて。

お村　お前方へ引込まれて、わたしも一緒に踊つたわいなあ。

ト床几へ掛ける、兩人前へ出て、

簪賣　さあ／＼皆さん、選取つた／＼。

簪一　これは評判熊手の簪、お福を搔込む縁起のよいのが、

簪二　一本五厘で二本で一錢、

兩人　より取つた／＼。

ト右の合方にて茶見世の内より、茶屋の女房、前垂掛け駒下駄にて、盆に茶碗を二つ載せて持ち出來る。

お仙　お前方は朝から簪を呼び續けで、さぞ喉が乾からね、まあ息繼ぎにお茶でもお上り。

ト茶を出す。

簪一　これは毎度有難うござります。

ト兩人茶を呑み、

初手の酉が降りましたから、今日は大層人が出ました。

簪二　朝ッから賣れますので、三度家から持つて來ました。

お仙　それは何よりよかつたね、是れといふもお前方が、踊りがいゝのに呼びやうが、面白いから賣れるのだね。

お村　お上さんのお言ひの通り、大人ぢやあこんなに賣れません。

簪一　もう少しで賣切れますが、是れといふのもお酉樣のお蔭ゆゑでござります。

簪二　日が暮れたらばお參りに、二人連れで行きます積り。

お仙　けふは刎橋が明いて居るから、大方北廓へお廻りだらうが、引つかゝつてはいけないよ。

簪一　それは大丈夫でござります、まだ二人とも食氣の方で、色氣はさつぱり知りませぬ。

お仙　なに、知らない事があるものかね、お酌に情婦のある事は、疾うから聞いて居りますよ。

簪一　そんな事をいつて下さいますな。親仁に知れると叱られます。

お仙　若しおとつさんが叱つたら、親の眞似を子がしては、惡うございますかと、一本お極めな。

お村　ほんに爰らが極め所だよ。

簪一　どうしてそんな事が言へますものか。

簪二　兄さん、構はずさう言つて、おとつさんに叱られたら、梅園のお仙さんがさう言つたと言ひなさい。

お仙　そんな事を言つてはいけない、わたしがおとつさんに叱られるよ。

〽空も小春の麗に、十二階から風船を、見ての歸りの藝者連れ。

ト合方通り神樂にて、上手より藝者小松、小梅好みのこしらへ、駒下駄、箱屋吉藏羽織着流し駒下駄誂へおかめの面の附きし熊手を持ち出來る、お仙見て、

小松さんに小梅さん、今お歸りでございましたか。

小松　今日風船を見るのには、凌雲閣が上棧敷だと、吉どんに勸められ、十二階へ上りましたが、

小梅　何所も彼所も一杯で、降りる事が出來ないのでどんなに困りましたらう。

吉藏　其替り上野の山が、目の下に見えますから、昇る時から落ちる所まで、すつかり見物いたしました。

お仙　嘸お草臥なさいましたらう。

お村　まあ爰へお掛けなさいまし。

ト是れにて下手の床几へ掛ける、

小松　おや、通り神樂が聞えますが、春のやうでありますね。

お仙　今日は酉の市で、太神樂が爰らを流して居ります。

ト簪賣兩人前へ出で、

簪一　さあ〳〵皆さん、選取つた〳〵、これは評判の熊手の簪、お福を取込む縁起のよいのが、

簪二　一本五厘で、二本で一錢。
兩人　選取つた〳〵。
小松　吉どん、其の簪を買つておくれな。
吉藏　一本五厘の簪を、近所へ遣れもしますまい。
小松　近所へ遣れはしないけれど、可愛らしい子供だから、たんと買つて遣りたいのさ。
吉藏　さういふ事なら買ひませう。これ兄い、總仕舞で幾らばかりだ。
簪二　もう僅でござりますから、みんな買つて下さいますなら、三十錢で負けませう。
吉藏　それぢやみんな買つて遣らう。
ト吉藏十錢銀貨を三つやる、
簪賣　これは有難うござります。
小梅　ほんに二人とも調子のいゝ、氣の利いた子でござりますね。
小松　それだから買つて遣つたのさ。
お仙　さうしてこんなにお買ひなすつて、此簪をどうなさいます。
小松　持つて歸るも邪魔だから、近所の子供に遣つておくれ。

お仙　それは有難うございます。
お村　嘸子供が喜びませう。
簪一　入りもしない簪を、そつくり買つて下さるとは、
簪二　藝者衆は違つたものだ。
ト首を振つて思入。
簪一　えゝ、生利きな事をいふなえ。
〽是れから直に酉の市、熊手に附いた於多福の、なかを廻つて歸らうと、唐の芋から五つ六つ、年を重ねし小ませ者、打ち連れ立ちて急ぎ行く。
ト簪賣兩人振あつて、皆々へ辭儀をなし下手へ這入る。
〽折から又も高樓より、爰へ來るかゝ金滿家。
トやはり合方通り神樂にて、上手より福富萬右衞門、黑のしやつぽ絲織の羽織着流し、金の時計鎖を帶へ巻き、駒下駄にて物持のこしらへ、娘お玉、島田髷、黑縮緬の羽織、お召縮緬の着附駒下駄、下女お民島田髷着流し雪駄、誂への袱紗包みを持ち出來り、跡より三遊亭金朝、羽織着流し噺し家のこしらへ、駒下駄にて出來り。
萬右　やれ〳〵、押されて切なかつた〳〵。
お玉　やう〳〵下へおりたので、わたしやほつとしたわい

の。

お民　あなたにお怪我をさせまいと、誠に心配いたしました。

金朝　其御心配には及びませぬ、金朝がお供をいたせば、大丈夫でございます。

お仙　是れは旦那様、お歸りでございましたか。

萬右　大層な人込みで、やつとの事で歸つて來た。

お仙　お孃さま、面白うございましたか。

お玉　あい、面白うございましたわいな。

金朝　面白いの面白くないのと、上る所から落ちる所まで、目の下に見える十二階、風船の御見物は凌雲閣に限ります。

お仙　まあ〳〵是れへお掛け、

仙村　遊ばしませ。

ト毛布を掛けし床几を出す、是れへ萬右衛門お玉掛け、後の床几へお民掛ける、小松萬右衛門を見て、小梅と思入あつて前へ出で、

小松　どなたかと存じましたら、石町の旦那様でございますか。

萬右　おゝ、新橋の小松に小梅か。

小松　お孃さま此間は、何よりの品を頂戴いたし、

松梅　有難うございます。

吉藏　私も旦那様からお羽織を頂戴いたし、有難うございます。

ト辭儀をする。

小梅　あの頂戴のお簪は、萬吉でございますか。

お玉　あい、吉兵衛から取りました。

吉藏　呉服物と染物は、堀田原の笠仙に、櫛簪は萬吉が當時一等でございます。

小松　旦那様も風船の、御見物でございますか。

萬右　酉の市へ參りながら爰へ出て來た。凌雲閣をまだ娘が見ないから、見せに上へあがつた所今風船が上るといふので、八階目で見物しました。

小松　私共も十二階で、見物をいたしましたが。

小梅　込み合ひますのでお孃さまを、お見掛け申しませなんだ。

お玉　わたしや多くの人に醉ひ、どう仕ようかと思つたわいな。

お民　それに下の方が一杯ゆゑ、下りるにはおりられず。

吉藏　嘸お困りなされましたらう。

萬右　是れから歸りに萬梅へ行くから、みんなも一緒に行くがいゝ。

小三　それは有難うござりまする。

ト萬右衞門向うを見て、

萬右　や、向うへ來るのは三遊亭、

小三　圓朝さんでござります。

ト合方通り神樂にて、花道より三遊亭圓朝、黑の羽織着流し駒下駄、同梅朝同じこしらへにて出來り花道に留り。

〽日暮も早く上野から、鐘に追はれて淺草へ、今日お目見えに合乘りの、車坂町横に見て、燈明寺店暮近く、五時に六區の公園へ、初席急ぐ噺し家が、扇の骨の親子連れ。

ト兩人振あつて舞臺へ來り、圓朝皆々を見て、

圓朝　これは石町の旦那樣、お孃樣も御一緒で、西の市へいらつしやいましたか。

萬右　察しの通り西の市から、十二階で風船乘りを見て居た。

小松　お師匠さん、お出でなさいまし。

圓朝　おや小松さんに小梅さん、今日は旦那のお供かね。

吉さん此間は。おやお民どんの美しい事、不斷着と餘所行きは、こんなに違ふものか。

圓朝　そりやあ馬喰町の平尾で賣る、小町水の下塗りに、小町白粉の上塗りだから、美しいは當り前さ。

お仙　お師匠さん、今日は。

圓朝　おやお前も大層今日はきれいだ、よく白髮が染まつたね。

お仙　知りませんよ。

吉藏　相變らずお師匠さんが、萬遍なく嬉しがらせるね。

金朝　そこが名代のお世辭屋さ。

圓朝　そりやあ金朝、お前のことだ。

萬右　時に師匠、何處へ行つたのだ。

圓朝　スペンサー氏の輕氣球を、上野へ參つて見物いたし、西の市へ參らうと、車で急いで參りました。

萬右　物を見るのが好きだから、とつくり側で見て來たらうね。

圓朝　いえ私もよく見ましたが、寺島が風船を浮瑠璃にでもする氣と見え、作者を連れて來て居りましたが、例の念者でござりますから、あちらを見たりこつちを見たり、うるさく側へ行きますので役者を知らぬ外國人が、

何かぺら／＼小言をいひ、そつちへ行けと酷く突かれ、どつさり尻餅をついた時は、可笑しくつて／＼。

ト圓朝の思入にて俯いて笑ひ、

それでも平氣で見て居りましたが、何でも人に喰れぬうち、走りを喰ふ氣と見えます。はツくしよ、誰かおれの噂をするわえ。

萬右　そりやあ嘸可笑かつたらう。師匠、そこに居るのは、そりやあお前の弟子かえ。

ト是れまで梅朝うつむき居る。

圓朝　お見忘れなさいましたか、私の悴でございます、久しく藝道修行の爲、上方へ參つて居りましたが、今度こちらへ歸りましてござります。

萬右　それぢやあ息子の菊坊か、大層立派な男になつたな。

ト梅朝前へ出で、

梅朝　誠にお久し振りでござりまする、相變らず御贔屓をお願ひ申し上げまする。

萬右　それはおれより何れも樣へ、よくお願ひ申すがいゝ。

圓朝　憚りながら旦那樣、お引合せの口上を、

萬右　知つての通り口不調法、やつぱりお前が言ふがよい。

圓朝　それぢやあ御免を蒙りまして。

ト思入あつて、

悴の序に濱町の、息子殿の御披露を一緒にしようから、二人とも爰へ。

ト皆々下に居る、淨瑠璃臺より延壽太夫下りて來り、下手へ並ぶ、圓朝引合せの口上あつて、おむら私もと頼む思入、圓朝口上あつて納り、流行唄の合方になり、皆々元の所へ並び。

萬右　久しく上方に居たとあらば、何か珍らしい踊りがあらう、ちよつと踊つて見せてくれ。

梅朝　外ならば知らぬこと、旦那の前で私などは、手も足も出はしませぬ。

お玉　そんな事を言はないで、所變れば品變る、珍らしい上方の踊りをわたしや見たいわいな。

小松　お孃さまのお好みゆゑ、

小梅　さあ／＼早く見せなさんせ。

梅朝　それではちよつと踊りませう。

ト梅朝羽織を脱ぎ緋縮緬の襦袢を片肌ぬぎ、桃色の手拭を冠り、

〽伊勢ぢや濱萩、浪花ぢや蘆よ、所柄とて替りし中に、土地の自慢は砂持ち踊り、〽貴賤老若男女の中も、ヨウ

サテウサと砂を撒ぎ、片身替りのきり物着れば、犬や猫の姿をうつし鈴と鳴子をぶらりんと提げて、手には太皷をどんどゝ叩き、おどん〳〵や踊らにやそんぢや、どんどんがら〳〵どんがらこ〳〵。

ト梅朝振あつて、貴賤老若から吉藏同じく片肌ぬぎ、手拭を冠り出で、兩人にて振、此内萬右衛門踊りに浮れ首をふる、皆々よう〳〵と褒める。

萬右　なか〳〵これは旨いものだ。

お玉　跡は差詰め圓朝さん、お前も何ぞおはこの踊りを。

圓朝　若い時には無器用ながら、ちよつと踊りも踊りましたが、いつが日にも手に取りませねば、先づそれよりは花柳の一番弟子のお孃さま、何かあなたの振事を、拜見したうござります。

お玉　久しく踊りを温習ないから、大概忘れてしまつたわいな。

圓朝　そんな事をおつしやつても、あなたのお覺えのよい事は、師匠から聞いて居ります。

お玉　それでは踊らにやならぬかいな。

お民　圓朝さんのお頼みなれば、何ぞ短い踊りをば。

小松　ならう事なら私共も、

小梅　拜見したうござります。

萬右　さあ〳〵早く踊るがいゝ。

お玉　短いものを踊りますが、側であなたの首を振ると、つい可笑くなりますから、首をふらずに居て下さりませ。

萬右　おゝ承知だ〳〵、決して首はふらぬから、さあ〳〵早く遣つたり〳〵。

トお玉扇を持つて前へ出る、下手張物打返し、常磐津連中居並び掛合になる。

常〽ほの〳〵と霞棚引く朝ぼらけ、日影長閑にみんなみの梅が笑へば鶯の、鳴くも嬉しき庭もせに、常〽まだ山々は白々と、殘んの雲も有明の、月はいつしか山の端へ、常〽入江の澤の薄綠、芽ぐむ柳に風もなく、常〽靜けき春ぞ樂しけれ。

トお玉振あつてよき程より小梅お民を招き、二人を相手に振ある、此内萬右衛門首を振る、心附いて兩手で首を押へ居る。

もうたまらぬ。

ト無闇に首をふり納ろ、

金朝　よう〳〵、親はないかと申したうござります。

小松　さあ此跡は圓朝さん、

小梅　お前の番でござんすぞえ。
金朝　それは幾らお好みでも師匠に踊りは踊れませぬ。
吉藏　なに、踊れない事があるものか、其以前は道具話しで、芝居の眞似もしなすつたのだ。
圓朝　そんな事を言ひなさると、お前の年が知れますぜ、先づ此跡は旦那樣、踊りは專賣特許の本元、何ぞお見せ下さりませ。
萬右　おれが踊りは古めかしいから、今日は御免を蒙むらう。
圓朝　いえ〳〵、あなたの踊りをば、みんなが待つて居りまする。
お仙　どうか旦那、私共に、
皆々　お見せなすつて下さいまし。
萬右　それではどうでも踊るのなら、其熊手を貸してくれ。
吉藏　さあ〳〵、お遣ひなされませ。
ト萬右衛門おかめの面を取り熊手を持ち、
萬右　さらば是れにて踊らうか。
常〽十返りの松に花吹く君が代の、目出度き時に相生の、松諸共に年老いて、常〽幾歳こゝに住の江の、岸のさゞ波皺よりて、常〽面影かはる尉と姥。

ト萬右衛門熊手を持ち、お仙を姥に遣ひ、振あつて、
爰へ　管賣の一、二出で、
〽蘆邊に群がる雛鶴を、友に餘念もあら磯へ、打來る波の鼓につれて、翼かはして舞ひ遊べば、尉も浮れて手拍子を。
ト管賣一、二鶴の思入、萬右衛門是れを相手に振あつて、
〽うつゝ他愛も中空へ、舞ひ行く影を打ち仰ぎ、翼ほしやとかこち泣き、尉が切なる心をば知るや知らずや舞ひ下りれば、あら嬉しやと扇をさし、千歳の齡萬歳と祝ひかなでゝ舞ひ納む。
ト管賣一、二飛び行く振、萬右衛門空へ思入、兩人前へ出る。萬右衛門悦び扇をもちて、舞模樣にて納る。
圓朝　相變らず旦那の踊りは、凄いものでござります。
金朝　實にこれは專賣品だ。
お仙　さあ〳〵、跡はお師匠さん。
お民　お前さんの番でござんすぞえ。
圓朝　椅子へ掛けて小半日、風船を見て居たので、脚氣が起つて踊られない。
小松　そんな卑怯な事をいふと、

小梅　昨夜の事を言ひますぞえ。
萬右　なに、昨夜の事とは。
吉藏　柳橋での意氣筋を、
圓朝　それを爰で言はれては、
小松　いえ〳〵言はねばならぬわいな。
　ト小松圓朝をとらへ口說きになる、
淸〽そもや初日の初めから、眞の噺の人情に、迫る淚は笑ふより、身に沁々と忘られず、常〽夜每に通ふ席亭へ、仇な浮名が立花や、遂に離れぬ中入から、常〽掛持ち多き主ゆゑに、外へ心が移らうかと、常〽氣も合乘りは餘所目から、羨しいぢやないかいな。
　ト小松圓朝を捉へ口說きの振、是れへ吉藏小梅圓朝からみよろしく振ある、此內萬右衞門浮れて首をふる、お玉袖を引く、心附きて止め又首をふる、可笑味あつて納まる。
萬右　さういふ事がある上は、みつしり爰で踊るがいゝ。
圓朝　あゝ、昔へかへつて踊りませう。
　ト此時獅子の鳴物になる、
　獅子の來たのは丁度幸ひ、囃子をかりておかめの踊りを。
吉藏　さあ〳〵時代に、

皆々　所望ぢや〳〵。
　ト獅子の鳴物にて羽織をぬぎ、お福の面を冠り、姉さん冠りに手拭を冠り前へ出で。
常〽おかめ〳〵と村中で、鼻は顋より低けれど、噂は高い評判の、常〽娘盛りに、白々と、白粉附けて紅附けて、しよなめく姿は若い衆が、常〽抽袂引くも數多く、誰に仕ようか思案橋、常〽ちよいとわたしの目に附いた、男があつて聟に取り、常〽三々九度の杯も、いつか日もたち月もたち、淸〽滿つる十月にやゝ產んで、祝ふ產衣の宮參り、常〽ねん〳〵ころ〳〵ねんねこせい、ねんねが守はどこへ行た、山を越えて里へ行た、淸〽わたしが聟の其里は、山坂越えて谷川の、流れへかけし水車常〽臼舂く拍子の合方面白や、淸〽雨後は水增しくるくると、常〽早めて廻る水車。
　ト此內獅子の鳴物を冠せ、おかめの振よろしくあつて、羽織を子供となし、子を扱ふ世話の振よろしく、萬右衞門是れを見て首を振らうとして心附き、兩手で首を押へ居る、水車の件より圓朝首をふる、萬右衞門悸へ余れ首をふる、それより萬右衞門にかぶれ、お玉、小松、お仙、お民、おむら、吉藏、圓朝、小梅、簪賣

一、二皆々一時に首をふる、トヾ早めて振る可笑味あつて、圓朝面を取り、

圓朝　是から跡は紋切形、總踊りといふ所だが。

ト此時頭取出て、

頭取　先づ今日は是れ限り。

ト日出度く打出し

風船乘評判高樓（終）

解說

『河竹默阿彌集』上卷には主として明治維新以前の戲曲を收めたが、この下卷には渥美清太郎氏の提案もあつて、明治時代の「散切物」（散髮劇 —— 散髮髷を附けた人物の出る歌舞伎劇）ばかりをあつめて見た。

繰返開花婦見月（三人片輪）　は、明治七年七月新富町守田座に書きおろされた。散切物としては初期のものに屬し、又傑れたもの丶一つである。作者は明治六年の十一月に同じ守田座に於て『東京日々新聞』といふ最初の散切物を上演してゐるが、その時にも座頭格として出演した五世坂東彥三郎をして、この『三人片輪』の主人公役赤米仙右衞門に扮せしめる積りの所、彥三郎が之れを拒絕したので、上演が延期されてゐて、此時五世菊五郎により演出されたものだと傳へられてゐる。作者の宅へ出入りの米屋が不正行爲をしてゐるのを見て、それをそのまゝ戲曲の中へ取入れた作といふことにもなつてゐる。明治の新社會の新事相を巧みに採收してある具合が最もよく窺はれる。

初演の時の主なる役割は左の通りであつた。

盲人赤米仙右衞門、スリ天ぷら銀次（五世尾上菊五郎）牛肉屋五郎七（先代中村芝翫）、髮結床屋の左吉（先代市川左團次）、浪人秋津豐（先代坂東彥三郎）等。

富士額筑波繁山（女書生繁）　は明治十年四月新富座に上演された。當時の新聞に出た社會記事を骨子として創案され、五世菊五郎の女書生繁は先代左團次の扮した車夫御家直と共に非常な評判であつた。近年尾上梅幸と六世菊五郎によつて復演されて喝采を博したことがある。初演の時の主なる役割は左の如くであつた。

女書生妻木繁（五世尾上菊五郎）、車夫御家直（先代市川左團次）、妻木右膳、戶倉屋利右衞門（中村仲藏）、神保正道（中村宗十郎）、戶倉屋女房およし（岩井半四郎）、下男惣助（中村芝翫）、下男小介（市川子團次）等。

人間萬事金世中　は明治十二年二月新富座に書きおろされたもの。歌舞伎の世界へそろそろ演劇改良論者が働きかけた時代のもの。福地櫻癡居士がリットンの小說、『マネー』（？）の梗概を作者に話し、それによつて書いたもので、珍らしく喜劇仕立のものである。人物の名前などに

も穩案臭がある。仲藏の扮した懲張り邊勢が非常な出來榮えであつたと傳へられてゐる。初演の時の主なる役割は左の如くであつた。

惠府林之助(五世尾上菊五郎)、毛織五郎右衞門(九世市川團十郎)、壽無田宇津藏(先代市川左團次)、邊見勢左衞門(中村仲藏)、邊見娘お品(市川小團次)、手代藤太郎(坂東家橘)、姥おくら(岩井半四郎)、雅羅田臼右衞門(市川團右衞門)等。

勸善懲惡孝子譽(孝子善吉) は明治十年六月新富座に書きおろされた。横濱の海岸には、當時懲役人が土砂運びのため外役に從事してゐたもので、ある時作者はこれを實見し、その時得た情景を取入れて横濱道普請の場を書き、全體の構案も從つて成つたと言はれてゐる。もう一つ注目すべき事は、この年代頃に文部省の前身(?)たる教部省から、演藝全般に對して猥雜を嚴禁する旨を達示したので、勸善懲惡を標榜した此作の如きが生れたのだと言つてゐる。この虎藏の改心譚は、さる布教師によつて囚徒に語られ改心者を出したこともあるといふ。役者としては、先代左團次の虎藏が菊五郎の善吉と共に特に好評であつた。作中の寫眞師北庭筑波は實在の人物で、現時新派俳優の頭目たる伊井蓉峰の實父である。寫眞屋の場を一幕描き寫眞を持込んだ所などは、まさに時代の尖端を行つたものだと評すべきであらう。初演の時の主なる役割は次の如くであつた。

孝子善吉(五世尾上菊五郎)、北向の虎藏(先代市川左團次)、朝日山浦右衞門(中村芝翫)、お梅(岩井半四郎)、善吉父甚兵衞、野毛の十右衞門(中村仲藏)、巳之吉(市川子團次)、善吉息子卯之助(尾上菊之助)、判人源六(尾上梅五郎)、半七(中村宗十郎)等。

島衞月白浪 は、明治十四年十一月新富座に上演された。作者が六十六歳で引退を發表し、二世河竹新七として書納め狂言として、前例なり慣習なりを破つて、他門弟等に助筆せしめず自分一作によつて出來たもので、佳作の隨一と稱せられてゐる。作者が默阿彌と稱したのはこの作以後のことに屬する。安政、文久の交名人小團次と共に白浪(盜人)作者として、盜賊物に名を賣つてゐた所から一世一代と銘打つたこの作も盜賊を扱ひ、作中の主要なる人物も亦悉く盜賊にして書いたもので、そこに作爲の跡を感じないではないが、たしかに力作である。作中に暗示されてゐるが、此年の六月「古代形新染浴衣」を上演した時、島藏、千太等の人物を點出し、質屋福島屋に忍び入つて千圓の金子を奪ふ事、即ちこの劇の發端を見せ、秋に入つて

この作を發表したのであつた。作中の眼目は大詰(五幕目)の招魂社鳥居前の場で、千太を改心せしめる條であつたが、今日復演される場合も、この大詰と四幕目の明石屋の場とが屡〻演ぜられる。初演の時も役々何れも好評で、その主なる役割は左の如くであつた。

明石の島藏(五世尾上菊五郎)、松島千太(先代左團次)、望月輝(九世市川團十郎)、辨天おてる(岩井半四郎)、漁夫磯右衛門(市川團右衛門)、野州の德藏(尾上松助)、島藏妹お濱(先代坂東しう調)、忰岩松(尾上菊之助)、等。

月梅薫朧夜(花井お梅) は明治二十一年四月中村座に書きおろされた。濱町河岸の箱丁殺しとして社會記事を賑はした花井お梅を脚色したもの。初演の時の主なる役割は次の如くであつた。

水月のお梅(書きおろしの時はお条)(五世尾上菊五郎)、金井傳之助(大阪中村福助)、深見丹次郎(坂東家橘)、箱廻し巳之吉(尾上松助)、小澤おあい(坂東秀調)、金貸九郎兵衛(中村傳五郎)、春山笑藏(中村勘五郎)、常陸屋の番頭九兵衛、百姓田五助(中村鶴藏)等。

初霞空住吉(かつぼれ) は、明治十九年一月新富座に書きおろされた。當時市中に持てはやされてゐた住吉踊り即ち(かつぼれ)を舞臺に取入れ、大切淨瑠璃にしたものであつた。今日に至つても賑やかであるのと滑稽味に富んでゐるのとで屡々舞臺上に繰返されてゐる。初演の時の役割は次の如くであつた。

かつぼれ升坊主(九世市川團十郎)、かつぼれ鳥藏(先代市川左團次)、かつぼれ高吉(市川小團次)、船宿女房おてう(先代坂東秀調)、かつぼれ鶴松(中村鶴藏)、甘井宮藏(市川團右衛門)、藝者小むら(澤村源之助)、等。

風船乘評判高樓(風船乘) は明治二十四年一月歌舞伎座に書きおろされた大切淨瑠璃で、英人スペンサーが來朝して、風船に乘つて見せたのが、ツエッペリンの來航程度に評判となつたので、それを早速取入れたもの。初演の時の主なる役割は、紙人形、スペンサー、圓朝(五世尾上菊五郎)、福富萬右衛門(中村芝翫)、箱屋吉藏(坂東家橘)等であつた。

○

上卷には略傳を記したから、この下卷には年譜並びに著作年表を附載する豫定であつたが、作者の戯曲は三百餘種に上るので、その全部を單に茲に載せることさへ頁數の關

係上遺憾千萬であるが、遠慮せざるを得なくなりました。數年前春陽堂から刊行された拙著『河竹默阿彌』と題する詳傳は、年代記的の記錄に就いて、多分お間に合ふ事と考へますから、詳細の年譜、著作の解題等はそれを參考にして下さるやうに願ひます。

（昭和五年四月三十日河竹繁俊記す）

編纂校訂責任
河竹繁俊
鈴木侃

日本戯曲全集・第卅一巻
河竹默阿彌篇下・第二十回配本

編纂者檢印

昭和五年五月廿五日印刷
昭和五年五月廿八日發行（非賣品）

編纂者　河竹繁俊
發行者　和田利彦
印刷者　高見靖雄
製本者　高崎[illegible]五郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋三七・八五一〇・六四一
振替東京一六一・七八一

整版所　新倉東文堂

（神田區松下町七番地・明治印刷株式會社印刷）

